

# 鬼滅の刃～太陽の化身 ～

怪獸馬鹿

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大正の時代、鬼を滅殺する為の組織「鬼殺隊」が存在した。

そして、その中に光を身に纏った「太陽の化身」のような神に近づくために進化してしまった記憶喪失の人間「津上明悟」がいた。

彼は誰かの居場所を守るために鬼に対して「変身する」

聖人か？悪党か？

何も無い男の魂の物語が始まる。

「目覚めろ、その魂」

2020／6／18

各章の名前とその章の主題歌を載せます。

その曲をBGMにその編を楽しんでください。

あくまでも作者のノリと勢いに合う人なら楽しめる前提ですので合わない人はとことん合わないと思いますし、作者は結構ひねくれてるので書き直す気など微塵も御座いませんのでご了承ください。

# 目次

キャラクター設定	1
アギト編 believe yours elf	
鬼殺の戦士	11
二人の剣士	27
風の戦士	44
焔の剣士	66
蜘蛛の山	80
もう1人のライダー編 death deep br	
柱会議	101

光柱 津上明悟	119
光と恋と蛇	141
もう1人の光の戦士	163
明悟と5人の子供達	201
夢の列車編 夢で逢えたなら	
明悟の誕生日	216
お誕生日、おめでとう	240
三位一体 二大ライダー	273
ひなき達の缶けり大作戦!	291
恋愛編 Forever	
過去編 接着大作戦	316
過去編 花柱 胡蝶カナエ	335
吉原灼熱編 your song	

因縁と宿命	—	359
零余子と禰豆子	—	376
蝶のペンダント	—	393
愛という名の呪い	—	418
怒りの業火	—	435
アギト&amp;デイクライド	大正ビギ	457
ズ Be the one	—	—
大正ビギンズ	カナエ	—
大正ビギンズ	仮面ライダーアギト	—
486	—	—
大正ビギンズ	怪物・浅倉威	516
大正ビギンズ	津上夫妻	533
大正ビギンズ	クライマックス	—
559	—	—
酒乱大騒動	—	601
義妹しのぶ	—	624
轆轤編 誰かが君を愛してる	—	—
轆轤	—	642
熱血大特訓	—	658
ミラージュアギト	—	675
芦原轆轤	—	700
幕間編 over the time	—	—
富岡義勇VS不死川実弥	—	720
幕間 『超おままごと』の裏	—	763
運命	—	776
零余子と禰豆子と善逸	—	804

友へ	1006
この愛しき過酷な世界で生きる優しい	1006
仮面ライダー 死闘の代償	982
鬼舞辻無惨VS戦士達	959
人知を超えた者達へ	938
愛する人の為ならば	917
迅雷	904
長男VS長男	887
光の友情	873
日常	852
最新ノ審判 A B A Y O	
アギト対RX	835
明悟と耀哉	819

超全集	1040
番外編 I F ルート	1075
こころはタマゴ	1075

# キャラクター設定

主人公

津上明悟（23）

鬼殺隊所属 階級 甲↓光柱

略歴

- ・ 12歳の時に記憶喪失の中、耀哉に出会い拾われる。
- ・ 13歳の時、耀哉とあまねの見合いを機に離れる。
- ・ 1年間、一切の記録なし。その間にアギトの力に覚醒。
- ・ 14歳の時に耀哉と再会。
- ・ 大喧嘩をするも仲直りし、それから親友となる。
- ・ 14歳5ヶ月 鬼殺隊に入隊。
- ・ 14歳5ヶ月〜17歳までにアギトの力で60を越える鬼を倒す。
- ・ 17歳、カナエと出会う。
- ・ 17歳、下弦の肆を撃破。カナエは柱に。明悟はその昇格を蹴る。
- ・ 18歳、明悟と童磨が遭遇。4ヶ月間昏睡状態にされる。

カナエと恋人になる。

・19歳、カナエが明悟の子供を身籠る。

カナエが童磨の手によって子供と一緒に殺される。

・19歳〜23歳までアギトの力を以前にも増して使い、隊士を守るようになる。

・23歳、本編開始

### 身体的特徴

・身長 181cm

・体重 85キロ

・髪型 黒髪の短髪で今でいうと作者的にはスポーツ刈り。

・体つき 筋肉質であり、典型的な細マッチョで普段は服の上からだとは分からないが

脱いだら凄いを地で行く。

・黒目（あくまでも他のキャラとの違いと言うだけで一般的な日本人の目で義勇や天元らと一緒にいる）

### 服装

・鬼殺隊の隊服の上に茶色のダスターコートと着て、カトルマンハットを被っており、



ハットには23話から2羽の桜色の蝶の飾りが寄り添うような形で左側に付き、26話から蝶型のペンダントを身につける。

- ・ 隊服が私服と貸していて、基本的に隊服の替えしか家がない。
- ・ 履き物は黒足袋に草履。

#### 趣味嗜好

・ ご飯好き。料理も出来るがあくまでも食べるのが好き故にやってる。味の好みはうるさく、やられたら堪ったものではないが死んでも残さない。毒じゃなければどんなに不味くても食べる。残すならば人に作って貰わずに自分で作れと言う思考である。

・ 本好き。小説などを読み、翻案された物や純粋な翻訳など、様々な物を読む。しかし、個人的に1番好きなのは凶鑑などと言った人間以外の情報が中心の物。

- ・ 日光浴。朝日を浴びるのが大好きであり、寝込まなければ必ず毎日やる。

#### 能力

・ 仮面ライダーアギト。仮面ライダーアギトに変身でき、また生身の状態でもある程度使える。

- ・ アギトの力による直感。第六感並みに勘が良く、鬼の存在が近づくと何となくわか

り、鬼が強ければ強いほどはつきりわかる。しかし、鬼の体内と云った場所では四方八方から感じるので全く使い物にならなくなる。

・高い身体能力。元々はアギトの力を生身で使ってただけでそこまで生身は強くなかったがカナエと共に戦ってきた為に生身でも下手な鬼を倒せる程になる。

### 好きな物

・上述の通り、ご飯と読書と日光浴が好き。

・子供好き。ひなき達からは「叔父様」と慕われていて、輝利哉は明悟に強い憧れを抱き、非常になつかれてる。

### 嫌いな物

・ひなき達の超おままごと。自分が元凶なのと自由に遊ぶこともままならないひなき達と子供好きが仇となり、毎回やり、疲れはてる。

・無惨や童磨と云った人を人とも思わない身勝手な存在が嫌いであり、条件が満たされていれば人間でも同じ対応をする。

### 思考や哲学

・人は生きるだけで凄く、美しく、その自由を奪う者は誰であろうが許さない。しかし、人の命を決めるのは本人と言う思想もあり、自決しようとする者がいても明悟は決して止めない。その代わり、自分を誰かが必要としてないか愛してないか考える事はさせる。それでも止めない場合は止めない。

・殺人者に関しては自決すら許さず、改心したならば人助けをさせたり、法律で裁かせる。殺人者が怪物かで対応が違う。洗脳状態であつても変わらない。

例、殺人者は轆轤や零余子。怪物は無惨や童磨。

・しかし、傷つくのが自分だけの場合は時間は掛かるかも知れないが許そうとする。  
・どんなに嫌いな人物でも共に仕事をする場合には問題なくやるなど公私は徹底して分ける。

## 武器

・アギトの武器。フレイムセイバー、ストームハルバート、シャイニングカリバー。  
・日輪刀。アギトの力が日輪刀の性質に対応して桜色の焔の揺らめきのような模様が  
出来ている。

・徒手空拳。アギトとして戦い続けており、またアギトも光を手足に纏わせる事が出来るので刀の腕は全柱で最も低いが徒手空拳は最強。

## 弱点

・短気。意外に短気であり、キレやすい。しかも感覚がずれてるのでどこでキレるか分からない。

・サボり魔。仕事はやるにはやる。しかし、疲れるとすぐに休む癖があり、その度にひなき達を出汁に使う。最近では回復訓練を出汁にしている。

・人付き合いが下手。悪意なく余計な事を言つて痛い目に遭うが改める気がゼロなので更に質が悪い。

・鈍感。恋愛事は他人なら何となく分かるが自分に關しては鈍感。しかしそれは確証的なのがない場合であり、自分でも確証めいたのがあれば寧ろ敏感になる。

・マイペース。空気を読まない。読むときは読むが読まない時はとことん読まない。ただし、鬼殺隊の濃い面々が相手だと振り回される事があるので結果的にあまり目立たない。

## 夢

・呪いが解けた耀哉と一緒に旅をする事。

## 仮面ライダーアギト

明悟が12歳の時に火のエルと融合した事でなれた姿。鬼とは根本的な力の源が一緒であり、一種の鬼と取れる存在。しかし、対鬼戦闘では太陽と同質の光を出せるので同種でもあり天敵でもある。

鬼が人を食べれば食べる程強くなるようにアギトは力を使えば使うほど強くなる。

また強力な血鬼術と光がぶつかってしまふとその鬼の過去を見る事が出来てしまい、感情移入してしまふて苦しむ事がある。相性の問題もあり、純粋な力と力のぶつかり合いにのみ発生する。炎と氷のような相性が悪いとこの現象は起きない。

## ・グランドフォーム

基本形態で明悟は取り回しの良さとバランス、更に言うところの姿でも鬼を倒せるので基本的に明悟はこの姿で戦う。またフレイムセイバーもストームハルバートも両手で使う長物なので狭い空間だと必然的にこの姿になる。

## ・フレイムフォーム

火の力を使う事が出来る。超人的に感覚が上がり、下手な鬼だとまず攻撃を通すのも

難儀になる。力の剣士と呼べる位に力も上がると武器のフレイムセイバーが基本的に鋼鉄すら焼き切る事が出来るので明悟はこれを良く使う。

・ストームフォーム

風の力を使う事が出来る。普段に比べて更に冷静になり、周りの把握も早く、明悟は防御を優先するときに良く使う。

・トリニティフォーム

火と風の両方を使う事が出来るがバランスが不安定な状態になり、体の疲労が1番激しく、痛いので明悟はあまりこれを使わない。上記の弱点は使えば使うほど改善されていくので、今では問題ないがピーキーな力には代わりなく使わない。

・バーニングフォーム

対童磨戦で初めて覚醒した業火の力。力と防御力が高く、強敵相手に使うが、いまいちな戦績な理由はあまりにも力と防御力が上がりすぎてバランスが崩壊しており、明悟が上手く扱えてない。

・シャイニングフォーム

現段階の最強のフォームであり、下手な鬼だと触れるだけで倒してしまうほどに強

い。その代わりまだまだ進化してないので太陽の光を浴びないと変身出来ないの  
で夜戦しかない鬼との戦いでは使えない。

### 細かな設定集

#### ・鬼

神に粛清されかけた《火のエル》が死に行く無惨に同情して不完全ながらも力を与えた。本来ならば医者薬をキチンと飲んでいけば健康的な人間になれたのだが医者を殺した事でそれまでの薬と無惨の病に対応しようとアギトの力が変化してしまい、《鬼》と呼ばれる存在になってしまった。

現状では違う力と捉えても問題ないがアギトの亜種と捉えられる。

#### ・青い彼岸花

太古の戦争時に《火のエル》がばら蒔いたアギトの力の残留が彼岸花に集まって出来た1年に数回、日光が当たってる時にしか咲かない花。アギトの力が溜まってるので鬼

が食べれば日光の下でも活動可能になり、完全生物へと進化してしまう。

小ネタ

・芋長

知る人ぞ知るカーレンジャーに出てた和菓子屋の《芋長》。ここの和菓子を食べると巨大化して一刻の間はそのままであり、日光下でもある程度動けるようになるが、それを知る者は存在しない。また呼吸を使う者が食べるとブーストがかかり、暫くは強くなる。鉢山の戦いで全柱が生き残ったのはこれが理由の一つであるが誰もそれを知らない。

津上明悟

C.V. 読者の皆様が自由に思っただきって結構ですが作者的にはウルト●マンゼロです。ボケもツツコミも両方出来るので。

批判や感想は随時受け付けておりますので気軽にどうぞ。



# アギト編 believe yourself 鬼殺の戦士

時は1900年代の大正時代、日本。

この世には人知れずに人を食い散らかす怪物、鬼が存在していた。

決して太陽の前には出ずに暗闇の中をさ迷い、人を食べて強く邪悪になる怪物達、その頂点にいる【鬼舞辻無惨】・・・腐れ外道を通り越した文字通り、吐き気を催す邪悪であり、生きること以外に生きる目標がない矛盾した生命体。

そんな邪悪によって泣かされた人間は数多くいる。

無惨の作りし鬼に家族や友、愛する人を奪われた人間は【鬼殺隊】を組織した。

自らの全てをかけて邪悪なる存在を討つ。

その目的の為に行動する。

しかし、彼らの全てが鬼を憎んでいるかと言ったらノーだ。確かに憎んでいる人間は多いが中には金払いが良いから入っただけで入ってる人間もいる。

また、行く当てが無いから入ってる人間もいる。

●●●  
東京の郊外の小さな村に男はいた。

その村では村人達が集まり、騒いでいた。

かなりの緊迫な状況であるが男は鬼殺隊規定の黒の隊服を着て、上に割烹着を着ながら野外で団子を村人に配っていた。

「それでは皆さん、どうぞこの団子を食べて下さい。美味しいですよ」

「役人さん、こんな事よりも早く山にいる鬼をなんとかしてくださいよ、本当に俺達は見ただけですから」

「そうです！この世の者とは思えないほど異様な姿をした奴です！」

「絶対に人間じゃねえ」

「村長が腕を食われちゃった」

村人達は異様な恐怖を感じながらも冷静に話す。

男は団子を配りながら、笑顔を村人達に見せる。

「皆さん、勿論その怪物は退治します。けど先にこの団子を食べてお茶でも飲みましよう！」

村人達はせっかく出された物を食べないのも勿体ないと思い、団子を食べる。

何てことのない団子であるが、不思議と村人達の五臓六腑に染み渡り、男は湯呑みにお茶を入れて村人達に飲ませる。

全員、一息を付き、喧騒が静かになる。

「役人さん、美味しかったです」

「ありがとうございます！さて、美味しく感じて貰えた事ですし、もう一度皆さんにその異様な者の事を聞きます、2度聞いてすみませんがもう一度教えて下さい」

男はもう一度、村人達から異様な姿をした奴の事を聞いた。

何でも1ヶ月前にこの村の子供の弥助が迷子になって夜になっても帰らずにいたため、村の皆と一緒に探しに山に行ったら、山でそいつに追われてる弥助を見つけた村長が持ってた鎌と勇気で弥助を助けたが右腕を食われたそうだ。

男はノートに鉛筆で細かく時系列に沿って書いていく。すると一人の小さい子供が男の近くにやってくる。

「君は？」

「この子がその弥助です」

村人が親切に言ってくれる。

「そうか、君が弥助君か」

男はしやがみ、弥助と目線の高さを合わせる。

「俺に何か用かな？」

「あの……その……僕のせいで、おじいちゃんが酷いことに……」

「おじいちゃん？村長さんは君のおじいちゃんなの？」

「いえ、村長の息子は五分前に子供も作れずに……だから、村長はこの村の子の皆のおじいちゃんなんです」

「そうでしたか……」

男は弥助の頭を撫でる。

「おじいちゃんは俺にはどうする事も出来ないけど、1つだけ約束できる。君を追い掛けてきた奴は俺が倒す」

男は右手を出す。

弥助は何だかわからないと言う感じで男を見るが、出された右手を見て握手をする。

すると男は腕相撲をするかのように親指を軸にして、クルツとして握り、離して拳を合わせて最後に上下に拳を合わせる。

「これで俺と君は友達だ。友達との約束は死んでも守るから」

男はもう一度弥助の頭を撫でて団子を持ち、村長の家に行く。



一軒の家に男は団子を持ちながら入ってくる。

「村長さんも団子、どうですか？」

村長と呼ばれた人は布団に横たわっていた。

掛け布団を上からかけて横には医者がおおり、暗い顔をしていた。

「役人さん・・・悪いな、団子作って貰ったけど俺あ、食べれそうにねえや」

息絶え絶えに話す村長。

男は横にいる医者を見る。

彼は首を横に降り、顔を下に向けた。

男は、村長の枕元に行き、正座して団子を載せた更を横に置いた。

そして頭を深く下げた。

「すみません、私達がもう少し早ければこんな事には・・・」

「頭を上げて下さい……」

「しかし！」

「良いんです。村長なんて呼ばれてるが親から後を継いだだけで何もやってこなかった。一人息子は病で死に、妻は去年、病で倒れて……生きる気力なんて無かった。けど弥助が迷子になって夜に村の皆と山に入ってあの化け物から弥助を助けられた。私は幸せですよ。人生最後の冥土への土産には大きな物を持ってましたから」

「必ず、その化け物は退治します」

「やく……そ……」

村長はそう言つて息絶えた。

怪我が深すぎたのだ。

男も横に座つていた医者も深々と頭を下げる。

医者は頭を上げて外に出て村人達に亡くなつた事を話す。多くの村人達が泣いてたり、化け物に対して怒つていたりする声が聞こえる。

男は村長にもう一度頭を下げてからその場を後にした。

家の外に出ると村人達が男を見る。

その目にはどこに当てれば良いのかわからない怒り、不安、憎しみ、恐怖が写つていた。

男はそのまま、一軒の家に入った。

その家は今はもう誰も住んでいなかったが為に男がこの問題を解決するまでに貸して貰えた場所だ。

鬼殺隊には「藤の家」と言う場所があるが、ここからは少し遠かった為に「隠」と呼ばれる支援の隠蔽専門の部隊がこの村から借りた。

中に入ると一本の鬼殺隊隊士専用の日本刀「日輪刀」と1着のダスターコートとカトルマンハットがある。

男は割烹着を脱いで、日輪刀を腰に差し、コートを着て帽子を被る。

その顔は至って普通の顔つきだった。

不気味な程に普通の顔つきだった。

家を出て、山に向かう。

山の麓まで来ると、そこには何人かの鬼殺隊の3人の隊士達がいた。

「皆、どうしたの?」

男は気軽に話しかけるがそれを受けた隊士達の顔は険しかった。

「明悟さん!何をやってたんですか!」

一人の隊士の怒号に男・・・明悟は耳を塞ぐ。

「何って、団子を作ってたんだよ」

「貴方は鬼殺隊の隊士で甲でしょ!? 鬼を殺すのが仕事ですよ!? 何? 団子なんて物を作ってますか!?!」

「暇だったから……」

「暇じゃないでしょ!?! 任務で来てるんですよ!?!」

「まあまあ、そんなに怒ると眉間の皺が一生残るから、団子でも食べて落ち着いて」

懐から団子を出す明悟。

隊士の怒りに触れたのか、更に怒気が強まる。

「いるか! んなもん!」

「まあまあ、どうせ鬼は夜にならないと出てこないんだし、そんなに慌てても意味はない

よ」

「このクソ隊士!!」

「良く言われるよ、それよりも鬼のいるって痕跡は見つけられた?」

隊士達はため息を吐く。

「見つけましたよ……チツ」

「そりゃ、良いじゃん。じゃあ、夜まで待とうか、倒すなら相手が油断する時間帯の方が

良いよ」

明悟はそのまま適当な場所に座って団子を食べる。



隊士達はその気の抜けた姿に頭に血管が浮かび上がる。

今回のような隊士達が何人か一緒に任務をすることは鬼殺隊ではわりと良くあるが、いつでもその場で初めて関わる人が多い。

明悟以外の隊士達も明悟と話すのはこれが初めてだが、この明悟のやる事と言ったら、山の近くの村に行つて団子を真つ先に振る舞うわ、あんまり山に入ろうとしないわでのんびりと気が抜けている。

しかも山に入ろうとした3人の隊士達に対して

「俺はここであつと用事を済ませるから、もしも見つけたら、そのままやつて良いよ」  
等と府抜けた事を言い、やる気と言うものを一切見せない。

隊士達は明悟のやる気の無さに怒り心頭で山を探索したが、鬼の痕跡は見つけたがそのものは見つけられずに一先ず降りてきた所に明悟が来たのだ。

まだ団子を食べるなど変な具合に落ち着いているが、実際に夜にならないと日の光で死ぬ鬼は出てこないためにこのまま夜まで待つことにした。

暫くして辺りが薄暗く、夕暮れになってくると、明悟は漸く腰を上げた。

「それじゃ、行くか」

背伸びをしながら、何とものほほんとした様子で山に入る。

他の3人は明悟ののんびり加減に我慢できずにもうとつくに山に入つていった。



先に入った3人はと言うと一体の鬼と対峙していた。

その鬼は人語を話さず血鬼術も使わずに力の限り3人を攻撃していた。

3人も連携で何とかしているが、鬼の腕つぶしが強く、日輪刀で鬼の弱点である首を斬ろうとするも間合いに入ることさえ出来ない。

鬼はイライラしながらも攻撃する。

隊士達も懸命に避ける間合いの外に行くが突然と鬼の爪が伸びて一人の肩を貫く。

貫かれた隊士は肩を抑えて動こうとするも一瞬の隙を付かれて鬼に間合いを狭まれる。

そして鬼が左腕を引いて隊士を爪で引き裂こうとするが、やろうとした瞬間、どこからやって来たのか明悟が突然と鬼の左腕を斬った。

明悟はそのまま首を斬ろうとしたが、鬼は斬られた左腕を抑えながら、その攻撃を避ける。

「ずいぶん、速い鬼だなあ。それよりも大丈夫？」

「何やってたんですか？」

肩を貫かれた隊士が遅れてきた明悟を睨むが明悟はどこ吹く風である。

「君達、彼を連れて少し離れて」

隊士達は明悟を睨むが自分達では鬼の間合いに入ることさえ出来なかつた事実と鬼の腕を斬つた明悟の腕つぶし、そして一名が動けるもさつきまでより弱つた事から少し離れる事にした。

明悟は鬼と向かい合う。

鬼の左腕は見事に回復していた。

怒り心頭な鬼は明悟を攻撃しようとするがやらなかつた。

本能的に明悟が危険な存在であると認知し、間合いを取る。

明悟の腰にハイカラなベルトが浮かび上がる。

ベルトは奇怪な音を出して暗くなった山で光を放つ。

鬼はその光に眼を隠す。

目を隠した腕に軽い火傷を負う。

離れていた3人の隊士達も眼を隠す。

彼らが眼を開けて見たのは、明悟ではなく異形の人の形の姿をした存在 “アギト” だ。

アギトは全身黒を基調に金色が映えて赤い眼をしており、頭には金色の角。クロスホーンがある。

鬼は突然現れた存在に爪を伸ばして攻撃するがアギトは手から光を放ち、その爪をたたつ斬る。

突然の事に鬼は悲鳴をあげるもそのまま剛力で殴るがアギトはその手を受け止めて鬼の鳩尾を殴る。

殴られた鬼はそのまま吹き飛ばされ、何本かの木をへし折りながら大木に当たり、倒れる。

アギトはクロスホーンを開く。

すると彼の足元に今のクロスホーンが開いた状態の顔に良く似た紋章が浮かび上がり、右足に集束される。

アギトは飛び上がり、フラフラに立ち上がった鬼に対して右足で飛び蹴りをする。

鬼はまた吹き飛ばされて倒れてそのまま光となって消えていった。

本来ならば鬼は太陽の光を浴びるか、鬼殺隊の日輪刀で首を斬られなければ決して死なない。

しかし、アギトとは光の化身。

その性質は鬼が苦手とする太陽の光そのものであるが故に鬼は倒された。

と言ってもクロスホーンを開いて光を足か腕か自ら持つてる武器に集束しなければ倒せない。

変身の時も軽い火傷なら負けさせられるが倒すことは出来ない。

アギトは変身を解く。

光を放ち、明悟が現れる。

この戦いを見ていた3人の隊士達は明悟を警戒する。自分達で苦戦した相手を圧倒的に叩きのめしたのだ。警戒しない方が可笑しい。3人の頭に血鬼術という考えが浮かび上がるが、明悟は平然と太陽の光を浴びていたので鬼ではないと思った。

まあ異形の存在ではあるが、とりあえず近づく明悟には斬りかからなかった。刀を持ったまま警戒はしているが……

「3人ともとりあえず、怪我を治しに藤の家に行つて。連絡は3人の鎧烏がやってるから、俺はちよつと他に鬼がいなか見てくるよ」

何とものほほんとした様子でそのまま3人とは違う方向に行こうとする明悟。

「ちよつと待つてくださいい！」

「何？」

「さっきの姿は何なんですか？」

一人の隊士が明悟に尋ねる。

「さあ？俺にも良くわかんないけど、俺はアギトって呼んでるよ」  
「アギト？」

「夢の中でそう呼ばれてたんだ。意外にしっくりしたからそう名乗ることにしたんだ」  
どこまで行ってもあつげらんかな明悟。

隊士達是不気味な何かと対峙している気分になった。

「最後に聞いても良いですか？」

「何を？」

「お館様はこの事を知ってるのですか？」

隊士達の言葉に明悟は初めて静かに隊士達を見る。

「お館様」とは鬼殺隊の当主であり、鬼舞辻無惨と同じ一族の末裔の産屋敷輝哉のことだ。

「知ってる。けど柱達は俺の事を知らない。これについてはお館様本人から口止めされてる」

隊士達はとりあえず、最高責任者であるお館様が知ってる事に安堵して明悟を見る。

片方は不思議そうに相手を見て、片方は冷や汗を欠きながら見る。

「俺達はこれから藤の家に向かいます」

隊士達は明悟から離れる事を決めた。

別に明悟は人に迷惑を掛けたがそれ以外は何もしていない。殺してるわけでもなければ虐げたわけでもない。鬼を倒したただけだ。

ただ、明悟の人間性に問題がないわけでない。

隊士達は明悟から離れたかった。

出来れば今後二度と関わり合いたくはないと思いつつ、こうして、隊士達は藤の家に  
行き、明悟は山に残った。



暗い山に日の光が当たる。

明悟は深呼吸しながら、朝日を全身に浴びた。

背を伸ばしながら、首を一周回す。

何て素晴らしい朝なんだろと思いつつ、山を降り始める。

明悟の元に鏝鳥がやってくる。

「カアー、次は南南西！次は南南西！早く逃げ！」

「もうちよつとゆつくりさせてよ……まあしょうがないか」

「そこで、鬼と一緒に行動してる癸の隊士 “竈門炭治郎” と “我妻善逸” と共に任務に

当たれ！」

「癸の鬼と一緒に行動してる隊士？」

明悟はそれはまた何ともあり得ない隊士だなと思った。明悟は鬼を恨む動機がない。鬼殺隊をやつてるのも全て記憶がない自分でもいられる場所だからいる。

そのせいで村長や村人達のような鬼に苦しむ人と対面しないと鬼を倒す気にならな  
いなど、非常にめんどくさい性格の人間だ。

まあ、鎧烏が言うと言うことは恐らくその隊士の事も上は認知していて、分かつてて  
任務に充ててると思った。

彼はこうして山を降りて、その隊士達の元に向かう。

彼は異常か？それともまともか？

善行の使者か？悪行の使者か？

正義の味方か？

悪の怪人か？

これは彼が道を決める物語。



## 二人の剣士

明悟は一人のんびり、団子屋にいた。

ここでのんびりしているのに今回はまともな理由がある。

今回組むことになった竈門炭治郎と我妻善逸を待っているのだ。

しかし、一向に来る気配はない。

明悟は待ち合わせに遅れたかな？と思いつながら、30皿目の団子を食べる。

鬼殺隊の甲の為に金には全く困ってなく、日輪刀は竹刀袋に入れて誤魔化してる。

まあダスターコートとカトルマンハットなんてアメリカンな格好をした男が団子屋

でそんなに団子を食ってたら目立ってしまうが明悟はその事を一切気にしなかった。

因みにこの2つの明悟の一張羅はお館様が明悟が20歳になった時に祝いとして渡した物だ。

コートがお館様からでカトルマンハットが夫人のあまねからだ。

明悟も二人に簪と羽織を渡した。

以来、明悟にとってこの2つは何がなんでも守りたい物の1つだ。

「あの、すみません。津上明悟さんですか？」

明悟の元に一人の箱を背負った少年が来る。

明悟にはアギトの超能力でその中に鬼がいると感覚的にわかった。

「そうだけど、君は？」

「俺の名前は竈門炭治郎です！階級は「ちょっと待って」・・・はい？」

炭治郎の言葉を明悟は遮り、炭治郎の耳に自分の口を近づける。

「俺達は政府に認可されていない非公式の組織。こんなところで関係のある言葉は言わないで！」

「すみませんでした」

「さて、団子でも食べる。君と背中の子も」

その言葉に炭治郎の体にとんでもない冷や汗が一気に溢れ出る。

明悟は炭治郎の耳から口を離して、眼と眼が向き合う。

炭治郎には明悟が恐ろしい人物に見えるが明悟の眼には年相応に怯えた少年に見えた。

「んん。」

「いいません」

「そう？ご主人、勘定お願いします!!」

明悟は団子屋の主人に勘定を払って、先に進むことにした。

善逸に対しては遅れた事もあるし、それよりも炭治郎の方に明悟の興味が行った為に鳥には合流出来なかつたと言うつもりだつた。



田舎道を歩く2人・・・3人かな？

とにかく彼らは田舎道を歩いていた。

炭治郎は足と肋骨が折れてる為に少し歩き方がぎこちなかつた。

沈黙が長い。

「さて、周りに人がいないし、聞いても良いかな？背中の人は誰？」

「・・・妹です、お願いします！禰豆子は決して人を襲いません！2年も眠り、人を1人も食べてません！どうか、信じてください！」

背中の箱を下ろし、頭を下げる炭治郎。

その姿は本当の真実を話しているだろうと明悟は直感した。

柱や他の鬼殺隊の隊士では彼の願いを聞けないだろう。鬼を心底憎み過ぎたし、身内すら手にかけて冥土に送つた隊士もいる。

恐らく禰豆子だけが特別な存在なのだろう。

妬みや憎しみに近い感情が普通の隊士なら沸く。しかし、明悟にはその感情がない。鬼を恨んでもいなければ身内を手にかけて記憶もない。それ以外の記憶すらも・・・故に明悟からしてみれば炭治郎の言ってる事がわからない。

まるで自分が禰豆子を殺そうとしてるような雰囲気になってるのに明悟は少し引いていた。

「ちよつと、そんな人殺しに躍起になつてる人みたいに言わないでよ。俺は別に禰豆子ちゃんだっけ?・・・殺さないよ」

明悟の言葉に炭治郎は頭を上げる。

「本当ですか?」

「うん、だつて俺には殺す理由が無いもん。ほら立つてさつきと任務に行こう」

何の問題の欠片もないように話す明悟。炭治郎は持ち前の超人的な嗅覚を使って明悟を嗅ぐがよく分からない。優しいのか厳しいのかどんな匂いをしているのか炭治郎には分からなかった。

「どうしてなんですか?」

「だつて、俺は鬼に恨みも怒りも無いから、殺す理由がない」

炭治郎は思った、鬼に恨みがない人間がどうして鬼殺隊に所属しているのか・・・

「何で鬼殺隊にいますか?」

「鬼に恨みがないのかい? ……ここが俺のいるべき場所だからかな?」

「いるべき場所?」

「誰だっけっていつかはその場所を見つけると思う。けどそこに行くには色んな事がある。それを探してたらここに着いちやったって感じかな?」

「ずいぶん……」  
「適当?」……すみません

「良いよ。自分でもそう思うしね。とりあえず、俺は禰豆子ちゃんを攻撃する気はないよ」

大きく胸を伸ばす明悟。

禰豆子に対してもう何も言うつもりは無いのだろう。

前を歩く明悟。

炭治郎はとりあえず、禰豆子には何もしてこないと判断した。

匂いは相変わらずよく分からなかったが、まるで太陽のように感じた。

太陽のように光を人に当ててるがそれが自分が自分を照らす物が焼き付く物が誰にもわからない。太陽のような感じがした。

「さて、炭治郎君が遅れたのは足の骨と肋骨の問題からかな?」

「分かるんですか!?!」

炭治郎は話していない骨折の事を言われて驚く。

「歩き方が少しぎこちないし、さつきからの受け答えを見るに根は堅物って程の生真面目。体に不調がある。歩き方で足の骨折、無意識に浅く息をしている事から肋骨の骨折もね。まあもともと浅い息の仕方なのかも知れなかったから、肋骨に関しては山勘かな？」

山勘でも恐ろしいくらいの的中率である。

炭治郎は明悟に隠し事は無理だと悟った。

不安が強くなったが道中を歩いていると明悟がただの人の良い人間だと分かっていた。

料理が好きで偏食が殆どない。

外国の知識も豊富で極めて冷静沈着。

好きな小説が昔、新聞で連載されていた『血染め壁』と森鷗外が翻案した『病院横町の殺人犯』。

自分でそのまま別の小さい綴方草稿帳に書き写して持ち歩いていた為そのまま炭治郎に貸した。

分からない文字は無いが、いかんせん言葉使いが難しくてわかりずらかったが明悟はそれを丁寧に教えた。

あと、かなりの達筆だった。

そんな中で無事に打ち解けるようになった時に雀が一羽3人の元へやってくる。

炭治郎は雀の話してる事を理解したが明悟には出来なかった。まあ、大分必死で何かを伝えようとしてるのが分かった。

雀に先導されて後を追う炭治郎。

明悟はその後を付いていく。

するとそこには金髪の炭治郎と同じ年くらいの鬼殺隊の隊士が一人の女性に汚い高音の泣き言を言いながら、しがみついていた。

炭治郎がすぐに近づいて女性から金髪の隊士を引き剥がして明悟もそれを手伝った。

「何してるんだ、道の真ん中で!!その子は嫌がつてるだろう!?!それと雀を困らせるな!!」

「あ、隊服・・・お前は最終選別の時の・・・」

「お前みたいな奴は知人に存在しない!知らん!」

「えー!!会っただろうが!会っただろうが!お前の問題だよ!記憶力の差!」

明悟はコント染みた事をやってる二人をほっといて女性に近づく。

「もう大丈夫ですよ。安心して家に帰ってください」

「はい!ありがとうございます!」

「おい〜!!」

明悟は金髪の隊士が何かを言う前に口を塞ぐことにした。めんどくさいから・・・

「この人はこうやって抑えてますので」

「ありがとうございました！さようなら！」

女性はそのまま去っていく。

明悟は女性の姿が見えなくなると金髪の隊士を離れた。

「待つてよ、見捨てないで。」

「お前、もうやめろ！」

「何だよ！何で邪魔すんだよ！お前らには関係ないだろ！」

炭治郎は金髪の隊士のやってる事に対して引いていた。明悟も少しだけ引く。

「やめろー！なんでそんな別の生き物を見るような目で俺を見てんだ！お前ー！責任取れよ！お前のせいで結婚できなかったんだからー」

炭治郎は金髪の隊士の言い分に遂にゴミをみるような目で見る。明悟も完全にドン引きしていた。

「なんか喋れよ！」

「とりあえず、その性格じゃ結婚は無理だね」

ナチュラルに人の琴線に触れる明悟。

「いいか！俺はもうすぐ死ぬ！次の仕事でだ！俺はな！ものすごく弱いんだぜ！なめる



なよ！俺が結婚できるまでお前らは俺を守れよな！」

「俺の名は竈門炭治郎だ！」

「そうかい！ごめんなさいねー！」

「俺は我妻善逸だよ！助けてくれよ炭治郎〜！」

その後の事は割愛する。

善逸は借金して育手の師匠に肩代わりをして貰い、鍛えられて選抜試験に放り出されて何故か生き残つてしまい、精神的に疲れた所でさっきの女性に心配の声を掛けられたら、勘違いしてあなつていたとの事。

「何とも運が良いのやら悪いのやら．．．あ、俺は津上明悟。階級は甲だよ」

「甲つて柱のすぐ下の．．．」

「そう、その甲」

すると善逸は明悟にしがみついていた。

「お願いします！助けて！助けて下さい！守ってください！お願いします!!」

明悟は頭を搔く。

別に守る事に関しては了承する気だが、ここまで強烈に悲観的だと守るよりも最低限の命を守るだけにした方が身のためになるのでは？とわりとキツイ事を考えてた。

「とりあえず、任務に行こう。怖かったら見るだけで良いから」

明悟は善逸を立たせる。

善逸は明悟からの言葉に安心したのか泣き止んだ。

「ほら、炭治郎君も善逸君も任務に行こう」

「はいー」

「・・・はい」

明悟からの言葉に反応が違う二人。

めんどくさく感じそうだが、明悟は意外にも楽しんで二人を見ていた。

性格が違いすぎるから関わっても飽きないと言うマイペースな考えからだ。

歩き始めると善逸の腹がなる。

「善逸君、どうしたの？」

「すみません。安心したら腹がへって」

「じゃあ、これ食べるか？」

炭治郎が自分の懐から笹の葉でくるまれた一つのおにぎりを出す。

「ありがとう」

善逸はそれを取る。

「炭治郎は食わないの？」

「うん、それだけだし俺は良いよ」

すると善逸はおにぎりを綺麗に割る。

「ほら、半分食えよ」

善逸はそう言つて半分のおにぎりを炭治郎に差し出す。

炭治郎もそれを貰い、食べる。

明悟はそんな二人の様子を微笑ましく見ていた。

ぶつきらぼうだし、変に上から目線な感じで言つてるけど厳しい生真面目で優しい善逸とどこまでも優しい炭治郎。

明悟は懐から笹の葉でくるまれたおにぎりを出す。

「二人とも、それだけだと体力が持たないからこれも食べて良いよ」

「いいんですか？」

「良いよ、俺は団子を結構食べてるから」

「ありがとうございます」

二人とも同時に食べる。

明悟は何だが弟が二人いるように思えてきた。

こうして彼らは任務に向かった。



山奥の屋敷に着く明悟達。

途中で善逸が鏖鳥にビビると言うコントはあつたが特に問題もなく屋敷に着いた。

しかし、屋敷を見るなり明悟、炭治郎、善逸の目が変わった。

炭治郎は自信の嗅覚が屋敷から漂う強烈な血の臭いに冷や汗を欠き、善逸は異常に発達した聴覚で屋敷内の様子にビビり、明悟はアギトの超能力で屋敷の中から漂う気配に目を開いた。

「血の臭いがする」

「臭い？そんな事より変な音がしないか？」

「これはちよつと癸の隊士にはキツイ任務になるね」

明悟が辺りを見渡すと一組の兄妹が怯えながら明悟達を見ていた。

「君達、こんな所で何をしているんだい？」

明悟の言葉に怯える兄妹。

炭治郎は善逸の雀を借りながら、兄妹と打ち解ける。

何でも兄妹の一番上の兄がこの屋敷の怪物に連れ去られたらしい。

「最悪に近い状況だな」

明悟は顎に手を当てながら考える。

「なあ、さつきから気持ち悪い鼓の音が聴こえて」

善逸は怯えながら言うのと突然と屋敷の2階の障子が開いた。

全員、開いた障子を見ると中から血塗れの男が出て来て地面に落ちた。

「大丈夫ですか!?!」

「何がありました!?!」

明悟と炭治郎が男に近づく。

「クソ、やっと出られたと思つたのに……」

男はそう言つて息絶えた。

炭治郎が男の為に涙を流し、明悟は屋敷を静かに見ていた。

「ねえ、君達この人は……」

「違う。兄ちゃんじゃない」

怯えながらも囚われた兄ではないと話す兄妹。

炭治郎は男に手を合わせる。

「明悟さん!善逸!行きましよう!」

「ちよつと待つて炭治郎君!まずは屋敷の周りを見るんだ!」

炭治郎の言葉に明悟が応える。

「何故ですか！早く行きましよう！」

「冷静になるんだ！この人は漸く屋敷から出られたって言ったんだ！ここから見たところ普通の屋敷。てことは入ったら簡単に脱け出せない迷路になってる筈だ！血鬼術かそれともそういう造りか判別する為にも外周りや中の造りを確認しないと死ぬぞ！」

明悟の言葉に炭治郎は冷静になった。

自分が死んでは意味が無いからだ。

明悟は裏に周り、裏口がない事を確認した。

炭治郎は屋敷の扉を開けて決して中に入らないようにしながら中の造りを確認するが至って普通の屋敷だった。

明悟が裏から戻ってくる。

「外の造りは至って普通の造りだった」

「中也変わった様子はありません」

「これは・・・入ったら鬼が出そうとするか倒す以外に脱け出せる道はないな。2人には更にキツイ事を言うけど、この感じ・・・十二鬼月が〃2人〃いる」

「ひいひいひい!!」

無惨の最高戦力の十二鬼月が2人もいる事実に善逸は完全に怯えきっていた。

「2人も俺が行くから絶対に来ないで」

「そんな!？」

「わかりました!」

炭治郎は明悟の言葉に驚愕し善逸は賛成の声を出す。

「それじゃ、助けて来るよ」

明悟はそのまま中に入って扉を閉める。

炭治郎がすぐに追いかけてようと扉を開けるが明悟はもういなかった。

「善逸、明悟さんの後を追うぞ!」

炭治郎はすぐに着いていこうとするが善逸は首を横に振りまくる。

「そうか、もういい」

善逸は炭治郎のドスの聞いた声にビビり、しがみつく。

「ちよつと待つてよ! 何でそんな般若みたいな顔してんの!?! 行くよ!」

善逸も中に入る事を決めた。

炭治郎は怯えている兄妹の所に行き、背中の箱を木陰に置く。

「もしもの為にこれをここに置いておく。これは2人の事を守ってくれるから?」

兄妹にそういうと、炭治郎と善逸は屋敷の中に入る。

最も兄妹も中からカリカリと聴こえる音にビビり、一緒に入ってしまったが……



明悟は一体の鬼と対峙していた。

「まさかここで下弦の弐の相手をするとは思っていなかったよ。目的は何だ!？」

「答える義理はない。ここで死ぬからな」

「やってみる?」

明悟はベルトを出す。

「何だ、それは?」

そしてベルトから光が溢れ出る。

下弦の弐の轆轤はベルトからの光に少し火傷を負うもすぐに回復する。これ以上、下手な事をされる前に殺そうと拳を振るうが明悟はそれに対して鳩尾にカウンターをする。

轆轤は飛ばされて鳩尾を抑えながら明悟を見ると明悟の姿はアギトに変わっていた。

「お前は一体何者だ?」



「アギト」

互いに走り、右拳を相手の胸に叩きつける。

アギトからは火花が轆轤からは鮮血が飛ぶ。

「ここでお前を倒す！」

この闘いが何をもたらすのか、まだこの時は誰も知らなかった。

## 風の戦士

火花と鮮血を散らしながら、アギトになった明悟と轆轤は狭い廊下で戦っていた。互いに徒手空拳な為か実力は拮抗していた。

轆轤の右拳を明悟は左手で逸らしながら右拳を轆轤の顔面にぶちこもうとするが、轆轤も同じやり方でやり返す。

互いの攻撃が当たらなくなる。

拮抗している状態で2人の拳がぶつかり合いとてつもない音がなり、周りにはその衝撃の余波が出る。

「やるな」

「それはどうも」

明悟は拳に光を纏わせて殴りに掛かるが轆轤、そこは流石は下弦の式。一瞬でどういった攻撃かを勘で理解して離れた。

「血鬼術 指銃」

轆轤が人差し指を明悟に向けるとその指が飛んできた。まるで弾丸のように速く飛んできた。明悟は間一髪で避けるが、その指の当たった先にある柱を綺麗に貫通してい

た。

(凄い威力・・・)

「血鬼術 指銃連弾」

両手を突き出すと指がドンドン飛んできては生えてを繰り返し、大量の指・・・いや弾丸が明悟を襲う。

四肢に光を纏わせて叩き落としていくが徐々に圧されていき、大量の弾丸を喰らう。

明悟は轆轤から離れようとして後ろに下がり、廊下の曲がり角に逃げる。

「血鬼術 指術曲弾」

なんと轆轤から発射された弾丸が曲がり角を曲がり、明悟に直撃する。

「ここですら確実に殺させて貰う」

明悟はこの予想外の状況にどう対応するか考える。

そもそも突の隊士2人との共同任務で何故にこうも理不尽に十二鬼月と出くわすのが理解できない。

対処しようがないわけではないが、この狭い廊下では無理だ。寧ろ弱体化してしま

う。

そんな事を考えてると鼓の音が聞こえて明悟と轆轤は違う場所に移動する。

そこは広い部屋だった。

かなり広い部屋だった。

明悟はこれに対して内心安心した。

これなら轆轤の血鬼術に対処出来るからだ。

明悟はベルトの両腰についているスイッチの左側のスイッチを押す。

するとベルトの真ん中の「オルタリング」が青色になり、左腕と胸が青色に変わる。

明悟は「アギト ストームフォーム」に変わった。

左腕をオルタリングの前に持つてくるとベルトから青い棍棒が現れて、手に取ると柄が伸び両端の畳まれていた刃が展開する。

「ストームハルバート」と呼ばれる薙刀状の武器になった。

「血鬼術 指銃連弾」

大量の弾丸が明悟に飛んで行くが、彼は横にただストームハルバートを振る。すると突風が発生して強力な風の壁が出来て全ての弾丸の勢いが殺されて落ちる。

この事実には轆轤は眼を見開く。

「何!?!」

明悟は驚いてる轆轤の隙を付く。

ストームフォームに変身したことで俊敏性が上がり、一気に轆轤の目の前にまるで時間を止めたかと錯覚するほどの速度で突っ込む。

突っ込みながら、ストームハルバートでたたつ斬ろうと体を捻る。

しかし、轆轤は両腕を合わせた状態で指を明悟に向ける。

「血鬼術 指銃衝撃砲」

束ねた指が一緒に明悟に向かって飛んでいく。

明悟は咄嗟にストームハルバートで防ぐも今までとは段違いに違う血鬼術の威力に吹き飛ばされる。

手が痺れたのか明悟は手をぶらぶら振る。

「私のこの血鬼術でもその程度か……」

冷や汗を欠きながら、轆轤は一気に明悟から離れる。

明悟はストームハルバートを構えて轆轤をアギトの赤い眼で睨む。

「悪いが稀血が優先なので退かせて貰う」

「そんな余裕があるとしても？」

明悟は轆轤に突っ込んで行くが、その時、鼓の音が鳴り、轆轤は明悟の前から消えた。

「くそ！逃げられた！……マズイ、早く行かないと……」

明悟は一先ず部屋を出た。



一方そのころ、炭治郎は屋敷の外で怯えていた兄妹の妹のてる子を守りながら、屋敷の中を歩いていった。

「てる子ちゃん、俺から離れないでね」

「うん」

（一体、明悟さんやてる子ちゃん達のお兄さんは何処だろう？）

持ち前の嗅覚を頼りに炭治郎は廊下を歩いていく。

すると炭治郎の鼻に鬼ではない、独特な血の匂いを感じる。てる子と一緒にそこに向かう炭治郎。襖を開けると奥に鼓を持ち、脚を怪我した少年がいた。

「お兄ちゃん！」

「てる子！」

少年も元へ行くてる子。

どうやら、探していた兄らしい。

炭治郎は鬼殺隊である事を話すとこうなった経緯・・・鬼達が誰が彼を食べるかと殺し合いになった事を聞きながら、少年の傷の手当てをした。

「これでよし、しかし何で鬼達はそんな事を？」

「何か、稀血がどうか・・・」

「稀血?」

「稀血とは珍しい血の持ち主で鬼からすれば1人で100人分の人間を食べたと同等の価値がある血である」・・・な!」

炭治郎の鎧烏の台詞が奪われる。

炭治郎達は声のした方を見るとそこにはアギトに変身してる状態（ストームフォームではなく、通常の黄金の姿のグランドフォーム）の明悟がいた。

突然現れた異形の戦士に兄妹は怯え、炭治郎は日輪刀を構える。

「誰だ!」

「炭治郎君、人の声は覚えておこうね・・・お兄さん、少し傷ついたよ」

何ともマイペースな明悟に炭治郎は漸く目の前の異形が明悟であることに気がついた。

「明悟さん?」

「そうそう、津上明悟だよ。この姿はまあ今度ゆつくり話すよ。それよりも急いでここから早く出よう」

脚を怪我してる兄をおんぶする明悟。

「明悟さん、鬼は?」

「流石に今の君の状況じゃ、荷が重すぎるよ。それよりもこの子達の安全が優先だから

一先ず退いて、後は柱に任せよう。十二鬼月が2人も相手だと分が悪い。それよりも屋敷の外で日が出てる所で屋敷から鬼が出ないように監視する方が良い……「ポン！」……けど無理そうだね」

突然鳴った鼓の音により、4人はまた部屋を飛ぶ。

明悟は少年を下ろした。

「炭治郎君はその子達と一緒にいて」

「明悟さんは？」

「俺はこれから来るお客さんの相手かな？」

襖が開かれるとそこには轆轤がいた。

「また貴様か……」

「今度こそ倒させて貰うよ」

ストームフォームに変わる明悟。

ストームハルバートを轆轤に向ける。

炭治郎や兄妹達は明悟の突然の変化に驚く。

(姿が変わった!?!明悟さん、貴方は一体……)

「炭治郎君、急いでここから逃げて！悪いけど今の君は足手まといだ」

「血鬼術 指銃衝撃砲」



強力な弾丸を放つ轆轤だが、明悟はそれを防ぐ。

その衝撃による周りの空気の揺れは炭治郎達に伝わる。

「速く逃げろ！」

「はい！」

炭治郎は兄妹を連れて別の部屋に逃げて落ちてた鼓を叩くと炭治郎達は別の場所に飛んだ。

「血鬼術 指銃連弾」

明悟は弾丸をストームハルバートで弾きながら間合いを詰めて、ハルバートで轆轤を攻撃する。轆轤も負けずに避けて至近距離で血鬼術を使う。

互いに互いの攻撃を避けては反撃する。

一度、体勢を立て直そうと離れた瞬間、鼓の音が大量に鳴り始める。

そしたら、部屋が突然変わったたり、回ったりが繰り返される。

明悟も轆轤も空中に飛んで、掴み合いながら殴り合うがやがて鼓の音が完全にやむと二人は離れた。

「響凱め、死んだか……」

「これで残る十二鬼月はお前だけだな」

「ふん、あいつは十二鬼月ではない。あのお方からお祓い箱にされた哀れな役立たずだ」

明悟は轆轤を倒そうと構える。

「稀血は惜しいがお前の相手は骨が折れる。今日は退散させて貰う。それに稀血はまだ探せばある」

「日はまだ出てゐるのに？」

「響凱がわざわざ真夜中に稀血を捕まえたかと思つたか？この森に日差しの当たらない箇所など無数にある。もうすぐ日も暮れるだろう。そうなつたら貴様には追い付けまい」

「試してみる？」

ハルバートの刃の部分に風が纏わりつく。

それを自分の体を軸に回し始める。

突風が吹き荒れて周りの空気が明悟に向かっていく。そしてスツと刹那の瞬間に一気に轆轤に詰めより、ハルバートで斬ろうとする。

「血鬼術 指銃狙撃」

轆轤はなんと高速で動き、振りかざしてくるハルバートを目掛けて弾丸を放つ。見事に放たれた弾丸はハルバートに当たり、ハルバートの軌道は僅かに反れる。轆轤はハルバートをギリギリで避けてそのまま屋敷の壁を壊して外に出た。

まだ日差しが出てゐるのに外に出るのは自殺行為も甚だしいが明悟にはアギトの感覚

でわかった。轆轤は生きている。決して少ないダメージではないが、確かに生きている。

追いかけてようかと迷ったが、炭治郎達の事が心配なので明悟は炭治郎達の所へ向かった。



轆轤は森の光の当たらない場所で隠れながら、日差しの元へ出たことによる大火傷を直していた。傷はとて深く片腕と片足が無くなっていた。後数秒、影に入れなければ死んでいただろう。

「アギトか……」

肩で息をしながら、傷を直していく轆轤。

(稀血よりも価値がありそうだ。あの力……あの方の為に……)

完全に回復した轆轤は決して日差しの欠片ほども当たらないように森の中へと消えていった。

●●●  
明悟は変身を解除しながら、屋敷の外へ出た。

炭治郎や善逸の体が心配なので回復するまで藤の家に住よう。んで自分も少しゆっくりしようとか心に決めながら家に出ると、炭治郎と猪頭が喧嘩をしていた。

善逸は炭治郎が背負っていた禰豆子が入ってる箱を抱えて鼻血をてる子に拭いてもらいながらその喧嘩を見ていた。

「どうなってるの?」

「明悟さん!!助けてください!変な猪頭が炭治郎の大事な箱を斬ろうとして護ってたら、炭治郎がキレて猪頭が喧嘩を吹っ掛けて、炭治郎も猪のあばらを折ったりして止まりません!」

「あばらを折った!?!」

驚きながら、二人の喧嘩を見る。

「ちよつと落ち着けえええ!!」

炭治郎が猪頭に頭突きをする。

でかくて鈍い音がる。

「うわああああ!!音!頭蓋、割れてない!」

「2人とも止まって!」

猪頭の猪の被り物が落ちる。

「え?!嘘?!女?!えっ?!」

中から出てきた猪頭の素顔はこれまた凄いと云えるほど美形だった。かなりの女好きである善逸が一瞬、女と誤解するほどである。まあ明悟には全く効果がないが、美形なのには間違いない。たぶん女装したら下手な人間や鬼なら簡単に騙せると明悟は内心思った。

「なんだ?俺の顔に文句でもあんのか?ジロジロと見やがって」

頭から血を滴ながら、猪頭は善逸や炭治郎を睨む。善逸は完全にビビり、明悟の後ろに隠れる。

「なんだ、てめえは?」

猪頭は明悟を睨む。

明悟は善逸の前にちゃんと庇いながら、猪頭を見る。

「俺の名前は津上明悟！鬼殺隊の甲だ！君は一体誰だ!？」

「俺は嘴平伊之助！鬼殺隊だ!」

「なら、隊士同士の争いは御法度だ！今すぐに止める!」

「はん！そんなのしつた事・・・か・・・」

伊之助は突然、泡を吹きながら倒れた。

「えっ!?!嘘!?!死んだ!?!」

「頭を強く打って、脳震盪を起こしたんだ」

「凄い衝撃だったからねえ」

冷静に分析する明悟と炭治郎。

（えっ?炭治郎どんだけ頭固いの?血も出てないし・・・てか何で2人ともそんなに冷静なの!?!）

善逸は内心、2人にビビっていた。

炭治郎や善逸は自分の羽織を被せたり、頭の下に敷いてあげた。

明悟は何もやらなかった。何故なら、コートもハットも輝哉とあまねの贈り物の為にやっつてあげる気は無かった。

屋敷の中にあつた無惨に食い残された死体を炭治郎や善逸、被害者の三兄妹と供養している伊之助が起きた。

「うわあ、起きたー！」

「勝負、勝負、勝負!!」

善逸を追いかけ回す伊之助。善逸はてる子の後ろに隠れる。この情けなさ過ぎる行動に明悟は鉄拳でお仕置きした。

「痛いー！」

「流石に情けなさ過ぎるよ」

「……うう……」

「そんな眼をしても駄目」

「ちくしょう」

明悟と善逸がコントを繰り広げると伊之助が突然と喚きながら屋敷の中へ入っていった。

気になり炭治郎から聞くとどうやら伊之助も供養を手伝うらしい。明悟は随分と良いやつだなと思った。耳の良い善逸はコントを繰り広げながらも、伊之助と炭治郎の話聴いていた。真実は供養を理解できない伊之助を炭治郎がナチュラルに煽りまくって伊之助をやる気にさせただけである。

何ともアホらしい話である。

数時間後、全ての供養を終えた面々は山を降りると鎧烏からの指令を素直に聞くこと

にした。

三兄妹は鳥が喋つてる事実困惑するも今日は色々疲れたと思ひながら、もう考えるのをやめた。

三兄妹と別れる時に何故か善逸がずっと屋敷の時にいた次男の正一から離れようとしなかつたが、炭治郎が気絶させて別れることに成功した。

善逸は明悟が背負いながら、炭治郎と伊之助と一緒に山を降りていく。

「勝負だ！俺は必ず隙を見てお前に勝つぞ！」

「俺は〃お前〃じゃない。竈門炭治郎だ！」

「かまぼこ権八郎！お前に勝つ！」

「誰なんだそれは!？」

「お前だ！」

「違う人だ！」

口喧嘩をする炭治郎と伊之助。

明悟は肋骨が折れてるのに元氣だなと本気で思った。因みに眠らされて背負われてる善逸は2人の口喧嘩の煩さにキレた。





藤の家紋が門に刻まれた屋敷「藤の家」についた一向。

「休息！休息！負傷につき、完治するまで休息せよ！」

鏖鳥の言葉に炭治郎は素で驚いてた。そりや大怪我をしながら戦う羽目になったんだ。驚いてもしょうがない。伊之助は鏖鳥を食べようとしていた。明悟は伊之助の鏖鳥つてすでに伊之助の胃袋の中なのでは？と思った。（実際には影から伊之助を見ているだけであるが）

門が開き、中から老婆が出てくる。

「もし、鬼狩りの方ですか？」

優しい声で尋ねる老婆。

「あの・・・夜分遅くにすみません」

「ひい、お化けだ！」

「コラー！」

「何だ、お前は？弱そうだな」

「伊之助君！」

失礼な事を言う善逸と伊之助に怒る炭治郎と明悟。

しかし、老婆は気にせずそのまま中に一緒にいる。

着替えだったり、料理だったり、達人並みとしか云えない仕事の早さに善逸が妖怪と言つてたが炭治郎に鉄拳制裁されていた。

四人で食べる晩飯は米と天ぶらの盛り合わせと味噌汁に治部煮だった。

味噌汁から飲み始める炭治郎。

天ぶらとご飯から食べ始める善逸。

天ぶらをガツガツと手掴みで食べ始める伊之助。

お茶を飲んでから治部煮を食べ始める明悟。

それぞれがそれぞれの食べ方で食べていた。

途中、伊之助が炭治郎を挑発しようとしてわざと炭治郎の天ぶらを食べ始めたが、炭治郎には全く効果がなく、治部煮まで渡そうとする炭治郎。これに伊之助はイライラしていた。明悟は伊之助が食べた種類の天ぶらで自分の皿に残つてたのを炭治郎に挙げた。

「明悟さん、いりません！」

「若いのに爺臭い事は言わないで食べて良いから」

「おにぎりも貰っているのにもう貰えません！」

「良いから」

「俺は長男ですから、我慢できます！」

「俺よりは年下でしょ」

平行線な2人。

「んじゃ、俺が貰うぞ！」

「ちよつと止めろつて！」

人の天ぷらに手を伸ばそうとしている伊之助を善逸は止めていた。

結局、明悟が「人の好意を無下にするなんて」と嘘泣きも兼ねて言いくるめて渡した。アギトのせいか炭治郎は明悟の感情を上手く嗅げなかった。



騒がしい晩飯を終えるて寝室に行くとき布団が4つ敷いてあった。善逸がまた喚くが炭治郎が制裁していた。何気にポケとツツコミが定着していつていた。

伊之助もまた挑発しようとするが全く炭治郎には効果がなく枕を投げた。それは何故か善逸にぶつかった。

ワイワイと騒いでる中、老婆が医者を呼んできてくれて、4人は診察をして貰うと明

悟以外重傷だった。

そう言われたら炭治郎達は落ち着いて寝始める。

明悟も一緒に横になる。

「まさか明悟さん以外、皆あばらが折れてるとは・・・」

「俺は腹より、頭がいてえ」

伊之助の頭にはドでかいタンコブが出来ていた。

「お前、俺に謝れよ。ボカスカボカスカ殴りやがって痛かったんだぞあれ、謝れ！」

「断る」

「謝れよ！」

「断る！」

「謝るんだ！」

「伊之助君、謝りなさい！」

「断る!!」

「そんなんじや、もう一緒にご飯食べてやんないぞ！」

「はあ!?!なんだそりゃ？」

「ご飯は皆で食べた方が美味しいんだぞ」

「そうだぞ」

「確かに皆で食べるご飯は美味しいよね」

「お前ら、頭大丈夫か？」

「お前に言われたくねえ！」

その後は色々それぞれ身の内話だったりして何となくだがお互いを知ろうとし始めてた。

善逸が炭治郎から箱の中にいる鬼の禰豆子の事を鬼だと分かっていながら庇つていたりしていた事に炭治郎は感激していた。善逸も気持ち悪いほどに照れていたが・・・

「明悟さん」

「どうしたの、炭治郎君？」

「明悟さんのあの姿って何ですか？」

「何なんだろうねえ？」

「分からないんですか？」

「分からないし、興味が無いからね。まあ鬼殺隊の当主は知ってて俺を隊士にしてるから問題はないから安心して」

「分かりました」

「え？あの姿って何？」

「面白そうだな、教えろ！積木むかご」

「積木むかごって誰!?俺は津上明悟だって……まあ当家から口止めされてるから他言はしないですね……14の時から血鬼術とは違う変な力に目覚めてね。体が変化するようになったんだ。日差しの下を問題なく平気で歩けてるし、飢えも感じないから鬼とは違う力なんだと思う。人を一回も襲ってなかったから当家からは出来る限りこの分けの分らない力は他の隊士には見せないで欲しいって言われていつか自分から隊士達に話すよって言われてるんだ」

明悟の隣で横になっていた善逸は露骨にビビり、一番遠くで横になっている伊之助は明悟に対して興奮していたし、明日力を見せろと言うほどだ。

戦闘無しの条件付きで明悟は了承し、伊之助は明日を心待ちしながら寝始めた。

善逸はビビりながらもおぶってくれたり、おにぎりをくれたりなど色々と優しくして貰ったのも明悟なのでビビらないようにすると明悟に言っていた。

まあ明悟はそれ言っているの?って内心思いながらも真摯に向かい合おうとしてくれる善逸に感激していた。

その後、禰豆子が夜になった事で外に出て、善逸がビビったり、禰豆子に見惚れてたり、炭治郎の妹ではなく彼女だと勘違いして嫉妬全快で日輪刀を抜いて炭治郎を追いかけ回していた。

明悟は本当に元気な隊士達だなと思いつつ寝た。

明悟と彼らが出会い、これからどんな道を行くのかまだそれは誰にもわからない。

## 焰の剣士

チュンチュンと朝から雀が鳴く。

明悟は体を伸ばしながら起き上がる。

本当はこのまま、バン！つと障子を開けて朝日を全身から浴びたいが、生憎とそうはいかない。

鬼の禰豆子がいるのだ。

朝日を部屋に入れたら、絶対に禰豆子は死ぬ。

明悟は細々と部屋から出て浴びようと思つて、起き上がると部屋の中は凄惨な事になっていた。大量の切り傷にあり、善逸が頭に大量のタンコブを作りながら失神して、炭治郎も大量にタンコブだらけだった。

因みに禰豆子は箱の中に戻ったのか、いなかった。

明悟は禰豆子の入ってる箱に近づく。

「禰豆子ちゃん、いる？」

箱の外から尋ねる明悟。

するとカリカリと壁を引っ掻いてる音がなり、とりあえず禰豆子の所在の確認は取れ



た。明悟は2人から事情を聞くかどうか迷ったが、止めて先に朝日を浴びる事を決めた。

部屋を出て、玄関に行き、草履を履いて庭に出る明悟。朝日に朝の暖かき、それに太陽が上つていない為に少し残る涼しさ、明悟は朝が好きである。昼も夜も同じように好きだが、それでも朝が好きである。新たな1日1日ずつ進む人生、それらを感じられる朝が好きである。そして明悟は生きる事が美味しく感じる。

何を持って生きるのが美味しいかはわからないが明悟はそう感じるのだ。人と関わってもそう感じる時がある。

けど、そう感じる人間はあまり鬼殺隊にはいない。

皆、不味く感じてしまうのだ。

何故なら鬼殺隊は呪われてる。

鬼に呪われてる。

鬼に身内を殺された者、身内が鬼になってしまった者、様々な境遇の者がいるが、非常に不本意ながらも鬼への復讐心によって生きてる人間が多い。

絶対に彼らは認めないが、彼らは鬼によって生かされてる。

明悟は不味いと思いつながら羨ましかった。自分の人生は何の味もしない。

不味いと感じなければ美味しいとも感じない。

酷く無価値な人生である。

輝哉と再会した時にその趣旨を言ったら、輝哉ではなくあまねにえらい劍幕で激怒された。

そりや、無惨の呪いで苦しんでる輝哉に対して言っている言葉ではない。あまねが激怒するのも仕方なかった。輝哉からは何も言われなかったが暫くの間、会話をしなかった。

生きる意味がなく、自分の人生が無駄だと思ってしまう明悟。

その無駄な人生の量すらも決められて無駄に出来ない輝哉。

彼らの仲直りは別居暮らしと交換日記から始めた。互いに違う場所にすんで毎日日記を書いて交換しあう。

但し、絶対に家の中で終わらないようにした。毎日何処かへ行って感じたままに書いた。明悟は最初どう書けば良いか分からなかったが、段々と書くのが楽しくなった。毎日、自然を人を流行を楽しんで書くようにしたら明悟は漸く自分の人生が美味しくなった。自分の生きてる意味は分からなくなりがそれで輝哉が楽しんでくれて喜んでくれた。明悟にはそれが堪らなく嬉しかった。暫くして明悟は輝哉に謝罪してアギトの力を見

せた。

それは明悟が輝哉の為に戦うと決めた瞬間でもある。

輝哉はその謝罪と決意を受け入れた。

そして根本的に何かを恨むと言う事が出来ない明悟に鬼の被害者がいる所にわざと送って決意を奮い起たせるようにした。

明悟もそれを知ってて受け入れた。何故なら明悟にとって生きるとは輝哉なのだ。1度で良いから輝哉と一緒に長旅をしたりしたい。

2年でも3年でも何年でもいつまでも良いから一緒に生きたいのだ。

こうして彼らは絆を深めあつた。

以来、彼は毎日が美味しいと感じる。特に朝は格別だった。

人生の美味しさを感じる明悟。そんな中で藤の家の中が煩くなる。炭治郎達が起きたのだろう。善逸の昨日から続く恨み節と伊之助の元氣あふれる声、炭治郎の生真面目な声。全てが美味しかった。

明悟は人生と一緒に美味しく感じる為に家の中に戻った。



炭治郎が実力行使込みの方法で善逸の誤解を解くと今度は異様に炭治郎にゴマを擦ってきたため、炭治郎に気持ち悪がられるも平然と禰豆子とお近づきになろうとしていた。明悟は良くやるなあと思いつながら、味噌汁を飲んでいた。

伊之助は明悟のアギトの力を見たが、つたが朝御飯を済ませたらと言ったら、秒速で食って外に行った。

1日やそこらで骨折が治るわけでもないので炭治郎も善逸も伊之助も暫くの間暇になつた。明悟は任務があるからお別れかと思つたが、鎧烏からは何の通達もなく、問い質したら、暫くは炭治郎達と一緒にいろと何の事やらわけが分からなかつたが、禰豆子関係だろうと思つた。と言うかそれ以外に理由らしい理由が無かつた。

まあ交換日記しかり、輝哉の行動は意外に上手くいく事が多いから別に良いかと思つた。

朝御飯をゆつくり噛み締める明悟。

炭治郎や善逸が終わつてもまだ食べていた。

量も多いが兎に角食べるのが遅い。

炭治郎や善逸が食べ終わり家から出て待つてると暫くして明悟が家に出た。食事時間は一時間以上。

物の30秒位で食べ終えていた伊之助は頭に怒りマークを浮かばせながらイライラしていた。これには炭治郎も一緒にイライラして善逸もイライラしていた。

炭治郎も善逸もいくら一緒に食べるのが好きでもこんなにゆっくり食べないからだ。しかも人が待つてたら急いで食べて合わせるのが普通かも知れないが、明悟にそれは出来ない。やるつもりもない。だって折角美味しい御飯をゆっくり味わえないのは嫌なのだ。

絶対にそれだけはやりたくないのだ。

家の外に出るとイライラしてる3人が明悟に近づいた。

「明悟さん！遅いです！」

「遅いよ！どんだけ待たせるの!!？」

「番井明治！とろくさいぞ！」

「ごめんごめん、ゆっくり味わいたくってさ。今度は気を付けるよ」

3人はその言葉を聞くと離れるが、明悟のこういう場合の気を付けるは数分位で全然変わらない事を知らなかった。



明悟は体を大きく伸ばして、ベルトを出現させる。

そして、右手を伸ばし、左手は左腰に当てる。

「変身！」

両手を前を出してクロスしてからベルトの両脇に着いてるスイッチを押す。

すると胸から徐々にアギトの姿になっていき、アギトになった。

炭治郎は2回目に見る変身に驚きこそすれ、そこまでだった。善逸はアギトの変身に悲鳴を上げてビビっていた。伊之助は変身に興奮していた。

「これが基本的な姿かな？」

「えっ!? 何!? 急に人が変わったし、音も変になったんだけど、怖!!」

「変になってどんな風にな？」

「子守唄みたいだったのが、デデン、デ、デデンってすごい聴いたことがない音になってんだけど！」

「祭りの太鼓かな？」

「もつと煩い」

祭りの太鼓よりも煩い音って何だよと明悟は内心考えるが分からなかった。

「すげえ！すげえ！こんなもん見たことねえぜ！おい！俺と闘え！」

「言うと思った。嫌だね」

「じゃあ、此方から行くぞ！」

伊之助は明悟の話なんて聞かずに突進する。日輪刀を持って斬りかかってないだけですが、明悟にとつてはめんどくさい事、この上なかった。

軽く対処しようとして拳を振りかざすもいくら本気の攻撃でないとはいえ、それを軽々避けていく伊之助。

これには理由があり、まず第一に明悟は手加減して攻撃してる。何故なら本気で殴ると死にはしないと思うが骨折が悪化するのには目に見えていた。

次は戦い方だ。

伊之助は体を低くして攻撃する為に非常にやりにくいのだ。勿論対処出来ないわけではないが、明悟は折角の機会だから、この際もう1段階変身すると決めた。

右腰のスイッチを押すとベルトが赤く染まり、右腕と体が変化した。右肩が隆起して赤くなり、体も赤くなった。

仮面ライダーアギト フレームフォームである。

「色が変わったからなんだってんだよ！」

伊之助が猪突猛進に突っ込んでくるが、明悟は軽く避ける。伊之助の厄介な攻撃を避けて避けて避けまくる。イライラしながら、攻撃していく伊之助。

「避けんじやねえ!」

「いや、普通避けるよ」

攻撃を速くするも全く当たらない。これはフレイムフォームの特性の一つである。ストームフォームが風を起こし、速く動けるのが特性ならば、フレイムフォームは炎を操り、超感覚で敵に対応する特性がある。その超感覚は呼吸で言うところの透き通る世界に匹敵する。

伊之助がどんだけ、攻撃しても当たらずに遂にイライラが頂点に達して大振りの雑な攻撃をする伊之助。明悟はそれを避けて何事も無かったかのように流れるような動きで伊之助の首に手刀を当てて気絶させた。

変身を解く明悟は頭を欠いて欠伸をする。

「君達もやる?」

「すみませんがご遠慮します!」

「は?やるわけねえだろ?俺は弱いんだぞ?あんたと戦ったら死ぬわ!」

炭治郎と善逸はアギトの力に畏れていた。

そりやまああの煩い伊之助を一瞬で気絶させたのだ。これで反応が変わらなければ2人とも昨日のめんどくさい状況は物の数分で終わらせていただろう。





昼御飯前には伊之助も起きてきて、また勝負勝負と言ってきたが、明悟は相手にしなかった。それでもしつこかったのであれば骨が治ったらやると言ったら、大人しくなつた。人の体を鍛えるには鍛えて鍛えて鍛えるしかない。普段から半裸で鍛えられた体の持ち主である伊之助も流石に怪我を治さないと闘わないと言われたら、治す方に集中したようだ。

明日まで持つかはわからない。

炭治郎はまた善逸に追い掛けられて鉄拳制裁で沈めていた。善逸はタンコブだらけになつて気絶している。

「そう言えば、炭治郎君も善逸君もタンコブだらけだったけどどうしたの?」

「実は、善逸が襲いかかつてそれで何を言っても聞かないから頭突きで沈めようとしたら、全然効かなくて効くまでやったら、俺もフラフラになつて一緒に倒れたんです」

「善逸君、あんなに炭治郎君の頭突きを怖がってたのに恐ろしい位に丈夫だね」

「俺の頭突きにここまで耐えたのは善逸が初めてです」

明悟は単純な丈夫さなら3人の中で一番なのではと思ひながら、沈んでる善逸を見ていた。

そんな時に襖が開く。

老婆がいた。

「鬼狩りの皆様、昼食の御用意が出来ました」

老婆の言葉に飛び出した伊之助。

明悟はその様子に冷や汗を欠く。

「炭治郎君申し訳ないけど、伊之助君を止めてくれないかな?」

「どうしてですか?」

「多分、善逸君の御飯を食べるかも」

炭治郎は未だに失神してる善逸を見て、伊之助を止めに行った。

明悟は善逸を運び、水場に行つて水で顔を濡らして起こす。

「え?何?え?本当に水を被せたの!?!」

「早くしないと伊之助君に昼御飯を食べられるよ」

「なああああ!!!俺の昼御飯!!」

善逸は昼御飯目掛けて描けていった。

明悟は元気だなあと思ひながら、自分も向かつて行くとあれ?善逸君、寝てたのに状

況を理解してる？と不思議がったが早く昼御飯を食べたかったのでこの事はすぐに忘れた。



それから、1ヶ月半の間、彼らは寢食を共にして無事に完治した。

唯一何も怪我をしなかつた明悟は流石に休みが長すぎると思つて1週間位して輝哉に直接連絡をしたら、本人（代筆あまね）から炭治郎の監視を言い渡された。

榮だし、炭治郎君は大真面目で禰豆子も優しくて穏やかだったので了承した。

その間、明悟は自身の読書好きを活かして炭治郎や善逸や伊之助には朗読をした。伊之助は最初は聞く耳持たなかつたが、選んだ推理小説の朗読が気になったのか聞くようになった。次に選んだのは演劇「ハムレット」だった（大正時代には既に翻訳されてます）

炭治郎は復讐の為とは言え、自分を慕ってくれるオフィーリアを無下に扱つたことに

憤慨して、善逸は慕ってくれるオフィーリアがいることにとつともなく嫉妬して、伊之助はさつさと復讐をしないハムレットにイライラしていた。

(あれ?この戯曲、結構良い話なのに何故?)

明悟は歴史的な名作がこうも受けが悪いことに悩むが人それぞれとして次の話で挽回した。

それは父親の為に頑張つてた一人の江戸を追われた男が素流と言う武道の道場の師範に拾われて師範の体の弱い一人娘と恋をするが仲の悪かった剣道道場の奴等が毒を井戸に投げ込んで師範と娘を毒殺し、怒り狂つた男が剣道道場の人間を惨殺して何処かへ消えてしまう話だ。

元々は江戸時代に実際に会つた事件として記録されたが、余りにも荒唐無稽過ぎて明治に入つてから作り話になつたのが書籍化された話だ。

炭治郎はその男の辛い顛末に涙し、善逸も不幸が異様に続く物語に胸が苦しくなり、伊之助も復讐を果たしたとして何もかも無くなつた男に言葉に出来ない感情を抱いていた。

明悟もこの主人公は好きである。

何処までも不器用で愚直な姿に共感し、憐れとしか言えない顛末に同情し、何も無くなつた事に涙した。

明悟には何故かは分からないがこの物語が嘘ではなく本当に出会った事だと思えた。江戸時代の話なので本当であっても男は「人間ならば」もう既に死んでいない。願わくはいつか会いたいと思った。

こんな風に彼らの一時の日常は過ぎていった。

## 蜘蛛の山

明悟と3人は傷も完全に癒えて、次の任務に向かう準備をしていた。

「次の場所は北北東 北北東 那多蜘蛛山に4人で行け！」

鳥の伝令に溜め息を吐く明悟。

「那多蜘蛛山か・・・」

「知ってるんですか？」

「少し前から鬼の棲みかとして噂が出てた山なんだ」

「それがどうかしたのかよ？」

「もう何名かの隊士は送られてる筈なのに、まだ任務をするなんてって思ってたね」

明悟の言葉に3人は異なる反応をする。

炭治郎は決心を固めて、善逸はビビリ、伊之助は興奮していた。

「急ぐ。嫌な予感がする」

明悟の言葉に急いで準備をする3人は藤の家を出た。

藤の家の前で切り火をしてもらう。伊之助が何の事か分からずに怒ったり、老婆の言葉に疑問を持ち続けながらも4人は那多蜘蛛山に走りながら向かった。



日も沈み、完全に夜になってしまつて那多蜘蛛山前に来た4人。

「待つてくれ！ちよつと待つてくれないか!？」

善逸の声に3人が振り向く。

彼は怯えまくつて膝を抱えていた。

「怖いんだ！目的地が近づいてきてとても怖いんだ！」

「善逸君、ここまで来たんだから」

「何、そのちよつとした散歩みたいに言つてんだよ！状況が違うわ！」

明悟の諭すような言葉も効果がない。

それぞれがわあわあ言つてると、後ろから走つてくる音が聞こえる。

明悟、伊之助、炭治郎が振り返り、善逸は座りながら見る。

走つてきたのは鬼殺隊士だった。

隊士は日輪刀を持ちながら、倒れる。

「助けて……」

明悟が駆け寄ろうとした瞬間、隊士の体がまるで糸か何かで引つ張られるように宙に浮かび、山の中へ悲鳴を上げながら消えていった。

全員がこの怪奇的な状況にかすか震える。

約1名は悲鳴をあげている。

「俺が行く」

「俺が先に行く。腹が鳴るぜ！」

「腕だろ？」

「2人とも山に行くの？」

明悟の言葉に炭治郎と伊之助が明悟を見る。

「はい!!」

「当たり前だろうが!!」

決意充分で言う2人。

明悟は深呼吸して2人を見る。

「わかった。けど絶対に死ぬな!!」

「はい!!」

「おう!!」

明悟は善逸を見ると善逸は明悟に対して首を横に振る。



「善逸君は無理か……ならこの山から出た俺達以外の隊士の保護をして、それなら出来るだろ？」

善逸はビビりながらも、山に入らなくて良いと言う明悟の言葉に素直に従うことにした。

明悟、炭治郎、伊之助の3人は山に全力疾走で走っていく。

善逸はその後ろ姿を見る。

まあ、結局邪心が清らかな恋心かの判断はしにくい。山に入ってしまったのだが……



3人が山に入るとそこはやたら目つたらに蜘蛛の糸だらけだった。

「なんだこれ？」

「蜘蛛の巣」

「しやらくせえ！」

伊之助が手を振って蜘蛛の巣を蹴散らす。

「炭治郎君、伊之助君、君達の呼吸の流派は？」

「水の呼吸です」

「獣の呼吸だ」

「獣の呼吸に居合い斬りはある?」

「居合いつて何だよ?」

「刀を抜くと同時に斬る事だよ」

居合いをしらない伊之助に炭治郎が説明する。

「んなもん、俺はやらねえ」

「なら、今すぐに刀を抜いといて、一瞬でも遅れたら死ぬよ」

明悟の言葉に炭治郎も伊之助も刀を抜く。

普段と変わらない言葉ではあるが、ただならぬ気配を感じたのか素直に抜いた。

「あっちにいる」

明悟はそう言つて静かに静かに走る。炭治郎や伊之助も後を着いていく。すると背を低くして汗を流してる隊士を見つける。

明悟は決して慌てさせぬようにその隊士に近づく。隊士は近づいた明悟に気づいたのか少し怯えながら後ろを振り向いて3人を確認する。

「応援に来た、甲の津上明悟と癸の竈門炭治郎、嘴平伊之助です」

「甲・・・柱じゃないのか・・・柱じゃないと意味がない!」

柱じゃない事に慌てる隊士の目の前で明悟は猫だましをする。突然の事に隊士は慌えて口数が早くなつてた口を止める。

「君の名前と階級と状況を教えてくれ。常に冷静な判断と状況整理をしないと死ぬぞ」

明悟の言葉に頭が少し冷やされたのか、隊士は深呼吸して向き合う。

「俺の階級は庚で村田って言います。鳥から指令が入つて10人で任務をする事になつて山に入つたら、暫くして突然隊士同士の斬り合いになつたんです。俺は……俺は……」  
怯える村田に明悟や炭治郎、伊之助は冷静に状況を把握しようとする。集中させる。すると突然、横からのただならぬ気配を明悟は感じると日輪刀を抜いて横に振るう。衝撃音が響き、何かが斬れる。

明悟がその何かを見ると、それは指だった。

「これは!？」

「久しぶりだな、アギト」

突然の声のした方に明悟、炭治郎、伊之助、村田は顔を向ける。そこには下弦の式の轆轤がいた。

「下弦の式……この山はお前の住み処か？」

「いや、今回もこの出会いはい全くの偶然だ……だが、私達がお前達を見逃す理由はない」  
轆轤の言葉に向き合つてた炭治郎と伊之助、村田は震える。前対峙していた明悟は

震えはしなかったが、冷や汗が出ていた。

「勝負!!」

伊之助が突っ込んでいく。

性格もあるが、震えたと言う事実を認められないようなそんな突っ込みだ。

「邪魔だ」

轆轤は血鬼術を使わずに裏拳を伊之助にぶつける。すると伊之助は吹き飛ばされて木にぶつかる。

「伊之助!!」

「炭治郎君！今は前だけ見ろ!!」

「血鬼術 指銃衝撃砲」

特大の弾丸が炭治郎目掛けて発射される。明悟は自分の日輪刀で炭治郎を守ろうとそれを斬るが完全には斬れず、しかも明悟の日輪刀は粉碎されて弾丸は炭治郎に当たる。

炭治郎も自分の日輪刀でガードしても衝撃が強かったのか吹き飛ばす。懐からかなりの数の短刀を溢しながら、明悟と村田は吹き飛ばされた炭治郎の元に行く。

「何だ？これは？」

轆轤が短刀を手に取る。暫く見た後、自分の腕に短刀を刺すと柄に轆轤の血が溜まっ

ていった。

「中々面白い物だな」

短刀を見ながら笑う轆轤。

明悟が轆轤を見ながら、炭治郎に聞く。

「炭治郎君・・・あれは何？」

「禰豆子を人間に戻すために鬼の血を集めるように作られた短刀です」

「は？鬼を人間に!?!お前何を言ってる・・・」

「村田君、その事は後で説明する!!前に集中しろ!」

轆轤を睨む明悟と戸惑いながらも刀を轆轤に向ける村田。炭治郎も立ち上がり、刀を構える。

「喰らえ」

轆轤は10本以上の短刀を投げる。

炭治郎と村田に目掛けて・・・超高速で飛んでくる短刀。しかも数が多くて全てを避ける事も落とす事も今の2人には出来ない。

明悟は2人の前に腕を出して短刀が彼らに当たらないようにする。その結果自分の腕に短刀が刺さり、かなりの血が吸われる。

「明悟さん!」

炭治郎が明悟に刺さった短刀を抜こうとするが、短刀は何故か分からないが糸で引つ張られたかのように轆轤の手に戻っていった。

「良いだろう。今すぐに出ていこう」

轆轤はそう言つて森の中に消えていった。

炭治郎や村田は追いかける事はせず、明悟の腕を手当てする。

「2人ともありがとう」

両腕に包帯を巻いて、明悟は手を握つたり、開いたりする。

腕は痛むし血はまだ出るが大量に出てる分けてもなければのたうち回る痛みでもない。明悟は粉碎された日輪刀を見て変身するか考える。

明悟がすぐに変身しない理由は無駄に使うことは釘に刺されてるだけではなく、変身した時の効果が意外に使えないからだ。アギトは太陽と同質の光を放つて変身する。鬼に対して確かな効果が焼け石に水程度であってもあるのだ。それを出来れば有効に使いたい為に今回はすぐに変身してないのだ。

「おい、お前！鬼を人間に戻すってどういう事だよ！」

村田が炭治郎に絡んだ（日輪刀は鞘に入れてる）

鬼を連れた隊士なんて違反通り越して異常としか言えないから当然だ。明悟とは違い、他の隊士は基本的に鬼を恨んでる隊士が多い。まあ善逸や伊之助みたいな隊士もい

るが、基本的には恨みを持つてる隊士だらけだ。寧ろ、今の炭治郎の周りが異常である。

「俺は、鬼になった妹を人間に戻す為に鬼殺隊に入ったんです！」

「お前はアホか!? そんなの認められる分けないだろ! 隊律違反も違反だぞ!!」

ヒートアップしてくる2人の間に入る明悟。

「2人とも今はこの山の鬼をどうやって倒すかを考えるのが先決だよ。その話は後日に回して」

「でもそんなの認められないでしょ!? 鬼は人を殺す怪物だ!」

信じられない村田。

「信じてください! 彌豆子は人を襲っていませんし、食べてません!!」

「信用できるか!!」

「あー!! もう!!」

明悟は2人にイラついて炭治郎に後ろを向かせて箱の扉を開けた。夜なので日の心配は要らない。

彌豆子は微睡んだ目で村田を見ると、手を振った。

村田は急いで斬ろうと日輪刀に手を掛けるが、疲れからか中々抜けないでいた。村田は命の危険を感じてビビるが彌豆子は襲ってこずに一向に手を振ったままだった。

村田はその姿に啞然して手を振り返した。すると彌豆子はもう一度寝始めた。

明悟はとりあえず静かになつたので箱の扉を閉めた。

「静かになつて良かった。彌豆子ちゃん、ありがとう。とりあえず、村田君もこの山を出るまでは信じて良いんじゃないかな？」

明悟の言葉に村田は頭を抱えるが確かに襲つてこなかつた事実と甲という先輩で上の階級の人間の言葉に出した答えは・・・

「分かりました。山を降りるまでは信じます。けど、絶対に柱やお館様が黙つてませんよ!!」

「大丈夫だよ。輝哉も認知はしてるし、俺も彌豆子ちゃんの件は報告してるから、知らないのは柱だけ」

「え？」

「なら、良いです」

村田はとりあえず輝哉が認知してる事実を信用して、黙つた。そして炭治郎は彌豆子の存在を報告してた明悟に意外な目を向ける。

「明悟さん、報告つて」

「俺が君と一緒に任務に着くことになつたのも多分、彌豆子ちゃん関係だからね。多分つてのは俺も詳しい事を烏から言われてなかつたから、んで彌豆子ちゃんと対面して1週間して手紙で聞いたら、炭治郎君の・・・まあ彌豆子ちゃんの監視つて言われたか



ら、1ヶ月間、手紙で報告してたよ。まあ禰豆子ちゃんが何の問題もなかったから途中から日記になっちゃったけど……ごめんね。炭治郎君に下手に言うといけない内容だったからね……失望した？」

炭治郎はその事に気落ちはしたが、明悟自身が禰豆子に対して何の恨みの感情も見せずにこの1ヶ月の間、優しく関係を深めてきてくれた事実を信用すると決めた。

寧ろ、監視もある意味当然っちゃ当然なのですんなり納得できた。

「いえ、明悟さんが悪い人では無いので、失望はしません！この1ヶ月間、明悟さんが禰豆子に優しくしてくれた事も感謝する事はあれ、恨みや失望する事はありません！」

「ありがとう。さて伊之助君と一緒にとりあえず山の中を進もう」

「はい!!」

3人は吹き飛ばされて少し目を回してた伊之助を起こして山の奥へと向かった。



明悟、炭治郎、伊之助、村田の4人は山の奥へと行つてると、気味の悪い虫の鳴き声のような独特な音が聞こえる。

「何の音だ？」

「まただ！またこの音が聞こえてきて気づいたら隊士同士が斬り合いになったんだ!!」  
周りを警戒する4人。

森影からまるで死んでるように見える傷だらけの隊士達がぞろぞろと出てくる。

隊士達は斬りかかり、明悟達は避ける。

「ヒヤツハー　こいつら皆バカだぜ　隊員同士でやり合うのはご法度だつて知らねえんだ！」

「いや違う。動きが可笑しい。何かに操られてる」

「よし、ならぶつた切つてやるぜ！」

「駄目だ！まだ生きてる人もいる！」

炭治郎の言葉に伊之助はイライラして、隊士をリアットで倒す。明悟も徒手空拳で倒して隊士の刀を奪い、背中に刀を振る。すると隊士は倒れる。明悟が斬つたのは糸だ。恐ろしく頑丈で見えにくい糸だ。

「皆、糸で操られてる。糸を斬れ！」

明悟の言葉に伊之助が隊士達を操つてた糸を全て斬る。

「お前より先に気付いてた」

「これで一安心・・・嘘だろ？」

倒れた隊士達が再び起き上がり、再び斬りに来る。

明悟達はそれを避ける。

「明悟さん！蜘蛛です。蜘蛛が操り糸を伝えています！」

明悟は炭治郎の言葉を聞き、下や自分の腕を見る。すると白い小さい蜘蛛が腕を這っていた。

明悟はベルトを出現させる。

「変身！！」

アギトに変身する明悟。

太陽と同質の光を放つので隊士達を操つた糸を蜘蛛事消滅させる。

隊士達は再び倒れ込む。

アギトになった事で変身前よりもより感覚が鋭敏になり、明悟はそのまま炭治郎達と離れて奥に進む。残された炭治郎達は何も知らない村田が不思議がっていたが、状況が状況なのですぐに倒れた隊士達の対処に追われた。

明悟が奥に進んでいるとまた隊士達が糸で操られて斬りかかってきた。

「お願い！殺して！でないとまた殺しちゃう！！」

1人の女隊士が隊士の生首を持って明悟に叫んだ。アギトになって人間の姿とは変わった明悟にそう言う事はかなりの錯乱状態にある。明悟は斬りかかってくる刀を避けて冷静に分析した。

「私達、こんなに強くなかった！あああ!!」

無理に動かされて人体の限界に近い動きをされて骨と筋肉が壊れる音が聞こえる。

「頼む。殺してくれ」

「骨が内蔵に刺さって・・・腕を動かされると激痛で耐えられない・・・」

明悟は光を手纏って糸を斬るがすぐに元通りになってしまい、また操られる。

明悟は両手を広げて動かなくなる。操られてる3人は明悟に斬りかかる。

するとベルトから光が溢れだして3人を光に包み込む。3人を操っていた糸は蜘蛛事完全に消えて3人は倒れ込む。

これは変身よりも更に光を放出する事に焦点を当てた業だ。どんなに速くてもどんなに厄介でもこの半径2メートルの光の中で鬼は生きられないし、血鬼術も持たない。しかし、これはかなりの体力を消耗して放たれる業。

「はあはあはあはあ・・・」

明悟は近くの木に持たれながら、息を整えてた。

「君達、大丈夫?」

「ありがとう・・・ごいす」

3人は体が自由になったと同時にそれまでの激痛と精神的苦痛により、女性隊士以外の2人は意識を失った。

しかし、2人とも確かに弱々しくではあるが息をしていた。

「君……名前は？」

「尾崎です。尾崎真魚……貴方は一体誰？」

「俺は……」

明悟が自分の名前を言おうとした瞬間、突然横から何かに攻撃されて吹き飛ぶ。

フラフラでも立ち上がる明悟が自分を攻撃したのを見るとそれは首がない鬼だった。全身、糸で操られて手は刃になっていた。

首なしに対して構える明悟。

攻撃を避けようとするも体が自由に動かずに当たる。それでもクリーンヒットにならないのは流石のアギトの力である。

近くには真魚を含めた瀕死の隊士が3人いる。逃げることも出来ない。

かなりのピンチである。

「明悟さん!!」

すると、炭治郎と伊之助がやってくる。

「炭治郎君、伊之助君、向こうの隊士達の処置は!？」

「村田さんがやってくれています!!」

「よっしやああああ!!! ってあいつ首がねえぞ! どうする! ねえもんは斬れねえぞ!!」

慌てる伊之助。明悟は倒れてる隊士の2人を担ぐ。

「2人とも申し訳ないけど、俺は彼らを連れて離脱させて貰うよ。これ以上は足手まといにしかないからね」

「はいー」

「おうーとつとと行け!!」

明悟はそのまま、担いで山を降りる。

唯一倒れてなかった真魚も一緒に降りる。



山を降りる2人。

真魚は肉体的にも精神的にもボロボロ。明悟に関しては疲労困憊の状況で2人抱えてる。

無駄な口を聞く体力も無く、降りていく。

途中で何か雷が落ちたような轟音が炭治郎達と別れてすぐ聞こえたが、2人とも気に

する事はなかった。

するとさつき別れた村田が見えてくる。1人だけだったがいた。

「良かった。助かった」

「そう言えば、名前を聞いてたね?・・・俺の名前は」

「あら、随分と友好的な鬼なんですね?」

何やらかなり胡散臭い言葉が聞こえてきて、明悟は声のした方を見る。

そこには蝶の髪飾りをした鬼殺隊最強戦力の9人の1人の胡蝶しのぶがいた。

「む、蟲柱様!」

「うわあ、来るの早いよ」

明悟は基本的に無我の境地に近い状況に変身するとなるアギトであるのにしのぶを見た瞬間にあからさまに嫌な顔をした。まあ顔は見えていない訳ではあるが・・・

しのぶは日輪刀を抜いて明悟を指す。

明悟は一先ず、抱えてる隊士を降ろした。

「さて、貴方は何者ですか?」

「そこ聞く?聞くなら、刀を下ろしてくださいよ」

「鬼に対して刀を向けるのは当然じゃないですか、仲良くしましょう」

「仲良くしようとしている人の行動には見えないよ」

「残念です」

無理もない。時代に明らかにあつていないハイカラでキテレツな見た目や上にある角、どうみても普通の人間ではない。

「見た目で判断しないでよ。おばちゃん」

「おばちゃん？」

明悟の失言にしのぶは怒りマークを真魚は恐怖の顔を明悟に向けていた。

「いやだって、異様に老けてるじゃん。40代のおばさんにしか見えないよ、おばちゃん」

「・・・私はまだ18です」

「そうなの!?俺より年下なの!?ごめんね。全くわからなかった。いやあ、人って見た目じゃないんだねやつぱり・・・美容に良い温泉でも教えようか?」

失言を繰り返しまくる明悟。

アギトの力で分かるんじゃない?と思う人間もいるかも知れないが、人の年齢までは分からない。ましてや基本的にあつたことがない人間の事など分からない。

んで、悪意もなくほぼ善意で言ってる明悟に「キレイなまだ花の10代の女性はいない」。

「んふふふ、どうやら仲良きは絶対に無理なようです」



「何で怒ってるの?」

「そりゃ怒るよ!!」

頭がはてな状態の明悟にツツコミを入れる真魚。

キレてるしのぶを止められる人間はいなかった。

その後は想像通りである。



その後、約10分以上に渡る死闘を繰り広げる羽目になった明悟としのぶ。

しのぶの超高速の突きをフレイムフォームの超感覚でへろへろの状態でありながら、ギリギリ避けまくっていた。

しかし、いくらアギトの力とは言え、へろへろの状態。やがて力尽きて仰向けに倒れてしまう。しのぶは躊躇なく明悟の上に乗れ、顔面に日輪刀を刺そうとするが明悟は日

輪刀を刺さる寸前で止める。

一進一退の攻防を続ける2人。

それを止めたのは烏だった。

「伝令、伝令！竈門炭治郎、竈門禰豆子、津上明悟の3名を拘束して至急本部に連れて帰るべし！！」

鎧烏からの伝令が山に響く。

烏が炭治郎の外見を言うと明悟の事を言った。

「津上明悟！黄褐色の南蛮のコート。黒と金色の異形に変身する！」

「黒と金色の異形……」

「あ、俺の名前は津上明悟」

しのぶはとりあえず退いた。

明悟は立ち上がり、変身を解く。

何はともあれ、こうして蜘蛛の山での一夜が終わった。

# もう1人のライダー編    d e e p    b r e a t h

## 柱会議

那多蜘蛛山での騒動が終わり、明悟は炭治郎や禰豆子と共に拘束されて本部に行く羽目になった。

今、明悟はお館様・・・輝哉の家の庭にいる。しのぶだけでなく、全ての柱が集結しつつある状況下であるのに話の中心である明悟と炭治郎は寝ていた。

いや、炭治郎は激戦終わりの状態で気絶させられて拘束されて連れてこられたので秘密には寝てるとは違う。しかし、明悟に関しては完全に自分の意思で寝ていた。疲労困憊であったし、起きて待つてるのも退屈だったので庭に来た瞬間、寝た。

炭治郎は後方支援担当の隠の1人に叩き起こされているが明悟は寝たままだった。「おい!!いい加減に起きろ!!柱の御前だぞ!!」

隠が顔面に拳骨をお見舞いする。明悟は流石に目を眠たそうにして開ける。

炎柱    煉獄杏寿郎

音柱    宇髄天元

恋柱    甘露寺蜜璃

霞柱 時透無一郎

岩柱 悲鳴嶼行冥

蟲柱 胡蝶しのぶ

そして離れた位置に水柱の富岡義勇と近くの木の上に蛇柱の伊黒小芭内がいた。

9人いる柱なのに約1名いないが明悟は気にしなかった。

「あ、どうも俺の名前は津上明悟です。それじゃお休み」

またぐうぐうと寝始める明悟。凶太い神経に柱達はずつこけてた。

「おい、お前!!何地味に二度寝してやがる!!起きろ!!」

天元の怒鳴り声に明悟はしかめっ面で天元を見る。

「うるさいなあ。そんなに怒っていると幸せが逃げるよ」

「お前、バカなのか?これから裁判なのに勝手に緊張感の欠片もないな」

「昨日の今日だから眠くて眠くて、寝させて」

「よもやよもや、こんな事態なのに何とも凶太い神経だな」

「ああ、自分の置かされてる状況が理解できないのだ。憐れ・・・」

「そのまま、永遠に起きなければ良いのに」

柱の面々が色々と言う。

約1名は笑顔で恨み節である。

明悟は眠たそうな顔をして柱を見る。

「明悟さん」

「ん？炭治郎君も寝た方が良いよ、疲れが取れるから」

「いえ、あの眠れる状況じゃないんですけど」

「そう？まあ良いや。お館様が来たら起こして」

「いや、寝るな!!」

隠と天元がまだ寝ようとする明悟にツツコむ。

「もー、どうせお館様が来ないと何も話せないじゃん」

「そんな事はない！隊律違反の隊士ならば鬼もろとも斬首する！勿論、君もだ！」

「いや、勝手に斬首させないために裁判になつてるのに何故に勝手に斬るの？後、俺：

わざわざ日の出てる所で寝てるのに何で斬られる事になつてんの？」

「わけのわからない異形……鬼と一緒にではないのか？人を襲う前に斬るのは当たり前だ。

そんな事より、富岡はどうするのかね？」

木の上にいる小芭内か義勇を指差す。

「胡蝶めの話によると隊律違反は富岡も一緒だろ？拘束をしてない様に頭痛がするのだから？何とか言ったらどうだ富岡？」

義勇は聞かれるが一人離れた所において何の返事もしない。

「まあ、大人しく着いてきてくれましたし、処罰は後で考えましょう。それよりも竈門炭治郎君、貴方は何故鬼殺隊でありながら、鬼を連れているのですか？」

「聞くまでもねえ」

自分の背負つてゐる巨大な二本の日輪刀に手をかける天元。

「いや、そこは聞いて上げてよ」

「津上明悟さん、貴方は後です。黙つてくれませんか？」

「いやだつて、お館様の命令で1ヶ月も一緒にいたんだよ？」

その場にいた柱全員が明悟を見る。

その中で天元が目を細めて明悟を睨む。

「派手に嘘つくんじゃないやねえ」

「地味に本当なだけだなあ。だったら、証拠に俺の懐に入つてゐる手紙でのやり取りを

見なよ。全部あるから」

炭治郎を抑えてゐる隠が明悟の懐に手をつ込み、手紙を出して、天元に渡す。

それを見る天元と他の柱の面々も除き見る。

ぶるぶると天元の腕が震える。

「ただの日記の感想じゃねえか!!!」

「でも奥方の字だよ」

「宇髓さん、確かにこれはあまね様の字です」

「でしたら、お館様が来るまで待つてた方が良いのでは？」

蜜璃の言葉に柱全員、黙るしかなかった。

色々と来る前にやりたいのは山々であったが、こんな証拠を提示されると出来なかった。

「なら、来るまで暇だね。しりとりでもする？」

「するか！」

「栗鼠」

「勝手にやるな！・・・西瓜」

「やってるじゃん。蛙」

「うるせえ！留守」

「大声でうるさいのはそっちだつて、スルメ」

「派手に挙げ足を取るんじゃねえ、メダカ」

「しりとりをするのか、喧嘩をするのかどっちかはつきりして下さい。鬱陶しいです」

「君も入る？」

「入りません」

「んじゃ、力からね」

「勝手に入れないで下さい」

「い、か・・・」

「宇髓さん？」

ボケてるのか素なのか・・・多分ボケてるとは思いますが、勝手に続ける天元にしのぶはコメカミに血管を浮かばせる。天元としては何とも微妙な雰囲気になったので、場をどうにかしようと思って乗ったのだが、明悟は普通にそんな事は全く考えずに暇だからやっていた。

とんでもなく凶太い神経である。

「おいおい、何だが面白そうな事になってるなあ」

1人の男が禰豆子が入ってる箱を担いでやって来た。

残りの柱の1人、不死川実弥である。

「そいつらか？ 鬼を連れたバカ隊士と異形になるって噂の隊士は」

「それよりも禰豆子ちゃんが入ってる箱。どうするつもり？」

「不死川さん、勝手な事をしないで下さい」

「鬼殺隊が鬼に対してやることは1つだろうがよ！」

実弥は自分の日輪刀を抜いて箱の中に入ってる禰豆子を刺そうとする。

「禰豆子!!」



しかし、拘束を引きちぎった明悟が実弥の手を止めて禰豆子に刺さらないギリギリの所で止める。

「いやいやいや、だから勝手にやらない為の裁判だつて言つてんじやん」

明悟は実弥を蹴つて箱を奪う。

「何すんだ。てめえ」

「柱を蹴つただけだけど？」

「鬼を守るつて事はそれなりの処罰は覚悟してんだらうなあ？」

「それは覚悟してるけど覚悟する価値があるんでね」

「良い度胸だな」

「あー、俺よりも彼に注意した方が良いよ」

「あ？」

イライラしてる実弥に炭治郎が拘束されたまま実弥に頭突きをする。

「明悟さんが止めてなかったらどうなつてた!? 善良な鬼と悪鬼の区別がつかないなら柱なんて辞めてしまえ！」

「てめえら、ぶつ殺してやる」

一触即発の状況になり、尚且つ他の柱達も明悟達に対して何時でも攻撃出来る状態になる。

明悟も炭治郎と禰豆子を守ろうと構えるが、戦闘にはならなかった。「お館様のお成りです」

5つ子の上の姉妹のひなきとにちに補佐をやってもらいながら、無惨の呪いによって日に日に体が弱っていく盲目のそして明悟にとつては義兄弟と言つても過言ではない産屋敷輝哉が現れる。

「よく来たね」

優しい優しい一言。

その一言に柱の全員が片膝をつける。

炭治郎は実弥に無理やり上から押さえつけられて、明悟は禰豆子の箱を持ったまま、屋敷の縁側に座る。

その態度に柱全員が明悟を捕らえようとしたが、

「おはよう皆、今日はとても良い天気だね」

「良い天気の上にひよつとしたら朗報もあるかも知れないよ」

「明悟も元気そうだね」

「元気だけど、輝哉の体が心配だよ」

「安心して良いよ。今日はまだ良い調子なんだ」

「良かった」

何気ない会話だが柱達はそのあまりにも親しく話してる2人を見て固まる。

「お館様、横から口を挟んで申し訳ありませんがその男は一体何者ですか？」

実弥が歯をギシギシ鳴らして明悟を睨みながら、輝哉に聞く。

「彼の名前は津上明悟。私の幼馴染で親友だよ」

輝哉からの言葉に全員がギョツとした目を明悟に向ける。

「そんなに見ないで照れるなあ」

「こんな無作法なのに」

「こんなアホなのに」

「こんな失礼な人なのに」

「こんな気の抜けてそうな人なのに」

「こんなにも憐れなのに」

「わけのわからない力を使う奴なのに」

「鬼を守ってるふぎけた奴なのに」

9人の柱中、7人の柱にボロクソに言われる明悟。

それでも笑ってられるのは明悟の凶太い神経故だろう。

「酷い言われよう。ひなちゃんもそう思わない？」

明悟が輝哉の補佐をしてるひなきに聞く。

「明悟叔父様の良さは一目では分かりませんから」

「相変わらず大人びてるね」

「お父様の娘ですから」

あまり変化なく言うが、今の一言に関しては半分どやって言っていた。赤ん坊の時から知ってる明悟にはわかった。

「凄い自信。あつ、裁判中だった炭治郎君を容認してた事を説明して上げて」

「そうだね。皆、驚かせてすまなかつた。炭治郎と禰豆子の事は私が容認してた。皆にも認めて欲しいと思ってる」

輝哉の言葉に約2名の柱以外は沈黙と反対の意を取った。さっきまで禰豆子を殺そうと躍起になつてた実弥に至つては、

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊。竈門富岡津上の3名の処罰を願います」

「まあ、普通の反応だよね」

明悟が柱の反応を見ながら納得する。

「では手紙を・・・」

炭治郎の育手の元柱である鱗滝からの手紙をにちかが読む。その内容は禰豆子が鬼になつた事による飢餓状態でありながら2年間、人を一切襲わなかつた事としても人を襲つた場合は鱗滝と義勇の2人が切腹すると言う内容だつた。

炭治郎は禰豆子に2人の人間が文字通り命を掛けてくれてる事に涙した。

「その切腹、俺も掛ける。1ヶ月の長い付き合いなんだ。禰豆子ちゃんに俺も命を掛ける」

「明悟さん」

「大丈夫」

炭治郎は涙声になりながら明悟を見る。明悟は優しい顔を向ける。

「切腹するから何だと言うのだ！死にたいなら勝手に死に腐れよ！何の保証にもなりません！」

「不死川の言うとおりです！人を食い殺せば取り返しがつかない。殺された人は戻らない！」

明悟はこの状況を見ながら、頭も心もとてつもなく冷静だった。これに関しては信じてると言ってる方がおかしい。柱の全員が鬼がいることでここに居ることになった人間が多い。負の感情と正の感情の両方がひしめくこの場で明悟は負の感情が多いなどただ単純に思い、不味いと心の底から感じた。

「確かに禰豆子が人を襲わない証明は出来ない。けど禰豆子が人を襲う証明もまた出来ない。2年間も人を襲わなかった事実と4人の人間が命を掛ける状況で1人はここ最近で1ヶ月も一緒に居たんだ。否定する方もそれ以上のものを差し出さないとはいけ

ない。皆にその意思はあるかな？」

輝哉の言葉に沈黙が広がる。

4名の命と襲わなかった事実には匹敵する程の禰豆子が人を必ず襲う証拠を急に呼ばれたこの会議で提示できるなんて早々ない。

「それにこの炭治郎は無惨と遭遇している」

その一言に柱は炭治郎から無惨の情報を得ようとかかなり聞いていた。明悟は黙って炭治郎を見ていた。

「しっ」

輝哉の鶴の一言で再び静かになる。

「無惨は炭治郎に向けて追っ手を放ってるんだよ。その目的は単なる口封じかも知れないが折角見せたの無惨のしっぽを逃したくはない。恐らく禰豆子には無惨にとって予想外の事が起こってる。分かってくれるかな」

柱は今度こそ完全に黙った。折角鬼殺隊の悲願でもある無惨打倒の手懸かりが鬼である禰豆子ならば今度こそ自分達に殺せるだけの証拠はなかった。

「分かりませんお館様。人間なら生かしてもいいが鬼は駄目です。これまで俺達、鬼殺隊がどんな思いで戦い散っていったか、鬼になった自分の身内を殺した隊士も大勢います。承知できない」

「実弥はそう言うのと立ち上がって自分の日輪刀で腕を切る。血がドバドバと地面に落ちる。」

「お館様、証明しますよ。鬼と言う物の醜さを」

実弥は箱を持つてる明悟に突進する。

明悟は突進してくる実弥を背負い投げして屋敷の中に放り込み、日の当たらない所に箱を持つて来て扉を開ける。

「明悟さん!?!」

「襲うと思うなら証明してみろ。但し、これで無理なら輝哉の言葉を承知しろ」

「良いぜ」

実弥が血まみれの腕を突き出す。扉を開けられてダイレクトに血の臭いを感じる禰豆子は必死に頭を抑えながら耐えようとしている。

炭治郎は禰豆子を助けようとして動こうとするが小芭内に抑えられて動けなかったが強引に腕の拘束を引きちぎり、小芭内の拘束を破る。小芭内も更にしようとしたが富岡に腕を押さえられた。

禰豆子はやがて箱の中から出る。

そして実弥の目の前で思いつき顔を背けた。

やられた実弥は禰豆子の行動に思いつきあぜんとなる。

「明悟は禰豆子の理性の強さにただ感動していた。明悟にとつても禰豆子がこれに耐えられなければ誰も納得しないだろうと思つて下手にこじれる前にさせたが出来るか出来ないかは賭けだった。そして実際に人の血を見て嗅いでも襲わない禰豆子の強さに感動していた。」

「どうしたのかな？」

「鬼の女の子がそっぽ向きました」

「血まみれの不死川さんの腕を見ても襲いませんでした」

ひなきとにちかに言われて余計に苛立ったのか舌打ちする実弥。

明悟は禰豆子を手招きして箱の中に戻つてもらう。

「ではこれで禰豆子が人を襲わない証明が出来たね。炭治郎、それでも禰豆子を快く思わない者もいるだろう。証明しなければいけない。炭治郎と禰豆子が鬼殺隊で役に立てると言う事を」

「はいー」

「十二鬼月を倒しておいでそしたら皆に認められる。炭治郎の言葉の重みが変わつてくる」

「はい！俺は・・・俺と禰豆子は鬼舞辻無惨を倒します！俺と禰豆子が必ず悲しみの連鎖を断ち切る刃を振るう！」



炭治郎の真つ直ぐな言葉。

しかし、十二鬼月を倒すよりも更に何段も飛び越えた言葉には失笑が出てる。

「今の炭治郎には出来ないから、まずは十二鬼月の1人を倒そうね」

「・・・はい／＼／」

顔を赤くして頭を下げる炭治郎。

明悟は親戚の子供を見るような感じで微笑みながら見ていた。

「柱になれば尊敬され優遇される。炭治郎も口の聞き方には気を付けるように」

「は、はい」

「それと実弥に小芭内、あまり下の子に意地悪をしない事」

「〔御意〕」

実弥も小芭内も流石に当主からの言葉に素直に従うが凄く不服そうである。

「炭治郎の話はこれで終わり。下がっていいよ」

「でしたら、竈門君は私の屋敷でお預かりしましょう」

しのぶの一言に炭治郎は固まる。

手を叩くしのぶ。

「はい、連れていってください」

すると2人の隠がやってくる。明悟は女性の隠に箱を渡して先程実弥が日輪刀で穴

を開けてしまった所は持ってた手拭いを穴に被せて禰豆子には申し訳ないが縄で括った。これで禰豆子が日の光を浴びてアウトではコントにすらならない。

隠におぶられながら、しのぶの屋敷の蝶屋敷に向かう。

「炭治郎君、俺も後で向かうからね!!」

炭治郎が何か返事をするが隠の足が速くてすぐに見えなくなっていた。

「貴方には死んでも敷居を跨がせません」

しのぶからの優しい言葉に固まる明悟。どうやら昨夜の恨みはまだまだ残ってるよ  
うだ。

「そこを何とかお願い」

「嫌です」

「明悟、また余計な一言を言ってしまったね」

輝哉の言葉にビクンと体を震わす明悟。

明悟は輝哉の顔を見ると昔からの付き合いゆえに怒ってるのがわかった。いつもの優しい声に優しい態度なのは変わっていないが怒ってるのがわかった。

「明悟もお見合いをすれば変わってくれるのかな?」

「え?またその話?」

「私は明悟に幸せになって欲しいからね。それに嫁さんを貰えば少しはその性格も良く

なると思つてね」

「おい、前者はただの建前で後者が本音だろ」

「何の事かな？」

「俺は結婚しない。恋愛もしない」

「確かに明悟の性格だと恋愛はキツイからね」

「乏してるの？褒めてるの？」

「どつちだろうね」

輝哉の言葉に明悟は頭を抑える。昔、大喧嘩して仲直りしてから輝哉も遠慮が一切無くなつたのか容赦なく言うようになり、口喧嘩では勝てた事が一回もない。

「次は明悟についての話だね」

「あれ？まだ続いてたの？」

輝哉のマイペースな進みかたに困惑する明悟。明悟は柱達を見ると何名かの柱は明悟を思いつきり睨んでいた。

「お館様、津上が何故異形の姿になるのはご存知なのですか？」

「明悟が真つ先に私とあまねに教えてくれたからね。それで私が秘密にして貰つた。混乱するといけないからね。本当はもつと後の方で教えるつもりだったけど、しのぶと交戦してるつて言われて急遽この場で話すことにしたんだ。大丈夫、明悟は絶対に人は襲



## 光柱 津上明悟

明悟はほとほと困っていた。

「ここ最近ではかなり珍しいくらいに困っていた。下弦の式と遭遇した時よりもめんどくさい状況になった。

「では、津上明悟。掛かってきなさい」

岩柱の行冥が自分の武器の鎖斧を持って鉄球をブンブンブン振り回してる。あまりの力強さと速度に少しその鉄球に向かって風が引っ張られてる。

明悟はほとほと困った。

「少し前」

明悟は叫び終わると、耀哉に詰め寄っていた。

「耀哉、何言ってるの？」

「明悟の事も言ったし、そもそも明悟は柱としての条件の1つの鬼を50体以上倒す条

件を優に越えて、150体倒してるじゃないか。8年で」

「いや、だから柱なんてめんどくさいのやりたくないって言ってるじゃん」

「そうだね。だから今の柱達が居るんだけどね」

「あ、それを言ったらダメ！」

明悟が耀哉の口を抑えるが、時は既に遅く。

柱の全員が明悟に詰め寄っていた。

中でも一番長く柱をやってる行冥が凄い威圧感を放つ。

「それは一体どういう事でございませうか？」

明悟は耀哉から手を離れた。

「明悟はこう見えて8年も鬼殺隊で所属してるからね。前の柱達が引退すると柱になるように言ってたんだけど、めんどくさいってずっと言ってるね。それにアギトの力もあるからね」

「アギト？」

「明悟の異形の力だよ。夢の中でそう言われたんだって、確か黒い短髪の人からってそれで明悟の次に柱に相応しい人を柱にしてたんだ」

「お館様、それは何時から始めました？」

「行冥が柱になってすぐだよ。行冥も明悟も同じときに鬼殺隊に入ったからね。まあ明

悟は1ヶ月ぐらい遅れてだけど」

他の柱が一斉に明悟を見る。行冥は鬼殺隊の中でもかなりの古参であり、現柱の中では最古参で最年長。そんな行冥と明悟がまさかの同期とは最低でも8年以上は所属してゐる事になる。

「勿論、柱は9人と言う決まりがある。しかし、明悟の上げた実績はその決まりを凌駕しつつある。僕の代限定だけど明悟を10人目の柱として認めてくれないだろうか？」

「「「「「お断り致します」」」」」

無口な義勇と無一郎以外全員が明悟に柱と同等の立場を与えるのに反対した。

そりやそくだ。

行冥以降の柱が全員明悟がめんどくさがって放棄した立場のおこぼれと言われれば腹が立つ以外に選択肢はない。

因みに声明を出していない義勇と無一郎に関しては、無一郎はどうせ忘れるから良いやと思ひ、義勇に至っては内心自分の変わりに柱になって貰う気まんまんである。

まあ声を出して無いのでそれが皆に届くことは無いが・・・

「ダメかい？」

「お館様の命でも賛同できません。自ら柱としての役割を放棄し続けてきた者に責任ある立場の柱を名乗らせるなどもっての他です」

「耀哉……あの本当にさあ勘弁して、行冥さんの言うとおりだよ、これ以上の地位は要らないから」

「明悟も柱になればその性格も良くなると思うんだけどね」

「それが本音？俺の性格のせい？」

耀哉は目が全く見えない盲目の筈なのに明悟に顔を向ける。不気味に明悟と輝哉の目が合う。

「忘れもしないよ。明悟と再会して大喧嘩した後、明悟の遠慮が無くなって、ある日大工をしてて私も経験にとやつて鋸を持って木を切つてる時に鋸自体を壊した時の明悟の不器用つて悪気のない煽りは」

「いや、不器用だったじゃん。しかもムキになつて鋸を2本も折つた上に、血へど吐いたし」

「他にも冷奴の件についてもまた煽つたしね」

「いや、あれもムキになつた耀哉が悪い。しかも絹ごし豆腐取れなかつたじゃないか」

「いや、木綿豆腐の時に煽つた明悟だよ。それに12の時の羽子板も明悟が私の頭にわざと当てたからじゃないか」

「だから違つて、それにそれは中盤の1回で最後の方は耀哉の失敗が多かつたじゃないか、しかもその後やけ食いして腹壊してたじゃん。それにその前の恵方巻の時なんて



耀哉だけおにぎりになつたじゃないか」

「私はああいうのが好きなんだ」

「ただの不器用じゃないか、それに恵方巻に関しては耀哉の方からやろうつて言つたじゃん。てか話を反らすくせは相変わらずだな」

「明悟もその煽るくせは相変わらずだね。絹ごし豆腐を箸で取れないからなんだい？ 匙で掬えば良いだけだよ」

「お前がいい始めたんじゃないか」

互いに互いが捲し立てるように相手の欠点を言つていくが互いに遠慮が一切無いため、かなり強い口調で丁寧な言葉で話してる。

「お父様に明悟叔父様、申し訳ありませんが漫才をやつてる時ではございません」

ひなきが皆の代表として2人の口喧嘩を止める。

「柱の皆様、申し訳ありません。お父様と叔父様は1回喧嘩すると1刻ほど延々と喧嘩を続けて喧嘩別れしてしまうのです」

呆然と見てた柱達が再び意識を戻す。そりや人格者な耀哉と真正面から喧嘩できる人間など見たことがない。ついでに尊敬してる耀哉の不器用話も聞いたことがない。あまりのいつものギャップに柱全員が固まつた。

「では明悟に柱と同等の権限を与えるのに賛成の者は手を上げて欲しい」

「いや、手を上げる奴はいないだろ」  
すると手が上がった。

上げたのは水柱こと義勇だった。

その事に対して明悟は本気で頭を抱えた。何故にめんどくさいのを回避したいのにかも現柱の殆どが反対の意思を取ってるのに何故、接点も縁もない明悟を柱と同等の権限を与えようとしているのだこの水柱は？

「富岡さん・・・」

「富岡〜」

「それは派手にねえだろ」

しのぶと義勇が嫌いな小芭内と実弥に天元は義勇の行動に呆れ果てる。

「富岡さん、そんなんだから嫌われるんですよ」

「俺は嫌われてない」

「いや、義勇君。空気読もうよ。俺はそういうの向いてないんだって」

「では、私に1票入ったね。しかも現柱の義勇が言ってるんだ」

「たかが、1票じゃねえか」

「されど1票だよ」

「お館様、1票では納得いきません」

「では明悟が権限を得るのにどうすれば納得できる?」

「津上明悟が柱に相応しいと証明できれば納得します。ここで私と津上明悟の一騎討ちを望みます」

「え?」

時は戻り、こうして明悟と行冥の一騎打ちになったのである。

ブンブン振り回してる鉄球に明悟は本当にめんどくさそうな顔をした。明悟が柱になろうとしなかった理由は単純に会議云々がめんどくさいからとこの力の関係上他の隊士とそこまで親しくなれなかったからである。なれたのは炭治郎や善逸、伊之助の他に死んでしまった。彼女。ぐらいでそれ以外とは基本的に恨まれたり、憎まれ口を叩かれたりと仲良くはなれなかった。

そういう理由もあって断ってきたのに何故にこんなややこしい状況になったのか理解できなかった。

しかし、対面してる行冥もやる気満々で他の柱も集中して見てる。

明悟は覚悟を決めてベルトを出現させる。

「変身」

無茶苦茶にやる気の欠片もない変身の声を出して両側のスイッチを押してアギトになるが、流石に本能が優先されるアギトになると先程までとは売って変わって全身から

気迫が出て空気が張り摘める。

「先ほどとは違う、それがアギトと言う物か」

「ああ」

他の柱達も明悟の変身に声を出したり、特別に驚くことは無いが内心驚いてる人間が多かった。とある派手好きは顔には出てないが純粹に良いなと思つてた。

明悟も構えて臨戦態勢に入る。

行冥は小手調べに明悟の顔面に向かって鉄球を放つ。明悟はそれを軽く避ける。

行冥は手斧も投げつける。

それすらも避けるが、すると鉄球が目の前に迫っていた。

「岩の呼吸 肆の型 流紋岩・速征」

鉄球と手斧の縦横無尽な攻撃。

明悟は両手に光を溜めて、鉄球・手斧・鎖全てを打ち返す。

しかし、それでもダメーじはあったのか、両手が痺れて手をぶらぶらさせる。

「威力、おかしくない?」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……」

お経をぶつぶつ言い始める行冥。

明悟は逆にどんだん息を殺していつて静かになっていく。

そして次に動いたのは明悟からだ。

飛び掛かって殴ろうとする。

「岩の呼吸 参の型 岩軀の膚」

行冥が鉄球を自分の周りのブンブン振り回して明悟の攻撃を相殺する。呼吸によって防御された明悟は弾かれて地面を転がる。

「岩の呼吸 弐の型 天面砕き」

鉄球が上から超高速で明悟の頭に向かって落ちてくる。明悟はそれをギリギリで何とか避ける。明悟、鉄球についてる鎖を引っ張って行冥を引き寄せようとする。しかし、行冥は少し動いただけで引き寄せられはしなかった。行冥も同じ事をやる。するとアギトに変身してる筈の明悟が行冥に引っ張られる。行冥はすかさずに自分の方に飛んでくる明悟に向かって手斧を投げる。飛んでくる手斧を右手で弾いてそのまま右手を行冥に向かって殴ろうとするが、行冥は鎖から手を離して明悟の右手を受け止めた。行冥は左手で持つてる鉄球を投げて鎖で明悟と自分の体を捲き込みながら鉄球が明悟の頭に入るようにする。当たる寸前でそれを防ぐが鎖が巻き付いて逃げられずしかも、行冥に右腕を極められてしまう。

凄い豪腕である。

明悟はストームフォームに変身して体からハルバードを出してそれをそのまま行冥

に当てる。行冥は突然の攻撃に予測出来ずに喰らい、そのまま明悟と離れて地面を転がる。

明悟は離れたと同時にストームフォームからフレイムフォームになる。理由は完全に力で行冥に負けたので力を上げて再びやるためだ。それに先ほどまでの闘いで行冥はアギトになった明悟と互角にやりあっていた速さを上げても対処出来ないとは思えない。だったら速さではなく力を上げて攻撃をある程度受けて尚且つ接近戦になる前提で挑んでそれを上回ればいい。

この事を明悟は僅か数秒で尚且つ本能で理解してやった。

行冥はすぐに立ち上がり、また鉄球をブンブン振り回す。この行為には意味があり、行冥は目が一切見えない盲目である。故にこうやって鉄球をブンブンと振り回し風を起こし、僅かな空気の擦れを感じる事でそれを探知機のように使い明悟の位置を把握しているのだ。そして明悟の変身すらも把握している。

ベルトから刀状の武器フレイムセイバーを取り出す。

互いに互いの隙を突こうと慎重に体を操作していく。

そして明悟が行冥に向かって走っていく。

「岩の呼吸 壺の型 蛇紋岩・双極」

鉄球がきりもみ回転して明悟に向かってくる。

明悟はセイバーでそれを弾き、行冥に詰め寄る。

セイバーの鍔のクロスホーンが開き、セイバーが紅くなるほど熱を発していき、やがて業火を出す。

行冥に向かってセイバーを振るうが手斧で防ぐ。

しかし、セイバーの温度は今や摂氏7000度の超高温。

手斧を融かしながら行冥に向かっていく。

たまらず、行冥は鉄球を操作して明悟に向かって飛ばしていく。

やがて手斧を全て焼き斬る直前、明悟はセイバーを止めた。行冥も明悟の行動を受けて咄嗟に鉄球を操り、明悟に当てなかった。

「なぜ止めた？」

「あくまでも実力を見る手合わせの筈、これ以上は無意味だ。どっちかが死ぬ。それにこっちは行冥さんの武器を斬り落とす直前。実力はわかった筈だ」

行冥は完全に斬れる直前の手斧を少し揺らして空気の擦れからくる形の変化を感じとる。

「成る程、確かにこれ以上は無意味。君に柱としての実力が有ることだけは認めよう」

行冥は武器を下ろして、明悟は変身を解く。

その様子に見ていた他の柱達は苦虫を噛み潰した表情が多い中、何名かは明悟の実力





を着る明悟。

「津上明悟、君を光柱に任命する」

「堅苦しいけど、もう諦めるよ」

深く息を吐きながら受け入れる明悟。

耀哉は笑顔になる。

（やっと、明悟が責任感と立場のある地位に入ってくれた。これで性格が直れば良いけど）

（覚えてろよ耀哉）

内心、性格を改める気が全く無い明悟であった。



それから、非常に長い会議がやっと終わった。他の柱は平然と聞き、会議に大真面目に参加してたが明悟は初めての会議故に何とかマジな態度で聞いていたが終盤になる

とイライラし始めてた。

理由は簡単で腹が減ってイライラしてきたのだ。

会議が長くなると平然と生活習慣を崩すのは日本人の悪いくせと内心口に出さずに真面目にやっていた。

鬼の活発化とそれに伴う被害状況、無惨の目的から今までの行動を元に考察。あーでもない、こーでもないとやってたら遅くなり、朝の7時に裁判が始まって、そのまま戦闘も含めて気がつけば夜の9時。腹が減る処ではなくて減りすぎて減ったと言う感覚が分からなくなるほどだ。

「ではこれにて柱合会議を終わる。皆、ご苦労様」

耀哉の一言で漸く会議が終わった。他の柱はそれぞれ耀哉に一言断りを入れてから立ち上がったて去ろうとするが、明悟はさっさと会議をやった部屋から出ていった。

「あの野郎」

「うむ、凄く失礼だな！よもやよもやだ」

実弥と杏寿郎は明悟に対して声を出す。

他の柱も良い印象はない。

但し、耀哉は違っていた。

「お館様、良いのですか？津上にあんな態度を取らせて」

「大丈夫。寧ろ安心したよ。何時もならとつくに晩御飯の方に行つてるからね。良かった、風邪は引いてないようだ」

「はい！明悟叔父様は至つて健康ですね」

「良かったです」

耀哉だけでなく、ひなきとにちかまで明悟を擁護する。と言うよりも普段がどんだけだと殆どの柱が心の底から思った。

そして、さつさと御飯を食べに行つて産屋敷家の居間で御飯を食べ始める明悟。

本日の御飯は椎茸と人参の炊き込みご飯にホウレン草の玉子とじ、切り干し大根、アジの開き、そして味噌汁である。

茶を飲んでから食べ始める明悟。

そして手をつけたのは切り干し大根である。シャキシャキともポリポリとも違う不思議な食感を楽しむ明悟。次はホウレン草の玉子とじ。熱々の優しい食感の玉子にホウレン草の玉子とは違った食感。塩で玉子の味を壊さずにホウレン草が旨くなつてる。アジの開き、アジにはクロアジとキアジがいる。クロアジは回遊する習性があるがキアジはそうじゃなくてあまり回遊しない。獲られ方も変わつていて、クロアジは網で一気に獲るが、キアジは釣り上げる。またクロアジはそのまま築地に出るがキアジは活けメして出す。

そうすると鮮度が保たれて旨い。  
キアジの開きはやつぱり旨い。

骨も最大限取ってくれてるのでがぶつと食べれる。何気に臭みになつてる皮も明悟は意外に好き者で確り食べる。

すると一緒に食べる炊き込みご飯も負けておらずに旨い。椎茸と人参のシンプルな炊き込みご飯だが、椎茸の香りにしつとりとした食感の人参、加えて味噌汁。この旨い炊き込みご飯やおかずと比べるとややパツとしながこの安定の味が逆におかずや炊き込みご飯をより特別に感じさせてくれる。

一心不乱に黙々と御飯を楽しみながら食べる明悟。

暫くして漸く御飯を食べ終わった。

満足である。

「食べ終わりましたか？」

突然、居間の襖が開かれる。居たのは耀哉の奥方のあまねだ。

「あまねちゃん、久しぶり」

「お久しぶりでございます。お館様からの伝言です。柱の屋敷はもう用意してあるけど久しぶりに会ったから今日は泊まって良いよとの事です」

「やつぱり、最初から俺を柱にする気だったな」

「半年前から決めていたようです」

明悟は耀哉の手際の良さにひよっとしてわざとしのぶとぶつけたのではと思ったが、いやもつと逃げ道が無いようにするかと思つてその考えを捨てた。

「お風呂の用意は出来ておりますのではこれで」

「ありがとうございます。あまねちゃん」

あまねは立ち止まる。

「その呼び方は変わらないんですね」

「ごめんね。慣れちゃつて」

あまねは溜め息を吐いて、居間を後にした。

明悟は耀哉と大喧嘩をした時からあまねの明悟に対する扱いはこんな物だ。

喧嘩の内容が、噛み砕いて言うなら、

『鬼の呪いとはいえ 生きる理由があつて羨ましい』

呪いで苦しんでる人間に言つて良い言葉ではない。耀哉からは手は出てこなかつたがあまねからは怒号と平手打ちが飛んできた。

仲直りして、鬼殺隊に明悟が入つて、耀哉とは仲直りしたが、あまねにはそんな事はなかつた。

しかし、出産の時にお腹が大きくなつてきてからはほぼ毎日のように屋敷に顔を出し

ていた。勿論、任務は完璧にこなしながら・・・そして無事に出産して明悟は耀哉と一緒に喜んだ。あまねも一緒に喜んだ。

暫くして明悟は過労で倒れた。

激務をやり過ぎた。

あまねは呆れた。

けど、どんなに苦しくても決して人には悟らせずに人と一緒に笑おうとした明悟には少しだけ嬉しくなり、完全に嫌いだった状態からマシにはなった。

以来、好きでも嫌いでもない友人の関係が続いてる。あまねの最近の悩みは子供達が明悟の影響を受けすぎて将来が心配になると言う物である。



風呂に入り、寝間着に着替えて布団を敷く明悟。

輝哉とあまねには風呂に上がった後に一言言っただけから布団を敷き始めたので問題はない。

後は寝るだけと思いきや、まだ襖が開かれる。

底には布団を持った女中さん達がいて、明悟の布団の周りに子供用の布団を5つ敷い

ていく。

「叔父様……今日も良いですか？」

「良(よ)い」

ひなきとにちかを筆頭に長男の輝利哉、妹達のかなたとくいなの5人の子供達。

全員が明悟に対しての印象が良い。生まれたときからの知り合いで、世話もよくしてくれた。輝利哉に至っては明悟は憧れの存在である。自由気ままで見栄っ張りじゃない素を常に出し続けられる人。

4歳の時に真面目に将来の事を耀哉やあまねに言われてそうだと弱齢ながらも覚悟はしていたが、毎日の教育は厳しかった。それが生きる為の愛情からであるのは知っていたが辛くないわけではなかった。そんな時に明悟に1回だけ泣き付いた時がある。

明悟は厳しく言うことも出来なければ優しく受け止める事も出来なかった。

けれど次の日、明悟は馬を借りてきた。

そしてその日の日中だけ、明悟と輝利哉は馬に乗ってあちこち走り回った。

吹き抜ける風を感じながら、自由を感じた。

明悟は何も言わないし、助言を出さなかったが毎日の教育で息詰まっていた輝利哉にこの1日の自由は何よりも嬉しかった。

そしてその晩、愛する耀哉とあまねにもしも無惨の呪いが解けたらと言われて、輝利

哉は明悟のようになりたいと言った。

そして、2人から本気の説教を味わった。

それでも輝利哉にとって明悟は憧れであり、優しくて強い兄ちゃんである。

それはひなき達も一緒である。

ひなきは誕生日にキネマと一緒に行って貰った。にちかは歌舞伎にあなたは能でないなは浅草の祭りに連れて行って貰った。

皆が産屋敷と言う家に生まれたことに後悔は微塵も無いが息が詰まらないわけではない。そんな時、明悟は必ず何処かへ連れて行ってきて楽しんでさせてくれた。

それだけでなく、明悟自身も色々と見聞が深く、子供達を楽しませるのに向いていたし、誕生日の最後の夜に子守唄を歌ってくれたが上手く、ぐっすり眠れた。

翌朝にはもう子供達が起きる前に任務に行っていた為に子供達はその事に気づくまで本気で屋敷中を探し回って任務と知るとちよつとだけ暗くなっていた。

それ以来、4年間。

子供達は明悟が必ず絶対に来る自分達の誕生日を楽しみにしていた。更には柱になれば柱合会議で必ず来る為に早く柱になることも心待ちにしていた。

子供達にとって今日は吉日である。

明悟は子供達と一緒に寝た。



「皆、俺は明日は早いからね」

「はい・・・でもお屋敷には行って良いですよね？」

「耀哉とあまねちゃんが許可してくれればね」

「私に行きたいです」

「私も」

「私も」

「私も」

「全く、またあまねちゃんに怒られるな」

「お母様、嫌いですか？」

「嫌いじゃないよ。けど俺は悪い見本だからね」

「そんな事無いです！明悟叔父様は好人です」

「そうです」

「そんな事はありません」

「全くです」

「お母様は何もわかってません」

明悟は嬉しく思いながらも子供達の頭を擦っていく。

「ありがとうね。でもお母様の気持ちも考えてあげないと」

明悟の言葉に子供達も静かになった。

確かに明悟は大好きだが、必死に愛情深く育ててくれたあまねも大好きだ。皆、深い愛情を思い出しながら、ゆっくり落ち着かせていく。

「叔父様、歌を歌って下さい」

「歌？ 良いよ」

「だったら、恋の歌を歌って欲しいです」

「恋？ ならこの曲かな？」

明悟はそう言って歌い始めた。優しくて儂い歌詞が美しい曲だった。

明悟は『ゴンドラの唄』を歌いながら、子供達もそれに聞き惚れながら、眠った。

## 光と恋と蛇

明悟は産屋敷で1泊すると朝の早くから屋敷を出た。もうすでに耀哉やあまねは起きていたから2人に挨拶とまた会う事だけを約束して出ようとしたら、寝間着状態の子供達からしがみつかれた。

どうやら、挨拶をやつてる時に全員起きたようだ。明悟は子供達にも挨拶と再会を約束してから出た。

隠に案内されて屋敷に行く手筈になってるので屋敷に来た隠と一緒に向かう。

案内されてついた屋敷は普通の一般家屋だった。

ちよつと安心した明悟である。

隠とはそこで別れると明悟は屋敷に入り、内装を見た。まだ誰も使われてない部屋。広くて大きくて暖かい。

そう思いながら台所に行くと、釜戸だけでなく、囲炉裏もあり、心が落ち着いた。

本当に良い家だ。

明悟は屋敷の事は後回しにして、昨日約束していた炭治郎に会いに行くことにした。居るのは蝶屋敷。

但し、明悟は家主から立ち入り禁止と言われてる。まあそんな決まりは破るのが明悟ではある。

スタコラサツサと歩いていく。途中でお詫びの品として羊羹を買って向かう。



蝶屋敷に着き、玄関を叩く。

「すみません！誰かいませんか？」

すると、ひなき達よりも小さい3人の女の子達が来る。

「どちら様ですか？」

「昨日から柱になった津上明悟って言います。先日、此方の主である蟲柱の胡蝶しのぶ様に対して失礼してしまいましたので謝罪に来ました。また昨日から厄介になってる竈門兄妹、我妻善逸、嘴平伊之助は私の友人ですなのでお見舞いに来ました」

そう言う3人の女の子達は奥へと行って暫くしたら、主のしのぶがやって来た。

「お引き取り下さい」

「本当に申し訳ありませんでした」

「大丈夫ですよ。もう怒ってはいませんから、ただ不快ですので消えてください」

「それを怒ってると言うのでは？」

「いえ、家にある何の価値もないゴミを見てる気分です」

「そこまで!？」

「ですので、死ん．．．帰って下さい」

「そこを何卒お許し下さい」

明悟はそのまま詫びの品として羊羹を出す。

「これは貰っておきますが帰って下さい」

しのぶの受け付けなさに明悟は本気でどうしよう?と悩む羽目になった。1つ言っておくが今回の事は明悟が完全に全て悪い。擁護なんてする方がアホである。

故に苦しむ羽目になっているのだ。

「イヤヤヤヤヤ!!」

奥の方から何やら汚い高音が聴こえてくる。

明悟はその声の主が善逸なのだと瞬時に理解した。

「まだ掛かってましたか．．．」

「善逸君か．．．俺が彼を何とかしたら許してくれますか？」

「．．．．．お手並み拝見とさせて貰います」

草履を脱いで上がる明悟。

そしてしのぶに案内されて元の善逸、炭治郎、伊之助がいる部屋に入った。

「いい加減にして下さい!! 飲まないと治りませんよ!!」

「嫌だ嫌だ!! 無茶苦茶苦いもん。こんな不味い物1日に五回も飲みたくないよ!」

明悟は頭に手を当てた叫んでたから過激な事をさせられてるのかと思いきや、薬が苦くて不味いから飲めないなんて・・・少しでも心配した自分が馬鹿らしくなった。

しかもこの屋敷の看護婦なのか? 似たような年の女の子に怒られてるなんて・・・さつき出迎えてくれた3人の女の子達までいるし・・・

「善逸君・・・」

「明悟さん! 助けてお願い!!」

明悟は善逸のベットまで行き、肩に手を当てる。

ミシミシミシミシと善逸の肩から骨がきしむ音が聴こえてくる。

「明悟さん! 止めて!! 俺、なんかした!?!」

「薬が苦くて不味いから叫ぶなんて・・・少しでも心配した俺が馬鹿だったよ」

「ヒイヒイヒイ!!」

「その薬、貸して!!」

「は、はい!!」

明悟は薬を持つてる女の子から薬を貰う。

そして、善逸の口を無理矢理開けて無理矢理薬を口の中に入れた。

突然の事に吐き出そうとするが明悟は口と鼻を抑えて意地でも外に出ないようにしたすると物の数秒で善逸は薬を飲み込んだ。

飲ませた明悟はやりきった爽やかな顔になり、飲まされた善逸はベットの上でぐったりしてた。

「ふう、良い仕事した」

「その場しのぎじゃないですか」

「でも飲ませたよ」

「……まあ、良いでしょう。この品と行動に免じて許しますが次はないと思ってください」

しのぶはそう言って羊羹を持ったまま去っていき、看護婦の子達も去っていく。「明悟さん、昨日はありがとうございます」

明悟は善逸の隣のベッドにいた炭治郎を見る。ボロボロで治ってないのにベッドの上で正座して頭を下げる炭治郎。

「良いよ、ただ他の柱の人達もそれぞれ事情があるから、そこも考えてあげてね」

「はい……けど彌豆子を傷つけかけたあの人は許しません」

「……まあ、そこは任務で一緒になる可能性もあるから、そう言った時に問題ないよう

にね」

「はいー!」

明悟は実弥と炭治郎の仲が心配になるが、そうそう柱と柱より下の隊士が関わること無いかと思つてそのままにした。

「伊之助君は大丈夫?」

炭治郎の隣で善逸の隣のベッドで静かに横になつてゐる伊之助に聞くが何も答えない。

「どうしたの?」

「なんか、落ち込んでるみたいで……」

「そつとしておくよ……治つたら一緒に天ぷらでも食べよう。俺の天ぷらも絶品だから」

「ウン」

潰れた喉で掠れ掠れに聞こえる伊之助の声はえらく静かだった。

「明悟さん、よくもやつてくれましたね」

善逸が明悟に恨み節で睨む。

明悟はそれに対してあつげらかんとした顔を向ける。

「いや、善逸君……情け無さすぎるよ」

「じゃあ、あんた飲んでみるよ!!無茶苦茶苦いんだぞ?!恐ろしいくらい不味いんだぞ!」

「いや、蝶屋敷じゃないけど昔、もっと凄いものを飲んだから……」



「えっ?」

「ちよつと鬼にやられて応急処置として恐ろしい物を飲まされたんだけど無茶苦茶不味くて苦い上に異臭がした。それに比べれば異臭がしただけマシだよ」

明悟の何やら達観した言い方に善逸は苦笑いした。

「それに善逸君、薬も飲めないようじゃ好きな子に呆れられて捨てられるかも、想像して(い)らん」

善逸の頭には薬飲むのに駄々をこねて禰豆子に呆れられて捨てられる未来を想像する。

まあ、禰豆子は善逸の彼女ではないが・・・善逸の顔が絶望に染まる。

「嫌だ、それだけは嫌だ」

「なら、文句言わずに飲まないと治ったら良いうなぎの店を紹介して挙げるから」

「本当!?!」

「良いよ、一見さんお断りの店だけど顔見知りになるまで奢って挙げるよ」

「マジで!?!飲む飲む!!頑張って飲みます!!」

善逸の現金な性格を上手く使って取り敢えず蝶屋敷の人に迷惑がかからないようにするも内心、次に大怪我や毒で入院したらどうやろうと思っていた。

「皆も生きてて良かったよ。それじゃ、俺は柱合会議があるからもう行くね」

「はい！ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「アリガト……」

全員がもう行く明悟に感謝の言葉を言う。

伊之助まで言ってくれたのに対して明悟は笑顔になった。そのまま病室を出ていく

明悟。柱合会議に向かおうと廊下に出る。

「あ、貴方は……」

明悟は声をした方を見る。そこにいたのは那多蜘蛛山で助けた真魚が松葉杖を付きながら立っていた。

「……真魚ちゃんだっけ？」

「はい、先日はありがとうございます！」

「無事とは言えない様だけど、生きてて良かったよ。回復出来そう？」

「はい！私だけじゃなくて他の2人も大丈夫らしいです」

「良かった……それじゃ、俺は行くね？柱合会議があるから」

「柱だったんですか？」

「昨日からね。光柱 津上明悟」

明悟はそう言うのと真魚の顔が青くなる。隊士にとって柱とは雲の上の存在であり、尊

敬すべき存在である。先ほど迄の口調が馴れ馴れしくなかったか不安になったのだ。

「こ、これからも宜しくお願いします。光柱様」

「止めて止めて、そう言うの苦手だからさ。明悟で良いよ」

「で、でも・・・他の隊士に示しが、」

「無理してやっても価値がないよ。それに俺は柱だろうが甲だろうが俺だ。肩書きで呼ばれるのは嫌だ」

真魚は明悟のその言葉を聞いて深呼吸する。

「これから宜しくお願いします。明悟さん」

その言葉に明悟は嬉しくなる。

「宜しくね」

明悟はこうして、蝶屋敷から出た。



明悟は蝶屋敷から出て耀哉の屋敷に向かう迄に和菓子屋に寄り道して、団子を結構、後はきんつばを買ってから向かった。

屋敷に着くと、かなたとくいなが出迎えてくれる。

「叔父様、お帰りなさいませ」

「柱合会議に間に合ってるよね？」

「はい、まだ大丈夫です」

「良かった。はいこれ」

明悟は団子が入った菓子折をくいなに渡す。

「明悟叔父様、これは？」

「柱合会議の合間で出してほしいんだ。ずっと重い雰囲気だと息が詰まっちゃってね。」

「わかりました」

「それと、これはくいなちゃん達の方だよ」

明悟はきんつばが入ってる袋を渡す。

「ありがとうございます！きんつばですか？」

「うん、5人で食べてね」

「はい!!」

明悟は屋敷に上がる。場所は知っているのでそのまま向かう。かなたとくいなは頬を緩ませながら、団子ときんつばを持って明悟とは違って台所に向かった。

扉を開けると中には既に耀哉とひなきとにちかがいた。

他の柱はいなかった。

「やっぱり、明悟が一番早かったか」

「お父様、ひなきやにちかの言った通りですね」

「そうだね。明悟は御飯が絡まないと基本的に早いからね。けどまだ会議まで判刻はあ  
るよ」

判刻・・・約1時間である。

明悟は会議の1時間前に着いたのだ。

「昨日はすぐに会議になってゆっくり話せなかったからね。それに待たせるのは好き  
じゃないんだ」

「明悟のは早すぎただけだね」

耀哉は無茶苦茶早く着いた明悟をからかう。ひなきとにちかも2人の様子を見て笑  
う。

本当に仲が良い2人だ。

互いに互いが遠慮なんて物を一切持つてない。そこには当主や部下の関係がない。  
耀哉に取って明悟の存在は自分を真摯に見てくれる貴重な存在である。勿論、柱達や隊  
士達が見てくれないわけではないが、遠慮を一切しない明悟は耀哉に取ってはありがた  
かった。耀哉に取って明悟は親友でもあるが義兄弟としての感覚が強かった。

「そう言えば、報告書に下弦の式と2回交戦したってあったが、どんな奴だった？」

明悟と耀哉の顔が一気に仕事の顔になる。

「遠距離型の血鬼術を使つて、自分の指を飛ばしてくる。かなりの威力だった。おまけにかなり冷静で逃げる為には日の光を浴びる事も辞さない程に肝が据わつてる」

「倒せそうかい？」

「何とか、ただ常に冷静で逃げるから2人がかりじゃないとキツイかも、1人が相手して1人が逃げ道を絶たないと逃げる」

「厄介な相手だね」

明悟は耀哉に話ながら下弦の式である轆轤を思い出していた。冷静で尚且つ肝が据わつてる。そう言う奴は倒しにくい。

次に会つた時に決着を付けられるか、明悟にはわからなかった。

そうこうしてる内に他の柱達も入ってくる。

何名かは明悟が一番乗りしてる現実には苦虫を潰したような顔付きになつたが一瞬で冷静になつて会議を始めた。

因みに他の柱達の明悟に対する印象は主に4つある。

蜜璃と義勇は柱として認めている。

無一郎は無関心を決め込んでいる。

天元は柱として一応認めているが印象は蜜璃と義勇の2人に比べたら悪い。

杏寿郎、しのぶ、小芭内、行冥、実弥は実力だけは認めている。

と言う状態である。

会議は順調に進んだ。最近の鬼の活動範囲から隊士達の資質の問題、育手育成環境の状態から鬼の調べる為に街中で出てる噂話の信憑性まで様々である。

そして昼になる。

「それじゃ、午前の会議は終わって昼食を挟んでから続きをしよう。一刻後にまたここで」

「―――「御意」―――」

明悟も今回はちゃんと礼儀をわきまえて挨拶する。まあ堅苦しくて嫌ではあるし、めんどくさいと心から思っているが、やらないと更にめんどくさくなると思ってやった。耀哉的には今さらやられても手遅れで逆に気持ち悪いと心の底から思っていた。

他の柱達と一緒に部屋から出ると明悟は昼飯をどうしようかと思った。このまま産屋敷で食べるのも悪くはないが、昨日の今日に続いてまた食べさせて貰うのは流石にただの居候と変わらないので御飯が不味くなる。外食をするかと決めた。

他の柱達もそれぞれ次の会議まで有効に時間を使うようである。

「あ、あの津上さんー」

「ん?」

明悟は呼ばれた方を見ると蜜璃がいた。

「もし宜しかったら、交流も兼ねて一緒に食事に行きませんか!」

「良いよ。蜜璃ちゃん」

(( (蜜璃ちゃん!?) ))

明悟の蜜璃ちゃん呼びに呼ばれた本人は勿論、他の柱も急な名前呼びに驚く。

何せ、まだまだの知り合いの上に昨日の柱騒動に関しては蜜璃ですら、反対の立場を取っていたのだ。それをこうも感じさせない言い方に蜜璃含めて他の柱達も茫然となる。

約1名の蛇を首に巻き付けてる人は明悟を目力で殺すかの勢いで殺気を放つが明悟にはまるで効果がなかった。

(急な名前呼び・・・素敵!)

呼ばれた本人は新鮮な感覚にときめいてた。蛇の殺気が更に強くなるが明悟には効果がない。

「それじゃ、俺はあんまりここら辺の食事処は知らないからオススメの店を教えてくださいな」

嘘である。ほんとは殆どの店の店主の顔を覚えられる程の常連である。それなのに



何故、店を紹介しないのかと言うと蜜璃がどれだけ食べるのか分からないし、どんな料理が好きなのか分からないから紹介出来ないのだ。それなら蜜璃の行き付けの店に行つて知つてから紹介した方が良いと思つての行動だつた。

「任せてください！良いお店を知つてますので！」

「宜しくね」

「甘露寺……俺も……」

「伊黒さん……（はっ！ここで伊黒さんと一緒に行つたら、伊黒さんと津上さんが喧嘩してしまうかも!?それはお店の人に迷惑だわ。伊黒さんがそんな事をしないのはわかつてるけど津上さんはどうかかわからないし……申し訳ないけど伊黒さんには今回は別で食べてもらいましょう……それが良いわ!!）……申し訳ないけど今回は別で……また一緒に食へに行きましよう！」

「そ……そうか……そうだよな……はは……」

フラれた小芭内の声のトーンの低さに他の柱は哀れと思ひ、当事者の蜜璃は全くその事に気付かなかつた。明悟は小芭内の様子から何となく察した。

「小芭内君も一緒に行こうよ。御飯は一緒に食べると美味しいし」

（（小芭内君!?!））

柱達が今度は絶対に自分達では呼ばない言い方に驚いてその語呂に少しだけ内心

笑った。

「フン・・・結構だ」

「良いよ。蜜璃ちゃんも交流だったら大勢の方が良いじゃん。他の皆も一緒に来ない？」

「遠慮する」

「断る」

「断る」

「申し訳ないが断らせて貰う！」

「断らせて貰います」

「遠慮します」

「ふざけんな！」

他の柱は一人も来ない事になった。後は小芭内だけである。

「・・・甘露寺、やっぱり一緒に行って良いか？」

「津上さんがそう仰るもの！伊黒さん、先程はごめんなさい！」

「かまわん」

素っ気ない言い方ではあるが、内心喜んでるのを明悟は理解していた。



蜜璃行き付けの定食屋に入る3人。

店員の気前の良い挨拶が聴こえて席に座る。

この定食屋も明悟の行き付けである。

「ここは値段の割に量が多くておまけに御飯のおかわりは自由な店である。

「いらつしや・・・何だ、兄ちゃんに嬢ちゃん達だったか」

「お久しぶりです」

「津上さん、ここのお店知ってたの？」

「まあね」

「なら、何故教えなかった？」

「2人が何を食べて何が好きか知らないから教えられないよ。御飯は美味しく食べるの

御飯」

「相変わらずだな、兄ちゃん。嬢ちゃん達は知ってるか知らねえが、この兄ちゃんはここら辺の飯屋の店主じゃ知らない人間は居ねえほどに良く食ってくれて今じゃこの近辺の店は全て常連だよ」

「そうなの？でも今までお会いした事が無いわ」

「時期がずれて会えなかっただけだよ」

「確かに俺達は忙しいからな・・・会える方が珍しい」

「まあ、何だ。3人ともいつもので良いか？」

「お願いします」

「ありがとうございます！」

「ありがとう」

店主はそう言つて厨房に入り、料理を作つて持つてくる。蜜璃が特大天井で小芭内はとろろ昆布、明悟は特量天ぷら定食である。

3人とも自分の料理を食べていく。

店主も他の客の所に行くとお話が始まった。

「小芭内君はとろろ昆布だけで大丈夫なの？」

「問題ない」

「津上さんもたくさん食べるのね！」

「蜜璃ちゃんもじゃない。いや、下手すると俺より量多いよ」

「はしたなくてすみません」

明悟の言葉に少し暗くなる蜜璃。

「そんな事は無いぞ甘露寺！何も気にする事じゃない」

「そうだよ、それにそんなに気持ち良く食べる人を見ると此方まで幸せになるよ」

2人の言葉に少しだけ恥ずかしくなったが、蜜璃は嬉しくなった。

「2人ともありがとう！」

昼食を終えてお茶を飲んで落ち着く3人。

それぞれ、雑談を続ける。

「へえ、じゃ蜜璃ちゃんは添い遂げたい人を探しに鬼殺隊に来たんだ！」

「はい！」

「好きな人は見つかった？」

明悟の質問に蜜璃ではなく小芭内がそわそわし出す。

「いえ、けどきつと見つけます！」

その言葉に隣の小芭内は意気消沈していた。明悟は援護しようかと思ったが下手に拗れる可能性が高いので止めた。

「津上さんは恋した事ありますか？」

「恋？1回だけあるよ」

明悟の言葉に蜜璃は興味津々になり、小芭内も少しだけ興味が出ていた。自分の恋の参考にしようとして・・・

「どんな人と恋したんですか？」

「ある時、その人に任務で助けられてけどその人も怪我をして一緒に藤の家にご厄介になつて互いに互いの事を話したなあ。まあアギトの事は言つてないけど・・・暫くは一緒に任務をしてたけど、俺は呼吸は使えなくてアギトの力を使つてたから彼女と良く離れてね。良く怒られたよ。何を考へてるの!?!死にたいの!?!つてけど教えられなくてね。そんな時に俺が大怪我したら、彼女が本気で泣いてくれたんだ。申し訳なかつたし辛かつた。暫く療養も兼ねて休暇してたけど、彼女は俺を蝶屋敷に連れて行こうと必死だつたよ。まあ行かなくて藤の家に居たけど、けど一緒に過ごしてキネマに行つたり、落語に行つたり、祭りに行つたりで楽しかつた。ただ嫁入り前の娘だから身内には俺の事を言つてなくて紹介して驚かそうとしてたけどね。本当に明るい娘だつた」

優しい顔を浮かべながら話す明悟。蜜璃も小芭内も本当に幸せだつたんだと心から思つた。

「それで、その娘とはどうなつた？」

「死んだよ。結婚の約束をして1週間後にね。彼女の身内には3日後に紹介される筈だつたけど、結局紹介はされなかつた」

「・・・すまない」

「ごめんなさい、辛いことを聞いて」

衝撃の事実にも小芭内も蜜璃も咄嗟に謝る。いや、鬼殺隊は兎に角死にやすい。こんな事だつて日常茶飯事であるがそれでも実際に聞いて戸惑わない人間はいない。

「良いよ別に、けどアギトの事をずつと言えなかったのは今でも後悔してる。もつと言いたかった。言つて一緒に歩きたかった。それからかな？人前で変身するのに躊躇しなくなったのは・・・」

「だつたら、鬼殺隊を辞めれば良かった」

「伊黒さん？」

小芭内の言葉に明悟は黙つて小芭内を見る。

「その女もお前も人並みの幸せが欲しかったなら鬼殺隊なんか辞めてさっさと何処へでも行けば良かった。たかが2人辞めたつて支障は出ない。それに鬼殺隊に入つてる限り、そんな平穩は訪れない。覚悟が足りないからその女は死にお前は苦しんだんだ」

かなり、キツイ言葉ではあるが、明悟にはその言葉の意図が理解できた。小芭内もまた人に恋するただの人間。明悟にはその心が理解できた。

「心配してくれてありがとうね」

「お前、馬鹿か？今の言葉をどう聞いたらそう解釈できる？」

「さあね、けどもう大丈夫だよ。心に穴が開いた見たいにスカスカになつてたけど彼女の分も必死に生きるつて決めたからね。蜜璃ちゃんも小芭内君もこれからどんな人と

出会うか分からないけど、後悔はしないでね」

「当たり前だ」

「はい！」

蜜璃も小芭内も明悟の言葉にそれぞれ返す。

そんな話をしてると時間になったので店を出ることにした3人。

因みにお代は全て明悟持ちである。

最初は蜜璃が出そうとしたが、小芭内が止めて払おうとしたら、明悟が食べてくれたお礼も兼ねて出した。

蜜璃と小芭内には先に行ってもらい、明悟は1人ゆっくりと歩いて向かう。

1人になりたかった。初めてこの事を話した。炭治郎達にもましてや耀哉達にも話していない明悟の秘密。2人の思い出。

「君の分まで俺は生きてるかな？」「カナエ」「ちゃん」

明悟は心で本当に好きだった元花柱で恋人だった「胡蝶カナエ」の事を思い出していた。



## もう1人の光の戦士

暗い夜の森の中で明悟は変身せずに日輪刀を振るつてがたいの良い鬼と闘っていた。

鬼殺隊に入つて2年、明悟は1人で鬼を殺し続けていた。仲間と呼べるような人間はいなかった。元々明悟の性格的に人付き合いに難がある。まあ自覚してるとは言え直す気は更々無いわけであるが、変身せずに闘っている理由はそもそも変身をあまりしないように耀哉に言われてる為である。流星にヤバくなつたらするが、それまでは変身しない。変身しなくても多少の鬼なら何とかなる。それに3体位はガチの生身で倒したことがある。まあ血鬼術すら使えない上に接近戦しか出来ない雑魚鬼しか倒せてない。後は変身したらやたらと目立つ。鬼殺隊は政府非公認の組織。あまり目立つと後処理がめんどくさい上に明悟のアギトの力は鬼殺隊でも一応耀哉は認めているが存在事態を伏せてる。

故に変身するとめんどくさくなるのだ。

何とかして鬼の首を切り落とす明悟。

しかし、へ口へ口で疲れてる。

明悟は首を切った鬼を見ると灰化してなかった。

鬼の胴体が突然と割れて中からスリムな鬼が現れる。

「嘘……」

「これが私の血鬼術 速変態」

鬼が先程とは比べ物にならない超速度で明悟に詰め寄り、明悟を殴る。

肋骨が何本も折れて吹き飛ばされて木に激突する。

すぐに立ち上がろうとするが、鬼は即座に迫ってきて明悟を蹴り飛ばす。

変身しようにも痛いし、へろへろに疲れきってる。

「死ねー」

鬼が確実に明悟の頭を潰しに来る。明悟も咄嗟に変身の構えをする。

「花の呼吸 壺の型 飛び花車」

その言葉と同時に1人の女性隊士が飛んで来て、鬼の首を切って着地した。

鬼は断末魔を上げる暇もなく死んだ。

明悟は急いで構えを解いて立ち上がる。

「ありがとう」

「大丈夫ですか？」

女性は明悟よりも幾分か若かった。

頭には蝶の形をした髪飾りが2つある。

但し、頭から血が出ていて、脚を引き摺ってた。

「何とか、君は……えつと誰？」

「私の名前は胡蝶カナエ 階級は己です」

「俺は津上明悟 階級は丁だ」

「無事で良かった……です……」

カナエはそう言うと倒れた。

明悟は倒れたカナエに近づき、首に指を当てる。

脈はしっかりと打つたので気絶したのだとわかった。

流石にほつとく訳にもいかなかったので気絶したカナエをおぶり、藤の家に向かうことにした。

これが明悟とカナエの出逢いである。

津上明悟…… 17歳

胡蝶カナエ…… 15歳

……胡蝶カナエ死亡まで後2年……



明悟は柱になり貫つた自分の家で目を覚ます。

久しぶりにカナエとの出逢つた頃を思い出した。あの頃はアギトの事を人に徹底して見せずに鬼を倒していた。そんな中で起きたカナエとの出逢い。

明悟は起きて外にある井戸から水を汲んで、顔を洗う。

清々しい朝を感じる。

ただ、カナエとの思い出は湿つぽい。

優しくて厳しかった初恋の人。

明悟にとつては苦しみと幸せの両方の側面を持つ記憶である。

明悟はバシヤバシヤと顔を洗つて寝間着から隊服に着替えてコートとハットを纏つて家を出る。

そして耀哉の屋敷に向かうがその前に和菓子屋に寄つてみたらし団子を買ひ、屋敷に向かう。

着くと、早々に屋敷にいた隠の男に目と耳と鼻を塞がれておぶられて連れて行かれ

る。

何処に行くかと言うと自分の日輪刀が粉碎されたので刀鍛冶の里に行つて自分の刀の担当者、鋼鐵塚、螢の所に行くのだ。

今まで1度も日輪刀を折つたことは無かったが、どんな性格なのかは他の担当して居る隊士の愚痴に耳を傾けてある程度は知つてるので、行くことにしたので。

下手に拗れる前に謝罪してさっさと作つてもらおうと言うのが明悟の考えである。

因みにみたらし団子を何故持つていくかと言うと初めて会つた時に日輪刀が変化しなかつた事に対してプロレス技を掛けて来て散々明悟を痛め付けた後にみたらし団子をねだつて買わされた事を明悟が覚えていたからである。

刀鍛冶の里に着いて、まず長である鉄地河原鉄珍の所に向かう。螢の場所を知らないので教えてもらい……

屋敷に入り、案内されて鉄珍の待つ居間に行く。

座つて待つててくれた鉄珍に頭を下げる。

「本日は急な訪問を受け入れて下さりありがとうございます」

「ええよ。8年も折らずに大事にしてくれたんやから、こつちがお礼を言いたいわ」

「ありがとうございます。それで鋼鐵塚さんの所にご挨拶したいのですが」

「それなんです、案内出来ませんわ」

「え？」

鉄珍の言葉に固まる明悟。

「一々、刀を折って謝罪に来られても刀を作る暇が無くなってしまふさかいに申し訳ないなあ」

「けど、刀を折つたのは俺ですし・・・」

「折れるナマクラを作る虫が悪いんです。それに最高の刀を提供して鬼を斬って下さる人が折れた刀の刀鍛冶なんぞにこうも気安く頭を下げられたら、わしらに対する侮辱ですわ」

鉄珍の体から異様な気迫が出て来て、明悟は本気で頭を下げた。

「申し訳ございませんでした!!」

「ええよ。まあその品は虫に渡しますんでどうか今日はそれくらいにしてください」

「はい・・・すみません」

明悟はしょんぼりしてしまふ。

謝罪に来たのに相手を怒らせてしまったのだ。これは流石に落ち込んでしまふ。

「まあ、そないに気を落とさずに首を長くして待つててください。最高の刀を仕上げさせますので」

「はい！そう言えば、鋼鐵塚さんの名前って虫なんですか？」

明悟は励ましをされたのでウダウダと考えるのは止めて初めて知った事を尋ねた。

「そうなんです。わしが名付け親なんですすが可愛すぎて名前と呼ばれるのを嫌がつて・・・親不幸者め」

「苦労されてるんですね・・・聞きたいことがあるのですが、嘴平伊之助君の刀鍛冶は誰になるんですか？」

明悟は鉄珍やその周りにいた刀鍛冶の人に聞く。

伊之助が日輪刀を持つてる経緯は特殊で刀鍛冶から打って貰った訳でなく鬼殺隊士の刀を奪って使っていたから担当の刀鍛冶がそもそもいない。

「私になります。申し遅れました。私の名前は鉄穴森鋼蔵です」

鉄珍の横にいた刀鍛冶の綱蔵が手を上げる。

「光柱の津上明悟と言います。何分気性の荒い子ですのでどうか宜しく願います」

「分かりました。私も二刀流の方に刀を打つのは初めてですので年甲斐もなくワクワクしております」

明悟はその言葉に少しだけ安心した。凄く優しい丁寧な人だと思った。

「伊之助君の刀はご覧になりましたか？」

「はい、刃こぼれが酷くて杜撰な状態でしたので最高の刀を仕上げさせてもらいます」

「その刃こぼれについてなんですが、伊之助君・・・どうやら自分であしらいました」

「なんと!？」

「新しい刀についてもああなつてないと自分でやるつて言つていたので先に言わせても  
らいます」

綱蔵はプルプルと腕を震わせる。

刀鍛治は全員老若男女関係なくひよつとこ面を被つてて表情は一切分らないが、何  
となく怒りの感情を明悟は感じていた。

「じよ、上等じゃわれあ!それも込みで打つてやら!!」

叫び体から業火が出るように興奮しまくる綱蔵に明悟は素で引いていた。

「わざわざ、言うてくださりありがとうございます。綱蔵もやる気が更に出てきました」

「此方こそ、本日はありがとうございます。では失礼します」

明悟は再び隱におぶられて刀鍛治の里を後にした。

因みに明悟のみたらし団子を綱蔵から貰つた蛸はやる気が倍増して、伊之助の刀を打  
つことになり、異様に燃えまくつてる綱蔵にどん引いた。





それから数ヶ月の時間が流れる。

明悟は柱として激務をこなしていた。

もう既に柱に就任してから、10体以上の鬼を倒している。

他の柱達も勿論、そんな数は当の昔に到達しているが、明悟は兎に角異様に早いのだ。アギトの超能力故か恐ろしい位の勘と腕つぶしで早く倒しまくっている。その事実には柱達も素直に感心している。別に明悟は会議とかの静かな長丁場が苦手なだけで現場だとまともなのだ。

まあ普段の性格は難がありまくりではあるが・・・

他の柱も負けずにやる気を出す。

平常運転の義勇と無一郎はさておき、杏寿郎と蜜璃は燃えに燃えまくって、天元は自分よりも派手な明悟にライバル心を抱いて、しのぶも嫌いな明悟以下の状況が嫌らしく頑張り、小芭内はあの昼食以降、明悟が行き付けの大飯が食べれる店を紹介しまくって蜜璃に紹介しているので、明悟の活躍には一切の不満もイライラもなく、蜜璃に強い男

であると証明するために斬りまくっていた。実弥は明悟の活躍に一番怒りが溜まって鬼を八つ当たり気味に斬りまくり、行冥は自分の武器を壊されたので務めが出来ない事に泣いていた。

明悟は暫く休暇しようと家に向かう。

鏖鳥には既に休暇届けを出した上で家に帰る。だが、耀哉がそんなのを受理するわけない。

寧ろ耀哉はそろそろ休暇を寄越せとごねる事を予測していた。万年人員不足の鬼殺隊の柱にそんな疲れただけで休暇を上げますなホワイトな環境だったら鬼の被害者は今の百倍はいる。

耀哉は明悟の休暇願い届けを目が見えてない筈なのにビリビリに破り去る。代わりにの任務を与えようかと思つたがそこは幼なじみ、明悟の性格を理解していた。確かに明悟は代わりの任務を出したら絶対に遂行はする。

その代わり終わると絶対に家に来る。

耀哉の屋敷に来るのだ。そして絶対に子供達をだしに使つて二、三日の休暇を無理やり取る。それは嫌だ。

子供達に悪影響が出る。

まあ、自分も幼なじみと一緒に居れて嬉しくなるのだが、後のあまねが恐ろしい怖

い。

そこまで考えた上で耀哉が出した結論は炭治郎達の回復訓練の手伝いをさせる事だった。

炭治郎は今や貴重な無惨への大事な手掛かり、絶対に逃したくない。明悟は個人的な付き合いで炭治郎とその仲間の伊之助と善逸とも仲が非常に良い。見舞いには出来る限り行ってるらしい。ならば任務として回復訓練と一緒に付き合わせた方が良い。明悟には休暇で炭治郎達には腕つぶしだけは強い明悟は良い刺激を与えろと思ひ、その主旨を明悟と蝶屋敷の家主のしのぶに送った。

明悟は休暇に喜び、しのぶは胃痛になった。

1日ゆっくりした後、明悟は蝶屋敷に向かう。

因みにまた菓子を買ってから向かう。本日の菓子は牡丹餅だ。こし餡の滑らかな食間と餅特有の滑らかとは違う食感が非常に美味しく、隠し味に入れてる塩もただの塩ではなく藻塩。まろやかな塩っ気は滑らかな牡丹餅と合う。店自慢の商品である。

金はいくら使っても問題ないので、しのぶや看護婦達と炭治郎達、後はまだ入院して他の隊士達の方も買ってから向かう。

人数は昨日の内に烏で確認してる。

1人2個の牡丹餅を食べれる計算だ。

蝶屋敷に着いて玄関を叩いてから中に入る。

一応、任務と言うていで来ているが挨拶をしとかなないと不味いと思い、また玄関で待つことにした。

すると奥から鬼殺隊の女の子がやってくる以前の看護婦達の女の子達とは違い、隊士の服を来て蝶の髪飾りを頭に着けてる。

その子は明悟の目の前に来ると、何故かコインを弾き上げる。明悟は気になり、その宙に飛ばされたコインを取ってコインを調べる。

シンプルに表と裏が書かれてるだけで何の変鉄もないただのコインだ。

疑問になりながらも明悟はもう一度女の子を見る。すると明らかにオロオロしてて何も声に出さないがコインを返して欲しそうだったので明悟は返した。

「ごめん、急に取っちゃって・・・自己紹介がまだだったね。俺は津上明悟。宜しくね」  
彼女はもう一度コインを弾いて、左手の甲に乗せてコインを右手で覆った。そして右手を外すとコインは表を向いていた。

明悟は一連の行動は何なのかわからずに頭を傾げる。

彼女は奥へと戻っていった。

「何なのかな?」

どうしていいか分からずにそのまま玄関で待つてるとしのぶがやってくる。

「やあ、しのぶちゃん久しぶり」

明悟は親しそうに挨拶するが、しのぶはそれにドン引く。顔なんて笑顔を崩してまるで生理的に受け付けない物でもみたかのような顔になる。

「そんな顔をしなくても、ああこれ昨日鳥で言つてた見舞いの品」

明悟は品をしのぶに渡す。

少し重いが受けとるしのぶ。

「では不本意ですがこれから暫く宜しくお願いします」

「宜しくね」

そう言つて、奥の広間に向かう明悟としのぶ。

「そう言えば、さっきの子は？」

「カナヲですか？カナヲなら私に任せた後にもう奥の広間に行つてますよ」

「カナヲちゃんか」

「誰に対してもその呼び方ですか？」

「うん、流石に行冥さんほど年上だったら君呼びはしないけど、他は基本的にこうだなあ。耀哉は別にして」

「私の名前は呼ばないでください」

「何で？」

「不快だからです」

しのぶは笑って明悟に言うが明悟には内容よりもその張り付いているような笑顔の方が気になった。

まじまじと顔を近づけてしのぶの顔を見る。

「何ですか？」

「何でしのぶちゃんは笑ってないのに無理に笑うの？」

「え？」

「張り付いてて凄くやつれた笑顔だね。でもたまには本気で笑っても良いんじゃない？  
きつと素敵な笑顔になるよ」

「……」

しのぶは脚を止める。

「どうしたの？」

「何でもありません」

そう言つてまた進む。

先程よりも張り詰めたような笑顔をしながら、明悟はその後を着いていく。  
しのぶは明悟のさっきの言葉に4年前に鬼に殺されたカナエの姿を重ねていた。

奥の広間に行くと伊之助がカナヲにお茶をぶっかけられていた。

炭治郎と善逸はそれを見ている。

後、看護婦達もそれを見ている。

「ん？あれは？」

「反射訓練です。湯呑みの中の薬湯を相手に掛けるのですが、持ち上げる前に相手に湯呑みを抑えられたら動かさせません」

「なるほど、素早く次の行動を取る為の訓練か・・・」

「そう言うことです」

「てことは、伊之助君はカナヲちゃんに反射訓練で今まさに負けてる状態か・・・えっと俺は暫く君の部下と言うか・・・まあ下になるから、炭治郎君達にどんな訓練をすれば良いか教えて欲しいです」

明悟はしのぶにそう言うとしのぶは品を置いて、何処から取り出したのか竹刀を明悟に渡す。

「最後の訓練でしこたま殴って下さい。津上さんが1発でも貰ったら終わりで時間は30分です」

明悟はその竹刀を受けとる。

「了解です」

明悟がやってる皆に近づく。

炭治郎達も看護婦達も近づく。

「明悟さん！」

「やあ、炭治郎君。久しぶり1ヶ月ぶりだっけ？・・・今日から君達3人の回復訓練に付き合う事になったよ・・・因みに内容は竹刀でしこたまやり合うだから・・・覚悟だけはしといてね」

明悟は笑顔で答えるがその不気味さに炭治郎と伊之助は身震いし、善逸は声にならない悲鳴をあげてた。

明悟はカナヲや看護婦達の方を向く。

「そう言えば、自己紹介がまだだったね？俺の名前は津上明悟。宜しくね」

明悟の挨拶にカナヲ達は、顔を見合わせてから話す。

「私は神崎アオイです」

「私は寺内きよです」

「中原すみです」

「高田なほです」

アオイ達の自己紹介が終わると明悟はカナヲを見る。カナヲはまたコインを弾く。表を向いていた。

「栗花落カナヲ」



「宜しくね、アオイちゃん、きよちゃん、すみちゃん、なほちゃん、カナヲちゃん」  
自己紹介を終えて、訓練に戻る。

伊之助の後に善逸もカナヲに薬湯をぶっかけられていた。何回も・・・  
因みに炭治郎は明悟が来る前にぶっかけられたらしい。

その後は全身を使った訓練になったりと明悟はまだ暇だったので、きよ・なほ・すみの3人と一緒に持ってきた牡丹餅を食べてお茶を飲んでいた。

色々話を聞いてどうやら3日前まで善逸と伊之助の2人は訓練をボイコットしてたらしく、少し炭治郎に比べて遅れてるらしい。

明悟は確かに見舞いに来ていたが1ヶ月ぶりなのだ。

まさかこの1ヶ月でそんな事が起きていたとは予想できなかった。人生は遅いようで早く、短いようで長いと改めて知った明悟であった。

そうこうしているとどうやら自分の番になり、明悟は竹刀を持ち、炭治郎達3人の前に行く。

「さてと、俺は呼吸は全く使えないので君達に具体的なアドバイスは出来ない。よつて訓練内容は実践訓練のみ。時間は30分」

明悟はさっきの暇をもて余してた時にしのぶから貰った砂時計を置く。

「この砂時計が全部落ちると終了。君達が完了する条件は俺に一撃でも当てる事のみ。

それじゃ誰から行く？」

「俺様だ！」

やっぱりと言うかお約束と言うか一番手になったのは伊之助だった。明悟は伊之助に2本の竹刀を渡す。

少しだけ間合いを空ける。

炭治郎や善逸そしてカナヲ達も離れた所で見ろ。

砂時計はアオイが管理するのかアオイの近くにあつた。

「それじゃ、アオイちゃん。お願い」

「用意、始め！」

アオイは言葉と共に砂時計をひっくり返す。砂時計が落ちる。伊之助は竹刀を持つて突っ込んできて竹刀を振る。

「獣の呼吸 壺の牙 穿ち抜き」

2本の竹刀を両方とも突いてくる技に明悟は横に避けた。伊之助は別にそれでへこたれる事は一切なく、2本の竹刀で攻撃してくる。

明悟はその攻撃を自分の竹刀で弾く事すらせずに全て紙一重で避けまくる。

「獣の呼吸 参の牙 喰い裂き」

明悟の首目掛けて左右からの切り裂きをしようと伊之助は腕を交差するが、明悟は一

瞬で近づく。伊之助は慌てて竹刀を振るも明悟は紙一重で避けて伊之助の竹刀を2本とも蹴り上げる。そしてそのまま無防備になった伊之助の頭目掛けて踵落としを喰らわせて気絶させる。

「甘いよ、次！」

氣絶してる伊之助はアオイ達に看病してもらい、今度は炭治郎が竹刀を持って対峙する。

「宜しく、お願いします！」

「宜しくね」

明悟に対して炭治郎は竹刀を構える。

「水の呼吸 漆の型 雫波紋突き」

水の呼吸で最速の突きが飛んで来るが明悟は抜き胴でカウンターを喰らわす。

やられた炭治郎は直ぐ様、体勢を立て直して斬りかかってくる。

その攻撃をまたもや避けまくる明悟。

「水の呼吸 捌の型 滝壺」

水の呼吸で威力が高い上段をやってくるが、明悟は炭治郎が竹刀を上段にしたのと同じ時に詰め寄り、腹に膝蹴りを喰らわす。

流石に病み上がりの炭治郎は一瞬呼吸が上手く使えなくなる。明悟はその隙に炭治

郎の無防備な頭を叩き、次に右脇腹、そして左内腿の3ヶ所を流れるように叩きまくる。そして炭治郎の顔面に目掛けて突きを放つ。

勿論、寸前の所で明悟は寸止めする。

しかし、こうも圧倒的にやられまくった炭治郎は全く動けなかった。

「よし、炭治郎君はこれで終わり。相手と戦うときはどんな攻撃をするか分からないから一挙手一投足に注意してね」

「はい、ありがとうございます！」

ボロボロにやられながらも元気に答える炭治郎。

明悟は善逸を見るが、善逸はカナヲの後ろに隠れてた。

呆れたように頭を欠いて、明悟はカナヲもとい善逸に近付いて、首根っこを引っ張る。

「死なないからこつちに来なさい」

「やだよ！やだよ！伊之助が1発で沈んで炭治郎がボロボロになったんだ！俺が無事で済む保証がないじゃん！」

「そんな保証、生きてる限り存在しないよ」

「死ねと!？」

「だから、死なないって伊之助君も炭治郎君も怪我はしてないよ」

「痛いのが嫌なんだよ！」

「男は傷つく事で磨かれる。そして人に好かれて女性にもモテるようになる」

善逸はモテると言う言葉にだけ反応を示す。

「ほんと?」

「ほんとほんと・・・で、やる?」

「・・・やりませう」

善逸の言葉に明悟はさつさと竹刀を渡す。

そしていざ始まるが、結果は御察しください。

こうして明悟を加えた特訓の初日はボロボロになった3人が出来上がっただけであった。



それから数週間後、何とか明悟に対して食らいつく事が出来るようになった炭治郎と伊之助。

善逸は相も変わらずいつも通りであった。

そんな中、鳥から刀鍛冶の蛩と綱蔵が明悟と炭治郎、伊之助の刀を持つてくると連絡が入り、3人とも蝶屋敷の表で2人を待った。

するとひよつとこ面を着けた2人がやつてくる。

元氣よく蛩に手を振る炭治郎。

しかし、振られた方の蛩は風鈴を着けた傘を綱蔵に渡して、包丁を持って突っ込んできた。

緊急回避をする炭治郎。

隣にいた伊之助と明悟はわけが分からずに行動できなかつた。

「は、鋼鐵塚さん!？」

「よくも折つたな?俺の刀を・・よくも、よくも、よくも!!」

「は、鋼鐵塚さん!落ち着いてください!」

明悟は炭治郎の前に入って庇う。名前呼びではなく苗字呼びなのは明らかに冷静には見えないので下手に嫌がつてる名前呼びだと余計に暴れると思つた為だ。

「そこどけ!お前はみたらし団子で侘びたから赦してやる!退け!!退かねえなら、お前事、殺してやる!!」

包丁を振り回しながら突っ込んでくる蛩に明悟と炭治郎は全力で蝶屋敷の庭で逃げまくつた。

数十分すると疲れたのか蛍の勢いが弱くなってきたので本題だった刀を貰う事にした。

「鋼鐵塚さんは刀に対して情熱的ですから許してください。里でもここまでの人は中々見ないんですよ」

「ですよね・・・」

「居たら怖いです」

「竈門炭治郎殿と嘴平伊之助殿とは初対面ですので、自己紹介を。私は伊之助殿の刀を打たせて貰いました鉄穴森綱蔵と言います。」

綱蔵は袋から鞘に入った2本の日輪刀を出す。

伊之助はそれを鞘から抜くと牙に見立てた刃零れ込みの刀身が出てきた。

「明悟殿から伊之助殿の刀の特徴を改めて教えて貰いましたので牙込みで打たせて貰いました。私も二刀流で尚且つ特殊な刀は初めてでしたので・・・」

伊之助の日輪刀が藍鼠色になる。

「いい、藍鼠色の刀らしい良い色だ」

伊之助は刀を庭で振り回す。

特に問題は無さそうで振ってる速度も早い。

「おい、おっさん！これ最高だ！」

「ああ、良かったです」

綱蔵は草履を履いて伊之助に近づき、肩に手を載せる。

「伊之助殿・・・大事に使ってくださいね」

綱蔵の威圧感に伊之助は少しだけ怯む。

「おう、おっちゃん」

少しだけ親しみを込めておっちゃん呼びになるが、明悟は野性の勘が働いて親しくなる方が良いと判断したなと心から思った。

炭治郎は相変わらず黒の刀身の為か蛭も全くのやる気を出していなかった。

そして蛭はまだイライラしているのかふて寝状態の中、綱蔵が代わりに明悟の新しい日輪刀を出した。

「明悟殿、どうぞ」

「大事にします」

明悟はそう言つて鞘から抜くと本当に見事としか言い様のない、刀身があった。

すると、呼吸が全く使えなくて日輪刀が本来ならば変化するはず無いのに、刀身に薄桜色の雷の呼吸に似た波紋が出てくる。

まあ、ギザギザになつて雷の呼吸とは違つて炎の揺めきのような優しい感じではある。



呼吸に応えるかのように変化する日輪刀だが、明悟には呼吸の代わりにアギトの力がある。

そのアギトの力が本来ならば変化しない筈だった物に対応して進化したのだ。

元々、出てはいたが薄すぎて全く分からなかったので8年も戦い続けた結果、こうもはつきり出るようになったのだ。

明悟と綱蔵と蛭は初めて見る刀身に言葉を失う。

「綺麗な刀身ですね」

炭治郎の言葉をきっかけに

「何じゃこりゃー!??!」

3人ともはもって叫んだ。



その頃、蜘蛛山で明悟の血を取った下弦の式の轆轤は明悟の血をどうするべきか悩ん

でいた。

非常に強力な力になると思つて取つたは良いものも、あれからそこら辺の雑魚鬼に無理矢理血を与えたらどういふわけか死に絶えてしまった。

鬼にとっては毒そのものであるのか分からずに自分に射つことも出来ずに悩んでいた。

結果、何本もあつた採血の短刀も残り2本になつてしまった。

覚悟を決めて自分に射つかどうか迷う。

そうしてると突然琵琶の音が耳に響く。

轆轤は気になり辺りを見回すと先程いた場所ではなく、城の中にいた。但し、上下左右無茶苦茶でこんな城を實際に造ろう物なら間違ひなく不可能な構造だつた。

轆轤は冷や汗を欠きながら周りを見ると他の下弦の鬼達もいた。

蜘蛛山の下弦の伍の累は既に死んでるので5人だけだつた。

1名を除いた4人は辺りを見回すと見物席みたいな所に琵琶を持った女の鬼がいた。そして琵琶の音が鳴る。すると1ヶ所に集められる。

全員、まだ状況が掴めずにいると、1人の着物を着た女が前にやってくる。

「頭を垂れて蹲え」

不気味な声だ。

嫌に病的で凄みがある。

下弦の鬼達は全員頭を下げた。

絶対に勝てないと思わしめる怪物 鬼舞辻無惨に頭を下げた。

「も、申し訳ございません。お姿も気配も異なっていてしまったので・・・」

下弦唯一の女の鬼である零余子が無惨に対して謝罪する。

「誰が喋って良いと言った？ 貴様の下らぬ意志で物を言うな。私の質問のみに答えよ」  
威圧感を出しながら言う。

下弦の鬼達もビビりまくり平伏す。

「累が殺された。下弦の伍だ。私が問いたいのはただ一つのみ。何故にお前達下弦はそんなに弱いのかだ。十二鬼月になったとてそこで終わりではない。始まりなのだ。より人を食らい、私の為に全てを捧げるのが道理であり、全てだ。それがお前達の存在理由だ。なのに上弦は100年もその立場を維持してるのにお前達下弦は何度入れ替わった？ もはや、お前達下弦は必要ない。ここで解体する」

それぞれが無惨に侘びて今一度のチャンスを貰おうとするが無惨は一向に聞き入れない。

やつても自分に逆らうのかとか自分が全て正しいとか明らかに異常だった。

もはや明らかにパワハラである。

そもそも鬼だろうが、人間だろうが意志がある時点で完全に思いのまま操るなど無理だ。

無理ゆえに人付き合いで頭を悩まして最善を取るのが意志がある生命であるが、この怪物にはそれが欠如してる。究極の自分本意で物事を語り、自分以外の全てに何も興味を示していない。

そもそもこの怪物の目的は支配とか破滅とかそう言うのではなく、自分が生きる為であり、日の光が苦手だから克服したいただそれだけの為に人の人生を玩具にしているのだ。

どんな立派な理屈があろうと例えそれに全ての生命が同情しようとも他者の人生の運命を決める権利は神でさえない。

それを平然と息をするかのように行うこの怪物は間違いなく、吐き気を催す邪悪そのものである。

このパワハラを轆轤はどう生き残るか考えてた。アギトの力は鬼には毒かも知れない。このままでは絶対に死ぬ。轆轤には絶対に死ぬしかない道と死ぬ可能性が恐ろしくくらい高い道しか残ってなかった。

轆轤は覚悟を決めて、残りの2本の採血の短刀の1本を自分に刺す。

反抗する意志ではなく、これで強くなれば役に立つことを証明できて生き残れると

思ったからだ。

完全な異物の血に轆轤はのたうち回る。

イライラしてた無惨は轆轤に対して当然キレる。

「貴様、何をのたうち回っている。先程の血はなんだ？まあ、そんなのは最早どうでもいい。その煩わしい叫びを消せ」

しかし、轆轤は叫びを止めなかった。激痛で叫ばずにはいられなかったのだ。

無惨は轆轤の中にある自分の細胞を活性化させて殺そうとする。普通の鬼ならば本来はこれで死ぬはずなのだが轆轤に効果はなかった。

ここで無惨は初めて冷静に轆轤を見た。

無惨は慌てずに冷静に轆轤を殺すために巨大な肉塊を作り、その肉塊にデカイ口ができる。そしてそのまま轆轤を下の床事丸呑みする。

轆轤は肉塊の中で感じたことは生きたいと言う食欲なまでの意思と過去の記憶だった。

普通に生きてた。

自分の年老いて病に犯された母と妻がいた。

子供はいなかった平凡な一家。

田舎にあり、不便だったが生き残ってた。しかしある時、轆轤が捕まった。妻に手を

出して逃げてた悪漢を半殺しにしたら逮捕されて刑務所に送られる羽目になった。そして母の危篤と辛いことが重なり、家に帰りたくなり、家族に謝りたかった。そんな中で上弦の肆である半天狗に出会い、無惨の血を貰って鬼になった。そして留置所から出て、母と妻の所に行つたが2人は酷い殺された方をされた。

まるで不気味な作品のように人としての原型すら留められず、それでいて叫び声だけは延々と出てる酷い殺され方をされた。

今ならわかる明らか人間業ではなく血鬼術を使つていた。

絶望し、そして人間である事を完全に捨てさり、もう苦しめたくないただそれだけの為に母と妻の死体を食べて、それから鬼として人を喰らいながら生き続けた。

そしてその事実さえもやがて忘れて生きてきた。

しかし、アギトの血を体に入れたことで人間としての轆轤が再び覚醒したのだ。

怒りを感じた。

自分の家族を殺した鬼に対して、そして家族を喰らい鬼として生きてきたゴミ屑の自分に対して、全ての元凶である無惨に対してこの上ない怒りが轆轤の全ての感情を覆つた。

すると腹の部分が光を放ち、明悟と同じベルトが現れる。

「変・・・身」

怒りに染まった声から発せられる変身の声に反応したベルトが轆轤を異形の戦士であるアギトへと姿を変えた。明悟と一緒にの姿をしたもう1人のアギトが誕生したのだ。

ベルトから光を放ち、身を包んでいた肉塊全てを弾き飛ばして外に出る。

下弦の鬼達も無惨もアギトになった轆轤を見た。

轆轤は怒りに染まっていたがアギトに変身したことで冷静になり、自分の変化した体を見ていた。

「なるほど、十二鬼月程の力を持たなければ耐えられないのか」

自分の体を冷静に分析する轆轤。

下弦の鬼達は轆轤から本能的に離れる。

「何だ貴様は？」

「俺は・・・アギト。鬼舞辻無惨、悪いが俺は鬼を辞めさせて貰う」

轆轤はアギトの力をフルに使って無惨に飛び込み、その顔を殴って吹き飛ばす。

無惨も予想外の早さでやられた為か反応できずにすんなり飛ばされた。

殴り飛ばした轆轤は下弦の鬼達の所に行く。

下弦は明らかに轆轤に対して警戒していた。

「俺と一緒に来る奴はいるか？このままだと確実に無惨に殺されるぞ！」

轆轤は下弦の鬼達に叫ぶ。

鬼ではあるが別に轆轤は全ての鬼に対して怒りを持ったわけではない。あくまでも自分の家族を殺した鬼と自分と無惨にだけである。

と言うか、全ての鬼に対して怒りを抱くなどそんな資格はない。結局は自分も同じように食べてたからである。だから、轆轤は彼らに怒りを押し付けられない。

寧ろ、このままでは確実に死ぬ彼らに同情したのだ。十二鬼月ならば生き残れる可能性が高くなる。鬼を辞めれば生き残れる道はある。

そう思つて彼等に対して叫んだが誰もこない。

「愚かだなあ」

下弦の壱の魘夢が轆轤を見てそう笑う。

「生きるのが愚かか？」

「愚かだよ。そんなに生き急いで何になるの？ 鬼になり、永遠に生きれば苦しまずにいたのに」

「悪いが俺はそれで今、苦しいんだ」

魘夢と轆轤の数瞬の会話。

終わると同時に無惨の怒号が聞こえる。

下弦の鬼・・・特に零余子が人一倍ビビる。

轆轤は流石にアギトになったばかりのこの状況で無惨と本格的にやり合う気は無



かった。

琵琶の鬼……鳴女に顔を向ける轆轤。

あの琵琶の音と共にあちこち行くならば帰るのもあれが重要になると感じていた。

「私も連れてって！……死にたくない！」

人一倍ビビリな零余子が轆轤に近づく。

彼女は別に反抗しようと言う分けでない。無惨と行動は一緒なのだ。ただ生き残りたいそれだけの行動である。無惨は躍起になって殺そうとする。生き残れそうなのは分けの分からない力を出して無惨を殴り飛ばした轆轤と共に行くことだと零余子は直感した。

轆轤は直ぐ様、最後の一本である明悟の血が入った採血の短刀を零余子に刺す。

激痛で叫び苦しむ零余子を俵担ぎしながら、轆轤は鳴女に向かって飛び付く。

鳴女も腐っても無惨の忠臣、琵琶を使った血鬼術で何とかしようとするが、その時轆轤のベルトが急に光を放つ。

日の光と同じ性質を持つ光によって鳴女は火傷を負い、とつさに琵琶を弾いてしまう。

それによって轆轤と零余子の2人は鳴女すらも知らない場所に飛ばされてしまう。

飛ばした張本人は戻そうにも何処にいるか分からず、そして鬼ではなくなった2人を

戻すことは出来なかつた。



どこかの森に飛ばされた2人。

轆轤は苦しんでる零余子を下ろす。

とてつもない叫びが夜の森に響く。

自分よりも弱い下弦の肆である零余子は死ぬのかと極めて冷静に頭を回す。

暫くすると零余子に変化が訪れる。

角はどんどんと小さくなり、白かつた髪や顔の模様が消えて、目の下肆の文字も消え

て人間の目に戻る。

皮膚も白ではなくて小麦色の肌になり、長かつた爪も短くなる。

叫びが消えると彼女は「人間」に戻つた。

轆轤はその事実には驚愕して変身を解いた。

自分にも変化があつた事を漸く理解した。

皮膚も零余子と同じようになり、目の部分も元の間人だったときの目と一緒だった。

「人間に戻つたのか？」

轆轤がそう眩くと零余子は大量のゲロを吐く。

轆轤は近付いて取り敢えず背中を擦るがもう胃液しか残ってないのに零余子は吐き続けて、何回かして吐くものが無くなったのか止まった。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃない・・・今まで食べてきた人間の味を一気に思い出して吐いた・・・私は何をやってたの？」

「さあな、けど俺もお前ももう天国には行けない」

轆轤の言葉に零余子は涙を流したかったが出なかった。体の水分はもう出でて出なかったのだ。

轆轤は背中を擦るのを止めて立ち上がる。

「何処に行くの？」

「さあな、けど俺はあの姿で鬼を殺し続ける。お前は人間に戻ったのか分からねえが、もしも日の光を浴びても何もなかったら達者で暮らせ。短くなった命だ。まだ若そうだし、結婚でも何でもやって地獄に行く前に精一杯幸せに生きれば良い・・・じゃあな」  
立ち去ろうとする轆轤。

零余子は轆轤の服を引っ張る。

「何だ？」

「私も一緒に行く。もう家族はいない。私が鬼になる前に死んだから行く宛はない。なら一緒にいて良いでしょ？」

「……ああ、でも俺は鬼を殺し続ける……ヤバくなったらお前でも見捨てる」「私だつて……下弦の肆になった……生き残つてやる絶対に！」

体を大いに震わしながらもそう啖呵を切る零余子。

それに轆轤は笑った。

そんな中、朝日が昇ってくる。

森にどんどん日の光が差してくる。

轆轤と零余子は日の光から全力で逃げて洞窟を見つけたのでそこに入り一先ず安心する。

日が完全に洞窟の外を照らすと轆轤と零余子は顔を見合わせた。互いに互いが鬼としての顔ではなく人間の顔に戻つてるのを確認するとじゃんけんを始めた。

何回か相子になって、轆轤が負けた。

轆轤が日に照らされた洞窟の外に向かって右手を伸ばす。零余子は左手を持って何時でも全力で日から逃げられる為のサポートをする。

「行くぞ」

「うん」

数回早い呼吸をしてから一氣に呼吸を止めて轆轤は意を決して洞窟の外に手を出す。鬼ならば火傷してやがて死ぬほどの猛毒と化する日の光だが、轆轤の腕は何も問題なく日の中でも存在した。

轆轤はその事実には驚き、急いで全身で日の光を浴びようとするがその事実には興奮した零余子に突き飛ばされる。

轆轤よりも先に零余子が全身で日の光を浴びる。火傷を負わない人間だった頃、毎日浴びてた本当に久しぶりの日の光は暖かくて優しく包み込んでくれた。

静かに涙を流し、笑う零余子。

轆轤もそれを見て同じように日の光を浴びて泣きながら笑う。

暫くはしやいで互いに顔を向き合わせる。

「貴方、名前は？・・・私は零余子・・・氷川零余子」

「芦原だ・・・芦原轆轤」

「これから宜しくね」

「・・・宜しくな」

轆轤と零余子はそう言い合い、森を後にした。

大正の時代に現れた3人のアギト。

津上明悟、芦原轆轤、氷川零余子

3人のアギトの運命は、夢の列車、で交錯する。

そして3人のアギトの宿命は鬼と人間の生存競争に混乱をもたらす。

## 明悟と5人の子供達

明悟は珍しくも胃痛を感じていた。

正直、さつきまではそんな事は微塵も感じていなかったが、少しずつ大きくなってきた。今では盛大な痛みが出てくる。

耀哉の屋敷の庭に広げられた風呂敷の上に正座している明悟、天元、蜜璃の3人はこの状況をどうするべきか分からずに耐える事だけしか出来なかった。

最初は明悟だけがひなき達5人のおままごとに付き合う筈だったが、そこへ天元と蜜璃が参戦してこうなった。

3人とも一体何をどうやったらこんな状況になるのかわからなかった。



時間は5時間ぐらい前に戻る。

ここ最近の明悟の予定を簡単に言うならば暇人である。任務は蝶屋敷での炭治郎達

の特訓以外は何もなく、その特訓も夕方になるからそれまでは暇である。

いつもなら蝶屋敷にいて暇を潰すのだが、家主のしのぶに追い出されて夕方まで入れて貰えなくなってしまう。後、いつも持っていてる菓子類も禁止にされた。好評だったのに・・・まあ何故かしのぶの顔が少しだけむくみつつあったが・・・

そんなこんなで最近はお家の家具だったりなんなりを揃えているのだが、それよりも今日は珍しくやることがあった。

ひなき達と一緒に遊ぶ約束をしたのだ。

元々は柱になった日に遊ぶと約束はしていたが、多い任務と耀哉とあまねの夫婦による妨害のせいで全然出来なかったが、一昨日やつと許可が取れたらしく、産屋敷内でやることになったのだが・・・

「何でいるの?」

「そりゃ、俺の台詞だ」

横にいる天元に明悟は尋ねる。

あからさまに不機嫌な天元に明悟はなぜここまで不機嫌なのか理解できなかつた。

そんな天元と屋敷の庭に一緒にいたら、屋敷から耀哉があまねに連れられて、やって来た。

「よく来てくれたね。天元」



「お館様もご健在でなによりです」

「ありがとう」

「で、耀哉。なんで天元君も一緒にいるの？」

「明悟がひなき達と遊ぶのは心配だね。天元にも参加してもらおうかと思って」

「はあ。」

「安心して、天元は今日の代わりに明日から3日間休暇にするから」

「いえ、お館様。一体こいつは何をしたんですか？」

「ちよつと俺を諸悪の根元みたいに言わないでよ」

「参加すればわかるよ」

耀哉はそう言うとおまねと一緒に席を外した。

天元は頭を欠いててのほほんとしてる明悟に聞く。

「お前、派手に何したんだ？」

「何もしてないよ・・・たぶん」

「地味に思い当たる事があるんじゃないかねえか」

「・・・昔、皆と寝る前にちかちやんが持ってきたとある本を読み聞かせてね。それ

からちよつと・・・」

「何を読んだんだ？」

「ドロドロの愛憎劇中心な官能小説」

「何て物を読み聞かせた!？」

明悟の胸ぐらを掴み、天元は声を荒げる。

「にちかちゃんがあまねちゃんの私物を勝手に持ってきたんだよ。大丈夫だ！本番の所は流石に言えなかったから、全て完璧に簿かした」

「派手に大丈夫じゃねえだろ!!」

「最後の結末に行く前にあまねちゃんが止めに来てそれ以降は読んでないよ!」

「当たり前だ!・・・何で奥方はそんな本を勝手に持ってんだ?」

「趣味らしいよ」

知りたくなかったあまねの趣味に頭を抱える天元。

そんな中、笑顔でひなき達がやってくる。

微笑ましい状況の筈が天元には嫌な予感しかしなかった。

「甘露寺様もこちらに」

「はい!」

くいなに連れられて蜜璃までやってくる。

天元は冷や汗をだらだらとかきはじめた。

「あれ?蜜璃ちゃん。どうして?」

「お館様に報告をしに来て終わったら、ひなき様達の遊びに付き合っただけで欲しいと言われてさっきまで家の中でお話していたんです」

笑顔で純粹に答える蜜璃。

天元の心配も他所にこうして柱3人と5人の子供達の遊びが始まった。

風呂敷を広げる子供達、非常にテキパキしてて早い。

あつという間に用意し終わる。といってもあるのは風呂敷の上に何故か本が8冊だけで済んでいる。

「ひなちゃん達、またあれやるの?」

「「「「はい!」」」」

明悟はひなき達の言葉に頭を抱えた。

蜜璃はその行動に疑問を持ち、天元は生唾を呑むがそれが何かを聞く前にちかから本を渡される。

「津上さん、これで何をやるんですか?」

「朗読。台本に当てられた役の台詞を読んでいくだけの遊び。題して超おままごと!」

「まあ、楽しそう!!」

「派手に嫌な予感しかしねえ」

「やればわかるよ・・・嫌でも・・・」

その後、貰った台本を読み始めたら、蜜璃は始まったときのウキウキ感が消滅し、元は一切の感情を無にした。

分かりやすいように舞台と役回りを説明しよう。

舞台は戦国時代のとある城での話。

役回り

殿・・・明悟

正室・・・蜜璃

家臣A・・・輝利哉

家臣B・・・天元

側室・・・にちか

女中・・・ひなき

姫（側室の娘）・・・かなた

家臣C・・・くいな

内容

順風満帆な生活をしていた筈の殿、子供が出来ない正室と姫を産んだ側室の2人と懸命に暮らしていたがとある戦場で元々殿を好いていた姫の幼馴染の家臣Aと交わってしまい、それを知った側室が正室と殿の全てを奪おうと暗躍。

正室を愛していた家臣Bは正室を裏切った殿を殺そうと自滅覚悟で計画。しかし、家臣Bを好いていた女中がその事を家臣Cに言い、家臣Cは実は身分違いの片想いをしていてその相手である姫に言ってしまい、姫は幼馴染みの家臣Aに問い詰める。その場を目撃した正室は殿に直談判する。家臣Aは愛する殿を守るために切腹。それで終わらなかつた。

愛する殿に裏切られた正室は嘆き悲しみ、殿への当て付けと自分への慰めとして女中と無理矢理交わる。

家臣Bは確実に正室をものにするために側室と手を組む。側室の娘である姫は幼馴染みを結果的に奪った殿と正室を憎むようになる。家臣Cは側室達の計画を止めようと動くも女中に夜分に襲われて殺される。

後日、女中の裁判で女中は正室に無理矢理襲われた事を暴露するも愛する正室には盲目になってた家臣Bに首を斬られる。

その事で殿に責められて苦しむ正室は慰めに来た家臣Bに襲われる。

家臣Bは無理矢理交わった事でまだ殿を愛してる正室の事を未練たらたらであるが諦める。正室は歪ながらも愛してくれた家臣Bを許す。そんな中、姫から殿と正室の暗殺を持ち掛けられるが正室を愛してる家臣Bは正室を守るために姫を殺す。娘の死に嘆いた側室は心が壊れて廃人と化する。殿は娘と間接的に側室を壊した家臣Bを殺そ

うと躍起になる。

正室は友である家臣Bを殺そうしてゐる殿を止めようとするが怒り狂つてた殿から「わしにとつての正室はお前ではない。お前なぞわしに取つては何の価値もない」と言われて絶望し、自ら毒を飲み死に絶えて、未練たらたらな家臣Bは全ての元凶である殿を城ごと殺そうと火を放つて逃げられないようにし、天守閣で殿と一騎討ち。殿を殺すも愛する人を喪つた家臣Bは生きる意味を喪い、そのまま何処かへ消えていった。

その全容の中の一幕を抜粋する。

―殿が正室を責める―

殿「まさか、わしの正室ともあろう者が女中に手を出すとは何とも嘆かわしい。恥を知れ」

正室「恥？恥ですと？貴方はどうなのですか!?!元は貴方があの者（家臣A）と戦場で交わつてからこのような事に」

殿「あれはあの者から手を出した。そう申して終わった」

正室「嘘です！貴方のような武芸百般がそう簡単に手込めにされるものですか!」

殿「寝込みを襲われたのだ。この話は終わりだ。2度とわしに恥を欠かすな」

―正室、自室で嘆く―

正室「どうして!?!どうしてなんですの!?!貴方を愛しているのに貴方に愛されたいだけ

ですのに何故愛してくれないの!?女中と交わったのも魔が差しただけで貴方への愛情は何一つ変わってないのに!」

家臣B「失礼します」

正室「誰が入ってくるのを許可しましたか、下がりなさい。こんな惨めな私を見ないで」

家臣B「御言葉ですが貴方は美しい」

正室「ふえ?」

家臣B「私は貴女の事をずっと好いていました。今もです。いつも貴女に恋い焦がれていました。ですが、貴女は常に殿の方に恋い焦がれていました」

正室「何を言ってるのですか?」

家臣B「貴女を愛しています。殿のようなうつけは捨てて私と共に生きましょう」

正室「いや、私は殿と・・・」

家臣B「私だけを愛してください!私が今この世で最も貴女を愛してる男です!殿なんか見ずに私だけを見てください!」

正室「いや、いや!」

家臣B「どうして、私の愛がわからぬのだ!こんなにも貴女を愛しているのに何故!?!」

正室「それでも私は殿が好きです!」

家臣B 「ならば力付くでも」

正室 「イヤアアアア!!!」

冷静に説明しますがこれはあくまでもひなき達の書いてきた台本に則った上での話です。

しかし、このような不道徳的でなかなか罪深きな内容を8歳の子供が書いてそのメインを柱の3人がやってる事に一番シヨックが大きいのは柱の3人である。

明悟はキャラが全く合わない悪党で天元は片想いの陰険家臣、蜜璃に至ってた報われなさすぎな正室で3人の精神を非常に痛め付けてた。

時は戻り、漸く全ての台詞が終わり、最後にひなきの独白が入る。

「深い愛情は力になる。しかし、怒りや憎しみ、快楽に取り付かれた時、愛情は憎しみに変わり、力を持つも全てが破滅して誰もいなくなる。産屋敷ひなき、産屋敷にちか著

「戦国愛憎劇 最終幕 輝かしき栄光」より」

なんとも皮肉の効いたタイトルを聞き終えると柱の3人は盛大にため息を吐いた。

「派手に疲れたぜ」

「私の知ってるおままごとと違う」

「お疲れ様……ひなちゃん、これで最後？」



精神が寝れてる明悟がひなきに聞く。

「はい、叔父様！ありがとうございました！」

その言葉を聞いて倒れる明悟。

「どうした？」

「このおままごとの話、全部で60話有ったんだ。しかも毎回こんな重さで……」

天元と蜜璃はこんなのを60回もやってる明悟に感心と驚愕し、もはや尊敬の念を抱いていた。

「観客の皆様もありがとうございました！」

「「え？」」

明悟、天元、蜜璃がひなきの向いてる屋敷の縁側の方を見ると、柱と耀哉とあまねが縁側でお茶を飲みながら座っていた。

「うむ！天元の純情が素晴らしかったぞ！」

「ああ、こんな愛憎劇をお館様の子供達にやらせるとは嘆かわしい」

「津上さんを更に痛め付けていればより面白くなりそうですね」

「(あの雲の形って何かに似てるなあ)」

「(素晴らしかったぞ、宇随も甘露寺も津上も熱中していたから共感しやすかった話自体は)……単純な話だな……(いや、だからこそ分かりやすかったのだが)」

「何言つてやがる富岡！流石、お嬢様方、素晴らしい物語でした！」

「明悟は悪役に向いてるね」

「そうですね」

各々に感想を言つていく柱達。特に耀哉を敬いすぎてゐる実弥なんかキャラ崩壊レベルである。

で、話の種になつてる3人は急激に恥ずかしくなつて顔を背ける。普段なら3人とも絶対に気づくのだが、役に熱中して尚且つ、内容が内容であるために磨り減つた精神、特に予想外すぎる子供達の趣味嗜好に天元と蜜璃はへ口へ口で毎回参加してゐる明悟もやることに疲れきつていて気付かなかつたのだ。

蜜璃なんて、踞つて泣いてる。

「もうお嫁に行けない！」

「蜜璃ちゃん、大丈夫だから！ただの本の役回りをやっただけだよ」

「いやあ！最低浮気悪大名！」

「いや、それ本の役回り！」

「落ち着けて甘露寺」

「いやあ！変態家臣！」

「誰が変態だ！」

明らかに情緒不安定状態の密璃。結婚願望が強い密璃にこの浮気と寝取りだらけな内容は結婚に夢を持つ彼女には辛かったのか、乱心状態である。

「字随い、津上い〜」

天元と明悟は背中に刺さる殺気に身を震わせる。2人とも恐る恐る後ろを振り向くと小芭内が刀を抜いて殺気を放つた。首の白蛇の鱗丸すらも威嚇してる。

「よくもよくも甘露寺に対して数々の狼藉い、許さん!!」

「まて伊黒!」

「これ本の役回り!」

「問答無用!!」

密璃に関してポンコツになる小芭内は天元と明悟の言葉なぞ聞かずに刀を振り回しながら追いかける。2人も全力で逃げ回る。

そしてまだ泣いてる密璃はしのぶに慰められて、他の柱は2人を追いかけてる小芭内と言う珍事を見ながら、お茶を飲んでいた。

「平和だなあ」

「平和ですね」

「」「はい、平和です」」「」

産屋敷一家はその事に平和を感じていた。

因みに何故、子供達に好かれてる明悟があんな役回りをさせられたのかと言うと耀哉とあまねの2人があの役回りを明悟にさせないと許可を下ろさないと云った為である。

因みに今までの59話、明悟の役回りは全てあんな感じである。

明悟は内心、やつと全話終わった事に対してもう無惨に死ななくて済むと心の底から安堵していた。

「次はどんな話にしましょうか」

「悩みますね」

この本を書いたひなきとにちかが次の内容を考えていた。

今回、参加していた3人はその後、明悟は炭治郎達の特訓で3人に八つ当たり気味にやっつて、天元は大好きな嫁達を存分に愛して、蜜璃はやけ食いしていた。



一方、その頃、人間に戻った轆轤と零余子は道端で拾ったはした金を元手に博打をやり、アギトの超能力を使つて大金にしていた。

その後、悪党から狙われたが、見事に生身の素手で撃退して浅草にある屋台で山かけうどんを食べていた。

久しぶりの人間の御飯に感動して涙を流しながら食べてた。

店主の豊さんはそれに感激して、なんと御代を取らずに2人にご馳走していた。

2人とも感謝して何杯も食べた（2杯目からはちやんとお金を出しています）

後日、2人はお腹を壊した。

## 夢の列車編 夢で逢えたなら

## 明悟の誕生日

明悟は藤の家で目を覚ました。

カナエをおぶって連れてくるとボロボロだった明悟も倒れて布団に入れられた。

布団から起きて日課である日光浴をしようと縁側に行く明悟。するとそこには頭と足に包帯を巻いた寝巻き姿のカナエが日輪刀の手入れをしていた。

「あ、起きたんですか？昨日はありがとうございませす！」

カナエが明悟に気づき、笑顔を向ける。

「助けられたのはこっちだよ。ありがとう」

「いえ、私をここまで運んで下さいました」

「当たり前な事をしたただけだよ」

「でしたら、私もそうです」

笑うカナエに明悟も笑う。

明悟は少しだけ離れた所に座ると日光浴を始めた。

2人は会話をした。

と言つても、カナエの話す事に明悟が相槌を売つてただけであるが、聞いてて楽しかった。

特に怒りっぽい妹の話になると凄い饒舌で本当に愛しているんだと分かった。

「明悟さんの御家族は？」

「いないよ……つてより覚えてない」

「覚えてない？」

「5年くらい前に記憶がない所をお館様に拾われてね。それ以前の記憶は無いんだ。歳も背格好が似てたから一応、お館様と同じ歳かな？つて感じてね。だからかな？毎年歳を取つてる筈なのに実感が無くてね。今も自分の歳を一応覚えてるけど、あんまり」

明悟は淡々と話した。別に過去の記憶で苦しんだ事は1度もない。どんな状況でも自分は自分と明悟はそこら辺の精神は強い。

「知つてますか？西洋では自分の産まれた日を祝う習慣があるんですよ」

「誕生日だよな？帝政ドイツで確か産まれた日に悪霊がやってくるから1日中ケーキに蠟燭を灯して追い払い、それが終わると皆でケーキを分け合う風習だったと思うけど」

「そうです！自分の産まれた日が皆との思い出になるなんて良いと思いませんか？」

カナエの言葉に明悟は確かに良いと思つたが自分には縁がないと思つた。

「俺には縁がないなあ」

「だから！」

カナエが草履を履いて明悟の前に来る。

突然の行動に明悟はびっくりする。

「今日を明悟さんの誕生日にするんです！」

「はい!？」

「どうですか？良いと思いませんか？」

「いや、いいよ・・・それに一人で祝っても意味ないよ」

明悟の言葉にカナエは膨れっ面になる。

すると何かを閃いたのか懐から表裏と彫られてるコインを取り出す。

「この硬貨で表だったら今日が明悟さんの誕生日でどうですか？」

「どうですか？って言われても」

「いきますよー！」

「ちよつと」

カナエはそう言うのと庭に行つてコインを弾く。

コインはカナエの右手の手の甲に落ちて、それを左手で覆う。明悟はコインが気になり、カナエに近づくと左手手をどける。

コインは表を向いていた。



その事に明悟は目が点になり、カナエは飛び跳ねる。

「これで今日が誕生日ですね！だって表なんですから！」

「何で、赤の他人なのにそこまで喜ぶの？」

明悟の言葉にカナエは首を傾げる。

「私と明悟さんはもう友達じゃないですか」

「え？」

「一緒にお話しして、一緒に楽しんだからもう友達です！」

明悟はカナエの言葉に笑う。

同情とかそう言うのではなくて素でこう言う性格なんだと感じた。

「だったら、俺は今日から17歳・・・かな？」

「私よりも2つ上ですね」

「15だったの？」

「はい！」

何て事ない日が良い日になった。

全力で人の幸せを喜んでくれるカナエに明悟は見惚れていた。

すると、カナエは踞り、足を擦り始める。

まだ傷が治ってないのに跳ねたりなんなりしてるからだと思つた。

踞つてるカナエの目の前にしやがみ、背中を向ける。

「縁側まで乗せるよ」

「ふえ・・・い、いいです！ 私もう子供じゃないので」

「良いから、誕生日のお礼だよ」

カナエは別に堪えられないわけではなかったが、明悟がテコでも諦めそうになかったのでおぶられた。

おぶられたカナエは顔を真っ赤にする。

妹をからかう事は良くあるがこの姿を見られたら絶対にからかわれると思った。

「これから、『今日』をずっと大事にし続けるよ。カナエちゃん」

「お誕生日、おめでとうございます」

優しい言葉に明悟は嬉しくなった。

2人の初めての思い出である。

.....胡蝶カナエ死亡まで後2年.....



明悟は目を覚ます。

久しぶりに懐かしい事を思い出した。

明悟とカナエの最初の思い出。

カナエが死んでから明悟は毎年欠かさずある事をやってる。カナエの墓参りだ。

ただ、カナエの命日には行ってないしお盆にも行ってない。行くのは決まって自分の誕生日だ。初めての思い出の日には彼は行く。行って思い出に浸る。彼女はもう死んでるし永遠に戻ってこない。けどそれでも全力で生きてる明悟にとって一番嬉しい誕生日

日祝いはカナエの純粋な祝いの言葉である。

絶対に聞けないがひよつとしたらと思つて毎年、誕生日に行つてしまふ。

彼女の分まで生きてるつもりが情けなくも求めてしまふ自分に自嘲する明悟。

「明日は誕生日か……」

この夢を見る時は決まつて誕生日の前の日になる。

明悟は布団から出て朝食を食べてから、コートを着てハットを被り、家を後にする。

回復した炭治郎達3人と炎柱である杏寿郎の5人でこれから任務に当たる。何でも列車の中で人が消えているらしいのでその調査だ。

既に杏寿郎が調査してるがそれに炭治郎達3人が入り、柱1人とまだ新人が3人では心配なので明悟も一緒に行くことになった。

途中、いつも行つてる定食屋で新商品が販売された。薩摩芋の豚汁だった。

明悟は店主に今度行くとだけ行つてから再び蝶屋敷に向かう。

蝶屋敷に着くと一応の声をかけてから上がる。

そのまま3人のいる部屋に行くと善逸は彌豆子が入つてる箱に向かつて話してて伊之助は刀を見ていた。

「あ、明悟さん！」

「やあ、2人とも．．．炭治郎君は？」

2人とも首を横に振る。

明悟は2人とも準備が終わっていたから炭治郎が終わってるか確認の為に探し始めた。

人並み外れた嗅覚でもう既にここに来てる事はわかってると思うが、何処にいるんだろうと思つて蝶屋敷の中を見て回る。

すると庭の方が騒がしかったので見に行く。

行くと炭治郎がカナヲに迫っていた。

「あ、明悟さん！」

「やあ、炭治郎君、カナヲちゃん．．．どうしたの？」

「明悟さん、聞いてください！」

「ん？」

炭治郎は明悟にカナヲの事を話した。と言つてもカナヲが言つてた事をただ明悟に言つてただけだが、自分で決められないからコインを使って決める。

明悟はカナヲとあつた時、コインを取つてどこか不思議に思った。懐かしい感覚があつた。

けど思い出せなかつた。

無意識に蓋をしてたのだ。

その事に内心暗くなるが、今は炭治郎の話に集中する。

「だから、きつとカナヲの心の声は小さくて聴こえずらいんだと思います」

「そうだね・・・コインか・・・」

明悟はカナヲのコインを見る。

炭治郎はその目線に気づき、自分もコインを見る。

「ちよつとそれを貸してくれる？」

「え?・・・うん・・・」

炭治郎はカナヲからコインを借りて庭の真ん中に行く。

「よし、投げて決めよう!!」

「何を?」

「カナヲがこれから自分の心の声を良く聞くこと!」

炭治郎はコインを上弾く。

カナヲはその姿に呆気を取られて、明悟はその姿にカナエを重ねた。

「表!表にしよう!表が出たら、カナヲは自分の心のままに生きる!」

炭治郎は慌てながらもコインを自分の手の甲に落とす。カナヲはどちらの面か分

からず、明悟も気になって見てた。

そして出たのは表だった。

「表だ！カナヲ、頑張れ！人は心が原動力だから心はどこまでも強くなれる！」  
カナヲの手を繋ぎながら答える炭治郎。

この姿にも明悟は炭治郎にカナエの姿を重ねていた。あまりにも似てて笑う。  
「けど、炭治郎君。表ってどうしてわかったの？」

「偶然ですよ。それに裏でも表が出るまで投げ続けようって思っていましたから」  
明悟は声を出して笑う。

「どうしたんですか？」

「単純と言うか強引と言うか、俺の恋人にそっくりだったよ」

明悟は炭治郎の頭を撫でる。

炭治郎は突然の事に驚く。

「君はそのまままで居続けてね。さて、任務に行くよ！」

「はい！用意してきます！カナヲまた会おう！」

1人颯爽と準備に向かう炭治郎。

明悟はまだ笑ったままでカナヲはコインを大事そうに握っていた。

「カナヲちゃん」

明悟はカナヲの頭も撫でる。

カナヲは撫でてきた明悟の顔を見る。

「頑張つてね。そんなに深く考えなくてもいいよ、カナヲちゃんはかわいいから」

明悟はそう言つて自分も颯爽と準備に戻つていく。

カナヲは黙つてその背中を見る。

「カナエ……姉さん？」

明悟にカナエの姿を重ねていた。



蝶屋敷を出る時に3人ともお世話になった看護婦のなほ達に最後の確認でどでかい瓢箪を呼吸で破壊して別れた。因みに明悟が同じように瓢箪を破壊しようとしてもヒビ一つ入れる事も出来ない。

そして調査対象である列車に乗る為に駅に来る。

伊之助は初めての人の混みに怯えてるのか炭治郎に引つ付いていたが列車を見て興奮し始めた。



「この主だと言つていたがただの列車なので善逸は冷めた目で見ていて、炭治郎も列車そのものを知らなかったので土地神と勘違いをしていた。」

明悟は切符を3人分買つて来て戻つてると、伊之助が列車に頭突きをしていた。

なんとか止めたが駅員に追われて走り出した列車の後ろに飛び乗った。

「危なかった・・・伊之助君、止めようね?」

明悟が伊之助の肩に手をおきながら話す。

「ミシミシと肩から音がなつてゐるが気のせいだ。」

「ハイ・・・」

伊之助がしおらしいのも気のせいである。

明悟は3人に竹刀袋を渡して刀を隠させた。

「取り敢えず、これで腰に差さなければ列車の中だけなら誤魔化せるから、鬼殺隊は政府非公式で刀を堂々と持てないし、鬼の事を話しても信用はともかく混乱は避けられなくなる。そうなるのと折角無惨が出てきそうな状況なのに無惨が出てこなくなる」

「一生懸命頑張つてるのに」

「仕方ないよ炭治郎」

全員、竹刀袋に入れた刀を背負う（炭治郎は禰豆子の箱を背負つてゐる為、手持ち）と中に入る。

騒ぐ伊之助をよそに暫く進んでいくと、非常にうるさい声でうまいうまいと言つて弁当を食べてる杏寿郎を見つけた。

4人ともそこに向かう。

その前の席では1人の女の子が声を出してないが杏寿郎と同じようにばくばくと弁当を食べてた。

「杏寿郎君、凄い食べるね」

「おお、番井!」

「津上だよ。覚えようね」

明悟達は杏寿郎の所に座る。

明悟が杏寿郎の隣で炭治郎がはす向かい、禰豆子はその隣で伊之助は空いてる隣の席に行き、善逸が伊之助の世話をしている。

炭治郎が色々と杏寿郎と話をしているのを横に明悟は列車の外の景色を眺めていた。

心地よい風が心を落ち着かせるが・・・

「美味しい!美味しい!美味しい!!」

後ろの席から杏寿郎に負けず劣らずのうるさい女の声が聞こえてくる。

「おい待て!それ俺の団子だぞ?!」

聞いたことがある男の声が明悟の耳に響く。

「杏寿郎君、炭治郎君！ちよつと待つて!!」

「明悟さん？」

「どうしたのだ、番井？」

「だから、津上だつて！何か聞いたことがある声が……」

明悟は後ろの席を見るために少し背を伸ばす。

「この声は……」

すると後ろの席の男も背を伸ばす。

男は轆轤だった。

互いの顔を見た瞬間、真顔になる2人。

「お前は！」

轆轤の顔を前に見たことがある炭治郎は刀を手取る。

「どうしたの？……つて鬼殺隊!？」

轆轤と一緒にいる零余子が団子を食べながら見て鬼殺隊に驚く。

「何でお前がここに？」

●●●  
事は明悟達が列車に乗ったのと同ほ同時刻。

轆轤と零余子は急いでいた。

列車に乗るためだ。

別に急ぎ旅でもないがこれを逃すともう走ってないので全力で急ぐ。

轆轤の手には団子の包みがあり、零余子には弁当があつた。何故に轆轤が弁当を持ってなくて零余子が団子を持ってないかと言うと金が無くなつたのである。

しかもこれから列車に乗る為、なけなしの金も切符に消えた。

故に零余子は弁当を買って、轆轤は団子しか買えなかつた。

列車に乗る理由は轆轤の目的である鬼で人が消えてる噂話から可能性が高いと思ひ、乗ろうと走つてゐる。

そして後ろから二三両目の所で乗った。

明悟達はその頃、一番後ろに乗っていた。

そして2人は二両歩いて唯一空いていた杏寿郎の後ろの席に座ったのだ。

零余子が座って轆轤が団子を置く。

「ちよつと便所に行くから、絶対に団子を食うなよ」

「わかつてるわよ」

こうして轆轤は便所に向かう。

便所は後ろから二両目と三両目の間にある。

そこまで歩いていき、扉を閉めた時に明悟達がその間にやって来て、すれ違う。

そして零余子知らない4人はその上、顔が良く見えなかつた為、素通りしたのだ。

轆轤が戻ってくると、団子を食べ始める。

そして最後の1本が零余子に食べられる。

「美味しい!美味しい!美味しい!」

「おい待て!それ俺の団子だぞ!」

「1本ぐらいでケチケチしないでよ」

「弁当あつただろ!?!」

「甘味は別腹」

「ふざけんな！」

と轆轤と零余子が言い争つてると、

「杏寿郎君、炭治郎君！ちよつと待って!!」

と轆轤の耳に明悟の声が響く。

「この声は……」

そして声をした方を見て鉢合せたのだった。

「何でお前がここにいる？」



あの後、一先ず互いに敵意が無いので、一緒の席に座る。明悟と杏寿郎の向かいに轆轤と零余子が座り、隣の席に炭治郎達3人が座っている。

「何で下弦の式がここに居るのかな？」

「元だ。先日退職した」

「退職って……見たところ人間みたいになつてるけどそつちの彼女の血鬼術かな？」

「違う。この前貰ったお前の血だ。あれを射ったら戻った。死ぬほど体が苦しかった

が……」

轆轤の言葉に驚いたのは他でもない明悟である。まさか自分の血にそんな効果があるとは思わなかった。

「それで、目的はなんだ！」

杏寿郎がうるさい声で聞く。

気迫も凄い。

人間に戻ったからと言って彼らが喰ってきた人は戻らないし、その罪は永遠に消えない。

杏寿郎の気迫も納得である。

「人が消えてる噂を聞いてな。血鬼術が絡んでると思ってたんだよ」

「それは鬼殺隊の仕事だ。首を突っ込まないで貰いたい！」

「ただのそっちの都合だろ？こっちにはこっちの都合がある」

「申し訳ないが元十二鬼月の言葉を信用する理由はない！」

「どうしてだ？」

「人を喰う悪鬼は信用に値しない」

杏寿郎の言葉に轆轤は鼻で笑う。

零余子は轆轤と杏寿郎の2人の言い合いにビビり縮こまっていて明悟は黙って聞いて

ていた。

「お前だつて人の事は言えないさ」

「なに？」

「人間だつて魚や肉、野菜を食らう。生きとし生きる物を食べる。鬼はそれが人間だつたつて話だ。お前から人間とは何も変わらない。もしも鬼に人を食うなど云うならばそれを唱えるものは餓死寸前でなければ言葉に意味がないがお前は健康そのものだ。酷く矛盾してる。まあ人を食うよりも苦しめる方を楽しむイカれた変態もいるがそんなのは人間だつて一緒さ」

ニヒリズム全開で杏寿郎の言葉を無意味と唱える轆轤。杏寿郎もその内容を黙つて聞き、明悟はその事に理解していた。

「食つて命を奪う鬼が悪鬼なら、お前らも悪鬼だ」

「そうだ」

轆轤の言葉に明悟が理解を示し、杏寿郎だけでなく炭治郎達、そして轆轤達も明悟を見る。

「人間も鬼も変わらない。生きる物は誰かの命を奪いながら生きてる。地獄に落ちる運命にある。けどそこから這い上げられる。どんなに命を食つてもどんなに罪の中に居ようとも這い上げられる。それを人は『良心』つて呼ぶんだ」



「『良心』で飯は食えない、生きていけない」

「『良心』がなければただの畜生と一緒だよ」

互いに目を向き合う轆轤と明悟。

杏寿郎と轆轤のような火花が散るような物ではなく、まるで意見を交換してのような穏やかな話し合いだ。

「あの一・鬼から人間に戻ったって本当なのか！」

炭治郎が轆轤に聞く。

彌豆子を人間に戻したい炭治郎に取って、本当に人間に戻った2人に聞くのは当たり前だった。

「ああ、ただ薦めはしない。苦しいし何よりも十二月鬼月並の強さがないと生き残れない。弱い鬼で実験したが皆死んじまったよ。お前が持つてる箱に入ってる鬼が誰かは知らないが十二月鬼月級の強さが無いなら止めとくんだな」

轆轤はアギトの超能力で箱に入ってる彌豆子を感じて炭治郎に言う。その事実には炭治郎は落ち込む。折角見つけた人間に戻れるかも知れない手掛かりが鬼として強くないと戻れない物とは落胆せざるを得ない。

落ち込む炭治郎を善逸と伊之助が励ましてるのを横で見ながら、明悟は2人をどうするべきかと悩んでいた。

鬼なら容赦なく斬り首だが、人間に戻ってる。  
無惨の手掛かりにもなる。

どうするのが正しいかわからなくなっていた。

「切符・・・拝見致します・・・」

幽霊のように静かに車掌がやってくる。

明悟と轆轤と零余子は嫌な感じを感じ、くが辺りをさりげなく見渡しても何もなく、どう見ても車掌は人間な為、後で調べる事にして切符を切手貰った。



「明悟さん、明悟さん。起きてください、朝ですよ」

明悟は懐かしい声に呼ばれて目を開ける。

そこにはカナエがいた。

明悟は勢い良く起き上がり、カナエとデコをぶつける。互いに頭を抑える。  
「もう明悟さん! どうしたんですか?」

カナエの心配する声に明悟は何も言わずにカナエを抱き締める。

「明悟さん?」

「ごめん、今だけはこのままで」

「分かりました」

明悟を抱き締めしてくれるカナエ。

自然と涙が頬を伝っていく。

嗚咽が出てくる。

「大丈夫ですか?」

「大丈夫、大丈夫だよ。ずっと会いたかった」

「私はここにずっと居ますよ」

少し泣いて暫くしてカナエから離れる明悟。

「ごめんね。急に変な事やっちゃって」

「良いんですよ。いつでも言ってく下さい」

「それで何の任務かな?」

「任務なんてないですよ。今日は休日じゃないですか、一緒にゆっくりしましょう」  
カナエの笑顔の言葉に違和感を感じる明悟。

明悟は寝間着から普段着に着替える。

そしたら、カナエが朝御飯を持ってきてくれた。

シンプルなうどんだった。

「いただきます」

「どうぞ」

うどんの出汁を一口飲む明悟。

明悟好みの薄味で美味しい。

箸が驚くほど進み、あつという間に平らげてしまう。

「ごちそうさまでした」

「ありがとうございます。それじゃ、持っていきますね」

「自分で持っていくよ」

「そうですか、ありがとうございます」

明悟は朝御飯を洗い場に持っていき、洗い始める。

するとカナエが後ろから抱き締めてくる。

「ちよつとカナエちゃん。どうしたの？」

「良いじゃないですか、もうすぐ桜も帰ってきますよ」

「桜?」

「ふふ、自分の娘の名前も忘れたんですか?もう婚約の時から言ってるのに・・・」

明悟はカナエを離れさせると洗い物をそのままに庭に出る。冷や汗を掻く明悟。

カナエがゆつくりとやってくる。

「明悟さん、どうしたんですか?」

明悟はカナエを見て深呼吸する。

そしてきちんとカナエの目を見る。

「君は一体誰?」

突然、甦ったカナエ。

そして明らかになった明悟とカナエの娘。

今、2人の止まっていた時間が動き出す。

# お誕生日、おめでとう

明悟とカナエが出会って半月が経ち、互いに動くのに苦勞しなくなり、リハビリの期間に入った。

鬼殺隊には所謂専門の主治医がいる医療機関がない。

それゆえ藤の家の女将が知り合いの腕のいい医者連れてくるがカナエはその医者に負けず劣らずの医療の心得があり、明悟もそれに助けられていたが・・・

「痛い痛い痛い痛い痛い！」

明悟はカナエが施すえない柔軟に死ぬほど苦しめられていた。そして後悔していた。

「大丈夫ですよ。ガチガチのをグニャってやるだけですからそしたらホワワにビュビュって動けるようになります」

「君、絶対説明下手だろ!?痛いわ！」

「それじゃ、続きを」

「止めてくれ!!」

明悟の静止を振り切ってまだやるカナエ。

そして暫くするとグニャグニャになった明悟が出来上がる。カナエにも同じ事をやろうと明悟はカナエを見るが、抜群の柔軟性で明悟が何か出来る余地は無かった。

そして昼食の時間が近づいてくる。

2人とも体を回復させようとするが今日は違った。

カナエが昼食を作りたいと女将に言ったのだ。

何でも日頃から食べさせてもらってるから女将さんに出来る限りゆつくりして欲しくてカナエは代わりに昼食を作る。

明悟も本当は作りたかったが、カナエに施されてへ口へ口だった為に動けなかった。

明悟が回復すると同時にカナエと女将が昼食を持つてくる。

美味しそうな肉と卵のうどんだった。

明悟も大好きな御飯がやって来て座り、食べる姿勢になる。

「いただきます」

「どうぞ」

笑顔でうどんのつゆを一口飲む明悟。

飲んだ瞬間、真顔になるが笑顔に戻して食べていく。

カナエはその真顔に引っ掛かるも麺が延びる前に食べていく。

10分位して食べ終わると、明悟は楊枝で歯に微妙に詰まってしまった肉の繊維やら

なんやらを除いていく。

「美味しかったよ」

「そうですか?」

カナエがジト目で明悟を見つめる。

「どうしたの?」

「嘘ですよ。食べてる時に真顔になったじゃないですか、私はそういうの余り好きではないです。本当の事を言ってください」

「言っつていいの?」

「勿論!」

明悟の疑問にカナエは笑顔で答える。

そして遠慮が一切なくなった明悟を知ってカナエは後悔する。

「じゃ、言わせて貰うけど、味が濃い。あとエグミがあるよ。鰹節搾ったね?」

明悟は捲し立てるようにカナエのうどんの問題点を指摘しまくる。

別にカナエは料理下手ではない。寧ろ上手い。

ただ、明悟はあちこちの店に行つては食べてを繰り返すほどの食好き。かなりの量の味を知つてる為にカナエのうどんは味が濃すぎたのである。

しかもカナエは鰹節を搾つたのだが、これは間違ひ。



搾ったことで鰹節から出るエグミのせいであつたのだ。

勿論、料理のプロでもないカナエにここまで言つても仕方がないのだが、そこは食べ物関係には一切の容赦がない明悟。延々とくどくどネチネチ言いまくる。

しかも時よりウンチクまで言つて大変、人の怒りを買う言い方である。

カナエも我慢の限界が来たのか、空になったどんぶりを明悟に向かつて投げる。

明悟は突然の事に避けられずに当たつてしまう。

頭を抑えてのたうち回る明悟。

「そこまで言う必要ないじゃないですか!」

「だからつて物投げるな!この料理下手!!」

明悟の容赦のない悪口にカナエの額に血管が浮かぶ。

「言いましたね!? だったら私よりもさぞかし美味しいの作れるんでしょね!」

「上等だよ!」

明悟はそう言うとうち所に行き、うどんを作つて持つてくる。透き通るような美しいつゆが特徴のシンプルなうどんだ。

カナエは一口飲んで食べていく。

「美味しいですよ?」

「薄いです」

「は？」

「明悟さんも下手ですね」

カナエの笑顔の一言に今度は明悟の額に血管が浮かぶ。

「君の味覚が狂ってるだけだよ」

別にカナエの味覚は狂っていない。これは呼吸のせいである。代謝を早めて体の機能を爆発的に上げる呼吸しかもそれを日常的に使う常駐を使うと当然、栄養やらカロリーやらが早くなるので栄養価の高い濃いものが好きになる。明悟は確かに下手な料理人よりは上手いが呼吸が全く使えないので呼吸が使える人の舌の変化が分からなかったのである。

笑顔でにらみ会う2人。

これが2人の最初の喧嘩である。

因みにこの下らなさすぎる喧嘩は女将がまた新しいうどんを作ってきて2人ともそれが自分のよりも遥かに美味しかったので喧嘩してるのがバカらしくなり止めた。

藤の家の女将の一本勝ちである。



尚更」

明悟の言葉にカナエは顔を曇らせていく。

それを見て明悟は確信した。

このカナエもこの世界も偽りの世界なのだ。．．．これは下弦の壺の魘夢の血鬼術。

対象を眠らせてその物が一番見たい夢を見させ、対象の夢の外側にある無意識の領域にある精神の核を破壊し廃人にさせて精神が壊れた人間を食べると言うえげつない血鬼術である。

そしてその精神の核を破壊するのは魘夢ではなく、魘夢がいい夢を見させると言つて傀儡として人間がこれを行う。

しかし、明悟の夢にその人間が入ってくる事はない。

これはアギトの力で魘夢の血鬼術に対抗してゐる為である。明悟だけでなく、轆轤と零余子も夢に誰も入つてこれない。更に言えばアギトの力で微妙に相殺されてゐるか夢を見てゐる本人の理想に世界が作られてゐる。

本来の魘夢の血鬼術ならばもつとリアルにもつと現実的に出来るがアギトにはそれが非常に効きにくかつた。

故に明悟はカナエが居るこの世界が夢だと気付いたのだ。

カナエは目に涙を溜める。

「どうしたの?・・・私は本物だよ。信じてよ」

明悟も目に涙を溜める。

「信じてる。信じてるさ、けど違う。決定的だったのは桜の名前だ」

「え?」

「男の子だったら英二、女の子だったら桜が良いって言ったのは俺だ。けど君はこう言った、男の子だったら真司、女の子なら春。互いに言い争ったけど何も決まらなくて、君の身内に会う時に決めようってなって・・・そして君は死んだ。今でもわかってる君の頑固さは鬼殺隊一、それが人の名前とか大事な事なら更に頑固になる。だから桜って名前は少なくとも簡単には決まってる。婚約の時から言ってるって言ったよね?子供が出来た事の可能性もあるけど婚約前から子供の事は話してた。婚約時に話したのは子供の名前・・・だからあり得ないんだ。カナエちゃんがつけたがってた子供の名前があっさり俺の理想になるなんてあり得ないんだ」

明悟の言葉にカナエは膝をついて泣き始める。

そんなカナエを明悟は抱き締める。

「私は死んだの?」

「ああ」

明悟の背中に手を回してすがり付くカナエ。

「やだ！やだ！やだ！明悟さんから消えたくない！消えたら永遠に死んじゃう！」

「消えないよ。絶対に消えない。だって俺が本気で恋して本気で愛した自分の……妻だ。消えるもんか……忘れるもんか！」

明悟は泣きながらカナエを抱き締める。

絶対に離さないように絶対に忘れないように抱き締める。

そして明悟の言葉と行動にカナエは泣きながらも笑顔になる。

「妻か……誰かのお嫁さんになるなんて夢でもあり得ないと思つた」

「そんなの決まつてないよ。人の未来や運命は決まつてないから……瞬間瞬間を必死に生きてこそ人だ」

「絶対に忘れない？」

「ああ……ここでもう一度誓う。君の分まで絶対に生きる。必死に生きる。だから、待つて」

「あの世でも歳を取るかも知れないよ。そしたらおばあちゃんになつてるかも……」

「そんなの関係ないよ。君は幾つになつても君だ」

「……私という幸せだった？」

「ああ、喧嘩もしたし、嫌いになつたりしたけど幸せだった。君といてこの世で一番幸せになつた。君を死なせたから、無責任だし最低かも知れないけど、君といて幸せになれ

た」

「良かった……」

明悟はカナエから離れる。

そしてベルトを出す。

初めて見る物にカナエは驚く。

「君に教えてなかった俺の秘密さ」

優しい明悟の顔を見てカナエは微笑む。

「明悟さん、頑張つて」

「ああ……変身！」

ベルトが光輝き、胸のモノリスからどんどんアギトの姿になってくる明悟。

体が黒と金になり、光も強くなり、顔以外の変身が終わる。

カナエは明悟に飛びつき、明悟の唇にキスをする。

突然の事に茫然となる明悟。

カナエが唇を離すと、明悟の顔がアギトになる。

「明悟さん、お誕生日おめでとう！」

カナエが涙を流しながら笑顔を向ける。

ベルトの光が明悟の夢の世界を包み込み、カナエも消える。

明悟の表情は分からない。

泣いてるのか、笑ってるのか、一切の感情がアギトの顔に隠れて分からなくなってる。これが明悟だ。

悲しみも苦しみも怒りも愛情も何もかも全てをアギトの顔に隠して戦うのが明悟だ。

これがアギトだ。

「ありがとう、カナエ」

穏やかな声で感謝する明悟。

結局、この世界が明悟の理想なのかそれとも血鬼術で作られた世界なのか分からないし、カナエが本当にカナエだったのかも分からない。

けど明悟にとって最後の自分の誕生日を祝ってくれたカナエは本人だった。



明悟はアギトの姿で目を覚ますと、手には縄がついてあり、その先には眠っている子供がいた。



明悟はその縄を外して、子供の頭を撫でて周りを見ると杏寿郎が少女の首を眠ったまま絞めていた。

「杏寿郎君!」

明悟が杏寿郎の元で首を絞められてる女の子を何とかしようとしたら、炭治郎が叫びながら起き上がってくる。明悟はそっちの方を見ると禰豆子も起きていた。

炭治郎が自分の腕に巻かれてた縄を見た後、持っていた切符を見て匂いを嗅ぐ。

「禰豆子頼む、縄を燃やしてくれ!」

禰豆子が血鬼術の爆血で杏寿郎や寝てる善逸や伊之助、轆轤や零余子の縄まで燃やす。

すると轆轤と零余子が目を覚ます。

轆轤は頭を抑えながら立ち上がる。

「血鬼術か・・・なめた真似を」

「お父さん・・・お母さん・・・何処?」

轆轤は辺りをすぐに状況を認識するが零余子は涙を流しながらまだ状況が掴めていなかった。

「大丈夫?」

「気分が悪い」

「自分の理想過ぎたか？」

「ああ・・・零余子、確りしろ鬼だ」

轆轤の言葉を聞いた零余子は動かずに頭を抑えて縮こまる。轆轤はその状態に別の意味で頭を抑える。

「彼女・・・大丈夫？」

「まあ、勝手について来てるだけだ。どうでもいい」

明悟と轆轤がそう簡単な話をしていると突然、人間が小刀や錐を持って炭治郎、禰豆子、明悟、轆轤に向かって襲ってくる。

「何するんだ!？」

「危ないだろ!？」

「邪魔しないでよ、あんた達が来たせいで夢を見させて貰えないじゃない!？」

その一言で明悟達は自分の意思で鬼に使われてると理解して瞬時に気絶させた。

「明悟さん、大丈夫ですか？」

「炭治郎君、俺は大丈夫。君は？」

「大丈夫です!？」

「よし、急いで大本を・・・」

明悟はアギトの超能力によって両端から歩いてくる2つの存在に気が付く。轆轤も

気が付き、炭治郎も匂いによって気がついた。

そして両端の扉が開かれる。

出てきたのは下弦の参の病葉と下弦の陸の釜鶴だった。

ただし、2人とも理性なんて物を感じさせなかった。

「十二鬼月が2人も!?!」

「クソ、人手が足りないな」

明悟はやつて来た2人を見てどうすれば良いかを考える。

すると轆轤が釜鶴の前に立ち、ベルトを出現させる。

「なっ!?!」

「まさかとは思ってたけど」

轆轤のベルトに驚く炭治郎と明悟。

「変・・・身!」

轆轤はアギトに変身する。

その光によって病葉と釜鶴は少し火傷する。

それに激怒したのか、言葉を言うことなく襲い掛かってくるが、明悟は病葉を轆轤は

釜鶴を掴み、抑える。

「炭治郎君、ここは何とかするから大本の所に!」

「はい！」

炭治郎は車両の屋根に上がり、元凶の大本を探し始める。

「禰豆子ちゃんは頑張つて3人を起こして」

大きく頷く禰豆子。

明悟は反対側で釜鵠を抑えてる轆轤を見る。

「君、名前は？」

轆轤も釜鵠を抑えながら明悟を見る。

「……轆轤だ！ 芦原轆轤！」

「轆轤、そいつを屋根の上に移動させろ！ もしも他の乗客に怪我を負わせたらお前を倒

す！」

「……良いだろう」

明悟と轆轤は屋根の上に何とか2人を持つてくるが、殴り蹴られ弾き跳ばされて互いに車両の屋根の上の真ん中に来る。

立ち上がり、背中合わせになる2人。

「そつちは任せて良いか？」

「良いよ、その代わり乗客は守れ」

「……なら今回は俺達を見逃せ」

「わかった」

互いに敵に向かって構える2人。

すると2人が変化する。

病葉は蛇を模した怪人コブラに釜鶴はコウモリを模した怪人バットになる。

2人は互いの敵に向かって戦い始める。

コブラは口に生えてる牙から毒を出して明悟に襲い掛かってくるが、明悟はその攻撃を見事に防いで腹を殴る。

バットは飛び掛かって轆轤を攻撃してくるが轆轤は上手く対処して腹を殴り、バットの足を掴んで放り投げる。

体勢を立て直したバットは口から超音波を出す。

その攻撃に頭を抑える轆轤。

攻撃しようにも轆轤には遠距離の武器がない。

明悟は自分の敵のコブラに集中する。

コブラは素手だと分が悪い事に気付き、距離を取って牙を噴出してくる。

明悟がそれを避けると当たった所が溶けている。

また牙を噴出してくるコブラ。

明悟はストームフォームになり、ハルバードで牙を全て吹き飛ばす。

轆轤はバットの超音波に苦しめられながらも明悟の戦いを見てた。まだアギトになつて日が浅い轆轤は明悟の戦いを見てアギトその物に慣れようとしていた。

そして明悟がストームフォームに変わったのを見て、自分も変わろうと左のスイッチを押す。

すると明悟とは違った変化をした。

左半身は緑になり、肩は色が変わっただけで変化せず、籠手が一回り大きくなり、流れる水のような流線形になる。

轆轤は瞬時にこのフォームの特性を理解して、ベルトから武器を出す。

ハルバードではなく、弓だった。

弦は付いてなく、弧が刃になっていて和弓のような大きさはなく、まるで曲がった双頭刃である。

バットはまた超音波で攻撃してくるが、轆轤は弓を左手に持ち、右手で矢を引く体勢になる。

すると水の弦と矢が現れて発射される。

水の矢はバットの羽を貫き、列車の屋根の上に落とす。

これが轆轤だけの新しい姿、水の力を司るアギト、アキアフォームである。

轆轤は落ちたバットに向かって弓……アキアアローを振るう。

斬激を喰らうバットは吹き飛び立ち上がろうとするがよろける。

轆轤はすかさずにアローを構えて弓を引き絞る。

水の矢が精製されて矢の周りが光を纏う。

明悟もハルバードを振り回して、両刃に風と光を纏わせる。

轆轤はバットに思いつき矢を放ち、明悟はハルバードを持つてすれ違い様にコブラを斬る。

バットとコブラは灰になり、死んだ。

理性が無くなり、それでもなお襲ってきた2人に明悟は非常に困惑した。

「理性すらも無くさせるなんて・・・」

「趣味が悪い」

轆轤が悪趣味さに苛立つ。

2人ともグラウンドフォームに戻り、大本を叩こうと炭治郎が向かった先頭車両に向かう。

すると炭治郎が先頭車両から走ってくる。

「明悟さん、鬼は列車と同化してます！乗客を全員殺す気です！」

明悟と轆轤は屋根を叩き壊して列車の中に入ると壁から生えた触手が乗客を食べようとしていて明悟と轆轤は手足に光を纏わせて消していく。

「鬼の首の場所がわかるか!？」

「いや、列車に溶け込みすぎてわからん! お前の方がこの力に詳しい筈だろ!?! こういった時はどうしてた!？」

「体力が続く限り倒してたよ! 列車自体が鬼に変化して鬼の気配なら無数にあちこちからしてるよ!」

「案外不便な力だな」

「まあね」

不便ではあるが、役に立たない力ではない。これはアギトの超能力が強すぎるのだ。

そのお陰で家の中とか山の中でも的確に鬼を見つける事が出来る。しかし、このような鬼の中に入った状態になると強すぎる超能力が全体から等しく鬼の気配を入れようとしてしまい、弱点や本体が分からなくなるのだ。

肉の触手が乗客を殺そうと躍起になるが明悟も轆轤も乗客には指一本触れさせなかった。

そんな風に三両分の乗客を守っていると、日輪刀で触手を斬りまくっている杏寿郎がやってくる。

「津上!」

「杏寿郎君!」



「緊急時だ。手短に話す。この八両の列車の後ろの三両は任せろ。黄色い少年と竈門妹が二両を守る！」

「俺達は残りの三両で炭治郎君と伊之助君が鬼の首を探すでいいかい!？」

「勿論だ、必ず弱点はある、こつちも探すぞ。気合いを入れろ！」

「ああ！」

杏寿郎は手短に明悟と連携を取ると、後ろの車両に向かって行く。

明悟とかやの外だった轆轤はそのまま触手の相手をしていた。

因みに杏寿郎は轆轤の変身を見てないため、2人になったアギトは明悟の新技かなんかだと思い、終わったら後で教えてもらおうと内心考えていた。



善逸と禰豆子も触手から乗客を守っている。

そして、3人目のアギトである零余子は席の上で体を縮めていた。

元來臆病であり、十二鬼月になれたのも単純に弱い人間や勝てそうと思つた人間だけを食べていた零余子にとつて無惨もそうだが、自分よりも強い相手を見ると確実にビビるのだ。

もつと言えば零余子は明悟や轆轤のようにベルトを出せない。変身出来ないのだ。理屈は轆轤にも零余子にも分らないが、超人的な力が使えなければただの勘の良い人間でしかない。

体を縮めながら、自身の運の悪さを零余子は呪つていた。

(なんでこんな事に……十二鬼月が2人で理性が無いなんて絶対に普通じゃない！こんな所で死にたくない)

どうやって生き残ろうかそればかり零余子は考えていた。生きるためなら何でもする。零余子はそう言う意味では無惨そっくりであるが、そもそも生きる為に必死になるのは生きてるなら当たり前だ。

問題なのはそれで人を捲き込むと言う事だ。

生きるなら生きれば良い、ただそれは人を殺す免罪符ではない。無惨はここら辺の良心が欠片もなく、手遅れである。そして零余子も手遅れ気味ではあるが無惨に比べて力がないし、恐怖で体が動かなくなる事が多々なので目立ってない。

そして今も生きる為に動かなくなれば触手が襲つてこないと思つて体を縮めて事な

きを得ようとしたが、そんな甘い事はない。

触手が零余子を食べようと上から襲ってくる。

零余子はそれに気づき逃げようとするも時は遅く、そして恐怖で体が動かなくなつて  
る。

食われる直前になつて零余子が思い出したのは、鬼になる前の事。

熱が出て両親が夜遅くに山に山菜を取りに行き、帰りが遅くて心配になり、村の知り合いに隠れて探しに行つたら、両親が無惨に食われていて、逃げようとするも恐怖と熱で動けなくなり、必死に生きようとしがみついてもすがり付いて鬼になつた。

零余子はその事を思い出しながら、両親を山に行かせたのは自分と言う事実。恨むべき相手である無惨にすがつて鬼になつたと言う罪。

零余子は走馬灯のように2つの事を思い出していた。

(嫌な人生だつたな……)

迫り来る触手に零余子は涙を一粒流す。

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃」

しかし、落雷のような速さで触手は善逸によつて斬られる。今の今まで今作で活躍の場が中々恵まれなかつた善逸の為に解説するが、善逸は超人的な聴覚によつて例え寝ても状況を認識する。そして普段は恐怖心でダメダメな善逸も寝て聴覚以外の全ての

状況を把握してゐる状態になれば炭治郎や伊之助にも負けない隊士になる。

「何で助けるの？私は鬼だったのに・・・」

零余子が助けた善逸に尋ねる。

鬼殺隊は確かに人を助けるのが仕事だが、轆轤や零余子みたいなケースは当たり前だが初めてである。まだ人を食べた事がない禰豆子とは違って轆轤も零余子も十二鬼月に入る程に人を食べてる。

いくら人に戻つても人を食べた罪は絶対に一生消えない。寧ろ、人に戻つたからこれからは守つてねなんて虫が良すぎる。

だから守られる理由が無いのに守つた善逸の行動が零余子には理解できなかつた。

「女性の涙が落ちる音がした」

非常に臭い台詞である。

寝ててもそう言う事が言える善逸の元来の女性好きには最早尊敬出来るとしか云いようがない。

しかし、触手はまだ襲つてくる。

他の乗客も零余子と一緒に食べる気だ。

善逸だけでなく、禰豆子も爪と脚力を使って零余子を守る。

自分よりも小さく勇気のある禰豆子にも零余子は何故そうやったのか分からなく、首

を傾げて禰豆子を見る。

禰豆子はそれに気づくと零余子の頭を優しく撫でて戦闘に戻る。

零余子は泣かずに黙って助けてくれた2人の戦闘を見ていた。



明悟と轆轤は触手を斬りまくって乗客を守っていると突然、先頭車両の方から凄まじい断末魔が聴こえてくる。咄嗟に耳を庇う2人。

そして車両が突然のたうち回るように動きまくる。

明悟はフレイムフォームに変わり、直接拳で壁を殴りまくり、衝撃をどうにかしようとする。

轆轤は明悟がフレイムフォームになったのを見てアクアフォームになった時と同じようにまた右側のスイッチを押す。

すると右半身がオレンジ色に変わる。

形はそのままに2回りほど隆起した右肩、そして籠手も2回りほど大きくなり、岩を

彷彿させるような籠手になる。

もう1つの轆轤だけの姿、土の力を司るアギト、サクスムフォーム、である。

轆轤もグランドフォームよりも遥かに強くなつた力で壁やそこらを殴りまくる。

1つの車両だけでなく、あちこちのたうち回つてる車両の中を進んで、同じように呼吸を使いまくつて衝撃をどうにかしようとした杏寿郎と3人で何とか抑えた。

死者は1人も出さずに怪我人だけで抑える事が出来たのは運が良かったとしか云いようがない。

もしも杏寿郎がいなかったら、明悟がいなかったら、轆轤がいなかったら……そう考えると恐ろしい事になりそうだったが何とか被害を抑える事が出来た。

グランドフォームに2人とも戻る。

明悟は列車から降りて、炭治郎達を探す。

轆轤は斬られてどうにかしようともがいてた下弦の壺の魘夢を見つける。

「俺はまだ全力を出してない。折角生き残つて下弦の参と陸を手下として使つて良いと言われたのに……クソクソクソクソ!!」

「生きようとするのは愚かじゃなかったのか?」

「下弦の式!」

「元だ。俺も聞きたいことがある。20年前、蕪前岳で起こつた2人の女を殺し、残酷に

死体を弄んだのはお前か？」

魘夢は轆轤の言つてることが全く理解できなかつた。

「知らない……俺はそんなの知らない」

「なら、用はない」

轆轤はそう言つて立ち去ろうとする。

「良かったな……もしもやったのがお前なら俺は首を斬つたり、日の光にさらしたりなんて『生易しい』事はしなかつたぞ」

轆轤から溢れでる圧倒的な迄の怒気に魘夢は恐怖で何も言えなくなる。

そして魘夢は恐怖を味わいながら死んだ。

轆轤は戻つてくると逃げる為に零余子を探す。

すると意外にも炭治郎達を含めて早く見つかつた。

炭治郎は腹に怪我をしたのか杏寿郎から呼吸での止血方法を教えられていて、伊之助は珍しくも人助けをしていた。そして善逸は禰豆子に膝枕されていて幸せそうに寝てた、禰豆子も時折頭を撫でてる。

ただ、零余子はまるで隠れてるように善逸と禰豆子の2人をじつと見てた。

これには明悟も轆轤も何故か分からなかつたが、生きてるから良いと思つた。

「今回は見逃してくれるんだろ？」

「約束したからね。結果的に死者は出てないし、但し次に会った時は強制的に本部には来てもらうよ」

明悟の言葉に轆轤は笑う。

「俺達をそこで殺すつもりか？」

自虐しながら尋ねる轆轤。

明悟は轆轤に優しい笑みを見せる。

「いや、無惨を倒すのを手伝って欲しい」

轆轤は明悟の言葉に啞然とする。

元とは言え下弦の式でしかも交戦した事がある轆轤に明悟は何故そう言えるのか轆轤には分からない。

「十二鬼月だった俺達と協力するってお前はイカれてんな」

「そうかもね。けど無惨を倒す為だ。それ以降の事はどうするべきかまだ俺には答えがないけど」

「安心しろ、俺は無惨を倒したら死ぬ」

「.....」

「俺みたいな悪党はさっさと死んだ方が世のためだが無惨を倒せないで死んだら、殺された家族に申し訳ない。俺は生き続けたいけない」



「人の人生を狂わし続けた自覚があるなら死ぬな。1000人を殺したなら10000人救え、それでも罪は消えない。けど家族に申し訳ないって気持ちがあるなら、人を救い続ける」

明悟の言葉に轆轤は黙って明悟の目を見る。

1000人を救つても殺した罪は一生消えない。

だが、それで死んでも意味はない。

人を殺した罪は自害した程度で赦される物ではない。

望ましいのは遺族の目の前で公開処刑だが、どこにいるのか不明な轆轤の被害者を全員集めるのは不可能だ。

鬼殺隊士の中にも必ずいるが彼らの目の前だけで死んでも意味はない。

殺された人間が多すぎる。

だから、生きないといけない。

後ろ指は指され、怨みから暴行されるだろう。

それでも生きないといけない。

罪を償うとは自分で勝手に死ぬ事ではなく、生き続けてやる事だ。

もう轆轤の命は轆轤だけの物ではない。

明悟はそう感じながら、轆轤と話していた。

「俺の命を決めるのは俺だ」

「人を殺して無かつたらね。けどお前にもうその権利はない」

明悟と轆轤は黙って互いを見る。

無関心でもなく、相手に怒ってるわけでもない。

そして、轆轤は零余子を連れてその場を去ろうとした瞬間、上空から何かが落ちてくる。

それは炭治郎や杏寿郎の近くに落ちた。

凄まじい衝撃音に炭治郎や杏寿郎だけでなく明悟や轆轤、ひいては彌豆子や零余子もそこを見る。

・・・善逸も起きた。

土煙が晴れて現れたのた十二鬼月 上弦の参 猗窩座だった。

そして次の瞬間、炭治郎の頭を潰そうと殴りに行く。

「炎の呼吸 弐の型 昇り炎天」

その拳を下から斬るが猗窩座は一旦離れて斬られた腕をすぐに再生する。

ただ、すかさず明悟と轆轤が飛び出して光を拳に纏わせて殴る。

猗窩座は両手を交差して防ぐが、太陽の光と同質の光の為、かなりの火傷を負い吹き飛ばされるが、一瞬でその火傷も回復される。

「成る程、お前らがアギトか・・・そして斬ったのは柱だな？」

「だったら、どうする？」

明悟が猗窩座に対して構える。

轆轤も生きる為に構えて、杏寿郎も日輪刀を構える。

「何故、手負いの者から狙うのか理解できない」

「話の邪魔になると思っただ。俺とお前たちの」

「何の話をするつもりかな？」

猗窩座の言葉に明悟は尋ねる。

「どうだ、柱？お前も鬼にならないか？」

「ならない」

「お前はかなり強い。至高の領域に近づいてる」

「俺は炎柱 煉獄杏寿郎だ」

「俺は猗窩座だ。杏寿郎、何故近づいてるのに至高の領域に近づいてるのにたどり着いていないと思う？それは人間だから、老いて死ぬからだ。鬼になれば百年でも二百年でも鍛練できる。もっと強くなれる」

「その強さだけが全てじゃない」

明悟が2人の間に割って入る。

猗窩座も杏寿郎も明悟の方を見る。

「老いて死ぬのは悲しいし辛い。けどそれで強くなれない分けじゃない。瞬間瞬間を必死に生きようとするのが人間でそんな人間だからこそ、最低な時があれば最高の時もある。全ては波のように不安定だからこそ生きることによって価値がある。だから人間は生きてるだけで強い」

「お前、名前は？」

「光柱 津上明悟」

「明悟、弱者では生き残れない。生きる価値がないんだ」

「生きる価値を決めるのはお前じゃない。もしもお前がそんな自己満足の為に人の未来を奪うなら、俺が止める。誰も人の未来を奪うことは出来ない」

「強ければ、それが赦されるんだ明悟」

「なら、ここで倒す」

構える明悟。

杏寿郎笑いながらその姿を見て日輪刀を構える。

「素晴らしいぞ津上！それでこそ鬼殺隊の柱だ！猗窩座、俺も鬼にはならない。俺は人間として未来を奪うお前達、鬼を倒す」

「術式展開 破壊殺・羅針」

猗窩座が血鬼術を使い戦闘体制になる。

「アギトには殺せと命令されてる。そして鬼にならないならば生かしておく理由が無  
い」

轆轤も猗窩座の言葉を聞いて構える。

「轆轤」

「アギトは殺すらしいからな。1人じゃ勝てない奴なのは分かってる。手伝うぞ」

「その声は下弦の弐」

「だから、元だつて」

杏寿郎はどうするべきか迷う。

明悟は杏寿郎の肩に手を置く。

「今だけは信用しよう」

「津上……そうだな！それ以上の話は今するべきではないな！」

3人が猗窩座に対して睨む。

「何故、そこまで他人の為に生きようとするのか分からない」

「約束しからね。死んだ……妻に頑張つてつて言われて頑張らない旦那はいないよ。だ  
から頑張る。天国にいる彼女に届くまで」

「なら、その頑張りが無駄だと言う事を教えてやる」

3人と猗窩座は互いに間合いを積めて攻撃し合う。  
どんな結末になるか闘ってる者達も見てる者達も分からなかった。

## 三位一体 二大ライダー

猗窩座に突つ込む明悟、杏寿郎、轆轤。

明悟と轆轤は猗窩座の腕を掴んで動けなくし、杏寿郎はすかさずに首を斬ろうとするが冷静に杏寿郎に対して蹴りを下から突き上げる。

ギリギリの所で避ける杏寿郎。

明悟は猗窩座の顔めがけて殴るが首をいなされて避けられる。そして腹に膝蹴りを受けて、明悟は腕を放してしまい、猗窩座はがら空きになった腕で轆轤を吹き飛ばす。が、明悟達も負けてはいない。

足払いをして体勢を崩そうとするが、なんなく避ける猗窩座。

そのまま明悟の顔を狙ってくるが明悟は首をいなして避けて、お返しに膝蹴りを腹に放つ。

猗窩座は吹き飛ばされて明悟を睨む。

「貴様」

「お返し」

「破壊殺・乱式」

猗窩座が明悟に突つ込む。

明悟も手を光らせて突つ込み、互いに殴り合う。

猗窩座の乱打と張り合う程の乱打をする明悟。強烈な猗窩座の乱打に対して真つ向から挑むのは普通ならば不利であるが、光を纏わせて殴っているため普通の攻撃よりもダメージは大きい。猗窩座も殴られた所がどんどん火傷を負っていく。

そしてどんなに瞬時に回復しても衝撃は必ず来る。

故に衝撃を使つて微妙にクリーンヒットにならずに済んでいる。

轆轤はその隙を狙つて、後ろから殴り掛かる。

「破壊殺・脚式 冠先割」

猗窩座は背後の轆轤を下から蹴り上げる。すんでの所で何とかギリギリ避けるがすすただけなのに飛ばされ、空中で一回転して地面に倒れる。

殴りあつてた明悟は猗窩座の腕を掴み、小手返しをするが、猗窩座は自ら回転して何事もなかつたかのように平然とする。

明悟は右足で猗窩座の腹を蹴ろうとするが猗窩座は左足で明悟の右太腿を踏んでそれを止め、左手で明悟の顔面を殴り、腹に膝蹴り、体が曲がった明悟の後頭部に両手を組んで打ち下ろし、明悟は地面に顔面がめり込む。

杏寿郎が刀で首を斬ろうとする。



猗窩座が応戦しようとするが、轆轤がアクアフォームになり、アローを出して刃になった弧で猗窩座を斬ろうとする。

猗窩座はその2人の斬激をフワツと避ける。

「大丈夫か、津上!？」

「何とか・・・」

明悟はフラフラになりながらも起き上がり、ストームフォームになる。

「破壊殺・空式」

猗窩座の放つ拳から衝撃波がタイムラグ無しで明悟達を襲う。

「炎の呼吸 肆の型 盛炎のうねり」

杏寿郎は前方を薙ぎ払い、轆轤はアクアアローに水を纏わせて壁を作り、明悟はハルバートを回転させて風の壁を作って凌ぐ。

「突っ込むぞー!」

杏寿郎の言葉に明悟はフレイムフォームに轆轤はサクスムフォームになり、明悟はベルトからフレイムセイバーを出して、轆轤はベルトから巨大な斧「サクスムアックス」を出して突っ込む。

「良い、反応だ!これ程の強さを持ちながら何故人間なんて物にこだわる!？」

「俺は人間だからだ!」

「破壊殺・乱式」

「炎の呼吸 伍の型 炎虎」

杏寿郎の炎の呼吸と明悟の炎を纏ったセイバーの斬撃、轆轤は地面を抉り、抉りどつた岩と土と共に猗窩座を斬りつける。

そして、3つの斬撃と猗窩座の乱打が激突し、大量の砂埃を巻き上げる。

壮絶とも言える闘いに炭治郎も禰豆子も伊之助も善逸も零余子も啞然となった。

炭治郎達は勿論、零余子も柱やアギトの強さは知っている。それが3人もいるのに全くと言って良いほど寄せ付けない強さを持つ猗窩座に全員、震えが止まらなかった。

(明悟さんがあんなにあつさり・・・刀、くそ！刀は何処に!?)

(行けねえ、震えが止まらねえ)

(嘘だろ、柱や明悟さんがあんなにポロポロに・・・)

(轆轤だつて弱くないのに、上弦はここまで強いのか?)

全員、3人を相手にしてるのに全然敵わない猗窩座に対して畏怖していた。

そして砂埃が晴れると明悟と轆轤は片膝をついてグランドフォームになっており、杏寿郎は頭から血を流し、吐血し、日輪刀が完全に破壊されていた。

本来ならば杏寿郎は更に片眼が潰されて内臓さえもえげつない状態になる所だったが、単純に増えた攻撃に超感覚を頼りに攻撃と防御をやる頑強なフレ임フォームの力で杏寿郎に当たる攻撃をある程度カバーしたのだ。

フレ임セイバーの攻撃も確かに強いし、明悟は鬼殺隊で8年も鬼と戦ってきたベテラン。単純な攻撃力ならば呼吸と互角以上であるが、杏寿郎は明悟とは違い生身だ。いかに呼吸で頑強になろうともアギトと比べるとアギトの方が遥かに頑丈だし、より頑強になるフレ임フォームならば尚更だ。だから無意識の内に明悟は猗窩座の乱打で致命傷に成りうる攻撃は全て防ぎ、杏寿郎もそれを瞬時に理解し、全力で呼吸をして斬撃を放つたのに、猗窩座は何事も無かったかのようにすぐ回復した。

因みに轆轤のサクスムフォームに超感覚は無いが、その代わり防御力が恐ろしく高くなっている。

「生身を削る思いで戦つても無駄なんだよ。お前達が俺に喰らわせた斬撃も既に完治している」

明悟と轆轤が立ち上がる。

「だが、お前達はどうだ？ 砕かれた肋骨にボロボロの内臓。互角だったが今はもうどちらが有利かわかるだろ？ 人間では鬼に勝てない」

杏寿郎が粉碎された刀の残つてる部分だけでも使つて戦おうと構えるが明悟と轆轤が杏寿郎の前に立つ。

「津上!？」

「炭治郎君の刀を取つてきた方がいい。それまでの時間は稼ぐ……3人で皆を守るよ」  
「俺を勝手に入れるな……まあこんな所で死ねないか……」

構える2人。

杏寿郎はすぐに炭治郎の刀を探す。

「何故、お前達は足掻く?」

「そりゃ、生きてるから足掻く。生きてるから必死になる」

「それに愛する人に恥じないようにね。君には居ないの? 大切だった人は?」

明悟の言葉に猗窩座はやたらと歪んだ笑みを見せる。

「そんなのは居ない。強くなるのにそんなのは必要ない」

「なら、俺達が勝つ！」

「ほざけ！破壊殺・羅針」

構える猗窩座。

フラフラながらも構える明悟と轆轤。

「おい、何か良い方法ねえのか？」

「あるにはあるけど、今の状態でやると死ぬ可能性が高い」

「あるのかよ」

「まあね、前に普通の状態で作ったらあまりの負担で死にかけたからやりたくないけど……」

「教えろ」

「両方の力を使うように考えて、そしたら出来る」

明悟は両腰のスイッチを押す。

するとフレイムフォームの右側、ストームフォームの左側、グランドフォームの胴体の三位一体のトリニティフォームになる。

そのやり方を見た轆轤も同じようにする。

サクスムフォームの右側、アクアフォームの左側、グランドフォームの胴体の三位一体のトリニティフォーム。

そして轆轤は明悟が言つてた意味を理解した。

トリニティは確かに三位一体の姿としてバランス良くなつてると思うが歪である。

明悟で例えるが超人的な力と炎のフレイムと超高速と風のストームを無理やりくっつけてグラウンドのバランスを持つて保つてるが、本来ならばフレイムだと左側と胴体までも一緒にして耐えてるのが左側だけで制御しなくてはいけない。

それにより、体がまるで真つ二つになりそうな程に力が不安定になる。本当ならば徐々に体を慣らしていつて進化するが明悟はトリニティに変身した過去の1回を除いて変身した事がなく、進化しきれてない。フレイムとストームだけで今まで全く問題が無かつたからであるが、明悟の修行不足としか云いようがない。

轆轤はさっきの通りしか歪になつてないが明悟はより不味い状態になつていて、フレイムとストーム、グラウンドの3つが進化しすぎで上手くトリニティとして体に馴染んでなく轆轤の数倍の苦しみを味わつていた。

「わかるぞ。お前達の力が異様に歪になつた。そんな状態で俺に勝てると思うのか？」  
「やってみないとね」

明悟はそう言つてセイバーとハルバートを両方出し、片手ずつ持つ。

「両手に両手武器とは・・・アホなのか？」

猗窩座が尤もな意見を言う。凄く真顔だつた。確かにアホみたいな状態だがそれで

終われば明悟が鬼殺隊で8年も生き残ってる理由がなくなる。

「試してみれば良いよ」

轆轤もアックスとアローを出現させて両方持つ。

明悟と轆轤は猗窩座に突っ込む。

「破壊殺・空式」

衝撃波が2人に向かって飛んで行くが透かさず、明悟が轆轤の前に入り、ハルバート  
を回して衝撃波を吹き飛ばす。

セイバーで斬りかかるも猗窩座は少し後ろに下がって紙一重で避ける。だが轆轤が  
明悟を飛び越えてアックスとアローで体を回転させながら斬りに来て、猗窩座は首は斬  
られなかった物の体を幾つか斬られる。

すぐに回復して、殴りかかるがアックスの斧刃で防がれる。轆轤は猗窩座の腹に蹴り  
を入れて吹き飛ばすと、明悟がハルバートとセイバーの両方で斬りかかる。

ハルバートの風の力によってセイバーの炎の威力が爆発的に上がり、それから発生さ  
れる衝撃波によって猗窩座は手で防いでも手ごと焼かれる。

「貴様らー！」

猗窩座は反撃して、明悟と轆轤を殴りまくり、セイバー、ハルバート、アックス、ア  
ローと2人の武器を全て弾き飛ばす。

しかし、明悟と轆轤も諦めていない。

轆轤が猗窩座にタツクルして腰にしがみつく。明悟はそれによって止まった猗窩座の顔を何回も殴る。

猗窩座はしがみついている轆轤の腹に膝蹴りをして離れさせて、殴ってくる明悟を背負い投げするが明悟は両足を先に地面に着けてなんとか耐えて、逆に猗窩座を投げ返し、放り飛ばす。

飛ばされた猗窩座は素早く体勢を空中で直して、着地するが明悟と轆轤が突っ込んできて互いに猗窩座の両手を抑える。

「今だ、杏寿郎君！」

「やれ！」

明悟と轆轤は少し離れた所にいる杏寿郎を見る。

自分の壊れた刀の代わりに炭治郎の刀を持って構えていた。

「炎の呼吸 奥義 玖の型 煉獄」

杏寿郎が猗窩座に対して突っ込む。

強烈な踏み込みと大きく相手の面積を抉り取る炎の呼吸の奥義に猗窩座は冷や汗を欠いていた。

（くそ！あれは不味い！）



そして杏寿郎の斬撃が当たる瞬間、猗窩座は後ろに飛んで避けた。

両腕を自ら引き千切って・・・

瞬時に両腕を回復した猗窩座は一瞬の事に唖然とした3人を殴り飛ばす。

3人は地面をゴロゴゴ転がり、すぐに立ち上がろうとするが、動けなかった。

「俺の勝ちだ!!」

猗窩座は一番危険度の高い明悟の頭を潰そうと超高速で向かう。

明悟はその事に反応できずに詰め寄られてしまう。

そして猗窩座が殴り掛かろうとした瞬間、水の矢が飛んで来て猗窩座の体を貫く。

矢の飛んで来た方を向くとそこには倒れた状態になりながらもアローを構えてる轆轤がいた。

猗窩座は光が含まれた鬼にとっては劇物でしかない水の矢を喰らって後退する。

回復しようにも上手くできなかった。

明悟と轆轤は顔を1回見合わせて、立ち上がりクロスホーンを開く。

アギトの紋章が2人の足元に拡がり、両足に収束する。そして飛び上がり、2人とも両足を前に突き出す。

「ダブルライダーシユート」を猗窩座に向けて放つ。

十二鬼月級であつてもまともに喰らつたら只では済まないが、猗窩座は腐つても上弦

の参、そう簡単にはいかなかった。

「破壊殺・滅式」

猗窩座も2人の現段階での最大級の技に自身も最大級の血鬼術をぶつける。

強烈な光の技と血鬼術がぶつかり合い拮抗し合う。

それによる衝撃波が辺り一面に拡がる。

杏寿郎や炭治郎達はその衝撃波に対して手で顔を防ぐ。

同等の光と血鬼術が拮抗してやがて辺り一面、一番端にいた零余子まで光に包まれる。

明悟、轆轤、杏寿郎、炭治郎、善逸、伊之助、禰豆子、零余子そして猗窩座は1人とある「記憶」を見た。

病弱な父が自殺し、その罪人になってまで薬代を払おうとした息子が、追放されて捨てられた道場で恩人である師範と病弱な師範の娘と一緒に暮らした。

質の悪い外道な剣術道場の息子が病弱な娘を連れ出すが発作を起こした娘に怖気づいて放置。その事にキレた師範と罪人が剣術道場に殴り込みを掛けて落とし前を着けた。罪人は娘と恋仲になり、師範も道場を継いでくれないかと罪人に言った。

が、罪人が自殺した父親の墓参りに行つてる間に道場の井戸に毒を入れられて師範と娘は死亡。

毒を入れたのは剣術道場の屑どもだった。

罪人は剣術道場の奴等を皆殺しにしてそのまま無気力になりさ迷つてると無惨に出会う。

無気力となった罪人はそのまま鬼になり、〃猗窩座〃になった。

全員の頭に流れてきたのは前に明悟が読んだとある小説の主人公の生き地獄だった。

光がやがて消えて明悟と轆轤、猗窩座は突然の事に頭を抑えて離れた。

あまりにも救いのない一人の人生。

そしてそれが上弦の参である、〃猗窩座〃の人生とはなんとも言い難い気分になり、轆轤も猗窩座も頭を抑えて混乱し、杏寿郎はすぐに刀を猗窩座に向けるが先程に比べて戦意が落ちていて炭治郎、善逸、伊之助、禰豆子はその人生に涙を流し、零余子はその生き地獄に対してゲロを吐いた。

明悟は頭を抑えながらも猗窩座を見る。

好きな小説の主人公。

心の底から共感し、そして自身と同じように愛する人を守れなかった苦しみを味わった人間。

嘘の事件と断定されたが、明悟は真実だと思っていた。

ただ、それがこんな状況でわかるとは思っていなかった。

猗窩座は頭を抑えながら明悟達を睨む。

「覚えてろ……」

猗窩座はそう言つてその場から逃げた。

ボロボロになり、そして戦意が無くなつた明悟達は誰々一人として猗窩座を追う気力は無かつた。

こうして『夢の列車』の一晩は終わった。

隠達がやつて来て、事後処理を行う。

明悟と杏寿郎は近くの森の入り口付近で座り込み、轆轤や零余子も一緒にいた。

朝日が上がつてきたので禰豆子は箱の中に戻り、炭治郎がそれを背負つて、善逸、伊之助と今回の事件を解決した全員がそこにいた。

「炭治郎君達も轆轤達も杏寿郎君もお疲れ様……なんて明るい感じでは終われないか……」

「津上……猗窩座の事か？」

明悟は猗窩座の事件をフィクションとして扱った小説を懐から取り出す。

「この話が真実だとは思ってたけど、もっとえげつない事になるとは……真実は小説よりも奇なりって事か……」

乾いた笑みを浮かべる明悟。

「明悟さん……」

「けど、それでも人の人生を脅かすならば倒す」

明悟の言葉に全員が黙って明悟を見る。

「例え、その者がどんなに悲惨な境遇であつてもそれが人の人生を奪う理由にはならない。この意志が悪と言うなら、俺は悪党で良い」

明悟の言葉に柱である杏寿郎は自分の壊れた刀の鏢を見る。炎のような揺らめきを表現された鏢を確り見て杏寿郎はその壊れた刀を鞘に納めた。

炭治郎達は2人の行動にどうするのが正しいのか分からなかった。

「炭治郎君達はまだ悩んで良いよ。そんなに簡単に答えなんか出ないし、出たら悩む必要ないしね……」

炭治郎達が明悟の方を見る。

「ただ、人を助けるって悪党も外道も助けないといけない。選り好みをしたら無惨と一

緒だ……それが人助けって事だよ……それでも鬼と戦う気はあるかな？」

明悟の目は鋭かった。

それにより、炭治郎達は一瞬の気圧されるが、それと同時に炭治郎達は猗窩座だけでなく、今回の事件を起こした魘夢を思い出した。

人の思い出を土足で踏みいじり、そして思い出を使って人を利用した悪鬼。

辛い過去を持つ猗窩座のような鬼も入ればどうしようもない外道もいる。

炭治郎は魘夢だけでなく、明悟と会う前に遭遇した沼鬼を思い出した。沼鬼も過去は分からないが外道その物だった。

炭治郎は自分の頬をバチンと叩いて気合を入れ直す。

伊之助や善逸を見ると2人とも自分なりに決意を固めたようだ。

明悟も杏寿郎もそんな彼等を見て笑い会う。

「それじゃ、俺達は行かせて貰う」

轆轤が明悟や杏寿郎を見てそう言う。

「分かってるよ。その代わり……」

「今度あつたら、大人しく着いていくだろ？」

轆轤はと零余子は立ち上がる。

明悟と杏寿郎も立ち上がる。

「お前達、名前はなんと言うんだ!？」

杏寿郎が澆刺とした声で轆轤と零余子に尋ねる。

「芦原轆轤」

「氷川零余子」

「芦原に氷川、俺はお前達を許して良いのか分からない!けど、お前達にも鬼殺隊と似たような意志があるのは認める!・・・また会おう!」

杏寿郎は手を出す。

明悟も杏寿郎の行動と言葉に対して笑みを浮かべて手を出す。

轆轤と零余子は2人の手を握る事は無かったが2人とも笑みを浮かべて去っていった。



とある墓場の1つの墓石の前で明悟は花束を置いて手を合わせる。

そこはカナエの墓石だった。

誕生日に必ず明悟はここに来る。

思い出に浸り、そして声が聞こえると信じて、けどカナエの声はあれから聞こえない。明悟は立ち上がる。

「もう行くよ．．．君の夢．．．鬼と人が仲良くつて夢を引き継げれる子が現れた。俺はあの子を守る。命懸けで君の夢を守る。だから、見ててくれ」

墓場から立ち去る明悟。

その背中は酷く悲しいように見え、そして嬉しそうにも見えた。

明悟の新たな戦いが始まるのである。



## ひなき達の缶けり大作戦!

夢の列車の戦いが終わって早3日、明悟は蝶屋敷で入院していた。炭治郎達も全員、体の傷を癒すために入院し、なにげに1番の大怪我だった杏寿郎はもう自宅療養の段階に入ってた。

まあ、呼吸が使えて大怪我なのに問題なく動けてる時点で既に怪物じみてたから明悟はそこに関して何の驚きも無かった。

明悟は今、個室で療養している。

個室なのは理由があつて先ず基本的に柱が負傷すると大抵はさっさと自宅に戻る。しかし、想像以上の大怪我をすると流石に入院させて二、三日の経過観察をしないと退院させれない。で、全員が普通に入院出来れば良いのだが、そう上手くはいかない。まず、小芭内が入院するとなったら、基本的に常識的に療養してくれるが一緒に入院して他の隊士への小言の地獄を行い、ストレスで悪化。しかもこれを無意識的にやる。実弥も常識的に療養してくれるが今度は一緒に入院してる隊士が異様にビビりまくる悪化、行冥に関しては日課のお経の縁起の悪さが凄くてまたストレスで悪化、杏寿郎と天元に至っては煩すぎて完全に迷惑その物。まともなのは無一郎と義勇と蜜璃だけだつ

た。

これに対してしのぶはめんどくさすぎるので柱は強制的に個室部屋行きにした。柱もその方が楽なので問題は何一つない。

明悟が今いる部屋もその一つ。

すぐに自宅療養かと思ったが明悟は杏寿郎と違って呼吸が全く使えないので新陳代謝が良くなり、療養の期間が長い（それでも普通の人よりは早い）

しのぶ特製の薬を飲む。

恐ろしいくらいに苦くて不味い。

療養なので好きな食べ物も制限されて体に良いものを食べさせて貰ってるが明らかに病人食でしかなく、旨くない。栄養に特化してるから治りは早くなるが食べ物大好き男である明悟には辛かった。

明悟には更に悩みの種がある。

「明悟さーん」

部屋の扉が開かれると妙に撫で声の気持ち悪い言い方で呼ぶ善逸がいた。

明悟はその事に頭を抱えた。

「善逸君・・・どうしたの？」

「いや、夫婦になれる男女のつきあい方を・・・」

「そんなものはない!」

「嘘つくんじやねえ!! 夫婦だぞ、夫婦! 男と女がイチヤイチヤするための番みたいな物だぞ。イチヤイチヤするための契りだぞ! 何で、あんたみたいな性格に難がある人間に出逢いがあって、結ばれるんだよ! 絶対になんか裏技みたいな物があるだろ! 教えやがれ!」

「ねえよ!」

女好きの善逸が、明悟に恋人・・妻のカナエがいたことに対してどうやったら上手く行くかとのこの3日間鬱陶しい位に聞きに来るのだ。

しかも、初っぱなから裏技を使ったなどと聞いてくるが、人付き合いに裏技なんて存在しない。

あるとしたら、金を余分に掴ませるぐらいだが、明悟はカナエに対してそんな事は一切やっていない。

そう善逸には言っているのだが、全く信じない。

あまりにも最低だった。

まあ、明悟とカナエも恋人だったが、何時から恋人になったかは曖昧だし、婚約したのも明悟がプロポーズしたからであるが、その理由がカナエとの間に子供が出来た所謂“出来ちゃった婚”である。

明悟はしつこい善逸にいい加減イライラし始めた。

この性格だから恋人が出来ないのに・・・

「そんなの無いからいい加減にしてくれないかな?」

「嘘つけ!」

「しようがないなあ。じゃ助言をある程度あげるよ」

明悟は懐から本を善逸に差し出す。

「この本の主人公みたいに静かに寡黙に冷静に振る舞ったら、女性は依ってくるよ」

善逸は本を受け取り、部屋を出た。

本は小説でハードボイルドな探偵が主人公の話だった(この時代はまだハードボイルド小説なんてアメリカですら出ていません、1920年代のパルプフィクション誌：二流のB級雑誌でやっていたのが一番古い歴史ですが、あくまでも史実の話ではなく口マンが中心の話ですのでそこら辺は無視します)

寡黙で無愛想だか、確固とした正義感があり、ダンディズムが溢れてる男が依頼人の為に殴られ蹴られ肉体的に苦痛を伴いながらも物事を解決していく話だ。

善逸とは正反対な内容だが、明悟は案外合うと思った。根本の正義感は確りして、人の為なら殴られても蹴られても頑張る善逸には合うと思ったが明悟には誤算があった。

普段の善逸と小説の主人公は明らかに普段その物が違いすぎる。

生活と言った様式美ではなく、人付き合いや性格と言う面で違った。

寡黙で無愛想だが、ダンディズム・・・言葉や態度はどこか余裕があり、会話に洒落があり、苦い薬ごときで文句を言わない主人公とうるさく、愛想を嫌でも出しまくり、1時間後には死ぬのではと思うほど余裕がなく、薬に文句を言いまくる善逸とは違いすぎた。

更に言えば善逸の性格はこれなので関わる人の殆どがこうと認識しているし、その性格に慣れている。

それが急に変わるとどうなるか・・・熱があるのか、余計に悪くなったとしか思わない。

そもそも主人公は普通に世間一般の評価は最低で主人公として動いているから共感できるのであって、これが実際の人でやると性格の悪い人間にしか見えない。

5日後、善逸が半泣きしながら本を明悟に投げ返した。

人付き合いや恋に近道は存在しないと善逸は改めて思い知った。

―話を戻して―

明悟が部屋でゆつくりしていると毎日必ずやってくるめんどくさい人間がもう一人いる。

「津上さん、検診の時間ですよ」

しのぶである。

検診は至つてまともな内容で超絶美人なしのぶなので羨む男は多そうだが、そうはいかない。

「で、津上さんの婚約者って誰ですか？」

明らかにからかい目的で聞きに来るのだ。

明悟には答えたくない理由が2つある。

1つはめんどくさくなるから、もう1つは単純に言えないからだ。

冷静に考えて急に「自分は死んだ姉の婚約者」ですなんて言つたらどうなる？

何で死んだときに居なかつたとか、葬式にですら来なかつたとか色々聞きに来るし、そもそも大事な婚約者一人守れない婚約者なんて居ないも同然。

屑である。

そんな事を妹であるしのぶや妹分であるカナヲ達には明悟は口が裂けても言えなかつた。

「誰なんでしょうかね。津上さんを愛してくれた人って気になりますね」

(君の姉だよ)

明悟は言いたいのには言えないもどかしい思いをしながら、毎日検診された。

(津上さんの婚約者は恐らく姉さん。今は確証が無いからなにも出来ませんが、いずれキツチリと証拠を掴みます。姉さんを殺した「罪」を死んでも償って貰いますからね)

しのぶは勘であるが、明悟がカナエの婚約者だと感じていた。

そして明悟に対して復讐する気満々である。

なぜ、明悟がカナエを殺したのかその話はまた別の時に語るとしよう。



それから2か月後、明悟は漸く体も完全に治ったので、杏寿郎と一緒に耀哉の待つて産屋敷まで足を運ぶ。

明悟はまた菓子織を持っていく。

本日の菓子は羊羹だ。

「しかし、津上は本当に食べるのが好きだな！」

「杏寿郎君は？」

「勿論、大好きだ！」

「良かった。芋長の芋羊羹は安くて旨いからね」

「そうなのか!？」

「うん、あそこの店主が良い人でね。まあ小さい息子さんはケーキ屋になりたいそうだけれどね」

「ケーキか、まだ食べたことないな」

「作ろうか？」

「作れるのか!？」

「うん、あまり自信は無いけど」

「今度、作ってくれ」

「互いに生きてたらね」

「そうだな！」

他愛もない話をして、ひなき達に芋羊羹を渡すと庭に向かう2人。

そこには、炭治郎や善逸、伊之助の3人としのぶ、実弥、そして天元がいた。



全員が不気味な感じで黙つてるので明悟と杏寿郎が来るのを即認識していた。

本来・・・まあ理想ならば柱が全員集合するのが理想だったが、生憎と他の面々は任務であった。

何の会議かと言うと、轆轤と零余子の事である。

一応、報告書には既に報告されて尚且つ柱全員にその情報は行き渡つてゐるが、耀哉が当事者達から聞いたがだったのでもう一度報告になった。

当事者である明悟達に加えて炭治郎達3人を養つてゐる上に医学者であるしのぶ、こういう時には100%の出席率を誇る実弥、そしてたまたま暇だった天元が来たのだ。

「それじゃ、話してくれるかな。人間に戻った鬼について」

「了解」

明悟と杏寿郎は轆轤と零余子について事細かく話した。と言つても2人とも事件後に書いた報告書の事をまた言い直してゐるだけなのでそんなに手間取る事は無かった。

「それじゃ、2人に聞きたいのはこれについてなんだが、2人は彼等を信じる事ができる?」

「お館様、私は信じてても良いと思います!但し、彼等によつて死んだ者達が居るのも事実ですので無惨を倒すまでの間だけで、それ以降の事はまだ私もどうすれば良いか決めかねてます!」

「すぐに答えを出すのは無理だ。けど無惨を倒すまでは信じて良い」

明悟と杏寿郎の言葉に他の柱は何も言わなかったが、顔を歪ませた。

ただ今回は明悟だけでなく、杏寿郎もいる。

彼への信頼は高い。

故に顔を歪ませてるのだが・・・

「炭治郎や善逸、伊之助はどう思う?」

「俺は、信じて良いと思います」

「信じたいです。普通の人にしか見えなかったので」

「鬼じゃねえから問題ねえだろ?」

炭治郎達はまだどうすれば良いか迷いながらも自分の意見を言っていた。

口が非常に悪い伊之助は、後でしのぶからありがたい説教を受ける羽目になるがそれ

は後の話。

「それで実弥、天元、しのぶはこの事に対してどう思う?」

「今すぐ討伐隊を結成して殺すべきです」

「下級の隊士や隠でその2人を監視し、連絡が途絶えたら討伐隊を編成すべきかと」

「すぐにこちらに連れてくるのが良いのではないかと思います」

3人がそれぞれ違うことを言う。

そこからほぼ全員が違うことを言いまくり、建設的な意見など何一つ出ないまま終わった。

明悟が手を叩く。

他の面々が明悟を見る。

「とにかく、ここでやってても埒があかないから、確定事項だけ整理すると、まずあの2人には監視をつける。次に変身したらここに（産屋敷）に連れてくる。無惨を倒すまでは協力で良いかな?」

明悟の言葉に全員、反論したくても対案が存在しないので反論できない。

「良いよ、では本日の会議はこれまで」

「「「御意」」」

「そうだ、これから明悟がひなき達と遊ぶのだけれど誰か・・・」

耀哉が言い終わる前に天元としのぶはその場から消えていた。あのえげつない遊びに付き合う気は1回やった天元には全く無く、観てたしのぶは観てるから面白いので

あつて、やる気は欠片も無かつた。

「天元としのぶは？」

「逃げたよ」

「なら、杏寿郎と実弥と炭治郎達にも頼もうかな？」

大真面目を地で行く杏寿郎と実弥は逃げてない。

突然の事に混乱する炭治郎達。

明悟が炭治郎達に近づくと。

「皆、頑張つてね」

「え？え？何が始まるの!？」

「遊びだよ、ただの遊びさ」

「遊びの雰囲気じゃねえだろ!？」

怯える善逸を明悟は無視する事に決めると、ひなき達がブリキ缶を持ってやってくる。  
る。

ひなき達は明悟を見るやいなや明悟の方にやつてくる。

「ひなちゃん達、缶けりやるの？」

「はい！ただ、私達だと鬼殺隊の皆さんじゃ動きが違いすぎるので、鬼の人以外は私達を背負うか、おぶつて下さい。そして最初に掴まった人が次に鬼になり、私達を抱っこす

るかおぶります」

「ひなちゃん達、それで楽しめるの?」

「大丈夫ですよ。鬼になった人はこれを引いてもらいますから」

ひなきは袖から、何十枚もの紙の束を出した。

「これは何?」

炭治郎が紙の束について尋ねる。

ひなきがそれを聴いて、1枚引くと『警察』と書いてあった。

「何て書いてんだ?」

文字が読めない伊之助が尋ねる。

「警察だよ」

「何で、警察?」

あの「超おままごと」を知らない炭治郎達がひなき達に聞くが、いつもやつてる明悟と観てた杏寿郎と実弥は何の事か理解した。

「この紙に書かれてる役柄にそって見つけて捕まえるのです。これは『警察と泥棒』です。鬼は警察となって行動しないといけません。あまりにも雑な芝居だと止めて怒りますので注意してください」

こうして、超特殊な缶けりが始まった。

缶けり自体を知らない伊之助に明悟は丁寧に教えた。

役云々に關してぶつくさ言つてたが、明悟は肩に手を置いて黙らせた。

そして、ひなき達を除いた6人でじゃんけんをする。

杏寿郎が負けて、紙の束から1枚引く。

ひなき達のえげつない遊びを知つてる為か内心、まともな役柄が来るのを祈つていた。

引いたのは『警察』だった。

安心して一息つく杏寿郎。

これなら出来る。

明悟達が缶を蹴り、ひなき達を背負つて隠れる。

因みに組み合わせだが、

ひなきは明悟

にちかが実弥

輝利哉が善逸

くいなが炭治郎

かなたが伊之助

である。

女好きの善逸は強制的に輝利哉になり、その事に一番不満を抱いたのは輝利哉だったが、英才教育の賜物か顔には一切出さなかった。

杏寿郎が缶を元の場所に戻すと、役に成りきる為に咳払いをする。

「何処だ!? 絶対に捕まえるぞ、農作物ばかりを狙う泥棒集団め!」

何故に農作物なの? と参加してる人達はそう思った。

「絶対に捕まえるからな、俺の実家から送られてきたさつまいもを盗んで食いやがって、絶対に許さんぞ!」

((完全私事じゃねえか))

杏寿郎は辺りを見回す。

柱なので何処に誰がいるかは大体わかるがそれだと面白くもなんともないのでわざと缶から離れて行動する。

「俺のさつまいものを命で返せ!!」

謎のさつまいも推しキャラになってる杏寿郎に明悟に背負って貰って隠れてるひなきは笑ってた。

「ああいうのもありですね」

(どこで教育を間違えたのかな?)

杏寿郎の警察キャラを純粋に楽しんでるひなきに明悟はそんな事を考えてた。

そうこうしていると、伊之助が物の見事に1発で捕まり、紙を1枚引く。出てきたのは『親分』だった。

「何て書いてんだ？ギョロ目」

「親分だな」

「伊之助さんが親分となつて子分である私達を探るのが役柄になりますね」

普段通りだった。

杏寿郎が軽く缶を蹴つて、伊之助は教えてもらつた通りに戻してから役に成りきるが、内容が内容なので、

「おら、子分ども！何処にいやがる！」

普段と全く変わらず素だった。

素の伊之助を初めて見るひなき達にとってその姿は上手い役者にしか見えなかつた。

「明悟叔父様！あの人、上手ですね！」

「いや、あれが素だから」

「へっ？」

呆気を取られるひなき。

そうこうしていると、炭治郎が野生の勘が恐ろしい伊之助に捕まって、次の鬼としての役割を決める紙を1枚引くと『借金取り』と書いてあつた。



伊之助が思いつきり缶を蹴飛ばす。

炭治郎が戻して咳払いして役に成りきるが

「シャツキンカエセ〜」

「!!!「ダアアア!!!」!!!」

ドン引くほど下手くそだった。

あまりの下手くそっぷりに全員がずっこける程。

「!!!「ちよつと待つて下さい!!!」!!!」

ひなき達が全員、相方の元を離れて炭治郎の元に来る。

「ど、どうしたの?」

「どうしたの?ではありません!」

「下手くそ過ぎます!」

「交代を要求します!」

「引っ込んで下さい!」

ひなき、にちか、輝利哉が炭治郎をボロクソ言い、くいなどかなたは何処から取り出したのか木の板に『退任要求』と書かれていた。

自分では一生懸命なのにこき下ろされた炭治郎は放心気味になりながら、善逸と交代した。

そして善逸にほぼ強制的に乗せられていた輝利哉は明悟に乗れる事が出来て喜んでた。

善逸が紙を一枚引くと、『ダメ亭主』と書いてあった。

炭治郎が力弱く缶を蹴って、隠れて、善逸が戻す。

「おおい、これからは真面目に働かし、賭け事も止めるから帰ってきてくれよお」

中々に様になってた。

「酒も水で割って飲むし、煙草も止めるよ。パイプやキセルだって吸わないよお！ゴミ出しもちゃんとやるし、姑と言い争いになったら、絶対に向こうには行かないって誓うから帰ってきてくれよお」

何とも情けない言い分に明悟やひなき達は笑う。

しかし、実弥に背負われていたにちかには微妙だった。

「いまいち、真実味が無いですね」

これに実際にダメ亭主の元で虐げられてきた母親と家族を愛していて、耀哉を不気味な程敬いすぎてる実弥が飛び出して、善逸の頭をぶん殴る。

「いきなり、何するんですか〜!?!」

「黙れ下手くそ！にちか様が微妙に感じられてるだろうが、真面目にやれ！」

「大真面目だよ！ならあんた変わりにやってみろよ！」

「おお、手本を見せてやらあー！」

実弥が善逸から『ダメ亭主』の紙を貰い変わりにやることになった。

こうなるとにちかか善逸がおぶるか抱っこする事になるが、明悟がにちかをおぶる事になり、善逸はまた輝利哉をおぶる事になった。

実弥が咳払いをして、叫ぶ。

「何処に行った!?!」

腹から出てるであろう叫びに全員が少し圧倒される。

「お前らは俺の家族だ！俺のもんだ！物が一家の大黒柱である俺に逆らうんじゃねえ!!」

「上手い……上手すぎる」

「合ってますね」

明悟が実弥の気の入った演技に驚き、にちかか意外な合いつぶりに素直に感心していた。

まだまだ色々と問題発言を叫びまくる実弥。

そんな中、叫び声に心配してやって来たのは、行冥と実弥の弟にして行冥が鍛えてる不死川玄弥だった。

「何やってんだ、兄貴？」

「実弥、何をしている？」

「え、いや、あのこれはひなき様達の・・・」

行冥はその一言でまたひなき達のえげつない遊びに付き合わされてるのがわかった。任務が終わって玄弥に手伝って貰った報告書に不備があると言われて確認の為に来たら、実弥達がひなき達の遊びに付き合ってるのは予想外で一回止まってしまったが、ひなき達の遊びと分かれば話は要らなかつた。

「そうか、行くぞ。玄哉」

「え？あ、はい」

去っていく行冥と玄弥。

行冥は何の事か分かっているが玄弥は全く何の事か知らない。玄弥の目には大好きな兄が大嫌いである父親とほぼ同じ言動で暴れていたようにしか見えず。

色んな意味で心配するの玄弥の目が実弥の心に深く刺さりまくり、精神的疲労が他者の目でわかるほど深刻な状態になっていた。

（俺は何でクソ親父の真似なんか・・・）

にちかの一言に真剣になった為である。

「チクシヨーーーーー!!!」

血の涙を流すのではと思うほど叫ぶ実弥。

そのまま少し放心気味に缶から離れる。

「明悟叔父様、今ですー!」

「よしー!」

明悟はにちかを背中におぶるのではなく抱えながら缶へ向かう。

実弥もそれに気付き、全力で缶を踏もうとする。

真剣にやれと善逸に行つた為に全力で、この精神的疲労を終わらせる為に全力で缶を踏もうとする。

コンマ数秒のレベルで実弥の方が速い。

明悟はそのまま缶に向かってスライディングする。

そして、2人の足が缶へぶつかると大量の砂埃が上がる。

他の参加者もどうなったのか気になり、見に来る。

砂埃が上がると確かに実弥は缶を踏んでいた。

しかし、缶はあの定番の長くて丸い形ではなく、中の部分がごつそり抉られてる凄惨な状態だった。

これは明悟の蹴りと実弥の踏むのが全くの同時か実弥が少し早い状況で超人的な脚力を持つてる2人だから出来てしまった現象である。

一応、踏んでる事になるので実弥の変わりに明悟が鬼になるが、実弥はその衝撃を諸

に足首で受けてた為、足首を押さえていた。

数分したら、何とか動けるようになったので明悟の鬼で終わりにしようとなり、明悟が鬼になる。

蹴られたえげつない状態の缶を戻すと咳払いをする。

因みに引いた役割は『借金取り』だった。

「何処にいやがる！借金返せ!!合わせて3千円。期日はとつくに過ぎてるぞ、耳揃えて1時間以内に返せや！」

※物価指数と言う物があり、単純な計算は出来ませんが

2011年では大体1円の価値が今より1026倍あったと言われています。なのでこの小説ではキリをよくするため、1円=1030円の計算でやります。ですので3千円は大体309万円です。

「早く返しやがれ、でねえとな俺が責任取って縁故する羽目になるんだよ、何でてめえらの為に指を切らにやならんのだ！」

やけに具体的なのがまた生々しい。

どンドン、ノリに乗りまくって捲し立てるように暴言を吐きまくる明悟に家主である耀哉の妻のあまねが何故か警策（坊さんが叩くときに持つてるやつ）を持って後ろから明悟に近づき、明悟の頭を思いつきり叩く。

家主の耀哉は縁側で茶を飲んでいた。

「うちの庭で何をやってるの?」

頭を押さえて座り込んでる明悟はあまねを見る。

「いや、ひなちゃん達の・・・」

「ひなき、にちか、輝利哉、かなた、くいな!それに杏寿郎様、実弥様、炭治郎様、善逸様、伊之助様、すぐにこちらにいらつしやい!!」

全員であまねから長い長い説教を喰らってお開きになってしまった。

善逸と伊之助はそのまま蝶屋敷に半泣きしながら帰り、明悟と杏寿郎は互いに癒しと親交を深めるためにさつまいものの豚汁を新商品として出した定食屋に行つて夕食を取りに行き、今回の缶けりで深刻な精神的疲労を味わつた炭治郎と実弥も明悟達と一緒に定食屋に行つて少しだけ仲良くなつていたと言うよりも互いに互いの傷を舐めあつていた。

後日、今回の缶けりでのキャラを元にさつまいも好きの警官が借金まみれのダメ親父によつて売春させられた奥さんを助けようともがきまくる話を書いた。

名付けて「長屋敷 残酷恋物語 第一章 素晴らしき恋」と言うまたえげつない内容になる話だった。

ひなき達はまた伊之助の素を純粹に楽しめたので笑えるおとき話として〔伊之助親分〕と言う絵本も書いていて、こっちは普段があれな為か非常にさっぱりとして大好評だった。

題材になった伊之助はかなり浮かれていた。



一方、その頃。

轆轤と零余子は金がなくなったので2ヶ月の間、蕎麦屋で働いていた。零余子も轆轤もせつせと働きまくってかなり評判が良く、列車の事件が終わってすぐに入ったが、ある日、桜髪の鬼殺隊が朝に来て店の3分の2の蕎麦を喰いまくって（代金は勿論払ってます）昼からの仕込みがえげつない事になったが、店主の『下手くそだった場合は鞭でしごきまくる』と言う人権無視甚だしい育て方の賜物か轆轤は見事に蕎麦を仕込めるようになった。

そして昼休憩になると賄いで轆轤と零余子は蕎麦を食べる。店主が太つ腹である程度ならどんな具材を喰っても許してやると言うので零余子はほぼ全部のせで食べるが



轆轤はただの掛け蕎麦だった。

「轆轤ってなんで何の具材も足さないの?」

「ああ? つてまた、お前は何だその蕎麦は・・・海老天、玉子、油揚げ、天かす、かき揚げ!」

「名付けて超盛り蕎麦。この際だし」

蕎麦を食べる零余子。

轆轤はその蕎麦に怒りマークを出していた。

「アホかあ。蕎麦は掛けに始まり掛けに終わる。具の少なきは更なり。詰まる所、具は女の化粧と同じだ! 無駄にやった所で元を引き出さなければそれはただの冒涇だ! あくまでも本質は麺と汁。真の蕎麦にはそれだけで充分なのに・・・お前と来たら、何だそのごてごてに固めたイカれた丼わあ。そんな下劣な物を俺の前で食うな!!」

汁を飲み干す零余子。

「もう食べきったもんね。てか轆轤の麺延びてるけど」

「イイ!?!」

轆轤が自分の丼を見ると麺が延びきっていた。

「俺とした事が・・・この俺とした事があ・・・」

轆轤は黙って延びてる蕎麦を食べた。

## 恋愛編 Forever

## 過去編 接着大作戦

津上明悟17歳。

生まれて初めて・・・まあ12歳以前の記憶が無いわけであるが、初めて人を嫌いに  
なりかけてる。

その人物の名前は、胡蝶カナエ。

根は良い人なのは理解しているが、無駄にお節介な所が苦手だった。

胡蝶カナエ15歳

とある人物を死ぬほど嫌いになりかけている。

その人物の名前は、津上明悟。

根は良い人なのではあるが、無駄に響感を言う言い方と任務時に1人で何処かへ行つ  
てきてはさらっと成果を上げる癖があり、カナエは何回かつけても無理矢理撒かれてす  
んなりと成果を持つてくる。

なんとなく、非常に癪である。

明悟の銃鳥を取っ捕まえて秘密を吐かせようと内心考え中である。

※因みに明悟の銃鳥は明悟以上に公私を徹底的に分けるタイプであり、明悟との仲は互いに最低限のプライベートゾーンを守ってる為か結構仲は良い。

雑食ではあるが、死んでも虫類は口にしない主義。

相棒の明悟に似てかなり食にはうるさい。

そんな中で2人はまた一緒に任務を任せられて仕方なく一緒にいて目的地に向かって走っている。

「明悟さん、今日は絶対に離れないで下さいよ」

「成果が上がってるから良いじゃん」

「そういう問題ではありません！連携が取れてないと危険だから言っているんです！」  
「鬼殺隊士は1人の行動が多いから誰かとの連携なんて意味無いよ」

明悟は渴いた笑いをする。

アギトの力はばれさせないと耀哉やあまねと約束したので、戦闘時には離れて1人で行動した方が生存の確率も上がる。

ましてカナエはべらぼうに強い。

変身してたら負ける事はないが、変身して無かったら逆立ちしても勝てないだろう。故に明悟はあまり、カナエと一緒に行動したくなかった。

「一人で死にかけてたのは何処の誰ですか？」

初めて出会った時の事を聞くカナエに明悟は何も答えずにとにかく無視して先に行く。

そんな態度にカナエが更にイラツとするが任務が先なので我慢する事にした。

今回の任務は森に入った人が突然と消えるって内容でいつもの鬼のパターンと一緒だったが少し違った。

何でも居なくなつた人を見つけた人はその人の形をした人面樹を見つけたらしい。

しかも人面樹から声が出て驚き、そのまま逃げていったらしいので、どう聞いても人間業ではなく、血鬼術が絡んでいた。

明悟とカナエは目的地の森に着く。

夜も非常に遅く、もうすぐ朝になるであろう時間帯だが、2人は森の中に入って取り敢えず、その人面樹を探す。

「しかし、人を人面樹にする鬼とは何ともえげつない方法を取るね……そんな鬼でも君は仲良くしようとするの？」

明悟はカナエを見る。

カナエにある夢、鬼と人が仲良くする事が夢だ。

だが、そんな夢は実現不可能だ。

鬼と言う怪物となった存在は何処まで行っても怪物だ。人を襲い続ける怪物が鬼。

明悟は割りとドライな考え方をしながら、カナエの夢を出来る限り否定しないように接していた。

明悟にはまずそんな夢自体がないから、自分の夢を持てるカナエは単純に羨ましいと思っていた。

「なれますよ。きつと・・・私は諦めません」

「凄い根性」

軽く話をしながら歩いていると、やがて不自然な挟られ方をしている樹を見つけた。

まるで何か大きな獣に咬まれたかのような傷だった。

「熊か？これは・・・」

傷に触れる明悟。

「アアアアアアア・・・」

裏から妙な声が聴こえてくる。

明悟とカナエはすぐに裏に行くと、そこには人の顔があった。いや、人の手足もあり、まるで樹に人が無理やり融合されると言った感じである。

酷い光景に2人は嫌な気分になり、辺りを見渡す。

異常な状態、明らかに血鬼術による物だった。  
警戒する2人。

突然、ガサツと物音がして2人はそつちの方向に刀を向ける。

そこに居たのは女の鬼で片方の眼には下肆と刻まれていただった。

「鬼殺隊」

「十二鬼月・・・今すぐにこの血鬼術を解け！」

「残念だけどそれは出来ないわ」

「何故なの？」

「私の血鬼術じゃないから。私の息子の血鬼術よ」

女の鬼がそう言うのと女の後ろから齡十にもなっていないほど幼い子供がひよこつと出てくる。

「おつ母、大丈夫？」

「大丈夫よ、貴方は安心して後ろに下がってて」

幼い鬼はそのまま隠れる。

すると女がとてつもない気迫の籠った眼で2人を睨む。その姿に2人は十二鬼月だと言ふことを嫌でも知った。2人の体から滲み出てくる冷や汗がそれを証明していた。

「私の大事な息子に指一本でも触れさせない」

女の鬼は両腕を剣にして2人に襲いかかる。2人は女の鬼の初手は

防ぐがすぐにまた斬りかかる。明悟は2人から離れて変身しようか考えるが、十二鬼月は無惨が12人だけと選りすぐった存在。下から数えた方が早い鬼でも一切の油断は出来ないし、離れてもしもカナエが死んだらと考えると流石に胸くそ悪い。

明悟は離れて変身できずに生身でカナエと一緒に戦うが今まで互いの戦いかたを見ていなかった為、上手く連携が取れない。

鬼にあしらわれてぶつかかるカナエと明悟。

「明悟さん、邪魔です！」

「邪魔のはそっちだつて！」

息の合わない2人。

それぞれ互いにイライラしながらも女の鬼を倒すために向かつていくがあしらわれまくっている。

その状態に明悟は違和感を覚えた。

「なぜ、俺たちをすぐに殺さない？」

「私達の邪魔さえしなければどうでも良い。大人しくこの森から出ていきなさい」

「人を殺してなければな。十二鬼月になつてゐるって事はどれだけ人を食べた？ふざけるな。今こゝで倒す」

明悟の言葉に女の鬼は何も言わない。カナエはどうするべきか少しだけ迷うが同じように女の鬼に刀を向ける。

「血鬼術 乱れ刃」

女の鬼の手から刃が飛んでくる。

明悟とカナエは避けて、女の鬼に斬りかかる。

明悟は左腕に刀を持ち、カナエは右手に持ち、挟み込むように女の鬼の首を斬りかかる。

「おつ母！血鬼術 輪鳥餅」

幼い鬼の腕から餅のような物が飛び出して、明悟の左腕とカナエの右腕の手首をくつつける。

その程度で止まる2人ではなく、互いに刀を放り投げて逆の手に持ち、息を合わせて反転するそしてそのまま挟み込むように斬ろうとする。

「血鬼術 輪鳥餅」

また餅のようなもので逆の手首もくつつけられる。

互いに近距離通り越して体が向き合ってくつつく程に近い状態で接着させられる。

「おつ母！」

「坊や、来ちゃダメ！」



「速く逃げよう。もうすぐ朝だ！ やい、鬼狩り、それは1日経つと完全にくつついて2度と取れねえ。ざまあみやがれ！」

「嘘!？」

自慢なのかよつぽど腹が立ったのか分からないが幼い鬼が説明した血鬼術の効果はえげつなかつた。

1日経てば永遠にくつついたままの2人。

そんなのは互いにごめんである。

「おつ母、速く！」

「わかつたわ！」

逃げてく2人の鬼。

明悟とカナエはすぐに後を追おうとするが息が全く合わず、倒れてしまう。

互いに向き合った状態の拘束なので倒れると横になるか、どちらかが下になるしかない。

そしてこれは倒れてカナエが下になり、明悟が上に乗つかる状態になってしまい、気がつくお互いの唇が後、数ミリほどでくつつきそうな距離。

カナエは防衛本能が働いたのか、明悟の無防備になつた男の急所に思いつきり膝蹴りをしてしまう。



ずに跳ね返されてしまう。

あれから、2人は上手く人混みを避けて羞恥心にも堪えながら、藤の家にとどり着き、事情を知った女将が包丁から始まり、ノコギリ、日輪刀、そして斧で斬ろうとするが全く斬れなかった。

2人はため息をつく。

どうしようかと考える2人。

実はこの時、2人の頭にあつたのは1日経てば永遠に繋がったままと言う事実よりもっと早くに問題になる事実だった。

「カナエちゃん」

「明悟さん」

「「厠（どうしよう／どうしましょう）？」」

それはトイレだった。

互いに同性だったら全く問題なく出来たが、異性だと話が違う。しかも互いに距離がある人間で普通に見られるも聞かれるも両方嫌であり、マジで深刻な問題だった。

「それならば解決する方法があります」

「どうするの？」

女将は明悟に目隠して鼻にも栓をする。

「ちよつと何するの!？」

「これで後は耳にも栓をして気絶させれば相手に全く知られずに済むことが出来ます。お一人でしにくかった場合は私が手伝いますので」

「そんな!!」

「他に方法がございますか？」

2人は他に方法をすぐに考える事も出来なかつたのでそれを甘んじて受け入れる事にし、頷いた。

そして明悟が最初に気絶させられた。

あれから暫く経つて明悟とカナエは互いに利き腕に筆を持って両端にある紙に文字を書こうとしていたが、全く動きが合わずに出来ず、出来たとしても非常にくつたくな文字になり、酷い有り様だった。

「ちよつと、痛いから無理に引つ張らないでください!」

「引つ張つてんのそつち!」

喧嘩も絶えない。

「こんなんじや、一生このままですよ!?!」

「分かってる。だからやってるじゃん!」

「ならこつちに合わせてください!」

「そつちも合わせてよ、勝手に動かないで!」

「勝手に動いてるのは明悟さんです!」

「いや、カナエちゃんだ!」

睨み合う2人。

そしてイラつきが限度を越えたのか互いに反対方向を力強く振り向いて反らす。

「息をすぐに合わせるのは無理ですよ」

一部始終を見てた女将が2人にそう言う。

2人は女将の方を見る。

「どんなに達人でも最初は素人、教えられるか場数を踏まなければいけません」

その言葉を終えると女将は立ち去っていく。

2人はもう一度やろうと筆を構える。

「カナエちゃん、自分の書く文字を教えて」

「わかりました」

2人は息を整えて筆を走らせる2人。

「光」

「こつちは花」

互いに文字を言い合う2人。

明悟はカナエが書いてる文字に完全に腕を合わせる。

一方のカナエは・・・

「次は横、次は縦が2回、斜めに一本・・・」

と明悟の細かい指示に従っていた。

書き終わる2人。

互いの文字を見るとビシツと締まった文字になっていた。

「よし！」

互いに声が重なりあい、喜ぶ。

初めて息を合わせようとして合わせたのが嬉しかったのか、喜びの声を上げた相手を見つめる2人。

暫く見つめてると気恥ずかしくなったのか、顔を反らす2人。だが先ほどの反らしとは違っていた。

「よし、もつとだ！まだまだやるよ」

「はい！」

それから夕方まで2人は特訓して息を合わせて、女将はそれを黙って見ていた。



一方森では、幼い鬼が喜んでいた。

自分でも女の鬼の役に立つことが証明できて嬉しいのだろう。

「坊や、落ち着いて」

「だっておつ母、あの2人を思い出してよ、オラが2人をあんなにしたんだよ。オラだつてもう戦えるよ」

「気持ちには嬉しいけど、隠れてて」

女の鬼の心配する声が幼い鬼の耳に入るが、役に立つことを証明できた鬼にはそれが不満だった。

「なんで、いつもオラを信用しなくて・・・」

「坊や、貴方が大切だからよ」

「オラだって、もう子どもじゃないやい！」

「まだ子どもよ」

「うるさい！」

幼い鬼は女の鬼の四肢を地面とくっつけてしまう。

「坊や！」

「おつ母はそこでオラが帰ってくるのを待ってて！オラだって出来る！」

夜になり、飛び出す幼い鬼。

女の鬼は幼い鬼の無事を祈ることしか出来なかった。



森の前に来る明悟とカナエ。

互いに息が合うようにはなったがそれだけであり、戦闘でいけるほどにはならなかった。



「カナエちゃん、俺に合わせてくれないかな。どう考えても君の方が全て上で逆立ちしたって敵いつこない。その状態で息を合わせるなんて俺には無理だ」

「なら、指示は明悟さんが出してください。先ほどの指示も見事でしたし……信じてますよ」

「任せろ、信じてくれ」

2人は森に入り、幼い鬼を探す2人。

いつもとは違う状況な為、警戒を最大にする2人。

すると明悟のアギトの超能力で危険を察知する。

「右に避ける！」

明悟の一言にカナエは従い明悟の動きに合わせて上手く避ける2人。

「あれ、おかしいな？」

幼い鬼が避けられたことに疑問を感じるがすぐに2人向けてまた放つ。

「左、右、右だ、今度は左！」

的確な指示で避けまくる2人に幼い鬼はイライラし始める。

「いい加減当たれ！」

「当たるか、俺達のこれを外せ！」

「やなことだ」

あつかんべーと何とも子どもらしいことをする幼い鬼。

その姿に2人は心を痛めるが、これ以上の被害を出せないし、永遠に繋がったままなのも嫌なので刀を振るう。

互いに右手で持ち、相手の手がそれを支えるように両端に刀を持って斬る。斬撃が入り、血を流す幼い鬼。

「いい加減、死んじやえー！」

「断るー！」

「それは無理ー！」

飛んでくる鳥餅を切り落とす2人。

幼い鬼はまだ自分で何とか出来ると思ひ鳥餅を放つが2人にはもう効果は無かった。

「回転だー！」

「はいー！」

両端の刀を名一杯伸ばして、幼い鬼に向かって飛び込み空中で回転し始める2人。

「花の呼吸 陸の型 渦桃」

「「回転!!」」

2人の息の合った呼吸で幼い鬼の首を切り落とす。

幼い鬼は痛いのか、泣き出した。

「痛い……痛いよ……おつ母……どこ?……寂しいよ……おつ母……助け……」  
幼い鬼はそう言いながら死んだ。

それと同時に2人を繋げていた鳥餅は消えたが、幼い子供を殺した事実は2人の胸を締め付けて、2人は手を合わせて成仏するように願い、森を後にした。



女の鬼が森の中を全力で走る。

「坊や……坊や!」

自身を拘束していた鳥餅が消えて悪寒が全身に走り、無事を祈るように幼い鬼を探  
す。

きつと血鬼術が消えたのは、幼い鬼が自分から解除したのに決まってると思つて……  
しかし、彼女の目に飛び込んだのは、幼い鬼が着ていた着物が地面に落ちてるだけ

だった。

何がどうなったのか彼女はすぐに理解して、その着物を抱き締めて、泣く。

そこには鬼も人間もなく、ただの母親しか居なかつた。

「よくも・・・よくも・・・よくも！」

そして母親の恨みは頂点に達する。

「殺してやる・・・」

愛した故に恨みまで発展した怒りが明悟とカナエに向けられた。

## 過去編 花柱 胡蝶カナエ

あれから、明悟とカナエの仲は少しは良くなった。少なくとも前に比べて喧嘩は少なくなりはしたが、任務になるとやはり明悟はアギトの姿が見られたくないのか離れようとするがカナエも完全に目を離さず、結果的に明悟の生身の戦闘力が上がってきた。

そして2人の距離感も変わった。

互いに互いがなんとなくであるが、息が妙に合うようになってきた。

それに最初気づいたのは藤の家の女将だった。

天ぶらを食べてる時、味噌汁、天ぶらに御飯と言う食べ方が2人とも全く一緒に無自覚にやり、女将から

「仲が良いでございませうね」

と言われて初めて気がつき、赤面する羽目になった。

それで互いに違った意味で距離とかそういうのを感じるような間柄になった。



その日もカナエは朝起きるとまず、ゆっくりと体を解して寝巻きから、任務着というかもはや普段着に着替える。

明悟とあの接着された事以来、カナエは寝巻き姿では明悟と朝会っていない。明悟も寝巻き姿では会わなくなつた。

何となくであるが2人ともあれだけ密着した故か寝間着を見せるのが恥ずかしくか、キチンと着替えるようになった。明悟もカナエも早起きである。

しかし、互いに普通に会話にもユーモアはある方で、からかうのが結構好きである。明悟もカナエもそこらは最早遠慮と言う物がなく、互いに相手より朝早く起こして少しだけからかおうかな？と考えて着替える。

カナエはそう考えた上で明悟の部屋に向かうが、上述した通り明悟もカナエをからかう気満々なので2人とも互いの部屋から全く同じ距離を歩いたら、会う。

今日もそうである。

2人はまた互いの部屋のだ真ん中で朝早くから会う。

「お、おはようございます」

「おはよう。今日も・・・早いね」

「明悟さんだつて」

互いにここから何を言えいいのか分からない。

いつその事、相手が先に言つてくれれば楽に話に繋げる事が出来るのに。

しかし、この沈黙を毎回破るのが・・・

「もし、鬼狩り様方」

「わあ!」

決まつて女将である。

「2人ともおはようございます」

「お、おはようございますー!」

「相変わらず、仲の宜しいようで夫婦でございましたか?」

女将がそう言うと、

「い、いやそんな俺達はそんなんじゃないですよ。ただの同僚で他人です」

明悟がそう言うと、

(他人つて、この前私が助けましたし、誕生日だつて私が決めたんですからもつとこう別の言い方あるでしょ!)

カナエがこう思い、

「ええ、そうです。全く何の関係もない赤の他人です」

と女将にカナエが言うと、

(そこ強く言う必要がある？この前の任務で後ろから襲ってきた鬼を斬ったのは誰だよ！)

と明悟が思い、互いになんか少しだけイラつく。

「お似合いでございますよ」

「違う！」

朝から絶対に女将からからかわれる2人である。



朝御飯になると2人は横並びに食べるようになった。これだと喧嘩すると一々相手の顔を見ずにすむから喧嘩の頻度は勿論なくなつたが、相手の顔は見たい。

幸せそうに食べてる姿が見たい。

相手も知らない自分だけが知ってる相手の顔。

それが見たいのか時たま、2人は相手の顔を見ようとするがそこは気配に敏感な明悟



と鍛えられてるカナエ。

見ようとしているのが分かり、自分だけ見られるのは癪なので目線を合わせて相手を牽制するように見てしまう。

それに気づくと慌ててまた戻す。

そんなのを繰り返す2人。

そして、2人は体を休養し終わると任務に戻る。

互いに会話は増える。

しかし、体は相手に触れたくないのか人1人分離れて歩く。

相手との会話は楽しい。

明悟もカナエも互いに博識である。

特に明悟が本好きであるのが幸いなのかよく本の話もする。

日本の小説もあれば海外の小説の話もあり、「罪と罰」とかの話も面白いと思うし楽しいと感じるが、カナエが明悟と話してて一番好きなのが凶鑑等の話である。

虫なり動物なり、様々な物事を楽しそうに話す明悟を見るのが楽しかった。

明悟はカナエの話で楽しかったのは小説とかの話ではなく、家族の話だった。一緒に生き残った妹との思い出話は楽しくそして強さを感じ、人と繋がる事が苦手な明悟にとって2人の繋がりは羨ましいと思った。

ただ、カナエが現岩柱である行冥の話を楽しそうに話す時は明悟には全く面白くない、止めて欲しかったがあまりにも楽しそうに話すカナエには何も言えず悶々と過ごす羽目になる。



2人は任務地の村に着く。

昼間に着いたので情報を集めようとするが、その必要は無いほど村人は怯えていた。

村の入り口で分かるほど明らかに今までの鬼の任務とは違っていた。

2人は別れて詳しい事情を聞いて回って整理した。

・2ヶ月ほど前から近くの山に夜に入った人間が無残に殺されてて熊かと思ひ男の村人だけで熊狩りしたが、何も成果はなくて夜に山に行くのは禁止した。

・そして先日、夜に村を歩いてた人間が村の中で殺されて悲鳴を上げて他の村人が見

てみたら、全身から刃物が生えてる化け物を見て、化け物はそのままだらめつたらに刃物を家にぶち当てるだけで他の村人には傷一つつけずに山の中に帰っていった。

この2つの情報を見るにカナエと明悟は1つの答えに至った。

「明悟さん」

「カナエちゃん・・・間違いなくこれって」

「誘い込まれています。鬼がむやみに殺すだけで一口も食べてないのは可笑しい」

「つまり、敵の狙いは鬼殺隊」

そこまで答えが出ると2人の行動は迅速だった。

まず、手元にあるありつたけの藤の花で作られたお守りやお香を破ったり、火をつければすぐに香りが出るようにして村の周りを囲んだ。

そして夜になると2人は村と山の間に周りが田んぼだらけな道があるのでそこに陣取る事にした。

下手に行くよりは相手への対策を立てられて良くなる。また田んぼは刈り終わって少し柔らかいだけの土になってるので寧ろ山よりだっ広いこの状態は避けやすくして充分アドバンテージになる。

2人とも火薬や暗器の知識もなく、それを習練したことがないので武器はいつも通りの刀が二本だけである。明悟はアギトへの変身もあるが、今まで以上にカナエの前では

変身したくなくなり、この状況で相手に見られなくなるまで離れるのは愚策なのでガチで刀二本だけである。

明らかに鬼殺隊を狙った行動で明悟もカナエも今までとは違う敵に緊張が走る。そして前の方から歩いてくる音が聴こえてきて互いに刀を構える。

現れたのは以前に出会った下弦の肆であった。

2人を見た瞬間、肆は笑った。

あまりにも不気味で2人の体に悪寒が走る。

「漸く会えた・・・仏つてのは居るんだね、あんた達に会えるなんて・・・」

肆はそう言うと2人に向かって飛び込んでくる。

「血鬼術 全身刃」

空中で全身から触手の刃を出して攻撃してくる。

「花の呼吸 弐の型 御影梅」

カナエは呼吸でそして明悟はアギトの超能力で避けるが明悟は左腕を思いつきり直撃ではないが斬られて、カナエは脚に刺さってしまう。

2人とも膝をついてしまう。

肆は笑顔を向けたまま2人を見ると笑顔を消す。

「よくも私の大事な坊やを・・・あんた達は死んでも許さない」

2人はそれに沈黙で答える。

2人は確かに悪鬼を殺した、しかし悪鬼にも愛する家族がいた。大事な人を奪ったと言ふ事実は事実。

本来の鬼殺隊ならば反論は出そうであるが2人には出なかった。

下弦の肆とかそう言うのは関係なく2人は肆から家族を奪ったのである。

しかし、それでも2人は戦う。

大義名分など興味の欠片もない。

2人が戦う理由は誰かを悲しませない為だけである。

その為なら2人とも悪党でも怪物でも畜生でもどう呼ばれてもかまわなかった。

だから2人は沈黙する。

立ち上がる2人。

「血鬼術 全身刃」

また来る刃の触手。

2人は何とかそれを斬っていくが手数で負けてしまい、何とかギリギリ防御するが弾き飛ばされてしまい、地面をゴロゴロと転がる2人。

あまりの強さに明悟は変身しようとする。

強すぎるし、何よりもこのままでは2人ともあの世に行く可能性が高い。ならば変身

して嫌われても死んでもカナエだけは絶対に生かすそう覚悟して明悟は変身しようとする。

「明悟さん！」

がベルトを出そうとした瞬間にカナエが明悟を止める。

「カナエちゃん……」

「明悟さん、悔しいですが私だけでは絶対にあの人を倒せません」

「……」

「だから、明悟さんに私の命を預けても良いですか？……あの血鬼術は1人では捌くことも完全に防ぐ事も出来ませんが……」

「2人ならか……分かった。俺も君に命を預けるよ」

明悟はカナエの目を見てそう言い、変身せずに立ち上がる。

カナエも明悟の目を見て立ち上がる。

刀を構える2人。

肆はその2人を見て笑う。

片方は腕を負傷して刀を持つが力があまりの入ってない。

片方は脚を負傷して立つのもやつと。

これで逆転を狙う方がどだい無理な話である。

「死ね！血鬼術 全身刃！」

刃の触手が飛んでくる。

先程までと一緒だったら2人はまた吹き飛ばされていたであろう。

しかし、2人はそれを切り落としていく、先程とは違い互いに前に集中し、互いに互いの死角を警戒し攻撃を防御して守りながら2人は肆に向かつていく。

そして全てを切り落とし、肆に斬りかかるがカナエは足の負傷が響いたのか止まってしまう、明悟もそれに気づいて中途半端になり、肆はその隙について後ろに飛んで離れる。

(よし、これで回復して……)

「俺達をナメるな！」

明悟は肆にそう叫ぶと右手でカナエの手を掴み、回転していく。生身で出せるアギトの力を全て使って明悟はカナエを肆に向かつて投げる。

猛スピードでカナエが肆に向かつて飛んでくる。

肆はその事に対処できない。

「花の呼吸 壱の型改 超飛・花車！」

カナエが肆の首を切り落とした。

着地をミスリゴロゴロと転がるカナエは地面に落ちてきた肆の首と目が合う。

「絶対にあんた達を私は許さない。私から全てを奪った……」

「私達はあなた達を殺した罪から逃げるつもりはありません……最後に1つだけ聞いて良いですか？」

「何よ？あの方の事を喋る気は無いわよ」

「いえ、なんで弱くなつてたのですか？」

その質問に肆は目を少しだけ開いて諦めたのか淡々と話した。前回戦つた時はカナエも明悟ももつと手強いと感じていた。明らかに2人が強くなつてただけでなく、肆はどうみても強さが止まっていた。人を食べれば強くなり続ける鬼としては疑問が残る。

「私は特殊体質でね。人を食べれないんだよ。だから、坊やが血鬼術で人と木を融合させて木を食べてたんだよ。あの子がいたから私は強くなり、あの子を守る為に私は十二鬼月になった。あの方もそれを理解して私達の家族の繋がりは絶たないでくれた……それをあんた達は奪つた……」

涙を流しながら話し怒る肆。

その姿は鬼とか人間とか関係なく1人の母親だった。1人の息子を愛していた母親の姿だった。

カナエは肆のその意志に罪悪感を感じるが鬼殺隊は決して鬼のやる事を許してはいけないし、カナエもその事を許すつもりは欠片もない。



罪悪感と鬼殺の意志のジレンマにカナエは涙を流す。

その涙を肆は確り見た。

「あんた、泣いてくれるのかい？」

「もつと、あなた達が罪を犯す前に会いたかったです」

カナエの言葉に肆は静かに答える。

「……何年ぶりかな？ 私に泣いてくれるのは……」

「それでも私はあなた達のやった事は許しません」

「涙を流しながら言うんじゃないよ……まさか、最後に斬られたのが鬼狩りの夫婦だったとはね」

「夫婦じゃないです」

「でもあいつ、絶対にあんたに気があると思うよ」

「……」

肆の言葉にカナエは沈黙して、肆はそのまま灰になった。そしてカナエを投げた明悟が歩きながらやってきて、カナエに手を差し出す。

「大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

「でも目が赤いよ」

明悟の言葉にカナエは大きく息を吸って吐く。

「別に良いじゃないですか、あの人の為に泣いたって」

「……そうだね、立てるまで回復したら、この人とあの子の墓を作って弔おう……この母子も鬼に運命を狂わされた人だから」

明悟はそう言うのと肆の着ていた鮮血に染まった着物を折り畳む。あの幼い鬼の時は十二鬼月である母親がいつ来るか分からず手を合わせるしか出来なかったが明悟は今回はキチンと墓を作る気である。

明悟は親との記憶がないから肆の怒りを心の底から理解していたかは自分でも疑問に思っているが、その罪から逃げる気なんて更々無かった。

カナエはその着物を折り畳んでる明悟の姿を確りと見ていた。



それから1週間後、カナエは蝶屋敷にいた。

隣には岩柱の行冥やカナエのすぐ前に柱になった天元や他の柱達もいた。

「では、胡蝶カナエをこれより『花柱』に任命する」

「ありがとうございます」

まだ両目が見えてる耀哉にカナエは同じように肆を倒すのに貢献した明悟の事を聞こうと顔をあげるが、耀哉はその事に気づき、指を自分の口に当てる。

なんとなく事情があるのを察したカナエは明悟があまり鬼殺隊では評価されてない事に悲しくなった。

実際には柱任命の指令をアギトの力を理由に明悟が蹴って、次に位が高い甲で充分と言い、耀哉とまたそれで喧嘩しただけであるが・・・



カナエが柱を襲名した事で宴会になる。

貴重で重要な位置に相応しい柱を任される事になったのだ景気づけとしての宴会である。

本来ならば明悟の時も催される筈だったがとてもそんなのをやる気はあの時の全柱にそれは無かった。

カナエが柱になつた事で喜びと悲しみの両方を感じてる行冥はいつも以上に大泣きして酒を飲むが坊主なのが災いしたのか一口で倒れて隠が3人係りで自宅に送り、天元は最初の少しだけ参加して少し酔つてから自宅に帰つた。まだ15歳のカナエは酒は飲まないでおこうとして飲まなかったが、行冥もいないし、付き合いもあるので行冥と天元が帰つて宴会も終盤に差し掛かつた時にあくまでも付き合いとして一杯だけ飲むが無茶苦茶酒に弱く、また倒れた。

カナエは酔つたので用意してもらつた自宅に帰ろうと草履を履こうと玄関に行く。しのぶが任務でいないので

「カナエ様、大丈夫ですか？」

あまねがカナエを心配して聞く。

「大丈夫ですよ」

呂律が回つてないので明らかに大丈夫ではない。

すると、耀哉と喧嘩して起きながら今の今まで屋敷にいて晩御飯と風呂を貰つた凶々

しい明悟が玄関にやってくる。

「あ、明悟さんだあ」

「明らかに酔ってるね……」

「酔ってませんよ」

「明悟様、カナエ様を自宅までお送りしてください。どうせ暇でしょ」

「あまねちゃん、相変わらず俺に対しては冷たいね」

「だって明悟様ですし……今更じゃないですか？」

「あや、そうだけどさあ」

気軽に親しそうに軽口を言い合いながら話す明悟とあまね。それを見ていた酔っぱらいのカナエは黙って明悟の手を握る。

「どうしたんですか、花柱様」

意外に上下関係（自分が下な場合）は確りしてる明悟にカナエはじとつと睨む。

なんで睨まれてるか分からない明悟はその事に首を傾げるが、あまねはその理由が1発でわかった。

「ではお願いしますね」

あまねはそう言うのと玄関を後にした。

「では、お屋敷までお送りしますよ」

あくまでも仕事として処理してゐる明悟にカナエは凄く不満であつた。

草履を履く明悟にカナエはフラフラしながらも明悟と一緒に玄関を出て暫く歩く。

やがて屋敷も見えなくなり、カナエはまだ足の負傷が治りきつていないのか、足を抑える。

「大丈夫ですか？」

これまた、明悟は敬語で心配する。

何処までも他人行儀な明悟にカナエはイラツとしてその場に座る。

「……おんぶ……」

「は？」

「……おんぶして……いつもみたいに」

「いや、あれやったの一回だけで……」

「いいからやりなさい！」

怒鳴るカナエに明悟は言うことを聞き、カナエをおんぶする。

カナエは前の時とは違い、明悟の背中で思いつきり安心する。

「明悟さんの背中、暖かい」

「それはどういたしまして……花柱様」

「……カナエ……いつもみたいに」

「いや、でも・・・立場が上になったので」

「・・・明悟さんなら良いです・・・カナエじゃないとやだ」

「・・・カナエちゃん、男にそんなに甘えるのは危ないから止めた方が良いでしょう」

「私が誰に甘えようが明悟さんには関係ありません・・・」

「心配して言ってるのに」

「心配してもらわなくて良いですよ」

「こりゃ、あまねちゃんが心配するのも無理ないな」

明悟から出たあまねの言葉にカナエは先程の親しそうな関係を思い出してなんとなくムカムカした。

「あまねちゃんって・・・随分親しそうですね」

「そりゃ・・・まあ・・・」

耀哉とあまねとの関係を言って良いか迷う明悟は言葉を濁すがそれに対してまたカナエはムカムカする。

「あまね様は美人ですもんね」

「まあ、美人で気前が良くて強いし、料理や家事類も無茶苦茶出来るけど・・・痛い痛い痛い！」

あまねを褒める明悟にカナエは耳を引っ張る。明悟としてはこれからあまねの問題

点を言おうとしたのに凄く腹が立つ。

「ちよつとどうしたの!?!俺なんかした?」

「知りません!」

「・・・もう・・・」

カナエを家に・・・蝶屋敷に運んだ明悟はカナエを下ろす。

「それじゃ、俺はこれで行くね」

去ろうとする明悟にカナエは手を掴んで止める。

「ん?」

「今、妹が居ないので・・・」

「だから?」

「朝まで一緒に居てください」

「はあ!?!」

「ダメですか?」

上目遣いで聞くカナエ。

明悟としては夜分遅くに女の家に入つて尚且つ2人だけと言う状況が凄く嫌だった。

カナエは超がつくほどの美人。



明悟とて男。

ぶっちゃけるとその状況で我慢できる自信なんて微塵の欠片もなかった。

「俺、男で君は女性で夜遅くに2人だけ……これ以上は言わなくても分かるよね？」

「私……明悟さんなら良いですよ」

カナエの言葉を聞いて明悟は無理なりカナエの手を外す。普通の男なら完全に野獣になる。明悟も少し理性が飛びかけるがもしもやったら後々が大変な事になると爪楊枝並みの鋼鉄な理性で堪える。

「俺は酔ってる相手とは絶対にやらない」

明悟の明らかに拒絶した言葉にカナエは酔ってる頭を少し冷静にさせて諦める。

「そうですね……すみません」

「全く、そんなのは酔ってるあまねちゃんでも言わないよ」

また出たあまねの言葉、しかも酔ってる時を知っていると言う明悟にカナエは明悟と耀哉とあまねの三角関係をまだ酔ってる頭で想像してしまふ。

実際には、あまねは酔うとかなりドSで尚且つ手が早くなるのでそんな色っぽい事は一切言わずにストレスの主な原因である明悟を物理と言葉でボコボコにするので、単純に酔ってても言わないってだけなのだが、そんな事実を知らないカナエは想像を更に発展させてR—18なドロドロとした肉体関係プラス背徳的な三角関係と勘違いして、肉

体的に繋がってる明悟とあまねを想像してしまう。

それに無茶苦茶腹が立ったカナエは無意識で明悟の頬を殴る。

殴られた明悟はぶっ飛び、地面を転がる。

明悟は突然やっつたカナエを睨むが今までで一番の睨みをするカナエに少しビビる。

「もう、明悟さんなんか知りません！女性にここまで言わして・・・2度とこんな事、明悟さんになんか言いませんからね！」

殴られた明悟にとつては理不尽でしかなく、カナエに対して怒りが出る。

「だからって殴るか!?此方だつてごめんだよ！」

「言いましたね!?なら2度と言いませんし、明悟さんが求めてくるまで私はその気も出しませんし、絶対にそう思わせないですからね！」

「俺だつて君みたいな暴力的な子に求めるか!!男はなあ、優しくて遅い子に本能的に求めるんだよ！」

明悟の言葉にカナエはおしとやかで優しく遅い子を地で行くあまねといちやつく明悟をまた想像してしまう。

実際にはジャーマンスープレックスだったり、ヘッドロックされて命の危険性を感じてる明悟だったりするが、そんな事実を知らない上に酔って冷静では無くなったカナエは怒りを隠そうとはしない。

「明悟さんなんて、大嫌い！」

明悟もあまりにも理不尽すぎるカナエに怒りが止まらなくなる。

「こつちだつて大嫌いだ！」

そのまま2人は喧嘩別れをして寝る。



翌朝、

「私のバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカあ!!!」

「俺のアホアホアホアホアホアホアホアホあ!!!」

と同じように布団の上で冷静になった頭で昨晚の喧嘩を後悔してその下らなさすぎる内容に悶絶してる2人であった。

後日、互いに謝って仲直りしたが、ねる云々の件は両方とも言わず、変な関係になつ

た2人であつた。

# 吉原灼熱編      your song

## 因縁と宿命

津上明悟・・・18歳

カナエが柱に就任してから半年経った。

自宅は鬼殺隊専用の病院となり、鬼殺隊ならば誰でも受け入れられてるが、明悟は今まで通り、藤の家で療養してる。

あの大喧嘩以来、2人は疎遠になった。

任務自体の内容が激変したし、あの喧嘩のせいで互いに顔を会わせづらくなったのだ。

冷静に思い出して欲しいが、カナエが酔っ払って明悟に迫り、明悟は「酔ってる女」とはやらないと言い、売り言葉と買い言葉の喧嘩になったのだが、「酔ってる女」とはつまり「酔いが覚めてればやる」と言ってるようなものであり、カナエも「明悟さんが求めてくるまで・・・」、求めてきたらやると言うような感じである。

因みにこれをやった時の翌朝の2人の心境であるが、

（私のバカ！何よ、求めてくるまでつてそれじゃ完全に気がありますよつて事じゃん！）

(俺のアホお！なにカッコつけて酔ってる女とはやらないだよ！酔っていなければやるって事じゃん！)

と自分の言った言葉に悶絶し、

(酔っていなければ……あの晩……)

(今からでも求めれば……)

2人は相手の言葉を思い出して仲良く想像する。

言った言われた事の重要さもとい内容のぶつ飛び加減に2人とも顔を真っ赤かにする。

どんなバカツプルでもここまでは中々ない。

2人はそれから仲直り自体はしたが、それ以上は何一つやってない。さっさと付き合えば良いのであるが、

(なんか、自分から行くのは嫌だ)

と変な所で天の邪鬼になり、そのまま平行線である。

唯一の救いは2人がこの関係の事を誰1人にも話してない事だ。恥ずかしいし、何よりもこんな下らなさすぎる話で人を捲き込む自体、馬鹿馬鹿しすぎると2人は感じていて話してない。

因みにカナエの妹であるしのぶは喧嘩した後の朝の寝起きの朝風呂呂に入る前のカナ

工から漂う男の匂いを感じて問い質したらはぐらかされたのでカナエに何か引っ付いてると感じてる。

―その頃、蝶屋敷―

カナエが一人、道場で悶々としながら明悟が怪我とかでなく普通に気軽にやってこなかと期待と心配の両方を感じていた。

(もう、なんで来ないの!?!女性にああまで言わせて来ないなんて本当に男なの!?!・・・でも軽い女と見られるのも嫌だし・・・いや、明悟さんはそういう人じゃないか・・・あんな事、言うんじゃないか!!)

内心、悶々としていた。

(別に私は明悟さんなんか好きじゃないし・・・あれは酔った時の間違いかなんかよ・・・そうだ、そうに決まってる!!)

この半年で一体何千回繰り返したか分からない状態になるが、そこからまた明悟を待つカナエである。

昼になり、蝶屋敷の廊下を歩くカナエ。

すると病室から話声が聞こえる。

いつもならば素通りするのだが、この日は違った。

「おい、お館様とあまね様を取り合ってる男がいるらしいぞ」

あまねの事であった。

半年前からあまねと耀哉と明悟の三角関係を勘違いしてるカナエ。そんなのは根も葉もない噂だが気になってしまふ。

「お館様相手にそんな事をするなんて・・・そうとうな奴だな」

「何でもお館様やあまね様とは古い付き合いらしいぞ」

「柱か？」

「いや、柱じゃねえって」

「そいつ、生きてるのか？」

「さあ？」

「でも、あまね様は確かに美人だよなあ」

「そうそう、お館様に不敬すぎてやる気はねえけど、超絶美人なのは間違いない」

推測だけで話を拡げてる隊士達。

それに聞き耳を立ててたカナエは更に悶々とする羽目になった。



一方、明悟は任務に来ていた。

何でも新興宗教に入った女性達が姿を消し続けてるらしいのでその調査である。

町でその噂を探しまくる明悟。

そして夜になる。

町の裏通りを歩く明悟。

「あれ？こんな夜分遅くに一体誰だい？危ないぜ」

後ろから気軽そうに話しかけてくる存在がいる。明悟にはそれに対して一気に警戒を上げた。姿が見えなくても存在の強烈さを残した。

振り向くと、女の子生首を食べてるまるで教祖のような鬼であり、目は上弦の弐となっていた。

上弦の弐の『童磨』である。

「鬼殺隊だ・・・十二鬼月か？なんて聞くまでもないな」

「察しが良いね。俺は上弦の弐の童磨。宜しく」

「断る」

「つれないな・・・で、鬼狩り君は俺をどうするのか？」

明悟はベルトを出現させて変身する。

強烈な光が童磨に火傷を負わせる。

だが、対して効かずに寧ろ突然変身した明悟に興味を持つ。

「それはなんだい？血鬼術？いや、人間みたいだから違うのかな？」

明悟はそのまま、童磨に殴り掛かるが、童磨は余裕で鉄扇でその拳を防ぐ。

何回も攻撃するが余裕で防がれて、明悟はストームフォームになるがこれも驚かれただけで攻撃は欠片も当たらない。

「血鬼術 枯園垂り」

連続の鉄扇による氷の斬撃をまともに喰らう明悟は吹き飛ばされる。

斬撃による衝撃で骨が折られてるだけですんだのはアギトの頑丈さ故であろう。

氷を使うのでフレイムフォームになり、超高温のフレイムセイバーで斬りかかる。一瞬だけ互角になるが、どんどん童磨が優勢になっていく。

防御一辺倒であるが、意地と気合いと根性だけと超感覚だけで長い時間堪える明悟。

やがて朝日が近づく。

「凄いね。君！俺とここまで互角にやりあうなんて今までの鬼狩りで一番だね。君と戦うのはなんかとてつもない快感がある！」

明悟には童磨の言ってる事が気味悪かった。

なんと言うか楽しんでる。

こんな殺しあいをしてるのにその事自体を楽しんでる童磨が本当に不気味だった。

「血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩」

巨大な氷の菩薩を出す童磨。

そしてそのまま明悟をぶん殴り、吹き飛ばした。

吹き飛ばされた明悟はあまりの威力に防御した右腕と踏ん張った左足が完全に折れる。

そしてそのまま気絶して変身が解けた。

童磨はそのまま明悟を食べようと近づくが朝日が差し込み始めたので童磨はそのまままだ薄暗い街の中へ消えていった。

これが明悟と童磨の因縁の始まりであり、最悪の未来の序章だった。

……胡蝶カナエ死亡まで後1年半……

―現在―

明悟はとある店で目を覚ます。

その店は吉原の女郎屋だ。

明悟はカナエ一筋であり、決して他の女性とは寝ない。ここに来た時に入ってきたか  
なりの美人と言うか板頭の花魁が来たがその事を伝えると「わつちに恥を欠かせる気か  
い!？」ととてつもない形相で迫ってきたが頑として断った。

但し、「やらないと生活に困るならやるけど」と完全に挑発すると「こつちだつてねえ、  
お前さんみたいない見に頼らないといけないほど安くはねえんだよ!」つて言つて出て  
いった。

勿論、明悟はそんな事をする気は更々なく、単純に追り返した方がお互いの為だと  
思つてやつた。

そもそもこんな所に来たのは、3日前まで遡る事になる。

3日前、しのぶがいけない蝶屋敷に禁止されてた菓子類をいつも頑張つてる看護師達の  
アオイ、なほ、きよ、すみや継子のカナヲに渡そうと持つてくる。

何やら騒がしい声が聞こえて来て、明悟が蝶屋敷の門を潜ると、天元がアオイとなほ  
を抱えていて、カナヲに服を引っ張られていた。

「なほちゃんやアオイさんを返してください!」

「返して!」

「うるせえな……って津上」

「くたばれ!!」

明悟は人を拐つてる天元の顔面に思いつきハイキックを嘯ますがそこは腐つても柱。

何とか避けて門の上に着地するが、頬からは血が静かに垂れる。

「てめえ、何しやがる!?!」

「こつちの台詞だ、白昼堂々と人を拐うとは恥を知れ! 耀哉の前に突き出して裁いて貰う! さあ、大人しくお縄を頂戴しろ!」

「ふざけんな、俺の用事にコイツら女の隊士が必要なんだよ!」

「だからってそんな無理矢理連れてつても役には立たないだろ! 彼女達の戦場はこの蝶屋敷だ! ……何で女性の隊士がいるか説明して」

「花街で女郎屋に潜入させるんだよ!」

「年端もいかない嫁入り前の娘に何をさせる気だ!?!」

「花街で情報を集めないといけないんだよ!」

「だったら、良い方法がある。俺が潜入する。それでどうだ!?!」

明悟の言葉に天元は冷静に頭を動かして静かになる。

「どうやってやるんだよ？」

「俺が女郎屋で遊べば良い。花街には行った事が無いから顔を覚えられてはいない」

「バカ！一見お断りの店だらけだぞ！そんなんでまともな情報が集まるか！情報収集舐めんな！」

「だとしても、戦場が違う彼女達よりはマシだ！」

天元は冷静に考える。

確かに明悟にするとまず戦闘での心配はいらない。

しかし、集められる情報の量も質も微妙だ。

だが、ここで彼女達を無理矢理連れてつても良い情報を取れるかは分からない。

「数秒ほど悩んで、天元はアオイとなほを落としてより自分が集中して情報収集できる方を選んだ。」

で、落とされたアオイとなほを助けようと明悟は飛び込むが、どう考えてもなほは兎も角、アオイには届かなかった。明悟は後でアオイに平謝りしようと考えてなほを助ける。

そして、アオイは何処からか現れたか炭治郎が鮮やかに助けてた。

「炭治郎君、お見事！」

「大丈夫ですか、アオイさん！」

「炭治郎さん、ありがとうございます！」

仲良さげな2人の姿を天元が門の上に行つてからオロオロしてたカナヲはじつとその様子を見てた。

「なんて事するんだ、この人でなし！」

「んだと、ゴラァ！」

折角ある程度話が進んでたのに別の争いが始まりそうなか、明悟はなほを離して、門の外でどうしようかと迷つていた善逸と伊之助を見つけて、喧嘩を始めてた天元と炭治郎を何とか止めた。

明悟は炭治郎と善逸と伊之助の顔を見る（伊之助には彼の素顔を思い出してた）

「天元君」

「だから止めろその呼び方！」

「彼らも連れていこう」

「はあ!？」

天元と突然捲き込まれた善逸が声を荒げる。

善逸は明悟に突つ掛かつて行くが天元は冷静に考える。3人は猗窩座だけでなく、魘夢との戦闘にも生き残つてる。下手な隊士よりは強かったが、どう見ても成人には達してないから遊びに慣れてるとは思えない。

いや、その点は明悟も一緒であるが、柱最強の行冥とタメを張れる明悟と炭治郎達では価値が違う。

「おい、どうすんだよ?」

「いや、良く見て皆美形でしょ?」

明悟はうるさい善逸を眠らして、伊之助の猪頭を取る。

天元は3人の顔を見るが確かに美形だった。

「だから・・・ああそう言うことか」

「そう言うこと!」

明悟の考えが分かった天元は笑い、明悟も笑う。

「よし、なら任せろ!」

「頼むよ。3人とも良いかな?」

3人の内、2人は元氣良く答えるがやはり善逸だけが渋るがいく場所が花街と分かる  
と掌を返した。

そして明悟は彼らと一旦別れて、昨日、客として一見を入れてくれる女郎屋で一番良  
いところを選んで入り、酒なり何なりと豪快に遊びまくって寝て起きて今に至る。

「失礼します」

明悟は二日酔い気味の頭でまた聞き覚えのある声を聞く。



そして部屋の障子が開くと轆轤がいた。

轆轤も明悟の姿を見て頭を抑える。

「何でここにいる？」

「そりゃ、こつちの言い分だよ！」

「俺達は金が無くなつたんだよ」

意外に貧乏な轆轤であつた。

「そう言えば、零余子ちゃんは？」

「あいつはここの給仕になつてる」

「なるほど・・・」

「で、お勘定を色付けて頂きたいんですが、鬼か？」

「そう・・・なんか噂ない？」

「そうだな・・・」

轆轤は明悟の前に自分の手を出す。

何の手か明悟は1発で分かった。

「がめついなあ」

「商売なんですね」

「ほらよ」

明悟は轆轤にひねりを投げ渡す。

「よし、何でも京極屋周りで黒い噂があるようだ」

「黒い噂？」

「さあ、俺もまだまだ新入りでどんなかは知らない」

「何とも微妙な情報」

「しばき倒すぞ」

「ごめんごめん・・・で手伝つてくれる？」

「良いぜ。次会ったら着いていく約束だったしな。その代わり・・・」

轆轤は又もや明悟の前に手を出す。

「何だこれ？」

「いや、俺達。空腹で生き倒れてた所を助けられたんだが、ここの主人が結構な奴で食わせた分働けつて言われてまあ働いてるんだが、寝る所と食事を提供され続けられて出られない状態なんだ」

何ともアホ臭い理由に明悟は本気で頭が痛くなつた。二日酔いであるがもつと悪化しそうと本気で思った。

「いやあ、借金を返さないと離れられないんでな。まさか鬼殺隊は犯罪を公に見逃すのか？」

「わかったよ！鬼閔連が終わったら払うから待つてろ」

「あんがとさん」

轆轤はそう言つて伝票を明悟に渡す。

甲時代から金は出来るだけ貯めていて柱になってから更に金回りの心配は消えたので、1発で全額払い、尚且つまだ居座る事にした。

少し時間を戻つて明悟と別れた天元と炭治郎達。

「いいか、俺は神だ！お前らは塵だ！それを頭に叩き込め、ねじ込め！俺が犬になれと言つたら犬になり、猿になれと言つたら猿になれ！猫背で揉み手をして常に俺の機嫌を氣遣い媚びへつらうのだ！……もう一度言う、俺は神だ！」

何ともド派手に自己紹介をする天元に炭治郎はキョトンとなり、善逸はドン引きし、伊之助は普通だった。

「具体的には何を司る神ですか？」

「派手を司る祭りの神だ」

大真面目に聞いた炭治郎に天元も大真面目に返すが内容が内容なので善逸はまだド  
ン引きしてる。

「でも、お前より番井明治の方が派手だよな」

「津上さんな。お前、人の名前をいい加減に覚えろよ」

伊之助の純粋な一言に善逸は素で返すが、それに天元は即座に反応する。

「何だど？」

確かに明悟は派手である。

普段の服装から、他の隊士は隊服に基本的に和服の羽織をする。天元や伊之助みたいに服その物を改造するのもあるが、明悟はハットにコートと隊服も合わせて完全に全て洋服で決めてる為、目立って派手である。

また変身するし、闘う時も言わずがもがなで派手。

しかもそこら辺に関しては天元のような残念さが全く無いので、見た目だけなら凄く良い。

身長は天元より10センチ位低いが高身長も相まって様似なっている。

天元は実を言うとお明悟の実力は認めているし、凄いと感じてる。人付き合いに関してもムカつかないわけではないが、自分も人付き合いはそれくらいなので細かく言う気は

ない。

が、前々からどこか気に入らない部分があった。

そう、それはキャラが微妙に被ってるのだ。

2人とも性格が兄貴肌（残念要素あり）

闘い方は2人とも大体は超ド派手

2人とも妻帯者（明悟は既に故人で天元は3人いる）

2人とも高身長

伊之助の素の一言で天元は漸く明悟をあまり好きになれない理由が分かった。

今までは共通点なんて柱以外存在しなかった今までの柱達と違って明悟は天元と微妙に被ってる。

1人だけ異彩を放って柱の中でも派手だった天元であるが明悟の登場によってそれが薄れてたのだ。

「なるほど……そう言うことか……そう言うことか!!」

鬼とは違う理由で至って平和的に天元が明悟をロククオンした瞬間であった。

あまりの残念さ加減に炭治郎達3人は天元にドン引きしていた。

その後、3人は天元に女装をさせられる羽目になるが、何処か八つ当たり気味に異様に熱く化粧をやってくる天元の姿に3人とも別の意味で恐怖を感じた。

## 零余子と襴豆子

童磨にボコボコにやられた明悟は隠に連れられて近くの藤の家に向かう。

この頃の蝶屋敷は今のような病院としての機能は始まったばかりで隊士達も隠達もまだ蝶屋敷にすぐに運ぶのではなく、まずは藤の家で治療してからある程度回復して問題なく動けるようになり、その後で蝶屋敷に通院しすると言う感じだった。

カナエやしのぶはそうやって藤の家に運び込まれた隊士の情報を聞いて、そこに行き、医者から状態を聞いて必要な物を揃えて通院に備えるのがこの時の蝶屋敷のやり方だった。

明悟はそこで目を覚ますとそこには今、自分に目を閉じながら接吻してカナエだった。

突然の事に呆然となる明悟。

カナエが目を開けて明悟の目と合う。

顔がリンゴのように真っ赤になり、勢いよく離れたカナエ。

事は一時間ほど前。

カナエはまた今日も眠っている明悟の世話をしようとする。童磨にやられてから4ヶ月の間、明悟は一切目を覚まさなかった。

最初にカナエが聞いた時、青ざめる事はなかった。

明悟なら起きると思つて楽観していた。

だが、藤の家について現状を聞き、更に一向に目を覚まさない明悟に徐々にカナエは悲観的になった。

任務をこなし、明悟の吉報を待つカナエだが、目を覚まさない。

体はもう治つていつ目を覚ましてもおかしくないのに目を覚まさない明悟にカナエがここ最近、明悟に対して思つたのは苛立ちである。

「明悟さん、私は貴方の事が好きです。あれから半年も待たせて女性にあそこまで言わせたのに全然来ないし、きつちりしてる風に見せても案外ずぼらだし、ネチネチ小言を言うし、子供っぽくてムキになりやすいし、自分勝手だし……それでも鬼とか人間とか関係なく悪人には愕然とした態度で接して、鬼に対しても供養できる貴方が私は大好きです……私、もう16になつたんですよ。明悟さんと思ひ出が出来ると思つたけど、出来なかつた。私はずっと寝てる貴方の隣にただ居ただけ。私だつて生きてるんですから……ずつと隣には居られませんかよ」

最後の言葉を明悟の耳元で言うカナエ。

「これからの人生ですつと貴方が永遠に好きなんて甘い事、考えないで下さいよ。このまま起きないと心変わりして別の人の所に行くかも知れませんが、私結構寂しがりなんですから」

カナエはまだ一向に起きない明悟の唇にカナエは自分の唇を近づける。

言いたいことは全部言つて気持ちいを区切る事が出来た。

これからどうなるか全然分からないがカナエはある種の別れとして接吻する。

これで明悟が起きようと起きまいと自分の人生を生きる為の誓いとしての接吻だった。

(こんなに悲しませて・・・明悟さんなんか大嫌い)

心で明悟に悪態をくつつカナエ。

ここで戻る。

勢いよく唇を離すカナエ。

色んな意味で最悪の気分になる。



嫁入り前の娘が寝てる男に接吻するだけじゃなくて色々と覚悟を決めたのにタイミング悪く起きた明悟にカナエは自分のタイミングの悪さを呪った。

(もう、何で今なの!!?いつも間が悪いつて・・・嫁入り前の娘があんな事して・・・まあやりましたからやっただけど・・・もうやだ・・・今すぐ消えたい・・・でもそれはそれで逃げた感じがしてやだなあ)

意気消沈してるカナエ。

やられた明悟は起き上がろうとするが、今まで寝続けていた事もあって上手く起き上がれず、寝返り、うつ伏せになってしまう。

「明悟さん、大丈夫ですか!?!」

倒れた明悟に手を伸ばすカナエ。

明悟はその手を取り、何とか座ろうとするが上手くいかず、またカナエを押し倒した状態になってしまう。

前回とは違い、カナエはそのまま目を閉じる。

明悟はゆっくりとカナエに接吻する。

少ししてから唇を離す。

「カナエちゃん、俺・・・君の事が好きだ」

「一先ず、離れて下さい・・・心臓がまるび出そうです」

顔を真つ赤にして話すカナエに明悟は慌ててカナエから離れる。カナエは体を起こす。

2人とも顔を真つ赤にする。

「教えて・・・くれないかな？」

「・・・私は明悟さんの事、好きですよ」

「俺も好きだ」

「でも、ずっと寝てて心配したんですからね」

「・・・どれくらい寝てたのかな？」

「・・・4ヶ月です」

「そんなにか・・・」

「私は16になりました。あの喧嘩で疎遠になって、明悟さんがこうなって気づいたんです。私も貴方も永遠じゃない。だから私は自分の人生を生きようと決めたんです。もしも、起きなければこのまま貴方の前から消えるつもりでした。私はそういう人間です」

明悟はフラれた思い、顔を下に向ける。

カナエは明悟の手を握る。

明悟はカナエを見る。

「だから、手を離さないで下さいね」

「分かった」

抱き締め合う2人。

これが2人の新しい始まりだった。

・・・胡蝶カナエ死亡まで後1年と2ヶ月・・・



女郎屋の『ときと屋』で明悟は目を覚ます。

今日は天元がああ3人の誰かを無理矢理にでもここに連れてきて売る筈なので明悟もそれに合わせて情報をすぐに渡せるように紙で纏める。

明悟はそれが終わると板頭を見に行く。

稼ぎ頭の遊女には優劣が着いていて名前のついた板で人気がわかる。本来はこれしきたりがドン引くほど強い吉原ではまずない。

しかし、時代が移り変わり客層も武士層や大名等ではなくより一般的な町人層になり、町人は南の品川等に比べて吉原は格調が高すぎて欠片も入ってこない為、この店の何代か前の主人が客を呼び込むためにやった処置である。当然吉原では大問題になるほどであったが、その時、〃京極屋〃の1番人気だった花魁が認めた事で事なきを得た。その縁か〃ときと屋〃と〃京極屋〃の仲は悪くない。まあ〃京極屋〃の傘下みたいな物であるが・・・

板を観に行く〃須磨〃と言う板が外されていた。

「その子はどうしたんですか？」

「足抜けだよ」

板を取った男衆の男からそう言われた。

〃須磨〃と言う名前は天元の3人いる嫁の1人で明悟は出来ればその花魁がどうなったかを知りたいが、一見である明悟にその情報は来ない。

ならばと思い、明悟は部屋に戻る。

「失礼します」

轆轤が襖を開けて朝食を持ってくる。

因みにこの前、轆轤と零余子に監視をつけると言う話があったが、監視をつける前に2人が見事に消えて見つけられなかった。

元十二鬼月は伊達ではなかった。

「なあ、須磨花魁って知ってるか？」

「ああ、ここに来たときに仲良くなつたよ」

「花魁と!？」

「だって、ここの鯉夏花魁と同じくらい優しくて美人で男衆からは人気だったんでな」

「吉原の花魁ってしきたりキツくなかつた？」

「そりゃ、江戸時代はな。今は大正だぞ？ 江戸のままだと格調が高すぎるから、吉原でもここは品川の色が強いし、そう言う古い吉原に行きたかつたら北の方の店に行けよ。政治家とか御用達の店だらけだぞ」

「息が詰まりそうでやだ」

「だよな」

「一応、言つとくが須磨花魁に変な気は出すなよ。彼女の旦那から言われてるし」

「安心しろ、俺は死んだ女房一筋だ」

「蕪前岳にいた家族か？」

明悟はこの前会つた時に轆轤が魘夢に聞いていた事を思い出しながら尋ねた。

「ああ、俺には勿体無い程に出来た女房だったよ。臆病だったし、変な部分で子供っぽくて、それでいて凄いい頑固で強かつた」

「そうか・・・お前が探してるのはその人を殺した鬼か？」

「ああ・・・絶対に見つけ出す。この手でそいつの息の根をこの世で一番えげつない方法で止めてやる」

言葉の節々から怒りが滲み出ている轆轤。

明悟はその姿に冷や汗を欠いた。

「それで、須磨花魁が足抜けした事に關して何か知らないか？」

「分からない・・・が、鬼の気配は感じていた。すぐにそつちに向かったが居なくて、見つけたのは大量のクナイと斬撃の後と少しの血だけだった」

「そうか・・・って昨日の内にお前、それ教えろよ」

昨日の『京極屋』の時の話を思い出す明悟は、その時に教えなかつた轆轤を睨む。

「噂って言ったのお前だろう」

「屁理屈こくな」

「屁理屈も立派な理屈だ」

「性格悪！」

「こんな性格じゃないと十二鬼月になれねえよ」

全く悪びれない轆轤に明悟は苛つき始めるがここで怒って店に迷惑を掛けるのもあれなので止めた。

轆轤におひねりを渡して朝食を食べる明悟。  
早く天元達が来るのを待っていた。

●●●  
零余子は「ときと屋」の給仕として働いている。

遊郭に売られた女は全員が花魁になると言うのは少し違う。

借金の担保として店に置かれる事に違いないのだが、当たり前だが大事な娘にそんな事をさせたくない親だつて普通にいる。

ならばどうするか、借金を作つた親が借金を返せなくなるまでは給仕などをさせて完全に返せないと判断されてから花魁になる。

これも江戸時代に武士層が主な客層だつた吉原では珍しい事だが、町人層が客層だつた品川では珍しくもなかった。これも「ときと屋」の主人がやつた処置の1つでこれ

をやると借金相手と距離が近くなりより手玉を取れて、無理だったら娘を花魁にすれば良い。

また女給仕も飯の腕が良くて尚且つ美人であれば単純な男衆がより働く。

まあ、零余子は身内が居ないから借金を返せる分けが無いのですぐに身売りさせても良かったのだが、そこは「ときと屋」と言うか遊郭の主人で、一応零余子自身はまだ」ときと屋「そのものに借金はまだ全然軽い。足抜けが多い今の状態で無理矢理させるよりはこのままゆつくりと借金を増やさせて首が回らなくなつてる状態で今の恩を含めて脅してさせた方がより確実であると言うわりと下衆な事を考えて、一年間給仕として働き使う気満々だった。

まあ、零余子は昨日轆轤から明悟との交渉を聴かされていたのでそんな心配は完全に消えたわけである。

明悟としても鬼殺隊として連れていかないといけないので払うしかない。

どちらかと言うと鬼殺隊としての脅しだった連れていく話を逆手に借金を返させる轆轤の発想の勝利である。

そんな中、女将の怒鳴り声が聞こえる。

それにビビると明らかにイライラしてる通り越して激怒してる女将と宥めてる主人だった。



「おい、零余子！さっさと新入りに飯を持っていきな！」

「は、はい！」

零余子は思わない飛び火が来るも膳を持って新入りの所に行く。

「晩御飯をお持ちしました」

花魁の地位が高い遊郭で一番地位が低いのはどんな存在かと言われれば零余子のよ  
うな地位にいる者だろう。

まあ、身売りして働いてるのに身売りをせずに遊郭にいる方も方である。

けど、それでイビられる事は零余子に關してはあまりなかった。

何故かと言うと、まず花魁達が忙しすぎてそんな暇はない。次に働く時間帯が違ふ。

更にここは板頭があるのでぶつちやけると端金の稼ぎにもならない零余子のイビり  
より、自分の商売敵をイビってボロボロに潰して自分がその客をぶん取る方が金になる  
ので零余子に構う暇がない。

膳を持って新入りの部屋に入ると、そこには女装した炭治郎がいた。

「あんた、何やってんの？」

「零余子さん、お久しぶりです」

挨拶をする炭治郎。

零余子は膳を置く。

「鬼殺隊の仕事？」

「はい！」

元気に答える炭治郎。

零余子は部屋の隅に置いてある禰豆子が入った箱を見た。

「ねえ、あの鬼の子はあそこなの？」

箱を指差して言う零余子。

「禰豆子の事ですか？」

「禰豆子って言うんだ」

「禰豆子に何か用があるんですか？」

正直に言う炭治郎は禰豆子を轆轤や零余子には余り関わらせたくない。炭治郎は善良な鬼と悪鬼を見分けているがその方法は人を食ってるか食ってないかで轆轤や零余子は十二鬼月になるほど人を食べている。

鬼のままであるならば、炭治郎は速攻に2人を斬るが人に戻り、そして轆轤は自分達と同じように人を守った。

その事実が炭治郎の決めてた一線を越える。

会わせるべきか会わせないべきか白と黒で分けられない部分をどうすれば良いか炭治郎には分からなかった。

輝哉の命で一応協力しようって話にはなってるが、炭治郎自身の意見などはない。だから炭治郎は零余子と向き合う。

敬語なのは出来る限り、親しそうに話すのではなく見極める為に敬語である。

「こ、この前のお礼を言いたくて・・・」

消え入りそうな声で炭治郎に言う零余子。

普通だった。

あまりにも普通な内容で少しだけ肩透かしを喰らう。

零余子もまたアギトであるので炭治郎の鼻が効きにくいながらも大体の感情をかぎ分けられないほど炭治郎の鼻は安くない。

「わかりましたー！」

炭治郎は周りに人がいないのを確認してから、箱を開ける。禰豆子がのそのそと箱から出るといつもと違う格好の炭治郎に首を傾げる。

「禰豆子、この人がこの前のお礼を言わせて欲しいって」

炭治郎は禰豆子に零余子を紹介する。

零余子は顔を赤らめながらも禰豆子に近づくと、

「この前はありがとうございましたー！」

禰豆子に頭を下げる零余子。

彌豆子は頭を撫でる。

零余子は笑顔を向けて彌豆子も零余子に笑顔を向ける。

微笑ましい光景である。

「あ、あの・・・友達になつてくれませんか？」

恐る恐る手を差し出す零余子。

零余子の言葉に炭治郎も彌豆子も目を開く。

真正面からこうもはつきり言う人は中々珍しい。炭治郎は零余子が鬼だった事実を含めて迷うが、彌豆子は零余子の手を握る。

なんとも嬉しそうである。

「と、友達で良いのかな？」

零余子は炭治郎を見る。

炭治郎は彌豆子の行動を信じ、首を縦に静かに振る。

「私は氷川零余子・・・零余子って呼んでね」

零余子の言葉に彌豆子は何かを言うが、口枷で分からないが言ってる内容は同じだろうと感じた。

「彌豆子って呼んで良いかな？」

零余子の言葉に嬉しそうに首を縦に振る彌豆子。

2人が「友達」になつた瞬間であつた。  
零余子は仕事はまだあるので下がつた。  
互いにまた遊ぶ約束をして・・・



明悟は天元に外で情報を纏めた紙を渡した。

「これが、ここ2、3日で纏めた情報。『京極屋』に黒い噂がかなりあるつて」  
「そんなのは知つてる・・・やっぱり集められる情報は微妙だつたか」

天元は明悟に任せた事を後悔し始めた。

そりや、客として入る事と働き手で働くのでは情報の量も質も違う。  
寧ろ、良くそこまで集まつた方である。

印象第一な吉原で・・・

「まあ、そう言わないで・・・君の奥さんの須磨さんは足抜けしたつて見られてるよ」  
「何処に行つたか分からねえのか？」

「そこまでは・・・」

天元は何も成果を上げられてない明悟をぶん殴ろうかと考えたが、そんな事をやって情報も降ってこないのを止めて、また情報を集めに別れた。

そして2日経ち、京極屋に潜入してた善逸が消えた。

## 蝶のペンダント

津上明悟19歳は、とある物を渡そうと悩んでいた。恋人のカナエともう11ヶ月は付き合っている。最初は互いにガチガチに緊張していたが、今ではすっかりそう言うのは殆ど無くなった。

殆どと言うのは今でもこういった時にはガチガチに緊張してしまい、理想通りには行かない。

そして今回は本当に今では珍しく明悟とカナエは一緒に任務に着いた。

それも終わって藤の家で休もうとする。

カナエは蝶屋敷に戻って良いが、珍しく一緒に任務をやったのだから、せめて朝まではいたいと考えて藤の家に行く。

藤の家に着いて明悟は渡したい物をもう一度確認する。

それはペンダントだった。

蝶の形をしたペンダントでカナエの為に手に入れた物だ。輸入品でその店に一点限りだったのを手に入れたのは良いが、この男はいざ渡そうにもタイミングをミスりまくって今のこの状態である。

藤の家で風呂に入つて夕食を一緒に食べるがどことなしに会話をしても中々言い出せなかつた。

因みに相手のカナエからは、

(何か言いたいなら、早く言つて！)

と内心、明悟の行動にイライラしていた。

結局、夕食の時も渡せずに、もう寝る直前まで渡せず仕舞いだつた。

.....

明悟は部屋で報告書を書き終えるとどうしようかと迷いながら縁側に出る。するとそこには、カナエが夜空の月を見ながら座つていた。

「居たんだ」

「私は何処にでも居ますよ」

「そう」

カナエの隣に座る明悟。

明悟はカナエにペンダントを渡そうとするが、緊張して月を見て落ち着く。

明悟は朝日も好きであるが月も好きだ。

そして、2人とも静かに月を見てる。

「君に渡したい物がある」



「何ですか？」

明悟はそう言つてペンダントを包みから出す。

「君に似合うと思つて」

蝶型のペンダントを受けとるカナエ。

「着けてください」

明悟はカナエにペンダントを着ける。

似合つてた。

明悟はただ単純にそう思つた。

見つめ合い、接吻する2人。

ただ、軽くではなくかなりディープな物だつた。

息が荒くなるほどやる2人。

互いに実を言うと言つた事はこれまで1度もない。ただいつ死ぬかわからない生き方でこれだけムードが盛り上がった状態なのでこれで何もするなどは無理である。

互いに好きだし、もつと相手を感じたい。

鬼殺隊とか柱とか人とか関係なく、そこに居たのは2匹の雄と雌であり、互いにそのまま剥き出しの欲情で一晩中共に寝た。

そして翌朝、冷静になった2人はその事実は無表情になり、そして別れて一時間位した所で悶絶する羽目になった。

1ヶ月後、カナエに子供が出来た。

・・・胡蝶カナエ死亡まで後、3ヶ月・・・



吉原の夕方で明悟はとある屋根の上に炭治郎と伊之助と天元と共に居た。

善逸は昨晩から連絡が途絶えていた。

「善逸君は・・・連絡が途絶えたのか・・・」

「俺の問題にお前らを捲き込んだのはすまないと思ってる」

「良いよ・・・善逸君はああ見えて頑丈だから一先ずは問題ないと思う・・・問題は何処に  
いるかだけど・・・」

「おい、だから俺の所にこんなヤツが居るんだって！」

変なポーズをする伊之助。

多分鬼を表してると思うが分けが分からなかった。

「とにかく、天元君の奥さん達じゃなくて善逸君も心配だから、動くなら今晚。伊之助君はそのまま荻本屋で鬼を搜索して、途中まで気配を探れてたなら痕跡がある筈。炭治郎君と俺は京極屋へ、天元君は……」

「言われるまでもねえ」

天元はそう言うのと屋根から飛び降りて去っていった。

多分、京極屋から直接問い質すのだろうと明悟は直感した。と言うか自分も同じ立場なら同じ事をする。

残された3人はそれぞれの準備の為にその場を後にした。



明悟はときと屋の主人と話していた。

ここを出るので諸々の金額を払った後に轆轤と零余子の借金を払おうとしたら、主人

が渋り始めたのだ。

ときと屋の主人は正直に言うとは轆轤と零余子を手離したくない。轆轤は男衆であるが、いつの間にか部屋番を覚えていたり様々な事で他の男衆よりも早く、2ヶ月の間で解決した揉め事は何回もある。

零余子は普通に別嬪で、男衆からの人気もあり、遊郭になれば絶対に売れると思つてゐる。

故に渋る。

「だから、この2人の借金はきつぱり全額御用意してるじゃありませんか」

「ですから、どこの馬の骨かもわからない人がこれまた空腹で倒れたどこの馬の骨かもわからない2人の借金を払おうとしているのが普通に考えておかしいと言つてるのでございませう。貴方様の身分や普段のお仕事が分かれば問題ないと言つてるではありませんか」

明悟は本気で困つた。

遊びすぎたから金は大量に出て、2人の借金分の金も現金で用意してる為、怪しすぎる。

また鬼殺隊なんて非公式の組織の名前を出したところで意味はない。

ますます怪しくなる。

実は表よりも裏の世界の方が金にはシビアである。

命がいくつあっても足りない世界で安全に金を持つには出所を明確にするのが鉄則である。

せめて非合法か合法のどちらかの判断はしないとイケない。

天元とかならば表の職業も設定し、用意した上でやるが明悟は何分、こういった事をやるのが初めてなのでよく知らないでやった。

故にこうなってるのだが・・・

「そう言わずにまずは此方でも・・・」

明悟は粗品を差し出す。

受けとる主人は中身を見ると中は札束だらけだった。

明悟は最早めんどくさいので大金を出しまくる大金作戦に移ったのだ。

粗品が1つ・・・2つ・・・3つとどんどん出てくる。

「で、こちらが・・・」

「わかりましたから、受けとりますから、もう勘弁してください！」

「ありがとうございます」

主人は大金をポンポン出しまくる明悟に完全に怯えて、轆轤と零余子の件を認めた。

・・・後日、明悟は耀哉から金関係で怒られるが明悟にとっては何処吹く風だった。



ときと屋の前で炭治郎を待つ零余子。

明悟と轆轤は既に京極屋に向かっている。

零余子も一緒に行っても良かったのだが……

……10分前……

「それじゃ、京極屋に行こうか」

轆轤と零余子に言う明悟。

「ちよつと待つて……膝が笑つて無理！」

善逸みたいな事を言う零余子にずっこける明悟。轆轤は眉間に指を当てる。

「何言つてんの、元十二鬼月でしょ!？」

「生きてたらなつただけで、なりたくなかつたわよ、あんなの!」

「あんなの扱いなの？」

「うるさい! いいか、私は弱い! 戦いなんてこれっぽっちも出来ないの!」

「十二鬼月じゃなかったの？」

「そんなの食べて逃げての繰り返しよ！文句ある!？」

「何でそんなに自信たっぷりなのか……だったら炭治郎君がもうすぐ出てくると思うから道案内は出来るよね？」

「勿論、伊達に2ヶ月もこの街に居ないわよ」

「自信たっぷりと言う零余子に明悟は本気で殺意が出てきたが抑えて、轆轤と一緒に京極屋に向かった。」

ここで10分後に戻る。

すると突然、ときと屋の2階から轟音が聴こえる。零余子がそつちを見ると、炭治郎が上弦の鬼の陸の墮姫相手に吹き飛ばされていた。

肩紐が切れた禰豆子の入ってる箱を置く。

そのまま戦闘を再開する炭治郎と墮姫。

(禰豆子があそこに・・・)

零余子は禰豆子を安全な場所に避難させようと箱を取りに行く。



明悟と轆轤にも戦闘の轟音が耳に入る。

「始まったか!」

「どうする!?!このまま京極屋に行くか!?!」

「いや、戻って加勢の方が良い!」

「わかった!」

来た道に戻ろうとする明悟と轆轤。

その時、2人のアギトの超能力が新たな十二鬼月の力を感じとる。



(この感じは・・・)

明悟の足が止まる。

「おい、どうした!? 新しい上弦が来るなら急いで戻らねえと!」

「いや、こいつの相手は俺がする」

「はあ!?! お前、この前の戦いで上弦の1人相手に2人がかりでやつとだつたらろ!」

「頼む」

普通じゃない明悟の行動に轆轤は慌ててしまいが、その一言で何かあると感じた轆轤は明悟と離れて戻る。

明悟は無言で変身する。

そしてトリニティフォームになり、新しい上弦が現れた方に向かっていく。



伊之助は吉原の地下で墮姫の一部である帯と戦っていた。

「気持ち悪いんだよ、蚯蚓帯が!」

帯に捕まっていた人間を解放しながら戦う。

前までの伊之助ならば完全に他人の事なんかは考えてないと思うが、度重なる戦闘や

明悟や杏寿郎の戦い方を見て変わりつつあった。

自身の五感も敏感な伊之助には帯の攻撃など当たらなかった。

しかし、帯もぐねぐねと柔らかく伊之助の斬撃など効かなかった。柔らかすぎて

「獣の呼吸 陸の牙 乱杭咬み」

「アタシを斬ったつて意味無いわよ本体じゃないし、それよりせつかく救えた奴ら疎かだけどいいのかい？」

帯は攻撃に集中していた伊之助の隙について伊之助が助けた人を食べようと向かうが、飛んで来たクナイが帯に刺さる。

投げたのは天元の妻の須磨とまきをだった。

「蚯蚓帯とは上手いこと言うねえ！」

「ほんとそのとおりです。ほんと気持ち悪いです！天元様に言いつけてやる」

3人で帯と闘うが、腐つても上弦の陸の堕姫の一部。3人相手でも互角に闘う。

「あたし達も加勢するから頑張りな、猪頭！」

「誰だ、てめえら！」

「宇髓の妻です。あたしあんまり戦えないから期待しないで下さいね！」

「須磨！弱気な事、言うんじゃない！」

弱音を吐いた須磨にまきををが怒る。伊之助はその行動に少しビックリするが直ぐ様

戦闘に戻る。

「だつてだつて、まきをさん。あたしが味噌つかすなの知つてますよね!? すぐ捕まつたし、無理ですよ捕まつてる人皆守りきるのは!! あたし一番死にそうですもん!」

「そうさ、よくわかつてるね。さてどれから食おうか」

帯は3人相手に次第に優位になつてくる。永遠に斬つても斬つても大した効果が無い帯と体力に限りある3人では手数が次第に変わつてきた。

「もう一度取り込んでやる!」

帯は3人の中で一番弱気な須磨から狙つた。

伊之助もまきをも自分を襲つてくる帯の相手に手が一杯で間に合わない。

須磨もクナイを投げてるが、お構い無しに突つ込んでくる。ただでやられないようにクナイを構えるが、腰が引けていて確実にやられるだけだった。

(天元様、ごめんなさい)

やられるかと思われた次の瞬間、上から降つてきた者が帯を斧で切り落とす。

それはサクスムフォームに変身した轆轤だった。

戦闘音が聴こえた轆轤は炭治郎の方に向かうが似たような気配を下から感じ、上に行くか下に行くかで迷つたが、上は炭治郎が1人でなんとか戦つていて、下は何人者、気配を感じたので下に黒幕がいると感じ、サクスムフォームになつて地面を「泳いで」

やって来た。

明悟のフレイムフォームやストームのようにサクスムフォームやアクアフォームにも固有の能力がある。

サクスムフォームはフレイムの超感覚の代わりに圧倒的な防御力を誇るがそれだけではない。

このフォームの最大の特徴は地面を泳ぐ事ができる。地面をまるで海で泳ぐ魚のように泳げる。因みにアクアフォームだと超人的な泳ぎをする。

またフレイムフォームは火の中でも平然と動くことが出来て、ストームフォームは風のように速く動ける。

こうして地面の中を泳いできた轆轤はアックスで須磨に近づいていた帯を切り落としたのだ。

「大丈夫か、須磨花魁」

「その声は芦原さん？」

須磨はときと屋で働いていた轆轤を知っていたので声で気づく。

「無事でなによりだ」

轆轤は帯に向かって須磨の前に立つ。

須磨はその姿を天元と重ねて安堵したのか・・・

「天元様！」

轆轤の背中に抱きついた。

「いや、違う！俺は芦原だつて、旦那じゃない！」

「おい、足柄ろめろ！久しぶりだな!!」

「誰だ、そいつは!?!名前くらい覚えろ！」

須磨にツツコミを入れるが、ここでも名前を間違つた伊之助の方に先にツツコむ。

帯が迫ってくるなかでいい根性である。

「バカ須磨と変なのに猪頭！来るよ!!」

帯が隙をついて4人に迫ってくるが、全て瞬時に切り落とされる。

切り落としたのは、捕まつて連絡の途絶えてた善逸だった。

あまりの速業に呆気を取られる。

「お前ずつと寝てた方がいんじやねえか．．．??」

伊之助が最もな事を呟くと、上が突然爆発する。

大穴が空き、爆風と共に天元が降りてくる。

天元は降りると同時に帯に捕まっていた残りの人間を全て助ける。

それが終わるとバカデカイ日輪刀を持って須磨が抱きついたまま轆轤に斬りかかる。

轆轤はたまらずアックスで受ける。

「何しやがる!？」

「お前が津上が言つてた元十二鬼月だな？俺の嫁に何しやがった？」

「何もしてねえよ！」

須磨は天元が来た事で轆轤から離れるが時既に遅しであり、天元と轆轤はつばぜり合  
いをしていた。

これには須磨も問題あるが、そもそも轆轤も須磨も互いに愛してる人を裏切るつもり  
は微塵の欠片もない。

また須磨は轆轤には天元について何も話してないが、須磨とて花魁となつて潜入して  
た為、男衆からもそんな目で見られていたが轆轤だけは違つていたので、聞いたら轆轤  
は「俺が愛する人は死んだ妻一人だけです」とドン引きをするほどに真剣に妻への愛を  
語つたので須磨はこの人なら安全と判断した。

最初に鬼に捕まっていた不安などもあり、轆轤に天元の姿を重ねてしまつて本能的に  
やつてしまったのである。

「おい、おっさんども、帯が逃げたぞ！」

「喧しい！この状況を良く見ろ！」

轆轤と天元がハモつて伊之助にキレる。

「天元様、落ち着いて下さい！」

「つてバカ須磨、あんたのせいでしょうが！」

「まきをさん、痛いです！」

須磨にツツコミを入れたまきをは冷静につばぜり合いをしてる2人に言う。

「天元様、急がないと町の人が・・・」

嫁〓他の人間〓自分の命と順位を決めてる天元はまきをの一言を聞き、つばぜり合いを止める。

轆轤も殺したくなるほど腹が立ってるが実力的に柱であると直感し、攻撃しないでおく。負けるつもりは更々ないが鬼殺隊の本部に行く約束なので、やらない。

「これが終わったら、『素手』でボコボコにしてやる」  
「奇遇だな。俺もそう思ってた」

互いに素手で決着をつけると言い合う2人。

素手なのは殺さない為だと思うが、この2人ならうっかり殺したとやりそうな程に信用も信頼もないので、まきをは頭を抱える羽目になった。



墮姫の本体と戦っていた炭治郎は苦戦していた。

逃げてきた帯を取り込み、より凶悪になった墮姫。

周りの店にいる人間に甚大な被害を出し、ぶちギレた炭治郎が「ヒノカミ神楽」で応戦するが自力とそしてヒノカミ神楽を無理矢理使った事による弊害で、ボロボロになっていた。

辺りから傷を負った人間の悲鳴が聴こえる。

炭治郎に怒りがまだまだ混み上がって来るがそれで何とかなるほど甘くはない。

墮姫が炭治郎の頸を切り落とそうとした瞬間、箱から飛んで来た禰豆子に頭を吹き飛ばされる。

零余子はその様子を見ていた。

やっばり強い。

禰豆子を見て零余子はそう思った。

列車の時からずっとそう感じていた。

頭を吹き飛ばされた墮姫は回復すると、蹴りに来た禰豆子の右足を切断。



鮮血が飛び散り、そして禰豆子の胴体を左腕事、切断した。

えげつない光景に零余子は目をそらす。

見たくなかった。

あまりにも惨く残酷な行い。

腰が完全に引けてしまつて、その場から逃げられなかった。

「あら、あんたは．．．そうか、無惨様が言つてた裏切り者ね」

「ひっ!？」

堕姫が禰豆子の箱の近くでへっぴり腰になつて零余子を見て、帯で殺そうと飛ばす。

逃げられない零余子。

しかし、帯が零余子に届くことはなかった。

何故なら、回復した禰豆子が帯を掴んでいたからだ。

しかも姿がかなり変わっていた。

口枷が取れて、身長も伸び、何よりの特徴が角と体に浮かび上がつて文様が不気味だった。

「禰、禰豆子?」

禰豆子は零余子を見ない。

そのまま墮姫に向かって攻撃する。

また足が切断されかけるが瞬時に回復してその足で墮姫の背中を刺して圧倒していたが、「怪物」にしか見えなかった。

墮姫も負けずに攻撃しまくる。

今は何とか圧倒出来てるが、上弦はそんなに甘くないのは零余子だって知っている。

それに彌豆子もこれ以上強くなってしまうたら、本当の「怪物」になってしまう。

(どうしよう!?!このままじゃ彌豆子が怪物に!)

何とかしようと考えるが、零余子は強くない。

弱い。

自他共に認めるほどに弱い!

その事実がその足を止める。

戦つても勝てない。

負けるだけ。

足手まとい。

生き長られてる命を粗末に出来ない。

泥を啜つてでも生き残りたい。

体を売つてそれで痛み付けられても生き残りたい。

死にたくない。

そんな事が頭を駆け巡る。

しかし、それと同時にとある事も駆け巡った。

列車で轆轤が助けてくれた事、一緒に旅した事、禰豆子と善逸が守ってくれた事、そして禰豆子と友達になった事。

1人だけでは絶対に今まで生きれなかった。

轆轤が助けてくれなければ無惨に殺された。

一緒に旅してくれなければ心細くて辛かった。

善逸と禰豆子が助けてくれなければ死んでいた。

禰豆子がいなければ『遊ぶ約束』なんて出来なかった。

その事が駆け巡ると零余子は飛び出していった。

先には堕姫が禰豆子に反撃して全身をバラバラにしようとする帯を振るう。

禰豆子も耐えるように構えるが零余子にはそれが耐えられる物ではないとアギトの超能力でわかった。

あれから、守るには滅する程の強力な光しかない。

(力が無くても、弱くても、友達1人守れないなら、『生きる意味』がない！)

その決意にアギトの力が反応し零余子にベルトを与える。

「ウオオオオオオ!!」

叫びながら、向かっていき、光を放ちながら体が徐々にアギトの姿になり、そして禰豆子に向かつてきた帯を変身の光で消滅させる。

その光で堕姫は勿論、禰豆子も火傷を負ってしまう。

アギトになった零余子は禰豆子の方を見る。

禰豆子は自身を攻撃した零余子を敵と思い、攻撃する。

獣のように怯えて攻撃する。

得意の蹴りではなく爪で、蹴りではないのはまだ彼女の中にある理性が零余子を友達として認識してるからであるが、このままだといつそれが無くなるのか分からない。

禰豆子の攻撃に零余子は火花を散らしながらも禰豆子に近づき抱き締めた。

禰豆子の血鬼術の爆血で2人は炎に包まれる。

アギトである零余子には暖かく、禰豆子には自身の血鬼術な為、効かなかった。

零余子のオルタリングが光る。

そして2人ともまとめて光に包まれる。

鬼に取って禰豆子に取っても猛毒でしかないアギトの光。しかし、友達を助けたいと言う零余子の意志が自身のアギトの力を「進化」させる。

その光は鬼を人間に戻すことも出来なければ、鬼を殺す事も出来ない。

その光はせいぜい鬼の理性を呼び戻すしか出来ない。

それは鋼鉄の精神と呼ぶに相応しい強靱な禰豆子の精神を鬼にさせないのにつけての能力だった。

禰豆子はその優しい光に包まれて静かに寝た。

明悟や轆轤の光に比べて遥かに「弱く優しい光」。それはたった一人の友達を助ける為に進化した零余子の力だった。

グランドフォームから姿は変わってない。フレイムやストームやアクアやサクスムのような特化的な能力でなく、零余子だけのグランドだけの力。

「あんた何者よ!?そこを退きなさいよ、その雑魚鬼を殺すんだから!!」

堕姫の言葉に零余子は勇気を出して堕姫と向き合う。

「私の友達に手を出すな、女狐!」

禰豆子を守る為に零余子は堕姫と戦う。

そこには以前のように怯えていた彼女は居なかった。



れがたかがこんな事で会えるなんて思いもしなかった！」

常軌を逸した執着を見せてカナエと子供を殺した事をこんな事扱いする童磨に明悟は攻撃を何回もするが、童磨はかなり余裕で受け流していた。

明悟はこのままでは埒が明かないのを感じて、一先ず離れて体勢を立て直す。童磨はそれを分かかって見逃していた。

「もつとだ、もつと俺を、笑顔、にしてくれ、あの刹那の快感をもつとくれ！」

「お前を殺す……カナエの敵だ」

怒りの明悟の言葉に童磨は頷を傾げる。

「おいおい、こんな事扱いして怒ってるのかい？ まあ分かるよ、けど殺しじゃないよ、俺のは全て救済だ……それに彼女を殺したのは、君、じゃないか」

「何？」

今、胡蝶カナエ死亡の真実が明らかになる。

## 愛という名の呪い

明悟は童磨と対面していた。

童磨の言った一言。

「カナエを殺したのは明悟」と言う言葉に明悟は戸惑う。

「何を言ってるんだ？俺が・・・俺がカナエを殺すわけないだろ！」

「確かに君は直接は殺してない。けど殺したんだ。君達、親子が彼女をね」

「『親子？』」

笑う童磨。

「そう、本当に彼女を殺したのは・・・俺では無くて・・・君の子供だ・・・」  
笑いながら話す童磨。





胡蝶カナエは幸せだった。

先日、自分と恋人の明悟の間に子供が出来た。

明悟はどうするべきか悩んでいたが、カナエは明悟の子供を産みたかった。

男の子か女の子かはわからないが一緒に育てて幸せになりたい。鬼と人間が仲良くするのが夢だし、それを止めるつもりは微塵もない。

そして明悟はカナエの夢を否定はしない。

疑問に思ったり、尋ねたり、どこか常識的に聞いてくるが否定だけはしない。

カナエは鬱陶しいとは思わなかった。

それは大事な視点で盲目にならず、またそうやって聞く人がいるからより夢が強固になる。カナエはそう思っていた。だから明悟の事が好きになったのだ。出来れば産まれてくる子供も自分の夢を理解してほしい。夢を継いで貰わなくてもいい。ただこの夢を否定しないでほしい。そう思いながら、カナエは「最後」の任務を続ける。

正確には妊娠休暇をするためである。

体調に変化がはじめてるし、特につわりはいつ起こるか分からない。こんな状態で任務など出来ないし、寧ろ足手まといになるだけである。だから、カナエはこの任務が終わったら、柱を引退する気だった。

次の柱はどうするべきか・・・継子である妹のしのぶはまだ甲ではないし、戦いを止

めて欲しい。

ならば次の柱は明悟だ。

実力的にも申し分ないし、甲だし、何も問題はないはず。

そんな中、カナエはあいつに遭遇した。

童磨である。

カナエは童磨と戦闘になる。

童磨は圧倒的に強かった。それはカナエでは敵わないほどに、そしてカナエにはお腹の中に子供もいた。体調があまり変化がないと思っていたが違う。

少しずつずれていたそのズレが命取りとなり、カナエは童磨に殺された。

そうカナエは「童磨」に殺された。

しかし、明悟との間に出来た子供によって調子は完全に戦う前か崩れていた。



明悟は童磨から真実を聞き、愕然とした。

直接殺したのは童磨である。

ただ、カナエは本調子ではなかった。

もしも、カナエが子供を身籠っていないければ、もしもカナエが本調子だったら・・・  
所詮は「もしも」であるし、意味はない。

けど、「もしも」とは罪悪感である。

その罪悪感が明悟を追い詰める。

明悟は考える。

「もしも自分がカナエとあの時、床を共にしなければ子供は出来ずにカナエは本調子のままだったのではないか？」

「もしも自分と恋人でなければそもそもそんな状況にならなかったのではないか？」

「もしも自分と出会わなければそもそもああいう状況にならなかったのではないか？」

こんな事を考えても童磨には勝てないだろう。それほどまでに童磨は強い。

しかし、明悟にとってそれは言い訳に思えた。

「明悟がカナエと愛し合ったからカナエが死んだ」

頭の中にそういう認識が駆け巡る。

悪党は童磨であるし、子供に罪はない。そして明悟とカナエにも罪はないがそんなの

は所詮、第三者から見た印象でしかない。

ましてや、カナエの強さを良く知っている明悟にとって、その状況にさせてしまった事は何よりも辛く、重く、苦しい。

きつとカナエがこの場に至ら、即座に否定するだろう。

「しかし、彼女はもう既に死んでいる」

結局は明悟が自分で区切りをつけるしかないが、本当に心の底から愛してた明悟にそれは出来なかった。

持っていたセイバーとハルバートを落とし、震える両手を見つめる。

「俺が・・・彼女を殺した・・・？」

「そう、まあ正確には君の子供だけど、しようがないよ。だってそんな仕事に付いてるのに人並みの幸せを互いに欲しがっちゃったんだから・・・あれ？そう考えるともつと早くに彼女が辞めてれば良かった話だから、結局は自分の「愚かな思想」によつて自分を滅ぼした「バカ女」つて事になるね・・・つまり、君は悪くない」

童磨から出てくる何の感情も籠つてない言葉。

それは明悟を慰めてカナエを侮辱する物だった。

明悟はセイバーを手に取り、業火を出しながら童磨に突つ込む。

「カナエを侮辱するなあ!!」

「血鬼術 枯園垂り」

激怒の炎を出して、童磨に斬りかかる明悟。

しかし、童磨は特に慌てる事なく、氷を纏った鉄扇でそれを軽く受け止める。

火力を最大に上げるが、童磨の鉄扇は溶けない。

「血鬼術に単純な炎は効かないよ」

明悟はセイバーを2本出して、二刀流で童磨とやりあうが、傷1つどころかかすり傷すらつけられない。

明悟は鬼殺隊で最強を誇る行冥相手に互角でやりあえる程に強い。そんな明悟でもこんな風になってしまうと言うことはそれほどまでに童磨が強いのだ。

明悟は一先ず離れて、左手に持つてるセイバーを捨ててハルバートを持つ。

最大火力のフレイムの力をストームの風の力で増幅させる。

叫びながら、明悟は特大火力の炎を童磨に放つ。

「血鬼術 寒烈の白姫」

10体の氷の巫女が炎に絶対零度の吐息を吐き、炎と拮抗する。

「嘘だろ……」

「やっぱり、君は凄いな！本当なら巫女が2人で充分なのに、10人出さないときつとやられてたよ！彼女は避けきれなくてね。左手の小指が凍ってポロって落ちてたのに」

誰の事を言ってるのか明悟にはわかった。

怒りで明悟は段々と冷静でいられなくなった。

「黙れ！」

フレイムの力で絶対零度の中を突っ込む明悟。

「血鬼術 粉凍り」

肺胞を潰そうとしてくるが仮面で尚且つフレイムの力を使っているので明悟には効果がなかった。

「やっぱり効かないなあ、彼女はお腹の子に影響が出ないように息を吸って血へドを吐いたけどね」

「貴様あ!!!」

煽りを止めない童磨に明悟は攻撃するが、びくともしなかった。

「血鬼術 冬ざれ氷柱」

明悟の頭上に大量の氷柱が降ってくるが、全て明悟は叩き落とす。

「お見事！彼女は左脰ら脛を貫かれてたけど君は凄いな」

口から話すこと全てがカナエを侮辱し、明悟を称賛する。それが何よりも明悟にとって苦痛その物だった。

「黙れ……」

どンドン、静かになり攻撃に集中するが全く当たらない。童磨の煽りもどンドン酷くなる。

「何で? . . . そうそう彼女ったら千鳥足になつても全然諦めなくてね . . . だから、お腹を潰したんだ。そしたら、泣いてね。『子供が . . . そんな!』ってね。可笑しいよね。だつて自分で捲き込んでるのに、酷い母親だよ」

口からボロボロ出てくる残虐非道な行いに明悟は早く童磨の口を閉じさせようと首を狙うが全く当たらない。

「黙れ . . . 」

「そしてね、左足だけだと不自由だから、右足も潰して倒れさせたんだ : : : こう、グシャツとね」

「黙れ . . . ! ! 」

明悟はまだ鬱陶しく人が簡単に凍結する程の息を吐いてる氷の巫女をセイバーで全て壊す。

「やるねえ、彼女を食べる前に久しぶりに凍らして食べようと思つてね。巫女で四肢を徐々に凍らしたんだ。まあ邪魔が入って出来なかつたけど . . . 」

明悟のセイバーがやつと童磨の顔に一閃入れるが童磨はすぐに回復する。

「お前、何が楽しくてそんな事が出来るんだ? 」

明悟は童磨に頭の中にあつた疑問をぶつける。

「楽しくはないよ」

童磨から返つてきたのは予想外の返事だつた。

「どれだけ食べても何をやつても何も感じない。感じなかつた。けど君と戦つてると楽しかつた。生まれて初めての快感だつた！他の人間では天地の差があつた！彼女も他の柱も……俺に快感はくれなかつた。どんだけ血鬼術をやつても君は立ち上がり、君は強くなり、俺の想像を刹那の時の中で超越していった！だから、快感をくれなかつた人間は皆そうした。君に会えない憂さ晴らし」に」

常軌を完全に逸していた。

明悟は童磨の言葉が何一つ理解したくなかつた。

「最早、女の肉なんてどうでもいい！君を食べたい！きつと君を食べたらまた新たな感情が手に入る事が出来る！俺にはもう君しか興味がない。君の肉を食べたい！君の血を吸いたい！君の全てを感じたい！」

「そんな、そんな身勝手な理由で彼女や他の人を!?!」

「君が悪いんだ！君がああの際に俺に感情を生まれさせなければこうならなかつた。さつき彼女のせいと言つたがやっぱり違つた。君だ……君のせいだ……全て君がこの世に生まれてさえ来なければこうならなかつた」



童磨の放った言葉は明悟が先程から自分でも感じていた言葉だった。

「血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩」

巨大な菩薩が現れる。

明悟はまたフレイムの力を最大にして突っ込んでいくが菩薩の放つ巫女以上の絶対零度の息は明悟のフレイムすら凍らせる。

右腕が凍った明悟は唾然となる。

そして菩薩からの容赦のない息に明悟は完全に氷の中に閉じ込められた。

そして菩薩はそのまま明悟を遠くに殴り飛ばした。

菩薩を操ってる童磨はどこか明悟に対して不満の顔をしていた。



堕姫と戦闘をしていた零余子だが、やはり上弦の陸と元下弦の肆では強さが全然違

い、徐々に墮姫に押され始めていたが、そこへ炭治郎が回復して墮姫に加勢する。

「助かったよ……ごめん、名前なんだっけ？」

「炭治郎です！ 竈門炭治郎！」

「よし、行くよ炭治郎！」

「はい！」

意気込む炭治郎と零余子。

墮姫は2人に対して帯を奮う。

「雑魚どもがあ!!」

炭治郎は水の呼吸ではなく、ヒノカミ神楽、”と言う、水の呼吸とは違う竈門家に代々伝わる呼吸で対応する。

炭治郎がこれをやると凄まじい程の負担が掛かるが十二鬼月相手でも充分に通じる為、炭治郎はこれを使う。

零余子はアギトの力をフルに使って応対する。

そして炭治郎がヒノカミ神楽で帯を切り落とす続ける。

これをやると呼吸困難に陥るが零余子がいる。

零余子は手に光を集めて隙だらけの墮姫の顔面をぶん殴る。

「くたばれ、女狐！」

殴られた堕姫はまた女郎屋にぶちこまれる。

炭治郎や零余子は急いでそこに行くと言った。首なし状態なのに動いてる堕姫がそこにいた。炭治郎や零余子は不気味に感じた。

零余子は確かにアギトの光の力でぶん殴り、顔を吹き飛ばした。

普通の鬼なら完全に体が崩れる筈なのに堕姫はそこから顔が再生している。

完全に再生すると堕姫は2人を睨む。

2人は構える。

再び始まろうとしたが、堕姫の後ろから猛スピードでやって来た存在がその間に入る。

それは喧嘩しながらやって来た天元とアクアフォームになった轆轤だった。

「俺が派手に斬った」

「寝ぼけた事を抜かすな俺だ」

堕姫に構わず喧嘩する2人。

「柱にもう1人の裏切り者ね！今すぐに・・・」

「地味にうるせえよ。お前、上弦じゃねえだろ」

「弱すぎる」

2人がそう言うと言わんとポロっと堕姫の首が落ちる。

そう2人はここに来る瞬間に墮姫の首を斬ったのだ。

全くの同時に行つた為、どちらが斬つたかで揉めてるがこれで終わりだと思つた。

だが、首を斬られた筈の墮姫の体は崩れる処か延々と泣きわめいていた。

(こいつ、いつになつたら死ぬんだ?)

(地味にまだ元氣じゃねえか)

「私は上弦なんだ! 数字を貰つて無惨様に褒めて貰つたんだ! : : : うう、お兄ちゃあああ  
ん!!!」

叫ぶ墮姫の体からもう一体の鬼が出てくる。

天元と轆轤は鬼が完全に出る前に斬りに行くが、鬼は避けて墮姫を抱えたまま、4人を鎌で斬る。

寸前の所で轆轤がアクアフォームの力で全員に水の膜を張つて何とかかすり傷程度ですんだ。

天元は膜は一先ず置いといて鬼の動きを目で追う。

炭治郎と零余子は鬼の動きに全く反応出来なかつた。

「お前なあ、首くらい自分でくつつけるよなあ」

「だって・・・・だって・・・・」

「もう泣くな、綺麗な顔が台無しになるぞ。大丈夫だ兄ちゃんがついてるから」

「うん・・・うん・・・」

全員がその出てきた鬼が墮姫の兄であることがわかった。そして炭治郎は出てきた鬼と墮姫の行動が自分と弟妹達の行動と似てる事に共感を抱いたが、墮姫の行動を思いだし、鬼と判断して再び構える。

「許せねえ。俺の妹は頭は足りねえが一生懸命やる勿体無いほど良く出来た妹だ。それを踏みにじる奴らは皆殺しだ。やられた分は取り返す」

本の上弦の陸にして墮姫の兄の、妓夫太郎が鎌で斬りかかる。

天元と轆轤は防いだ後にやり返す程の技量を見せるが炭治郎と零余子は防ぐので精一杯だった。

「血鬼術 飛び血鎌」

血の刃が飛んでくる。

天元は咄嗟に持ってた爆薬をぶつけ、轆轤は光の矢を放つ。

女郎屋で働いてる者や客を守る4人。

首が繋がりに、完全に回復した墮姫が帯を4人に飛ばす。

それだけでなく、妓夫太郎も飛び血鎌を出して、あまりの攻撃の量に流石に捌ききれず、全員外に吹き飛ばされた。

4人とも意地と気合いと根性で全ての攻撃を致命傷にしなかったのは凄まじい。

上弦の兄妹に対して構える4人。  
そこに伊之助や善逸も合流する。

これで何とかなるかも知れないと思った矢先に彼らの元に氷の中に閉じ込められたアギト（明悟）が飛んでくる。

全員がその光景に冷や汗処ではなく滝の汗と驚愕の眼を見せる。

「津上！」

「明悟さん、そんな！」

「嘘だろ!？」

「おい、返事しろ！」

「ちよつと、冗談でしょ!？」

天元、炭治郎、伊之助、轆轤、零余子が明悟に声を掛けるが明悟は動かない。

声を出してない善逸は確かに驚愕してるが何時もよりも冷静でいられる睡眠してる状態な為、まだ天元や轆轤と同じように冷静だった。

「こんな所まで飛んじやったか」

童磨が呑気な声を出して現れる。

全員が童磨の眼に刻まれた上弦の式と言う文字に冷静になろうと息を整えるが最強格である明悟をこんな状態にした童磨相手に流石に戦闘に慣れてる天元や轆轤も武者

震いをしていた。

「童磨さんかあ、来てくれてありがとうございます」

「良いって、俺が上弦に推薦したからね。それに無惨様に猗窩座殿が失敗したから行くように言われてたしね」

妓夫太郎が童磨に対して下手に出て童磨もあつげらかんと答えていた。

「てめえ、良くも津上をやつてくれたな！」

天元が自身の馬鹿デカイ日輪刀を上弦達に向ける。

その言葉に童磨は笑顔ではなく真顔を天元達に向ける。

「だって彼が悪いんだよ。俺が彼の奥さん……ああ、やつと名前を思い出したよ。彼の

奥さんの胡蝶カナエちゃんを殺したつて言つてて酷い風評被害だよ」

「何?！」

天元はカナエの名前が出てきた事に驚く。

カナエよりも前に柱になっていた天元はカナエを少なくともどんな印象の人物かは覚えてる。

そのカナエが明悟の妻だったと言うのは流石に知らなかった。

「彼女が死んだのは彼女のお腹にいた彼と彼女の子供のせいであつて俺のせいじゃないのに……そもそもそんな生き方をしてるのに人並みの幸せを手に入れようとして判断

を間違え、何も感じなかった俺に喜びと怒りを教えてくれた彼が全ての原因なのに悪いのは俺みたいに言つて酷いよ」

あまりの身勝手過ぎる答えに聞いてた全員に怒りが出てくる。

「ふざけ」「ふざけるな!!」・・・寵門」

天元が言い返そうとしたら、その前に炭治郎が童磨に対してキレた。

「人並みの幸せを手に入れようとして何が悪い!?それを無惨に奪い取り、明悟さん達のせいじゃないのに人に罪を擦り付けるその腐れ根性には怒りが出る!・・・それにこの血の匂い、どれだけ人を食べてきた!・・・悪鬼が絶対にお前は倒す!」

炭治郎が童磨に対して刀を構える。

それに天元、轆轤、伊之助や善逸、零余子も構える。

「てめえら、踏ん張れ!意地でもこのクソツタレを斬るぞ!」

「「「「おう!」」」」

天元の言葉に全員が気合いを入れる。

そして、氷の中に閉じ込められた明悟のベルトが白くなり、中央の「オルタリング」を守るように3本の爪が現れた。



## 怒りの業火

童磨に対して炭治郎達が気合いを入れてる最中、明悟は氷の中で暗闇の中にいた。

周りは何もなく、ただただ暗い。

明悟は疲れて踞った。

カナエを殺した原因を作ったのは自分が居たからと明悟は自分を責めてる。

本人が居たら、絶対に否定してくるが、もう彼女は死んでいる。

「答えのない」苦しみに明悟は疲れていた。

「申し訳ありませんでした」

そんな中で誰かの謝る声が聞こえた。

明悟は声の方向に眼を向けるとそこには白い服の男が立っていた。

（誰だ？）

「無惨を助けたばかりに君や君の愛した人や友人達にこのような事をさせてしまい、本当に申し訳ありませんでした。けど、お願いします。無惨と戦って下さい。人のために……」

白い服の男が手を翳すと明悟の腰のベルトが白くなり、中央のオルタリングを守るよ

うに3本の爪が現れる。

そして白い服の男は消えた。

明悟は立ち上がりたくなかった。

愛してる人は死に、殺した者にはボコボコにされ、心が本当に折れていた。

それに彼女を殺したのは自分だと思うとどんな顔をして、どんな思いをすれば戦えるのかわからなかった。

「立ちなさい。光柱」

再び声が聞こえて、そつちを見るとそこにはカナエがいた。

「カナエちゃん、無理だ。俺はもう……」

「関係ありません。人の為に戦いなさい光柱 津上明悟。それが貴方への『罰』です」

カナエはそう言って消えていった。

本当の彼女ではない。

1人で立てなくなった明悟が作り出した幻である。

しかし、その苛烈な言葉は明悟を動かすのに充分だった。

「そうだな……人の為に全てを捧げないと……俺は君に会えないもん……」

立ち上がる明悟。

しかし、その目はどこか空虚だった。



そしてアギトになり、アギトもまた炎に包まれる。

優しくも厳しく美しい太陽の光を彷彿させるとしてのアギトではない。

熱く苦しい地獄の業火のような炎により、アギトの姿はより熱くより強く、そしてより憎しみに染まり、無駄な物を省き、運動能力を極限まで上げたアギトの体が筋骨粒々になり、力だけを上げる。

それはより敵を叩き潰す事だけに特化したアギト。

クロスホーンが常時開き、体の装甲がマグマを彷彿させるほど赤くゴツなり、力をまだ上げようと体の装甲がひび割れるがギリギリで止まる。

腕には3本の爪が生えて、攻撃だけに特化した姿。

その名もアギト、バーニング、フォームである。



童磨を倒すと決めた炭治郎達は3人の上弦に苦戦していた。

零余子は墮姫の相手をして、炭治郎と善逸と伊之助は妓夫太郎を相手にし、天元と轆は童磨の相手をしていた。

しかし、状況は最悪の一言だった。

墮姫は妓夫太郎の登場により、より冷静により冷酷になり零余子を寄せ付けない程に強くなり、妓夫太郎も柱ではない炭治郎達が相手なので冷静に冷酷に対処していた。童磨に至っては天元と轆轤と言う現段階での最強コンビ相手に全く寄せ付けない程に強い。

「血鬼術 結晶ノ御子」

自身に似た氷人形を出して天元も轆轤もたかがそれ2体に苦戦していた。

能力的に見ても童磨とほぼ同じ強さを誇る氷人形は脅威でしかなく、天元は爆弾で轆轤はトリニティの力で何とかしていた。

「凄いでしょ、この人形。俺と同じくらい強いんだ。血鬼術も使えるし、どう？もうそろそろ死んでくれる？」

「ふざけんな！」

「死ぬか、たわけ！」

口では反論しているが、2人はかなり不味い状況だった。

それだけではなく、零余子も墮姫に押され、炭治郎達も

妓夫太郎の鎌の毒にやられて徐々に動きにくくなってくる。呼吸のお蔭で動けてるが炭治郎達はいつも以上に疲れていた。

そのせいで避けられた斬撃を喰らって毒が更に進行する。

「全員、1ヶ所に集まれ、このままだと全滅するぞ！」

天元の声を元に全員氷付けにされた明悟の元に集まる。

「逃がすかよ」

妓夫太郎が両手の鎌で斬りかかるが天元と轆轤がその鎌を刀とアックスで受け止める。

「零余子！」

零余子がクロスホーンを開いて脚に光を集めてから空きの妓夫太郎の顔面に飛び蹴りを放つ。やられた妓夫太郎は顔面が吹き飛ばされる。

そのまま、零余子は空中で体を一回転して妓夫太郎の首がなくなった体に蹴りを放ちぶつ飛ばす。

「お兄ちゃん！」

堕姫が妓夫太郎に駆け寄るが妓夫太郎は首を生やしてすぐに甦る。

「大丈夫だから、心配するな。お前じゃねえだけマシだろ？」

「でも……」

「安心しろ、絶対にお前だけは守るから」

炭治郎は堕姫と妓夫太郎の行動にますます自分と弟妹達との日常を重ねる。

それでも刀を構えるが妓夫太郎や堕姫に対して炭治郎の刀は覇気を喪いつつあったが2人のやった所業を思い出し、活を入れ直す。

「血鬼術 結晶ノ御子」

童磨が人形を更に増やし、その数は驚愕の50体。

圧倒的な量だった。

炭治郎や零余子だけでなく、天元や轆轤も生きた心地がしない。

「どうせ、彼は食べるし、もう色々と君達の事わかったし、無惨様から殺せって言われてるし、君達は全員氷付けにして殺してから食べる事にするよ」

笑顔で狂ってる言葉を放つ童磨。

しかもこの言葉が言ってるだけとしか思えないほどに軽く、十二鬼月である妓夫太郎も童磨の言動を内心ドン引きしていた。

「やっっちゃえ!!」

妹の堕姫は喜んで応援しており、妓夫太郎はこれこれでありかと無理矢理納得する事にした。

「じゃ、バイバイ」

指。パツチンをして人形に合図する童磨。

「絶対に生きるぞー！」

天元が活を入れて全員、内心もう一度覇気を込めるがそれで覆せる戦力差ではなく、全員が死を覚悟して最後まで足掻こうと向かってくる人形が生み出した大量の氷雪に對して構える。

しかし、その時に変化が訪れた。

まず真つ先に気づいたのは明悟の力の変化に感じ取った轆轤。

そしてその音に天元が気付き、少し遅れて善逸も気づく。

零余子も力の変化に気付き、伊之助も感覚でわかり、最後に炭治郎が匂いで気づいた。

全員が後ろにあつた明悟を見ると氷が溶けていた。

「全員伏せろー！」

天元の言葉に全員が伏せる。

すると全員の上を火炎が通りすぎて、血鬼術ごと氷の人形を蒸発させた。

手間取った存在が一瞬で消滅した事に天元は頼もしさ通り越して恐ろしさすら感じ始める。

そして火炎を出した筈の明悟を見ると今までは変わっていた。

とてつもなく熱く燃えてまるで全てを焼き付くすかのような存在　//　バーニング





近距離で迫ってくる人形を殲滅すると、明悟は遠距離から血鬼術を撃ちまくってる人形を見る。

カリバーを折り畳む。

そしてS字形のエマージュモードから完全な円形のサーキュロスモードに変形させる。

円形になったカリバーを投げると炎を纏いながら、人形を破壊していき、そしてガンガンガンと周りにぶつかって明悟の手に戻ってくる。

50体ほどいた人形は明悟の圧倒的なまでの強さに物の数分で全滅した。

童磨、妓夫太郎、堕姫が明悟と対面する。

妓夫太郎は明悟に対してある種の緊張を持って冷静に対処しようと考えて構えるが、童磨や堕姫は違った。

堕姫は明悟の圧倒的な強さを見せても侮り、下に見てる。零余子や轆轤が童磨や自分には優勢に立てなかった故にそう見てる。

明悟に関する事以外、何も感じない童磨はより進化した明悟に夢中だった。

「凄いね。まさか俺の御子を一瞬で片付けるなんて、君はやっぱり最高だ！」

明悟は童磨に向かっていく。

童磨は氷で、堕姫は帯で、妓夫太郎は飛び血鎌で明悟に攻撃するが、氷は素手で粉碎

され、飛び血鎌はシングルモードになったカリバーで消し炭になり、帯は掴まれる。炎が帯から堕姫に伝達し、燃える。

堕姫は「生前に燃やされた記憶」が甦り、想像以上に苦しむ。

「梅！」

妓夫太郎が生前の名前で堕姫を呼ぶ。

この兄妹は2人とも首を斬られなければ死なない。

両方とも首と胴体が離れなければ死ぬことはない。

だから、堕姫は死なない。

故に燃やされた記憶が甦り、脳が遮断したくても「不死身」ゆえに出来ない。

再生しようにもアギトの鬼を殺す火なので上手くいかない。

それは想像以上に苦しく、堕姫は地面を転がる。

妓夫太郎が堕姫を落ち着かせて冷静に回復させようと抱き締めるが妓夫太郎にまで

燃え移り、苦しむ。

「血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩」

童磨が最大級の血鬼術から発せられる冷気で炎を消火する。妓夫太郎が童磨に感謝の顔をするが童磨は妓夫太郎を全く見ないし、気にもしてない。

童磨にとっては折角の明悟との戦いを外野が邪魔しないようにしただけである。

妓夫太郎は童磨から発する無言の「邪魔」と言う感情を無表情の顔から読み取り、怯えきつている堕姫を連れて離れる。

「やるねえ、君は本当に最高だよ」

明悟が一気につめてカリバーを童磨に振りかざす。童磨も鉄扇で受け止めるが、カリバーの持つ熱に鉄扇が耐えきれずに斬られる。体を斬られる前に童磨は避けて新しい別の鉄扇を懐から出す。

「血鬼術 枯園垂り」

鉄扇に絶対零度の冷気を纏って攻撃する。

明悟はカリバーで受けようとせずそのまま自分も攻撃する。

手数多きは童磨が圧倒しており、明悟は完全に手数では負けていたが、あまりの頑丈さに童磨の攻撃はあまり効いてなかった。

「ウオオオオオ!!!」

明悟は右手に炎を込めて童磨の腹を殴る。

拳は童磨の体を貫く。

アギトの光の力に流石の童磨も血へドを吐く。

「ハハハ、本当にやるねえ。でもそれで俺は殺せないよ!」

明悟の右腕で一番装甲が薄い肘に鉄扇を挟み込む童磨。

そして、明悟の右腕は肘から先が切り放された。

右腕の切られた断面から血が吹き出す明悟。

苦しみカリバーを落として右二の腕を左手で全力で握り絞める。

童磨はその隙にまだ刺さってた明悟の右腕の肘から先を体から抜き出して捨てる。

「惜しかったね」

体に空いた風穴を修復する童磨。

しかし、アギトの力の影響がなかなか回復しない。

明悟は右腕を切られた痛みで叫び声を上げる。

「アアアアアアアアアア!!」

叫び声を上げ続ける明悟。

やがてそれも収まる。

すると切られた右腕の断面からまた新しい右手が“生えてきた”。

あまりにも壮絶な回復能力。

それは“鬼の回復”と似ていた。

炭治郎達はその回復に言葉を喪い、童磨は嗤う。

「なんだ、凄い回復じゃないか。まるで鬼みたいだね！」

叫ぶ童磨を殴る明悟。

明悟からは怒りとも悲しみともつかない慟哭が童磨からは喜びの嗤いが出る。

「ハハハ、人間以上の力を得る力。姿は人間ではなく異形。そして怪物のような回復能力。〴〵いったい君と鬼の何が違うんだ!?!」

「アアアアアアアアアア!!!」

「鬼神のごとき力に異常な能力。冷静に考えれば鬼と似てるね」

殴り続ける明悟。

童磨の顔を袋叩きにして無理矢理口を塞ぐ。

(血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩)

童磨の最大の菩薩がまた姿を現して童磨の上に馬乗りになって殴ってた明悟をぶん殴る。

氷の力はバーニングには全く効かなかったが、衝撃までは耐えきれずに吹き飛ばされる。

すぐに起き上がり、手を翳す。

地面に落ちてたカリバーが意思を持ったかのように明悟の手に戻る。

童磨もまた鉄扇を持って立ち上がる。

「ハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

「アアアアアアアアアアアア!!!」

慟哭と嗤いが吉原に響き渡り、互いに相手を殺そうと自分の得物を振りかざしながら、走り合う。

いざ、始まろうとした瞬間。

ベベン！

突如、琵琶の音が鳴り響き、童磨と妓夫太郎や堕姫が突然現れた障子の中に入れられる。

「もう終わりか・・・残念」

最後に童磨の惜しむ声が聞こえて、3人の上弦は消えた。

童磨が急に消えてカリバーが空を切る明悟。

しかし、叫びを止めずにまだ「何も無い」空中を切り続ける明悟。

「どこだ・・・アイツはどこだ!？」

「アイツはもういねえ!」

暴れる明悟に天元はそう言う。

明悟は体を止めて天元を見る。

見られた天元は首を横に振る。

明悟は何があつたのか悟った。

仕留めきれなかった。

それどころか戦闘を思い出し、自分の見せた超回復が恐ろしくなる。

愛する人を殺した敵を殺せず、考えないようにしていた自分と鬼との似てる超常的な力。

「アアアアアアアアア!!」

精神がズタボロになった明悟はその場で踞り、叫んだ。

上弦3人を相手に生き残った彼ら。

鬼殺隊の長い歴史を見れば充分に勝利である。

しかし、この状況は「勝利とは程遠かった」。



暗闇の中に白い服の男はいた。

「すまない……本当にすまない……赦してくれ、津上明悟……無惨を作った事を……」

君をアギトにした事を……」



暗闇の中で男は謝罪した。

“誰もいない暗闇の中で”



無限城で、無惨はイライラしていた。

上弦の猗窩座が列車でアギトだけでなく柱すら殺せずに帰って来て、3人の上弦が居たにも関わらずに撤退をせざるを得なかった。

童磨達を戻したのは無惨が鳴女にさせた。

何故なら、どう考えても“負けはしないが勝ちも出来ない”相手に戦う意義など存在しないからである。

ここ最近の上弦の鬼の戦績にイライラしていた。

そして十二鬼月の上弦を全員集めていた。

壺の黒死牟

式の童磨

惨の猗窩座

肆の半天狗

伍の玉壺

陸の妓夫太郎と墮姫

そうそうたる顔触れだが、無惨に取つてみれば将棋の駒でしかない。

「貴様ら、何故アギトなる塵を掃除できない？ 私は今、不機嫌の極みにいるぞ。殺せ」

上弦の7人を威圧する無惨。

黒死牟は沈黙し、童磨は嗤い、猗窩座も沈黙し、半天狗は許しをこい、玉壺は震え、妓夫太郎は怯えてる墮姫を安心させようと抱きしめていた。

「考えれば考えるほど鬼殺隊は異常だ。自分は生きてるのにやれ家族を殺された、友を殺されたと叫びながら、殺してくる。自分が生きてるのだからそれで良いのに、何故にそうも死にたがるのか理解不能だ。あの〃わけのわからん事を叫びながら殺そうとする変態〃どもをさつさと殲滅させる。膿は早く除去するのに限る。なのに何故できない？ 一体何時になれば産屋敷を見つけて殺すのだ？・・・それだけならまだしも私が求

める。青い彼岸花。はいっ見つける？あれがあれば完全に太陽を克服できる筈なのに何時になったら見つけるのだ？・・・殺しも出来ずにお使いも出来ない・・・何の為に貴様らを十二鬼月の上弦という地位に加えた？このままでは名前だけ無駄に豪華な潰れかけの店だ。私は待つのに疲れてきたぞ・・・おまけにアギトなる化け物も出て来て苦痛の極みだ」

長々しく何とも自分の問題点は棚上げして愚痴を言いまくる無惨。  
すると手を叩く音が聞こえる。

無惨は今手を叩いてるゴミを永遠に掃除しようと全員の思考を読み取るが誰一人拍手はしていたかった。

「何?」

無惨の横に灰色のオーロラが現れる。

突然の事に無惨は固まり、上弦はどうするべきか悩む。

「いやいや、失敬失敬。中々な怒りですね」

オーロラから現れてくる白い服を来た神父が無惨は問答無用で肉傀で喰おうとするが神父は紫と白の異形に姿を変えてそれを吹き飛ばす。

「何?」

「手荒い歓迎ですが、まあ良いでしょう。デモンストレーションには完璧ですから」

「貴様、何者だ？」

「神父ですよ。但し、望みを叶える神父ですが」

「胡散臭い者がこの私に近づくな」

「まあまあ、そう仰らずに私にかかればその異常な連中を殺せますよ。永遠に」

「何？」

「私とこの者にかかれば」

灰色のオーロラの中からもう一人出てくる。

その存在は蛇柄のジャケツを着ていて、上弦の誰よりも獰猛な目付きをしていた。

「私とこの『浅倉威』にかかればね」

無惨は浅倉を見る。

どこからどう見ても人間だ。

だか、元来の臆病な無惨の本質は浅倉から逃げろと訴えかけていた。

「ここか、新しい祭りの場所は？」

狂喜の笑みと言うに相応しい笑みを無惨に向ける浅倉。

無惨は顔を歪め、神父と浅倉は嗤う。

2人の『人間』の『嗤い』が無限城に響き渡る。



産屋敷に近い森の中。

灰色のオーロラが現れて2人の男が出てくる。

門矢士と海東大樹だ。

「海東・・・本当にこの世界のアイツらは来てるんだらうな？」

「間違いないよ・・・この世界に来てる」

「なら、急いで探しだして倒すぞ」

「当たり前だよ」

士は大樹を睨む。

「言つとくが、今回は完璧に俺じゃなくてお前のせいだからな。1号からライダーの中で1番盗みが上手いのになまたまた盗まれたお前のな」

士の言葉に大樹は肩をすくめる。

ため息を吐く士。

すると士と大樹の格好が変わる。

それは鬼殺隊の隠の姿になっていた。

「また黒子かよ」

「なんで、僕まで……」

「良いから、さっさと行くぞ」

「はいはい」

そう言って2人は森の中から見えていた産屋敷に向かっていく。

何故、彼らは現れたのか。

そしてこの戦いはどこに向かうのか。

まだ誰も知らなかった。

次回、新章開幕！

アギト&amp;mp;テイケイド 大正ビギンズ Be t  
he one

## 大正ビギンズ カナエ

あの吉原の事件から1週間後、明悟を含めて全員が回復した。

全員を蝕んでた妓夫太郎の毒は起き上がった禰豆子の血鬼術の爆血によって消せたので、全員が肉体的にはかすり傷と少しの生傷で済んだのは奇跡に近かった。

しかし精神的には敗北としか言いようがなく、特に明悟とカナエの事に関してはあまりにも重かった。

それに関してはカナエの家族であるしのぶやカナヲ、アオイ、きよ、すみ、なほ以外誰も何も言う権利もないので誰も触れなかった。

明悟はこの1週間の治療は蝶屋敷でやっていない。完全に自宅で療養していた。それに蝶屋敷で治療しなくても問題なかったのも事実で、天元達のように毒にやられてなかった。

明悟はしのぶが他の蝶屋敷の子達が来るかと思ったが誰も来ず。同じアギトの2人

である轆轤と零余子は自分の家に置いておく事になった。

そして今日は全柱が産屋敷に集結し、轆轤と零余子と協力するかどうかを決める会議がある。明悟、杏寿郎は協力の立場を取っていて、2人を弁護する気満々である。蜜璃は完全に会うまで判断しないと中立を表明、無一郎と義勇に関しては無関心であるがどちらかと言えば反対よりの表明であり、残りは反対だった。

共に戦った天元に関しては轆轤と素手の対決を望んでいて、それで協力に納得出来るかどうかを決めると言う物騒極まりない事をやろうとしていた。

この会議に関しては隊の中でも極秘で行われる。今回の事でこの会議の存在を知っているもの柱と当事者の炭治郎達、そして耀哉やあまねの産屋敷一家位であり、隠でも知ってるのは殆どいなかった。

轆轤や零余子は元十二鬼月であり、この2人に家族を殺された隊員も必ずいると言う判断から極秘でやる事になった。

「さて、行こうか」

いつも以上に服をキッチリする明悟。とてつもなく重要な会議で自分は2人の弁護に立つ側なので流石に普段通りではなかった。

「ああ」

轆轤は行く氣を確りと決めてきたが、零余子に関しては・・・



「ごめんなさい。私は実は『会議に出たらいけない病』が……」  
 「そんな病はない」

「ごねる零余子の首を引っ張って無理矢理連れ出す明悟。

「嫌よ！絶対に行くもんか！」

「行かないなら、ここで無理矢理眠らしてから連れていくけどどっちがいい？」

笑顔で尋ねる明悟に零余子は観念して大人しくついて行くことにした。



無事に産屋敷に着くと、庭に行く。

屋敷に上げるのは問題なのではないかと言うことでこうなった。

行くともう既に全柱が来ていた。

ここ最近の会議は無茶苦茶早くから来る明悟に対抗心を燃やした実弥と生真面目一直線な杏寿郎が負けじと早く来るようになり、しれつと義勇も早くなり、対抗心を燃やした小芭内や真面目な行冥に蜜璃、しのぶ、天元、無一郎と早くなった。

明悟、轆轤と零余子の登場に杏寿郎と中立をしてる蜜璃はともかく残りの柱は恨みの視線を向けていた。(ただし、天元に関しては轆轤だけに向けていた。よつぽど嫁に抱きつかれてたのが憎たらしいのだろう。まあ勘違い甚だしい私怨ではあるが)

「芦原、氷川。久しぶりだな！」

「煉獄か、久しぶりだな」

「・・・久しぶり」

杏寿郎が轆轤や零余子の元へ駆けつける。

「お前達を許して良いかはまだ決めかねている！しかし、人の為に鬼と戦うならば誰もが鬼殺隊だ！共に戦おう！」

手を差し出す杏寿郎。

だが、2人は手を取らなかった。

「お前、前から思ってたが随分とさっぱりしてんな」

「グダグダ考えるのが性に合わんのでな！」

笑顔で答える杏寿郎。

轆轤も零余子もここまでさっぱりした人間は初めてなのでどうしたら良いかは分からない。

「お館様の御成です」

ひなきがそう言つて縁側ににちかと共に耀哉を連れてくる。杏寿郎や他の柱が耀哉の前に瞬時に跪くが轆轤と零余子はこの忠臣つぷりに若干引いていた。

明悟は本来ならば跪くべきなのだが、ここで2人をほっぽりだしてやるのもあれなので止めた。

優等生の実弥が明悟を睨むが、明悟からすればどこ吹く風でしかなかった。

「やあ、皆。息災で何よりだよ」

「耀哉もまだまだ元気だな」

「明悟か・・・婚約までしてたんだって？仲人の挨拶の依頼は来てなかったよ」

「・・・後日、頼むつもりだったんだ。俺の仲人に相應しいのは耀哉だけだしな」

「嬉しいね」

軽口を言い合い、明悟にとってはあまり触れられたくない内容でも耀哉はガツガツと言う。

明悟も耀哉の性格を熟知してるので軽口で答える。

(昔から傷口にズケズケって入って来るんだよなあ)

心で耀哉に悪態をつくが悪い感情ではなく、懐かしいと明悟は思った。

轆轤と零余子を耀哉の前に連れていき、座る明悟。

2人も砂利の上に正座する。

耀哉は音で2人が座ったのがわかった。

「その2人が芦原轆轤と氷川零余子だね？ 私の名前は産屋敷耀哉。よろしく」  
軽く挨拶をする耀哉。

その独特な声調に零余子も轆轤も緊張が解ける。

「早速で申し訳ないが、2人がアギトとして人を守る為に鬼殺隊に協力してくれると言  
うのは本当かな？」

「ああ、本当だ」

「本当……です」

轆轤は普段と同じ感じで答えるが零余子はビビりな性格故か敬語になっていた。

「ありがとう……柱の皆にもう一度聴きたいんだが、2人の協力には反対なのかな？」  
「お館様の御命令でも出来ません！」

「ああ……それだけは出来ない」

「信用出来ません」

「死んだ方がマシです」

「俺は賛成です！ 2人は信用に値する戦いをしてます！」

「私は、もう少し御二人の事を知らないかと判断出来ません。申し訳ありません」

「僕はどっちでも良いです。裏切れば斬れば良いですし、信用出来るなら別に」

「(本来ならば反対ですが、柱ではない俺にその権限はございませんで)：・賛成です  
(それに煉獄の人を見る目は確かですし、3人の柱が共に戦ったのであれば実力は申し  
分ないかと思えます)」

義勇がまた言葉足らずに賛成を表明したので約3名からの怒りの視線が強くなるが  
疎い義勇には伝わらなかつた。

「派手に反対です。氷川はともかく、芦原は信用できねえ。いつ俺の妻達が襲われるか」  
天元が轆轤を睨むが轆轤も流石に睨み返す。

「俺が人妻に手を出す分けねえだろ。独身でもやる気はないが」  
「それを地味にどう信用しろと？」

天元からの言葉に轆轤は深呼吸をして落ち着く。

「俺の妻は襲われて手籠めにされた」

轆轤からの一言に柱だけでなく見えない耀哉を覗いた全員が轆轤の話聞く。

「死んだ蕪前岳の奥さんだね。教えてくれないか？お前が鬼になった理由を」

轆轤の話をも以前聞いていて明悟が再び尋ねる。

聞かれた轆轤はここで話さないといつ後ろの自分を殺したがってる柱達が襲いに来  
るか分からないので、死ぬほど話したくはなかつたが話すことにした。

「今から20年ほど前に病の母親と妻と一緒に暮らしてた。ある日、妻が買物に昼頃

出掛けたが、夜になつても帰つて来ずに探しに行った。その時、町の離れにあつたおんぼろの小屋で妻を見つけた。着物は乱れるどころか所々が切り裂かれたり、血だらけで妻の体もボロボロだった。何が起きたのかすぐにわかつた。一人の男がやって来た。俺を見て怯えて妻もそいつに怯えて誰なのか理解した。俺は逃げるそいつを半殺しした。半殺しだったのは妻が俺を人殺しにしないように止めてくれたからだ。警察で真実を言つたが、誰も聞き入れなかつた」

「その男から警察は聞けただろ？」

杏寿郎が轆轤の話を書いて出た疑問を尋ねる。

「意識不明で聞ける状況じゃなかつたからな。蛭川雅史つて奴だ。聖都病院に行けば記録が残つてる筈だ。あのゴミも警官だったらしいから不祥事は避けたかつたらしいし。俺は刑務所に入つて母親が危篤になつたのを手紙で知つた。外に出ようにも出れずにいた所、上弦の肆の鬼に血を与えられて鬼になつた。人を食いたかつたがそれよりも母親に会いたくて家まで走つて、着いたら2人は殺されてた。辺りは血の海で妻や母はまるで壊れかけの人形のように残酷に殺されて埋めようと触れたら悲鳴だけ出てくるつて悪趣味な状態だった。俺は2人から悲鳴を出させないために2人の死体を食べた。何も考えずに苦しませたくないから・・・それで俺は何もかも忘れて鬼として生きた」

明悟は轆轤の話聞いて何も答えない。

鬼によつて運命を狂わされてる。いや、轆轤は鬼だけでなく、人にも運命を狂わせられた。〃。

鬼からも人からも苦痛を味わつた轆轤に明悟は何も言えなかつた。

他の柱もこの話を信用しないと思うのは簡単だつた。

しかし、出来なかつた。

何故ならば、轆轤は血の涙を流して体から溢れてくる怒気はそんな疑いを吹き飛ばす程に強烈だつた。〃。

「ごめん。辛い話をさせて」

明悟が轆轤に謝罪するが、轆轤は何も言わなかつたが、黙つて頷いていた。

「零余子の話も教えてくれないかい？」

耀哉が零余子に尋ねる。

零余子もまた深呼吸して話す。

「今から6年ほど前に病になつた。酷い大熱で苦しんで私の両親は夜分遅くに山に入つて薬草を探しに行った。裏山だつたし、薬草が多い山だつたから、いくら待つても帰つて来ずに心細くて私はその時、看病してくれた人の目を盗んで山に入った。けど居たのは両親じゃなくて血塗れの両親の着物と口が血塗れだつた無惨だけだつた・・・怖くて

命乞いをした。そして鬼になった」

轆轤と比べると他の鬼と同じように「ありがちな話」だった。しかし、この場と同じ状況になった時にその行動をするのは尤もな為に誰もそれには批判しない。

「しかし、お館様。この2人は元十二鬼月です。殺された隊士は大勢います」

実弥が耀哉に言う。

正論だし、非常にまともな理屈だった。

「けど、上弦や無惨を倒すにはこの2人の力が必要だ」

明悟が2人を擁護する。

ここで重要なのは明悟も2人が人を喰ってる事に関しては擁護も何もしておらず、力が必要だからやるべきだとキツチリしている点だった。

別に裁判でも何でもなく2人と協力するかの話だったから、2人が鬼に対して有効だと証明できれば良い話であり、そこら辺に関しては明悟的には禰豆子よりもやり易かった。

轆轤に関しては初戦（明悟が確認してる）で十二鬼月を撃破してそのまま杏寿郎と明悟の3人で猗窩座と戦闘し、吉原では童磨、妓夫太郎、堕姫と戦闘した為に強さに関しては折り紙付きだった。

零余子は初変身が吉原と言う事もあって轆轤よりは信用もとい実績の量は足りない



が、墮姫だけでなく妓夫太郎の首を吹き飛ばしたと言う実績の質は凄く、あの2人が鬼として特殊な体質だったから効果がなかっただけでこれが普通の鬼の場合だと、正直に言つてこの中の誰よりも戦績が凄いと云う事になる。

だから、反対を表明してる人間は性格なりなんなりでやるわけだが、実績優先の完全な実力主義を唱えてる鬼殺隊でそれらを有効にするには2人の実績が全くないか無茶苦茶酷いかと言う状態じゃないと出来ない。

結局の所、反対する理由は山ほど出てくるし、擁護してる人間も反対の表明をするか迷つてるが協力を拒否するとそれはそれでとてつもなく戦力が激減するし、下手をするとな今までの戦いでいかなかった場合、隊士、最悪を考えると柱が死んでいた可能性が高いため、協力するしかなかった。

完全な実力主義と実績主義が反対をしてる実力と実績で上り詰めた柱の首を絞める事になるのは皮肉以外の何物でもなく、会議は恐ろしいくらいギスギスしていた。

そして全員が疲れを感じ始めてた頃、昼から始めた会議が、夕方になり、これから夜になろうとしてる頃。

「藤の山で緊急事態！緊急事態！」

明悟の鳥の籠悟が飛びながらそう叫ぶ。

「山で大火事！山で大火事！鬼が脱走！脱走！」

藤の山では試験の為に鬼を捕獲してる。その鬼が脱走すると言うことは周りの村や人々が危ないと言う事に他なく、明悟も含めた全柱が動いた。

火事なので轆轤の水の力は必須なので、轆轤は明悟が零余子は杏寿郎が首根っこを引つ張り全員が全力で藤の山に目掛けて走る。



藤の山に着くと悲惨な状況を彼らは目にした。

山は火があちこちに出て拡がって多くの隊士が収拾の為に動いていた。

山火事は小さな火だと水を掛けるくらいでも何とかなるがここまで大きい火だと反対側から日を着けてぶつけて燃やすものを完全に焼失させて沈静化するのが一番良く、既に山の反対側はその火なのか燃えていた。

だが、ここは鬼殺隊が長年試練に使っていた大事な山。中にはここで死んだ友人や同門もいる。

その事実は柱達にも悲しさを与える。

パンツ！

突然、手を叩く音が聞こえて全員がそつちを見る。

最年長の行冥が手に数珠を巻いて叩いたのだ。

「何が起こってるのか冷静に説明して欲しい」

盲目ゆえに火事が起こっても耳での情報しか入ってこない。しかし、鍛え抜かれたその聴覚は何が起こってるのか分かった。

ただし、それでも目の情報が必要なので叩いて他の柱から情報を得ようとした。皆を冷静にさせる為でもある。

「藤の山が燃えてる。かなりの山火事でもうここで試練は出来ない。多くの隊士や隠が事の收拾に当たっているけど人手不足だ」

明悟が行冥に間髪入れずに情報を答える。

「分かった。山の鬼を一体残らず倒そう。一体残らず確実にだ！」

「俺は山の頂上に行く。火の中は任せてくれ」

「なら俺は麓に行き、拡がらないようにする」

「私は轆轤と一緒に行動する」

「なら俺は、芦原と氷川と共に行動した方が素早く事に当たれるな」

「残りは私と共に反対側に行き、逃げて鬼を倒す」

早くやる為、全員がその案に乗り、山に向かう。

明悟、轆轤、零余子はベルトを出す。

そして走りながら、ベルトが光出す。

「変身!」

「変……身!」

「変身!」

3人がアギトになり、明悟はフレイムフォームに、轆轤はアクアフォームに変わって、明悟は山の頂上を目指し、轆轤と零余子は火の手で1番村に近く、大勢の隠が村人を非難させてる所に行き、杏寿郎が轆轤達と隠達を柱権限で協力させる。

そして山の反対側で山から逃げてきた鬼を大勢の隊士と一緒にやる。本来ならば、消火能力がない零余子は此方に回ってくるのが良いと思うが、元鬼の零余子を1人だけ、滅殺の精神が杏寿郎や明悟以上に根付いてる柱達と一緒に行動させたら混乱しかない。まあそれを全員が理解してる上に尚且つ急いでやらないといけないのでグダグダと配置をしようがないので誰も零余子に愚痴は言わなかった。それに大人しく協力出来る柱はわりとドライな考えが根に染み付いてる天元か人を助けるのが最優先な杏寿郎、憎むと言う考えがそもそもない明悟くらいで他は憎しみも怒りも常人以上なので

やっても血が増える以外何もない。

燃える山の中で明悟は残された人や隊士を探し、鬼は見つけ次第倒す為に動いているが、人や隊士は居なく、鬼も居なかった。

完全に無駄骨でしか無いが、もしも避難に遅れた人間がいた場合を考えると問題で、これは必要な行動でそれがフレイムフォームだと明悟にとつても問題なく出来たからやつてる。

すると背後から何かが来るのをフレイムの持つ直感で感じとり、明悟は前転して避ける。

すぐに背後を見るとそこには、鬼の仮面をし、蝶の模様の羽織を着ていて、黒い蝶の髪飾りで後ろでゆつたりと纏めていた女性の隊士がいた。

「ここは危険だから早く逃げて麓の柱と合流して！」

明悟は叫んで、そう言う。

しかし、彼女は日輪刀を振りかざして、明悟に斬りかかる。

「ちよ、ちよつと待つて！」

明悟はその刀を避ける。

避けた先にある燃えてる木が綺麗に斬られる。

豪腕つぷりに少しだけ明悟は引く。

「俺は味方だ！」

彼女は明悟の言葉を聞かずに攻撃し、明悟も避けたり反らしたりさせ、何とかする。一向に決着がつかずに膠着し、火の手がドンドンと回ってきてこのままではいくら呼吸をしているからと言つても危険になり、無事でいられなくなる可能性が高い。

明悟は変身を解除する。

アギトの姿を詳しく知らない隊士もまだ大勢いるので、生身で隊服姿なら安心し、敵と認識しないと思つたからだ、彼女はお構い無しで攻撃する。

明悟は自分の日輪刀で受けて、確実に眠らそうと峯を当てに行くが、彼女も負けじと受けていた。

その太刀筋に明悟は懐かしさを感じるがあり得ないと思つた。

そして何回かぶつけ合つて、つばぜり合いになり、明悟は体を反転させて後ろから彼女の首を取り、投げる。

彼女は投げられて地面を転がり、仮面が取れる。

明悟はその顔をして呆然となる。

何故ならば、彼女は死んだはずの「胡蝶カナエ」だった。

鬼の血鬼術かと思つたが、アギトの超能力が本人だと認識していた。

混乱する明悟にカナエは睨みながら、再び日輪刀を構える。

「カナエちゃん、何で？」

「カナエって誰？」

カナエはそう言い、日輪刀を明悟に振るう。

明悟はギリギリ受け止めるが、動揺して先程のような膠着する事なく完全に圧されていた。

「カナエちゃん、俺だ明悟だ！」

「知らない」

「君の夫だ、共に将来を約束した！」

「知らない」

「共に戦い、共に笑って、共に泣いて、喧嘩して、仲直りを繰り返した！」

明悟はカナエに否定され続けても叫び続ける。

しかし、カナエには全く届いてなかった。

「花の呼吸 参の型 泰山朴」

力の限り下から上へ切り上げる型。

花の呼吸で一撃ならば最大の威力を發揮し、呼吸により常人以上の力を出してカナエは明悟を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた明悟は木にぶつかり、膝をつく。

カナエはその隙に明悟の目の前までやってくる。

「これで終わり」

刀を振りかぶるカナエ。

明悟は混乱し、動けなかった。

振り下ろされて斬られると思い、明悟はそんなカナエを見るのが嫌で眼を瞑るがその

刀は明悟を傷つけなかった。

明悟が眼を開けると、1人の隠が小刀でそれを受け止めていた。

「何者？」

「門矢士・・・仮面ライダーだ」

士はカナエを蹴り飛ばす。

「仮面ライダー・・・？」

明悟は立ち上がって士から出た言葉が気になり、尋ねる。

「おい、大丈夫か？」

「ああ・・・それより君は一体・・・」

2人が対面しあつてるとカナエはその場から逃げる。

「カナエ！」

明悟は士は一先ず置いといて、カナエを追う。



「おいおい、随分と熱を入れてるな」

士はカナエを追った明悟に呆れつつ後を追う。



山の反対側では行冥を始めとして、しのぶ、義勇、蜜璃、小芭内、実弥、無一郎、天元が山から降りてくる鬼を斬り倒していた。

そして最後の1体を行冥が鉄球で首を吹き飛ばす。

「よし、これで最後か!？」

「何とかなったな」

「危なかったですね」

一仕事終えた彼らに突然手を叩く音が聴こえる。

「いやいや、中々に素晴らしい力ですね」

無惨と接触した神父が彼らの前に現れる。

「何者だ!？」

実弥が神父に聞くが神父は彼らに薄ら笑いを見せる。

「何、ただの神父ですよ。ほら眼を見てください。鬼ではないですよ」  
確かに神父の目は人間だった。

しかし、鬼の存在を認知してる神父と言う時点で怪しく全員が警戒する。

「おや、中々に警戒が強いですね」

「怪しい者には疑り深くが鬼殺隊のやり方だ」

神父の言葉に行冥が答える。

すると、明悟達から逃げてたカナエがやって来て、神父の前に膝まずく。

カナエの登場にカナエを知っている者は驚き、しのぶは普段の冷静な笑みが完全に消えていた。

「姉さん?・・・なんで、姉さんは死んだはず!？」

驚く柱達にカナエを追ってきた明悟と土が合流する。

「津上さん!・・・と貴方は誰ですか?」

蜜璃がやって来たポロポロの明悟とけるつとしてた土を見る。

「門矢士だ、桜髪」

髪の色で答える土。

この髪の毛は蜜璃に取ってみればコンプレックスの塊なので地雷ではあるものの状況が状況なので堪える事にした。

小芭内が士を敵認定したのは言うまでもない。

「カナエに何をした!？」

明悟がカナエと一緒にいる神父を問い詰める。

普段からは考えられないほどに動揺していた。

神父は対称的にけろっつとしていた。

「記憶を消したのですよ。まあ今は手となり脚となってる駒として最高に優秀ですけどね」

「貴様!」

明悟は神父に飛びかかり、殴ろうとするがカナエに空中で腹を蹴られて飛ばされる。

ゴロゴロと明悟は転がり、倒れながら腹を抑える明悟。

「てめえ、何者だ!？」

怪しいイカれた神父に天元が刀を突きつける。

「そうですね。神父ですが・・・死を司る存在ですよ」

神父は小さいUSBメモリーのような物を取り出し、それに付いてる唯一のスイッチを押す。

## 《ダミー》

メモリーから音がなり、神父は左腕にある独特な紋章の中心に挿す。

メモリーが神父の体内に入る。

すると神父は「変身」した。

紫と白の体に凶悪な顔つきで顔にあるプレートが痛々しくより凶悪な顔つきを見るものに印象づける。

史上最悪の存在「アナザーデイケイド」である。

「人の記憶から模してゐるわりには良くできてゐるな」

士が神父の姿を見て余裕そうに答える。

「人の記憶から模してゐる故に能力はオリジナルよりも遥かに自由。つまりこういう事も出来る」

神父が手を翳すと灰色のオーロラが現れて、神父とカナエを通りすぎる。

やがて、オーロラは消えるが、そこから一人の男が現れた。

蛇柄のジャケットを着て無精髭を生やしてその目は獣同然の怪物「浅倉威」だ。

「ここか、祭りの場所は……」

「そうだ、そしてこれが新しいベルトだ。もう鏡すら必要ない」

神父は手から蛇の紋章が刻まれたデッキを浅倉に渡す。

浅倉は試しにデツキを前に突きつけると、本来ならば鏡や水面と言った写すものがないと現れないベルトが浅倉の腰に装着される。

「なるほど、確かにこれは良いなあ」

凶悪な笑みを浮かべる浅倉。

その姿に士も含めた全員が怯む。

「変身！」

浅倉はベルトにデツキを挿す。

すると浅倉の姿が紫色の装甲を纏った蛇を模した存在 “王蛇” になる。

「アイツも変身するのかよ」

実弥が2人の男が見せた明悟とは印象も何もかもが違いすぎる変身に冷や汗を掻く。

《ソードベント》

浅倉の手には黄金の鉄鞭のベノサーベルを召喚して手に持つ。

「さあ、殺り合おうぜ」

声色から明らかに喜んでる浅倉に全員が警戒する中、士はマゼンタ色のバックルを取り出して、腰に装着する。

「俺が相手になつてやる・・・変身！」

《kamen ride decade》

士の周りに10対の影が現れてやがて集中する。  
そして士は「仮面ライダーディケイド」になった。

「祭りの始まりだ」

浅倉は士に向かって突進してサーベルを振るう。

士もライドブツカーを取り出して、何とか防いで2人はそのまま戦闘を始める。

「おい、どうすんだ!?!わけの分からないのがまた増えたぞ!?!」

実弥が鬼とは違う3つの存在とカナエに流星に混乱する。声に出したのは実弥であるが全員が同等以上に混乱していた。

「今は目の前にいる存在が先だ!...津上、集中しろ!」

行冥が場を引き締め、明悟に渴を入れる。

ブンブンと鉄球を振り回す行冥。

その顔つきは明悟がビビるほどに険しかった。

「カナエは任せろ。お前はあの神父を討て!アイツを何とかすればカナエはどうかならざる筈だ!」

そんな確証は何処にもない。しかし、行冥の言葉は明悟に届き、冷静に頭を回させる。冷静になるには十分な言葉だった。

明悟はベルトを出現させる。

それは普段とは違い3本の爪で中心のオルタリングを守るような形が印象的なベルトだ。

「変身！」

明悟はそのままバーニングフォームになり、カリバーを出現させてシングルモードにして神父に襲いかかる。

またカナエが空中で明悟を切り落とそうとする。

「蟲の呼吸 蜂牙の舞 真靡き」

しのぶがカナエの攻撃を自身の蟲の呼吸を使って遮断する。カナエは顔を少しだけ後ろにして避ける。

対面しあう姉妹 カナエとしのぶ。

カナエは無表情でしのぶの顔はえらく険しかった。

「ここは私達に任せて！」

明悟はそのまま神父に向かってカリバーから業火を出して神父に斬りかかる。

しかし、神父は腕一本でそれを受け止めた。

「ウオオオオ!!」

叫びながら、何回も斬ろうと振りかぶる明悟だが、神父は腕一本でそれを全て受け止めていた。

「ハハハ、その程度か!？」

神父はそのまま明悟の持っていたカリバーを弾き飛ばす。手からカリバーが弾き飛ばされた明悟だが、そのまま炎を拳に込めて殴りかかる。

しかし、それすらも神父は受け止めて左手で明悟の首を掴み、重くなってるはずのバーニングフォームの明悟を空中に上げる。

「どうしたのだ? この程度か? しかし、この力は最高だ。どんな者も私の意のままに操れる」

「お前を倒してカナエを元に・・・」

神父の腕にしがみつき、脱出しようとする明悟だが、手は緩まなかった。

「それは止めといた方が良い。何故なら私を倒せば彼女はまた死ぬ」

「!？」

「私は彼女を別の世界から呼び寄せたそこがどんな世界なのかは知らないが彼女は現れた。まあすぐに記憶を消して駒したが、私と彼女は一心同体。私を倒せば彼女はまた永遠に消える。『津上明悟』・・・『君は愛する人の為に愛する人を殺せるか?』」

愛する人の為に愛する人を殺す。

矛盾してる問いに明悟は呆然となる。

それは神父からしてみれば最大の間隙になり、神父は右手に紫色のオーラを込めて隙だ



らけな明悟に向かつて殴る。

明悟は木々を薙ぎ倒しながら吹き飛ばされてそのまま気絶する。

バーニングフォームの強さを間近で見ても一番その姿の驚異を知っている天元が最初に駆け寄り、他の柱達も人間相手のカナエがやりにくく一度撤退するために明悟の近くによる。

「姉さん、私よ！しのぶよ！思い出して！」

「知らない、家族なんて記憶にない！」

カナエは冷徹にしにのぶにそう言つて蹴り飛ばす。

しのぶはゴロゴロと転がり、まだカナエに向かいに行くが義勇がそれを止める。

「胡蝶、今は一先ず退散だ！」

「離して、姉さんがそこにいるのよ!？」

「今行つても犬死だ！」

言葉足らずな義勇だったが、必要な言葉をしのぶに言い、何とか止める。

そして、浅倉と戦つてた士も浅倉を一先ず吹き飛ばして明悟達の方に行く。

「おい、一先ずは逃げるぞ」

「だから、誰だよお前は!？」

「詳しい話は後だ」

カナエとまだまだ暴れたりない浅倉が猛スピードでやってくる。士は灰色のオーロラを出して、全員がその場から逃げる。

空を切るカナエと浅倉の攻撃にカナエはすぐに神父の元へ行き、浅倉は暴れたりしないのか振り回してた。

「なんだ、折角面白くなってたのに逃げるのか、くそが！」

「逃がしてしまい申し訳ありませんでした。〃ロベルト志島様〃」

神父・・・志島は元の人間の姿に戻る。

「まあ良いでしょう。津上明悟はあの様ですし、鬼殺隊とかは楽勝なようですしね」  
嗤う志島に浅倉が変身を解いて近づく。

「おい、また戦えるんだろうな？」

「勿論ですよ。私が貴方に戦いを提供して貴方は私を守ると決めてる。だからそのデキを貴方の記憶を元に作ったのですから・・・」

「そうか、なら良い」

笑い会う浅倉と志島。

カナエはそんな2人を黙って見ていた。

《《ダミードーパント》》ロベルト志島

《《仮面ライダー王蛇》》浅倉威

《元花柱》 胡蝶カナエ

《仮面ライダーディケイド》 門矢士

突然現れた4人の存在。

彼らが一体何をもたらすのか、そして明悟はカナエを救い出せるのか、まだそれは誰にも分からなかった。

## 大正ビギンズ 仮面ライダーアギト

この世に世界は数多存在する。

例えば、もしもここにいる柱が誰か死んだり、負傷で引退したり、また柱が違う人間だったり、そもそも鬼がいない世界だったり、様々な世界が無数にある。

そんな世界を全て手に入れようとしたのが「大ショッカー」と呼ばれた組織だ。

ソイツ等はまあ俺と仲間達が壊滅させたが倒しても倒してもゴキブリのようにまた出てくる奴等で死者の蘇生すらも出来た。

そんな中で甦ったのが、《ダミードーパント》のロベルト志島と《王蛇》の浅倉威だ。ショッカーは志島ではなく《ダミードーパント》の力が欲しかったようだが、あの力を最も引き出せるのはロベルト志島だけで一人だと戦闘に関してはあまりにも弱すぎるので殺し合い位しか人としての興味が浅倉と一緒に甦った。

ここにいる海東は盗むのが得意で志島自身は小物で取るに足らない男だったからダミードーパントになるのに必要な《ガイアメモリ》・・・お前らも見たあの小さくて腕に挿したヤツだ。それを盗みに行ったんだが、このへっぽこが変身する前に浅倉にボコボコにされて前に見て倒すのに難儀した俺の偽物の記憶をコピーされて、アイツらは

シヨツカーすらも裏切つてあちこちの世界へ逃げた。俺の偽物の力を使つてな。

《ダミー》つてのはあくまでも模倣。

だから、記憶にあつた偽物の力よりもつと自由に扱つてる。浅倉に変身させたり、あの女隊士を別の世界から呼び寄せたりな。

俺達はあの2人を倒すためにこの世界に来た。

言い忘れてたがこの服は俺が色んな世界に行くとその世界に与えられた役割と云うか自動的になつちまうから、文句は言うな。それが証拠に名簿に名前があるだろ。



産屋敷のある部屋で朝から突然現れた隠の服をしてる門矢士と海東大樹の説明を明悟を除いた柱と何名かの隠と当主の耀哉、そして轆轤と零余子が聞いていた。

士のスケールのデカイ話に混乱が普通の人間だと起こるが突然現れた存在や甦ったカナエなどの説明が否定すると出来なくなるので信じるしかなかった。

実際に士と大樹の名前は隠が隊士に隊服を作るのに必要な身体的特徴を記した物を

纏めた名簿に知らないうちにあつた。

「コレが俺達の話の全てだ。まあ大体で良いから理解しろ」

士の中々に無礼な姿勢は明悟以上である。そもそも明悟は敵とか親友の耀哉以外には真面目であり、士とは色んな意味で正反対である。

「なるほど、つまりその志島と言う男を倒せば良いのだな？」

「そう言う事だ」

さっぱりと豪快な性格の杏寿郎が元気よく答える。

「皆も宜しく頼むね」

今回の事件をめんどくささせて尚且つ記憶を「盗まれた」「大樹が笑顔で言うが、全員が目付きが鋭くなる。勿論、士でもある。

「分かった。鬼殺隊は君達2人に協力するよ。但し、終わったらどうなる？」

「別の世界に行く。この世界の厄介事はこの世界のライダーがやるべきだしな」

士の言葉に耀哉や他の柱も少しだけ安堵した。

と言うのも今まで何百人ではすまないほどに無惨を倒すのに生涯を掛けて散っていった命の数々が突然現れた異世界の人間に倒されてた何のために数多の命が消えていったのかわからない。

だから、彼らは安堵した。

それに士もやるのはあくまでも手助けかシヨツカー絡みの事だけしか目的がない。

以前、王になりたいライダーを結果的に助けていたのは浅倉等と言った悪人にしないようにするために、ソイツは魔王になる運命を自分で切り開こうとし続けている。

故に士はこの世界の厄介事を解決しようなどは考えていない。

あくまでも自分は「通りすぎる」「だけしか出来ないし、それ以上はやる気はない。

「ライダー?」

耀哉が士から出た気になる単語を言う。

「どの世界にもいる・・・バカの事さ。自分が傷ついても立ち上がって誰かの為に戦う。その時はいつも誰かの自由が理不尽に奪われる時には誰よりも戦って傷つくヤツらの事だ」

「なら、明悟の事だね」

「なぜそう分かる?」

「私の知ってる人間の中で中で彼は誰よりもバカで誰よりも立ち上がる人間だからね」

穏やかな声で話す耀哉。

「お館様、その津上さんは今、蝶屋敷で眠ったままです」

「ありがとうしのぶ。けど大丈夫だよ、明悟は絶対に立ち上がるさ。明悟ほど常識を知らない人間はいない。・・・気にしてる事をツケツケと何気ない声で言っって相手を怒ら

せたり、地雷を平気で踏み抜いたり、しかも全く気付いてないから悪意が無いってのがまた腹立つし、人付き合いが下手な上に頑固だからすぐ謝らないし、食べるのが好きだから店の人と仲良くなるのをよりによって食べるのが難儀な私に話すし・・・お陰でなんどお腹が空いたか・・・更に疲れたからと言って輝利哉やひなき達を出汁に使って休むわ、あまねの本を子供達に朗読して変な趣味を発現させるわ、明悟の常識の無さとあの性格になんど心が折られたか分からないよ・・・けどだからこそなんだけど、絶対に明悟は起きてくる。

起きて「遅れてごめん」って言つて「菓子織」でも渡してそこら辺の井戸端会議みたいに気軽に話に加わつて、途中からなのになにすぐに理解して、またいつものように戦つて帰ってくる。だから私は正直に言つて「明悟の心配」だけは微塵の欠片もしていない・・・本当にあの性格やらなんやらを直して欲しいよ・・・いやわりと本気で」罵倒してるのかそれとも賞賛してるのか分からない事を言い始める耀哉に全員がドーン引きしていた。

だが、明悟が立ち上がる事を当たり前のように言う耀哉に全員が誰も知らない2人だけの「絆」友情が存在してるのだと認識した。

「なるほど、どうやら想像以上にタフなヤツのようだな」

「まあ、私の親友だからね・・・明悟の事はどうでも良いとして、これからをどう対策す



るかを考えよう」

わりと酷い事を平気で言う耀哉はすぐに志島と浅倉、カナエの対策を全員で練る。



1人の赤ん坊が産まれた。

だが、その赤ん坊はとても病弱で産声を上げなかった。死んだと周りから思われたが、その子は産声を上げて生きた。

誰もが奇跡と信じた。

しかし、その子は苦難の人生にいた。

とても病弱で長くは生きられなかった。

善良な医者がその男を治そうとしたが治るところか悪化し、男は痲癩を起こして医者  
を殺した。

だが、医者が死んでからやつと効果は現れるようになった。ただし、日の元へは出ら

れなかった。

そして男は鬼舞辻無惨となった。

病室で寝ている明悟の深層心理にそんな事実が流れる。

明悟は暗闇の深層心理の中においてそれを見ていた。

最初は邪悪なんていなかった。

1人の人間が必死に生きようと抗っていた。

多くの人間がそれを手伝った。

だが彼にとってはそれが当たり前になり、そして《過程》と言う意思を無視して《結果》と言う物だけに執着していった。

明悟は彼がどんな存在なのか理解できた。

《完全に近い生物》でもなければ《鬼》とかそう言う者と言うよりは自分よりも必死で生きてる人間に《嫉妬》して痲癩を起こしてるだけの《子供》だ。

「そう言う事か・・・」

「彼が分かったのですか？」

明悟は後ろから聞こえた声になり、後ろを向くと白い服の男が立っていた。

「あんたはこの前の」

「覚えて下さり、ありがとうございます」

頭を下げる男に明悟はアギトの超能力でその男が何者なのか大体だが理解できた。

「貴方は・・・アギトそのものなのか？」

「そうとも言えますし、違うとも言えます」

白い服の男は空間に座った。

そこには椅子なんて物はないのにまるで椅子に座ってるかのように優雅に座っていた。

「君も出来ませよ」

明悟は男の言葉に従い、目の前に座る。

そこには確かに椅子があった。

柔らかくまるでソファアに座っている感覚だった。

明悟は不気味に思い、見えないのに存在する椅子を触る。

「心配しなくても構いませんよ。確かにソファアは存在し、そしてそれは実は人間とか他の生命だったとかって気分の悪い事にはなりません。貴方がソファアを望む限り」

「・・・ここは何処なんだ？」

「貴方の深層心理の領域で《無意識の領域》とも呼ばれる場所です。私は貴方をアギトにした者で《火のエル》とも呼んで下さい」

「エル・・・色々と聞きたいことはたくさんある」

「では一つずつ答えますよ」

太古の昔、闇がいた。

彼はこの星を作り、そして様々な生命を作った。

この私、《火のエル》もその一人です。

彼は私と同等の力を持つ、様々な存在《エルロード》を先に作り、《ロード》と呼ばれる生命を造り、彼らの姿を基本にこの世の《動植物》を造り上げた。

そして自分に似た《人間》を造り出した。

《人間》は《動植物》を食べねば生きることさえも出来ない、《ロード》達は人間よりも先に造られたのに《人間》以下と言う事実嫉妬し、そして人間を家畜のように扱おうとした。

《人間》は闇に姿を似ているように造られた為に傲慢になり、《人間》と《ロード》は互いに互いを下等な物と見下した。

そして長い戦争になった。

私は《ロード》に圧倒的に殺されてる《人間》に同情して《人間》の味方になった。

そして私と人間の間の存在の《巨人》と呼ばれる生命が出来た。

《巨人》と言うのは巨大な人間と言う意味ではなく、巨大なる力も持った人間です。

40年以上に渡る戦争は《エルロード》達が起こした大洪水によって終結しようとしませんでした。

全ての生命を根絶やしにして・・・だが闇はロード達の“人間と何ら変わらない行動”を叱責し、この世の全ての動植物のつがい一組を船に乗せて助けた。

これにより、1度世界は滅んだ。

《巨人》も消えた。

戦争が終わり、闇は《巨人》を造った私を殺しそうとした。

咄嗟に私は持てる力の全てを使い、時空を移動して約1000年以上前のこの国に飛びました。

ギリギリ体を透明にも出来て気配も消して動けたので大騒ぎになることもなく、この国で誰にも気づかれずに療養しながら、人の暮らしを見てました。

そして死にかけの無惨を見て、記憶を見て私は彼が不憫に思い、力を渡しました。

しかし、傷がまだ深かった私の力はかなり衰えていて、私1人の力では完全に治す事は出来なかつたので、彼を治そうとしていた医者薬を全て飲めば人間になれるように調整する事は出来たからやった。

ただ、無惨は全ての薬を飲む前に癩癩を起こして医者を殺した。

薬を全て飲んでいけば完全に人間になるように調整した為に無惨の中にある私の力はそれまでの医者薬の薬に対応しそして無惨を守るために《アギトとは異なる進化》をしてしまい、無惨は鬼になりました。

――――



明悟は愕然とした。

想像以上と言いやうがないほどの壮大な話だ。

無惨と鬼殺隊の1000年に渡る物語以上に壮大な人類史であり、神話であった。

「想像以上だな」

「混乱してますね」

「混乱するなつて方が無理だよ……これ以上の話はパンクするから絞った言うけど……」

その闇つてのが無惨を殺そうとしない理由はなんなんだ？」

「それは理由があり、私も無惨が生まれてすぐに彼なら干渉して人間を守ると思っていました。調べてると彼は今、自分で自分を封印してます。海の底に十字架の棺を突き立ててそこで眠っています。彼が自分から出るか、人間の手によって開けられないと彼は動きません」

「人間の手で？」

「私が見つけて助けて貰おうとしましたが触れることも出来ませんでした。恐らく私人間では無いからでしょう。アギトである貴方や芦原轆轤や氷川零余子が上げようとしても無理でしょう」

「海の底にある・・・柱ならば・・・」

「海底一万メートル下にあり、柱とかそう言う問題ではなく人間だと水圧でぺしゃんこになります」

「・・・闇は無理だとして《ロード》は？」

「先の戦争では彼ら自身も問題でしたので誰も介入しないでしよう。そもそも創造主の闇が寝ているときに下手な事をやっつては今度こそ殺されますからね」

「・・・さっきの話聞くに、無惨は俺と同じアギトで良いのか？」

「いえ、厳密には違います。元となる力の根源は同じですが無惨はアギトとは違った進化の遺物であり、怪物でもある。しかし、まあ一緒の存在と捉えても構わないほどに似ています」

「・・・無惨は何をしようとしているか分かるのか？」

「彼は《青い彼岸花》を手に入れようとしています、それは永遠に不可能でしょう」

「《青い彼岸花》ってのが分からないから、その説明も含めて貰って教えてくれ」

「《青い彼岸花》と言うのは1年に数回だけ日中のみに咲く花で、本来の彼岸花と違う色

なのは大気中にある太古の昔の先の戦争時に於ける私の力の残り香のような物が終結して出来た幻の花です。あれを煎じて飲めばアギトの力は更に強化され、無惨は完全に地球上で唯一無二の無敵になるでしょう」

冷や汗が出ると同時に安心した。

日中ならばどんな鬼でも不可能であり、絶対に摘まれはしない。人間の協力者が入れれば別だが、ここまで痕跡を残さない無惨がわざわざ残す可能性が高いのをやるとは思えない。その点から無惨の目的はまだ大丈夫なのだと安心した。

「それは人間の手で作れないのか？」

「《青い彼岸花》そのものの種があれば可能ですよ。それに無惨もこれを造れます」

「何!？」

「彼の血を普通の彼岸花にかければ良いんです。ただし、100年は最低でもかかりま  
すし、花は枯れてもかけ続けないとなりません。彼の性格では無理ですね」

枯れても血を与え続けないと《青い彼岸花》にならないとは何とも気の遠くなる道だと明悟はこれしか方法がないならば問題は無いと思つた。

「アギトの血でも出来ます。時間は同じくらい掛かりますが・・・」

「最後の質問なんだけど、俺は何処から来たんだ？」

明悟は自分の耀哉と会う前の事を尋ねる。



それでどうなるかは関係ない。自分は自分だと確り認識しているが、鬼とアギトの関係を知り、いずれ自分もまた無惨に近い存在になるかもしれないと言う恐怖があった。

「申し訳ないですが、知りません」

「知らない?・・・嘘だろ?」

「私が貴方に出会ったのは、11年前。君が産屋敷耀哉と会う1日前だ。森の中で倒れてる君に出会った。手は血だらけで飢餓状態の君に会った。私には2つの選択があった。このまま知らん振りをするか、それとも命を捨てて助けるかの2つでした。無惨の件があり、助ける事に躊躇しましたが助けました。君のそれより前の記憶は完全にかつた。書物で例えるならば記憶喪失になると必ずある《破つたような後》すらない。しかし、昨日今日生まれた生命でもない。君が何者なのか私ですら把握できない」

エルから言われた内容は明悟の予想よりも斜め上に行っていた。誰にも自分の存在が分からない。いや存在は分かるがこの生まれでどこで生きてたかまるで分からない。

「君達には謝つても謝りきれない。私が無惨に同情なぞしなければ誰も不幸にならなかった。私が全ての元凶なんだ」

エルは深く後悔していた。

全てがこのエルが無惨に同情したことから始まった。

しかし、明悟はそれに対して怒りはなかった。

「平穩や平和は目指す人の意志が重要。人の為に何かをしたい良心、悪事は赦さない矜持、自信と責任に溢れる誇り、苦難に立ち向かう勇氣と言った《光輝の意志》が必要なんだ。持つていても平穩や平和には必ずたどり着けるなんて甘い世界じゃない。しかし、それらを成した者は皆このような《光輝の意志》を持つている。貴方にはそれを感じる。だから俺は貴方を赦す。始まりが例え苦難に満ちた始まりだとしてもそれが人を苦難に貶める免罪符にはならない。無惨は俺が倒す。例えそれで相打ちになつたとしても絶対に倒す。それが俺の選んだ道だ」

「津上明悟……」

「覚悟は出来てる。そして俺には夢がある。カナエは鬼と人が共に歩める世界を目指そうとした。そして轆轤や零余子のようにアギトに目覚めれば助けられる鬼が居るのも理解できた。今、カナエが操られて鬼の味方になつて。俺は倒すのに……躊躇してないんだ。愛してるのに大好きなのに、大事な人なのに心が何も無かつたかのように冷静なんだ……俺は狂つてるのか？」

目に涙を浮かべる明悟。

愛する人を倒さなくてはいけない。葛藤や躊躇するのが普通で覚悟していてもそれは起こるが明悟には無かつた。何故なのか明悟には理解出来なかつた。

故に明悟は自身はとつくに鬼のような《怪人》なのではないのかと今、苦悩している。「それは貴方自身が見つけないと意味がない物です……貴方は私を赦してくれた、しかし罰が無いのではなく、罰が少しだけ緩くなっただけです。私は貴方の為にこの世界で生きます。もうこの深層心理に貴方は永遠にこれないでしょうからお別れです。しかし私は常に貴方達を信じ続けます」

エルは別れの言葉を言う。

光に包まれて明悟は目を覚ます。

1人残されたエルが呟く。

「《光輝の意志》か……津上明悟……君の中にあるその意志は人を導くだろう。彼や無惨のような一方的なものでなく共に歩き、共に学び、共に悲しみ、共に怒り、共に喜び、共に楽しむ。君はアギトで無惨と同じ異形だ。しかし、君はこの世の誰よりも素晴らしい《人間》だ」

エルの顔は憑き物が落ちた顔をした爽やかな物だった。彼は自分を永遠に罰するだろう。無惨を造った罪を償うために、そして彼は永遠に人を愛するだろう。津上明悟と共に……

●●●  
明悟は目を覚ました。

そこは自分が1週間も来なかった蝶屋敷の柱専用の個人病室だった。

「起きたのですね」

突然の声に明悟は頭を覚醒させて声の方向を見るとしのぶが病室の明悟が寝ている唯一のベッドの横に置かれてる花を変えていた。

「……どれくらい、寝てた？」

「半日であの後すぐ……ついさっきまで会議が行われていて、3時間程の休憩を挟む事になったので戻ってきたんです」

「そう……」

明悟は体を起こす。

傷だらけで包帯が体や頭に巻かれていて痛むが1度座ると楽になった。

「では、私はこれで……」

しのぶは立ち去ろうとする。

そのまま去れば明悟にとっては幸運だろう。

カナエの事を根掘り葉掘り聞かれても何も答えられないからだ。

しかし、それは逃げである。

「待って、しのぶちゃん！」

明悟はしのぶを呼び止める。

しのぶも明悟の言葉を素直に聞いて止まる。

「なんですか？」

「俺と・・・君の姉さんの事を話したいんだ」

しのぶは静かに黙って、明悟の隣に座る。

「話してください。姉さんとの事を」

しのぶに言われ、明悟は深呼吸してから話始める。

明悟はしのぶにありのままを話した。

何時であつて、そして明悟とカナエの思い出を話した。喧嘩したこと、互いに頑固な所、共に戦つた事、そして愛し合つた事、子供ができて幸せの絶頂に居たこと、全てを話した。

「・・・これが俺と君の姉さんとの全てだ。カナエが死んだ時、俺は別の任務に就いていた。訃報を受けて頭が真っ白になって、何も考えたくなくて俺は・・・1人任務にもやらずに逃げて逃げて、酒を飲んで倒れて飲んで倒れてを繰り返して1ヶ月後にやつと

落ち着く事が出来て、任務で何もかもをぶつけてを繰り返した・・・それで4年経って今だ・・・俺のせいだ。もつと冷静になれば良かった。安易に子供を作って、カナエの意思をネジ負けても休ませればこうならなかった。カナエの不調の元凶は俺だ・・・俺がカナエを殺したんだ」

「違います・・・」

明悟の懺悔にしのぶが異論を示す。

「姉さんを殺したのは鬼で上弦の弐で津上さんじゃない。姉さんは貴方を愛してた・・・貴方じゃない。私はもう行きますね」

しのぶは立ち上がり、部屋を出ようとする。

「君には・・・君達は俺を恨む権利がある!」

明悟の叫びをしのぶは聞くが彼女は部屋を出た。

明悟は、立ち上がる。

急いで彼女を追い掛けたかった。

自分は逃げた。

逃げて遺族である蝶屋敷の皆に真実を隠して何も知らないふりをした。触れられて欲しく無かったからだ。しかしそうもいかない。カナエは蝶屋敷皆の姉で家族。秘密はあるものだし、隠し事はある。

しかし、死者となつては出来ない。

だから明悟にはそれを話す責任がある。

何故ならそれは遺族の権利だからである。

フラフラになりながらもしのぶを探しに部屋を出る明悟。

千鳥足で、前は霞んでいるが見つめて話したい一心でしのぶを探す。

多分、自室にいたいと思ひ、明悟はしのぶの部屋まで歩く。

そして日照りの良い彼女の自室の襖を開けると、しのぶは箱を取り出していた。

突然、現れた明悟に目を丸くするしのぶ。

「津上さん、まだ安静にしてないよー」

「ごめん……それは？」

明悟は取り敢えず、話の種になりそうな箱の事を尋ねる。

「これは、姉さんからの貴方への贈り物です。遺品整理の時に見つけました。《愛する人へ》と書いてあつて私も他の子も誰もこの中身を見たことも読んだこともありません……私は貴方が憎いです。確かに殺したのは鬼だし、貴方を恨むのは筋違いも甚だしい。けど姉さんの強さを知つてたから、それを奪つた貴方を《許せないんです》……すみません」

涙の籠つた目で睨むともすがるような目とも違う目を向けるしのぶ。

彼女もまた明悟と同じようにカナエの死から立ち直れていない。

「これは姉さんからの物です。見てあげて下さい……」

しのぶは明悟に箱を渡す。

そしてそのまま立ち去ろうとするが、明悟はしのぶの手を掴む。

「……一緒に見よう。カナエの形見だ」

「……良いんですか？」

「……頼む」

しのぶは無言で開いていた部屋の扉を閉めた。

明悟は座り、しのぶはその隣に座って彼らは箱を開けた。

中には3つの物が入ってあった。

桜色の2つの蝶の髪止めと手紙。

明悟は手紙を手に取り、開く。

しのぶは横から覗き見る。

その手紙はカナエから明悟への遺書だった。

『明悟さんへ』

これを読んでも事は私は死んだのでしよう。お腹の子も死んだのかそれとも産んだ後に死んだのか、または一緒に生きて私が先に寿命を迎えたのかわかりませんが明悟さ



んが読んでると思います。私の人生は辛い事がたくさんありました。親は鬼に殺されて辛かった。しのぶには戦いを止めて欲しくて私の代わりにお婆ちゃんになるまで生きてほしい。私はどうなっても良かった。貴方に会うまでは、変に頑固で子供みたいに味の好みに煩いし、1人で勝手に居なくなつて勝手に成果だけ上げて、最初は嫌いでした。けど共に戦つて貴方はただの不器用で真っ直ぐな人なんだつてわかつて、無理矢理繋がった時に一緒に成功して嬉しかった。下弦の肆の戦鬪で私が泣いた時に貴方はその涙を認めてくれた。貴方は私の夢や感情を否定しなかった。それが何よりも嬉しくて勇気が出た。柱になつた後の宴会で大喧嘩した時に恥ずかしい事を言い合つて互いに意地を張つて貴方がやられて4ヶ月も寝込んだ時は死ぬほど怖かった。その時にやっと気づいてそして切なくなつたんです。あの時の接吻は起きなかつたらもう二度と会わない為の物でした。けど目覚めて・・・消え入りそうに恥ずかしくなつたけど目覚めた事が嬉しかった。私は貴方との初夜を何よりも覚えてますよ。熱くて私も貴方も声を上げて初めてだから痛かつたけど繋がつてる事に幸せを感じて、私の爪が背中に食い込んだり、肩の肉を噛んだりしたのはごめんさい。無我夢中で分からなかつたの、けど貴方は笑つて赦してくれた・・・もしもこの子と一緒に死んじゃつたら貴方は絶対に自分を恨むでしょう。はつきり言つてそれは私をバカにしています。私がああ時繋がり、この子を授かつたのは私の意思です。貴方だけの責任じゃない。これに

関して誰も口を挟ませない。それがしのぶでも絶対にさせない……明悟さん、私は貴方と出会えて幸せでした。一緒に居れて幸せでした。しのぶに貴方を紹介したい。しのぶなら私達の事を認めてくれるもの、だってしのぶは何時も怒った顔をするけど私が本当にやりたくてやった事は笑ってくれるもの……出来ればこの手紙は明悟さんと笑って読みたいなあ。ただの気のやり過ぎみたいな感じで笑い話にしたい。もしも無理なら、明悟さんは生きて下さい。生きて生きてお祖父さんになつてから来て下さいね……ただ、私以外の人とはあんまり仲良くなつて欲しくないなあ。あまね様とは特に！私をあまね様とは違つてガツガツ行くような人ですけど負けてもないですからね！明悟さんは私の旦那なんですから……やっぱり忘れて下さい。死人に振り回される人生を歩いてください……明悟さんのやりたい事をやって必死に生きて、一緒に入つてる髪止めは私との思い出です。持つててくれますか？もしも要らないなら、埋めてください。あの世でそれをつけて待つてますから

貴方の妻 津上カナエより』

明悟は泣いていた。

遺書には違いないけど、彼女は死んでもなお自分を赦してくれた。

優しい彼女に泣いた。

芯の強い彼女に泣いた。

明悟は彼女に感謝した。

「何だよ……先に死んで……ごめん……ごめん、俺は君を護れなかった……畜生……畜生!!!」

慟哭する明悟。

しのぶも涙を流していた。

カナエの子供を宿した母親としての覚悟はしのぶの中にあつた明悟への恨みを消していた。

涙を拭いて立ち上がるしのぶ。

明悟も拭いて立ち上がる。

深呼吸をして明悟は髪止めを取り、握り締める。

「カナエ……今度は絶対に君を守る……でないと旦那失格だもんな」  
「隊服は部屋にあるので、先に行つてますよ……」 // 明悟義兄さん //

しのぶはそう言つてさっさと先に行つた。

明悟は部屋に戻り、服を着る。

鬼から身を守るために特殊な繊維で作られた隊服を着て、耀哉からの贈り物のコートを着て、あまねからの贈り物であるハットに蝶の髪止めをつける。

互いに向かい合うカナエの髪型のような付け方ではなく、片方に二羽とも寄り添うよ

うな付け方をして明悟はそれを被る。

明悟は幸運な人生を送った。

耀哉は傷だらけで倒れてた明悟を助けてくれた。

その良心がコートになり、優しさが巡る。

あまねは地雷を踏みまくり、侮辱した明悟を叱ってくれた。

その矜持がハットになり、誇りを宿させる。

カナエは一人孤独な明悟に寄り添ってくれた。

その愛が髪止めになり、勇気をくれる。

明悟の人生は幸運で包まれている。

それは掛け換えのない明悟が歩んできた生き方。

《人生》の賜物である。

故に明悟は生きる。

彼等の《意思》と《夢》を守り続ける為に彼は前に進むのである。

明悟は産屋敷に行く途中、芋長に寄り、何時ものように駄菓子を買った。産屋敷につくと隠や隊士が驚いた顔をしながら明悟を見る。

そして明悟は会議をやつてる部屋に入る。

他の面々を驚いた顔をしていたり、当然だと言うような顔をしていたり、様々な表情を明悟に向ける。

「遅くなつてごめん・・・続けて」

耀哉の言つた通りだった。

本当に戻つてきてすんなりと話に入つてきた事に耀哉以外の全員、轆轤や零余子や土まで・・・起きたことを知っていたしのぶはともかく、全員が耀哉と明悟の固い絆に驚愕した。

「明悟・・・おかえり」

「ただいま」

「さあ・・・反撃の準備だ！」



会議が終わり、もうすぐ日が沈む頃、明悟は一人夕焼けを見ていた。

「よお、津上だったか？」

「土君だったつよね？」

「ああ、合ってる……夜の戦いに備えて寝ないのか？」

「眠れないんだ……」

「そうか……」

「ねえ、仮面ライダーって何なの？」

明悟は土に藤の山から気になってた事を聞いた。

「自由の使者だ。人の自由が脅かされると突風のように突然現れ、嵐のように戦い、そよ風のように人知れずに去っていく……正義とか大義とかの為に戦わない戦士だ」

「なるほど、仮面ライダーか……」

「産屋敷が言ってたがまるでお前のようだと言ってた」

「耀哉のやつ……じゃ、俺は《仮面ライダーアギト》とでも名乗れば良いのかな？」

「好きにしろ、誰かの居場所を守るために戦うなら、誰も皆、仮面ライダーだ」

士の言葉に明悟は納得した。

自分がそんな大層な物だとは明悟は思っていないが、何も無い自分も成れるならば成りたい《仮面ライダー》に

「何か悩んでるな・・・教えろ」

「・・・いい助言でも出せる？」

「時と場合によるな」

「・・・カナエと戦うのに迷いがないんだ。迷えないしね。それが良いのかどうかも分からない。どうすれば良いのか分からないんだ」

「迷わなくていいんじゃないか？」

明悟の吐露に士が答える。

明悟は士を見る。

「ある男がいた。そいつには仲間がいた赤鬼や青い亀や黄色い熊や紫の龍だ。このまま戦い続けたら消えるかも知れない時にそいつは迷わなかった。迷ってない自分が分からなくて、そいつらを自分から離れさせて全部をどうにかしようとした」

「それからどうなったの？」

「そいつらは最後まで一緒に戦ったさ・・・今を守るために」

「今を・・・」

「お前が守りたいのは何だ？」

士の問いに明悟は考える。この問題を解くにヒントが出て、明悟は漸く自分がなぜ躊躇してないのか理解できた。

彼女の《夢》を守りたいからだ。

納得いく答えだった。

それが分かった事に明悟は嬉しかった。

「昔、とある少年が死者を甦らせた。ある組織がそれを悪用した。ただ、その組織は俺や仲間達の死者への無念から出てきた。前の世代と激突した。ただそれでも俺達は死んだ奴らの《意思》を受け継ぐ。そう俺達は決めたんだ」

士の話した事は明悟にはあまり理解出来なかった。だが死んだ大切な人の《意思》を受け継ぐ事は理解できた。

「俺には《夢》がある。無惨を倒して皆が笑い和える日を作ることだ」

「それがお前の《夢》か・・・綺麗事では片付かないのは知っててか・・・呪いにもなるが良いのか？」

「覚悟の上だ・・・」

明悟の目に宿る意志は固く、それは何があっても絶対に折れないと言う目付きだっ



た。

「成る程な。せいぜいくたばらないようにな」

士はそう言つてさっさと寝に戻つた。

明悟はそのまま夕日を見る。

それは優しく明悟とカナエの無事を祈つて明日もまた会おうと言う、ある種の別れの  
ような切なさを明悟は感じていた。

## 大正ビギンズ 怪物・浅倉威

完全に燃やされて使い物にならなくなった藤の山以外に鬼殺隊にはもう一つの施設がある。

藤の花が鬼の弱点だと発見される前に鬼殺隊が試験をしてた今はもう使われていない鉱山がある。

そこに鬼達を誘き出す作戦をする事になった。

明悟は前の日にエルから教えてもらった事は全て話した。

信用は出来ない。

それは明悟からの情報だからと云うわけではなく、夢とかそんなあやふやな物での情報など信用しないしまともに相手にもしない。

至極当然の反応であり、明悟も余計な気遣いとかそういうのはめんどくさかったのだからありがたかった。

ただ、《青い彼岸花》に関しては、轆轤と零余子が十二鬼月の時に愚痴愚痴言っていたのを聞いていたので、信憑性があつた。

どなり男の実弥とネチネチ妖怪の小芭内がくどくど言っていたが、反論しても他に良

い案が出ないと言うか鬼殺隊のいつものやり方だと後手に回るしかないので先手を打てるこの案よりも良い先手の案が誰にも出せなかったので鬼殺隊は耀哉が主導の元で無惨ごとぶちのめす作戦をする事になった。

まず、何名かの隠や隊士が《青い彼岸花》はとある鉾山にあると言う噂を流す。

朝昼晩関係なく流す。

探してみると言うことは何処かに情報網があると言うこと、それにかすれもすれば飛んで来る。

1000年探してるのだ、飛んで来ないわけがない。

そして柱を中心とした隊士達が鉾山に罠を仕掛けまくる。より首を飛ばすようにより残酷にして恐怖を伝染させる為に罠を作る。

本来の罠の役割は殺すのではなく、あくまでも足止め。殺すを考えると人は心臓だったり、脳だったり、急所を狙うが、止める目的だとそれを考えなくて良い。つまり全身満遍なく狙って足止めして首を飛ばせば良いので、シンプルな落とし穴に下からの銃弾の雨、生き埋め、ありとあらゆる事が出きる。

この罠の大部分は実弥の《経験》に基づいていてどんだけ効果的かなんて説明するまでもない。

●●●  
一方、その頃、無限城では無惨と志島が話し合いをしていた。

浅倉も同席させていて、無惨からすれば浅倉のもつ不気味な気配が自身の臆病な性質と相性が最高と言えば良いのか最悪と言えば良いのか、無心を貫いているが細胞レベルでビビっていて無惨の十八番のパワハラ上司ムーブも全くやってない。

志島もそれゆえに浅倉を近くに置いている。

強大な《アナザーデイケイド》の力があれば勝てるかは不明だが負けはない。

志島には大樹自身の苦戦した記憶を根拠に自信を持っていた。

対する浅倉であるが元々野獣が服を着て動いてると言うのを地で行く人間なので、志島に従う理由は欠片も無いのだが、志島によって作られた本来とは違い鏡が無くても変身できるライダーシステムは浅倉も重宝し、尚且つ無惨との会議の時だけ居るようになると言われて他は完全に自由、おまけに無惨が作り出した何体もの雑魚の鬼を生身で纏めて相手してしかも夜明けになって消えるまでポコポコにするのを毎日楽しんでやってお

り、浅倉としても快感この上無かった。

お陰でこの2、3日で約30人の鬼が浅倉の手によって殺されている。

因みに無惨はこの浅倉の諸行に本気でビビり、志島に会議になる前に何回か浅倉の同席を止めるようにお願いしているほどである。

ここ最近の志島の1日と言うか日の流れはまず朝起きて、歯を磨いて、鳴女に横浜に飛ばしてもらつて洋食の朝ご飯・・・というか喫茶店で朝ご飯を済まして、ブラブラと遊んで、昼ご飯、またブラブラとして夜ご飯を食べてから鳴女に無限城まで飛ばしてもらうという何とも優雅な生活をしていた。

因みに浅倉の飯も志島と同伴である。

無限城だと飯云々以前の問題でまず全員が人しか食べれないので人間である浅倉は志島と同伴して食べた方が楽なのである。

この2人の生活費は全て無惨・・・正確に言えば童磨の信者からの献上代と玉壺が自分の壺で稼いだ金で賄われており、何気に無惨達の金が無くなつてきているが志島と浅倉のコンビに立ち向かうにはそれなりに覚悟があるし、強いのに違いなので表だつた対立はしていない。

現状、囚われてる身のカナエは無限城で座っていた。

考えてるのは、明悟の事である。

記憶そのものがないカナエには明悟が何を言ってるのか分からなかった。なぜ、自分に執着してるのか分からない。

自分の喪われた記憶に一体何があるのかカナエは純粹に疑問に思った。

志島に相談するべきかと考えるが、絶対にこの疑問すら消すとカナエには確信があった。

何故志島がカナエを甦らせたかと言うと明悟対策である。

以前の仮面ライダーとの戦闘でも同じ事をやったが乗り越えられた。志島は甦った時に猛省して、今度は如何に精神を叩き潰すか考えてるときに大樹がやって来て記憶を讀んでアナザーデイケイドの存在をコピー出来た。

そしてこの世界に渡る時に最初のライダーである明悟を知ったので志島は明悟が1番手を出せずに苦しむ事をやった。また以前のように乗り越えてきても自分には最強の力と最凶のライダーが着いており、負ける可能性など考えてもいなかった。

現に先日は吹き飛ばす事に成功していた。

話を戻してカナエは明悟の事を考えていた。

「随分と彼に( )執心だね？」

冷気と共に薄ら笑いを浮かべた童磨がカナエの耳元で至近距離で呟く。

カナエは心臓の脈が早くなるがすぐに呼吸で落ち着く。

「どうして君なんかには彼はご執心なんだ？」

童磨は舐めるような目付きでカナエをジロジロと見て、あろうことか彼女のむき出しの首から頬までを舌で舐めようとする。

カナエは気持ち悪い童磨から素早く離れようとするが肩を抱かれ逃げられなくされ、ベロンと舐められる。

「味も何もかもが平凡なのに……どうして彼は君にご執心なんだ？」

首を傾げる童磨にカナエは一瞬の隙について突き飛ばす。そして舐められた所をかき消すかのようにゴシゴシと手で擦る。

「酷いなあ……良いことを思い付いたあ」

童磨は瞬時にカナエに近づく。

逃げる間もなく、手を捕まれ拘束される。

「君を食べて一心同体になれば彼は俺に執着してくれるかな？」

優しい声で何とも気色悪くえげつない事を言う童磨。

「カナエも反論とか逃げようとかそういう感情全てが通じないと直感するほどに生命として何かが終わっていた。」

「まずは、弱らせてから．．．おい」．．．？」

童磨は突然後ろから聞こえた声に振り向くと、浅倉が立っていた。

「なんだい？人間君」

「ソイツは止めろ、楽しみが減るだろ」

「なんだって？」

「イライラさせるな」

首を傾げる童磨を、浅倉は問答無用で蹴り飛ばす。

カナエは瞬時に童磨からも浅倉からも離れる。

「一体、何を考えてるのか理解できないよ．．．無惨様の協力者だけど．．．俺の邪魔をするなら殺すよ」

無表情で浅倉に言い放つ童磨に浅倉は笑みを浮かべる。

「良いぜ、雑魚をやるのも飽きてきたしな」

「デツキを前に突き出す浅倉。」

ベルトが虚空から現れて腰に装着される。

「変身！」

デツキをベルトに挿して浅倉は王蛇に変身する。

そしてデツキからカードを一枚出して、ペノバイザーに入れる。



《ソードベント》

ベノサーベルを召喚し、構える浅倉。

童磨も扇を構える。

静寂が場を支配し、カナエの緊張の汗が地面に落ちるのを合図に浅倉と童磨が走り合う。

そして武器が交わろうとした瞬間。

「止めろ」

2人の間を斬撃が通り、2人とも止まる。

斬撃が飛んで来た方向を見ると黒死牟が刀を納刀した状態で立っていた。

「止めろ、童磨。客人だ・・・その方も武器を下げよ」

「なんだてめえ、折角盛り上がったのに水を指すんじゃないよ」

「我らの相手は鬼殺隊だ。それを殲滅するまでは止めて戴く。無惨様にとつても志島殿にとつてもこの戦いは不利益ではない」

黒死牟が冷静に答えるが浅倉はお構い無しに近づく。

「関係ねえな、お前が代わりにやってくれるのか？」

「客人、下がる事を進める」

「断る」



威圧を間近で受け止めた黒死牟は浅倉を敵に回すと録な事にならないと直感していた。

去る浅倉に浅倉についていくカナエ。

浅倉が突然カナエの方に目を向ける。

「おい、何だ？」

「何で助けたの？」

「ああ？」

「楽しみが減るって何が？」

カナエに言われて浅倉はさつき話してた事を思い出した。

「お前の男の目がバカに似てんだよ。そういう奴ならお前を生かした方が面白くなる」

浅倉はかつて戦いを止める為に命をかけたライダーを思い出しながら、笑みを浮かべて去る。

カナエは浅倉に言われた事は理解できたし、納得できたが、明悟を自分の男と言われた事に何か疑問を感じながらもまた悩む。



ベンツ!

浅倉は1人夕方の東京の街を歩く。

あの後、雑魚鬼を5体くらい殺したが一向に楽しめずに志島から金は貰ったので気晴らしに歩く。

大正時代の日本人とはあまりにもかけ離れた風貌は人の注目を集めそうな物であるが、野獣のような気配から誰も関わりとうとはしなかった。

そのままふらふらと歩いて人波外れた路地に入り、またふらふらと歩いてるが一向に何も楽しくなくイライラが溜まっていく。そして1人の女性が買物籠を持って歩いていた。

(ああ、もうアイツで良いや)

と後ろから近づくと

女性は突然後ろから感じる気配に振り向くとその気配から浅倉を野獣と錯覚し、尻餅をつく。

浅倉が人間のなりをしてるのがわかると女性は気丈に浅倉に尋ねる。

「な、何ですか、貴方は!？」

「今日は気分が悪い・・・サバか?」

浅倉は買物籠の中にあつたハマチを手に取り、そのまま食べる。

そして吐き出す。

「サバじゃねえ」

ハマチを捨てて浅倉は女性の髪を掴み、ガンガンガンと地面に何回も顔を叩きつける。

女性は悲鳴を上げるが強制的に遮断されて誰にも聞こえない。

鼻の骨は折れ、前歯も折れ、顔面は血だらけになった女性の息も微かになる。

浅倉はそのままもう一度女性を地面に叩き伏せて無防備になった首を踏みつけてへし折る。

グキツ！つと首の骨が折れる音が盛大に聞こえて、女性は死んだ。

イライラの収まらない浅倉はそのまま別の場所に行こうと死体を後にしようとする。

「待てー」

呼び止める声が聞こえて浅倉は苛立ちしながら声の方を向くと炭治郎と善逸と伊之助がいた。

鉾山に鬼を誘き出す作戦で噂を流している最中に3人とも自身の嗅覚と聴覚と触覚でこの殺人を感じとり、現場に来たのだが一足遅かった。

女性は無惨にも殺されている。

息をするかの如く当たり前に殺した浅倉に対して炭治郎が顔面に拳をぶちこむ。

「お前、何でこの人を殺したんだ!? この人が何かやったのか!? 答えろ!」  
炭治郎の怒りの活に浅倉は笑う。

浅倉にとつて殺した理由を考えるのはめんどくさかった。一々そこに理由は無かった。

「なんか理由が必要なのか? お前らみたいなのはバカはいつも理由を着けて安心したがる……何故って聞いたな? 俺が知るか」

炭治郎は浅倉の言っていることが全く理解出来なかつた。

善逸は心の底から怪物な浅倉にビビり、伊之助は自分よりも狂暴で野獣そのものな浅倉に対して武者震いをしていた。

「ふざけるな!」

炭治郎が浅倉に突っ込んでいき、浅倉の頬を殴るが全然効いておらず、殴り返される。炭治郎も間髪入れずに十八番の頭突きを浅倉にやるもこれも見事にやり返されてしかも吹っ飛んでしまう。

「良い頭してんなあ、今度はお前らが楽しませてくれるのか?」

浅倉はデッキを突き出す。

ベルトが腰に装着される。

「変身!」

王蛇になり、3人に近づく。

3人とも変身する情報は明悟から聞かされていたのでそれに関してあまり驚きは無かったが、浅倉のその威圧に緊張が走る。

炭治郎も伊之助も人間とかそういうのは関係なしに刀を抜く。

浅倉も全く気にせずに近づく。

ベンッ！

しかし、突然鳴った琵琶の音により、浅倉は無限城に強制的に返されてしまった。

残った3人は女性の遺体を隠達に任せて、再び任務に戻っていったが、人間に刀を抜いてしまった事は炭治郎にはさうとう重く苦い記憶になり、それと同時に人間なのに変わらない浅倉に対する警戒を無意識に上げた。



無限城では無惨と志島と浅倉そしてカナエや上弦の鬼達が集結していた。

浅倉は折角盛り上がってたのに無理矢理戻されて不機嫌の極みにいたが、志島が食物を出した上にアナザーディケイドの力で一時間程相手をしたのでマシになった。

やった志島本人は戦うのが恐ろしいと感じる小物ではあるが、浅倉がそのまま不機嫌でいると不味いことになりそうだったので仕方なくやった。

「《青い彼岸花》がとある鉱山にあると言う噂が広まっている。だが、鬼殺隊のタンカス共も狙っているらしい。私も一緒に行き、手に入れるからお前達は鬼殺隊を殲滅しろ、必ずだ」

無惨が非常に上機嫌に話してるが志島はそれを見て無惨を真性のアホだと内心思った。

どう見たって罌丸出しであり、志島にしてみれば無惨の目的の完全生物とか太陽を克服するとかの野望はしようもなさすぎて理解できない。

志島からしてみれば夜の方が活動しやすい人間だっているし、無惨の能力があれば永遠に金を使い続けられる上にそれに困る事はない。なんでこんな変に人間臭い野望を抱くのか志島には全く理解出来なかった。

「無惨さん、その鉱山にあると確証はどこにあるのですか？」

「今まで発見出来ず、噂すら手に入らない状況の中でここまで広まっていると言うことは誰かが見て広めると言う事だ。絶対にある。手に入れてやる我が1000年の夢



の為に」

本来の無惨ならば臆病な性質が勝つて絶対に確証を得るまでは行かないが、志島と浅倉の登場による疲労。そして何よりも2人の怪物的な強さに加えて、浅倉の威圧に心底ビビり捲つてる無惨はさっさと完全生物になって2人とカナエを追い出すなり、殺すなりやって安心したかったのでもそこら辺の感覚が鈍っていた。

(こいつ、正真正銘のアホだ)

志島と浅倉が非常に珍しいくらいに意見があつていた。

こうして会議は無惨のワンマン演説で終わった。

志島はこれには反対しようかと思つたが浅倉の戦闘欲求を早くなんとかしないと自分か痛い目に会うのでやることにした。

志島としては金さえ入れれば何処でも良かったし、浅倉の気分晴らしを考えて無惨の方に付いたが、間違いだつたと本気で思った。

最早手遅れなのでこのまま何とかして生き残ろうと志島は持てる知恵の全てを生きる方に傾けていた。

(ああ、こんな事なら向こうのライダーと取り引きするべきだった！そしたら浅倉も何とか出来たかも知れないのに)

志島は自分の短絡的思考を死ぬほど呪つた。

(これで私が完全生物に！流石、私だ。運命は常に自分に良いように巡ってくる)  
無惨は自分の短絡的思考に気づかず、自惚れていた。

## 大正ビギンズ 津上夫妻

噂を流し続けて3日目、鉦山の近くで鬼の目撃情報が増えてきたので全柱と殆どの隊士、そして対鬼専用の弾薬を込めた散弾銃のオート5を持った殆どの隊員がこの戦争に挑む。

殆どと言ったのは他にも任務などあるためである。

それに時たまいる金だけが目的の奴もここにはいない。

明悟は鉦山の中にある広い空間に他の鬼殺隊や柱と一緒にいた。

全員が意気込みをしている。

そこには轆轤や零余子もいたが服装が今までとは違い、隊服になっていた。

悪鬼滅殺を思想とする隊服を元鬼である轆轤達が着るのは大変問題があったが、杏寿郎と明悟の説得により何とかなった。

轆轤は隊服に来ていた着物を羽織って他の隊士でも良くある格好になっていたが、零余子は違っていて、蜜璃やカナヲのようなスカートに着物を羽織っていたがスカートが恥ずかしくて赤面している。

最初は渋っていたが、隊服担当のゲスメガネに説得されて着てしまった。

浅はかだったと心から自分をそう思っていた。

「恥ずかしい〜」

「大丈夫ですよ、氷川さん。私やカナヲちゃんだってほら！」

蜜璃が零余子を慰めてるが、

（あんたみたいな恥女と一緒にすんな！）

と内心毒づいていた。

明悟はその光景を見てほっとくことにした。

精神を集中していると士がやってくる。

「気負いすぎでないか？」

「大丈夫だよ。君は？」

「こういった事は何回も経験してるからな」

「俺は初めてだな。ここまで大勢と一緒に戦うのは・・・」

「まあ、頑張るんだな・・・それにこっちにはまだまだ援軍があるから、安心しろ」

「援軍？」

「鬼を潰すなら、桃太郎とか別の鬼が1番だ」

「絵本の中だけじゃないのそれ？」

「まあ待ってろ」

士はそう言つて大樹の元へ行き、何枚かのカードを渡していた。



暫く経ち、空間の中にあつたベルになる。

見張りからの合図で鬼が鉾山に入つてきたのだ。

多くの隊士が瞬時に動く。

轆轤は杏寿郎と共に零余子は炭治郎達と共に行動する。

他の柱も最低2人行動して動いてるが明悟は1人で行動している。

明悟の戦いかたで一緒に行動できて足手まといにならずに済むのは限られて来るので、結果的に1人で行動した方が1番問題なかつたので行動してる。

鉾山を進んでいると、突然あちこちで銃声と大音量の音楽が流れ始める。

罾を張つてる最中に敵を混乱させる為にあちこちに無線電話やら蓄音機をばら蒔いて音を流して混乱させると言う古典的な作戦であり、鉾山のようなところでは中々使える。

この鉾山が藤の山にとって代わられた理由は1つだけであまりにも過酷過ぎて、死人を大量に出しすぎたからである。しかも試験は3日間と圧倒的に少ない時間で行われ

たのもそれに起因している。

もしもここで藤の山と同じ内容で試練をした場合、藤の山が温すぎると言う感覚になるほど過酷だったと記述されている。

明悟はただひたすらカナエを探している。

アギトに導かれるままに自分の求める本能のままに明悟はカナエを探している。

するとカナエが刀を抜いていた。

血糊も血を拭き取った後も無いのでまだ誰も斬っていない事に安堵しつつ、明悟は変身せずにカナエに近づく。

「カナエ」

カナエは明悟に刀を向ける。

明悟も抜こうとするが、カナエの後ろに志島が現れる。

「この女性は貴方の大切な婚約者でしょ？それを斬るつもりなのですか？」

「志島……俺はカナエ……君を斬る。命をかけて君の思いを受け継ぐ。本当の君はずっと俺の中にいるから、だから全力で君を止める！」

刀を抜く明悟。

その目には決意と覚悟が宿っていた。

光輝く白銀の刃のような決意が目に宿っていた。

志島はその姿に怯む。

「この男を殺せ！」

そう叫んで志島は消えた。

カナエは刀を抜いて明悟に斬りかかってくるが、明悟はそれを受け流し、斬り返すがカナエも負けておらずにやり返す。

狭い鉢山の通路の中で剣劇をする2人。

刀と刀がぶつかり合う音だけが2人の耳には入ってなかった。

「花の呼吸 伍の型 徒の芍薬」

九連撃の斬撃が明悟を襲うが明悟は何とかそれを全て防ぎきるもカナエは間髪入れずに無防備な腹に回し蹴りをして明悟を吹き飛ばす。

明悟は腹を押さえるがすぐに立ち上がり、カナエと向き合う。

「相変わらず強いね。でも俺だって伊達に君と一緒に戦って来たわけじゃないよ」

カナエは明悟に向かって全力で跳んでくる。

明悟は生身で扱えるアギトの力を全て体に流す。

「見様見真似 花の呼吸 伍の型 徒の芍薬」

明悟はなんと先ほどカナエに喰らわされた徒の芍薬をそのままカナエにやり返す。

カナエは全て防ぎきるが衝撃により吹き飛ばされる。

明悟は呼吸を一切使えない。

しかし、明悟はカナエと誰よりも一緒に戦ってきた。そして明悟にはアギトの力もある。

生身で扱えるアギトの力を最大限に使って明悟はカナエの花の呼吸を模倣したのである。

カナエもまた立ち上がって斬りかかるが、2人の腕は互角だった。

「花の呼吸 参の型 泰山朴」

花の呼吸で最大の技をぶつけ合う。

するとこれまでの連戦が祟ったのか2人の刀が折れる。

カナエはすぐに明悟の顔面をぶん殴り、大外がりをして明悟を倒して馬乗りになって殴り続ける。

「カナ・・カ・・カナエ」

明悟はカナエの肩に手を伸ばすがカナエをその手を振りほどいて、殴り続ける。

「あなたを殺す、それが私の任務だ！」

まるで何かに怯えるように叫びながらカナエは明悟を殴り続ける。

明悟は反撃することなく、それを受け入れてる。

最初にどれだけ意気込みをやってもカナエを殴る気には明悟は更々なく、死ぬことも



出来ないのでカナエの拳を受け入れてた。

「ならやれよ。今度は最後まで付き合うよ」

カナエは明悟の言葉に顔を歪めますが、振り払うように顔を揺さぶって拳を思いつきり引く。

「それはちよつと困るな」

2人とも声の方向を向くと童磨が歩いてきたが普通の雰囲気ではなかった。

何時もよりも更に不気味だった。

「君は俺の物だつて言っただろ？明悟・・・君を殺して良いのは俺だけで食つて良いのも俺だけだ」

童磨のぶつ飛びまくつた言葉に明悟は本気で引いた。

カナエも引いていた。

童磨は自分の扇に冷気を込めていた。

「君は俺の物なんだ・・・浮気は許さないよ」

氷の斬撃が明悟とカナエを襲い、2人の近くの壁や天井が崩壊する。

生き埋めになるかと思いきや2人の足場も崩壊し、下に2人とも落ちる。

恐らく、経年劣化と童磨の強力な血鬼術の併用で崩壊したのだろう。

2人はそのまま地下に流れる川まで落ちていく。

明悟はカナエを守ろうと抱き締めて出来る限りカナエに衝撃がいかないように自分の体を使って守る。

《その時、不思議な事が起こった》

明悟の中にあるアギトの力がカナエの記憶を修復する。

それは明悟とカナエが歩んできた時間だった。

「私の名前は胡蝶カナエ 階級は己です」

「俺は津上明悟 階級は丁だ」

2人が出会い、

「これから〃今日〃をずっと大事にし続けるよ。カナエちゃん」

「お誕生日、おめでとうございます」

友人になり、

「明悟さんも下手ですね」

「君の味覚が狂ってるだけだよ」

喧嘩して、

「……信じてますよ?」

「任せろ、信じてくれ」

共に戦い、

「明悟さんなんて、大嫌い!」

「こつちだつて大嫌いだ!」

下らない事で喧嘩して互いに素直になれず、

「だから、手を離さないで下さいね」

「分かった」

それでも好きあつた2人の記憶。

2人が地下に流れる川に落ちる。

衝撃で2人が離れる。

カナエは記憶を取り戻し、混乱しながらも何とか水面まで上がって息をするが明悟の姿は辺りを見回してもいない。

「明悟さん……明悟さん、明悟さん!……あなた!」

カナエは明悟を探すが明悟はどこにもいない。

水の中を潜り、明悟を探すカナエ。

しかし、鉾山の中で光があまりなく薄暗い所の水の中など見つかるわけがない。何度も水面上上がって息を吸い、カナエはまた潜る作業を繰り返す。

そこには謝りたいと言う感情の他に助けたいと言う感情が確かにあった。

「あなた、どこなの!?!お願い、死なないで」

その純粋な思いが通じたのか、明悟の体からベルトが現れて光を放つ。

カナエはその光を不思議に思い、すぐにそこまで泳いでいくと気絶している明悟が確かにいた。

呼吸による常人を超えた力でカナエは明悟を川辺まで運んでくる。

「あなた、目を覚まして!」

呼び掛けるが明悟は起き上がらない。

彼の胸に耳を当てると心音は聴こえなかった。

カナエはすぐに人工呼吸をする。

水を吐き出すが明悟は起き上がらない。

心臓マツサージをするカナエ。

しかし、彼が目を覚まさない。

「起きて、起きてよ。置き去りにして、いつもあなたはいつもそう、1人で突っ走って勝手に戻ってきて、寂しがり屋のくせに頑固で素直じゃない。お願いだから、死なない

で……死なないでよ、あなた！」

カナエの頬に涙が流れる。

その涙は明悟に落ちる。

するとその涙に応えるかのようにアギトのベルトが光を放つ。

あまりにも強い光にカナエは顔を隠す。

(これは、一体なに?)

光が収まり、カナエが顔から手を退けると明悟が目を開けていた。

「明悟さん……」

「君の夢を見てた。君はいつも川の向こう側にいて行きたくても行けなくて、やっと今日

日は行けたのに今日は君が俺を戻してくれた……やっと一緒の場所に来れた」

「あなたの為なら私は命をかけますよ、だって私は津上カナエ。津上明悟の妻ですもの」

「最高だよ、君はいつだって最高だ」

抱き締め会う2人。

死によつて別れた2人の運命。

しかし、数奇で奇妙な運命によつて今また2人は出会った。

そんな2人の邪魔をするかのように1人の外道が上から盛大な音を立てて落ちてくる。

童磨だ。

凶悪な冷気が流れる川の水すらも凍らせる。

その顔は嫉妬に狂っていた。

「なんで、そいつなんだ！君は俺の物なんだ明悟。君は俺の物なんだ！」

明悟は今までの数々の暴挙の上に身勝手すぎる童磨にキレて立ち上がり、言い返そうとする前にカナエが明悟の前に来る。

「冗談じゃない！彼は私の夫よ！彼の温もりも優しさもわがままも何もかも全て私のよ、指一本触れさせはしない！」

カナエの強烈な一言に一番驚いてるのは明悟である。

ここまで言ってくれるのかと嬉しくなる。

「・・・そうだな・・・童磨。俺はお前の物じゃない。俺は最高の妻のカナエの夫の津上明悟だ！お前が入る余地はない」

明悟の言葉に衝撃を受けた顔をする童磨。

そしてその顔は恐らく童磨の人生で初めてと言えるであろう憤怒の形相になる。

「なら、2人纏めて殺してやる！」

愛しさ余って憎さ1000倍と言ったところだろう。

「死ねえ！」

氷の斬撃が2人を襲う。

明悟はカナエの前に立ち、ベルトを出す。

「あなた？」

「今度こそ、君を守る。だから見ててくれ、《俺の変身！》」

ベルトから強烈な光が放たれて血鬼術で作られた氷の斬撃はかき消される。

そして明悟はアギト・グランドフォームに変身していた。

「これが、俺が隠してた秘密……怖い？」

「いえ……お日様みたいで暖かくて安心します……」

「そっか」

アギトになった明悟の腕を触るカナエ。

明悟はこそばゆいのか恥ずかしいのかなんだかよく分からない感覚が来る。

で、戦闘中であるのにこんな夫婦のイチャツキを見てる童磨はより嫉妬と怒りで自分の中で次々と生まれてくる感情に心も体も追い付いてなかった。

「おい！俺を無視するな！君達なんて俺に掛かれば一瞬で死ぬんだ！どんなに君が強くても刀も持っていない隊士なんて足手まといだらうが！」

「それはどうか？」

明悟は対童磨として一番有効なバーニングフォームに変身し、シャイニングカリバー

を出現させシングルモードにしてカナエに差し出す。

「これを使って、俺は大丈夫だから」

カナエはカリバーを手に持つ。

確かな重みを感じるが重すぎるわけでない。寧ろ何時もの日輪刀よりも軽い、重厚な見た目とは裏腹に大分軽い、強度が心配になるが不思議とカナエはそれの心配はしておらずに安心していた。

絶対に折れないと確信があつた。

「絶対に負けないでくださいよ」

「負けるかよ。君がいるから俺は負けない」

カナエはカリバーを構えて明悟はその前に腰を落として構える。

童磨の血鬼術が2人を襲うが2人はそれに突っ込んでいく。



一方その頃、他の隊士やライダー達はそれぞれ、他の鬼の相手をしていた。

士や大樹は変身して、志島と浅倉と交戦していて、轆轤と杏寿郎は猗窩座と交戦して



おり、零余子や炭治郎達は墮姫や妓夫太郎の兄妹と交戦し、他の柱もそれぞれ上弦の相手をしていたが、誰もまだ無惨と黒死牟の姿を見ていなかった。

「いいぞ、杏寿郎！やはりお前は強いな！」

「君の記憶を知ってる。君は本来ならばもっと強い人間の筈だ。誇りを思い出せ！」

「これが俺だ！」

「煉獄、アイツに言葉は通用しない。気を抜くなよ！」

「芦原もな！」

猗窩座と交戦してる杏寿郎は以前見た記憶の事を言うが届かず、トリニティになって戦ってる轆轤は杏寿郎と共に連携しながら戦っている。

—————

「今度こそ、死ね！くそ女！」

「黙れ女狐！」

零余子と墮姫が争う。

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃・神速」

善逸の超高速の居合いが妓夫太郎の首を狙うが妓夫太郎は後退しながらもそれを受け。

「やられるか！」

「善逸」

無防備になった善逸に向かつて妓夫太郎の鎌が飛ぶが炭治郎がそれを受け止める。

「獣の呼吸 参の牙 喰い裂き」

「血鬼術 跋扈跳梁」

伊之助の攻撃に妓夫太郎は自分の血鬼術で防御し、3人を吹き飛ばすが、同時に鉾山の天井や壁も破壊し、炭治郎達と妓夫太郎達は落石によつて遮られる。

「ちよつとお兄ちゃん、危ないじゃない！」

「ち、やりづれえな」

兄妹はそのまま別の道を進む。

反対側の炭治郎達は息を切らしながらも何とか生き残つてた。

「皆、大丈夫か？」

「問題ないよ」

「へっちやらだぜ！」

「炭治郎、あんたと禰豆子は？」

「大丈夫です！」

「よし、次の道を進むよ」

「お前が仕切るな！」

「うるさい、猪頭」

「先に行くよ」

善逸が喧嘩してる2人を置いて先に行く。

「待て紋逸！」

「ちよつと待つて！」

「善逸、危ないぞ！」

他の3人も善逸を追いかけていく。

寝てる時と普段のギャップに戸惑うが炭治郎は終わったら善逸に問い質そうと心に決めた。

—————

「血鬼術 粉氷り！」

童磨がカナエの肺を潰そうと肺を壊死させる血鬼術を放つが明悟がカナエの前に行き、そのバーニングの力でその血鬼術を蒸発させていた。

そして明悟はそのまま童磨の腹をぶん殴る。

「血鬼術 枯園垂り」

扇に氷を纏わせて斬撃する。

明悟は両手でそれを防ぐも後退する。

しかし、後ろを走ってたカナエが明悟を飛び越えて童磨に斬りかかる。

「花の呼吸 壱の型 飛び花車」

童磨の首めがけてカリバーが来るが童磨はそれを避ける。しかし、完全には避けきれずに首から血が出る。

「血鬼術 寒烈の白姫」

2体の巫女がカナエに向かって絶対零度の吐息を吐くが、後ろに飛んで明悟と交代する。

明悟は両手から業火を出して巫女を蒸発させる。

あまりの炎の強さに童磨はたまらず両手を前に出して顔と首を守る。

その隙をつくようにカナエが明悟の股の間を滑ってきて童磨の前に来る。

「花の呼吸 参の型 泰山朴」

下から上で斬り上げる花の呼吸最大の技は童磨の両手を叩き斬る。

童磨もカナエの何処にこんな力があるのか混乱し、首を噛みきろうと襲ってくるが、明悟がカナエの肩に手を着けて童磨の顔面に炎を炎を纏った飛び蹴りをする。

童磨は吹き飛ばされる。

ゴロゴロと転がるも立ち上がり、両手を再生させる。

「何でだ。なぜここまで!？」

「それは私達が鬼殺隊で柱で夫婦だから」

「君は本当、どこまで俺を惚れ直させるのかな?」

「一生よ」

惚気話をしながら、童磨に言い切る2人。

あまりにも自然体な2人にますます童磨はイライラしてくる。

氷を纏った扇を持って2人に飛びかかってくる。

本来ならば、遠距離でやった方が圧倒的に有利であるが怒りと言う初めての感情に童磨の心が追いついてなく、戦い方が非常に雑になっていた。

カナエはカリバーを円形のサーキュロスモードに変換させて、そのまま童磨を殴る。

明悟も拳で殴る。

童磨も応戦するが2人の息のあった攻撃に対応しきれていない。

カナエはカリバーを明悟に投げ渡して自分も童磨の顔面に回し蹴りをする。

明悟はそのまま円形のカリバーで童磨を殴り、またカナエに投げ渡して腹を蹴る。

「自分の快樂しか求めない貴方に私達は絶対に負けない!」

カナエのカリバーの殴りと蹴りが唸る。

「生きる為に必要なのがなんなのか、お前には理解出来ないだろ!」

明悟の拳が吠える。

「それは、勇気と愛と！」

吐き気を催す邪悪に対し、

「誰かの事を思う良心だ！」

2人の攻撃が通る。

童磨は吹き飛ばされるも腐っても上弦の式、そう簡単にはやられない。

「血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩」

童磨が最大の血鬼術の上に乗って明悟もカナエも凍らそうと絶対零度の巨大な冷気を菩薩が吐くが、明悟はカナエからカリバーを返してもらい、シングルモードにして回転させる。

業火がカリバーに纏わり、絶対零度の冷気から身を守る。

そしてやがて菩薩の冷気の方が根負けし収まってくる。

明悟はカリバーを円形のサーキュロスモードにして菩薩目掛けて投げる。

業火を纏ったカリバーは菩薩を真つ二つに斬る。

童磨も地面に落ちてくる。

カリバーが明悟ではなくカナエの手元に行き、シングルモードになる。

「あなた！」

「了解！」

明悟はカナエの手を掴み、グルグルと回転をする。

カナエもそれに従う。

2人だけの合体技。

「花の呼吸 壺の型改 超飛・花車」

かつて下弦の肆を倒した技を今度は上弦の式にぶつける。童磨は寸前の所でその攻撃を防ぎ、カナエの顔面目掛けて扇を突く。

カナエも寸前の所で避けるが、後ろで1つに纏めてた黒い蝶の髪飾りが飛散する。

童磨はすかさず、カナエの首を取ろうと再度空中で仕掛けるが、カナエを守ろうと飛んできた明悟が炎を拳に纏わせてその扇の攻撃がカナエに届く前に顔面をぶん殴り、吹き飛ばす。

「あなた、私を蹴り飛ばして！」

カナエが落ちながら、明悟にそう叫ぶ。

明悟はカナエの考えてる事が何となくだが分かった。

自分の手から業火を出してその推進力でカナエの後ろに来る明悟。

彼女の足の裏と自分の足の裏を合わせて明悟はカナエを童磨目掛けて《蹴る》。

「花の呼吸 炎の型 流星薔薇」

業火を纏った斬撃が童磨の首を斬るが、童磨は寸前の所で半歩遠くへ行つた為に半分までしか斬れなかった。

けれども業火を纏ったカリバーは鬼には毒な為、中々再生出来ないでいた。

「残念だったね！」

童磨が首を半分切られてゆっくりと回復しながらも飛んできて無防備なカナエを殺そうと扇を振りかぶる。

「いいえ・・・今よ！」

童磨はカナエの自身に疑問を持つ。

更に後ろからは轟音が聴こえてくる。

童磨は瞬時に後ろを振り向くと、拳に光と業火を纏わせた明悟が童磨目掛けて拳を引きながら突っ込んできた。

「終わりだ！」

明悟はそのまま童磨をぶん殴る。

業火に燃えながら、光の効果で童磨の体が崩壊していく。

童磨はこのまま死ぬのもありだと考えてる。何故なら感情がない自身に様々な感情を生み出した存在に消されるのだ。純粹な嬉しさの方が勝っていた。明悟を自分の物に出来ない悔しさはあるけれど、この幸福に比べれば取るに足らない物だった。







カナエが心配して明悟に尋ねると明悟はカナエに愛想笑いと言っていいか、苦笑と言つていいか、分らないが安心させるために笑顔を向ける。

「大丈夫、ただあの姿は疲れてね」

「そう、良かった・・・あの、ずっとあなたに酷いことしてごめんさい！」

カナエが明悟をボコボコにした事、そして苦しめた事に謝るが明悟はただ黙つてカナエを抱き締める。

「別に良いよ。それよりも俺はこれが良い」

カナエも明悟の背中に手を回し抱き締める。

2人の時間がゆつくりと過ぎていくが鬼との戦闘中であるため、1分したら2人とも離れる。

「皆を守る為に手伝つてくれ」

「はい！」

カナエはそう言つてすぐに立ち上がるが明悟は疲労が溜まっていたのか中々立ち上がれない。カナエは明悟に肩を貸して立たせる。

「ごめん、役に立てないかも」

「大丈夫です。あなたはこれくらいではへこたれませんか」

「君には敵わないな」

明悟はアギトの力を回復に使ってなんとか1人だけでも立って歩けるようになる。

カナエもそんな明悟を見て先に進もうと足を進めようとするが明悟に手を掴まれる。

「どうしたの？」

「ちよつと待って」

明悟はハットから先日つけた桜色の蝶の髪飾りを外して、何も着けてないカナエの髪に着ける。

明悟にとつては見慣れた姿になった。

「やっぱり、君はこっちの方が似合ってる」

カナエはその言葉に嬉しいが恥ずかしくなり、顔を染めるが先ほど奪い返したペンダントを着ける。

「どうですか？」

「綺麗だ」

「ありがとうございます」

2人はこうしてお互いの欠けた時間を取り戻すかのように鉢山の道の中を歩いていった。

## 大正ビギンズ クライマックス

津上夫妻が童磨をぶちのめしてる頃、士と大樹は志島と浅倉と戦闘していた。

アナザーデイケイドと言う凶悪な力をコピーしているが士も負けじと互角に戦っている。

「さすが、俺の力だな。歯応えが違うぞ」

「その余裕がどこまで持つかな？」

拳に力を収束させて志島は士を吹き飛ばす。

壁に辺りゴロゴロと転がるが立ち上がり、ライドブツカーからカードを取り出し、バックルに入れる。

「コイツならどうだ？」

《kamen ride OOO》

士はオーズに変身してトラクロードで斬りかかる。

何回か斬られるも志島は首を掴み上げる。

志島は本気で士の首を絞めてくるが士は次の手に出る。

再びカードを取り出して入れる。

《kamen ride kabuto》

《attack ride cast off》

士はカブトに変身し、キャストオフの衝撃で志島を吹き飛ばす。

《attack ride clock up》

超高速で志島を殴り、移動と攻撃を繰り返すが、志島は最初は耐えきれずに吹き飛ばすが徐々に耐えてくる。

その姿を不気味に思った士は決めようと全速力で志島に突っ込むが、なんと志島は分身し、分身を士の背後に作って殴り、作って殴り、そして完全に足の止まった士を殴り飛ばした。

それは以前、カブトの世界で士がクロックアップに対応したやり方にそっくりだった。

吹き飛ばされて士はデイケイドの姿に戻る。

「どこまで俺を真似るんだ!？」

「偉大なる一步は模倣から始まるのだ。そしてオリジナルを超えていく。お前をな！」

志島が自分から士に走っていき、殴り、蹴る。

士はそれを全て受けてしまいフラフラになっってしまう。この隙を逃すまいと、志島が拳にオーラを溜めて殴りに行く。

だが、士は瞬時にライドブッカーからカードを1枚取り出して、バックルに挿す。

《kamen ride W》

士はWに変身して、志島の拳をいなしてそのまま無防備な顔面に蹴りを放つ。

見事なカウンターを喰らった志島。

浅倉ならばそのままやり返す根性を見せるがこの志島は争いそのものが弱い。

つまり、そんなのを返す根性などない。

千鳥足になる志島に士は殴る。

殴る。

殴る。

そして蹴る。

全てを受けてしまう志島。

アナザーディケイドの力だとすぐになんとかかなりそうな物であるが、それほどに先ほどのカウンターが効いている。士の長年の闘い全てを模倣は出来ても本質までは模倣できなかった。

《form ride heatmetal》

《ヒート！メタル！》

ヒートメタルになり、メタルシャフトで志島の左膝裏を叩く。膝が曲がり、志島は片

膝を地面に着かせてしまう。

《Final attack ride W》

隙だらけの顔面に思いつきり、ヒートメタルのマキシマムドライブのメタルブランディングをぶちかまし、ぶつ飛ばす。

本来ならば、メモリーブレイクをされ、ダミーメモリーは再び壊れてしまうが、志島の執念と云うべきかメモリーが吐き出されるだけで済んでいるのはなんと云う根性と言いか気合いと言うか、ともかくしぶとい。

志島は生身でゴロゴロと転がり、大樹をベノサーベルで吹き飛ばした浅倉の足元に行く。

浅倉は志島から吐き出されたダミーメモリーを手取る。

変身を解除する浅倉に志島は足元に這っていく。

「浅倉、そのメモリーを早く私に……それが私になければお前は変身出来なくなるぞ！浅倉！」

志島の言ってる事は間違いではない。

しかし、浅倉は笑顔を支島に向けて自分の左掌を見せつける。

《ダミー》

メモリーを起動すると浅倉の掌になんとメモリーを挿すのに重要なコネクタが現れ



る。

「バカな！コネクタは1つの筈！」

「そんなの知るか、俺が言われたのはこれを使えばより祭りが楽しくなるってだけだ」

浅倉は自分にメモリーを挿す。

体がダミーに変化する前にデツキを前に突き出し、腰にベルトを装着する。

「変身」

浅倉は王蛇になる。

そして腰からカードを1枚出す。

そのカードは《ダミー》の記憶によって作られた《疾風》のサバイブカードだ。

「あれは!？」

「サバイブだ!？」

士と大樹もこの使い方に驚く。

杖型の召喚器のベノバイザーが左腕の盾型のベノバイザーツヴァイに変化して、蛇が

模された口に疾風のカードを入れる。

《サバイブ》

ベノバイザーツヴァイから音がなり、浅倉は水に包まれながら、その姿を変えていく。

肩のアーマーから鋭い爪が生えて、体は一回りゴツくなり、顔がより蛇に近づく。

仮面ライダー王蛇サバイブの誕生である。

「そんな・・・私のメモリーが!？」

「もう俺のもんだ・・・お前、もう要らねえよ」

《ソードベント》

ベノサーベルが召喚される。

本来ならば、サバイブによって更に変化した物が来る筈であるが浅倉はそこまでやらなかった。

王蛇サバイブのソードベントは鞭になり、浅倉的に使いづらかったのもそのままの方がやり易いからである。

浅倉の足元で絶望する志島。

「頼む・・・助けてくれ、死にたくない!」

浅倉に惨めにもしがみつくと志島。

浅倉はそんな志島を蹴り飛ばす。

「うるせえ」

そう言つて浅倉は志島の頭を潰した。

血が大量に飛び散り、王蛇の頭から返り血を浴びて、本当に野生の生きてる獲物を捕食してる蛇そのものに見える。

士も大樹もこの急な惨劇に動けずにワンテンポ遅れて浅倉に向かう。浅倉はそんな2人を横風ぎにベノサーベルを振って2人を吹き飛ばす。

壁をいくつも破壊し、2人は変身を解除され、最初に鬼殺隊が集結していた広場まで飛ばされる。



少し前、明悟とカナエは何とか広間までやってこれた。道中、他の鬼に殺された隊士の骸だらけで2人は刀だけ回収してここまでやって来た。

鬼と奇跡的に遭遇しなかったのは明悟に宿るアギトの力に対して本能的に近づかない為だろう。

明悟とカナエは緊迫感に圧されながらも進んでいく。

そんな中、明悟が鉾山の道の次の曲がり角に何かがいるのを感じる。

敵か味方か、明悟には分からない。

カナエもその気配を感じる。

2人は警戒して、殺れるならば一気に殺れるように集中する。

深く息をする。

全身の細胞を活性化させて1秒でも早く、一瞬の隙を突き、一撃で相手を葬る為に：：静寂が場を支配し、上から落ちてきた水の滴の落ちた音が合図となり、2人も曲がり角にいる者も武器を振るうが、相手に当たる寸前で止まる。

何故なら、その相手とはしのぶとカナヲだったからである。

「義兄さん、姉さん!?!」

しのぶは明悟とカナエに驚き、刀を鞘に戻す。

味方で安心するが一步間違えれば死んだかもしれない状況に彼らに冷や汗が出る。

「しのぶ、カナヲ!」

カナエが2人を抱き締める。

1人死んだために遺してしまった家族。

色んな感情が出てくるがカナエはそんな事は考えずにただ単純に抱き締めた。

急な事にしのぶもカナヲも啞然とするが徐々に3人とも泣き始めて、明悟は彼女達に背中を向けて辺りを警戒していた。

暫くして、3人とも泣き止む。

「本当に姉さんなの?」

「うん、ごめんね。酷い事して」

「大丈夫よ、だって姉さんの妹だから」

「しのぶ……」

カナエとしのぶが話していると静かに黙ってカナヲがカナエに抱きつく。

カナエは微笑みながら頭を撫でてる。

明悟がそんな微笑ましい姉妹に近づく。

「申し訳ないけど、すぐにここから離れて見渡しの良い広間に行こう」

冷静に状況の説明を3人にする明悟。

3人ともすぐに仕事をする顔に戻り、それに頷く。

流石はプロである。

「しのぶ……この人がその……」

「津上明悟さんでしょ？大丈夫、もう知ってるから」

「あの、今しか言えないかも知れないから言わせて欲しいの……この人と結婚を認めて」

「ええ？今やるの？」

明悟としのぶが被りながらカナエにつっこむ。

カナヲも同じような顔をカナエに向ける。

カナエは明悟の腕に抱き付いてしのぶやカナヲを見る。

しのぶはそんな姉に呆れるが、笑顔を向けた。

「もう認めてるよ……私からも姉さんをお願いしますね。義兄さん」  
「ああ」

「良かった。しのぶ、ありがとう！やっぱりのぶの笑顔は素敵ね！明悟さんもそう思うでしょ!？」

「ちよつと姉さん！」

「ああ確かに素敵だよ」

明悟はカナエに言われて答える。

純粹にそう思ってただけで他意は全くないが、しのぶからしてみれば姉の前で言われて更に継子のカナヲの前なので結構内心恥ずかしい。

顔には全く出でないが姉であるカナエはそれが一発で分かった。

そしてそんな反応をするしのぶに近づいて抱き締めて、

「明悟さんには手を出さないでね、あの人は全部私のなんだから」

感動の瞬間が台無しである。

明悟もそして視力が常人以上のカナヲもそのやり取りを確り見てて2人ともカナエに引いていた。

(何もこんな時に惚気なくても……)

そしてやられたしのぶは内心カナエに本気で呆れていた。

このままいると本気で危ないので4人で広間に向かう。

鉦山を進んでいくと、先を歩いていた明悟が疲れてアギトの力が鈍かったので曲がり角で誰かとぶつかる。

明悟はすぐに確認するとそれは零余子だった。

明悟はよろめただけで済んだが体格の小さい零余子はスツ転んで下着が見えていた。

すぐに気づいて隠すが顔を真っ赤にしていた。

因みに明悟はそれをチラリと見てしまったので気まずく目に手を当ててる。

「すまん」

そして耳朵をカナエに引つ張られる。

「い、痛いー！」

「浮気は絶対に許しません」

「いや、違うー！」

しのぶはいちやついてる姉らを放っておいて、零余子に手を貸すが、零余子は一人で立ち上がる。

正直に言つてしのぶの持つ悪鬼滅殺の意思と言うか恨みが怖すぎて貸しを作りたいくないのだ。

零余子と一緒に行動していた炭治郎達もやってくる。

「明悟さん！」

「ああ、炭治郎君。つてもういい加減にして！」

明悟がカナエの手を無理矢理外す。

「次は許しませんからね」

「だから、違うって」

「そうよ、こいつは好みじゃない」

零余子はカナエにそう言う。

めんどくさい事になりそうだったのでさっさと終わらせたかったのだが、カナエは余計にそれで火が付いた。

「なんでですか？明悟さんはかっこいいじゃないですか！」

「どこにキレてるの？」

明悟としのぶがカナエにつっこむ。

「私の好みはもつと保護欲が掻き立てられる男だ！」

「なんで答えるの？」

自分の男の好みを言ってる零余子に2人は更につっこむ。零余子は瞳を動かしてチラッと『善逸』を見るが眠った状態の善逸はそれに気づかなかつた。

「それより、危ないからさっさと広間に行こう」



寝てる事で冷静になつて善逸の言葉に冷静になつたのかカナエも落ち着いて全員で広間に向かう。

伊之助がさつきから仕切つてる善逸に怒鳴つてるが炭治郎が宥めていた。

そして初めて善逸を見たカナエは冷静な子だと勘違いして、何気に睡眠状態の善逸を見るのは初めてな明悟としのぶとカナヲは善逸が成長したと盛大に勘違いをしていた。

冷静に解説するが明悟が善逸と初めて仕事をしたのが鼓屋敷の時、明悟は善逸の戦闘を見ていない。

列車でも善逸が本気で戦う前に明悟は別の車両に行き、吉原では確かに居たことには居たが暴走に近くて全く記憶になかった。

こうして誰もこの変な状況につっこみをいれないまま進んでいく。



他の柱達や隊士達や隠達も徐々に押され始めて、生き残つてる面々は広場まで戻つてくる。

轆轤も変身が解けてしまい、危うい。

大勢の隊士や隠がいるが、その数は最初の3分の1で1000人を超えてるか超えてないか位だった。

四方八方を鬼に囲まれる。

「よし、てめえら皆殺しにしてやる。掛かつてきやがれ！」

実弥の威勢の良い掛け声に他の隊士や隠が鬨の声を上げるが、そんなんでなんとかなるほど戦闘は甘くない。

そして、そんな彼らを囲む鬼達の前に猗窩座、玉壺、半天狗、妓夫太郎、堕姫、そして王蛇サバイブの浅倉が囲む。

浅倉のサバイブや志島が居ないことに上弦の鬼達も疑問に思つてはいるがどうでも良いことなので聞かなかつた。

ベンツ！

琵琶の音がなり、障子が現れて中から1人の男が出てくる。鬼と同じ赤い目に鬼と同じ障気を身に纏つた邪悪・鬼舞辻無惨だ。

「無惨！」

唯一無惨を知っている炭治郎が無惨に吠える。

そして、全員が理解する無惨ののだと、コイツがいなければ全てこんな事にはならなかった。

恨みとか怒りとかそんな感情を超越した何かを無惨にぶつける隊士だが、無惨はそんなのを気にも止めない。

「黙れ、下等生物が……《青い彼岸花》は何処だ？」

無惨は《青い彼岸花》の事にしか興味が無いが、それは鬼殺隊が流した嘘であり、この場で完全に騙されてるのは無惨一人だけである。

隊士は絶対に無惨にそれを明かさない。

少しでも長くこの場に居させる為に絶対に明かさない。

「まあ良い。お前ら異常者を殺して手に入れば良いだけの事だ」

「何？」

無惨の言葉に行冥が聞く。

「やれ家族を殺されたとか身内がどうか、お前らは生きてるからそれで良いではないか、私のやつてることは天災かなんかだと思えば良い。結局貴様らは生きたいとかそう言うのではなく、何かを殺したい根っからの異常者だ。もう異常者の相手は疲れた。ここで皆殺しにしてくれる」

あまりにも身勝手な言い分だった。

隊士達だけでなく、土や大樹もあまりの言い分に最早何も言えない。

一応、楽しいから無惨側についてる浅倉もバカだと思つた。

全員の怒りが振り切れてもう何の感情も生まれない。

「ふざけんな！」

しかし、この男、津上明悟だけは違つた。

「あ？」

「皆、必死に生きてる。いつかは皆死ぬ。それでも今に何かを残すために全力で生きてと納得する為に人は生きてるんだ。それを身勝手に奪つておいて何様のつもりだ！」

「死ねば全てが無駄だ。生きてる者がこの世で一番素晴らしい。つまり1000年生きてる私がこの世で一番価値があるのだ。貴様らの価値など石ころに過ぎない」

「石にだって魂は宿る。そしてそれは何年も何十年も何百年も何千年も時を越える意思になる。人とはそう言う物だ。生きてる事でしか何かを残せないならお前の『生きる』は何とも『薄っぺらい』な」

無惨は額に血管を大量に浮かべる。

明悟に言われた『薄っぺらな生』に死ぬほど無惨は腹が立つた。

生きてるのが偉い。生きてるのが素晴らしい。だから長く生きてる自分はこの世で

最も偉いと無惨は心の底からそう思つてる。無惨にとつて誰かが自分に支配されるのは最早当たり前なのだ。

仮面ライダーの悪党は皆、誰かを支配したかった。

それは皮肉にもだが、全員が他者と言う者を少なくとも最低限の存在は理解していたからだ。

しかしコイツは違う。

他者と言う者を心の底から理解していない。

故にコイツの全てが「薄っぺらい」

「『意思』だど？そんなものは価値がない。現に私は1000年も生きてる。私の欲に比べれば貴様らの価値など何の意味もない！」

「そいつは違うな」

無惨の言葉に士が反論し、皆の前に出る。

無惨は突然遮つた士を睨む。

「人は皆、誰かの意思を継いで生きてる。この男だつてそうだ。自分の大切な人の意思を継いで戦つてる」

士は明悟を見る。

「それは自分と言う者を強くする。時には弱くなり、苦しむがそれを乗り越えた時に今

よりもずっと強くなる。1000年も意思を継いで来たコイツらの意思に比べれば、お前の欲など取るに足らない。肥溜め。以下だ」

「貴様あ、一体何者だ!?!」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

士はカードを取り出す。

明悟もこの邪悪を倒すために前に出る。

2人ともベルトを腰に出す。

「変身」

《kamen ride decade》

「変身」

《kamen ride diend》

「変・身」

「変身」

大樹や轆轤、零余子も変身する。

五大ライダー集結である。

「この数相手に勝てると思ってるのか!?!」

周りには大量の鬼がいてしかも上弦もいる。

唯一 〃黒死牟だけ居ない 〃がそれでも脅威である。

「海東、 〃あれ 〃でやれ」

「了解」

大樹は7枚のカードを出す。

そしてそれをネオディエンドドライバ―に装填する。

《k a m e n r i d e h i b i k i》

《i b u k i》

《z a n k i》

《t o u k i》

《k i r a m e k i》

《n i s h i k i》

《h a b a t a k i》

仮面ライダー響鬼、威吹鬼、轟鬼、凍鬼、煌鬼、西鬼、羽撃鬼の計7大ライダーが召

喚される。

「鬼だ」

「鬼だよな、あれ」

「鬼じゃねえか」

鬼殺隊が響鬼達の存在につっこむ。

「鬼のライダーもいるのか？」

「どんなヤツでも誰かの為に戦えば皆ライダーだ」

「なるほど」

士の言葉に明悟が納得する。

「パンツ！と行冥が手を叩いて全員を集中させる。」

「誰であれ、悪鬼と戦うならば一先ずは味方だ」

行冥の言葉に他の隊士もとりあえず納得して共に構える。

「いけ」

無惨が鬼に命令する。

「行くぞ！」

明悟が仲間と共に敵に向かう。





「岩の呼吸 肆の型 流紋岩・速征」

行冥が手斧と鉄球を振り回して鬼を殺す。

しかし、遠距離なこの型を掻い潜って攻撃を仕掛ける鬼が何体も行冥に向かっていくが、凍鬼が自慢の音撃金棒・烈凍でそれを宙に吹き飛ばす。

そして宙に吹き飛ばされた鬼を行冥が頭を鉄球で潰す。

鬼を憎んでる為に凍鬼に助けられても何も答えないが、遠距離は行冥が近距離は凍鬼がと息の合った戦い方をしていた。

凍鬼も吹き飛ばすだけでなく、烈凍で頭を潰してる。

「水の呼吸 拾壱の型 凧」

義勇が凧で近くにいる鬼の首を全て切り落とす。

鬼達が遠距離攻撃をしようと血鬼術の準備に入るが、煌鬼が自身の肩についてるシンバル型の武器の音撃震張・烈盤を投げて首を刎ねる。

この攻撃は鬼には効かずに再生されるが鬼を足止めするには完璧で義勇はその隙に近づいて、再生した鬼から首を跳ねていく。

(感謝する)

ここでも口下手は変わらず、言葉を言わずに目配せだけをやる義勇。煌鬼は何を言おうとしているのか理解したのか手で返事をしてしまい。

義勇の口下手が悪化したのは言うまでもない。

「風の呼吸 巻の型 塵旋風・削ぎ」

実弥が何体もの鬼の首を折り斬っていく。斬った後の隙を付こうと他の鬼が突っ込んでいくが、威吹鬼が音撃管・烈風で撃ち怯ます。

その隙に実弥が首を跳ねる。

「邪魔すんじゃねえ」

どんな鬼でも関係なく憎い実弥は威吹鬼を威嚇してさっさと鬼を斬っていく。

威吹鬼はそんな事は全く気にせずに烈風でサポートしていた。

「霞の呼吸 肆の型 移流斬り」

無一郎が地面を滑り、相手の足元に行って首を刎ね上げる。

他の鬼がすぐさま無一郎に攻撃しに来る。

「獣の呼吸 肆の牙 切細裂き」

伊之助がその鬼の首を斬る。

前方位に六連撃の斬撃を浴びた鬼は首を刎ねられて倒れる。

「グハハ、どうだ!？」

「(変な頭)」

威勢が良い伊之助の被り物の頭に疑問を持つてゐる無一郎だが、すぐに鬼との戦闘に戻り、伊之助もまたすぐに戦闘に戻っていく。

「音の呼吸 壱の型 轟」

天元が二本のバカでかい日輪刀で鬼の首を刎ね飛ばす。

そして後ろでは轟鬼が自分の大剣の音撃弦・烈雷にバツクルを装着させた音撃震・雷轟で斬っていた。

しかもその度にエレキギターの音が派手に鳴りまくっているので天元は内心その武器を羨ましそうに見ながら斬っていた。

「恋の呼吸 壺の型 初恋のわななき」

蜜璃が自分の「長く鞭のようにしなる日輪刀」を新体操のようにアクロバティックに体を動かしながら、常人以上の筋力と猫並の柔軟性で鬼の首を斬りまくっていた。

そして近くでは西鬼が音撃三角・烈節で鬼の首を絡めて地面に叩き伏せたり、顔面を殴ったり、これまた蜜璃に負けず劣らずの柔軟性を発揮してアクロバティックに鬼を相手にしていた。

（柔らかい体に野性的な男性、素敵）

西鬼を纯粹に素敵と思いながら蜜璃は戦っていた。

（あの鬼、切り捨ててやる）

「蛇の呼吸 壺の型 委蛇斬り」

近くでは小芭内がアクロバティックに暴れまわり、蜜璃と連携してる西鬼に多大な嫉妬をしていた。

（恋とは恐ろしいね）

大樹もその隣で小芭内の中でひしめく嫉妬深さに引きながらも鬼と戦っていた。

「炎の呼吸 壺の型 不知火」

「なめるな！」

杏寿郎が大きな踏み込みと共に猗窩座に袈裟懸けをやるが猗窩座は弾いて杏寿郎に殴りかかる。

しかし、轆轤がその拳に対して自分の拳に光を纏わせて殴り、吹き飛ばす。

そして響鬼が自分の口から炎を出して猗窩座に喰らわす。

いくら再生するも行つても炎には違いないのでたまたまらず後退する。

「2人ともありがとう！」

「行くぞ！」

「勿論だ」

3人は猗窩座に向かっていく。

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃・八連」

善逸が堕姫の首を斬ろうと居合い斬りを何回も堕姫に仕掛けるが、恐ろしいほど柔らかい首を斬れないでいた。

「そんなのが効くか！死ね不細工！」

帯が善逸に向かっていく。

「死なせるか!」

しかし、零余子がそれを受け止める。

光を手に纏わせて帯を落としていく。

「このクソ女!」

「うるさい女狐!」

堕姫と零余子の戦いに善逸は堕姫の隙を付きながら斬りかかっていた。

「撃て撃て撃て!!」

ショットガンを持った隠が同じくショットガンを持つてる玄弥の合図で上弦の肆の半天狗に弾をぶちこみ捲るが半天狗はあろうことかどんどん分身していく。

「死なねえぞ!」

「構うな撃て!」

本来ならば半天狗は血鬼術で吹き飛ばす事も出来るが休まずに飛んでくる銃弾の雨に想像以上に体を分離させられて思うように近づけなかった。

「花の呼吸 壺の型 飛び花車」

「ヒヨヒヨ、無駄無駄」

カナエの斬撃を玉壺はなんなくと避ける。

「速いね」

「そんな遅い攻撃なぞ当たったりはしませんよ」

余裕ぶつてる玉壺。

「蟲の呼吸 蝶ノ舞い 戯れ」

しのぶが最速の突きを玉壺に放つ。

鬼殺隊で最速の突きに驚くが、玉壺はその突きを頭にかすり傷を負いながらも避ける。

「ヒヨヒヨ、無駄だと言っていることが分からないのか!？」

「それはどうですかね?」

「何?・・・な!？」

玉壺の体がしのぶの日輪刀についてる毒で溶けていく。

しかし、玉壺は腐っても上弦。

なんとか毒を解毒してカナエとしのぶの姉妹を睨む。

「この小娘どもがあ」

「私、既婚者なんだけどな」

「姉さん、それは関係ないんじゃない？」

姉妹は玉壺相手に戦闘する。

「ヒノカミ神楽 円舞」

「花の呼吸 漆の型 渦桃」

「血鬼術 跋扈跳梁」

炭治郎とカナヲの斬撃を防ぐ妓夫太郎。

「舐めんじゃねえ！」

妓夫太郎は炭治郎とカナヲ2人に接近戦をして炭治郎を吹き飛ばす。

岩盤に叩きつけられそうになる炭治郎だが、羽撃鬼が飛んでそれを助ける。

「ありがとうございます！」

礼を言う炭治郎。

羽撃鬼は槍型の音撃吹道・烈空で2人と一緒に妓夫太郎に攻撃する。



「無惨！」

「アギトオ！」

明悟がバーニングフォームになり、カリバーで無惨に斬りかかる。

「てめえの相手は俺だ！」

浅倉がその間に入り、ペノサーベルでそれを受け止める。

「お前!？」

「楽しもうぜ！」

「津上、志島のメモリーはそいつの中にある！」

士は明悟に《ダミーメモリー》が浅倉の中にある事を伝えて無惨に向かっていく。

「来るなあ！」

無惨が手を鞭に変えて士に向かって撃つが戦士でない無惨の攻撃など士には全く効かず、それを弾いてライドブッカーで何回も無惨を斬る。

鮮血が飛び散るが無惨はそれを瞬時に再生させる。

「離れろ！」

無惨が力任せに士を吹き飛ばす。

このままだと命が幾つあっても足りないので無惨は逃げると決める。

ベンツ！

琵琶の音になり、逃げる為の障子が現れる。

「逃がすか！」

《final attack ride decade》

士はライドブツカーをガンモードにして障子目掛けてデイメンションプラスを放つ。

デイケイドやデイエンドの持つ能力は「設定無視」。

ありとあらゆるその世界の法則を破壊できる。

それゆえに血鬼術でできた障子を「破壊」する。

その爆風で無惨は吹き飛ばされる。

「何だと!？」

「今だ！」

吹き飛ばれた無惨に響鬼達、鬼が向かう。

羽撃鬼が自分達の技の「清めの音」を増幅させる鬼石を無惨に撃ち込む。

勿論、無惨は「清めの音」では死なないがそれでも時間稼ぎにはなる。

「音撃奏・旋風一閃」

烈空をフルートのように使い、清めの音を無惨に浴びせる。  
さすがの無惨も音の攻撃は防ぎようがなく、耳を抑える。

「音撃殴・一撃怒涛」

腰の音撃鼓を空中に投げて銅鑼を出現させて、烈凍で叩く。

苦しむ無惨。

「音撃拍・軽佻訃爆」

烈盤をシンバルのように叩き、無惨に浴びせる。

「音撃響・偉羅射威」

烈節をトライアングルのようにして音を無惨に浴びせる。

「音撃射・疾風一閃」

腰に着けてる鳴風を烈風につけてトランペットのようにして無惨に音を浴びせる。

そしてすかさずに轟鬼が無惨の腹を轟雷で貫く。

「音撃斬・雷電激震」

轟雷をエレキギターのように激しく引く。体に直接撃ち込まれてるせいかわ、無惨は今  
まで以上に苦しむ。

「やめろおー！」

轟鬼の雷電激震を無理矢理終わらせて轟鬼を吹き飛ばすが無惨はフラフラだった。その時、響鬼の音撃鼓が無惨に打ち込まれる。

そして無惨の体で大きくなる。

「音撃打・爆裂強打！」

ドドン！

と特大の音を立てて無惨を吹き飛ばす。

無惨は地面を転がりながらもなんとか立ち上がるが、足からドンドン爆散していく。

「ああああああー!!!」

叫びながら、無惨はそのまま、爆散し、完全に肉片になる。

「やったか!？」

無惨のこの状態に誰もがそう思うが、これで済んだら1000年も生きていない。

無惨の肉片はくつつき始めてそして全裸の無惨が出てくる。

「おのれ、ゴミどもがあ」

爆散しても再生する。

普通なら心が折れるような状況であるが、響鬼達が無惨に技をぶちこんでる間、上弦を抑えてた柱達と役割を交代して再生して油断してる無惨の首を取ろうと全柱が無惨に斬りかかる。

全方位逃げ場なしの斬撃が無惨に襲いかかる。

流石の無惨もこの攻撃はヤバイと感じたのか、自らの肉体を肉片から再生したにも関わらず、もう一度爆発飛散をしてバラバラにして回避する。

「冗談でしょ!？」

あまりの避け方に蜜璃は声を上げる。

ベンツ！

琵琶の音が鳴り響き、全ての肉片を回収し、重要な戦力の上弦も一緒に回収する。

後一步の所まで追い詰める事が出来たが結局逃げられてしまった。

鬼殺隊としてこれは痛かった。



一方その頃、浅倉と戦つてゐる明悟は互角だった。

カリバーとベノサーベルがぶつかり合い、想像以上の金属音が鳴り響く。

「楽しいなあ！」

「お前は何で鬼の味方をする!? 何で人を殺す!？」

「知るか、イライラが収まるからだ！」

バーニングフォームになっているが王蛇のサバイブはそれを越えて明悟を追い詰めていく。

「もつと楽しませろ！」

サーベルで明悟を吹き飛ばす。

明悟は壁を砕きながら、鉾山の外の崖まで吹き飛ばされてしまう。

浅倉もそれを追つて、外でもうすぐ朝がやってくる夜空で戦う。

明悟も力は上がつててなんとか浅倉に攻撃は効くが度重なる激戦の上にサバイブになった王蛇の防御力、そして浅倉の常人以上のタフさに押される。

そしてカリバーを弾き飛ばされ斬り飛ばされる。

地面をゴロゴロと転がり、明悟は伏してしまふ。

「もつと楽しませろ！」

倒れてゐる明悟に向かって斬りかかる浅倉。

「あなた！」

しかし、全力で走ってきたカナエがカリバーを持ってそれを防ぐ。

「カナエ！」

「なんだ、邪魔するな！」

浅倉はカナエをサーベルで吹き飛ばす。

カリバーで受け止めはしたが、カナエも地面に倒れてしまう。

しかし、カナエは気丈にも浅倉を睨む。

それを見た浅倉はイライラする。

「昔、同じ目で俺を見た女にそっくりだ……俺の中にお前が生きてるメモリーがあるっ

て知ってんのか？」

浅倉はカナエにそう言う。

別に言わなくても良いが狼狽える姿は見て楽しいので言う。

「それがどうしたの？」

しかし、カナエの目に宿った輝きは変わらない。

「私がここで消えても、私の意思は伝わってる。だから構わない。それよりも大切な人を守れなかったら一生私は後悔する。だから私は戦う！」

その目に宿る光輝く刃のような意思《光輝の意志》はカナエを立ち上がらせて、浅倉

に対して対抗させる。

浅倉はその目に対してイライラし、カナエを殺そうとサーベルを振りかざすが立ち上がった明悟がカナエの前に来てそれを受け止める。

「お前！」

「あなた!?!」

「俺だって、大切な人を守りたい。守れなかったら後悔する。お前には居ないのか!?!」

「そんな物はいねえ」

「なら、俺は負けない」

「ああ!?!」

サーベルに力を込めて斬り伏せようとするが明悟は全力でそれを離さない。

「離しやがれ！」

「誰かの為に戦うなら、それが俺の意志だ！」

明悟は浅倉にアッパーを繰り出して吹き飛ばすがなんとなく立ってほぼ無傷だった。明悟はカナエを守ろうと体を浅倉に向けるが膝をつく。

《その時、不思議な事が起こった》



ついに朝日が出てくる。

そして明悟のバーニングフォームは太陽の光に包まれる。

オルタリングが太陽の光に反応して輝く。

浅倉もカナエもその強烈な光に顔に顔を隠す。

バーニングの装甲がひび割れて中から光があふれでてくる。

そしてひび割れた装甲を弾き飛ばし、その姿が《変身》する。

マツシブな体型だったバーニングとは違い、バランスの取れたグラウンドに近くなり、

装甲が光輝いてる。

仮面ライダーアギト シャイニングフォーム

光輝く刃の意志を持った彼に相応しい姿に進化した。

光が収まり、カナエと浅倉もその姿を見る。

浅倉は新しい姿に楽しくなり、カナエはその姿に見惚れる。

「カナエちゃん、君を守る為に戦う。それが俺の居場所だ！」

明悟はそう叫んで浅倉に殴りかかる。

バーニングとは比べ物にならないほどに速くなっており、浅倉はそのまま殴り飛ばされる。

「良いぜ、楽しもうじゃねえか！」

浅倉はサーベルを捨てて明悟に殴りにかかるが明悟はそれを上手く受けて腹を殴る。常人以上のタフさで再び殴りに行くが受け流されて、顔面に思いつき回し蹴りを食らう。

浅倉はそれで倒れる。

「まだだ」

《ファイナルベント》

浅倉はカードをベノバイザーツヴァイに装填して最後の必殺技を放つ為に構える。

自身の使役モンスターのベノヴァイパーが現れる。

浅倉は飛び上がり、ベノヴァイパーはその浅倉を後押しするかのよう毒液を放つ。そして毒液を右足に纏った浅倉が明悟目掛けて飛んでくる。

明悟も自身の技を放つ為に腰を落とす。

アギトの紋章が宙に浮かび、明悟はそこを潜る形で飛び蹴りを浅倉目掛けて放つ。

「うおおおおお!!!」

2人のライダーキックが激突し、辺り一面に衝撃波を放つ。

他の隊士達もそれに気づいたのか柱や土や響鬼達も外に出てその光景を目にする。



「カナエ！」

明悟が変身を解いてカナエに近づく。

カナエは明悟に真剣な表情を向ける。

「最後に聞きたい事があります、答えてくれますか？」

「何？」

「私といて幸せでした？」

「ああ、君は？」

「幸せでした。私待ってますから」

「ああ、絶対に行く。君に恥じない生き方をして、絶対に俺は君の元へ行く。」

「約束だ（よ）」

笑い会う2人。

そしてカナエが光の粒子になって、髪飾りとペンダントだけ落ちた。

明悟はそれを取り、ハットの鍔を目に当ててなく。

ハードボイルドな男ならばこれで泣くことが分らないが明悟は違う。

声を出してはいないが涙が頬に伝わり、全く隠せてない。

しかし、その涙は別れを悲しむだけではない。

また会おうと約束できた事に対する嬉しさもある。

こうして、鉾山での激戦は終わった。



3日後の産屋敷の庭。

士と大樹が耀哉と包帯を巻いた明悟や轆轤、零余子や柱達の前にいた。

「もう行くのか？」

「ああ、俺の旅はまだまだ続くからな。邪魔して悪かった」

「本当ね」

「海東、お前のせいだと言う自覚はあるのか？」

「さあね」

大樹はそのまま先にオーロラを作って去っていく。

士はそんな大樹に呆れるが、自身も旅を続けるために去ろうとするが懐から一枚の写真を取り出す。

「おい、津上」

そしてそれを器用に明悟に投げ渡す。

明悟はそれをまた器用に取る。

「またな」

士はそう言つてオーロラの中へ去つていった。

明悟は写真を見ると自分とカナエが笑いあつてる姿が合った。

どこかぼやけてどこか重複して不思議な魅力を持つ写真だった。

「またな、〃仮面ライダー〃」

明悟はそう言つて写真を懐にしまう。

胸には蝶のペンダントが光輝いていた。

他の柱や耀哉と一緒に屋敷に戻っていく。

彼らの戦いはまだまだ続く。

しかし、この数奇な幸運に明悟は感謝しながら、生きると心に誓つたのであった。

## 酒乱大騒動

鉦山の戦いから一週間経ち、柱達に轆轤や零余子は産屋敷の広間にいた。

何をするかと言うとこれから宴会である。

無惨には逃げられたが、上弦の式を倒せた事は大きく、明悟とカナエの夫婦の手柄が何よりも素晴らしい。

そこで耀哉が験担ぎも兼ねて宴会を開いた。

士気は上がるし、俄然に全員にやる気が出るし、ビシツと雰囲気もこれ以前と以後ではしまりが違ってくる。

耀哉はこの案を最高の案だと信じていた。

粥や食べやすい物しか食べられずに酒など飲めないがそれでも耀哉はやりたかった。

柱達は当然、耀哉が飲まないなら飲まないとやろうとしたが当主命令を職件乱用甚だしい命令で飲むことになった。

そうなった時に行動が一番早かったのは天元だ。

ノリや勢いに身を任せる性質の天元が宴会なんてただ酒な日を楽しみにしないわけなく、決まった途端に準備していた。

杏寿郎や実弥や義勇、蜜璃そして明悟も楽しむ方なのでそれはそれで気前良く待つていた。

しかし、楽しめない人もいる。

まずは行冥、小芭内そしてしのぶである。

しのぶはまだ楽しむ方であるが、行冥と小芭内には致命的な弱点があり、行冥は酒にはてんで弱く、小芭内は逆に全く酔わない。

故に2人とも宴会を楽しめない質である。

しかし、耀哉の命令に逆らえるわけもなく、やるが最早ただの任務と変わりなかった。轆轤と零余子はどうするかと言う話になり、またいざこざがあったが何とか参加させた。

そしてこの2人を隣に置く人間など明悟と杏寿郎しか居ないので2人の間に席を置くことになった。

「皆、此度の戦いは素晴らしかった。無惨は逃してしまっただがここまで追い詰めたのなら後一息だ。そして明悟もカナエと一緒に良く上弦を倒した。100年も誰も倒せなかった上弦を倒してくれてありがとう。今日はめでたい祝い事だから皆もゆつくりと楽しんで欲しい。それでは乾杯」

「「「「乾杯」」」」



自分の持つてる杯を掲げて飲む。

因みにこの中で酒が本当に飲むとダメな無一郎以外、全員酒である。

そして一口飲んだ瞬間に行冥は寝た。

隣の天元がすぐに隠に合図を出して寝室に運ばせる。

あまりの手際の良さに行冥の隣にいた実弥を筆頭に驚くが、慣れたものである。



明悟は耀哉の近くに来ていた。

体の調子が悪く、一杯の酒以上を飲むと悪影響が出るほどにボロボロで盲目と本来ならば痛々しすぎて宴会なんてやらない方が良いのに無理してやつてる親友が心配で来た。

明悟も付き合いとしての乾杯の一杯以上は飲む気が全くなく、食べる方が好きなので膳を食べてから来た。

「耀哉、大丈夫か？」

「大丈夫だよ、心配してくれてありがとう」

笑顔で明悟に答えるが明悟にはわかったこれは痩せ我慢だと、

「いや、我慢しなくて良いよ」

「我慢なんか、してないよ」

「俺の前でそんな嘘が通ると本当に思ってるのか？」

強めの口調の明悟に耀哉は沈黙する。

(明悟には嘘つけないな)

(抱え込み過ぎなんだよなあ)

明悟は耀哉をそう思って、隣に座る。

他の人には分からない2人だけの距離感は遠いようで近い。

他は普通に宴会をしていた。

一杯で倒れた行冥はさておき、他はそこまで弱い人もおらず、ずっと飲んだり食べた話したりして楽しんでいた。

そんな皆を見て明悟はまた宴会をやりたいと思った。

耀哉も一緒に酒を飲んだり、御馳走を食べたりしたいと明悟は思った。

耀哉もまた楽しみたい。

短命が宿命であり、無惨を殺す事だけに人生を捧げてきたが、気兼ねなく側に居てくれる友人は明悟1人だけであり、耀哉もまた明悟と共に宴会をしたいと思った。

「お館様、明悟さん、折角の宴会なのですから暗い事をしては士気が下がりますよ」  
そんな2人の近くにあまねが来る。

2人よりも歳上であり、明悟にとつてみれば姉のような存在である。

まあ姉をちやん付けで呼んで云いかは不明だが、兎も角逆らえない人である。

「そうだね、明悟。楽しもうか」

「だな・・・それはそうとあまねちゃん。酒は飲んでないよね？」

「飲んでませんよ・・・まさか飲むと思つたのですか？」

あまねの冷たい一言に明悟だけでなく、耀哉も頷く。

「貴方まで・・・2人とも失礼ですよ」

「だって・・・ねえ？」

「後で大変なの俺らだもんなあ」

「そうそう」

容赦のない言い分をする2人にあまねの額に血管が浮かび上がってくる。

(私は別にお酒に弱くないのに・・・)

あまねはそう思いながら、自分の席に戻る。

普段は夫の耀哉の事も考えて酒は飲まない。

それに飲んだのはあまねが成人した時の祝いとして少しだけでそれ以降は全く飲ん

でない。

全く記憶にないが、酒なんて、そんな物だと思ってる。

何故か耀哉と明悟が怯えていて明悟がボコボコになっていたが見ててスッキリしたのでなんとなく気分が良かった。

「奥方、一杯いかがですか？」

酒好きの天元が少しだけ酔ってる状態で絡む。

勿論、天元とてバカではない。そこまで酔ってないが折角の宴会なので全員酔わせて気分良くさせたいと言う《酔ったら親戚のおじん》になる酒癖が漏れ出ていた。

この後、ダメ元で耀哉に絡みに行くのでその前に奥方のあまねに絡む。

因みにしのぶや蜜璃はもう飲ませていて零余子も飲む気は余り無かったらしいが天元にお子ちやま扱いと言う挑発を受けて飲んでる。

あまねは飲む気は全く無かったが、明悟と耀哉の言い方に腹が立ち、飲んで大丈夫であることを示す為にお猪口を出す。

「では、宜しくお願いします」

「はいはい、畏まりました」

天元はお猪口に酒を入れる。

そしてそれをあまねは飲む。

「あ、バカ！」

「ちよつと待つて！」

明悟と耀哉が本気の声で呼び止めるがあまねはそのまま飲んでしまう。



（流石に行冥さん程弱くねえだろ）

天元はあまねに酒を進めてそう思っていた。

長く柱をやっつけていて最初は行冥の酒の弱さにビックリしていたがここまで来ると慣れた物であり、あまねは乾杯の酒は問題なかったから別に極端に弱くは無いだろと天元は確信を持っていた。

あまねが一杯ぐいっと景気良く飲むと、無言でお猪口を天元に突きつける。

「お？奥方、中々良い飲みっぷりですね。さき、もう一杯」

天元は完璧に注いだ。

あまねは何も言わずにもう一回ぐいっと飲んでまた突き出す。

「ヒック・・・」

「奥方、もう酔いました？」

天元はあまねに尋ねる。

飲み過ぎは体に毒でしか無いので心配する。

「・・・つげ」

「は？」

「さっさと酒を注げってんだよ！」

あまねは何とそこら辺にあつた酒瓶で天元の頭を思いつきり殴る。

突然の事に諸に受けて天元は畳にキスをする羽目になり、すぐに顔をあまねに向けるが非常に酔っていた。

「おい、どうした派手忍者。ほら主人の奥方の酒をさっさと注げよ」

目が本気で怖く、天元は直ぐ様別の酒瓶を持って注ぐ。

これまた一気に飲んで結構ぐでんぐでんになるあまね。

「ねえ、天元様。貴方って本当にいつも派手ですね」

「お褒めありがとうございます・・・」

「誉めてねえよ！」

あまねの怒号が飛び、天元は酔いが完全に覚めてるがいつもと違い気が小さくなって

いた。

「毎回、毎回、派手に壊して謝るのが大変なんだよお」

天元には身に覚えがあり、耳が非常に痛かった。

あまねは天元の胸元を掴む。

「ええ？ どうしてくれるの？ この疲労？ あんたと明悟は何時も何時もハチャメチャな事をして隠を過労で倒れさせる気なの？」

因みにこの言葉を明悟は最初に酔った時に言われて変身は言わないように耀哉に言われてた為にどうしようかと思つて、柱になり、公になった事で隠に謝罪に行き、週一で全員分に菓子織を渡すで許されてる。

「お、奥方・・・落ち着いて」

「うるさいー！」

あまねは天元の顔面を殴り、黙らせる。

予想外すぎる拳に天元は混乱で何も言わなくなる。

「何とか言いなさいよー！」

と理不尽すぎる事を言い、更に殴る。

(どうしろつてんだよ!?)

天元はあまりのこの状況に助けを求めようと周りを見る。

「ここで周りの惨状の説明」

義勇としのぶ。

「富岡さん」

しのぶは普段では絶対にやらないような撫で声で義勇に絡んでいく。

(気持ち悪)

義勇は内心、本気で引いていた。

しのぶは姉と戦えた事、姉が義兄と共に敵討ちをやり恨む相手が居なくなった事、そしてここ暫くの蝶屋敷での怪我の手当てなどの激務による徹夜で一杯の酒で完全に酔っぱらってた。

「富岡さんに皆に好かれる良い方法を教えてくださいませよ」

「俺は嫌われて・・・」

しのぶは義勇の頬を引っ張る。



「ほらほら、こんなに笑顔になれば皆に好かれますよお」

(・・・痛い)

頬を引つ張られて痛がる義勇。

しのぶは飽きたのか離して、義勇の腕を掴む。

「良い筋肉ですねえ。私もこれくらいの筋肉があれば・・・」

「・・・胡蝶には胡蝶の戦い方がある」

鬼の首を斬る力がなく、毒で戦ってるしのぶ。

しかし、それは別に力に憧れていないわけではなく、普通に羨ましい。

酔ってる故か言葉が漏れ出たが義勇に急に言われて少しだけドキンとなる。

「(それに俺なんて柱じゃないし、錆兎が本来居るべきなのに何で俺なんだ、津上に代わって貰おうとしたら10人目の柱で全然辞められない)・・・(そもそも最初の山を越えられてない俺が生きるんじゃない。ずっと皆には申し訳ないし、話したくても何を話せば云いか分からないし、何で分からないが不死川や伊黒に睨まれるし、何でこうなるんだ?)」

内心、今の己の状況を愚痴愚痴と鬱陶しくなってきたが基本的に口下手で何も言わない。

対して少しだけドキンとなったしのぶは最早からかう気満々で義勇に絡んでいた。

## 実弥と杏寿郎

「そうか！不死川の弟は今は悲鳴嶋さんの内弟子になつてるのか！」

酔っぱらつてうるさい杏寿郎が実弥と話してる。

「あのバカ野郎、こんな事せずに結婚なりなんなりして幸せになりや良いのになんでんどくさい事すんだよ」

「うむ、不死川は良い兄だな！」

「傷つくのは俺だけで良いのに自分の事を考えないバカが」

「弟が元気だとやはり兄は大変だな！」

どこか嘯み合つてない会話をしていた。

## 小芭内と蜜璃

小芭内は酒で酔ったことはない。

どうも酔えない体質なので不味い水と言う感覚でしか酒に対する物はない。

そして酒を飲んでガヤガヤと騒ぐ宴会も嫌いな類いであるが、参加しないと士気に関わると言われて参加したが食べられない、飲んでも酔えないと良いところなんて無かった筈だった。

「伊黒さん」

酔った蜜璃が笑顔を見せるまでは・・・

（ああ、甘露寺。なんて可愛いんだ！酔った事によりいつもと違うがこれもまた良い！）  
蜜璃が関わりとポンコツになる小芭内である。

「伊黒さん、全然酔ってないですねえ」

「あ、ああ、俺はその酔いにくくて」

「そうなんですか・・・ならもつと飲めば酔えますね！」

「・・・はい？」

「伊黒さんっていつも人の事をネチネチ言ってお喋りですし、文通は楽しいですけどその口元とかが実は気になってまして」

小芭内は口を本気で抑える。

自身の口は鬼に生け贄として一族に育てられて一族が全て殺されて最後に恨まれた

時に裂かれてしまい、人に見せたくない。

醜くて自分の中でも一番嫌いな部分であり、大好きな蜜璃には死んでも見せたくない。

しかし、本気で拒否したら蜜璃が悲しむとポンコツに拍車がかかり、余計に悪化する。「なんて事ない普通の顔だ」

「1番当たり障りのない答えであるが、  
「なら見せてもらっても良いですね!」

酔っぱらってる蜜璃には通用しなかった。

「いや、だから・・・」

「ほらほら飲めば気分が良くなってさっさと出したくなりますよ・・・そうか!皆が居ると  
恥ずかしいですもんね。2人きりなら出来ますよね!」

蜜璃は1人暴走して小芭内の手を引っ張り別室に行こうとする。

「ま、待て甘露寺!」

必死に抵抗するが力が蜜璃の方が遥かに上なのでどんどん引つ張られていく。

男女反対ならば確実に警察沙汰であるがこの場合はどうなるのだろうか?

とにかく、小芭内は必死に蜜璃に抵抗していた。

轆轤と零余子

「良いなあ、彌豆子はあ」

「どうしたんだよ急に？」

轆轤は酒を飲みながら隣の零余子と話す。

杏寿郎がうるさくてしょうがないが何とか堪えていた。

「だって善逸が毎日毎日花を持ってきては告白してるんだよ」

（毎日って……普通か）

いや、絶対に普通ではない。

どっからどう聞いても質の悪いストーリーカーである。

「私も毎日告白されたいなあ」

「誰にだよ」

「善逸が良い、私、善逸に告白されたら一生着いていくよ」

「……もう自分からやった方が早くないか？」

「私は告白されたいの！」

「なんて真つ直ぐにわがまを言うやつなんだ」

「やかましい！」

「そんな嫉妬深くやつてるよりも料理の腕を鍛えた方が良いぞ。俺の嫁なんかなあ、最初は炭になってたがそれから無茶苦茶上手くなったぞ！ 普段は内気な癖にここぞでは気丈と言うか頑固で凄く美しく最高嫁だったんだ．．．他に」

「轆轤は酔ってるせいかわ嫁の自慢を始めていて零余子は全く聴かずにまだ嫉妬していった。」

-----  
とこんな風に殆どが酔っぱらって誰も役に立つ状況ではなかった。

（そうだ、津上とお館様は！）

天元は最後の頼みとして2人を見るが2人とも四つん這いになって逃げるかのように部屋を出ようとしていた。

「明悟、上手く逃げられるよね？」

「当たり前だ。俺を信じろ。てか酔ってるあまねちゃんには関わらないのが一番良い

！」

「間違いない！」

穩健聖人君子な耀哉ですからあまねの酒乱は嫌なようで盲目なのでゆつくりとそして明悟も器用に耀哉の前に行つて逃げてた。

「お館様！津上！助け・・・」

「私を無視するじゃないよ！」

あまねは天元をそのままぶん投げる。

身長も高く、鍛えてるから体重も重い天元を良く投げられる。

（もう、あまね様には絶対に酒は注がねえ）

飛ばされながら天元はそう思い、投げ飛ばされてまだ蜜璃に抵抗していた小芭内の方に行く。

「な、何だ!？」

「どけ、伊黒！」

小芭内は突然の事で避けられず、2人とも思いつきり頭どうしがぶつかり、打ち所が悪かったのか気絶する。

しかも運悪く天元が小芭内を押し倒した状態で気絶してしまい、これをマジかで見てる蜜璃は、

「伊黒さんと宇髓さんってそういう関係でしたのね」

と酔って冷静になつてない頭で盛大な勘違いをしていた。

「酷いわ、伊黒さん！」

蜜璃はそのまま泣いてやけ酒を始めた。

散々な小芭内である。

「おら、派手忍者。さっさと起きろ！」

あまねはそのまま暴れていた。



一方、宴会から逃げてきた明悟と耀哉の2人は耀哉の自室にいた。  
耀哉を布団に入れて明悟は去ろうとする。

「明悟、もう行くのかい？」

「耀哉はゆつくり休まないと」

「もうちよつとだけ、居てくれないか？」



耀哉の言葉に明悟は側に座る。

「ありがとう」

「良く見えてないのに俺の動きがわかるな」

「だって明悟はこういう時には側に居てくれるからね」

「何でもわかると思うなよ」

「勿論、明悟とカナエの事は教えて欲しかったなあ」

「それは・・・」

「まあ、明悟の事だから恥ずかしくて言えなかったんだろ？」

「ギク！」

「凶星だね・・・それはそうと私とあまねと明悟が三角関係だって噂が流れてた時があったねえ」

「ああ、あったあった。俺はあまねちゃん苦手なんだけどなあ」

「明悟はあまねには逆らえないからね」

「うーん、なんでだろ？」

「あまねは明悟にとっては姉なのかもね」

「姉ねえ」

他愛もない会話をする2人。

笑いあつて鬼とは関係ない話で終始穏やかに会話していた。

「明悟は死なないよね？」

耀哉は明悟に聞く。

口調が強かった。

「短命で友達なんか出来なくて隊士も死んでいって・・・明悟は居なくならないよね」

「死ぬかよ。それに俺の夢知ってるか？」

「なんだい？」

「お前と一緒にあちこち旅をやりたい。宛もなく、目的もなく、景色を楽しんだり、人や獣と触れあったり、一緒にこの国だけじゃなく、世界を見ようぜ！」

壮大な夢だった。

そしてそれは絶対に無惨の呪いを解くと言う明悟の信念が宿っていた。

「ああ、行こう。あまねや子供達も連れて皆で行こう」

「良いな、それ！・・・それまで負けるなよ、約束だ」

「ああ、約束しよう」

指切りをする2人。

明悟は立ち上がり、今度こそ寝室から出ようとする。

「明悟・・・君と親友で良かった」

「……俺は親友とは思ってない……」

明悟のまさかの一言に耀哉はシヨックを受ける。

この友情が一方通行だなんてあまりにも辛い。

「俺は《兄弟》だと思ってる」

明悟からの一言に耀哉は笑う。

「なら、あまねは本当にお姉さんになるね。となると私は兄になるから兄ちゃんと呼んで良いよ」

「誰が呼ぶか！それにどっちかって言うとな俺が兄だろ？」

「は？」

明悟と耀哉はどちらが兄かと言うことでこの後、2人とも寝るつもりだったのに喧嘩していた。

耀哉の援助を任されてるひなきとにちかが来るまでの二時間ずっと喧嘩していて2人とも大の大人なのに子供達に怒られると言う自体になり、後日皆で笑った。

酔っぱらい組はと言うと、まず杏寿郎と実弥は問題を起こさなかった上に悪酒をしてなかったその後日宴会の内容を覚えていてもまともだったので問題なかった。

行冥も一発で寝ただけなので付き合いの悪さに自己否定をしていて玄弥に慰められていた。

義勇はさっぱり忘れていて、絡んでたしのぶはよりによって義勇に絡み酒をしていたのに暗い気持ちになっていった。

轆轤や零余子は2人とも言いたいことを言っただけでたくさん言えたのでスッキリしていた。

蜜璃は完全に二日酔いの上に小芭内と天元の事をまだ勘違いしており、小芭内を避けてた。

そして1人記憶が確りしていた小芭内はあまりのシヨックに寝込んでいた。

天元はあまねの酒癖の悪さに心身ともにボロボロで嫁の3人に癒して貰っていた。

そして大暴れをしていたあまねは覚えてなく、いつもの業務へ戻っていた。

1人酒を飲んでない無一郎は覚えられないのでまた忘れていた。

結果として小芭内1人が割りを喰ってそれを蜜璃に相談された明悟は悩んだが、  
轆轤が・・・

「男なら名前で耳元で囁くように呼べば元気になる」

「と言い、赤面しながらも実行したら1発でいつもの百倍は元気になり、任務に戻っていた。」

それから、蜜璃は2人きりの時は・・・

「小芭内さん」

呼びになり、後日小芭内はやってくれた轆轤に多大な感謝状と菓子織をして、  
「鬼は嫌いだし、後で裁きは受けてもらうが信じる」

と轆轤や零余子を認めていた。

## 義妹しのぶ

しのぶは本気で地獄を味わっている。

左隣では義兄である明悟が腹を抑えて苦しんでいて、これまた見てて辛い。

そして右隣では義勇がイキイキとした表情で台本を持っていた。

そうまたあのドロドロな内容のえげつない朗読 “超おままごと” を今度はしのぶと明悟と義勇の3人でやるはめになったのだ。

(胃が痛い)

(なんでこんな事に!?)

(初めてやったが楽しいな!)

約1名以外、胃痛を味わっており地獄を味わっていた。



事は3時間前に遡る。

鉦山の激戦から1ヶ月、しのぶは漸くその時の隊士の治療やなんなりが終わってきたのだ。

全然、回復出来てない者がまだ多いが、全員目が覚めて危機的状况は去ったので後は薬を飲むなり、安静にするなり、リハビリするなりをすれば良いだけなので、しのぶからすれば特別に何かをやる事が終わり、隠の医療班が今、アオイ達のサポートをしていて連携や引き継ぎも確り出来たので、蝶屋敷の面々は3日の休養を貰い、のんびりする事に決めた。

カナヲやアオイ、なほ達は買い物に出掛けたり、なんなりして満喫している。

で、自分はと言うとこれと言ってやることもないので趣味の怪談を聴きに行つて初日でやりたいことを満喫したので、今日は何をしようと思つていた。

「カー・カー！胡蝶しのぶ、胡蝶しのぶ。至急本部に来るべし！来るべし！」

休暇とされたが、柱になってるので別に急に言われても問題ないし、それに休暇でやりたいことは昨日の内にやってたので素直に銃鳥の伝令に従い行く。

産屋敷に着くとしのぶは隠に庭に行くように言われて行ってみるとそこには明悟と義勇がいてしのぶはもうこの時点で胃痛を感じ始めていた。



明悟はまたもやひなき達と遊ぶ約束をしていた。

絶対に《あれ》だと思い、明悟はどうしようかと思っていた。

天元や蜜璃を捲き込み、そして杏寿郎や実弥に炭治郎達も捲き込んだ。

勿論、ほぼ事故のような形ではあるが、耀哉も明悟が柱になってから容赦なくほぼ全柱を監視と言う面目で捲き込ませて少しでもひなき達のを何とかしようとしているがひなき達からすれば明悟以外にも参加してくれる人が出来たので寧ろ悪化している。

この家系の関係上、自由に遊ぶこともままならないので耀哉やあまねも自由に遊ばせたいのだが、何故にそれがよりにもよってドロドロな愛憎劇なんだとどこでこうなったのか頭を悩ましてる。

そしてその元凶の一人である明悟も同じようにどこでこうなったのか悩ましてた。



こうして明悟はまた胃痛を感じながら、産屋敷家の庭に來ると、珍しく義勇がそこにいた。

「・・・なんでいるの?」

「(お館様に呼ばれた)・・・お前こそ(なぜ呼ばれたんだ?)」

「呼ばれてと言うか遊ぶ約束をしていて」

「あれか・・・」

「あれだ」

「・・・楽しそうだな」

「はあ!?!」

明悟は何ともぶつ飛んだ事を言ってる義勇に驚く。

割りと本気で驚く。

「義勇君、大丈夫か?その頭の方は?」

心外だと言わんばかりに義勇は明悟を睨む。

流石に腹が立つてるようだが、あれを楽しそうと言う奴の方がぶつとんでる。

そしてそんな状況の所にしのぶがやってくる。

「しのぶちゃん」

明悟がいつもの呼び方をした瞬間にしのぶは後ろを向いて立ち去ろうとする。

「つて、ちよつと待つて！」

慌てて明悟がしのぶの肩を掴んで止める。

「なんですか？」

「いやいや、何帰ろうとしてんの？」

「あれは嫌なんです」

笑顔で明悟に言うしのぶ。

「なんて爽やかに言うんだ」

「ですので、さようなら」

「いや、行っちゃ駄目！」

しのぶを止める明悟。

そんな2人を見ながら、

「フツ」

と義勇は鼻で笑う。

それを聴いてたしのぶは笑顔で義勇の方を向く。

「なんですか？富岡さん？」

「いや、胡蝶は逃げるんだなと思って」

しのぶ額に血管が浮かび上がる。

富岡的には休むのかぐらいの意味合いのだが、明らかに言葉使いが間違ってる。

しかしこの無口は全くそれに気づいてない。それどころか鉾山の激戦で煌鬼と連携した時に声を出さなくても感謝の心が煌鬼に伝わってしまったので余計に悪化している。

「は？富岡さん、誰に向かって物を言ってます？」

「胡蝶以外にいないだろ？」

「ちよつと火に油を注いでどうするの!?只でさえ老けてるのにこれ以上怒ると余計に老けて来年には本当にお婆ちゃん呼ばわりされて良からぬ噂が出るよ。そう考えないの？失礼だな君は」

「一番失礼なのは義兄さんよ！」

火に油を注ぎまくってる明悟にぶちギレたしのぶが脳天に踵落としをして沈める。

ピクピクとなってるがこれくらいでは絶対に死なないと言う確信があった。

「そうか胡蝶はお婆ちゃんなのか」

ポンつと手を叩き、変な納得をする富岡にも鉄拳制裁をして沈める。

2人とも伊達に柱を名乗ってないのでデッキカイトンコブを作って起き上がる。

「もう本当の事を言っただけなのに」

「まだ言います？」

「だってカナエよりも本当に老けてるよ」

まだ失礼な事を言う明悟に今度は金的を喰らわす。

急所を抑えてのたうち回る明悟。

しのぶは笑顔ではなく、本気の睨みで義勇を睨む。

やられた義勇は冷や汗を掻きながら黙って座った。

「叔父様!」

ひなき達がやって来てのたうち回ってる明悟に駆け寄る。

「叔父様どうしたのですか!」

「いや、ちょっと痛くて・・・」

ひなき達が首をかしげる。

そんな中、耀哉があまねに援助されながらやって来る。

しのぶと義勇はキチンと座るが明悟はまだのたうち回ってた。

「明悟はまた失礼な事を言っただね」

「なんで、そうわかるの?」

「大体明悟がのたうち回ってたら余計な事を言っただ怒られたぐらいしかないからね」

「凶星だったので明悟は沈黙することにした。」

「義勇としのぶにはひなき達と明悟の遊びを一緒にやってほしいんだ。お願い」

「御意」

「お館様、なぜ私達なのですか？」

「天元や蜜璃はやるくらいなら籠ると言つて自宅で昨日から籠城中。小芭内も一緒に籠城を始めて、行冥は盲目なのでそもそも読めない。実弥と杏寿郎に関しては任務で奔放中。それを他の隊士に回そうとしたら自分達でやります。やらせてくださいと直談判したんで回したんだ。無一郎は今も調べる事が出来たつて言つて刀鍛冶の里へ行つて空いてるのが2人しかいなかったんだ」

「他の隊士の任務を回して下されば」

「それがしのぶや義勇に回そうとしたら、他の隊士達も断固として離さなくて休暇中だった2人に白羽の矢が当たったんだ」

しのぶはこんな時にやる気に満ち溢れてる隊士や柱を呪つた。

実はこの前の缶けりで実弥や杏寿郎や善逸や伊之助に明悟が大声で暴れて、《ひなき達の遊び》がほぼ全隊士に尾ひれ付きでバテており、何よりも明悟を知らない隊士を中心に《柱と一緒にの空間にいるのが嫌》と言う状況になっている。

明悟も初めて不特定多数の隊士に見られて戦つたのが鉾山の時でその時の明悟は誰よりも集中して近寄り難い雰囲気を出しまくつてた上に無惨に対する激昂の上にアギトの強さと言ひ、他の隊士からは超真面目な堅物の柱と認識されてしまった。

本当は全柱の中で一番親しみやすい柱なのに。

さらにひなき達の遊びで実弥が大声で絶叫する羽目になったので《ひなき達の遊び》柱も絶叫する遊び》となつてしまつて誰もかかわり合いたくない。

これには先日捲き込まれた炭治郎達も同じである。

そして轆轤や零余子に關しては明悟の家の外に出ることを禁じられて軟禁状態であり、簡単に出られないのである。

こんな感じでのぶはよりにもよつて明悟と義勇と苦手な男2人と一緒にドロドロの愛憎劇をやるはめになつた。

笑顔でひなき達が準備をするがしのぶや明悟にすれば地獄への幕開けに過ぎない。唯一と言うか義勇は何ともワクワクしながら待つていて、2人の頭に血管が浮かび上がる。

「準備が出来ました」

「来て下さい」

ひなきとにちかが悪意なしで言うが余計に質が悪い。

悪意ありの方がまだマシだと2人は思いながら、渡された台本を読み、一切の感情を消した。

●●●  
例によつて役回り。

明悟・・・社長

しのぶ・・・社長の義理の妹（義妹）

義勇・・・御曹司

輝利哉・・・社長秘書

ひなき・・・御曹司のストーカー

にちか・・・社長夫人

かなた・・・記者

くいな・・・警察

始まりは御曹司と義妹のお見合い。御曹司は義妹に惚れてしまうが、義妹は断る。実は義妹は社長と不倫をしていたのだ。また夫人もその事を理解してどうにかして社長から全てを奪いたがっていた。また妹を破滅に追い込もうとしていた。そこで御曹司に接触してしまうがそれをストーカーが見ており、シヨックのあまりその情報を記者に売る。姉の不始末をつけようと義妹が交渉に行き、体でそれを買う。記者からの要

求は次第にエスカレートして行き、遂に義妹は記者を殺してしまふ。今度は社長秘書にそれがばれる。秘書はどうかして社長を手にいれようとしていて、夫人は夫人でどうかして会社を手に入れたかつた為に同盟を結ぶ。

ボロボロの義妹は社長に助けを求めるも隠蔽できるほど権力が無いために助けられないと言う。そんな中、一目惚れした御曹司が助ける代わりに結婚を申し込み、結婚する。情事に耽るがいつも義妹の中には社長がいた。そして心が弱つてた社長に秘書が優しく包み込むように癒す。そして社長は秘書と夜を共にする。夫人は男と交わつた社長をこのネタで会社から追い出すどころか不倫された恨みで抹殺まで考える。そして唯一の肉親である義妹に真実を伝えるが社長を守る為に実の姉を殺害。その事が社長に伝わり、社長は初めて義妹に対して恐怖し、最早自身の社会的地位なんて気にせず警察に通報。御曹司がまた隠蔽するが社長以外に眼中にない義妹に遂に腹が立つ。しかし義妹の事は好きなので社長をどうかしようとするが最早、社長を盲信してる義妹にバレてしまい、バラバラ死体にされてしまふ。

全身血塗れになりながら警察に終われながらも義妹は社長の元へ行く。しかし社長は秘書と共に逃げてた。最早、社長にとつて愛する人は義妹ではなく秘書であつた。義妹は遂に社長の元へ帰ってくるが拒絶される。

義妹は笑い、持っていた銃で秘書を殺し、社長すらも殺す。そして警察が最後に見た



のは社長の死体と情事に耽つてゐる義妹の姿で笑いながら、彼女は自分の頭に銃弾を放つて死ぬ。

とまあ、またもやえげつない内容で、更に狂氣の世界に深く入つていた。

明悟も流石にこれは不味いと思う。そして今回の主役をさせられる事になつたしのぶは、真つ白に枯れ果ててた。

そして、不憫な役回りの御曹司をやることになつた義勇はと言うと、興奮していた。明悟は隣でそれを見ながら、本気で義勇に対して引いていた。

その全容の一幕を抜粋する。

義妹が御曹司を殺す所。

「ま、待つてくれ！頼む。殺さないでくれ！俺を殺しても何も良いことなんかないだろ？」

「あの人（社長）を守るし、この嫌な生活からも逃げられる。良いこと尽くしです」

「そんな、全て君の為にやつたんだ！頼むよ。一体俺の何がそんなに気に入らないんだ？」

「夜があの人よりも下手だからです。では死んでください」

「や、やめ、やめろおおお!!!」

※あくまでも台本に則つた上の行動です。

社長と秘書を殺す所。

「見つけたあ。ねえもう逃げないでください。私の愛を感じてください。この思いを！」

「無理だ、君は怪物だ」

「どうして!? 全て貴方の為なのに!? 私だけを愛してください。そこにいる秘書風情など捨てて私の所に帰って来て下さい、もう一度愛し合えば全てが元通り……」

「無理だ、それに元々愛してない」

「ふ、ふふ、フフハハハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!! ……ならば死んで愛し合しましょう」

何度もくだいですがこれは台本に則った上の行動です。

こうも狂気的な内容をひなき達が書くとは明悟は本気でどこで教育を間違つてしまったのか悩む。

明悟は明悟でまた最低男であり、しのぶは妄想癡逞しい女になり、義勇は何とも言えないポンコツ感溢れる御曹司と、どうやればこうなるのか明悟としのぶには分からなかった。

そうこうしてるとひなきの最後の語りが始める。

「愛とは不変であり普遍である。しかしそれゆえに人が苦しみ、狂気の渦に囚われる事もある。産屋敷ひなき・産屋敷輝利哉著『美しき義兄妹』」

これまたどこが美しいのやら、なんとも皮肉的な題名であり、終わると同時に明悟は仰向けになる。

「終わった〜！」

疲労を感じながら、明悟は自分を誉めてやりたいくらいだった。この前の殿と同じく、らしいにクソな役をさせられたので終わったのはホッとした。

「次はこうしよう」

「いえ、この前の案の採用を」

「ちよつと待って、次も新しくする話じゃ」

「冗談じゃない」

「もう、わがままばかり言って〜！」

ひなき達は次の話の打ち合わせをしていた。

明悟は内心、もう少し甘いのをやりたいと思つた。

「ふう、疲れましたね」

「そうか？」

心なしかやつれてるしのぶにケロツとしてる義勇。

明悟は一体どうすれば、そんなになれるのか義勇に対して疑問が出来た。「では私はもう行きますね」

しのぶはそう言つて、立ち上がる。

「あれ、意外と平気？」

「所詮は役ですから」

明悟の言葉に笑いながら言うしのぶ。

そしてそのままその場からしのぶは去っていった。

因みに義勇はひなき達のこれが気に入ったらしく、次は何時かと聴いてた。

明悟は何故、普段が無口無愛想な義勇がこれだと饒舌になるのか本気で理解出来なかつた。



しのぶは蝶屋敷に帰ってくる。

そして自室に戻り、片付けるのを忘れてた自分の布団にそのまま飛び込んだ。

「あゝ、疲れた」

そしてそのまましのぶは寝た。

徹夜だろうが任務終わりだろうが良くも悪くもしのぶは鬼殺隊のブラックな環境に慣れてるし、柱の中でも1、2を争う程の激務をしている。

そんなしのぶが1発で寝込むほどひなき達のおままごとはキツかったのだろう。

と言うか、明悟とカナエの関係を知って、明悟の事は義兄呼びになってるがそんな相手と不倫でしかも気狂いな女で更に三角関係の相手役は義勇としのぶにとっては疲れる要素しかなかった。

しのぶは普段なら隊服から寝間着に着替えて布団を確り被って寝るがもうそんな事をキチンとやる元氣すらなかった。

「師範、ただいま戻りました」

カナヲがアオイ達の買い物から帰って来てしのぶの部屋の扉を開ける。

何時もは確りと寝てるしのぶが雑魚寝をしていてカナヲは目を擦るなどして何回も見るが結果は変わらない。

コインを弾いて表が出るとカナヲは部屋を後にし、アオイ達に来てもらう。

アオイ達もこの普段なら絶対にあり得ない状況にしのぶに近づく。

「しのぶ様、大丈夫ですか？」

「~~~~~」

イビキで返事をするしのぶ、全く起きる気配などない。

揺すつても起きない。

流石にこのままだと体に悪いので蝶屋敷の面々で羽織を脱がして、髪が痛まないように髪止めを外して、アオイとカナヲがしのぶを持ち上げて、なほ達が布団をキチンとするなど協力してしのぶを寝かせた。

翌日、しのぶは皆の為に菓子を買に行こうとしのぶが無事かと心配してきた明悟と一緒に菓子を買に行った。

※しのぶがここまで疲れるひなき達の遊びに蝶屋敷の面々も興味を持ってしまい、ひなき達が終わったなら「善意」で渡してくる。超おままごとの本を明悟は彼女らに渡してドロドロ過ぎておまけに基本的に破滅的な結末しかない「あれ」に対して引いていたがカナヲに關しては自分の過去が本よりもえげつなかつた為か普通に絵空事として楽しんで読んでおり、明悟が持ってた前回までの《戦国愛憎劇シリーズ》を全巻貰い、楽しく読んでいた。

しのぶは本を渡した明悟にスープレックスをしてボコボコにし、禁書にしようとしたがカナヲのなんとも言えない小動物的な目にやられて禁書に出来なかつた。

カナヲの休日の行動に《超おままごとの観覧》が追加されたのは言うまでもない。

## 轆轤編 誰かが君を愛してる

## 轆轤

彼は山で猟銃を持って歩いてた。

しがない腕もあまり上手くはない信楽焼職人で、それだけだと家計が非常に苦しく、年老いた母親を養えないので、こうして猟をして食いぶちを稼いだり、毛皮を売って二束三文の金にして何とか生きてる。

彼の名前は《芦原轆轤》。

この蕪前岳に病に犯された母親と2人で一生懸命、貧乏ながらも生きていた。

そしてこの日も山の中を懸命に猟銃を持って進んでいくが獲物なぞ見当たらず、空手で帰る羽目になったのでキノコなどを取って帰ろうと下に注意しながら進んでいくと、とある木の根本に血があつた。

それは木の裏側に続いていて轆轤は猟銃に散弾が入ってるのを確認して構えながら、裏側に行くと言がいた。

男物の着物をして足や肩や腹にクナイが刺さって瞳が閉じてた。轆轤は脈を見ると動いてたので生きてるのがわかり、見捨てるかと後味が悪かったのでおぶり家に連れてい



く。

村で常駐してゐる医者に助けてもらい、今度信楽焼の湯呑みをただでやると言う話でつけて手当てをさせる。

クナイには毒が塗られていてどうなるかと思つたが彼女が毒に耐性があつたのか奇跡的に命は助かり、看病した。轆轤からすれば年老いた母親ともう一人追加されただけなので自分の分を減らすだけで良かったし、母親も人助けをした息子の轆轤を誇りに思ひ、了承した。

彼女が目覚めて警戒したが母親が持つ人の暖かさに警戒を解いた。すぐに出ていこうとするも傷だらけでポロポロの上に追われてると言つたが傷だらけの彼女を見捨てるほど轆轤はクズじゃなく、回復するまで居ろと言ひ、そのまま居ることになり、回復すると彼女はそれまでに追つ手が来なかつた事から追つ手が死亡と判断したんだと認識した。

出ていこうにもこれまでの貸しが大量にあり、申し訳なかつたので彼女は獵をした。轆轤は蕪前岳で生まれ育つたので自分よりは少ないと思つていたが自分よりも遥かに多い量の物を取獲してきた。

母親も彼女が気に入つたし、轆轤もありがたかつた。そして何処に行こうか決まるまで居て言ひと一家の主の母親が言ひ、彼女は泣きながら「居させて下さい」と言つた。

それ以来、轆轤は家業である信楽焼に専念できるようになり、彼女も猟をして稼いだ。轆轤の腕もめきめきと上がり、母親の医療費をこれまででは捻り出していたがその心配が無くなる程だった。

轆轤は彼女に感謝した。彼女が居なければ母親の医療費が払えなくなり、より苦しむ所だったところを彼女は助けてくれた。

彼女もまた轆轤の優しさに感謝した。

2人は夫婦になった。

そして母親もこれを祝福したが、彼女にはある問題があった。

《毒で子供が産めなくなっていた》

医者からそう言われて轆轤も母親も気にするなど言ったが彼女は轆轤が家業を誰かに継がせたがっていたのを知っていた。

落ち込ながらも彼女は稼いだ金で米を買に行った。

とにかく食べて明日考えようとしていた。

そんな時に彼女は悪徳警察官《蛭川》に目をつけられた。蛭川は彼女を村の離れの小屋に連れ込み、手足を手錠で拘束して乱暴を働いた。

彼女が帰ってこない事に不審に思った轆轤が探しに来て蛭川を殴り蹴りまくり意識不明にして病院送りにした。

警察が轆轤を逮捕して、刑務所送りになる。

裁判をやる前に蛭川が病院でそのまま死んだので轆轤は殺人者となった。

刑務所の中で轆轤は彼女から手紙が届く。

母親の病が悪化したのだ。

轆轤は刑務所から出ようとしたが出られるわけもなく絶望の中にいた。

そんな轆轤にアイツはやって来た。

「恐ろしい、人間とは恐ろしいものだ」

人間ではなかった。

常に怯えていて不気味な存在だった。

コイツの名前は「半天狗」。

十二鬼月の上弦の肆である。

半天狗は過去に死刑にされそうな状況の中を無惨に助けもらったので、刑務所の中にいた轆轤に同情した。

そして轆轤を鬼にして脱走させた。

一晩で轆轤は人智を越えた鬼の肉体を駆使して蕪前岳にいる家族の元へ行く。

しかし、彼女達は死んでいた。

「うあああああ!!!」

全身の骨と言う骨が折れて、奇怪な形で拘束されており、口から2人の小さな小さな聞こえないと思うほどの小さな悲鳴だけがずっと出ていた。

轆轤は絶望した。

そして悲鳴を出し続けて残酷に殺された2人を彼は「食った」。

鬼の血の進行と2人を何とかしようと言う思いが最悪の融合をしまい、轆轤は愛する家族を食べた。

そして人としての記憶も失い、轆轤は鬼になった。

これが轆轤が明悟と鼓屋敷で出会う前の過去であり、20年前の出来事である。



明悟と轆轤、零余子は明悟の自宅にいた。

そして炭治郎達もいた。

炭治郎はヒノカミ神楽の事を調べていて杏寿郎に協力してもらっていたが一向に進展していなくて埒がいかない状況になり、焦ったところで出てこないで明悟の家で善逸や伊之助や禰豆子とのんびりする事になって、明悟は伊之助に付き合い特訓、善逸は零余子と一緒に禰豆子に花を渡すために庭で花摘をしていて、轆轤と炭治郎と禰豆子は居間にいた。

会話は無かった。

そもそも零余子は無害と判断した炭治郎であるが轆轤に関してはとりあえず味方と言う認識であり、轆轤もまた鬼殺隊はあくまでもとりあえずの味方であるので仲良くする道理など無かった。

趣味とか休日によりたい事なんてない轆轤はダラダラしていた。

そのダメ親父としか思えない姿に余計に炭治郎の中での轆轤の株が下がっていく。絡む理由も無いので炭治郎は日輪刀の手入れをしようとして刀剣油や打ち粉を用意する。

ポロポロの刀身でこれまでの激戦を物語っている。

炭治郎が油を湿らした布で刀身に触れた瞬間、

ポキッ！

遂に限界が来たのか、折れた。

「なああああー?!?!」

「な、なんだ!?!」

炭治郎の絶叫に轆轤が起き上がり、炭治郎を見ると折れた自分の刀を抱えていた。

「どうした!?!」

明悟を初めに屋敷にいた全員が居間に来る。

「炭治郎君、どうしたの?」

「刀が折れました・・・」

全員が突然の事に驚く。

とりあえず、怪我が無かったので明悟も刀の修理の依頼の現状がどうなったか知りた  
いので龍悟に頼んで2人の手紙を持っていつてもらう。

3時間後、龍悟が1通の手紙を持って帰ってくる。

明悟と炭治郎がそれを受けとる。

他の面々は各自好きな事をやってる。

「ありがとう龍悟」

「これ以外にはないな?」

「ああ、いつも悪いな」

「気にするな」

隊士と鳥の対話に周りは聞こえなかった。

「堂島兄貴！」

「天王寺か」

炭治郎の鳥の天王寺松衛門が親しそうに話しかける。

「兄貴、お勤めご苦労様です」

「おう」

「え？龍悟って鎧烏だと結構偉いの？」

明悟が初めて龍悟と他の鳥の絡みを見て首を傾げる。

「偉くないぞ俺は、他が勝手にそう呼ぶだけだ」

「そんな!?俺を舎弟にしてくれるって」

「言っていないぞ」

「俺に娘さんを紹介するって」

「いや、それはアイツの自由だろ」

「ちよつと待って！」

明悟が龍悟と松衛門の会話を止める。

「龍悟って娘が居たの？」

「おう、今霞柱の烏で息子もいるぞ」

「息子お!?!てかそもそも結婚してたの?」

「ああ、お前の女房の烏とな」

「何時から?」

「お前らが喧嘩してる時にもう交尾やってたぞ」

「はや!?!」

「お前らが遅いだけだ」

「因みに息子は?」

「今、カナヲって隊士の烏をやってるぞ」

「世間って狭いんだな」

「それよりも早く帰りにえからもう帰るぞ」

龍悟はそう言つて帰つていき、松衛門も後を追つていった。

「烏ってなんでしようね?」

「なんだろうね?」

明悟はそう言いながら、手紙を開ける。

そしてそれには



『お前らにやる刀はない』

『よくも折つたな。よくもよくもよくも』

『死んで償え！』

『竈門の不運で津上の刀が脆くなった。許さない許さない許さない』

『万死に値する』

血で書かれてた。

(うわあ、完全にキレてる)

完全に怒り心頭な2人の鍛冶師の蛭に対して明悟と炭治郎は冷や汗を掻いていた。

2人は蛭に謝る為に好物のみたらし団子を持つて後日向かう事になった。



後日、明悟、炭治郎、轆轤、零余子は隠に連れられて刀鍛冶の里へと向かった。

明悟と炭治郎は刀を打って貰う為であるが、他の面々は何故に行くのかと言うと、2人ともあくまで明悟の監視があるから自由に動いているのであってその明悟が居ない

と家から出れなくなるので、付いていった方が楽だからである。

鉾山の時に一緒に戦った轆轤と零余子であるが鬼殺隊の甲から下の隊士達に存在が知られてどうなるかと思われたが、他の隊士達は何も言ってこなかった。絶対に2人の被害者がいない分けないので鋸鳥を使って調べると2人とも鬼の姿から人間に戻ったので他人の空似だと思われてた。

おまけに血鬼術が使えなくなってるので確認の方法もなく、更に柱や耀哉などから協力しろと命令が降りてるので下弦の鬼に似てる別人だと思われてた。

訂正すると暴動が起きそうだったのでこのまま無惨を倒すまでこの状態で行くことになった。



刀鍛冶の里は巧妙に隠されている。

何名もの隠と何匹もの鳥によつて複雑に進んだ先に里がある。そして鳥も隠も頻繁に交代する為に誰もそこまでの道を覚えきれずにいる。

炭治郎も明悟、轆轤、零余子は隠におぶられながら進んでいく。明悟達は目隠しに耳栓に鼻栓と徹底されていた。更に明悟や轆轤、零余子の鼻栓には特殊な薬草が染み込ん

でいてこれまた強烈であり、アギトの超感覚を狂わしていた。

そして里に着き、全員が目隠しなどを外されて明悟、轆轤、零余子は思いつき近くの茂みにゲロを吐いた。

「だ、大丈夫ですか!？」

炭治郎が心配してくるが決して大丈夫ではない。

3人ともゼーハーとなりながらもなんとかなったのでそのまま隠に礼を言つて長である鉄珍の家に行く。

実は明悟と轆轤と零余子のはヤバい位に危険な物でもしも炭治郎にこれがされてた場合、絶対に途中で我慢できずに堪えられなく程であり、例え堪えきれても2日は役に立たなく成る程の強烈な物で作ったしのぶでさえも流石に不味いのではと思つた程であるが、先日のだっちが兄かで喧嘩して尚且つ子供達のあれが悪化した事に対する個人的な私怨で耀哉が許可を出したのである。

(耀哉〜!覚えてろよ!!今度あつたらタコ殴りにしてやる!)

後で絶対にやり返す気満々な明悟であつた。

そして轆轤や零余子はこの2人の下らない争いに完全に捲き込まれていたが、(ここまでやったらそりや、わからないよな(ね))

とここに来るのは初めてな為に盛大な勘違いをしていた。

●●●  
4人はそのまま、里の長である鉄珍の家に行き、客室で正座してる。

前には鉄珍と鋼蔵と他にも2、3人の刀鍛冶がいた。

鉄珍が言うには今、蛭は何処かへ雲隠れしてしまい、他の鍛冶師達も探してるらしく、かなり血気盛んな状況で全員が引いていた。

そしてそんな状況でも炭治郎は鉄珍と世間話をするほど仲良くなってこれはこれで凄いと明悟達は思った。

暫く雑談して明悟達は全員で名物の温泉に入ると決めてそこまでの道を歩いていく。楽しみにながら、温泉への道を進んでいく。

「あ、津上さーん！炭治郎くーん！芦原さーん！氷川さーん！」

温泉の方から浴衣を着た蜜璃が半分泣きながら、降りてくる。

「聞いてよ、聞いてよ、私今そこで無視されたの、挨拶したのに無視されたの、酷いと思わない？私柱なのに、お風呂上がりのいい気分がもう全部台無し!!」

めそめそめそとしていてなんとも柱には見えないような行動である。

「あ、もうすぐ晩御飯が出来るみたいですよ。松茸ご飯だそうです」

「え、ほんと?」

炭治郎が晩御飯の話題を振るとすぐに上機嫌に戻って下に降りていった。

明悟達も早く温泉を浴びてゆつくりしたいので急いで上に行き、零余子と禰豆子は女性なので明悟達と別れた。

因みに禰豆子は最初は男風呂の方にするべきかとなつたが零余子が一緒に入りたがり、禰豆子も同じ感じだったので別れた。

明悟達が温泉に入ろうとすると、たん玄弥がそこにいた。

何やら口に手を当てていて、何をしているのか分からなかつた。

「不死川玄弥!」

炭治郎が声をかける。

「死ね!」

間髪入れずに罵倒する玄弥。

炭治郎は諦めずに服を脱ぎ、温泉に入りながら近づく。

「元気にしてたか!」

「気安く話しかけんじゃねえ!」

炭治郎の頭を掴んで無理矢理喋りを止めて不機嫌になりながら、玄弥は温泉から出た。

出るときに明悟と轆轤には何も言っていないが頭は下げたので、嫌いなのは炭治郎だけかと明悟と轆轤は思い、温泉ではゆっくりする事にした。

どつぷりと湯に浸かって3人とも体をゆっくりほぐしていた。

一方その頃、零余子と禰豆子は2人でワイワイとはしやぎながら楽しんでいた。



温泉から出て、蜜璃と合流して食べれない禰豆子は近くでゴロゴロし、他は一緒に晩御飯を食べるが蜜璃もそうであるが明悟、轆轤、零余子も食べる量がかなり多い。

明悟は元々大食いであるが轆轤と零余子に関しては鬼の時に食べれなかった事がまだ辛いのかそれを取り戻すかのようにガツガツの食べてた。

「皆さん、凄い食べますね」

炭治郎が素直に感心する。

「え、そう？今日はそんなに食べてないんだけどなあ」

「そうか？」

「そう？」

「炭治郎君もどんどん食べて育ち盛りなんだから」

「はいー！」

全員でたくさん食べて一息付くと蜜璃が自分の日輪刀の調整の確認をしに別れた。

明悟と炭治郎は翌日、雲隠れをした蛍を探しに行くために寝ることにし、轆轤や零余子もやるのが全くないので寝ることにした。

## 熱血大特訓

芦原轆轤は朝が苦手である。

鬼になつてた影響とかではなく、昔から朝に弱い。

猟も自分の家業をやる時も遅かった。

本人も自覚をされていて本当は朝と夜の間に出ようと思つた事が数えきれないほどあるがそれでも起きれずにいた。

「おい、朝だぞー！」

明悟や炭治郎と一緒に寝ていた轆轤。

朝が大好きな明悟が障子を開けて2人を起こす。

禰豆子は零余子と一緒に寝ていてしかも箱の中にいるので明悟は安心して開けて寝ぼけてる2人に朝日を浴びせる。

「うーん、おはようございますー！」

「もう少し寝かせてくれ」

轆轤は布団を頭まで被るが明悟はそれを剥がす。

「ほら、さっさと起きて！健康に悪いぞー！」



こうして無理矢理轆轤は明悟に起こされた。

顔を洗ってシャツキとするがまだ眠たくぼーっとしてる。

明悟や炭治郎はさっさと蛍を探しに行き、零余子と禰豆子はまだ寝ていた。

正確には禰豆子が入ってる箱を抱き締めた状態で零余子が寝ていた。

轆轤は1人残ったので里を歩く事にした。

そこから辺から金属の音がして職人の里である事がよく分かる。店とかもないので轆轤は本当にブラブラ歩いてた。

この音が轆轤には心地よかった。

懐かしい感じがした。

自身も職人だった頃の記憶が蘇ってくるが轆轤は鬼から人に戻ってから1回も信楽焼をやっていない。

自分の汚れきった手ではもう良いものを作れないと思ってるし、20年も作らなかつた者の作るものなど価値がない。毎日ずっとやり続けて作品とは良くなってくる。味があるものがどんどんと洗練されていき、素晴らしい物になってくる。

轆轤は鬼になる前、政府が外国の万博に持っていく日本の伝統工芸品の1つに自分の作つた夫婦の洋式の湯呑みが選ばれた。たまたま町で奥さんと一緒に歩いていると輸入品のコップを見て、信楽焼で出来るかやってみて作つた。軽く100回は失敗したが

上手く作れるようになり、幾つか作ったやつを売った。

取っ手のついた湯呑みで2組の湯呑み。

それがたまたま政府の役人の目に止まって出された。

伝統工芸品でありながら、洋式の見た目であり、話題性があつたから、それで前の万博で出してた壺が出されなくなった。

そのお陰で陶芸家として轆轤は認められた。

金にも困らなくなり、より更に打ち込めるようになった。

けど、全て水の泡になった。

轆轤は半天狗によって鬼になった。

そして帰ると愛してる2人は無惨に殺されていた。

血で染まった手で信楽焼をやる気はなかった。それだけは嫌だった。

十二鬼月になって1回だけやってみたら、2人の死んだ顔が見え、気持ち悪くなって止めた。その時にはもう手遅れで2人を見ても誰かは分からなかったが轆轤は2度と見たくないと思い、轆轤は2度と信楽焼をする事はなかった。

けど、この職人達の空気と言うか雰囲気轆轤は愛してる。

そんな風に感傷に浸りながら歩いていく。

「おや？ 芦原殿、こんな所でどうしたんですか？」

轆轤は声のした方を向くとそこには伊之助の刀鍛冶の鋼蔵がいた。

「あんたか……いや、懐かしくなってるな」

「懐かしい？ 刀鍛冶なのですか？」

「いや、信楽焼……もう昔の話さ」

「そうですか……信楽焼職人だったのですか」

「もう何年もやってないし、腕は完全になくなったけどな」

「……実は私も焼き物には凝ってる、鋼鐵塚さんを見つけたら見に来ませんか？ 良い物が揃ってるんですよ、20年程前の万博で出た洋式風の信楽焼の湯呑みと言う珍しい物もありますので」

轆轤は鋼蔵に対して目を開いた。

「どこで……」

「芦原殿？」

「どこで……手に……いや……すまない。取り乱して、どこで手に入れたんだ？」

「骨董屋で見つけたんです……その結婚祝いに妻と使う為に……」

少し照れ臭そうに話す鋼蔵。

轆轤は驚きと世間の狭さ、そして嬉しきを感じた。

あの湯呑みは元々、自分達夫婦が使う予定で最初は作っていたが、思いの外良いできだったから、売ったのだ。

だから、巡りめぐって20年たった今もどこかの夫婦が使ってくれてる事に嬉しくなった。

「良かったら、見に来ますか？」

「鋼鐵塚って人を探してるんじゃないの？」

「いえ、もう何をやってるか把握したので大丈夫です。まあ、鉄珍様がもう呆れ果てて好きにさせなさいっておっしゃってるので」

「何とまあ」

「暇になりましたのでどうですか？」

轆轤は少し考えて、行くことにした。



一方、その頃。

明悟と炭治郎は森の中を歩いていた。

蛭（鋼鐵塚）が山の中に入っているのは確認済みなので探さだして刀をどうにかしてもらおうとしていた。

一応、他の刀鍛冶の人が刀を作ってくれたのでそれを腰に差してはいるがなんと言うか微妙に感じた。

2人とも最初の刀は兎も角、2本目の刀の方が馴染んでいた。

これは蛭が2人の為に刀を出来る限り調整して問題ないようにしている為である。

これは2人だけでなく他の隊士でも同じ事をしているが他の隊士の場合は炭治郎のような素直で優しすぎる性格でなかったり、明悟のような寛容すぎる性格でなかったりするので1回蛭に会うと次の時点で担当を変えてくれと言ひ、外されまくるからわからないと言う部分が多い上に1本目の刀はあくまでも本人を知らないで調整も糞もないので2本目からしか調整できないと言う部分もある。

2歳の時点で実の親がノイローゼになる程にぶっ飛んでる蛭は鉄珍に育てられた。

謂わば鉄珍の弟子である。

鉄珍はしのぶの毒を使うことが前提の日輪刀や蜜璃の長くてしなる日輪刀など特殊

な刀を作るので調整に関してはお手のもの。

また蛸もそんな師に育てられた為にはほぼ無意識のレベルで隊士にあつた刀を調整するのだ。

なんだかんだ言つて自身の性格が災いして担当を外される事が非常に多い蛸にとつて2人は大事な存在なのである。

まあ、性格が悪いのでそれが伝わる事は殆どないが・・・

「どっか行けよ!!何があつても鍵は渡さない。使い方も絶対に教えねえからな!」  
少年が霞柱の無一郎と言ひ争ひになつてゐるのを2人は目にする。

何やら少年が叫んでいるが、無一郎は気怠そうに首に手刀を当てて倒れさせる。

そして胸ぐらを掴んで持ち上げる。

なかなか光景を目の当たりにした為炭治郎は飛び出して無一郎の手を掴み、少年を何とかしようとするが無一郎の力が凄く動かなかつた。

「誰?」

「手を放すんだ!」

「君が放しなよ」

無一郎は炭治郎の鳩尾に肘を入れて放れさせる。

膝をつく炭治郎。

「凄く弱いね。よく鬼殺隊に入れたな」

無一郎が炭治郎を見ている隙に明悟は少年を掴んでる手を蹴って無理矢理放させる。

「痛いなあ」

「・・・それ、殴ってる君が言う?」

「君も誰?」

「光柱 津上明悟。こうやって話すのは初めてだよね?宜しく」

「あつそ」

明悟の挨拶に無一郎はあんまり関心はなかった。

「おい、放せよ」

少年が明悟から放れる。

まだフラフラで炭治郎が心配して駆け寄る。

「絶対に教えるもんか、拷問されたって言ってたまるか! あれ はもう次で壊れるんだ」

「拷問の訓練受けてるの? 大人だつて殆ど堪えられないのに子供の君には無理だよ。それに壊れるから何? そうやってぐだぐだやってる間に何人死ぬと思ってるわけ?」

炭治郎と少年は無一郎を見て、明悟は優しい目で無一郎を見ていた。

「柱の邪魔をするってのはそういう事だよ。柱の時間と君達の時間は同じではない。刀

鍛冶は戦えない。刀を作るしか能がない。ほらだから渡して」  
「そりや違うよ」

無一郎の言葉に明悟が反論する。

鬱陶しそうに明悟を睨んでくるがどこ吹く風で明悟はあつけらかんとしていた。

「概ね、間違つてないし、正しいよ。けどそれは相手を思いやらなくて良い免罪符にならない。正しいだけでは意味がないんだよ。それに鬼殺隊だつて刀がないとまともに戦えない。俺達は持ちつ持たれつをやるしかないんだよ」

「そうです！俺達はそんな思いを背負つて……」

「……下らない事に付き合う暇は無いんだよ」

無一郎は炭治郎を強制的に眠らせて明悟も眠らせる。

まあ明悟はわざと受けた。

これはもうテコでも変わらんと思つたので受け入れて後で考える事にした。





轆轤は鋼蔵に付いていき、湯呑みを見せて貰おうと鋼蔵の家に入る。

「ただいま〜」

「お邪魔します」

「お帰りなさい。あら？お客様？」

「ああ、あの湯呑みを知ってるみたいなので」

「そうなの？」

鋼蔵の嫁の鉛が轆轤を見る。

轆轤は頭を下げる。

軽い挨拶である。

「初めまして、鋼蔵の妻の鉛です。どうぞ上がって下さい」

「初めまして、芦原轆轤です」

「ささ、上がって下さい」

轆轤は内心、大丈夫かな？と思いつつながら玄関を上がる。

居間に案内されて座って待っていると木箱を鋼蔵が持ってきた。

《信楽焼湯呑 芦原》

完全に自分の作った物だった。

いくらバカでも自分の作った作品は覚えてる。

鋼蔵は木箱を開けて、中から湯呑みを出す。海外のTカップを真似て作った轆轤の作品。

夫婦茶碗ではなくて湯呑なのはその時の気分であるが轆轤に取ってみれば大事な物である。

朱色と白の2色が映えてる湯呑。

底に捺印を轆轤は常に付けてたので確認する。

ひよつとしたら違う作家の可能性も零では無いからである。

底を見ると○に須と印されていて確かにこれは自分の作った物だった。

まだ箱に入ってたポットを模した急須も確認し、底には○に轆と印されていた。

完全に自分の作品で轆轤は涙が出そうになるが堪える。

「いい、作品だな。作家に会いたいよ」

20年前に作られた作品を自分の物と言っても信用されないので轆轤はそう言う。

「おや？これは貴方の作品ですよね？」

「は？なに言ってる？20年も前の作品だぞ？俺が三十路でもガキの頃にこんな作品は出来ねえよ」

「確かにそうですが、私も職人です。作家が作品を見るとき目は誤魔化せませんよ」

見抜かれていた。

轆轤は自分がまだ未練があることに苦しくなる。

「・・・俺がどんな奴かは知らないだろ？」

「ええ、けどこれだけは分かります。貴方の作品に対する物はとつても真つ直ぐで・・・個人的な尺になります。貴方は『いい人』だ」

鋼蔵の言葉に轆轤は鳴き始める。

凄く静かで堪える。

けど流れる物は頬に伝わり、落ちていく。

自分は屑である。

鬼になり、人を殺しまくり、食いまくり、最初に食べたのが愛する家族でどうしようもない屑。

轆轤はそう自分に言い聞かせてる。

誰にどう思われても構わない。

けど、それは常に張り詰めた生き方で苦しいわけではない。

知り合いでもない、友人でもない、ただの作家と作品を気に入ってくれた人と言う関係である。

ただの社会的な言葉で本心はわからない。

でもそれでも轆轤は鋼蔵の言葉が嬉しかった。

「……須磨……母ちゃん……」

小さな声で轆轤は愛している妻と母親を呼ぶ。

「……あなた……あなた……」

妻の声が幻聴で聞こえ初めて轆轤はすぐに首を振って掻き消す。

もう死んだんだと言い聞かせながら……

1時間後

轆轤は玄関にいて草履を履く。

「すまなかった。家上がり込んで……」

「いえ、私も不思議で貴重な体験をしましたから」

「貴重？」

「ええ、20年前の作品の作家が現れるなんて貴重ですよ」

「その湯呑、大事に使ってくれ」

「はい！」

轆轤はそう言って銅蔵の家を後にした。



その頃の明悟達は、無一郎が少年からほぼ強奪の形で少年が心底大事にしている30年ほど前の戦闘用絡繰人形縁壺零式を物の見事に攻略されてしかも壊れてしまい。

少年・・・小鉄は絡繰を作る才能が毛ほども無いので人知を越えた絡繰人形が壊されるのを見ていられなかったが炭治郎の説得により向き合う事にした。

まあそんな時に無一郎が終わった事を伝えるついでに壊れた腕が持ってた日輪刀をこれまた強奪に近い形で取ると言う事をする。

しかし、まだ絡繰人形は壊れきっていない。

小鉄は確かに絡繰を作る才能は無いが別に操れないわけではない。

縁壺人形はまた動き出す。

そして小鉄は殴るわ壊すわ奪うわなどの暴挙を息を吐くがの如く行った無一郎に完全にキレて炭治郎を人形で特訓させると宣言した。

明悟はこれらの一部始終を後から小鉄の説明によって知った。今の今まで寝てた為である。

小鉄が入れたお茶を飲みながら、ボコボコにされまくってる炭治郎を見てた。

「炭治郎君、頑張つて」

「それよりもまず、腕が6本はキツイ！」

「何言つてんですか！腕はあの糞ガキに1本やられたから5本です！大体炭治郎さんは動きに無駄がありません。相手の動きを見ながら判断、反射では遅すぎます。相手の行動を予知してやらないと癖になつてますよ。よくそれで今まで生きてこれましたね。よっぽど鬼が無能だったんでしょう。俺がその癖を直して行きますのでそれまで食事は抜きです」

「うわ、凄い毒舌」

明悟が小鉄の毒舌に引いていた。

炭治郎は少し涙を出していた。

こうして大特訓が始まった。



明悟は自分も特訓しようと炭治郎達とは少し離れた所に来る。

勢いの強い滝が流れていて良い場所だった。

明悟はそのまま滝壺にいく。

そして滝の流れに逆らうようにアギトの力を腕に込めて思いつきり上に向かって殴る。

アギトの力が滝の流れに逆らい、

パン!!

と、上にまで衝撃が伝わる。

すぐに元に戻るが明悟は何度も殴る。

しかし、それも10回ぐらいで終わってしまった。

「もつとだ。これでは意味がない。変身出来なくても力を扱えるようにならないとカナエの時のような状況で苦戦する」

明悟は鉾山での戦いでカナエと生身で戦ったが苦戦だったのでアギトの力そのものを鍛え直す方向で特訓していた。

「ねえ!」

「ん?」

声のした方向を見ると零余子がいた。

「どうした!?!」

滝の音が煩いので大声で話す。

「私も強くなりたい！」

「なんで!？」

「もつと強くなつて彌豆子を助けになりたい！」

零余子の声は本気だった。

それくらい明悟は簡単に分かった。

「・・・分かった。ただ俺は教え方は下手だから組手ぐらいしか出来ないよ！」

「それで良い！」

明悟はそれを聴いてベルトを出す。

零余子もベルトを出す。

「変身」

互いにアギトになる。

こうして彼らは特訓を始めていた。



## ミラージュアギト

あれから7日たった。

炭治郎は何とか気合いと根性で生き延びていた。

絶食だけでなく、絶水の上に不眠不休と言う状況で炭治郎の命は尽きかけていたがそれでも相手を見てどうこうする気力すらも喪われたことで相手の動きを匂いである程度予知できる段階まで進化して、縁壺人形の首を斬る事に成功。

中から、無茶苦茶古い刀が出て来て謎の刀と言う物に年頃の男子である炭治郎と小鉄は大興奮。

小鉄は炭治郎が自分の力で出したので炭治郎に譲る事になり、意気揚々と刃を抜くと・・・錆びてた。

2人とも絶望に包まれる。

そんな中、筋骨粒々になって戻ってきた螢が任せろとだけ言い、強奪しようとしていて揉めていたが、鋼蔵のフォローによって錆を研磨して貰う事になった。

一方、その頃。

明悟と特訓をしていた零余子は見事に明悟にボコボコにされていた。殴られ蹴られ、更には隙を突こうとしたが見事に返されてしかも明悟も容赦なく弱点を狙ってきてる。

こうして一撃を入れれば良いと言う明悟の特訓を零余子は合格出来ないでいた。

炭治郎達の特訓と違って寝る時間と食べる時間が徹底されていてしかも休憩時間まである。

これは炭治郎の特訓が癖を直すのと相手の動きを匂いである程度予知できる段階まで強くなる為の特訓であるからで零余子のはあくまでも強くなるという特訓であり、炭治郎とは本質も違っていた。

そもそも論ではあるが炭治郎と違って相手が明悟なので明悟が疲れた時に当たっても意味がないのでそれも加味される。

そして彼らからは離れた所で轆轤は一人また刀鍛冶の里の日常の音を聴いていた。

心地よく幸せだ。

7日間、轆轤はずっとこの刀鍛冶の里の日常を聴きながら、とある事を考えていた。

それは明悟のシャイニングフォームである。

文字通り太陽の化身と呼ぶに相応しいほどに太陽の光を放ち、下手な鬼では歯が立たない事が見れば分かった。

気になったのはなぜ明悟が変身したかだ。

朝日を浴びてなったと言っていたがもつと精神的な物だと轆轤は分かった。

そして断言できるのはアギトの力を持つ者が戦闘をして生き残り回復すると更に強くなっている。

勿論、隊士だってそうだが、延び幅が違っていた。

仮に炭治郎を10の延び幅だとするならばアギトの力を持つ者は11だ。

たかが1されど1。

明悟と零余子の変身して戦闘特化の訓練をしてる。恐らく零余子の強さは前とは比べ物にならない位に強くなってる。

轆轤はそれを分かった上で特訓をしていない。

元々、明悟と轆轤は轆轤が少し上の互角であり、アギトの力を手に入れた事で延び幅も同じになり、ブランドでの力は恐らく互角。

しかし轆轤はシャイニングにもバーニングにも目覚めていない。

だから轆轤はこれ以上の進化は力ではなく、精神的な何かが必要なのだと分かったのだ。

轆轤は瞑想する。

流れてくるのは刀鍛冶の里の音と自分の家族との思い出そしてさらに轆轤は深く深く潜る。

まるで暗闇の海底を潜るように・・・

扉が暗闇の中、ポツンと少しだけ光を出しながらあつた。

前まで行き、「扉を扉を開ける。」

「ようこそ、芦原轆轤。まさか自力でここに辿り着いてくるとは予想外でしたが歓迎しましょう」

《火のエル》がソファアに座りながら、そう言う。

轆轤は前に座る。

「お前が《エル》なのか？」

「流石に私の大まかな事は津上明悟から聴いてましたか・・・そうです。私が《火のエル》です。それでご用件はなんでしょう？」

「俺が聞きたいのは一つだけだ。進化について」

「進化？」

「津上は太陽の光をそのまま出せるように進化し、水川は鬼……竈門の妹を助けられるように進化した。聞きたいのは1つ、俺は津上と同等の進化が出来るのかって話だ」

「……その答えは〃わかりません〃。進化とは自ら行える物ではない。偶然と必然と努力と勇氣、そして心が鍵となる。同じ進化などない。例え進化してもどうなるかは私もわからない」

「お前の力だろ?」

「いえ、貴方達〃人間〃の力です。私はただ後押ししてるだけに過ぎない。この力で神にも悪魔にもなる事が出来るのは〃人間〃だけです」

轆轤は無意味な会話だと思った。

強くなる為にどうすれば良いのかわからず、ここに來たが説法を聞かされて終わった。

轆轤は自分を人間だと思ってる。ない。

怪物か何かである。

そう思わないと苦しい。

家族を喰った苦しみで押し潰される。

だから轆轤は自ら怪物と自覚して苦しみに堪えてる。

「邪魔したな」

立ち上がり、扉から出ていこうとする。

「芦原轆轤。この世で一人で生きてる人間なんていない。誰もが誰かによって支えられて今は居なくても過去に誰かが一緒にいた事によって生きられてる。誰かが君を愛してる。それを忘れないでほしい」

胡散臭い言葉としか轆轤は捉えられず、無言でその空間を出た。

目を開ける轆轤。

夕方になっており、飯時である。

「誰かが俺を愛してるだど？そんな奴はもういねえよ。俺が……喰っちゃまったんだから」

立ち上がり、宿に戻る轆轤。

その背中では悲しく辛くそして孤独に溢れていた。



宿でゆっくりしている轆轤。

同じ部屋に明悟と零余子もいる。

明悟は読書中であり、零余子は禰豆子とあや取りで遊んでいた。

「そう言えば、轆轤はこの7日の間何をしてたんだ？」

「瞑想……」

「効果は？」

「微妙」

「……なんともまあ」

「気にしてねえよ……つたく、どうしたら更に強くなれるのかねえ」

「強くなって何をしたんだ？」

「鬼を殺す」

「その後は？」

「……何もねえ、消えるだけだ」

「その強さに意味あるの？」

明悟の言葉に轆轤は何も言えなかった。

「だから、絶対に……!？」

「!？」

「!？」

明悟、轆轤、零余子は突然それを感じた。

圧倒される程にどす黒い感覚。

上弦の鬼だ。

禰豆子も含めた4人で走る。

全力で鬼の気配をする方に走っていくと障子が開かれた部屋を見つけ、その中を見る。

すると炭治郎と無一郎、そして無一郎に首を切り落とされた半天狗がいた。

「気を付けろー！そいつの血鬼術は．．．！」

轆轤が叫ぶ。

しかし、時は既に遅く、半天狗は2つに分裂した。

そして扇を持つてる分身が一回転して全員を吹き飛ばす。

炭治郎と禰豆子は何とかがみついでどうにかなるが無一郎、明悟、轆轤、零余子は吹き飛ばされてしまう。





吹き飛ばされた明悟と零余子は変身してアギトの状態で屋敷に戻っていく。  
屋敷では雷がなったりとかなり激戦になっていた。

「急ぐぞー！」

「急いでるよー！」

全力で戻っていく2人。

すると屋敷から何か飛び出してきて2人に向かって拳を振るう。

2人とも何とか避けて向き合おうとそこには筋骨粒々の鬼がいた。

舌を出していてそこには《剛》と刻まれていた。

「何者だ!？」

「《剛力》。わが素晴らしき肉体の前に死ね」

2人は半天狗《剛力》と殴り合う。

普通ならばアギトの力によりどんな鬼でも多少なりは効くが剛力には全く2人の拳も蹴りも通じなかった。

異様に硬く、全身が筋肉の鎧で覆われていて中まで届いてなかった。

「硬いー！」

「冗談だろ?」

2人とも手をブラブラと振って痛みを和らげる。

「死ねい！」

剛力が2人のベルトを殴る。

すると2人のベルトに罅が入り、2人の変身は解除されてしまう。

「そんな!？」

「バカな!？」

「我が素晴らしき肉体の前に死ねい」

拳を振るってくる剛力に2人は生身で戦う羽目になった。



轆轤は全力で屋敷に戻っていく。

変身して何とか戻ろうと全力で駆けるが1番遠くに飛ばされてしまい、かなり時間が掛かっていた。

「うおー!?!来るな！」

声が出た方を見ると鋼蔵が変な巨大な魚に襲われていた。轆轤は自分の作品を大事

にしてくれた鋼蔵を守る為に魚をぶん殴る。

アギトの力を込めてるので普通の鬼や血鬼術ならば死ぬか消えるが一向に消えない。瞬時に再生されていき堂々巡りをしてしまう。

何回かやり、たまたま壺を破壊して血鬼術を消し去った。

「おお、芦原殿！ありがとうございます！」

「大丈夫か!？」

「何とか……」

安心する轆轤と鋼蔵。

するとそこに小鉄を抱えた無一郎が走ってきた。

「おお、小鉄君！時透殿！」

鋼蔵が無一郎の刀に気づき、目を開ける。

「これは……酷い！」

「そう、だから新しいのを貰いに来たんだ」

「こつちへ、すぐに新しいのに！」

鋼蔵に案内されて全員でこんな状況なのに蛍がまだ研いでる工場へ向かう。

そこに無一郎の新しい刀もあるらしいので向かう。

「あそこです！良かった、あの魚もない！」

「待て鋼蔵！」

「うん」

轆轤と無一郎は鋼蔵と小鉄を止める。

するとところどころと壺が転がってきて、中から百足のように手が生えてる上弦の伍の玉壺が出てきた。

「ヒョヒョヒョ、勘が良いな。流石は柱にアギトだ」

目の部分が口になっており、今までの鬼の中で最も奇抜で不気味な存在である。

内心、対峙してる4人とも気持ち悪く思ってる。

「さて、猿同然のお前達に良いものを見せましょう」

玉壺は壺を新たに取り出す。

すると壺の中から数人の刀鍛冶の里の人間の死体が悪趣味極まりない程にボロボロかつあちこちから骨は飛び出て血まみれの状態で無理矢理繋げられた物が出てきた。

鋼蔵も小鉄も無一郎もあまりの物故に言葉を失う。

そして轆轤はそれを見て、20年前に鬼に殺された母親と妻の死体を思い出す。

あまりにも似てたからである。

「名付けて『鍛人の断末魔』！数人の刀鍛冶を元に作り上げた芸術品です！割れた仮面から見える表情は『無念』さを表し、デコボコと醜い手はあえて前面に押し出して勢いを

大事にし！更に素晴らしいのは、こうやって何処かの刀を適当に押すと・・・」

「ギヤアアアア!!」

「ご覧の通りに断末魔を再現する事が出来るのです!!」

吐き気がする。

鋼蔵も小鉄も無一郎も鬼畜そのものとしか言いようがない物に何も言えなくなる。

無一郎が問答無用で斬りに掛かろうとするが轆轤がそれを止める。

「何すんの?」

「うるさい。おい！20年前に蕪前岳で老婆と若い女を殺したのは貴様か!」

「は?」

「答えろ!!」

轆轤は玉壺に問いただす。

あまりにも似ていた。

20年前に殺された大事な家族にさせられた悪趣味な物に似すぎていた。

そして尋ねられた玉壺は数瞬してから思い出したかのように声を出した。

「ああ、あの『失敗作』の事か? いやはや、私もあまりの失敗っぷりに今の今まで忘れていた。若い女と老婆を繋げる発想は悪くないと思っていたがやってみると何とも醜い物が出来てしまった。きつと素材が最悪だったのだろう・・・まあ故に今まで・・・」

もはや弁明の仕様もなく、自分で20年前の殺しを軽々しく話す玉壺に轆轤は我慢の限界が来て殴りに掛かる。

玉壺は血鬼術による瞬間移動で避ける。

「ヒョヒョヒョ、どうやら大事な者だったようですね！しかし、所詮は失敗作にしかならなかつた粗悪品でしかない！そんな者を大切に思うとは何という愚か者だ」

轆轤は明悟と違い、敵と認識したら一切の容赦はしない。相手が何を言おうが関係なく、叩き潰そうとする。

怒りに身を任せて戦うのが轆轤のやり方である。

しかし、冷静さが欠けては意味がない。

現に玉壺は余裕綽々に避けて、挑発してる。

しかし、ばか正直に一对一でやる決まりなどなく、無一郎が玉壺の首を斬りに掛かる。「ヒョ？無駄無駄無駄・・・そのような鈍い刀では私の首などとてもとても」

玉壺の脳天目掛けて怒りに身を任せた轆轤の踵落としが叩き潰そうと迫るが玉壺はまた瞬間移動で避ける。

「血鬼術 千本針・魚殺」

血鬼術により、空中に金魚を作り出して、その金魚の口から大量の極太い針を射つ。

大量の針が轆轤と無一郎だけでなく、鋼蔵や小鉄まで迫りくり、轆轤と無一郎は2人

の盾になる。

そのせいで2人の体に大量の針が刺さる。

「逃げる、鋼蔵」

「早く行つて、邪魔」

小鉄と鋼蔵は2人に言われ、蛍がいる工場に向かう。

「随分と滑稽ですねえ、つまらない命を守つてつまらない所で死ぬ。しかし、そんな者達でも柱にアギト、どんな作品にしようか心が踊りそうだ」

無一郎と轆轤はポロポロの肉体になりながらもくどくどうるさい玉壺に攻撃しに行く。

しかし、血鬼術の瞬間移動に避けられまくる。

「血鬼術 水獄鉢」

「血鬼術 水縛糸」

無一郎は大量の水の中に閉じ込められて、轆轤は全身を水の糸によって拘束される。

「ヒョヒョヒョ、鬼殺隊の呼吸を封じさせて貰った。その顔が苦痛にまみれていくのが  
楽しみだ」

玉壺は水の中に閉じ込められてる無一郎を見ながら鼻で笑う。

轆轤はトリニティになり、血鬼術の拘束を無理矢理吹き飛ばす。

「ヒョ?あれではやはり無理だったか」

「死ね」

腕に光を纏わせて殴りに掛かる。

上弦でも軽視できない攻撃であるが玉壺には意味がなかった。

脱皮してそれを避ける。

「ヒョヒョヒョ、アギトはやはり私の真の姿で殺すのが美しい」

半魚人のような見た目になり、先程の気色悪さは残しつつも筋骨粒々になり、より変な姿になった玉壺。

そしてその豪腕を轆轤に振るう。

腕を十字にして防御するも豪腕に吹き飛ばされてしまう。

本来ならば、血鬼術の効果により、鮮魚になってしまいがアギトの力により、そこだけは相殺された。

しかし、吹き飛ばされて轆轤は何十本の木を薙ぎ倒しながら、地面を転がる。

「どうだ!?所詮はお前達など下らぬ物なのだ!下等で何の価値もない命なのだ!大人しく私に殺される!」

玉壺がそんな自分勝手な事をほざく。

「そうだ、思い出した!確かお前の家族を殺した時も往生際が悪く足掻いてだから、私は



美しく作品にしようとしたのにあの2人をよく見たら、老婆は病で死にかけて、若い女は汚れきつてきて、酷く醜い物だった。あんなゴミども、  
「生きる価値」などなく、  
「肥やし」にすらならなかった」

《プチッ!》

確かに玉壺の耳には何かが縮れる音が聴こえた。

なんの音か分からずに辺りを見回すがそれを出しそうな物など何も無かった。  
気を取り直して、轆轤を見ると彼はもう目の前まで歩いてきた。

ゆらゆらとした歩きでアギトの姿でそれをやられていてより不気味で玉壺の体に何

故か知らないが冷や汗が流れた。

(怯えてるのか、この私が!?)

轆轤のベルトが光を放ち、それが強くなってくる。

玉壺の体が細胞レベルにまで震えて、何かをする前に攻撃という事すら頭から消える。

轆轤の変化は明悟と比べて異質だった。

クロスホーンが開き、そして右側のクロスホーンが折れる。

全身が真っ白になっていき、鎧が全て灰色になる。

手足からは、刃が生えて、今までのアギトの進化とは比べ物にならないほどに異なっていた。

轆轤の膨大な怒りにアギトの力が共鳴し、より強く、より容赦なく、その力は明悟のシャイニングに匹敵するほどに凶悪な《進化》

《ミラージュアギト》の誕生である。

「もう黙れ、お前はこの世に存在してはいけない者だ」

赤い複眼が玉壺を睨む。

玉壺は自慢の豪腕を振るうが轆轤はそれを掴むと背負い投げ飛ばす。

(何だ!?! 投げ飛ばされたのか!?! この私が!?)

「俺の全てだった……心の底から大事な家族だった。それを奪い、楽に死ぬると思うな……俺の怒りを思い知れ……生きてる事を後悔させてやる」

轆轤の言葉に玉壺は心の底から震えた。

全身震えてまともに対面出来ないほどに。

それほどまでに轆轤の放つアギトの力に無惨の血が怯えているのだ。

まるで絶対に勝てないと云わんばかりに怯えきつている。

玉壺は半天狗と共に刀鍛冶の里を壊滅させる為に来た。

しかし、こんな「怪物」と対面するとは思わなかった。

持てる力を全て使って逃げようとする。

「逃げるな」

しかし、尻尾を掴まれて逃げられない。

豪腕で地面に爪を立てて抵抗しようとするがミラージュアギトの底知れない力に全く抵抗出来ず。

玉壺はまた投げられる。

轆轤もそれだけで終わりではなく、尻尾を掴みながら、何回も何回も時には地面に時は木に玉壺をぶつけまくる。

辺りの地面は所々凹み、木は折られまくり、一種の災害のように悲惨な光景になって

くる。

「ウオオオオオ!!」

そして何百回目にして轆轤は玉壺を投げる。

玉壺は目は完全に潰されて、体のあちこちには木が刺さりまくり、惨たらしい姿になりながら、虫が作業をしてる工場の方へと投げ飛ばされる。

工場である小屋を粉碎し、玉壺はゴロゴロと転がる。

「な!? 何だ!」

破壊された工場の中から鋼蔵がゴロゴロと転がる玉壺を見る。

「あれは、さっきの・・・ヒッ!」

鋼蔵は轆轤の姿を見て怯える。

上弦の比ではない程に恐怖を怯えるが、轆轤は最早玉壺しか見えてないのかその横を通りすぎて行く。

「助け・・・助けて・・・」

玉壺が怯えた声を出しながら、這いつくばる。

しかし、ここまで自分勝手に人を食い物にしてきた外道に生き残れる道など〃存在しない〃。

轆轤は腕に生えた刃で這いつくばっている玉壺の背中を刺す。



そして轆轤は馬乗りになり、殴る。

光など込めずに力の限り殴る。

鮮血が飛び散り、全身に返り血を浴びても関係なく殴る。

骨が折れ、玉壺の悲鳴だけが辺りを支配する。

その惨劇に工場で作業をしてる蛍以外の全員が何も出来なかった。

「……も、もうやべ……」

玉壺も恐怖で何も出来ない。

恐ろしくそして何よりも痛いのだ。

痛みで全ての事がどうでも良くなるほどに辛い。

「……むぎ、むぎ……きんぷ……きんぷ……鬼舞辻無惨!!」

そして遂に玉壺は無惨の名前を呼んだ。

もうこの苦しみから逃れたい。

ただそれだけの為に玉壺は「反逆防止の呪い」を知っててわざとやり、自殺を謀ろうとするが、一向に無惨の呪いは発動しなかった。

(い、これはどうして!?)

玉壺の精神世界に思念体の無惨が現れる。

(む、無惨様なぜ!?)

(黙れ、ゴミが！満足に異常者どもも殲滅出来ない愚か者めが、お前など最早何処にも存在価値などない。おまけにアギトなる裏切り者に、痛め付けられてる。だけで死のうとする軟弱者など最早私の呪いで殺すのも勿体無い。そのまま朝日を浴びて死ね)

(そんな!?無惨様・・・無惨様!!!)

無惨の思念体は消えていった。

こうして玉壺は無惨にすら見捨てられたのだ。

何時間も殴り続けられて遂に朝日が昇ってくる。

玉壺は火傷をしてそのまま燃えるように灰になってくる。

しかし、玉壺は感謝した。

死ねる事に感謝した。

こうして玉壺はこの世で最も残酷な焼死に対して感謝するという矛盾した物を抱えながら死んだ。



玉壺が灰になっても轆轤は殴り続けた。

灰すらなくなり、地面になっても殴る。

手が自分の力に堪えきれずに骨はアギトの皮膚を突き破り、血が出ていようが関係ない。

「芦原殿！」

そんな轆轤を不憫に思った鋼蔵が未だに殴り続けてる拳を止める。

轆轤は鋼蔵を見る。

「もう止めて下さい」

「・・・離してくれ」

「もう死んでます」

鋼蔵の言葉を聞き、轆轤は初めてそして漸く自分が地面を殴っている事に気がついた。

復讐が完了し、轆轤には最早生きる意味などない。

鬼として生きて人を殺し続けた物に居場所などないと轆轤はずっと思ってた。



そして轆轤は自分で自分を殺そうと、空いてる手の刃で首を斬ろうとする。

しかし、それは誰かによって止められる。

轆轤は空虚な思いで誰かを確認する為に見ると、そこには死んだ筈の自分の家族が腕を止めていた。

「もう、止めて・・・もう良いのよ」

自分の妻の涙が鮮血まみれた腕に伝わり少しずつであるが血が洗い流されていく。

## 芦原轆轤

轆轤が玉壺を粉碎している最中、他の物達もとい明悟達は何をしていたのか、紐解いて行く。



明悟と零余子は半天狗の剛力と名乗る分身によって変身能力を奪われた為に生身でやりあっていた。

刀で斬ろうとするが鋼のように硬い体には弾かれて、アギトの力を込めて殴ったり、蹴ったりしても弾かれると言う状況になってしまい、苦戦していた。

「貧弱貧弱貧弱貧弱!!この体には誰一人として傷一つ付けられぬのだ!大人しく死ねい!」

自信たっぷりな豪語する剛を相手に色んな意味で明悟と零余子はいらざりし始めていた。

(鬱陶しい!)

(イライラしてきたぞ・・・)

明悟が何回目か分からなくなってきたが剛の首目掛けて刀を振るう。すると最早、金属疲労に耐えきれなくなったようで日輪刀が折れた。

「ええく……」

「フハハハ！そんななまくら刀で殺せると思ったがアホが！」

明悟は刀を捨てて、アギトの力を込めて剛の腹を殴るが全く効いてない処か、むしろ殴った手が痛むと云う始末であり、痺れた手を冷ます。

「ちよ、ちよつと待て」

「飛べ」

襟を掴まれて、明悟は刀鍛冶の里の中の1つの家にまで投げられる。

投げられた明悟は巻き上がる埃でげほげほと咳をして辺りを見回すと、刀鍛冶の里の一家の父親が家族を守ろうと刀を持っていた。

「光柱様！」

明悟に気づいて刀を下ろす。

「早く逃げて……ここも危ない！」

「は、はい！」

去っていく鍛冶一家。

明悟は残された工房にある大量の刀を見る。



零余子もまた明悟のように投げ飛ばされて里に落ちてくる。

まさかの素手でやることになり、本当に嫌であるが倒さないと自分の居場所がないので剛と向き合う。

「このまま、我が優れた肉体の前に死ね！」

「冗談じゃない！」

拳を構えるが差は歴然。

ジリジリと迫る。

そして手を振りかぶる剛力の元に刀が飛んでくる。

非常に硬い筋肉で覆われた体には傷一つ付かず、むしろ刀の方がボキンと折れてしま  
う。

「何だ？」

振り向く剛力。

そこには大量の日輪刀を背負った明悟がいた。

「津上ー」

刀を構える明悟。

剛力は警戒するわけではなく、寧ろ自慢の体を見せつけるかのようにポーリングをす  
る。

「なまくら刀を何本揃えた所でこの美しき肉体には傷ーつつけられん」

「なら、試してあげるよ」

両手に刀を持って切りつける明悟。

ガキン！ガキン！と音をならして刀が折れる。

すかさずに新しい刀を抜いて斬るのではなく刺そうとする明悟。

「無駄無駄ー」

しかし、剛力は拳一発でその刀を粉碎し、明悟の腹を殴る。

ボキボキと肋骨が折れて転がる明悟。

「いのー」

零余子が後ろから蹴りを喰らわすが全く効かず、腹に蹴りを入れられて彼女も肋骨が  
折れる。

「どうした!?!その程度か!?!」

自意識過剰な剛力に対して明悟は起き上がり、蹴りを顔面に入れようとするが避けら

れる。

剛力は明悟に向かって殴るが明悟は瞬時に体を反転し、腕を取って剛力を背負い投げする。

地面にぶつかりそうになる剛力。

明悟としてはこのまま地面にぶつけて動きを封じようとさせるが、剛力は2本の脚で背中を地面にぶつける前に着けて踏ん張り、逆に明悟を投げ返す。

飛ばされた明悟はまたゴロゴロと転がるが体勢を立て直して刀を抜いて斬りかかる。

剛力は避けて殴る。

明悟もまたそれを避ける。

避けては殴り、避けては斬るを何回も続ける。

何十回もした所で遂に拮抗が破られ、明悟は剛力に腹を蹴られてまた転がる。

「所詮は人間！鬼の力の前には無力なり！」

勝ち誇ってる剛力に対して持つて最後の刀で斬りかかる明悟。

だが、それすらも回し蹴りによって折られる。

流石の明悟と零余子に冷や汗が出てくるが、2人はとある気配を感じとり、剛力に掴み掛かるが剛力は2人を殴り飛ばす。

あまりの苦痛に動けなくなる2人と勝ち誇る剛力。

「勝った！《鬼滅の刃》太陽の化身》完！」  
こうして、全ての戦いが終わり、明悟は死んだ。









「アホか．．．お前、俺が死んだら誰が主役やるんだよ？．．．取り敢えず、やれ蜜璃ちゃん！」

「恋の呼吸 壱の型 初恋のわななき」

勿論、そんなわけなく明悟と零余子はアギトの超能力で蜜璃が向かってるのを知ったので2人は勝てないし刃が通らないならば、通せる人に任すの精神で蜜璃に任す。

蜜璃は常人の8倍の力を出せる特殊体質。

豪腕な杏寿郎や義勇や実弥と為を張れるくらいに豪腕。

勿論、明悟も負けてはいないが、刀が違う。

蜜璃の日輪刀は鉄珍が鍛え上げた傑作の一本であり、布のようにしなやかな刀身から

は想像できないほどに鋭くそして強大な斬撃を出せる。

その一撃は行冥の攻撃とほぼ同等である。

鬼殺隊でも一二を争う斬撃を物の見事に喰らう剛力。

流石の超人的な肉体も《本物の超人的な肉体を持つ》蜜璃の前には刃が立たず、バラバラにされる。

「な!？」

細切れになった剛力はすかさずに再生を始める。

明悟と零余子は再生にかまけて無防備になつてゐる剛力にアギトの力を込めて顔面と腹を挟み込むように蹴る。

今までは剛力の体と筋肉の前に効かなかつたが再生中だと違つたようだ。

おまけにベルトのヒビが先程よりもマシになるほどに回復した為に剛力は光の力、そのものによつて消滅した。

「ああく、疲れた」

「痛い・・・体が痛い・・・」

明悟と零余子は流石に鬱陶しかつた剛力を消滅させる事が出来てほつとしてゐる。

「津上さん、零余子ちゃん。遅くなつてごめんなさい」

「いや、こつちこそ役に立たなくてごめん。・・・てか本当に危なかつた」

「もうやだ、隠居したい」

「私はこのまま炭治郎君達を探して来ます！」

蜜璃は流石の柱と云わんばかりの体力で炭治郎達を探しに行き、明悟と零余子はへ口へ口になりながらも里の人の安全確認と避難誘導をし始めた。



轆轤は幻を見ていた。

最愛で死んでしまった妻の幻がボロボロの自分の手を止めていた。

「放してくれ……頼むよ……お願いだ」

仮面の下で涙を流しながら懇願する轆轤。

普段の彼からは想像もつかないほどに声が掠れていた。

「止めて、もういいの。もう充分だから」

「お願いだ……死なせてくれ……もう疲れたんだ」

「止めて……あの頃の貴方に戻って……」

「無理だ……人を殺しまくったんだ……もう戻れない……」

「大丈夫……大丈夫だから……」

「頼むよ……」

「私は生きてて欲しい。また貴方の信楽焼が見たい。日本一の信楽焼が見たいの」

彼女の言葉に轆轤は手を見せる。

玉壺だけではない自分の血も含めて血塗れになり、ボロボロの手だ。

「見ろよ……よく見てくれよ！こんな手で作れるか!?こんな怪物の手で作れるか!?腕が落ちてるだけじゃない……血塗れなんだ……こんな手で作っても美しい信楽焼なんて出来ない……」

「出来るよ……だつて貴方は優しい人だから……」

「優しくなんかない、怪物なんだ……」

「違う……私を助けてくれた見ず知らずの私を……一緒に居させてくれた……充分優しいじゃない……出来るよ……絶対に出来る……何十年もやってないから下手くそで不恰好な物かもしれないけどきつと出来るよ……」

その言葉は轆轤の中に響く。

彼女は別に特別な事をやってるわけではない。ただ、彼を信じ続けてるだけだ。

死んでもなお信じ続けてるだけなのだ。

この幻が彼女本人なのか自分の妄想なのかは大きな問題ではない。

この幻によって彼は漸く手を下ろし、泣いた。

声を上げてみつともなく、大の男ならやらない程大声で・・・もしも 〃仮面ライダー

〃が静かに涙を流す人間にだけに当てはまるならば彼は違うのだろう。

だが、彼は 〃仮面ライダー 〃だ。

涙を流せる人間だ。

この行為は最も 〃仮面ライダー 〃らしくなく、 〃仮面ライダー 〃らしい。

こうして彼の復讐が終わり、次に進むことが出来た。



轆轤が救われて、明悟と零余子もなんとなくかなったがまだもう一人の上弦である半天狗について何もやってなかったので説明する。

半天狗は厄介な分身の能力を使って炭治郎、禰豆子、玄弥の3人と奮戦していたが、本体が見つかった事で分身達は1つに集結し、本体を樹の中に隠していた。

1つになった分身は憎珀天となり、炭治郎達を極悪人と罵っていたが、炭治郎がそれにぶちギレていた。

自分の血鬼術で3人を殺そうとするがそこに明悟と零余子を助け終わった蜜璃が参戦し、場は混乱するも炭治郎と玄弥と禰豆子は憎珀天の相手を蜜璃に任して、本体が入ってる樹を切り、終わらせようとしたが本体は消えていた。

どこに行つたのか持ち前の嗅覚ですぐに見つける炭治郎。すると本体は非常に小さい状態で走って逃げてた。

「逃げるな貴様！責任から・・・罪から逃げるな！」

炭治郎の罵倒を聴いてもなお逃げる程に往生際が悪い半天狗。そしてそんなゴキブリのような鬼に玄弥がそこら辺の大木を引っこ抜いて投げる。

「いい加減にしろ！」

直撃して木の下に埋まる半天狗。

「空気を読んでとつととくたばれ！」

木を投げまくる玄弥。

しかし、頑丈な半天狗はまだ抜け出そうとする。



すかさず禰豆子が自分の爪で攻撃するが恐ろしいくらいの速さで逃げる。

そんな半天狗に炭治郎は全身の細胞の全てを完全に使った全集中の呼吸による速さで先に周り、首を斬ろうとするも半天狗は巨大になり、首に刀を食い込ませたまま炭治郎を握り潰そうとする。

だが、漸く追い付いた玄弥がそれを食い止め、腕を引きちぎり、禰豆子が自らの血鬼術の『爆血』で半天狗を燃やす。

鬼を燃やし続ける禰豆子の血鬼術に半天狗と鬼を食って鬼に近い体質になる玄弥はたまらずに離れる。

崖から転がり落ちる半天狗、禰豆子、炭治郎。

3人とも満身創痍である。

両腕を失い、首に刀を食い込ませた半天狗がフラフラとまだ逃げる。

「逃がすか、地獄の果てまでも追いかけてやる」

炭治郎の折れない気迫に半天狗はビビり、逃げる為に偶々そこに避難していた刀鍛冶の里の職人を食おうと歩く。

日が上る直前であるが、食って回復し逃げる為だろう。

炭治郎がボロボロの体で立ち上がり、呼吸を使おうとする。すると上から刀が落ちてきた。

投げた方を見ると無一郎と蛍が言い合いをしていた。

「炭治郎！それを使え！」

「使うな！まだ終わってないんだ！殺すぞ！」

夜明けが近く、早くしないと逃げられる。

炭治郎は最後の力を振り絞って全力で刀を持って走り、半天狗の首を斬った。

因みにこの蛍と無一郎の2人は暴走してる轆轤をガン無視してここに飛んできた。

これで終わりだと炭治郎は一息着こうとしたがなんと首なし半天狗は動き始めて鍛人の元へ行こうとしていた。

炭治郎は一瞬混乱するがすぐに匂いと記憶を思い出してわかった。

本体はあの体の中にあること。

すぐに本体を斬ろうとするが最早動けなかった。

朝日が昇って来る中で禰豆子は炭治郎に近づく。

「禰豆子、隠れるんだ！日が！」

残酷にも日の光が禰豆子の体を焼く。

皮膚が焼けて灰になってしまう。

炭治郎は何とかして禰豆子を助けようとするが禰豆子は炭治郎を見て笑った。その笑顔に炭治郎は悟った。

禰豆子は炭治郎を半天狗の方に投げ飛ばす。

その覚悟に炭治郎は涙を流しながら、半天狗の元へ行き、本体を斬る。

「命を持って償え！」

これは大勢の人の罪に対してかそれとも禰豆子が死んでしまった事に対する元凶への怒りかはわからない。

怒りの剣が本体の首を斬り、半天狗は走馬灯を見る。

……あまりにも救いが無さすぎるので強制的に割愛させてもらう。

半天狗は死に炭治郎は日の照らされてる中で泣く。

助けられた鍛人が炭治郎の肩を揺する。

「竈門殿、あれ、あれ！」

鍛人に言われた方を見る炭治郎。

そこには、禰豆子が立っていた。

日の光を浴びてるなか、火傷もせずに立っていたのだ。

「お、おはよう」

人間に戻ったわけではない。

目も牙もまだ鬼の頃のままで。

だが、鬼とは違う。

「彌豆子、良かった．．．良かった！」

彌豆子を抱き締める炭治郎。

何かが変わり始めていた。



刀鍛冶の事件が一段落し、明悟と零余子は手に包帯を巻いて鋼蔵の近くにいた轆轤に近づく。

「轆轤、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

今までとは違った優しい雰囲気に零余子と明悟は驚くがすぐに似たような雰囲気を

出す。

「蹴りは着いたのか？」

「ああ・・・ちゃんとな」

短く、しかし彼らの中では確りと繋がってる会話。

3人とも満身創痍ではあるが何とか切り抜けられた事に喜ぶ。

「明悟さん！」

炭治郎達がやってくる。

3人ともそつちの方を見ると、炭治郎、玄弥、蜜璃、無一郎、そして禰豆子が歩いてきた。

「何で出てんの（んだ）!?!」

禰豆子に対する3人の驚きの声がボロボロの里に響き渡った。

## 幕間編 over the time

## 富岡義勇VS不死川実弥

刀鍛冶の里の事件から5日目。

あの後、明悟達はほぼ全員が蝶屋敷行きとなり、ベッドの上で寝ていた。

炭治郎と轆轤に至ってはまだ意識が戻らない程にポロポロであり、激戦を物語っていた。

明悟と零余子と轆轤は3人とも同じ部屋にいる。

柱用の特別治療室に充てられている。

「しっかし、変身出来なくなっただのは危なかったなあ」

「ああ、何とかなかったし、ベルトも元に戻ったけど本当に危なかった」

「もう2度とああはなりたくない」

「言ってる」

会話をする明悟と零余子。

轆轤はぐうぐうと鼾を欠いて寝ていた。

零余子は立ち上がり、体を伸ばす。

「また行くの?」

「勿論、禰豆子と花摘に行く約束だからね」

「好きだねえ、昨日は手鞠だっけ?」

「そう!この怪我を使って今の内に遊びまくってやる!」

「まあ、アオイちゃん達は忙しいから助かってるみたいだけど、あんまりはしゃがないように。ここ病院だし」

「わかつてるわよ・・・禰豆子お〜」

凄惨な声で部屋を出る零余子。

元鬼でここが鬼殺隊な事を忘れたのか、それとも激戦に次ぐ激戦で凶太くなつたか、なんにせよ無惨を倒すまで大事になつて欲しくはないと明悟は思いつつながら、自分もゆつくりしようと思つて本を読み、お茶を飲みながらゆつくりしていると突然、珍しくも義勇がやってくる。

「うお?!珍しい、義勇君が来るなんて」

「少し顔を貸せ」

「え?何か怒らせたっけ?・・・まあいいや」

義勇はその言葉を聞くと明悟の隣に座る。

「怒ってないの?」

明悟がそう聞くと義勇は首を傾げる。

頭を悩ます明悟ではあるが話を聴いてみる事にした。

「で、話つてのは？」

お茶を飲みながら尋ねる明悟。

無口の義勇が口を開く。

「恋愛を教えてください」

義勇のとんでもない一言に明悟は飲んでたお茶を全て吐き出した。



一方その頃、腕に包帯を巻いた不死川実弥は弟の玄弥の所に来ていた。

かなりボロボロの玄弥に実弥はどうやって鬼殺隊を辞めさせようか日頃考えて頭を悩ましてる。

玄弥としては幼い頃に鬼になり、他の兄妹を食い殺した母親から守ってくれたのに酷いことを言ってしまったのを謝りたいのだが、その問題はいつも平行線を辿っていて会えば会うほど拗れてるのだが、今日は珍しくそれらの類いの言葉は言わなかった。

「あ、兄貴、どうしたんだ？」



何時もと違う様子に玄弥は戸惑う。

「なあ、玄弥……お前、恋した事あるか？」

「……は？」

義勇と実弥がこのような事を言い始めた理由は1時間ほど前までに遡る。



朝の4時。

薄暗い早朝で義勇は疲れた体で夜道を歩いている。

ここ刀鍛冶の里の事件があり、ドタバタしていても鬼は出るようでもまた噂話と目撃情報に頼りに討伐に当たっていた。

その噂話と云うのが奇妙で、人が弓矢に撃たれて最初に見た物や人に恋をすると言う何とも変な噂話であるし、非常に馬鹿馬鹿しさが漂ってくるのだが、事はそう楽観的ではなく、とある会社の重役と国会議員が撃たれて互いに買ってる猫やそこら辺に生えてた木に恋して、仕事を全くせずに一日中愛でており、議員と重役をクビになり、突然の

変貌つぷりに家族に精神病院に行かされたらしい。

噂話の深刻さと実害が全く合わない変な話である。

義勇は自分の管轄で起こってるの事件を調べていたが一向に成果を上げられなかった。

早朝な為か人が疎らに活動を始めていた。

その時、義勇は確かに森の中から矢が放たれたのを目撃した。

矢の放たれた先には人がいる。

義勇は全力で走り、腕でその矢を防ぐ。

斬れば良かったのだが、矢があまりにも早く刀を抜いてる余裕などなかった。

腕に刺さった矢を抜いてすぐに放った奴の所に向かおうとしたが、矢がどういわけかそのまま義勇の体の中に入り込んでしまったのだ。

義勇はとっさに目をつぶり、何とか溝に嵌まつたり、転んだり、人にぶつかつたりしながら、意地で蝶屋敷まで来た。

「(もうすぐ、蝶屋敷・・・胡蝶に相談して考えよう)」

自分には専門外なので兎に角、血鬼術や毒周りに関しては鬼殺隊一のしのぶに相談しようとする義勇。

「アー！」

突然自分の鳥の寛三郎が声を上げたので、思わず目を開けて寛三郎を見る義勇。

「!?」

「・・・朝飯、まだじゃった・・・」

思わず、ずっこける義勇。

そろそろこの老いぼれ鳥をどうしようかと本気で考え始める。

「あら、富岡さんどうしたんですか?」

突然、かけられた声の方を見ると背中に大量の薬草が入った籠を背負ったしのぶが笑みを浮かべながら立っていた。

「・・・あ」

矢の噂を思い出す義勇。

心臓が活発になり、しのぶに対して目が釘つけになる。

「・・・?」

笑顔のまま、首を傾げるしのぶ。

「(綺麗だ)」

心ではそう思いながらも全く言葉にせずにただただしのぶと目を合わせる義勇。

10分以上目を合わせ続けるとどんな相手でも好きになると云われてるがしのぶからしてみれば仕事が残ってたり、買った薬草での毒物の研究なりとやる事が山ほどある

ので・・・

「用が無いなら、失礼しますね」

そう言うてから、さっさと屋敷に戻っていった。

一方、実弥の場合は別の場所で義勇と同じ任務をやっていた。実は本来この任務は実弥が1人で当たる予定だったのだがそれを寛三郎が間違えて義勇にも同じ任務をさせたのだ。

そして義勇と実弥は互いにかち合う事がないまま、任務をしていた。

結果的に2人の貴重な戦力である柱が本来は1人で充分な所を2人でやると云う無駄な状況になっていた。

実弥は2体位の鬼を殺したのは良いが自分の稀血を使って誘き出したので腕が血塗れの状態であり、しのぶに診て貰おうとしていた。

共食いの習性をもつ鬼がそう同じ所に何体も居るわけはなく、また首を斬った一体が報告にあつた矢を使った血鬼術を使っていたので実弥はこいつが噂の鬼だと判断して矢に当たると事なく斬った。

しかし、実弥は帰ってる途中で背中に矢を射たれた。

矢を扱う血鬼術を持った鬼がもう一体居たのだ。

そして矢はそのまま実弥の中に入っていった。

実弥は急いで射ってきた方向を見て索敵するも見つからず、目を瞑った状態で蝶屋敷まで来たのだが、

「禰豆子〜〜!!」

聞き覚えのある不愉快な声に思わず、目を開けてしまう実弥。

そうこの声は零余子である。

「(あのくそ鬼が・・・お館様は一先ず協力って言ってるが竈門の妹と纏めて許可が出ればすぐにでも!)」

零余子は協力者で禰豆子は無惨を誘き出す貴重な切り札なのでそんな事は出来ず、実弥としては非常にストレスが溜まり、声を聞いただけでイライラする。

人はイライラとストレスが溜まってくると声を荒げたり、作業が雑になる。

もつと酷くなるとさつきまで覚えていた事がポツンと忘れてしまったりする。

勿論、本来の実弥ならばそんな状況になる筈も無いのだが、前例が全くない鬼から人間になった零余子と人を喰わない禰豆子(しかも太陽を克服済み)のダブル処かトリプル役満が来て想像以上にストレスが溜まっていた。

「実弥、目を開けるんじゃない」

自分の鋸鳥がそう言うも

「うるせえ、クソ鳥！」

と不機嫌の極みな実弥。

そのまま実弥は蝶屋敷の塀を曲がるとそこには義勇に見つめられて困惑してるしのぶがいた。

心臓が早くなり、しのぶに見惚れる実弥。

しのぶが蝶屋敷に入ったのを見て、実弥も手当てして貰おうと入る。

診療室でしのぶに腕を針で縫って貰い、包帯を巻いてもらう実弥。

「一体、不死川さんはいつになったら傷だらけの状態にならずに鬼を討伐するんですか？」

いつものしのぶの小言であるが実弥にはそんな物気にも止めない。

その声に聞き惚れていた。

内容は関係なかった。

そして小言を言いながらも丁寧に処置をしてくれるしのぶの優しさに惚れていた。

さつきまでの不機嫌が嘘のように解れていた。

「はい、これでお仕舞いです」

ポンッと包帯の上から優しく押されて実弥はその腕を見る。

「どうしたんですか？」

「いや、胡蝶・・・いつもありがとうな」

「なら、傷つかずに終わらせて下さい」

「いくら、美人な胡蝶の頼みでもそりゃ無理だ」

「・・・は？」

歯に浮いた言葉を言つて部屋から出る実弥。

残されたしのぶはと云うと、

「(気持ち悪!?)」

本気で鳥肌を立てて身震いしていた。

確かに実弥の本性とか見た目に反して優しいのは知ってるが、そんな普段から言わない言葉を言われると気持ち悪い以外の何物でもない。



明悟は本気で頭を抱えていた。

何故、自分は周りから恋愛相談を良くされるのかわからない。

そもそも自分はカナエ以外の女性関係は全く持っていない上にそのカナエともどちらかと云うと長い時間かけて好きになっていったから、長い時間一緒に居ると云う以外の方法を知らない。

善逸ならまだ良かった。

本人は無茶苦茶煩いが思いやりの心はあるし、純情である。おまけに明悟とは長い時間居た上に好きな相手も分かっているから・・・

でも何で義勇が自分に言ってくるかさっぱり理解出来なかった。

お茶を吹き出した為に気管に水が入ってしまいむせる。

「大丈夫か？」

「誰のせいだと・・・ちよつと待って・・・何で俺なの？」

「・・・胡蝶カナエと夫婦だっただろう？」

「いや、そうだけどさあ・・・それなら、天元君だって」

「宇髓が今どこにいるのか知らん」

「・・・え？今すぐの急用なの!？」

「当たり前だろ？」

「当たり前じゃねえよ!？」



「そうなのか？」

「そうだよ！・・・相手って誰？」

「胡蝶だ」

「はあ!!しのぶちゃん!!あんなに嫌われてるのに!？」

「俺は嫌われてない」

「それは絶対にあり得ない。俺はまあ自業自得ではあるけど」

「・・・？」

首を傾げながら、明悟を見る義勇。

「ん？初対面時におぼちゃんって言ったからな」

その言葉を聞くと義勇は日輪刀を取り出して、明悟に斬りかかる。

真剣白羽取りで何とか防ぐ明悟。

「落ち着け落ち着け！」

「・・・万死に値する」

「怖っ!!何時から小芭内君になった!!俺に助言して欲しいなら、下ろせ！」

明悟がそう言うのと義勇はしぶしぶと刀を下ろす。

「さっさと助言しろ」

「・・・本気ではっ倒すよ・・・花束でも送れって恋文でも書けば?・・・てかそれ

以外に思い付かないよ俺」

「……わかった。感謝する」

義勇はそう言つて部屋を出る。

「絶対、分かつてないなこりや」

明悟はその後ろ姿を見ながらそう思つた。



玄弥は突然こんな事を言う兄に対して困惑していた。

鬼殺隊に入つてからと云うもの鬼を殺す以外にえ？何か趣味あつたの？と云うような生活をしている生真面目堅物な兄の実弥がこんな私事を言つてくるとは想定外だつた。

しかも女性が苦手な自分に恋愛相談してくるなんて何を考へてるのか本気でわからなかつた。

「……え？兄ちゃんなに言つてんの？」

あまりの衝撃に昔使つていた兄ちゃん呼びになる玄弥。

「いや、だから恋した事あんのかつて聞いてんだよ」

「いや、無いけど・・・」

「そうか、邪魔したな」

「・・・何しに来たんだよ・・・」

「知ってたら、教えて貰おうかと思ってよお」

「知るかよ!」

顔を真っ赤にして言う玄弥。

思春期真っ只中で女性だと年齢関係なく上がる年頃の玄弥に恋愛相談をしようと良く思った物である。

「俺じゃなくて・・・そうだ、光柱様とか」

「誰が津上なんぞの力になるか」

一気に不機嫌になる実弥。

明悟の事はまだ嫌いである。

「なら、そうだ!確か音柱様も奥方が・・・」

「宇髄の居場所なんか知るか」

義勇と同じ返しをする実弥であった。

「そもそも何で俺なの?」

「そりやお前。こんな私事を相談するなんて弟以外に居るかよ」

「・・・弟・・・」

「当たり前的事言つてないで知恵を貸せ」

正直に言つて玄弥にそんな知恵などない。

しかし、実弥が自分の事を弟と言つてくれる事に嬉しかった。感極まつて涙が出そうになるがまだ自分の謝罪は終わっていない。

玄弥は先程までとは違つて実弥に協力しようと思つて頭を捻る。

願わくば兄の恋愛を成就させたいと云うのもあるが、これを機に仲直り出来るのではないながら、初で恋愛経験ゼロの頭で必死に考えた結果・・・

「花束送つて、恋文つてのはどう？」

明悟と同じ事を言っていた。

「花束送つて恋文・・・良いじゃねえか！」

実弥は上機嫌になつて部屋を出て行くこととする。

玄弥はその前に聞きたかつた事を聞く。

「兄貴、相手つて一体!？」

「あ? 胡蝶だよ」

照れ臭そうに言つて実弥は部屋を出た。

残された玄弥は上手く行く事を願っていた。



明悟は厠で用をたして、縁側でのんびり仕様かと考えてると、頭を抱えていた玄弥がそこにやってくる。

「あれ？玄弥君どうしたの？」

「あ、光柱様」

「明悟で良いよ。俺、堅苦しいの嫌いなもの」

「……では明悟さんで良いですか？」

「うん、どうしたの？」

「それが兄……風柱様から相談されて」

「実弥君から？何の？」

「れ、恋愛相談です」

「え？そつちも!？」

「明悟さんもですか!？」

「うん、此方は義勇君」

「水柱が何でまた」

「しのぶちゃんに惚れたらしい」

「え!? そつちも蟲柱様なんですか!？」

「そつちも!？」

明悟と玄弥は互いに顔を見合わせる。

「同じ日に2人の柱が突然、1人の女性を好きになる……しかも相手は蟲柱のしのぶちゃん」

「……普段は全然女つ気なんて出してなかった兄貴が突然、人が変わったかのように恋するなんて……」

「絶対におかしい」

明悟と玄弥は口を揃えた。

とは言っても恋愛事に関してはほぼ素人な2人では何も出来ないので、明悟は口笛を吹いて龍悟を呼ぶ。

「何のようだ?」

「すぐにこの手紙2つを届けてほしい」

懐から手紙を2通出す明悟。

「しようがねえな……ってあいつの所かよ。参ったな……嫁から行くなつて釘指されてんの……」

「頼むよ」

「今度、高級果実を寄越せ。家族全員分だぞ」

「わかった」

龍悟はそのまま手紙を持って飛んで行く。

「誰を呼ぶんですか?」

「現在進行形で恋愛中（片思い）な2人に協力を頼む。まあ、来るのは明日に思うから今日はもう休もう・・・疲れた」

「はい」

明悟はそう言っただけで病室に戻り、玄弥も廁で用をたしてから戻った。

翌日、昼頃

明悟と玄弥は蝶屋敷の門の前で昨日頼んだ2人を待っていた。

「一体、誰を呼んだんですか？」

「そりゃ「おおい!!」・・・来た」

「?.....!?!」

明悟と玄弥は突然した声の方を見る。

そこにはいつもの鬼殺隊の格好をして包帯を巻いてる蜜璃と小芭内がいた。

玄弥は蜜璃の大胆な格好にリングゴのように顔を赤くする。

「蜜璃ちゃん、小芭内君ごめんね」

「いえ、恋とあらば恋柱の私ですから！」

「.....体には気をつけろ。あまり動くと傷が開くぞ」

「心配してくれてる。素敵！」

紳士な小芭内にきゅんとなる蜜璃。

明悟は微笑ましく見ていた。

「取り敢えず、中に入って話したいことがあって・・・俺や玄弥君じゃ、役に立たなくて」

「任せて下さい！」

胸を叩く蜜璃、隣の小芭内は明悟を少し睨む。

「(何で俺を呼んだんだ)」

明悟もその目に気づいたのか、小芭内に向かって眼で合図をする。



「蜜璃ちゃんに惚れてるでしょ？」

「貴様、気づいて!？」

「とつくに気づいてるよ。因みに他の柱も多分気づいてる」

「なあ!？」

「それに今回の俺の推論を聞くと多分やる気になるよ」

「・・・さつさと本題に入れ」

眼で会話をする2人。

玄弥と蜜璃からは2人が目を合わせ続けているようにしか見えなかった。



明悟は病室に3人を連れてくる。

轆轤はまだ寝ていたが零余子は起きて一緒に聞いていた。

明悟と玄弥は昨日、起きた事を赤裸々に説明した。

「・・・と云うのが昨日の事で、俺としては2人が血鬼術にかかったとしか思えない」

「烏に聞いたたら、そう言う鬼がいる情報があったので2人ともその任務に就いてたら

しくて」

「……ゆるさない」

明悟と玄弥の説明を聞いて蜜璃がワナワナと拳を握る。体から溢れる怒気に隣の小芭内は少しビビる。

「蜜璃ちゃん？」

「恋愛は一生に何度もない大事なこと！それを悪用する鬼なんて、絶対に許さない！」  
「そうよ！恋愛をする者の敵よ！」

蜜璃の怒りに零余子も同調する。

「零余子ちゃん！絶対にその鬼を懲らしめましょう！」

「勿論！」

怒りで背中から炎が見えてくるが気のせいである。

しかし、2人とも燃えていて非常に熱かった。

「(おお、甘露寺！やはり君は美しい！)」

1人、その姿に見惚れていた。

玄弥はちよつと引いていた。

明悟は熱くなってる2人が居れば何とかなるかと思つて窓の外を見るとしのぶが庭で2つの大きな薔薇の花束と紙を燃やそうとしていた。

明悟は何か察しがついて、急いで下に行く。

他の面々も付いていく。

ゴウゴウと盛大に燃える火の中に2つの薔薇の花束と巻物と手紙を棄てようとするしのぶだが、やる直前に明悟達が来たので一先ずそちらを見る。

「あら義兄さん、どうしたんですか？」

「しのぶちゃん．．．それどうしたの？」

「いえ、ちよつと変質者の2人から貰ったのですが．．．本当にどうしましょうかね？  
これ」

しのぶからは怒気と言つていいのか困惑と取るべきか、それとも恐怖か色んな感情が混ざつていた。

明悟は手紙と巻物を受けとり、玄弥は顔を真っ赤にしながらも花束を2つとも預かる。

明悟はまず手紙の方を見る。

封筒には『胡蝶しのぶ様へ』と書いてあり、差出人は義勇だった。

手紙を出す明悟。

「『拝啓、胡蝶しのぶ様。突然の事で驚かれるとは思いますが、俺はお前の事が好きだ 富岡義勇』．．．!?!」

明悟や聞いてた他の面々もしのぶを見る。

「巻物も読んでください」

心底、疲れたと云わんばかりのため息を吐いて言うしのぶ。

「『拜啓、胡蝶しのぶ様。突然の事でこのような物を送ってしまい申し訳ありません。いつも貴女には助けてもらっています。無茶苦茶な戦いをして自らに傷をつける私に小言を言いながらも手当てしてくる貴女の優しさには感謝しかありません。貴女のその小言の声ですら私には癒しでしかありません。』《中略》……もし、宜しければ、明日行われる祭を一緒に廻りませんか？場所は××で待ち合わせで私は待っています。不死川実弥』……長えよ!!」

バンと巻物を叩きつける明悟。

その長さは5メートルにも及んでいた。

「ええ、本当に長くて読んで辛かったです」

「え？何？2人とも今日はそれに薔薇の花束持って来たの!？」

「はい……もう本当にどうしよう」

疲れ果ててるしのぶ。

花束と恋文を送れば等と気軽に言った2人は罰が悪くなる。

思わず顔を花束で隠す玄弥。

すると花束から紙が1つ落ちてきた。

「『明日の夕方に×』ってかち合うじゃん!」

「何!? 今かち合ってみろ! 水柱と風柱の殺し合いになるよ!」

全員の頭に刀を持って斬り合う義勇と実弥の戦いが浮かんでくる。

2人とも腕は鬼殺隊の中でも強いのでそうなった場合、血の池が出来ただけでなく、貴重な戦力を喪う事になる。

「・・・すぐに手紙で両方ともに付き合うには論外ですと書きます」

決意を固めるしつぶ。

しかし、それには明悟と蜜璃が渋い顔をする。

「それで止まるかなあ?」

「止まらないんですか?」

明悟の言葉に玄弥が首を傾げる。

「本気の恋って自分で納得しないと止まらないと思うの、このまま手紙で無理ですって言われてももしかしたらと思って行っちゃおうと思う」

恋に対して一日の長がある蜜璃が冷静に分析する。

「そんな状態になってかち合ったら『俺の女を奪ったのはお前か!?』って嫉妬と怒りが混ざって余計質の悪い修羅場になると思うよ」

「誰が俺の女ですか．．．そうなるかどうかのみち行つて2人とも同時にフラないといけな  
じやないですか」

ドヨンとそんな音が聴こえてくる程にしのは疲労していた。

「でもさ、悪い気はしないでしょ」

「それはそうですけど、問題は相手があの人だから嫌なんです。ある日、突然言われて  
みて下さい．．．気持ち悪くてしょうがない．．．」

毒使い故か毒を吐きまくるしのは。

明悟達も同情するしかなかった。

「もう寝ます．．．疲れました．．．本当に勘弁してよもう．．．」

しのはそのまま自室に籠った。



翌日の夕方。

―明悟 side 1

明悟、玄弥、零余子、蜜璃、小芭内の5人は隊服を着て律儀に待つてるしのぶを影から見ていた。

「何ともなりませんように何ともなりませんように何ともなりませんように」

「修羅場になったら、止められるかなあ?・・・考えただけで胃が・・・」

「まさかこんな事になるなんて・・・こんな恋愛はやりたくないなあ」

「甘露寺にこんな泥沼は似合わない。誠実な相手がきつと見つかる」

「伊黒さん・・・ありがとうございます」

「皆、そろそろ来るはずだ」

明悟達はそのまま静かに静かに見る。

―しのぶ side 1

しのぶは心底疲れ果てていた。

花の10代ではあるので興味が全くないと言ったら嘘になる。それなりに顔が良い

のも自覚してる。まあ明悟には死ぬほど腹が立っているが・・・ただこういう話題は自分よりも蜜璃の方が向いてると思ってるし、そもそも相手が何故に問題行動の常習犯である義勇と怪我して人を人をイラつかせる実弥なのかさっぱり理解が出来ない。

「(兎に角、お2人が来たら、両方ともに論外ですと云わないと後はそのまま項垂れようが引きこもろうが傷を舐め合おうが知ったこつちやないです)」

「胡蝶」

「富岡・・・さん?!?!」

義勇が後ろからしのぶに声をかける。

しかし、何故か隊服を着て馬に乗ってた。

しかも白馬である。

「馬!?!」

「馬は嫌いか?」

「いえ、好きとか嫌いとかの問題では・・・」

あまりにも似合わない状況と何故馬で来たのか全くわからない。

さっさとフツて終わらせるつもりがあまりの衝撃にしのぶは困惑していた。



「明悟side」

「馬!?!」

「嘘だろ!?!」

「どこで用意したんだ?」

「……でも、ちよつと素敵かも……」

「うん、なんか格好いい」

「……馬か……」

「小芭内君、早まらないように……?!?!」

明悟は早まった事をしそうな小芭内に「そう言うって、音のする方を見るとあまりの衝撃に口を開ける。」

「どうした、津上?」

「あれ!」

明悟の言葉に他の4人も同じ方向を見る。

「な!?!」

「ええ!?!」

「嘘!?!」

「夢じゃ無いよね!?!」

5人の見た先には“車”を運転してる実弥いた。

「「あれ、高いのに．．．」」

しかも1907年に作られた国産品の“タクリ”である。

あまりにも高すぎて超高級品であり、運用や手入れも細かいから鬼殺隊では隠の仕事用以外はない“車”をいくら金がほぼ無限に使える柱だからって．．．こんな使い方をするとは思ってなかった。

ししのぶ side 1

まさか、まさかの車でやってくるとは義勇以上に予想外な事をする実弥にしのは言葉を喪う。

「胡蝶・・・待たせたな」

隊服ではなく、私服と云うか白いタキシードを着てやって来た実弥にしのぶはさつきとフツてしまおうと云う感覚ではなく、もはや憐れみを感じていた。

「不死川、何故お前が!？」

馬を降りて不死川に詰め寄る義勇。

「何故つて胡蝶とここで待ち合わせしてたからな」

「!？」

「一緒に来てくれないか、しのぶ」

しのぶは少し考えて、

「しよぶがないですね。今日だけですよ」

「!？」

乗る事にした。

義勇は頭にタライが落ちてきたかの衝撃が走る。

「富岡さん、馬は遠慮します」

さらにダメ出しをされてしのぶは車に乗った。

実弥も運転席に乗る。

義勇は落ち込みのあまり膝を付いていた。

「富岡！馬の世話なら家でやるんだな！」

とどめの一撃が実弥から飛んで来る。

そして2人は車に乗って目的地に行った。

義勇は少し遅れてその後ろ姿を見て、

「待て！」

走って追い掛けた。

ポツーンと馬と見ていた5人がその場に取り残される。

あまりの展開の連続に思考が追い付いていなかった。

しのぶが何故に実弥の車に乗ったかと云うと物珍しさが1割、残りの9割はここで断ると想像以上の道化に実弥がなるのでそれはそれで申し訳ないと同情したからである。



しのぶはもうこの際、楽しんでしまえと思い、楽しんでいた。

祭りで様々な事をやった。

輪投げや射的から方抜きなど遊んで、的屋の物を食べたりと大いに楽しんでいた。

夜になり、更に賑やかになる祭。

実弥はしのぶを祭りから遠ざけて裏の山の中に連れていく。

そしてそれを追つてる影が1人、ゆらゆらと幽霊みたいに付いていく。

「しのぶside 1」

「(不味いですね・・・ここで告白されてもめんどくさいですし・・・力で来るとは思え  
ませんし・・・)」

しのぶはどうかしてこの状況から打開の策を練ろうとしたがそれよりも先に実弥  
がしのぶの手を握る。

「不死川さん?」

「しのぶ、俺はお前の事が・・・」

告白は完全には言われなかった。

何故ならば、しのぶの後ろには刀を抜いた状態の義勇が立っていたからだ。

「富岡・・・」

「ええ・・・」

しのぶはその状態に引いていた。

「上等だ。これで綺麗さっぱりしようじゃねえか」

実弥もどこから出したのか日輪刀を抜いてジャケットを脱ぐ。

2人の柱が相手を斬り殺すかの勢いで走り、そして互いの刀がぶつかり、高い金属音が辺りに響く。



一方、その様子を見ていた3人がいた。

「本当にやりあつてらあ・・・」

「お兄ちゃん、これで柱が2人居なくなれば暫くは無惨様に怒られないよ！」

上弦の録の妓夫太郎と墮姫の兄妹と、

「これで俺を上弦に推薦してくれるんよな？」

2人の柱を暴走させた鬼《恋患》である。

何故にこの3人がこんな事をやってるかと言うと半天狗と玉壺、そして童磨が死んだので立場が危うくなってきているからである。

まあ無惨張本人は禰豆子をどうにかして手に入れようと頭を悩ましていて上弦に構う余裕が無くなつてただであるが、ストレスと八つ当たりで人を殺す無惨なので妓夫太郎はどうにかして有能だと証明しないとイケなかった。

しかし、アギトには手も足も出ない。

自分達を鬼にした童磨が倒されたのだ。

上弦の壱はどうかは分からないが今の自分達では勝てない。

なので妓夫太郎はアギトではなく、柱に狙いを定めるが相手はめんどくさい人間の柱。

最初の時に殺されかけたので下手に動けないし、毒をやっても死ぬ前に殺しに来るのは決まってる。

なので毒で死ぬのではなく、欲望に忠実になつて貰う事にした。

そこで鳴女に頼んで一目惚れをさせる毒と云う物も扱える鬼《恋患》を呼んで、力と推薦させると云う甘言でここまでやったのだが、自分でもここまで効果があったのは驚いた。

「よし、このまま柱の人間関係を滅茶苦茶にして空中分解を・・・」

「そういうことか」

3人は後ろを見る。

そこには明悟達、5人がいた。

「げえ!?アギト!」

「出たわねブサイク!」

露骨に嫌な顔をする妓夫太郎と散々零余子とやりあつた堕姫は零余子に対して威嚇する。

「うるさい女狐!今日と云う今日は絶対に倒す!人の恋愛事を弄くる外道など絶対に許さない!」

零余子と明悟はベルトを出現させる。

小芭内は刀を抜いて蜜璃と玄弥の前に立つ。

「甘露寺と不死川弟は下がつてろ。まだ癒えてないだろ」

「伊黒さん、格好いい!」

玄弥と蜜璃は悔しくはあるもののボロボロには違いないのでその場から離れる。

妓夫太郎と堕姫も臨戦体勢になる。

「変身!」

アギトの姿になる2人。

「折角上手く行つてるのをここで終わらせてたまるか!《恋患》!てめえはあいつらを確実に殺してこい!」



「任しときー」

恋患はそのまま、柱を3名始末しようとかう。

明悟達も分かれて向かおうとするが、妓夫太郎と墮姫に阻まれて出来なかった。

ーしのぶside ー

一方、互いに燃えに燃えまくって斬り合いをしてる2人はと云うと・・・

「風の呼吸 捌の型 初烈風斬り」

「水の呼吸 拾壹の型 凧」

互いに殺意の高い型をぶつけ合う。

それでも互いに無傷なのは手加減してるのか、殺す気がないのか、なんにせよ隊士同士の私闘は御法度なのでそれを見ていたしのぶは耀哉に報告しようかどうか迷った。

一応、血鬼術の可能性があると云うことなのでこのまま穏便に終わらすか、それとも迷惑をかけられた不満もぶつけて大事にするか。

「(兎に角、どっちでも傷ついたら本気で止めようっと・・・)」

そのまま傍観していたが、それも止めた。

しのぶは2人とは違った方向を見る。

そこには恋患が走ってきていた。

「なんや、ばれとるやんけ」

「あんな派手にやれば分かりますよ。バカでなければ」

しのぶは恋患の後方を指差す。

恋患もそつちを見ると明悟達が派手に戦闘していた。

「所で貴方があの2人をあの状態に？」

まだ斬り合いをしてる義勇と実弥を指差す。

「そうや、俺の血鬼術の《惚れるん矢》の効果や、射たれた後に自分の感性で美しい物や人を見れば惚れて夢中になり、暴走する血鬼術や」

「・・・あほくさ・・・まあ良いです、富岡さん不死川さん鬼ですよー」

義勇と実弥は斬り合いを止めて恋患を見るとしのぶと一緒に対峙する。

さすがは悪鬼撲滅を謳う鬼殺隊の柱であり、鬼に対峙すればまともに・・・

「富岡、お前は引つ込んでな」

「不死川こそ下がってろ」

まだ暴走したままだった。

互いにしのぶよりも一歩前に進む。

それが癪に触ったのかまた刀を突き付けあう2人。

「お2人とも、鬼がいるんですよ!？」

しのぶはそう言うが全く聞かずにまた斬り合いを始める。

「恋に焦がれ盲目になった者はそれだけに執着する。絶対に実らそうと執念と意地を燃やす。鬼殺以外に執念や意地を燃やしてる柱など怖くないんや・・血鬼術 炸裂矢」

恋患はボウガンから矢をいくつも発射し、矢がしのぶに向かっていく。

避けようとするが矢がドンドンと分かれていき、避けれない程の矢の壁になる。

しのぶは矢を何十本も刀で叩き落とすもいくつかの矢が足や肩を掠める。

致命傷は避けたので鬼を殺そうと刀を構えるがふらつく。

「(これは毒!?)」

「さあ、残りは恋に暴走するアホ柱の2人だけやから、3人の柱も俺にしてみれば楽勝や、けどまずは・・血鬼術 爆弾矢」

何本もの矢がしのぶに向かって飛んで行き、矢が爆発し、黒煙がモクモクと立ち込める。

「よっしや!」

歓喜の声を上げる恋患であるが黒煙が晴れるとそこには義勇と実弥がしのぶを庇っていた。

しかし、ボロボロで義勇に至っては刀が根元から折れてた。

「な!?!この・・血鬼術 炸裂矢」

矢の壁が3人に迫ってくる。

それに対して実弥は刀を素早く義勇に渡す。

「水の呼吸 拾壺の型 凧」

矢を全て叩き落とす義勇。

刀を実弥に返す。

「このー！」

再び、ボウガンを構える恋患だが義勇が素早く詰め寄り、ボウガンをつかんで恋患の手ごと掴む。

そして実弥も首を斬ろうとするが恋患はそれを何とか片腕で防ぐ。

「この・・・ボロボロのくせにどこにこんな力が・・・」

「恋してるからよー！」

妓夫太郎や墮姫に逃げられた5人が解毒注射をしてるしのぶの元に駆け寄りながら、蜜璃が恋患に叫ぶ。

恋患は蜜璃を睨む。

「恋をすれば強くなる！」

「誰かを守る為なら人はどこまででも強くなるのよ！」

「まあお前にはわからんだろうがな」

明悟、零余子、小芭内も各々の言葉を恋患に言う。

恋患は徐々に圧されてくる。

どういうわけか、2人の力がドンドン強くなってくるのだ。

恋患は2人を見ると実弥には風車の形のが義勇には水の流れのような『痣』が浮かび上がっていた。

「(なんや、これは)」

義勇と実弥が恋患を殴り飛ばす。

その拍子でポウガンを落としたので恋患は逃げようとするも、

「逃がすか！」

実弥が素早く先回りして逃げ道を塞ぐ。

「風の呼吸 参の型 晴嵐風樹」

実弥が殺しにかかるが恋患は意地で何とか首だけは防ぐ。

しかし、両腕は斬り落とされた上に体も義勇のいる方に吹き飛ばされる。

「仕留めろ、富岡！」

刀を義勇に投げる実弥。

受けとる義勇。

「水の呼吸 壱の型 水面斬り」

地面に激突する前に恋患の首を斬り落とす。

そこまで来るともはや、義勇も実弥も興味は全くなく、また対峙する。

「よし素手で……あれ？」

「？」

「俺達、一体何を？」

「……どうやら、血鬼術が解けたようですね……」

「……あ……」

「その『あ』はここ数日の迷惑行為を覚えてるって事で良いんですね？」

解毒をしたとはいえ、フラフラだったしのぶが確りした足取りで2人に近づく。

「……はい」

2人とも失態をやった事を明確に覚えており、しのぶの前で正座する。

「ちよつと……お2人ともこちらへ……」

5人から離れて更に奥に行く3人。

「さ、俺達も帰ろうか」

「そうだな」

「え？しのぶちゃん達は？」

「ほつといて良いの？」

「一緒に帰った方が・・・」

明悟と小芭内の言葉に他の3人が尋ねる。

すると奥から何かを殴ってるような音が大量に聞こえ始める。

「・・・やっぱり帰ろっか」

「・・・そうだね・・・」

「帰りましょう」

蜜璃としては止めた方が良いのではと思いつつもここ数日のしのぶの怒気を知ってるからか止めた。というよりも義勇と実弥の暴走が色々と酷すぎたので止める気があまり起こらなかった。

後日、義勇と実弥が顔面包帯ぐるぐる巻きの状態になる程の怪我をする羽目になっ

た。



## 幕間 『超おままごと』の裏

栗花落カナヲには実はしのぶがマジで頭を悩ませてる趣味が1つある。

それはひなき達の『超おままごと』を楽しむと云う趣味である。元々、悲惨な生活で姉らである胡蝶姉妹に助けられた過去を持つカナヲは最近まで自分の意志を全く出さなかつたが炭治郎のお陰で多少は出せるようになった。天元にアオイが連れていかれそうになつても真正面から反抗する事が出来たし、色々と変わりつつある。

そんな中で新しく出来た趣味が『超おままごと』の鑑賞である。元々はしのぶが1度やってボロボロにやつたので蝶屋敷の皆と一緒に明悟から本を貸して貰つて読んだのだが、アオイ達には「少々」刺激が強すぎたのか大変大不評であつたが、本以上の過去を持つカナヲには完全に絵空事であり、純粹に楽しんでた。

それどころか、ファンとして好きと公言し、ファン倶楽部の会員第2号の肩書きを持つている。

因みに第1号は義勇だ。

しのぶに取つてみれば悪夢であり、そんな本を貸して尚且つ、元凶である明悟にはもう既にスープレックスを初めとした技を浴びせてポコポコにしたがカナヲにとっては

初めて自分の意思で「好きだ」と言った物であり、禁書にする事も出来ずに頭を悩ましていた。

流石にカナヲもしのぶが不機嫌な時には読むつもりは無いので、修行と任務を終わらせて尚且つ1人の時に黙って隠れて読むと云う背徳的な読み方をしており、口には出してないがしのぶにしてみれば余計に頭を悩ます事ではない。

で、そんな彼女が今何をしてるかと言っていると、本をしのぶの目から隠す為に移動しているのだ。

ここ数日、アホの柱2人がしのぶをカンカンに怒らせて今のしのぶは不機嫌の極みにいるのでカナヲも絶対に読むつもりはなかったが、万が一にも見つかったら、絶対に燃やされると思ったのでカナヲは全ての本を包みに入れてどこかに隠そうとしていた。

しかし、この蝶屋敷であまり使っていない所と言ってもそんなに無いので、困り果てて縁側で休むカナヲ。

「・・・どうしよう・・・師範に見つかったら・・・燃やされる・・・」

本を抱き締めるカナヲ。

そんなカナヲの所に頭に花冠をかけた禰豆子と零余子がやつてくる。

「あれ？あんた……確か……」

「あ……女善逸」

「何それ？」

「うるさいから」

「……まあ良いや……何してんの？」

尋ねてくるが言わないカナヲ。

あまり仲良くするのもあれな上にやろうとしてる事が本を隠す事だと云うのも恥ずかしくて言えなかった。

「な……に……してるの？」

たどたどしい言葉使いで禰豆子がカナヲに聞く。

カナヲは悪影響を与えない為に笑顔を向けるだけにした。

首を傾げる禰豆子。

「あんた、名前は？」

「栗花落カナヲ」

「カナヲって呼んでも良い？」

「……別に良いよ」

「ねえ、カナヲは知ってるの？ 噂の地獄遊び」

「??」

「いや、ここ最近噂になってて、いわく柱でも叫びへろへろになるほど苦しむ遊びってなにか知らない？」

「(たぶんあれだ)・・・知らない？」

「そう・・・明悟とか炭治郎とかに聞いても顔を青くして頑なに教えてくれない処か・・・  
凄く嫌がってたし・・・」

「・・・嫌がってる・・・」

「うん、だから何なのか知りたいんだけどなあ」

「(嫌がってる・・・炭治郎が嫌がってる・・・)」

「い・・・や・・・がってたねえ」

禰豆子もそう言うのと零余子と共にまた2人は遊びに行った。



零余子からの暴露にカナヲはますます隠そうと躍起になっていた。

「(・・・炭治郎は嫌がってる・・・炭治郎は嫌がってる・・・もしも、バレたら・・・)」

以下妄想

「え!? カナヲってこういうのが好きなの!？」

「炭治郎・・・これには・・・」

「ごめん、俺・・・それだけは無理なんだ・・・」

「(炭治郎が離れる!?!・・・それは嫌だ・・・)」

大変、妄想逞しいが、炭治郎ならそう云う所を含めて好きになると思うがカナヲにはまだわからなかった。

「そう言えば、お前って好きな人誰?」

突然、耳に入った言葉。

部屋を見るとそこは明悟達の病室だった。

こつそり、中を見ると明悟とまだ寝てる轆轤そして禰豆子といちやついてる零余子がいた。

「なんで？」

「いや、この前の鉢山の時に俺は好みじゃないって言つてたじゃん。なら好みは誰？」

「炭治郎君？」

「違うわよ……つてか何で炭治郎なの？」

「仲は悪くないでしょ？」

「嫌よ、あんな石頭。私は包括的な人が好き」

「……炭治郎君は包括的じゃない？」

「いや、そうだけどさあ……」

この後の会話はカナヲの耳には入って来なかった。

シヨックを受けたのかフラフラとした足取りで歩くカナヲ。

「（……もしも、炭治郎が好きだったら……）」

### 以下妄想

「カナヲ、俺達、結婚する事になったんだ」

炭治郎の隣には白無垢の零余子がいる。

「・・・炭治郎、おめでとう・・・」

「カナヲも幸せに！友人として幸せを願ってるよ！」

「じゃあね、カナヲはその本が好きな人と一緒になれると良いね！」

零余子が嫌みっぽく言い、炭治郎は零余子と一緒にカナヲから離れていく。

「いや！そんなの・・・嫌だ！」

自分の意思がなかった時とは違ってたかなり自分の意思を出すカナヲ。

断っておくが、炭治郎と零余子がそう言う展開になるのは2人の性格を考えると絶対に天地がひっくり返ってもあり得ないが、カナヲにはまだそれが分かるほど零余子の性格を知らなかった。

「絶対にバレちゃダメ！」

ますます、決意を固めるカナヲ。だが何処にも隠せない状況なので悩む。

「(そうだ!)」

カナヲはとある事を思い出したので、急いで戻る。

「え？これを俺に返すって？」

「……」

笑顔のカナヲは明悟の病室に戻って零余子と禰豆子が出ているのを確認してから、明悟に本を渡す。

元々は明悟の所有物で借りてただけなので返すのだ。

欲しければまた理由を言っただけ借りてずっと持つての方が良いと判断したのだ。

「いや、でも、これ……もう写してるから要らないんだけど……」

「もう全部、読んだから」

「……こんなキツイのを!?早!？」

頷くカナヲ。

明悟はカナヲの読む早さに少し引く。



「分かったよ．．．．．楽しんでみたいだし、じゃあ持つて帰るね」

ニコニコ顔のカナヲ。

明悟は立ち上がり、この本を家に戻しに行くために部屋から出ようとする。

そしたら、彌豆子と遊び終わった零余子が入ってきて、明悟とぶつかる。

本がばら蒔かれる。

カナヲは無視しとけば関係ないのでニコニコとしたままそれを見ていた。

「前見て歩きなさいよ！．．．なにこれ．．．」

「ああ!?教育に悪いのに!」

「私は大人だ!」

零余子は適当に落ちてた本を1冊読む。

カナヲはさっさと帰ろうと思ったが、常人以上の視力を持つカナヲは零余子の目がキ

ラキラしてるのを見逃さなかった。

「何これ!?面白い!」

「ええ!?こんなキツいのを!」

「面白くない?」

明悟にしてみれば毎回疲れるので面白いわけがなく、苦痛の元である。

首を傾げる零余子にカナヲは近づき、手を握る。

「え?どうしたの?」

「私も好き・・・」

「そうなの?」

「うん」

意気投合した2人は後日、また明悟が悪役の『超おままごと』を義勇と一緒に笑顔で見っていた。



『超おままごとの製作』

超おままごとの脚本を作成する時のひなき達の様子を覗いて見よう。

脚本とは映画や演劇などにおいて役者に渡して動いて貰う為の設計図のような物である。

書き方には主に二種類あり、演繹法と帰納法に分かれる。簡単に云うと最後の結末を決めて書くか、それとも行き当たりばったりで書くかの違いであり、一概にどちらの方

が良いかとかと云う話ではない。

そして脚本作りになると大体は帰納法で作られる。

これはまず簡単に云うと小説と違って製作期間が更に細かく決められており、協道に反れると行き当たりばったり過ぎて話の筋の見失うからである。

と云う条件と演繹法の問題点から脚本は基本的にこの作り方で作られる。

『超おままごと』でも作り方はそんなに変わらないが、前と今では変わった事が一つある。

前まではひなき達が個人個人で一本作って、それを順番にやってたのだが、『戦国愛憎劇シリーズ』が終わり、変化を着けたかったので、5人で1つの脚本を作るとなったのだが、

「だから、そこは奥方をドン底に落とさないとダメ！」

「いいや！絶対に亭主をドン底に！」

「ここまで来ると結末を変えるのは？」

「ダメです。話が散らかりますし、何よりも時間が無いです」

「奥方や亭主の場面も大事だけど、他の人物の描写もおざなりになるよ」

「こんな風は大揉めになりやすい。」

「こだわりたい性格の5人なので絶対に互いに譲る気がないと5人に見れば大

好きな明悟と遊ぶ貴重な機会なのでどうせなら自分好みの作品にしたいのである。

因みに脚本にもこの5人の個性が出ていて、

ひなきは『最終的に全滅』

にちかは『善良な人間は救われる』

くいなは『生きてる方が地獄』

かなたは『一見幸せそうに見えて地獄』

輝利哉は『悪党だけが天国』

と云う風に作風が別れてる。

そしてこの子達が言い争うと終わりが見えて来なくなるので、最終的に・・・

「ではくじを引いて」

くじ引きになる。

勿論、ただのくじ引きではない。

「「「は、」」」」

チーム分け

ひなきとにちか

くいなと輝利哉

かなた

と、まず分かれる。

次にその場面を各々書いてきて、良い方かなたが審査すると云う状況になる。

5人で書くようになってから、子供達はほぼ毎回この方法を取るようになった。

そして1週間かけて第1稿を作り、後は明悟が暇になるまでひたすら手直しである。

5人が各々書いてた時も選ばれた本も毎回手直ししており、これまでの手直しの最高

記録は『戦国愛憎劇 第45幕 純愛』の200回である。

こうして子供達の純粋な気持ち詰め込まれた不純な物語が明悟達の精神をすり減らして、一部のファンを熱狂させるのである。

## 運命

時は光柱　津上明悟が12歳の時。

つまり今から11年前に戻る。

とある村に彼はいた。

まだ彼は津上明悟ではなかった。

家はこの田舎にでもあるような田や畑をやっている家で彼はその長男である。

彼の名前は……

「哲哉！哲哉ってば！」

「明悟……朝から煩いぞ！」

耳を抑えて幼なじみの明悟に怒鳴ってるのが、昔の明悟……当時の名前は沢木哲哉。

「哲哉が何も言わないからじゃん」

「うるせえ！」

当時の明悟は今のような性格ではなかった。

傲慢で非常にキレやすかった。

「それよりもさあ、ほら山の寺に行くのは止めない？」

「何でだよ……今晚、行くんだろ? どうせ、後少ししたら嫌でも行くんだから、下見したって良いだろ?」

「でもさあ、昼に行つた方が安心するし」

「バカ! 夜に行かされるんだから、昼に行つても意味が無いだろ!」

「そりやそうだけど……行きたくないよ」

「住職の元で修行すれば寺の後継ぎにしてくれるんだから、行つてちよつと早い挨拶をやつても問題ないだろ!」

「ちえ、哲哉は良いよな。農家の子供で」

「農家のどこが良いんだよ。こんな村、早く離れたいね」

「生まれ育つたあかつき村を捨てるの!」

「好きでここに生まれたわけじゃない。俺は明悟が羨ましいよ……孤児だから自由で……」

哲哉の暴言に明悟はただ黙る。

怒り悲しみ様々な感情が明悟に溢れる。

明悟は黙つて哲哉に背中を向ける。

「自由かも知れないけど幸せじゃないよ。哲哉にはわからないだろうね」

明悟は静かに怒りの籠つた言葉でそう哲哉に言うが哲哉にはその感覚が分からない

かった。

それほどまでに彼は傲慢であり、差別的であり、自己中心的だった。



あかつき村。

どこにでもあるような小さな村ではあるが、ある習慣が1つあった。

それは1年に1回、1人の子供を山にある寺に送る習慣があった。それから村に戻ってきた者は1人もいない。村は日本の発展に伴う影響で若者がドンドン村から出ていく事が多くなり、産まれてくる子供も少なくなってきた。

哲哉はそんな村で産まれた。

明悟はそんな村に捨てられてた。

赤子からの幼なじみである2人は本当の兄弟のように仲が良かった。

そして習慣により、1人の子供が寺に行かされる事が決まり、明悟が自分からそれに立候補した。



村人としては孤児の明悟が行くので自分達には何の被害もなく、ありがたかった。

哲哉は勿論、それに反対し、そして明悟が行くことになって喜ぶ親や村人達を見て心底、気持ち悪く感じた。

だから、彼ら2人は今晚調べに行くのだ。

その寺は外から見れば普通に見える。

住職だって村に良く来る。

優しい人間だと云うのも哲哉と明悟は知ってる。

だからこそ、その習慣と帰ってこない事に疑問を感じるのだ。

夜になり、哲哉と明悟は寺に続く山の麓まで来る。

提灯を持って寒くないように厚手の格好をして2人はゆっくりと寺に続く階段を上っていく。

「ねえ止めない？ やっぱりさあ、住職を疑うのは嫌だよ」

「お前はどこまでバカなんだよ。今まで誰も帰ってこない所に行かされるんだぞ？ 怖くないのかよ・・・これはお前の為なんだって・・・それにお守りは持つてるだろ？」

明悟は確かに自分の名前が刻まれたお守りを首から掛けていた。だが、所詮はお守

り。

何の気休めにもなりはしない。

「でもさあ、大人に見つかったら・・・」

「見付かっても何も無ければ少し怒られて済むだけだ、安心しろ」

「・・・それは哲哉だからだろ、もしも僕が見つかったら、村の和を乱したから明日からは此処で生きていけないよ」

「なら、一緒に出ていこうぜ、そんで生き残れば良い」

「その自信はどこから来るんだ？」

「褒めるなつて、ほら行くぞ」

2人はそう言い合いながら寺に向かった。

寺の前に来ると門が夜中なので当然閉まっていた。

哲哉と明悟は提灯の明かりを消し、扉を協力して登る。

寺の敷地内に入り、辺りを見回す。

とは言つても会堂に小さな物置小屋位しかない。

哲哉は明悟を引っ張りながら、会堂を除くがそこにあるのは仏像だけで何も他に変わつてゐる所など無かつた。

寺の床下などを覗いたり、色々見てもおかしな所など無く、至つて普通の寺だった。

「ほら、やっぱり普通の寺だよ。全部、哲哉の思い過ごしだつて……」

「ちよつと待てつて、まだ小屋の中を見てないだろ？」

哲哉は小屋を指差す。

「あんな小さい所になんて何にも無いよ」

「ここまで来たんだ。無いなら無いで見ても別に良いだろ？」

哲哉は明悟の言葉に耳を貸さずに小屋の扉を開ける。

するとそこには大きな穴が地面に掘られていた。

大人1人が入れそうな程の大きな穴だ。

「なんだこれ？」

「……哲哉……もう帰ろう。危なすぎる……」

「お前たち！何をしている!？」

突然、後ろから光と怒号が飛んで来る。

後ろを振り返ると住職が提灯を持って立っていた。哲哉と明悟の物音に起きてきたのだ。

「逃げるぞー！」

哲哉は先に明悟を穴の中に落として、自分もその後が続く。

2人はそのまま奥深くまで落ちていく。

ズザザアと音を立てて漸く止まるとそこは大きな空洞になっていた。なぜかは分からないが蠟燭が灯つていて少しだけ周りが見えた。

「随分、落ちたな」

「落ちたねえく……じゃないよ!? どうすんの!? 本気で危ないじゃん! てか突き落とすのだろ!? 先に行かせたのだろ!? 盾にする気か!」

「俺がそんな人間に見えるの?」

「だんだん見えてきたよ」

「とにかく、行くぞ。終わりをよければ全て良しってな」

「いつか大変な事になりそう」

哲哉はそのまま前に進んでいく。

薄暗い丸い石だらけの洞窟の中を歩いていくとボキボキと音がなつて明悟の足が少し沈む。

「うわ!」

「どうした!」

「一体、なんなん……」

明悟は足下の物を持ち上げると、割れた頭蓋骨だった。

気持ち悪く、明悟はすぐに捨てる。

哲哉は急いで蠟燭を地面に投げると足下は全て頭蓋骨だらけだった。荒く息をする2人。

一体誰の骨なのか2人にはすぐに分かった。

帰ってこない人達のだ。

皆、ここで骨にされたのだ。

早く出ようと2人が顔を見合わせると後ろで大きな物音が鳴る。

2人はその方向を見るがそこには何も無い。

「今、音したよな？」

「絶対にした」

2人は互いに顔を見合わせて……

「走れ!!」

哲哉の掛け声でとにかくその場から逃げる。

かなり大きい物音を立てながら、何かが後ろから追ってくる。

哲哉は明悟の手を引きながら走る。

しかし、大きな“何か”が明悟を掴み上げる。

あまりにも急な力により哲哉はその手を離してしまふ。

「明悟!」

「哲哉、逃げて！」

明悟はそのまま暗い洞窟の奥に“何か”に連れられて行った。

哲哉は急いで後を追いかける。

洞窟はかなり奥まであり、下は頭蓋骨だらけで何回も足を取られて転ぶが哲哉は止まらない。

そして走っていくと明かりが見えてくる。

フラフラな足取りで明かりの元に着くと、そこに明悟がいた。

「明悟……明悟！」

明悟を揺する哲哉。

死んでないか最悪が頭をよぎったが、明悟は無事だった。

「少年……お前は誰だ？」

突然、耳に届いた声に哲哉は急いでその方向を見る。

そこには“何か”がいた。

手足が異常に長く大きく、人間でない事だけしか哲哉には分からなかった。

「なんだよ……お前……」

「私は……元十二鬼月上弦の式、名前はもう自分でも忘れた」

「……鬼？……」

「そうだ。始まりの鬼・・・私は、あの方が最初に生み出した鬼・・・そして重宝された鬼」

“何か”がそのまま自分語りを始めようとしたので哲哉はこっそりと明悟に近づき、逃げようとする。

「こら、少年。年寄りの話は聞くものだ」

「うるせえ！学がねえ俺にも分かるのは、お前が人喰いで明悟を食べようとしてる事だ！そんな野郎の話なんて聞くか！」

「最近、食欲が無くなってきてるがの」

「知るか！・・・明悟起きろ！」

「く哲哉？」

「逃げるぞー！」

寝ぼけてる明悟の肩を担ぐ哲哉。

“何か”はそれを黙って見ていた。

「少年、無駄な事はするな・・・明悟は死ぬ運命にある」

「は？」

“何か”は大量の岩を持つてくる。

ただの岩ではない人の顔がある不気味な岩だ。

その岩の中には明悟の顔もあった。

「私の血鬼術 因果岩……これから鬼に関わる者、もしくは鬼そのものの生死がわかる。この中にはあの方も十二鬼月もない故に未来永劫絶対に死ぬことはない。だが、明悟はいる。つまり、何があつても明悟は死ぬ運命にある」

長い説明を聞いて哲哉は近くに置いてあつた大金槌で明悟の岩を砕く。

うんざりしたのだ。

元来の短気な性格とマイペースな性格、そして傲慢な性格がこの行動を生む。

「これで問題ないな」

哲哉は金槌を捨てて明悟を担いで去っていく。

“何か”はそのまま、砕かれた岩の欠片を見ていた。

「人は運命の奴隷……産屋敷の呪いと同じようにこれもまた人智を越えた術。それから逃れられる術などない」

“何か”の言葉に哲哉は耳を貸さない。

しかし、明悟は“何か”をじつと見ながら、哲哉と一緒に去っていった。





洞窟を進んでいって漸く出口が見えた。

出口を抜けて外に出ると外は酷い大雨で嵐が吹いていた。

「何でこんな嵐が……」

「急いで戻ろう！」

突然の嵐に戸惑う哲哉に明悟はそう言う。

嫌な予感が明悟の背中を走った。

山を降りてく2人。

村の入り口が見えてくる距離になり、異変に気づいた。

赤く明るかった。

こんな嵐が吹き荒れている夜なのに村の方は赤く明るかったのだ。

「嘘だろ……」

「そんな……」

漸く2人が村を見ると、村は火の海だった。

嵐になり、雨が降り、風も出てるのに火の海状態であり、村人の悲鳴すら聞こえない。

「運命の代償が現れた」

哲哉と明悟が力無く後ろを見ると「何か」が大量の小さい石を持ってやって来た。

「これを見ろ」

“何か”は石を哲哉と明悟の前に捨てる。

石には人の顔があった。

あかつき村、全員の顔だ。

村長も自分の親も医者も近所の知り合いもその子供達も同年代の知り合いも住職に至るまで全員の顔があり、明悟の顔もまだあった。

「運命は壊せない。壊そうとすれば代償が来る」

淡々と話す“何か”に哲哉は明悟を連れて逃げようとするが明悟は動かなかった。

「明悟、なにやっつてんだ？早く……」

「逃げて、どうにかなるの？」

「……」

「哲哉、今分かつてるのは、哲哉が岩を壊した。それで狂った。だから村の皆が死んだ……哲哉が皆を殺したんだ……僕は皆が好きだった。本当に僕は死んでも良かったんだ……死んでも良かったんだ!!……君が全部壊した……」

「明悟、俺は……」

「君は傲慢すぎる」

明悟からの一言に哲哉は何も言えなかつた。

そもそも明悟は最初から今日の事全てに反対していた。付いてきたのは哲哉の頑固

さを知ってるからである。

しかし、それ故に穴に落ちて、化け物に拐われ、村の皆が死んだなどと言う結末になった。

哲哉にも明悟にもそんな事は予想できなかつた。

予想できるはずもなかつた。

だから、哲哉は岩を破壊し、その代償が出たのだ。

嵐のせいか木々がギシギシと軋む。

吐く息が白い。

「明悟……ごめん……」

「……ごめんで済む……哲哉、避ける！」

「え？」

次の瞬間、哲哉の周りの木々が倒れる。

メキメキと音を立てて派手に倒れる。

明悟はすぐに動いて哲哉を弾く。

木々は容赦なく明悟の上に倒れ、明悟は弾いた腕以外の全てが潰されて、片腕だけが

そこに残された。

「明悟！ そんな?! …… そんな、嘘だろ?!」

哲哉は急いで木々を持ち上げようとするが子供の哲哉には持ち上げるなんて出来ず、血がどんどん地面に溢れる。

哲哉は素手で地面を掘始める。

「少年、明悟は死んだのだ」

「黙れ！」

「運命には誰しも逆らえない。絶対に無理なのだ」

哲哉は“何か”の言葉に一切耳を貸さずに掘る。

爪は剥がれ、皮膚は擦りきれ、手が血塗れになっても止めない。

“何か”は暫くその姿を見ていたが、どういうわけか自分の怪力に物を言わせて、木々を持ち上げた。

そこには人だった“肉塊”しかなかった。

哲哉はゆっくりと肉塊に手を伸ばし、持ち上げて抱き締める。

涙が頬を伝わり、嗚咽が周りに響く。

哲哉は泣いた。

一晩中、泣いた。

嵐がまだ続き、太陽なんて見えないほどに曇っていた。

“何か”は哲哉をただじっと見ていた。

哲哉はフラフラと立ち上がり、血塗れのお守りを首に掛けて洞窟に戻っていく。

洞窟の中の骨に足を取られて転んでも何も動じずに淡々と因果岩まで歩く。

因果岩は何百もあつた。

その中には炭治郎、善逸、伊之助、カナエ、カナヲ、しのぶ、義勇、天元、行冥、杏寿郎、小芭内、蜜璃、無一郎、実弥、玄弥、耀哉、あまね、ひなき、にちか、輝利哉、くいな、かなたなど仲間達全員の顔もあつた。

哲哉はそれを全て壊す。

岩が石になり、また収束されて更に死ぬ運命の人間が増えてくる。

「少年、何をやるつもりだ」

「お前ら化け物の親分・・・あのお方つてのを無理矢理、引き寄せてやる」

「何百では効かないほどに死人を増やすぞ。代償も高くなる」

「知るかよ」

哲哉はどんどん壊していくが、人が増えるだけで鬼など一体もでない。

“何か”はそれを見ていた。

食人衝動は勿論出ている。

だが、そんな本能を越える何かを哲哉から感じていた。

1日が過ぎて漸く鬼の死者が出てきた。

人の被害者も300を越えていた。

2日が過ぎて下弦の鬼が出てきた。

しかし、無惨の顔は一つも出ない。

哲哉の体はとつくに限界を越えていた。

手は既に握力など存在せず、服を破つてぐるぐるに巻いて無理矢理金槌を持って岩を砕いていた。

空腹で腹など最早空いてる感覚も無くなり、目も寝不足で意識も朦朧としていた。

それでも岩を壊すのを止めない。

「少年、なぜお前はそこまでやる?」

「・・・友達が死んで親も知り合いも死んでやることがない。早く死んで会いに行きたいけど、こんな事の原因が笑うのなんか想像したくもない。だから道ずれにしてやる」

「結局は気休めにしかならない可能性を考えないのか?」

「気休めでも良い・・・出来る事はやりたい、それだけ・・・」

哲哉はそう言つて、また壊し続ける。

そして3日目、一体何回壊したのかさっぱり分からなくなるほどにまた岩を壊す。

そして岩がまた収束される。

その顔は無惨だった。

「嘘だろ……」

“何か”は驚きのあまり眩き、哲哉はそれを聞き逃さなかった。

無惨の顔がある岩を持ち上げて“何か”に向ける。

「こいつが親分か!？」

カラカラに枯れた喉で叫ぶ。

血が口から流れるがそんな事を気にせずに叫ぶ。

「そうだ……少年……だが、代償はすぐに来るぞ」

哲哉の後ろで先ほど破壊した岩が収束される。

それはまだ人の被害者も大勢いてその筆頭は哲也だった。

「まあ、良いや……どうせ地獄行きだし……逃げれないし……」

哲哉はもう気力なんて無かった。

明悟の逃れられない死を間近で見、徹夜は完全にこの血鬼術から逃げる事を諦めていた。

「……少年……良いものを見れた……」

“何か”は哲哉に対して優しい笑みを浮かべる。

「なあ、あんたって何でこんな所で一人なんだ?」

「長くなるので手短に話すが女の肉に執着する若造に負けて、この力のお陰でお情けを貰つての……でももう戻る気はない。疲れた……肉はもうあまり喰えないし人の運命を見るのも疲れた……」

「……こいつにひよつとしてばれてる？」

「勿論、バレてるぞ……でも、殺させない」

“何か”は哲哉を持ち上げる。

「少年……運命に歯向かう者よ……お前がやつた傲慢な意地と自己満足は久方ぶりに驚き、楽しめた。願わくはこれで死なないことを祈る……この岩の中に今の“上弦の式がない”のは少しばかり腹が立つが愉快だった」

“何か”は哲哉を投げた。

自慢の怪力で洞窟の外までぶん投げた。

哲哉は首に掛けてるお守りを握りしめる。

そして地面にぶつかり、木々にぶつかり、ゴロゴロと転がり、頭を強く打った。

洞窟の中で“何か”は暴れて、あちこちに穴を開けて夜空が見えるようにした。



月の光があちこちから照らされて、その中でじつと前を向いていた。すると琵琶の音が洞窟に鳴り響き、襖が現れてそこから無惨が現れる。

「あの小僧は何処だ？」

確実に怒ってるのがわかる。

“何か”の体が呪いで縛られる。

しかし、そんな事はもう些細なことだった。

「洞窟の外に捨てました。今どこにいるかは分かりません」

「なぜ、早く食べなかつた」

「もう疲れました・・・だから見届けたのです。貴方もまた運命に縛られる者だ」

“何か”の一言に無惨は顔を歪める。

「運命だ?! 運命とは常に私を中心に回るのだ! 現に私は1000年もの間、生き続けているー!」

「それもやがて終わる・・・この世に永遠不滅などない。ないから永遠不滅なのです・・・この血鬼術はあくまでも運命を見る為の物。運命を操る物ではない。この因果岩に写るのは写された者の行動による結果。そう足掻きの結果だけ。簡単には行かない。やつても変わらない結果が写る事が大半。しかし、少年のように限界を越えた者の足掻きは全てを変える」

延々と話す”何か”に対し、無惨がキレる。

「黙れ！その耳障りな能書きを止める！何が運命だ！何が変えるだ！こんな岩など！」

無惨は自分の顔がある岩を壊す。

収束されるとまた無惨の顔が浮かび上がり、それどころか黒死牟まで浮かんでくる。

「結果は変わりません・・・貴方の大好きな不変ですよ」

「・・・もう良い・・・恩情で生かしておいたのに役立たずが・・・」

「結構です」

”何か”は刀を取り出す。

それはかつてこの場所に来た鬼殺隊を殺して奪った日輪刀である。

「では、さらば。運命に縛られし我らが王よ・・・恐らく自らの運命を2度と悟れないと  
思うがその運命に幸あらんことを」

”何か”はそのまま自害しようとするが無惨がそれを止める。

「そうはしません・・・ムカつくが運命は私の物だ」

”何か”は笑みを浮かべる。

「詰めが甘いですよ・・・それに・・・もう太陽は登りかけてます」

無惨はその言葉に反応し、洞窟の外に目をやるともう朝日が昇ろうとしていて空が明るかった。

「鳴女―」

無惨が叫ぶとまた琵琶の音が鳴り響き、障子が「何か」と無惨の足下に現れる。

開き、2人が落ちて一瞬だけ無惨は笑みを浮かべるが、2人が障子の下に落ちるよりも早く太陽は昇り、あちこちの穴から「何か」に直接光が照らされて落ちるよりも先に何かは死んだ。

無惨に対して笑みを浮かべたまま死んだ。

ドンと無限城の床に落ちる火傷だらけの無惨。

「くそが!!!不味い、すぐにアイツを殺さないと・・・鳴女、すぐに私を戻せ!」

「無惨様、それは出来ません。あそこは既に太陽が昇っております」

「なら、あのガキを!」

「(どのガキでございましょう?それにどこにいるのですか?)」

無惨は思い出した。自分が「何か」に經由されて送られてきた情報に哲哉の姿はあつてもどこに行つたのかまでは分からなかった。

その日の晩、無惨は鳴女に命令し、辺りをアチコチ回つたが誰も見つける事が出来ず、唯一の手掛かりな明悟のお守りも血塗れの状態で落ちており、無惨は苦々しい思いをしながら、そのお守りをぐしゃぐしゃになるまで踏んづけていた。



“何か”に投げられた哲哉は目を覚ました。

傷は塞がっていた。

喉も手も元通りに治っていた。

火のエルが彼を助けたのだ。

「あれ?どこどこ?…俺は…誰だっけ?」

しかし、記憶を失っていた。

哲哉は辺りを見回すとお守りが落ちていた。

明悟のお守りだ。

「津上明悟?」

哲哉はお守りを持って歩くが何をすれば良いのか、どこから来たのか、そしてどこへ向かえば良いのか分からず、頭をボーっとして歩き続けた。

そしてその時にお守りを落とした。

哲哉は拾うか迷ったが、自分の血で汚れていた上に何のお守りかも分からないのでそ

のまま放つて置いた。

町に出て、どうしようかと迷うがどうすれば良いのか分からないので哲哉はそのまま町外れにある誰も居ないあばら屋の外に歩き疲れたので座った。

道行く人が色々と哲哉を見るがそれで終わりであり、誰も何もしない。夕方で夜になりかけ、腹も鳴り響く。

どうすれば良いのか分からない哲哉はとりあえずそのまま眠って明日考えようと息をゆっくりし始める。

「どうかしたのですか？」

哲哉の前から声が聞こえてくる。

哲哉が目を向けるとそこにはまだ若い頃の産屋敷耀哉がいた。

「誰？」

「私の名前は産屋敷耀哉です。もうすぐ夜ですがどうかしましたか？」

耀哉の言葉に哲哉は何も返さない。

ただ、腹の音が盛大に鳴る。

「耀哉様〜!!」

「あ?」

「げっ!」

哲哉が突然声がした方に目を向けると隠士が走ってくる。

呼ばれた耀哉は嫌そうな顔で見る。

「耀哉様! また私達を撒いて逃げて! 鬼に出くわしたり、悪漢に拐われたらどうするつもりなのですか?! 最近では男の子でも拐うとんでもない奴もいるのですぞ!」

隠士の言葉に耀哉は耳を塞ぐ。

「またそんな耳を塞いで! 良く聞かないとお館様にまた叱られますぞ! もう少し、自覚をキチンとしてくれませぬと、私の心臓が……」

「そんなことより……」

「そんなことより!?! この私の心臓をそんなこと!?!」

「この子が……」

耀哉は哲哉に向かって目を向ける。

「君、どうかしたのか!?! 名前は!?! 親は!?!」

隠士は哲哉を認識するとあれこれ聞いてくる。しかし、哲哉には答える事が出来なかつた。

「早く帰ったら?」

「君はどうするの?」

哲哉がそう言うのと耀哉が返す。

「関係ないだろ?」

立ち上がり、去ろうとする哲哉。

しかし、耀哉が手を掴んで止める。

「危ないよ! 鬼が出るのに! せめて家まで送らせて!」

耀哉の言葉に哲哉は遂に我慢の限界が来たのか勢い良く睨み付けるが真剣な眼差しをして確りと見てくる耀哉に黙る。

「家は無いし、親は知らない・・・何も知らない」

「? なら、どこに住んでたの?」

「覚えてない・・・何もない・・・」

耀哉と隠士は顔を見合わせる。

「なら、私の家に来ない? 安全だよ!」

「ほつといてくれ」

耀哉の手を振りほどいて、哲哉は歩く。

腹の音を鳴らし続けながら、

「私の家に来れば美味しいご飯が食べられるよ」

耀哉のその言葉を聞いて哲哉は止まった。腹は本当に減ってるし、行く当てもない。

さつき、断つてたのは単純に体に染み付いた素の性格が強い。

しかし、本当にどこに行っても行かなくても何も無いので哲哉は耀哉の方を向く。

「行く」

「良かった、君の名前は？」

「津上……明悟……」

哲哉：……いや津上明悟はさつきのお守りの名前を言った。それが自分の名前だと思つたからだ。

こうして、沢木哲哉は津上明悟になった。

津上明悟は死亡する運命にあつた。

しかし、“何か”は言った。



明悟の因果岩の先の上弦の式の岩がないと、そう童磨の死は元々、運命になかったのだ。

運命は変わったのか、それとも変わってないのか、

初めて出会い、そして親友になった明悟と耀哉。

2人の運命がどうなるのか誰にも分からない。

運命の結末まで後、3ヶ月。

## 零余子と禰豆子と善逸

我妻善逸は今日ほどの日を2度と忘れないと断言できる。

鬼との戦闘で入院してる筈の自分がなぜか桶の中に入って涙で風呂が出来るほどに泣いてるのを絶対に忘れないだろう。



事の始まりは3時間前。

我妻善逸はフラフラとした足取りで蝶屋敷に向かっていた。鬼との戦闘があり、足を負傷してしまっただがギリギリ何とかだったので善逸は意地と気合いと根性で戻っていた。

「もう無理だ。絶対に死ぬ。色々と頑張ったけど死ぬんだ……絶対に死ぬ……」

色々とタフに成りつつあったが、もう既に頑張れる程の気力は無かった。

「もうやだ……絶対に次で本当に死ぬかも……」

どこぞの知り合いの柱が「死なない、死なない」と言つて来そうであるがそんな物は関係なかった。

「そもそも、今まで残れたのも運が良いだけなんだ。何か毎回、鬼が勝手に死んでるし、今までの事は全部運なんだ・・・そうだ、そうに決まつてる」

運ではなく、実力である。

眠ると本来の実力が発揮される人間なのでそれを認識できる者が周りの居ないのと教えても本人の頑固な悲観主義のせいで信じないので、信用できないだけである。

「(もう時期に死ぬんだ・・・)」

人間、一度悲観的になるとなし崩し的に悲観になり続けるのでこういう時は明悟や杏寿郎のような底無しでの明るさと空気の読まなさ加減の人や鬼のように厳しい人がいれば良いが誰も居なかった。

そうこうしている内に蝶屋敷の扉が見えてくるが、疲れてた。

「禰豆子く!!」

その名前を聞くまでは・・・

「禰豆子ちゃん!」

好きな人である禰豆子の名前を聞いただけで飛び上がる程に元気になったが足の負傷が更に悪化した。

そんな事実すら全く気に止めず、元気に澆刺と歩く善逸。

庭に行くくと、禰豆子と零余子が2人して花冠を作った。

「キヤアアアアア!!何?!嘘?!天使?!・・・あつ?!でも禰豆子ちゃんが外に!?!え!?!何で!?!ひよつとしてここはあの世!?!」

捲し立てるように叫ぶ善逸に気づいた禰豆子が近づく。

「お・・・か・・・えり・・・」

「ありがとうございます!俺のため!?!そうでしょ!?!俺のためにお日様の下でも居られるように・・・」

「おかえり・・・いのすけ」

禰豆子の容赦のない一言に善逸が固まる。

別に意地悪云々で言った訳でなく、単純に人物の認識が上手くいってないのと、善逸の名前を知らないからである。

そんな事を知らない善逸はかかとを返して、

「ちよつとアイツを殺してくる」

血を口から流しながら、去っていかうとする。

「ちよつと止まりなさい!」

零余子が善逸の襟を掴んで止める。

「ぐえー！」

「怪我してんだから手当てが先！」

「お……怪……我……?」

禰豆子が怪我をしてる善逸の足に触る。

しかし、力の加減をミスったのか、それとも元から一発でアウトだったのか分からないが、

「ギイヤヤヤヤヤヤ!!!」

善逸の悲鳴が蝶屋敷に響いた。



善逸はちよつとベットのうえで寝ていた。

足の怪我は元々酷かったらしいが、善逸のハイテンションの時点で既に悪化している、単純に零余子の言葉でそれを善逸が認識しただけだと診断されて、禰豆子が悪化させたと思つてた零余子には一安心だった。

「しかし、大変だったね」

炭次郎が寝てる横のベッドで2、3日安静する事になった善逸の横に零余子が座って話しかける。

「痛かったら。禰豆子ちゃんは？」

「あそこに居るよ」

病室の外から禰豆子が半身隠しながら覗き見していた。

知り合いだけしか居ないのは運が良いとしか言いようがなかった。

「禰豆子ちゃん、安心して！大丈夫だよ！」

善逸が元気に言うのと禰豆子はトテトテと来る。

「……ごめんなさい……」

謝る禰豆子。

その何処か純粹な姿に心がキュンとなる善逸と零余子。

「全然！気にしてないよ！もうこんな怪我、明日には完治してるよ！」

「明後日まで無理しないようになって言われてたんじゃないの？」

「そんなの、俺の呼吸でどうにかして……」

騒いでる善逸の頭に禰豆子が手をのせる。

「寝てないと……だめ……だよ」

「はい！今から寝ます！」

さつきまで騒いでたかのが嘘のように善逸が寝た。

「うわあ、チョロい……でもかわいい」

零余子がそう言うのと2人は病室を出た。



2時間後、善逸がゆっくり寝たので目を開ける。

見舞いに来る人など居ないのでそのままもう1回寝ようとする、病室にコツソリと

零余子が入ってきた。

「ねえ、桃でも食べない?」

善逸は周りを見るが誰も起きてない。

「あんたに言っただけど」

「俺!?!」

「要らない?」

「いや……た……食べたいです」

「じゃ、剥いてあげるね」

零余子はそのまま善逸の隣に座り、桃を包丁で器用に向いて切り分ける。

善逸はなぜ、零余子がこんな事をするのか全く理解出来なかった。ご自慢の聴覚で零余子が幸せな気分浸っているのは分かったが自分に全く自信が存在しない上に接点が残らないので善逸は世話好きな子なのだろうと思う事にした。

「(これを気に禰豆子じゃなくて私に惚れさせてやる)」

悲しいかな、その想いは全く伝わっていない。

切り終わった桃を皿の上のせて楊枝をさして渡す零余子。善逸はそれを受け取り食べる。

零余子はその様子を愛しそうに見てる。

「(なんか、食べずらい)」

見られてる善逸は今までされたことがない不思議な状況に困惑していた。

見てる方は結構微笑ましく見えるがそんな2人に対して病室の外から恨みがましい視線を送ってる者がいた。

・・・・禰豆子である。

さつきまで零余子と一緒に楽しく遊んでいたのに何時もよりも早く遊ぶのを止めて



暇を持て余して探しに来たら、善逸と楽しそうにやってて禰豆子としては大変面白くない。

「零余子ちゃん、友達。あの人、友達取った」

いや、取ってない。

寧ろ、零余子から来たので善逸としては酷いとぼつちりであるがそんな事、禰豆子には関係なく。

見事に善逸を珍妙なタンポポから悪いタンポポと認識した。

そう認識した禰豆子の行動は早く、禰豆子は病室に入ってきた。

「あれ、禰豆子ちゃん? どうしたの?」

善逸が尋ねるが禰豆子はガン無視して零余子の腕に抱きつく。

「禰豆子?」

そして禰豆子は善逸を睨む。

「え!? 何!? 怖い!?!」

「零余子ちゃん・・・友達! 友達・・・取らないで」

禰豆子はそのまま善逸に一睨みした後、零余子連れて病室から出ていく。

「ちよつと・・・禰豆子!?! 待って・・・待って!」

静かになる病室で残された善逸はと云うと・・・

「彌豆子ちゃんに嫌われた」

そう呟いて、大号泣していた。



庭まで零余子を連れてくる彌豆子。

連れてこられた零余子は折角の楽しみを妨害されたので少し苛立ちながら彌豆子の手を振りほどく。

「ちよつと本当に待って！何なの!!? 一体！」

そう言うのと彌豆子が睨んでくる。

「な、何？」

「遊ぶ・・・約束・・・破った・・・」

「破ってないわよ！」

「嘘」

「本気で怒るよ！私は破ってない！」

「破った・・・いっぱい遊ぶ・・・約束・・・終わらせて・・・タンポポの所、行った・・・  
楽しそうにしてた」

「え？楽しそうにしてた？」

「・・・うん」

零余子は普通にしてたつもりだが、楽しそうにしてたと言われて恥ずかしい気持ちと嬉しい気持ちの両方を感じて顔を赤くして口を緩ます。

禰豆子としては本当に面白くなかった。

「零余子ちゃん・・・嫌い！」

禰豆子はそのまま零余子を置いて何処かへ行く。

「あ!?!ちよつと・・・禰豆子・・・待って！」



「で、何でここに来たの？」

「禰豆子、悪くない」

明悟の所へ逃げ込んできた禰豆子に明悟は困っていた。

零余子が善逸に惚れてたのはそこまで驚く事じゃなかったが、禰豆子がこうなるとは予想外だった。

「(どうしよう・・・色恋は下手すると完全崩壊するし・・・)」

自分もそこまで色恋に知ってるわけでない明悟にとつて難関な問題だった。

「禰豆子・・・悪くない」

「・・・でも、友達だったら邪魔しちやダメだよ」

諭すように話す明悟だが、禰豆子はそれに対して頬を膨らませて明悟を睨んでくる。

「禰豆子・・・やだ」

「じゃ、零余子と友達止める？一生遊んでくれなくなるよ？それどころか・・・また善逸君の所に行つちやうよ」

禰豆子は考える。

またさつきみたいなモヤモヤとした状況を思い出す。

「やだ・・・やだ！」

「なら、邪魔してごめんなさいって言わないと、ね？」

「うん」

禰豆子はそう言うのと病室から出ていった。

「さて、善逸君はどうなってんのかな？」

明悟もそう呟くと善逸の病室に向かっていった。



庭で零余子はどうするべきか考えていた。

善逸が禰豆子に惚れてるのは分かってからやった今回の作戦がまさかこんな展開になるとは思ってもいなかった。

禰豆子とは友達でいたい。

けど、善逸は掴んでおきたいのであまり会わせないようにしたのにこうなっては何の為にやったのか分からない。

「やっぱり、こーういふ狡い手はだめか」

「零余子ちゃん」

そう呟くterると後ろから彌豆子の声<sup>こゝろ</sup>が聞こえてきたので振り向く。

そこにはちよつと半泣き気味の彌豆子がいた。

「彌豆子？・・・なんかよう？」

先ほど邪魔されたのがまだ腹立つのか少し強めに言う。

「ごめんなさい！」

頭を深く下げる彌豆子。

「彌豆子・・・零余子ちゃんが取られると思つて・・・それで意地悪しちゃつた・・・ごめんなさい！」

真摯に謝る彌豆子。

零余子は愚痴でも言いたい気持ちはあるが、そこで言う<sup>こと</sup>と更に拗れるのは目に見えていたので止めた。

「彌豆子・・・もう良いよ」

「彌豆子・・・許してくれる？」

「うん・・・友達でしょ？」

「零余子ちゃん！」

零余子に抱きつく彌豆子。

「ちよつと、彌豆子。恥ずかしいよ」

「零余子ちゃん・・・大好き」

彌豆子の純粹な一言に赤面する零余子。

その後、2人はまた遊び始めた。



その様子を廊下から見てる明悟は微笑ましく思い、そして善逸がいる病室に入る。

「善逸君・・・大丈夫?!?!」

善逸を見ると、なぜか大樽の中に入り号泣していた。

隣では玄弥がそれを見ていた。

「あ、明悟さん。どうも・・・これ何とかしてください」

善逸を指差す玄弥。

「え!?!どうしたのこれ!?!」

「実はさつきからずっと泣き続けて、布団やら床がびしょびしょになったんで怒った  
神崎や蟲柱様が樽の中に入れてたんですけど、涙が溢れそうです」





## 明悟と耀哉

刀鍛冶の里での一件が終わって鬼の出現が少なくなってきた。時期を調べて鬼殺隊が今まで得てきた情報を重ねると、禰豆子の太陽克服と重なっていた。

途中で柱の2人が血鬼術のドツボに嵌まると云う珍事にあつたがそのような事も一度だけで止んだ。

回復した明悟は起きてまだ少しボロボロな轆轤と零余子と一緒に柱会議に出る事になつた。

「何でお前らも要るんだよ？」

「協力者だから・・・」

「クソ・・・しかし、何で俺は上弦とかち合わねえんだ？羨ましい限りだぜ」

「此ばかりは運が無いとしか言いようがない。甘露寺に時透も体は大丈夫か？」

「あ、うん。ありがとう随分良くなつたよ」

「僕も、毒がまだ抜けきつて居ないけど・・・芦原さんはどう？」

「まだ気分が悪いが回復はしてるはず」

「凄い寝てたからね」

「イビキが煩かった。隣で寝てて結構寝にくかったぞ」

「悪かったな」

「しかし、芦原も時透も甘露寺も津上も氷川も皆、大事がなくて安心したぞ！氷川は何処か血色も良くなったな！」

「ありがとよ。煉獄の方はどうなんだ？」

「うむ、体は快調だ！」

「甘露寺さんと時透君と炭治郎君は何故か今回、治りが異常に早いのですが心当たりはありますか？・・・あと、アホのお2人も翌日には殆ど治ってましたね」

「面目ない」

「おい、何か派手に面白そうな話題だな。教えてろ」

「・・・実は・・・」

「富岡さん、話したらまたやりますよ」

「・・・何もなかった」

「地味に嘘つけ！」

「宇髄止めてくれ。思い出したくねえ、一生の恥だ」

「一体、何があつたの？」

「俺は寝てたから知らねえ。教えてろ、暇潰しにはもってこいだ」

前回の柱2人による大暴走を知らない天元と無一郎、杏寿郎に轆轤、そして行冥まで興味心身である。

「津上、何があつたのだ？ 柱2人も怪我するとは聴いとかねばならん」

「止めてあげて、しのぶちゃんだけじゃなくて当事者の義勇君と実弥君の精神も壊れそう」

「おいおい、派手に興味を引かせてくれるじゃねえか」

「天元君、俺は絶対に言わないよ。2人が・・・」

口が滑りそうになる明悟を蜜璃と零余子が塞ぐ。

「だからダメだつて言つてんじゃん！」

「絶対にダメ！」

「・・・すみません」

「しかし、これから似たような事にならぬとも限らん。出来れば教えてほしい」

「わかりました。では私から説明させて頂きます」

・・・しのぶ説明中・・・

しのぶが先日の義勇と実弥の大暴走を話す。

すると案の定、天元と轆轤が爆笑する。

「お前ら、それで怪我したのか!?!こんな笑える事はないぞ!?!しかも不死川は車に富岡は

馬って……」

「うるせ!!はっ倒すぞ宇髓!……不死川実弥、一生の恥だ」

「……(返す言葉がない)……」

「しかし、人の感情を操る鬼とは何と卑劣な鬼だ。退治できて良かった!」

「そうですよね、煉獄さん!?私が快調だったらこの手で退治したのに!」

「私もよ!」

「零余子ちゃん、あんな最低な鬼は女の敵よね!」

「勿論!」

「派手に面白いな……車と馬はどうしたんだ?」

「あんなの売り返したわ!」

「……家にいる……」

「え?義勇君、飼うことにしたのあれ?」

「うむ……」

「……てか、そんなのに車買ったたり、馬を飼ったりバカなの?」

「無一郎君も後数年したら分かるかもよ?」

「そうだ、時透」

「伊黒さんまで……なら伊黒さんはいるの?」

「な!?!」

無一郎の純粹な一言に場が固まる。

「(え!?!今聞くの!?)」

「(こいつ、地味に気づいていなかったのか!?)」

「(うむ、これはバレると拗れるな!)」

「(口は災いの元だ、悲しい・・・)」

「(言わないで起きましょう)」

「(黙つとこう、後でネチネチ言われる!)」

「(伊黒の好きな人か・・・誰だ?)」

「(言わないでおこうつと)」

「(一体誰だ?)」

小芭内とそこまで接点がない轆轤と人付き合いの下手な義勇には分からなかった。

「伊黒さん、私も気になるわ!」

「え!?!」

蜜璃もそれにした事により、場が更に混沌になる。

「(うわあ、1番困るやつ)」

「(派手に面白くなってきたな!)」

「これは、よもやよもや・・・予想外だな！」

「伊黒さん・・・固まっていますね」

「ああ、想いがすれ違うのは何と悲しい事だ」

「同情するぜ、伊黒」

「伊黒・・・一体誰だろう？」

「こんな修羅場は嫌だなあ」

「固まってるなあ」

固まってる小芭内に蜜璃が尋ねる。

「私も気になります。相手が誰でも応援していますよ！友達ですし大切な仲間ですもの  
！」

「甘露寺さん、そろそろ本題に戻りましょう（義兄さん、伊黒さんは頼みますよ！）」

「任せろ！」

目で会話をする明悟としのぶ。

明悟は合図通りに小芭内を見る。

真っ白に燃え尽きていた。

「・・・生きてる？」

「いつそのこと、一思いにやってくれ」

明悟は肩を叩いて小芭内を慰める。

和気あいあいとしてる中で頭に包帯を巻いた耀哉がひなき達に連れられてやって来る。

呪いのせいか、部屋に入った瞬間に血へドを吐く。

「耀哉！」

「お館様！」

明悟が慌てて耀哉に近づき、背中を擦る。

「ありがと……明悟」

「喋るな。とにかく、今は休んで……」

「休んでられない……上弦を倒し、禰豆子にも変化が現れた……もうあいつを逃がさない為にも……座れてくれ」

「わかった」

明悟はひなき達に変わって肩で耀哉を支えて座らせる。

「皆も命を喪わずにここまで来た事に私は嬉しい」

「お館様、ありがとうございます。しかし、肝心の無惨を討伐出来ねば我らにいる意味などありません」

「行冥は相変わらず厳しいね……今回、皆に言いたいののは2つ。1つは義勇、実弥、蜜

璃、無一郎の痣について……そしてこれからについてだ……まずは痣がどうやって出てきたのか思い出して欲しい」

耀哉の言葉に痣が出てきた4人が身構える。

……痣の説明中……

4人が痣の各々の説明のを終わらせる。

「うむ、今の話を纏めると心拍が200以上で体温が39度以上が痣の条件のようだな！」

杏寿郎が今までの話を纏める。

概ね、全員の見解が一致していた。

「4人もありがとう。痣については文献があまり無いこともあつて分からない事が多い……ただ、痣を発現には皆に知って貰わないといけない事がある」

「何ででしょうか？」

「痣を発現した者は誰も例外なしに齡25までしか生きられない……それを皆の頭に入れて欲しい」

耀哉からの言葉を受けて部屋が静かになる。

血へドをまた吐く耀哉。

「耀哉!?もう休め！」



耀哉を立たせる明悟。

「明悟、君にも言わないといけない事がある」

「・・・何だよ」

「無惨をここに誘き寄せる」

耀哉の案にその場にいた全員に緊張が走る。

「お館様、それは一体どういう・・・」

天元が叫ぶが行冥がそれを止める。

「どうする気だ？」

「・・・この命と引き換えにアイツを止める・・・鉱山の報告を聞いて、恐らく無惨は太陽でないと倒せないだろう・・・だから太陽が出てくるまでにアイツを抑えないといけない。あの逃げるが取り柄のアイツを・・・無惨はその自尊心でこの居場所が分かつたら必ずここに来る。そこでアイツに・・・」

「爆弾かなんかで一緒に爆発して少しでも足止めるってか？」

耀哉は当ててきた明悟に笑う。

「流石、明悟だね。そうだ」

耀哉は笑うが明悟は普通とは思えないくらいに低い声で話す。

「俺が今、お前を殴ってないのは殴ると死ぬかも知れないからだ・・・もしも殴れるなら

お前をボコボコしてるぞ」

「・・・やっぱり君はそう思うと思つたよ」

「生きる、生きてくれ・・・俺は友達が死ぬのを見たくない・・・」

「頼むよ・・・アイツを殺さないと・・・アイツの呪いが暴拳が永遠に続く・・・こんな苦しみはもう終わらせたいんだ・・・」

明悟は絶対に止めない。

人の意思を尊重するから絶対にそれが死を意味しても止めない。

「・・・わかった・・・」

明悟は隠に後は任せて耀哉を部屋から出す。

静かに何も言わない明悟だが、握りしめた拳から血が出て、畳に染みる。

「津上、お館様の意思を・・・」

「黙れ！」

行冥の言葉に明悟は睨みと怒号で返す。

行冥もまた手を叩き、場を沈める。

「痣の発現そして、無惨をここに誘き寄せる為。私に1つ提案がある」



行冥の提案とは、柱達による隊士達への強化訓練を行うと云う案だった。

隊士達は柱との訓練で基礎を鍛え上げられるし、柱は柱で痣を出すための訓練にもなる。

概ね、それをやる事が決まったが義勇としのぶが不参加を表明した。しのぶの場合は怪我や体調不良の際の手当てに奔放する為であり理に叶っていたが、義勇はそういう技能もないのでまた一悶着あったが延々に平行線を辿っていて時間の無駄なのでそのまま放って置く事になった。

明悟は多分、耀哉が何らかの助言をするだろうと思つたので放置して、自分の強化に当たる。

「本当にやるのか？」

「あんだ、体を壊すよ？」

回復した轆轤と零余子がベルトを出した状態で明悟と対峙する。明悟は柱ではあるが今回の訓練・・・柱稽古には轆轤や零余子共々参加しないつもりである。

理由として、まず力の根源が違うので助言も何も出来ない。

故に体力を上げるとか柔軟になるとか組手とか基礎的な事しか出来ないのだが、それよりも明悟はシャイニングを轆轤はミラージユを物にする方が早いし、理に叶っている。

実際にシャイニングは太陽が出てないと変身出来ないので夜戦専用の鬼との戦いは確実に鬼を殺せるのに使えない。

「頼む、時間が無いんだ。でないとあのバカを止められない」

明悟の目は本気だった。

それを受けた轆轤や零余子も覚悟を決める。

「よし、やるか!」

「後で体を壊しても知らないわよ!」

「上等だよ」

3人がベルトを出現させる。

「変身!」

「変・身!」

「変身」

アギトになる3人。

明悟と轆轤はそこから、シャイニングフォームとミラージユに変身する。

「行くぞ……」

「おう……」

明悟は轆轤と零余子の2人相手に組手を始める。

火花が飛び、急所の攻撃もありと云うかなり荒い組手だが時間がなかった。

轆轤の左拳をいなす明悟。

そのまま突っ込んで来ている零余子の腹を右脚で蹴るがしかし零余子にその脚を掴まれる。

一瞬間まる明悟に轆轤が右拳を頬に叩き込む。

明悟も負けじと左拳を轆轤の頬に叩き込み、軸足にしていた左脚で零余子を蹴り飛ばし、右脚を解放する。

「もつとだー!」

明悟の前に紋章が宙に浮かび上がる。

「しようがねえなあ、死ぬなよ!」

「本当に死なないでよね!」

「俺が死ぬか!」

轆轤の目の前にも赤い紋章が浮かび上がり、零余子の足下にも紋章が浮かび上がる。

零余子の下の紋章が右足に収束されると零余子が飛び上がり、轆轤も飛び上がる。

明悟も飛ぶ。

そして3人とも右足を突き出し、明悟と轆轤は其々の紋章を通過する。

3人のライダーキックがぶつかり合う。

巨大な力の激突で辺りに衝撃が走り、眩い光が3人を包む。

数秒後、光は収まると地面に着地出来たのは轆轤と零余子だけだった。

明悟は何処にも居なかった。



変身が解除された明悟は光が収まると何故か1人だけ、さつきまでとは違う夜の森にいた。

「(ここは何処だ?)」

辺りを見回しても轆轤や零余子はいない。

一先ず、我が家に帰ろうと脚を進めると不意に明悟は鬼の気配を感じとる。

明悟は走ってそこに向かう。

「変身！」

アギトに変身してそこに向かう。

全力で向かうとそこには鬼がいた。

ただし、黒い戦士がそこにいた。

見たこともない戦士だ。

赤い目に緑の体をしていた。

「リボルケイン！」

戦士はそう叫び、ベルトから閃光を放つ剣を出す。

そして、叫びながら鬼の腹に刺した。

何故か分からないが鬼の背中から火花が飛び巻く。

戦士が剣を抜くと鬼は叫びながら大爆発を起こした。

「……何あれ？」

明悟は戦士の闘い方に少しだけ引いていた。

「そこにいるのは誰だ!？」

戦士が明悟の方を向いて叫んだので明悟も戦士に見えるように姿を見せる。

「お前は仮面ライダーアギト……なぜここに!？」

「あー、貴方は何者だ？」

「俺は太陽の子、仮面ライダーブラックRX！」

異次元にやって来た明悟。

そして現れた仮面ライダーブラックRX。

明悟は元の世界に帰れるのだろうか？

続く！



## アギト対RX

明悟は変身を解いて1人の男と対面していた。

「自己紹介が遅れたな。俺の名前は南光太郎」

「俺の名前は津上明悟」

「よろしく、明悟」

「よろしくお願いします。光太郎さん」

明悟は光太郎と握手をする。

「早速で悪いが君は一体何者なんだ？」

「実は・・・かくかくしかじか・・・」

大まかな経緯を話す明悟。

「成る程、力と力のぶつかり合いで気がついたらここに・・・」

「ええ、一体どういう事なのか」

「恐らくだが力の衝撃によって時空が歪んだのか穴が空いたのか、とにかく君はそこからこの世界にやって来たのだろう」

「・・・やっぱりここは違う世界なのか」

「・・・随分、驚かないんだな」

光太郎の話に明悟は淡々と現状を理解していた。

その姿には光太郎も少しだけ驚く。

「色々ありましたし、土君にも会いましたから」

「土に会ったのか？」

「知り合いだったのですか？」

「前にちよつとな・・・よし、君が帰れるように手を貸すよ」

笑顔で答える光太郎。

優しい笑みに明悟は信じることにした。

「では早速始めますか・・・」

「対策があるのかい？」

「力と力の衝突で起きたならば同じのをもう1度起こすしかないですよ」

首をコキコキと鳴らしながら、体を解す明悟に光太郎も体を解し始める。

「光太郎さーん！」

明悟にとつても光太郎にとつても聞き覚えのある声が出て、2人はそつちを向く。

「おお、カナエちゃん！」

このRXの世界のカナエが向かってきていた。

明悟は別世界のカナエと割り切ろうとしたがそれは無理だった。

「どうしたんだ？」

「お館様から暫く休養して欲しいと云う言伝てを頼まれました」

「そんな気を使わなくても・・・」

「いえ、光太郎さんはお館様の呪いを解いた恩がありますから、返したいのでしよう」

明悟の心に非常にドス黒い何かが生える。

光太郎に対する嫉妬とそして無力な自分への強烈な怒りが沸き上がる。

「このセカイのオヤカタサマはゲンキなようだね」

自分の中の感情を抑えながら話すので所々が棒読みになる。カナエは漸く明悟を認識した。

「あら、貴方は？」

「俺の名前は津上明悟・・・」ハジメマシテ」

「私は胡蝶カナエ、光太郎さんの恋人です」

そう言つてカナエは光太郎の腕に引つ付く。

非常に苛つく明悟だが、ポーカーフェイスは崩さない。

しかし、光太郎にはその姿がよくわかった。

光太郎はカナエに耀哉に対して言伝を頼み離れさせた。

「明悟、早速だが始めよう」

「ええ、ハジメマシヨウカ」

明悟はベルトを出現させると光が放たれる。

光太郎のベルトも動き出す。

「変身！」

明悟はアギトに光太郎はRXへと姿を変える。

そのまますぐにバーニングフォームに変身する明悟。

「では合わせるぞ明悟」

「・・・ああ」

2人は声を出してそれぞれ右拳を合わせて全力でぶつける。

衝撃波と轟音が響く。

そしてバーニングフォームである明悟の方が押され、飛ばされる。

「大丈夫か!？」

明悟に気遣う光太郎。

その時、明悟の腕が黒くなった。

深いドス黒い何かを思わせるように黒くなった。

ゆらゆらと立ち上がる明悟に光太郎は無意識に警戒する。

「明悟?」

「・・・何であんたは全部守れてんだ?・・・どうして・・・」

明悟はそう呟くと全身に黒い波紋が浮かび上がってくる。

そして、足に力を入れて大きく踏み込んで光太郎に向かう。まるで時間を切ったかと光太郎が勘違いするほどに早く一瞬で明悟は光太郎の前に来て、殴り飛ばす。

殴り飛ばされた光太郎はぶつかった木々が折れてゴロゴロと転がる。

「明悟、落ち着け!」

光太郎が叫ぶが明悟には届いていない。

容赦なく明悟は光太郎に拳を振るう。

何とか当たる寸前で防ぐが関係なくまた吹き飛ばされる。

光太郎は姿を変える。

『鉄壁の王子　メタルライダー』

銀色の姿になったRX。

明悟は関係なく殴る。

先程に比べて吹き飛ばばなくなったが、それでも後退りしてるのに光太郎は驚く。

『メタリングスマッシュ』

明悟の体に拳を撃ち込む。

吹き飛ばされる明悟だが、ベルトが一瞬光ると何事もなかったかのように立ち上がる。

また向かって来た明悟に光太郎は拳を撃ち込むが今度は受け止められ、殴り返される。

「(メタルライダーでは不利か!?)」

メタルライダーでは不利と判断した光太郎は姿を変える。

『幻惑の王子 ムーンライダー』

ムーンライダーに変身した光太郎は二本の刀《ムーンセイバー》を出す。明悟も黒くなったシャイニングガリバーを出す。

斬り合う2人だが、光太郎が徐々に圧されてくる。

本来ならば光太郎が圧されるなんてあり得ない。

しかし、アギトの進化と明悟の体を気遣っているので本気を出せないのだ。それにこのまま本気になればどちらかが“ただではすまない”事を光太郎は長年の経験で直感していた。

分身を大量に出して明悟を取り押さえようとする光太郎。だが明悟はバーニングフォームからフレイムフォームになる。黒い波紋が全身に広がっている不気味なフレイムフォームに……

分身の攻撃を完全に避ける明悟。

光太郎の背中に冷や汗が流れる。

「本能で全てを避けているのか・・・ならば」

『疾風の王子 サイクロンライダー』

超高速で明悟に攻撃する光太郎。

本能による超直感でも流石に避けられない。けど明悟は立ち上がり、黒い波紋が広がっているストームフォームに変わる。

すると超高速で動いている筈の光太郎と速さで互角になるほど動き、拮抗する。

そして互いに殴り倒れる。

明悟はまた光太郎の元へ行き立ち上がらせるが光太郎もやられるだけでなく明悟の拳を止める。

「明悟、落ち着け！」

「どうして・・・どうしてなんだ!?!・・・耀哉も・・・カナエも・・・どうして!?!」

「・・・まさか、君とカナエちゃんは！」

「どうして全て守れてるんだ!?!俺と何が・・・」

力なく光太郎を殴る明悟。

「落ち着くんだ・・・」

「どうして俺はカナエも・・・耀哉も・・・」

暴れて疲れた明悟はうなだれて座り込む。

光太郎は明悟の前に座る。

「君とお館様は親友なのか？」

光太郎の質問に明悟は何も答えない。

「昔、俺は大事な親友を守れなかった・・・兄弟だとずっと思ってた。でも殺しあつて最後まで俺は助けられなかった・・・」

「・・・あんたもいたのか？」

「誰にだつてゐるさ・・・守りたくても守れなかった人間なんてごまんといささ・・・君のお館様は生きてるんだろ？」

「・・・ああ、生きてる・・・」

「なら、諦めるな！お前も俺も仮面ライダーなんだ！」

「仮面ライダー・・・ね。なあ、あんたにとつての仮面ライダーって何なんだ？」

「考えた事ないな。結局、俺でしかないから」

「そうか・・・」

立ち上がる明悟。

突如として黒い波紋が光を放ち、苦しむ。



のたうち回る明悟。



明悟は黒い空間の中に立っている。

周りには誰もいない。

《お前は何の役にも立たない》

《上弦を倒せてない》

《皆に嫌われてる》

《無能が》

《何の為に力を持つてるんだ!?!》

《何が太陽に等しい力だ!?!》

《どうしてまだ続いてるんだ!?!》

《あの時無惨を仕留めていれば・・・》

明悟は耳を押さえて辺りを見回すが誰もいない。

心臓が早くなり、呼吸が荒くなる。

明悟の前に耀哉が現れる。

「耀哉？」

《明悟、君の力など要らない．．．君は役立たずだ》

落ちていく感覚が明悟を襲う。

より深い所まで落ちていく感覚。



光太郎は目の前で変化していく明悟に目を疑う。

目の前で立ち上がった“黒いバーニングフォームのアギト”は君が悪かった。

「明悟!：目を覚ますんだ!」

容赦なく襲いかかるアギト。

光太郎はRXの姿に戻り、攻撃を捌いていくが分が悪い。

辺りに何があってもお構いなし攻撃をする明悟。

光太郎はリボルケインを引き抜く。

「リボルケイン!」

そしてリボルケインをそのまま明悟のベルトに刺す。

「俺の力は太陽の力!目を覚ませ!」



明悟は暗闇の中を落ち続けていた。

しかし、そんな中で光が辺りに照らされる。明悟は一瞬、顔を隠すがすぐにその光の方に歩き始める。

《君は行つてはいけない》

後ろから聴こえてくる耀哉の声。

明悟は後ろを向くと驚いた。

なぜなら、確かに耀哉の声をしているがその姿は自分自身だった。

明悟はその滑稽な姿に笑った。

「そうか、お前は俺なのか……」

「……そうだ、お前は俺だ……無能な俺だ」

「……」

「一体、どれだけ結果を出せない？ 耀哉の呪いは進行し続け、上弦を倒せてない上に無惨

を殺せたのに殺せなかった」

「ああ」

「光太郎は凄い。耀哉の呪いを解いた上にカナエを守った。今だつてわかつただろう？俺は全力なのに向こうには余裕があつた・・・お笑いだ・・・そんな俺が耀哉を助けられるか!?今もこんな風に悩んで殻に籠る俺に!?」

明悟は何も言えなかつた。

けど、明悟は光に向かつて歩いていく。

「そうやって中を見ようとしなさい！お前は誰も守れないクズだ！」

「俺は俺だ！」

「自己愛の権化が！」

「俺が自己愛だと!?耀哉の呪いを解けない！カナエを死なせて！そんな俺が自分を愛してるだど!?俺は愛着を持つてただけだ！」

「愛着だと!?!」

「そうだ!ここで籠るのも俺!カナエを死なせたのも!耀哉の呪いを解けないのも!情けない俺だ!でもこれが俺なんだよ!誰に言われても変えられない俺なんだ!憎くて殺したいがそれでも俺なんだ!なら、愛着もつてやる気出すしかねえだろうが!」

「・・・そう言つて上手く言つたことないだろ!」

「それでもやるしかない。やるかやらないかだ！」

明悟を罵倒し続けてる明悟は呆れた。

あまりにも無責任でそして諦めの悪い本人に呆れた。

「俺は前に進む。そうカナエと約束した！耀哉と夢を叶える！例え、何を犠牲にしてもだ！」

明悟は光に向かって走り出す。

自分の“心”から離れ、更に自分の夢に進むために……



光太郎はリボルケインを明悟から放す。

するの黒いアギトの姿が変わっていく。

殻から産まれる雛鳥のように美しく、幼虫の誕生のように力強く、動物の誕生のようにグロテスクに……命を賛美するかのように優しく“変身”していく。

あまりの美しさに光太郎は魅了されていた。

そして中からアギトが生まれた。

見た目はシャイニングフォームとあまり変わっていないが背中が違う。深紅の背中

に銀色のアギトの紋様が現れた。たったそれだけの変化なのにシャイニングに比べて進化の上限が更に無くなった。

《仮面ライダーアギト サンシャインフォーム》

明悟だけのアギト。

「光太郎さん……俺……」

「俺は問題ない……今なら戻れるかも知れない！やるぞ！」

「はいー」

2人とも構える。

光太郎も明悟もそれぞれ、体勢に入る。

2人とも飛び上がる。

光太郎はバック転して前に進む。

明悟はアギトの紋章をくぐる。

RXの両足が赤熱化して繰り出す。

アギトの足に金色と銀色の光が纏われる。

そしてぶつかり合うと轟音と衝撃、それに伴う空気の振動、稲妻、様々な物が辺りを壊していく。

2人が更に力を入れるとそれぞれ弾かれたかのように吹き飛ばされ、顔を戻した先に

は大きな穴が開いていた。

「これが次元の穴……」

「ここを通れば俺は帰れる……」

明悟は少しずつ閉じつつある穴にすぐに向かう。

帰る前に光太郎を見る。

変身を解いて笑っていた。

「色々、ありがとう！それとごめんなさい……俺、まだまだ弱くて」

「誰だつて嫉妬の1つや2つするものだ、気にするな……負けるなよ仮面ライダー！」

「……“師匠”もな……」

明悟はそう言つて穴に入った。

残された光太郎は笑みを浮かべて穴が消えるまでそこにいた。

「また会おう」



轆轤と零余子は明悟を探していた。

力がぶつかり合つて光が出ると明悟が消えたので一時間くらいずっと探しているが見つからない。

どうしたものかと悩んでいると突然、穴が開いてそこから明悟が飛び出てきた。

2人は明悟から話を聞くと嘘のような話を出してきたがそれを嘘と断言するには否定できない物が大量にあるのと嘘を言う意味が無いので2人は信じた。

明悟は2人と一緒に家に戻り、明悟はまた耀哉の屋敷に向かった。

屋敷に上がり、ひなきに案内される明悟。

耀哉が横になっていた。

「明悟叔父様……お父様は今……」

「いや、良いよ。ここで大丈夫だから……ひなちゃんも聞いて欲しい」

「はい！」

「耀哉……俺は何がなんでも守るぞ。お前が何て言おうが死んでも守る。この命にかけてお前を助ける。だから負けるな」

明悟はそう言つて屋敷から出た。



ひなきは耀哉の包帯を変えようと新しい包帯や塗り薬を持ってきて横に座る。自分の小さい手で包帯に触れると濡れていた。ひなきは暫く待った。耀哉が泣き終わるのを待っていた。

「明悟・・・ありがとう・・・」

耀哉は明悟の言葉に感謝しながら泣いていた。

## 最期ノ審判 A B A Y O

## 日常

明悟、零余子、轆轤の3人は見回りをしていた。

あれから何日も経過して炭治郎達や柱達はそれぞれ痣を出そうとやっていた。途中で明悟達も呼ばれて稽古に付き合った。

何人かは痣を出しそうだった。

その中で義勇もなんだかんだ柱稽古に参加していた。

轆轤や零余子も一緒に夜の休息に良い隊士といまいちな隊士の区分けを聞いてるとなんだかんだ最後まで行っている隊士の数は多く、その中でもやる気と執念で分けると1番は伊之助だった。

理由としては本人の氣質が大半であり、柔軟性に触覚による空間認識能力は群を抜いて高く、後は常にうるさいので柱達も記憶に残りやすかった。

逆に善逸に関して悪い意味で記憶に残りまくっていて、弱音を吐きまくり、士気が全体で低下させまくるわけで良いところを探す方が難しく、さらに云えばそれでも最後まで行く辺り、高い技量を持つてるのは嫌でも分かり、何であの技量であの性格なのかさつ

ぱり分からなくなるほどである。ただ最近は不気味なくらいに静かになってるのでそれはそれで良かったと感じてる。

他に最後まで行つてる隊士は少ないので記憶に残りやすく、炭治郎もまた記憶に残つていた。

まあ、柱稽古になる前から色々記憶に残つていたが、さらに記憶に残つた。決して器用でもなければ才能に溢れている分けでもない。けど非常に愚直で1回ごとに少しずつ良くなつていき、傲らない。自己修正能力の高さと和を纏めていく高さが士気に繋がつていて他の隊士のやる気に直結していた。

後は縁の下の力持ちと云うならば村田の評価も高かった。

そんなこんなで日にちが進んでいく。



明悟は蝶屋敷の部屋でしのぶと茶を飲んでた。

「しかし、しのぶちゃんが俺を誘うなんてね」

「意外でしたか？」

「まあね」

「私だって、誰かと茶を飲みたい時があるんですよ」

笑顔で話すしのぶ。

「で、本題は？」

笑顔だったしのぶの表情が真剣になる。

「義兄さん、私は藤の花を体に取り込んでいます」

明悟の顔を変えずにしのぶを見る。

「最初は上弦の弓を殺すために取り込んでいきましたが、今は無惨を殺すために取り込んでいます。どうにかしてでもあいつを殺さないといけません」

「他の皆には話してる？」

「いえ、カナヲには話しましたがそれ以外には、気づかれたのはありましたけど」

「そう」

明悟は全く何一つ顔を変えずに茶を飲む。

しのぶは話をちゃんと聞いてるのだろうかと少し苛つくがすぐに顔を戻す。

「驚かないんですか？ 説教の1つや2つ来るかと」

「何で？ 俺、人の選択には彼是と言わないの。轆轤や零余子みたいに人を殺しまくって

るヤツは罰を受けさせる。無惨のような怪物は殺す。けどそれ以外は何も言わない。だって自分で人生を決めてこそ“人生”だよ？一々言わないよ。まあ人を傷つけない前提だけだね」

呆れたように言う明悟。しのぶは肩透かしを食らったがこのまま終わらせるのも何か手玉に取られたように癩なので笑顔になる。

「姉さんの時はあんなに狼狽えてたのに」

「それを言うな、あれは仕方ないよ」

「ガバガバな信条ですね」

「喧しい。あれこれ言わないでよ。本当におばさん臭いよ」

しのぶの額に血管が浮かび上がる。もう何回も言われているがまだ慣れてないのは明悟のいらつく話方のせいだろう。

「無惨を殺しても互いに生きてたら私が義兄さんを殺します」

「怖いよ」

「女の怒りは怖いんですよ。知りませんでした？」

明悟は茶を置いて両手を上げて笑みを浮かべる。そしてもう話すことはないと立ち上がり、障子まで歩く。

「そう言えば、何で俺に話したの？」

「死んでも私を守りそうだったので釘打ちです」

「だとしたら失敗だよ。俺は人の選択に口を出さないけど、自分の選択にも口を出させない質でね」

しのぶは明悟の言葉を静かに聞いていた。

「だから、絶対に俺は守る、守りきってやる」

「そうですか・・・なら、生き残ったなら絶対にボコボコにしてやりますね。私のやり方を否定したので」

笑顔で物騒極まりない事を言うしのぶに明悟も笑う。

「そう・・・なら、楽しみに待ってるよ」

明悟はそう言つて部屋から出た。



明悟は蜜璃と小芭内と一緒に団子屋に来ていた。

いつ会えなくなるか分からないので明悟は行きつけの団子屋に2人を招待したのだ。

町から少し外れて尚且つ、少し不便な道順を通らないと行けないような所にある団子屋。なんでこんな所にあるのか明悟は店主に聞いてみた。何でも客が多すぎたら作り

が雑になり、いつか潰れる。少なすぎても潰れる。なら、少し不いな位で確りと作り、潰れなければ自分の腕の自信にもなるし、味の保証ができると言われた。

実際に味が旨いし、値段が均一なのが明悟の好きな所である。

「この団子は美味しいよ」

「ありがとうございます、明悟さん！」

食べるの大好きな蜜璃が満面の笑みでお礼を言う。

「このお汁粉も美味しいんだ。こし餡から作ってるし、ほんのり塩の味がして」

「そうか・・・津上、ありがとう」

固形物を食べれない小芭内がその話を聞いて少し安心する。

3人で目的の物を食べる。話す内容は最近の事ばかりだ。刀の里の件で蜜璃にも痣が発現した。25まで生き残れないのに先の話をする気などならなかった。何もかも普通に話終わると3人はそれぞれ戻る。明悟と小芭内は途中まで一緒なのと蜜璃は1人になりたかったので

それぞれ別れて戻る。

「小芭内君は蜜璃ちゃんとどうするの？」

「何をだ」

「無惨を倒した後だよ」

「考える気にもならんな。迷いが出る」

「そうか・・・」

「・・・それに甘露寺にはもつと・・・」

「誰かと一緒にいると嫉妬丸出しなのに良く言うよ」

小芭内が明悟を睨むがどこ吹く風で無視する。

「それに俺は・・・」

頷き、立ち止まる小芭内に明悟は先に行く。

「ま、悔いが残らないようにねー」

「わかってる」

明悟はそのまま小芭内と別れた。



明悟は酒を持って天元の家に来ていた。

須磨やまきを、雛鶴と一緒に酒ではなく、食事を楽しんでた。楽しみ終わると天元の妻達は離れて天元と明悟の2人だけで茶を飲んでた。



「何で酒なんて持つてきた」

「好きだつて聞いてたし、生き残ったら一緒に飲むためにね」

「そうかよ・・・お前は生き残る気なのか？」

「天元君は？」

「生き残つてやる。絶対にな。んで3人と慰安旅行をやつて余生を過ごす！」

「まだそんな歳でも無いでしょ？」

「人間、50年つて云うだろ？」

天元の言葉に明悟は笑い、天元もまた笑う。2人で酒の話を多少して明悟は天元から爆弾を貰つた。それも天元お手製のヤツでぶつけければ大爆発を起こす天元のお気に入り爆弾である。それだと結構釣り合っていないので明悟は天元ら夫婦達に合う急須と湯飲みを渡した。まあ、作った人間が轆轤なのでまた一悶着ありそうだったが、なんだかんだ気に入つて貰つたので良かった。



明悟は杏寿郎の家に来ていた。

前に約束していたケーキを蜜璃と一緒に作ってきて持ってきたのだ。古き良き日本家庭の杏寿郎の家に洋食器がないと思つたのでそれらも持ってきたが、洋食中心の蜜璃を継子にしていた影響か、杏寿郎の家には一通りの洋食器が揃っていた。

「よもやよもや、この前の約束を今する事になるとは」

「ごめんね。生き残れるか分からなかつたから」

「構わん！それに楽しみにしてたのは事実だ！」

2人はそのまま一緒に食べる。途中で杏寿郎の弟の千寿郎も一緒に食べる。食べると酒屋から帰つて来た親父の榎寿郎も帰つて来て明悟は挨拶したが、二言ぐらい暴言を吐いてそのまま寝室へ行つた。

杏寿郎達は謝つていたが明悟は全く気にしなかつた。

「杏寿郎君は夢ある？」

「夢とは？」

「無惨を倒した後、何かやりたいことある？」

「いや、あまり無いな！ただ、人を守る仕事はし続けたい」

「・・・警察官か？」

「それも良いな！試験が大変そうだが、やりがいがあるぞ！」

「なら、生き残らないとな！」

「ああ、無惨を倒して胸を張って生きれるようにな！」

兎に角明るい杏寿郎に明悟は笑う。

互いにまた食べる約束をして、明悟は煉獄家から去った。



無一郎は刀を振っていた。

鍛練である。ただ早すぎて刀が全く見えない程であるが鍛えていた。

「精が出るね！」

明悟が斧を持って来て、無一郎の近くに行く。

「津上さん……その斧、どうしたんですか？」

「杓人だったんでしょ？戻ったときにどうかと思ってね」

明悟はそのまま斧の柄を向けて渡す。

無一郎は2、3回振って感じを確かめる。

しつくり来たのか笑みを浮かべる無一郎。

「しつくり来た？」

「はい、ありがとうございます」

「良かった・・・無一郎君は無惨を倒したらやりたいことある？」

明悟の言葉に無一郎は首を横に振る。

「無いなあ、杣人は家業だし、特に・・・けど有一郎や父さんや母さんの分まで懸命に生きていたいなあ」

明悟は無一郎の言葉に笑う。

いい夢だと思った。

その後、明悟は変身して無一郎の鍛練に付き合った。1番刀の対人に向いてるフレイルムフォームとほぼ互角にやりあってる無一郎に明悟は素で引いてた。まあ、互いに大怪我をしない為に余力を残していたのでどちらが強いか云々以前の話ではあるが、それでも手は抜いてなかったのが明悟も無一郎もいい汗をかいていた。



明悟は義勇と一緒に定食屋にいた。

これに関しては義勇に明悟が誘われたのだ。

「義勇君が俺を誘うとは……」

「この前の礼だ」

「ああ、この前のヤツね」

2人の言うこの前のヤツとは義勇と実弥がしのぶに惚れると言う大騒動を起こした事である。黙々と食べる2人。明悟は義勇がいつも食べてると言う鮭大根と一緒に食べる。

話が無いので気まずそうと思われるがそうではない。店主が少し顔を覗くと嬉々として美味しそうに食べてる2人だった。

……店主は少し不気味に感じた……



明悟は手紙を持ってとある所に来ていた。

「おい、何しに来てんだごらあ?」

実弥の家である。

明悟は他の面々とはそれなりの付き合い方が出来てるが実弥に関しては最初からずっと嫌われているのでいい加減に今度の戦いではまともに一緒に戦えないと不味すぎるのでそこら辺を解消とまではいかなないがマシにする為に来た。

でも、鍛練中に来るのはどうかと思う・・・

「おはぎでも食べる?」

懐からおはぎを出す明悟。

「要るかあ!」

実弥は血管が浮かぶほどにキレる。

「そう?」

明悟はそんな実弥にお構いなしで食べる。おはぎの甘い匂いが鼻に来るので常人なら集中がキレそうになるが、実弥はそんなのを気にしないので続ける。

「精が出るね・・・む!」

明悟が首を押さえてもがき出す。

「な!?!?!?!おい、大丈夫か!?!」

実弥が明悟を見て慌てて背中を叩く。

叩き続けるとおはぎが丸々出てきた。

「ああ、ビックリした〜」

「お前はバカか!? おはぎをそのまま呑み込むなあ! ちゃんと噛んで食べる!」

「いやあ、ありがとう。食べる?」

懲りずにまだおはぎを食べようと誘う明悟に呆れる実弥。諦めたよう茶を入れて手を洗い、受けとる。

2人でおはぎを食べて熱い茶を飲み、一息つく。

「実弥君は、無惨を倒したら何をする?」

「考える気もしねえな。倒してから考える。鈍って殺し損ねたら意味がねえ」

「ごめん」

「……ただ、玄弥が結婚して子供産まれたなら、遊びには行きてえな……」

「なら、生き残らないとね」

「てめえに言われなくても分かかってらあ」

「こいつは失敬」

暫くゆつくりしていくと実弥が立ち上がり、刀を持つ。

「さてとやるぞ」

明悟も顔を変えて真剣になり、実弥と向かい合う。

「変身！」

変身してストームフォームになり、ハルバートを構える明悟。これは柱稽古の一貫である。先程の無一郎との組手もそれであり、2人は互いの武器を構えて始める。最初は実弥が押していた。けど段々と明悟もやり返してきて最終的にほぼ互角と云える組手をした。

だが、明悟はシャイニングどころか、バーニングにもなっておらず、それに実弥がキレそうになるが、明悟にしてみればあそこまでやるとどちらかが大怪我をしそうなのでやらなかったのだ。



行冥はどちらかと云うと明悟は嫌いな部類である。

不敬な性格だけでなく、ちゃらんぽらんなのか真面目なのか、自堕落なのか、確りしているのか、義に厚いと思えば薄い時もあり、非常に一貫性がない男なのが明悟である。

実を云えば行冥は最初の柱になる時の組手で明悟を殺そうとしていた。信用できな



かったし、信頼も出来そうになかったから、アギトの力の事も行冥にはなんら関係なかったし、責任のある柱の任務を放棄する鬼殺隊などいることはいるが、そう云う隊士は柱に成れるほど強くはない。明悟もそういう人間なんだと思った。

しかし、想像以上に強く、下手をすれば互いに無事ではすまなかった。

以来、行冥は明悟の腕だけは認めている。

腕以外は大嫌いである。

だが、鉾山の時に初めて共に戦い少しはマシになった。

行冥の明悟に対する印象はそれ位である。

童磨を倒した時も耀哉だけでなく杏寿郎や天元などから称賛が来たが全てカナエの手柄にしてしまった。それを聞いてると名誉や出世欲などなかった。柱になった時の明悟は柱と呼ばれるのを露骨に嫌がってたが鉾山を終えてから柱と呼ばれるのを訂正はしても嫌がらなくなっていた。多分、自分の中で何かと決着が着いたと行冥は受け取った。

「行冥さん、明悟さんが来ました」

柱稽古で自分の所まで来た玄弥がいつもと変わらずに行冥に言う。やって来た明悟は茶菓子を持っていた。

「行冥さん、どうも。あつ、玄弥君。これお土産、お茶も頂戴」

「はっ」

玄弥はそう言つて諸々の準備をしに行つた。行冥はそれを聴くと縁側から立ち上がり、庭に出る。

「津上明悟、早速始めよう。時間がない」

「・・・わかりました」

ブンブンと自慢の鉄球を回し始める行冥。明悟もベルトを出す。流石に行冥相手に加減など明悟はやれない。相手が強すぎて出来ない。前回は最低限の一線しか守つてない。明悟も行冥もそれぐらいしか出来ない。相手が強すぎて出来ない。

シャイニングになり、ガリバーを構える明悟。

行冥はそんな明悟を感じて鉄球を投げる。

明悟はなんて事ないように顔を横に傾けて避ける。

手斧も投げるがカリバーで弾き、行冥に斬りかかるも鎖で止められる。

巧みに鎖を操り、明悟の首を絞めようとするもカリバーを鎖と首の間に入れて防ぐ。そのまま、片方のカリバーで行冥の頭を狙つて突くが避けて手を取つて、そのまま投げ飛ばす。

地面を転がる前に体勢を立て直し、今度は光の斬撃を飛ばすが行冥は全てそれを鉄球で弾く。

再度、突っ込んでカリバーで斬りかかるが鎖でまた防いで手斧で行冥も斬りかかる。行冥は鎖を防御に鉄球を攻撃に手斧を攻撃と防御の両方に使って明悟の戦闘に巧みに対処していた。

明悟は2本のカリバーを操り、斬りかかるだけでなく時に斬撃を飛ばして行冥の防御を崩そうとしていて2人とも全くの互角だった。

だが、それを破ったのは行冥だった。

巧みに鉄球を操る行冥は明悟に向かって放つ。明悟も避けたが鎖を操り、それが明悟の首を巻き込み、先に着いた鉄球がそのまま力の流れに従い行冥の首を巻き込んで、明悟の頭に向かっていく。

それだけでなく行冥も手斧を持って向かっていき、明悟もカリバーを両方構える。

ガキン！

と金属音が響きわたる。

鳴り止まると明悟と行冥は至近距離で対面した状態で止まっていた。

行冥の鉄球を弾いた明悟であるがそれで終わるわけなく、カリバーを行冥の顔に刺さうとしていて、行冥も手斧で明悟の腹を斬ろうとしていた。

互いに後、1センチ踏み込んでいたら行冥は頭をカリバーで貫かれて明悟は腹を手斧で切り裂かれていた。

「引き分けだな」

「相変わらず強いな行冥さんは……」

互いに自分の武器を下げて一歩下がる。

「津上、君は良い柱だな」

「は？」

「今まで君を私は認めていなかった。だが、最早疑いようがない。君は素晴らしい鬼殺隊の柱だ」

行冥の言葉に明悟は身震いしていた。

「止めて、気持ち悪い」

「なに？」

「俺は別に柱とかそんな大層な人間じゃない。ただ守りたいものは守ってきただけだよ、行冥さん」

行冥はいつもの明悟の言葉に沈黙で答える。

「そうだな。それが君だったな」

「分かってくれた？」

「勿論だ」

行冥が手をだし、明悟はその手を取った。

最終決戦まで後、少し。

戦士達はそれぞれの日常を謳歌していた。



耀哉があまねやひなき達に看病してもらいながら、横になって、明悟の最近の行動を聞いていた。

「そうか、明悟は日常を楽しんでるね」

「はい、明悟様もお館様と一緒に楽しめる日を待ち望んでおります」

「無理だ・・・もう私は間に合わないだろう」

「・・・お館様・・・」

「明悟みたいになりたかった・・・明悟みたいに明るくて優しくてバカやって皆を照らす

光のような人として生きてたかった……」

「お父様、明悟叔父様は……」

「止めなさい輝利哉」

輝哉の言葉を遮ろうとする輝利哉をあまねが止める。

「明悟は柱として頑張ってくれてる……頑張りを私の問題で蔑ろには出来ない。明悟は必ず無惨を倒す……足手まといにはならない……なりたくない」

輝哉の言葉をあまね達は静かに聴いていた。

「頼む、明悟。どうか私の決断を受け入れてくれ。君なら出来る。鬼殺隊の中で最も誰よりも生を謳歌している柱」の君なら……」明悟、私は信じてるよ」

その悲しい言葉を遮る者はおらず、ただ終わりが近づきつつあるのを誰もが感じていた。

## 光の友情

ある日、一人の男が出会ったのは光だった。

ある日、光が出会ったのは一人の男だった。

彼らは友人になった。

光は男に憧れた。

どんな困難にも負けず、優しき良心で人を導く強い男に憧れた。

男は光に憧れた。

どんな困難にも前線で立ち向かい、仲間と光となる光に憧れた。

これは彼らの最期の“戦い”。



初めて会った時、私は彼を可哀想な人だと思った。

記憶がなくて、お腹を空かして孤独な彼を放っては置けなかった。

まあ、たまに放って置けば良かったと後悔している時もあるのだが、大体は助けて良かったと思ってる。

彼は過去に興味を持っていなかった。

ひよつとしたら、記憶が無いのは嘘かも知れないし、とつくに戻ってたのかも知れない。けど私には関係なかった。私と彼の関係は記憶では変わらないと感じていた。

彼は私の親友であり、相棒であり、兄弟。

これは私の“兄弟”の物語。

彼の名前は津上明悟。

またの名を“仮面ライダー”

—————

運命の決戦が始まったのは秋から冬に変わり、初雪が降るかと思うほどに寒い夜、襦す豆ま子こに鬼から人間に戻す薬を打った夜だった。

耀よ哉がは横よになつてた。

あまねが看病し、ひなきやにちかが毬たまを楽しんでいた。

そんな中、彼らの元に“無惨”が現れた。

「無惨、初めて会うね。そこに居るんだろ？この時を私の一族は長年待っていた」



「長年、うんざりしてきた。だが、拍子抜けもしてる。鬼殺隊など作り上げた化け物の親玉がこうも死にかけとはな・・・」

無惨の言葉に隣で聞いているあまねは悔しさと怒りで握ってる拳から血が少しずつ出る。

ひなきやにちかも何の問題も無いように振る舞っているが憎しみですぐにでも無惨に飛び掛かりたかった。

「こつちも驚いているよ。わざわざ敵地に君が来るとは」

「今宵、私の夢が叶う。そして私は永遠に不老不死となる。何故なら、何千年も長い時を生きていて私には天罰など下った事など無い。神や仏など存在しない」

「私も神や仏には頼ってないよ。神や仏は結局、気休めにしかならないから、けど人は違う。人の想いや願いだけが永遠なんだ。君は必ず私達が倒す」

「その体で世迷い言をほざくな」

「世迷い言じゃない。君との戦いは今夜終らせる。彼が必ず君を倒す」

無惨には耀哉の言ってる彼がわかった。

鉦山の時に真正面から自分を批判し、憐れんだアイツだと無惨は理解した。

「アギトか・・・随分と親しいようだな。だがそんなちんけで虚しいだけの友情などに倒されない」

「そんなんじゃない。彼を知らないね。性格が最悪で人の言うことなんて欠片も聞かなくてサボリ癖が強くてサボる度に人の子供を出汁にするわ、無遠慮で無作法でいらぬ一言を言つてあまねにビンタされるわ、何回か金的を食らうわ、そのせいで前まで私達夫婦は胃潰瘍だった上に子供達に変な趣味を植え付けるわ。あまねの酒癖は悪くなるわ、人を不器用と言いまくるわ・・・」

「お前達、本当に友人か？」

愚痴が止まらない耀哉に無惨がつっこむ。

あまねやひなき達はまたいつもの発作が始まったと少し呆れてる。

「けどーっただけ信じてるのがある。彼は“約束”を守る男だ」

「約束だと？」

「ああ、君を倒す“約束”だ」

耀哉は嘘を言った。

明悟が約束したのは倒したら、“旅”をしようと言う約束であり、無惨を倒すだけの約束などしていない。

「・・・そんな物騒極まりない約束は初めて聞いたな。だが、そんな私の“夢”の前には無意味だ・・・長話はここまでだ・・・死ね」

「ただで死ぬ気なんて私達には無いよ」

耀哉が最期の力を振り絞って布団を翻すと中には大量の爆薬があり、導火線に火がついていた。

無惨は突然の状況に頭が真っ白に為る。

「無惨！私とともに冥土に行け！」

爆薬が爆発する。

至近距離にいる耀哉、あまね、そして外にいるひなき達も死ぬ覚悟で決めた事だった。だが、彼らが死ぬ前に超高速で光が通過し、耀哉、あまね、ひなき、にちかの全員を爆発な捲き込まれないように遠くに連れていき、無惨一人だけが爆風を浴びる事になった。



耀哉達は死んだと思った。

だが、聴こえてくる爆発の音に死んでないとわかった。

「あまね、ひなき、にちかか？」

耀哉はそれに気づくと自分の事より、家族の無事を確認した。

「私達は無事です！」

あまねの大声の中にはひなき達の声もあって耀哉は一安心する。そして耀哉には分

かった。

「明悟か!？」

「流石だな」

耀哉の前には明悟が変身を解いて立っていた。

「どうしてだ!?!なぜ、助けた明悟!？」

「友達助けるのに理由が必要なのか?」

「違う、そうじゃない! アイツを足止めしないとイケなかった! だから私達は命を掛けたんだ! どうして邪魔をした!？」

「耀哉、お前……本当にバカだよな。ただアイツを倒しても意味がない。生きて謳歌しないと意味がない」

「私はもう充分に謳歌した! あまねに出会った! ひなき達と暮らせた! 大事な子供達もいた! ……それに君に出会った! もう謳歌してるよ……どうして助けたんだ。これじゃ、私はずっと……ずっと……ずっと……ずっと」君の足手まとい「じゃないか!」

耀哉が大声で泣き、明悟にすがろうとするが目が見えて無いので空を切った。明悟は座り、耀哉と正面から向かい合う。

「耀哉、俺は“足手まとい”なんて思った事無いよ。お前に出会ってなかったら、俺はど

こかで死んでた。お前が助けてくれたんだ。俺は幸せだよ」

「明悟……」

「俺は絶対に帰ってくる。だから耀哉、俺を信じてくれ！俺はお前の“仮面ライダー”で鬼殺隊“光柱 津上明悟”だ！」

明悟は立ち上がり、耀哉に背中を向ける。

ベルトが現れて光が放たれる。

「変身！」

明悟は自分だけのアギト《サンシャインフォーム》になる。背中に刻まれた白銀のアギトの紋章から光が出る。

「終わらして来る。んで朝日を一緒に見ようぜ！」

無惨の所に向かう明悟。

耀哉達はそこに残される。

「お館様、急いで輝利哉達の所に」

「ああ、そうだね。あまね、明悟の背中ってあんなに輝いてたんだね」

「あなた、ひよつとして目が！」

耀哉とあまね達はとりあえず、輝利哉がいる屋敷まで戻る事にした。



明悟は全力で爆発した所に戻っていく。

跳躍して無惨に拳を叩き込もうと上から行く。

上から見えてきたのは、棘によって拘束されて女性・・・珠代の腕が無惨の腹に刺さり、周りから全柱と零余子と轆轤が無惨を倒そうとしていた。

だが、突然琵琶の音がなり、足下に障子が現れて落ちていく。

明悟は空中を蹴り、無惨と珠代が居るところに突っ込み、2人と一緒に無惨の根城の無限城の中を落ちていく。

「無惨!!」

「アギトオオオ!!」

明悟は無惨を殴り、首を吹き飛ばす。

しかし、いくらサンシャインフォームのアギトでも無惨の首を吹き飛ばすだけでは倒せず、極めてゆっくりとだが、再生されていく。

無惨の肉体がゆっくりと火傷して行ってるので確実に無惨に効いていた。

だが、隣にいて無惨の腹を貫いてる珠代にも効いてしまい、顔の半分が大火傷を負ってしまい、皮膚の下の筋肉すらも焼け始めていた。

「マズイ！」

珠代とは何の面識もないが、明悟は少なくとも無惨を倒そうとしてるのは感覚でわかったので死なせたくなかった。

明悟は一先ず離れようとするが珠代が空いてる手で明悟の腕を掴む。

肉が焼ける音が聴こえる。

「このままコイツを殴り続けて！」

珠代の言葉に明悟は驚く。

「もっと火傷するかも知れない！」

「コイツを殺せるなら、構わない！」

止めようとしたが、そう言われると止められない。明悟は関係なく両手に光を纏わせて殴る。

腕が消し飛び、足も消し飛ぶ。

珠代にも甚大な被害が出て、無惨の体に刺していた腕が焼け縮れてしまい、珠代は明悟と無惨から離れてしまった。

「大丈夫です！薬は無惨の中に確実に入ってます！どうかその男を必ず！」

珠代が言葉を言い切る前に琵琶の音が鳴り、何処かへ飛ばされる。

明悟は無惨の体を容赦なく殴り続ける。

体内に入れた薬を無駄にしないために体に攻撃はあまり入れてないせいで決定的な物に成らず、無惨の頭が再生される。

「己、化け物！」

無惨が叫び、無数の刺と云うよりも牙と呼べる物を腕に生やして明悟の体を貫こうとするが明悟はそれを止める。

「お前が言うな！」

明悟は最大の光を手に入れて無惨を殴り飛ばす。

ガンガンと無限城の床や壁や障子やらを壊して壊しまくり、やがて勢いも衰えて床に陥没して止まった。

明悟は一気に決着を着けようとして空中でアギトの紋章を浮かばせ、蹴りの体勢になり、潜り抜ける。

ベンベンと琵琶の音が鳴り、明悟を何処かに飛ばそうと障子が出てきたり、あるいは壁で押し付けて起動を変えようとするが明悟の蹴りがその血鬼術そのものを壊しながら無惨に突っ込んでいく。

「黒死牟!!」



無惨が叫ぶと、上弦の壺の黒死牟が空中に出てきた障子を潜り抜けて現れる。

「血鬼術 月の呼吸 捌の型 月龍輪尾」

横なぎの巨大な斬撃と明悟の蹴りがぶつかり合う。

そして、猗窩座の時と同じように明悟は黒死牟の記憶を見てしまう。

1人の侍としての将来を約束された子の兄と双子の痣を持つて生まれた忌み子の弟。全く話さず、母親の側を離れず、父親から殺されかけ、三畳の部屋に閉じ込められ、10歳になったら出家と云う過酷な状況に陥っていた弟を兄は憐れに思い、何気なしに手作りの笛を作つて挙げた。

だが、やがて弟は突然喋りだし、剣の才能を兄や父親達に見せつける。兄は弟の突然の変化に気持ち悪くなった。跡継ぎも弟かと考えるようになったが、母親が死に弟は寺に出奔される事になった。その時、兄は母親が遺した日記を読み、弟は母親にしがみついていたのではなく、病魔に体を蝕まれていた母親を支えていたのだと知り、兄の中にあつた憐憫が嫌悪と嫉妬になった。

やがて結婚し、子供も出来た。

だが、鬼に襲われていた所を鬼狩りをしていた弟に助けられた。

嫌悪と嫉妬が嫌悪と増悪になり、弟を超えようと兄は妻子、家、全てを捨てた。

呼吸を極めて痣も出た。

だが、弟には追い付けず、25になると死ぬと云う状況から超えられなくなると云う悲しみと刻一刻と無くなる現実だけしか無かった。

そんな兄はある時、無惨に鬼に勧誘された。

時間がなく焦っていた兄に鬼の不死身は神からの恵みのように思えた。

そして兄は鬼になり、黒死牟になった。

明悟には黒死牟の鬼になった理由を理解した。

理解できた。

自分も先日、光太郎といた時に光太郎に対して似たような思いを感じていた。

自分よりも完璧な存在に対する“嫉妬”。

その事に対しての無神経さに対する“嫌悪”。

超えられない自身に対する“怒り”。

“無力感” “苦痛” “屈辱” “哀しみ” “焦り”、様々な感情が自分を支配して、残

るのは何もない“自分”だけ。

そういう意味では明悟と黒死牟は似ていた。

だが、違う。

明悟はそれでも良いと踏ん切りつけられた。

自分は特別と云う“愛情”ではなく、自分はそれだけの存在と云う“愛着”・・・あの種の無関心でバランスを取った。

だが黒死牟はどこまでも“出来る自分”を愛し続けていた。“出来ない事”から逃げていた。

そこが明悟と決定的に違う所であった。

明悟と黒死牟は斬撃と蹴りがぶつかった衝撃により、弾かれ、鳴女の琵琶により2人とも広い空間に飛ばされる。

「初めまして、上弦の壱。あれがあんたの記憶か？」

「見たのか・・・ならば殺す」

明悟の言葉に黒死牟は顔に血管を浮かばせて淡々と言った。

「随分と物騒な・・・けど構ってる暇はない」

「それは私も同じだ。それに私にとって最も触れられたくない事に土足で来た貴様はすぐに殺す」

「そいつは失敬。けど、それが俺だ。良く皆に怒られる」

「なら、次は冥土でやられろ」

「断る」

明悟はガリバーを出現させて、二刀流で構える。

黒死牟も刀を抜き、刀の刃から二本、峰から更に一本の刀を生やし、特殊な大太刀にして構える。

「名前を名乗れ 私は上弦の壺 黒死牟」

「俺は光柱 津上明悟 そして仮面ライダーアギトだ！」

黒死牟の威圧に明悟は全身に鳥肌を立たせるも啖呵を切る。

「貴様を殺し、全ての鬼殺隊を殺す」

「お前を倒し、全ての鬼をぶっ潰す」

互いに睨みあい、足をにじらせ、距離を掴もうとする。

「すぐに終らせる」

互いに自分の武器を振りかざし、斬撃を飛ばす。

ぶつかり合い、衝撃により、部屋が崩壊した。

## 長男VS長男

初めて会ったとき、よく分からない人だった。

鼻が昔から良かったから大体の人はどんな人かかぎ分けることが出来たけど、あの人はよく分からなかった。

そしてすぐに禰豆子の事が知られた時は焦ったし、怖かった。禰豆子は2年間の人を襲つてもないし、食べてもない。斬らせない為にも俺は地面に頭を擦り付けて言った。最悪の場合、禰豆子を連れて全力で逃げようとも考えていた。

けど、あの人はそんな事はしないと云った。むしろ、嘆願する俺に引いていて何だか気が少し抜けたのを今でも覚えている。

善逸と一緒に任務をやつてる時にアギトだと知つてもあの人は変わらなかった。

伊之助や善逸に説明して4人で療養しながら楽しんだ1ヶ月を俺は絶対に忘れない。

柱会議でも禰豆子を守ろうとしてくれた。禰豆子の為に腹を切ると誓ってくれた。それに対する恩は一生かけても返せない。蝶屋敷での回復訓練にも手伝ってくれて頼れる“先輩”だった。

列車で轆轤さんや零余子さんにあつて鬼から人に戻すのに鬼として強くなければい

けないと云う事実を聴いた時には悔しきがあった。猗窩座との戦いで加勢できなくて不甲斐なくて、過去を見て立ち向かえなくなつた。

あの人は迷つて良いと言つた。

けど、悪人や外道も助ける覚悟を持つと言つた。

それまで見たことない程、鋭く見て気合を入れ直した。

遊郭であの人の大切な人を殺されていた事に初めて知つて、あの鬼の言葉に我慢できずに言つた。否定された気がしたから、あの人の生き方を・・・それを見過ごせなかつた。

これは俺の“先輩”の物語。

あの人の名前は“津上明悟”。

またの名を“仮面ライダー”。

—————

炭治郎は無限城の中を走っていた。

無惨の匂いを嗅いで進んではいるが、あちこちから鬼の匂いがして炭治郎は取り敢えず、近くで一番血の匂いが濃い所まで走っていく。

廊下に何体もの鬼が襲いに来るが炭治郎はヒノカミ神楽を使って切り捨てる。

どんどん濃くなる血の匂い。

炭治郎はそこに向かう最後の障子を蹴飛ばして入る。

「お前かあ」

居たのは上弦の妓夫太郎ただ、眼は肆だった。

辺りには鬼殺隊士の無惨な亡骸が転がっている。

「上弦の陸……」

「……今は肆だ、てめえとは吉原から嫌な縁が続いてる」

イライラしてる妓夫太郎に対して炭治郎は無言で構える。

妓夫太郎も自分の武器の鎌を構える。

「……で殺す」

「俺は絶対に負けない」

妓夫太郎は血の斬撃を炭治郎に向かって飛ばす。炭治郎も水の呼吸の足さばきで避け、妓夫太郎の首に向かって突き進む。

「ヒノカミ神楽 円舞」

問答無用で妓夫太郎の懐に入り、赫灼の日輪刀で首を斬ろうとするが鎌で防がれる。

しかし、赫灼の日輪刀のおかげか血鬼術で作られた鎌に綻びが出てくる。妓夫太郎は左の鎌で日輪刀を抑えながら、右の鎌で炭治郎の眼を狙う。

「ヒノカミ神楽 幻日虹」

炭治郎は捻りと回転による足運びで避け、そのままもう一度懐に入ろうとしたが、それよりも先に妓夫太郎が間合いを詰めて、鎌で斬りかかる。反撃しようにも日輪刀と鎌ではそもそもその間合いの長さが違い、思うように体が動きにくくなるが、炭治郎だつて何も超接近戦の経験が無いわけではない。明悟と組み手をするときには決まつて超接近戦になる事が大半だ。その経験を生かして、妓夫太郎の膝を蹴る。蹴られた妓夫太郎の膝は曲がり、片膝を地面に付けてしまう。一瞬止まる妓夫太郎の攻撃、この隙に炭治郎は首を斬りに行く。

「ヒノカミ神楽 烈日紅鏡」

左右に振り首に迫ってくる刀を妓夫太郎は背中を仰け反らせて避け、炭治郎の腹を蹴る。

炭治郎は倒れ、妓夫太郎も無理な体勢で蹴つたので倒れる。

「血鬼術 飛び血鎌」

「ヒノカミ神楽 灼骨炎陽」

妓夫太郎の血の斬撃を炭治郎素早く体勢を立て直して全て切り捨てる。そしてそのまま突っ込んで行き、炭治郎は妓夫太郎の首を切り落とす。

普通なら、このまま妓夫太郎は死ぬがそうはいかない。妓夫太郎と妹の墮姫は2人で



1人。すなわち2人とも首を切り落とさないといけない。妓夫太郎は上弦の肆に墮姫は上弦の伍に成り上がったがその特性に関してには変化なしだ。

妓夫太郎は首が地面に落ちる前に手で掴んで首に繋げる。

「残念だったなあ」

憎たらしそうに炭治郎に笑みを向ける。

「(どうすれば、こいつを倒せるんだ!?)」

炭治郎と妓夫太郎は互いに武器を構えてまたぶつかり合う。



一方、妓夫太郎の片割れである墮姫は零余子と戦っていた。

「死ね!」

「あんたが死ね!」

墮姫が帯で零余子の体を貫いて殺そうとしても零余子は手に光を溜めて全て弾きな

から墮姫に近づき、顔面をぶん殴るが墮姫は寸前で顔をずらして避けて、零余子の腹を左足で蹴る。零余子も負けじと左足で蹴る。

2人は互いの蹴りで吹き飛ばされ、倒れ、腹を押さえる。先に立ち上がったのは墮姫だ。

墮姫はまだ倒れてる零余子を蹴り飛ばす。

そして帯で刺し殺そうと伸ばすが零余子はそれを掴み、ぐるぐると墮姫をジャイアントスイングする。

あちこちの壁やら床やら障子やら関係なく、ガンガンとぶつけまくって墮姫の体に無数の傷が付き、投げ飛ばされる。転がり、勢いが無くなる頃はあまりの痛みに立ち上がれない。

零余子は瞬時に詰めて、自分の拳で隙がある墮姫の体を貫く。光の力でそこから墮姫の体が崩れていく。

墮姫は悲鳴を上げながらも逃がさないように体を貫いてる零余子の腕を掴み、無防備に近い零余子の体を蹴る。横からの攻撃に墮姫の体を貫いていた腕が抜けて今度は零余子がガンガンと周りを壊しながら吹き飛ばされた。

「殺さないよ．．．殺さないよ．．．」

墮姫の頭には産屋敷襲撃直前に無惨に言われた事を思い出す。手柄を上げなければ

殺すと言う内容であるが、無惨は堕姫にはこう言った。

(手柄を上げなければ、お前の兄をお前の目の前で惨殺してやる)

それは堕姫にとつては最悪の言葉だった。堕姫はすがった(それだけは嫌だ、お願いします)としかし、無惨は聞き入れなかった。

確実に手柄を上げないといけない。

アギトを殺し、禰豆子を捕まえる。

それが、堕姫に残されてた唯一の選択肢だった。

「私がやるんだ。私がお兄ちゃんを守るんだ……」

傷は完全に回復してない。だが、兄を思う純粹な気持ちで堕姫は歩いていた。

零余子はボロボロになりながらも立ち上がって堕姫と向かい合う。

「何で立ちあがんのよ、いい加減に死ねば良いのに何でそこまでして立つのよ」

「約束したから、また遊ぶって禰豆子と約束した……だから、絶対に私は諦めない！」  
手を構える零余子。

フラフラで堕姫には滑稽に見えた。

「そんなの潰してやる。あの雑魚は無惨様に捧げる。あんたの大事な物、全部壊してやる」

「禰豆子には手を出させない……皆を守る……私だつて“仮面ライダー”だ！」

啖呵を切る零余子。

墮姫は鬱陶しくなってきたので帯で一思いに殺そうとした。零余子はギリギリ避けて帯を掴み、墮姫を近くに寄せる。また蹴りで牽制してくる墮姫であるが零余子は上手くかわして後ろに回り込み、スープレックスを喰らわす。終わると今度は前に回り込み、無防備な墮姫の頭を光を込めた蹴りで消し飛ばす。また頭が生えてくるが零余子は墮姫の体ごと吹き飛ばす。



「・・・梅！」

妓夫太郎は妹の墮姫が危ないと感じた。

炭治郎はまだ攻めてくるが、いつまでもやってると取り返しのつかない事になるのは経験が言っていた。

「血鬼術 跋扈跳梁」

血の斬撃で全方位を多い、炭治郎のヒノカミ神楽の攻撃の流れを止めて、妓夫太郎は墮姫の方へ走る。

「逃げるな！」

炭治郎もそれを追い掛けながら、ヒノカミ神楽をやるが、妓夫太郎もそれを避けてやり返す。

移動しながら斬り合う2人。

そして突然、走つてる2人の横の壁が崩れて、飛ばされた堕姫が妓夫太郎とぶつかる。妹を受け止める妓夫太郎は炭治郎と吹き飛ばした零余子を睨む。

「零余子さん！」

「炭治郎、大丈夫!？」

「俺は大丈夫です！」

炭治郎と零余子は妓夫太郎と堕姫に対して警戒し、構える。

妓夫太郎と堕姫もまた決着をつけようと2人に向き合う。

「私はあの女狐をやる……炭治郎、信じてるよ」

「俺も信じてますよ」

「俺の相手はあの小僧だ、信じてるぜ」

「私はあのブサイク……任せて、お兄ちゃんの妹だもん」

互いに互いの敵に向かって行き、またやりあう。

炭治郎と妓夫太郎は刀と鎌で、零余子と堕姫は蹴りあっていた。

炭治郎はヒノカミ神楽を駆使して攻めているが、妓夫太郎はギリギリの所で致命傷に  
ならず済んでおり、2人の実力は完全に互角だった。

「てめえ、いい加減にくたばれ！」

妓夫太郎は炭治郎の腹を蹴る。

肋が折れて倒れる炭治郎。

「俺は負けられない、無惨を倒すまで」

だが、炭治郎の闘志は折れてなかった。

「分からねえな、どうしてそんなに抗うのか・・・」

「分からないのは俺の方だ、虚しくならないのか？人を殺し続けて」

妓夫太郎は炭治郎の疑問に鎌を下ろした。

炭治郎は警戒を続けている。

「昔、くそみたいな所に男が生まれた。男は妓夫と名付けられた。痣をもつて醜い顔で  
嫌われて、人間ってゴミがうようよしてた。そんな中、妹が生まれた。美しくて梅毒を  
振った名前がつけられたが、美人で最高の妹だ。」

男は剣才と醜い顔を使って借金の取り立てをガキの頃からやらされてた。順調だつ  
た。全てが幸せだった。だが、ある日妹が燃やされた。経緯は分からねえが遊女として  
の仕事中に客の眼を潰して燃やされた。生きたまま燃やされた。男は死にかけの妹を

死なせない為に一緒に鬼になった。それが俺達だ……その時、嫌って程理解した。この世は力だ。力さえあれば生きていける。蹴落とす力だ」

血の涙を流す妓夫太郎。

憎しみと怒りと哀しみと悔しさが入り交じっていて、炭治郎が分かったのは、もう無理だと云う事だけだった。

「違う。蹴落とす力だけで生きた先にあるのは虚しさだけだ」

立ち上がる炭治郎。

「てめえ、まだやる気かよ」

「俺の出会いで来た人は厳しくて、皆何かを喪つててそれでも真っ直ぐに生きていた。そんな人達に出会えて俺は幸福なんだと思う。だから、はつきり言う。人の力は蹴落とす力なんかじゃない。人の真の力は人の為に生きれる力だ……人を信じ、己を信じ、そして共に立ち上がるのが本当の力！」

闘志を込めた眼で炭治郎は妓夫太郎を見て、構える。

「人を信じるだと……人のせいで俺達は……俺の妹は……」

妓夫太郎は歯ぎしりしながら鎌を構える。

本気で炭治郎を殺す気だ。

「そして俺は無惨を倒して禰豆子と一緒に帰る、だから負けられない！」

「そんな甘い考えで妹を守れるか！」

炭治郎がヒノカミ神楽に移れないように妓夫太郎は間合いを詰めて、鎌で斬りに行く。

だか、炭治郎は妓夫太郎の攻撃をしのぐ。

「血鬼術 円斬旋回・飛び血鎌」

飛び血鎌を螺旋状に大量に放つ妓夫太郎の最大の血鬼術が炭治郎に迫る。

「(落ち着け、慌てるな。匂いで感じとれ、絶対に隙はある。集中するんだ、深く呼吸して見極めるんだ。正しい呼吸と正しい型で)」

そう念じながら、突き進む炭治郎。

額の痣が濃くなり、見える世界が変わってくる。

相手の骨格、筋肉、内臓。

必要最低限を見て見極める。透き通る世界。

元々、炭治郎は刀鍛冶の里以前から痣は発現していた。それが鍛えた事と呼吸により、見えるようになってきた。

必要最低限呼吸と足さばきで飛んでくる斬撃の中を突き進む炭治郎。

妓夫太郎にはまるで斬撃が炭治郎を避けてるような錯覚に襲われる。

「(動きが変わりやがった・・・だが、これならどうだ!?)」



妓夫太郎は炭治郎ではなく、炭治郎の下の床、周りの壁、天井を自分の足場ごと無作為に破壊する。

あちこちが崩落し、妓夫太郎も無限城を落ちていく。だが、鬼である故に回復するが炭治郎は違う。

妓夫太郎は勝つたと心から思った。

だか、炭治郎は崩落してる瓦礫を上手く使つて逆さまになりながらも妓夫太郎の後ろに回り込む。妓夫太郎もそれに気付き、鎌で殺そうとするが炭治郎の方が早く、妓夫太郎の片腕を切り落とし、首目掛けて刀を振るう。

妓夫太郎はそれを防いだ時に眼を開いた。

自分の鎌の刃にぶつかっていたのは炭治郎の刀の刃ではなく、峰だった。

〔しまっ……〕

気づいた時にはもう体を止められず、妓夫太郎は炭治郎の刀を弾く。炭治郎はその弾きの力も利用して1回転し、今度こそ妓夫太郎の首目掛けて刀を振るう。

〔ヒノカミ神楽 斜陽転身〕

妓夫太郎は炭治郎に再び首を斬られる。

また手を伸ばして戻そうとするが妓夫太郎も落ち続けているため、首に届かない。

「お兄ちゃん!!」

そんな妓夫太郎に零余子と戦っていた墮姫が飛んでいく。だが、後ろには零余子がクロスホーンを開いて足に光を溜めていた。

「バカー！構うんじやねえ！逃げろ！」

妓夫太郎がそれに気づくが時は既に遅く、墮姫がそれに気づく前に零余子のライダーキックが墮姫の体を貫く。

光の力で墮姫の体が灰になっていき、妓夫太郎の首も灰になっていく。

零余子は炭治郎の手を掴み、落ちてる瓦礫を足場にしながら、安全な所まで跳んでいく。

そこに着いた2人は落ちていく妓夫太郎と墮姫を見ていた。



妓夫太郎は泣いた。

もう無理だと云う事を悟っただけでない。

あれだけ守りたかった妹を守れずに死んでいくのが悔しくて悔しくて涙が出ていた。

何も出来なかつた事に対して謝りたくて声を出そうとした時、墮姫は泣き顔を妓夫太

郎に向けた。

「お兄ちゃん、ごめんね。守れなくて……情けない妹でごめんね」

「何言ってるんだよ！何言ってるんだよ！……情けないのは俺だ……兄貴なのに……ごめんなあ、ごめん。俺は、お前を不幸にしてばかりだ」

泣きながら言う妓夫太郎。

堕姫もまた泣きながら話す。

「私、お兄ちゃんの妹で幸せだったよ……だって、お兄ちゃん優しいもん……」

堕姫の脳裏にあるのは寒い雪の中で一生懸命暖めようと体を包んでくれた兄の優しさだった。

「梅……梅……」

「お兄ちゃん、私……どこまでもずっと一緒にいたい。ずっとお兄ちゃんの妹だからね」  
「……梅……ありがとうな……」

2人は互いに笑顔を向けて、そのまま灰になった。

それを上から見てた炭治郎と零余子は手を少しだけ合わせて次に向かった。



善逸はある鬼を探していた。

耳を駆使して突き進んでいた。

目当ての音を聞き分け、善逸は障子を乱暴に蹴飛ばす。

そこに立っていたのは上弦の陸と刻まれた眼をしている鬼だった。

「何だ、お前か……」

「本当に鬼になってたんだな……獺岳！」

「相変わらず貧相な体してんなあ、久しぶりだなあ」

刀を肩に乗せて笑う獺岳。

善逸は獺岳を睨む。

「壺の型以外使えるようになったか？」

「おこぼれで上弦になったのがそんなに嬉しいか？」

笑いながら話す獺岳に善逸が叫ぶ。

「じいちゃんが死んだんだぞ?! あんたが鬼になった責任を感じて介錯もせず苦しんで……何でじいちゃんがを裏切った!?!」

「そりゃ、決まってるだろ? じいいがためえと俺の2人で後継者にさせようとしたからだ。何で塵のお前と一緒になんだ? 俺の方が長く弟子して呼吸も上手く出来たのに……」

なんで壺の型しか出来ないでめえと一緒になんだ？・・・俺が裏切ったって言ったな？裏切ったのはじじいだ。俺を裏切ったから鬼なっただよ！」

「じいちゃんは裏切ってなかったぞ！ずっとあんたを誇りに思ってたのに・・・愛情を仇で返した！」

「俺とカスのお前を一緒にした報いだ！」

「俺がカスならあんたはクズだ！後継に恵まれなかったじいちゃんが不憫でならねえ！」

「てめえと一緒にすんじゃねえ！」

獺岳は刀で斬りに行こうとするがその前に善逸が獺岳の左腕を切り落とす。

ポトツと落ちた腕を獺岳は無言で見る。

「遅えんだよ、クズ」

善逸が壺の型の体勢で獺岳を睨み、獺岳も腕を再生させて今度は無言で善逸を睨む。

「お前は、雷の呼吸で始末をつける。じいちゃんの呼吸でな！」

次の瞬間に辺りに響いたのは落雷のような轟音だった。

## 迅雷

最初に会った時の印象？

1に怖い、2に不気味、3にお人好し、後は変な人。

だって、炭治郎とか伊之助よりも変な音がずっとしてて、よく分かんなかったんだよ

!?

多分、アギトの力で分かりにくくなってたんだと思う。

すっごい不安だった。

生まれて初めて音が分からない人だから、怖くて怖くて、優しくしてくれただけどこまで本気なのか分かんなくて、ただいい人つてのは分かった。

色々やって列車の時に奥さんがいたのを知って死ぬほど殺したくなかったなあ。だってあんな性格が糞なのになんで美人の嫁さんが居るんだよ!?!?おかしいだろ!?!俺なんて・・・フラれてばっかりなのに・・・

しかも、モテる方法を聴きに言ったのにダメだったから余計に腹が立つ。

でも何だろ？

あのひとの喧嘩は本当に下らなくて大体最後は笑い話なんだよなあ。

たまに思うんだよ、俺の“兄貴”がこの人なら良かったのにつて、けど違うんだよなあ。それになんと言うかなくなったで喧嘩して険悪になりそう。やっぱり、今のは無しで俺にとってあの人つてなんだろう？

先輩？

いや、他にたくさんいるし、もつと親密だ。

憧れの人？

あんな性格が糞な人を憧れたくないなあ。

何なのかな？

先生？

いや、何一つ教えて貰った事なんてないし、それはじいちゃんだ。

……わかった！

この前、西洋の本で“ヒーロー”って言葉があったんだ。人を守るお人好しだけど冷静に読むと凄く性格に難があったんだ。それだ！

これは俺の“ヒーロー”の物語。

あの人の名前は津上明悟。

またの名を“仮面ライダー”。

—————

雷鳴かと聞き間違える程の轟音が鳴り響いた。

善逸は、壱の型の状態で獺岳の懐に突っ込んでいく。

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃 八連」

「雷の呼吸 稲魂」

足の切り返しの速さで攪乱しようとするが獺岳は瞬時に捕まえて5連撃を浴びせる。

「どうした!?! チンケな速さだなあ!?!」

「この匂い・・・人をたくさん食ったのか!?! そこまで善悪が分かんなくなったのか!?!」

「俺を認める者が善でそれ以外は敵だ! 雷の呼吸 参の型 聚蚊成雷!」

獺岳は足の止まった善逸を周りから波状攻撃して苦しめる。受け切れず、黒い稲妻の

ような傷が出来てくる。

「雷の呼吸 伍の型 熱界雷」

下から上へ切り上げる斬撃で善逸を吹き飛ばす。

稲妻のような傷が広がる。

傷が罅割れていき、激痛が善逸の集中力を奪う。

しかし、善逸も負けられなかった。

深く息を吸い、渾身の力で突っ込む。

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃 神速」



善逸は自分の最速の霹靂一閃で挑む。

「雷の呼吸 肆の型 遠雷」

だが、獺岳は霹靂一閃よりも更に力強い踏み込みからの斬撃で、それを吹き飛ばす。転がる善逸。

追撃しようと斬りに来る獺岳。

善逸はそれをギリギリで致命傷にならないように避けていくが、罅割れが酷くなつてくる。

「てめえが俺に勝とうなんざありえねえんだよ！」

獺岳は集中がキレてきて無防備な善逸の腹を蹴りとばす。

「雷の呼吸 録の型 電轟雷轟」

無数の斬撃によって部屋が崩れるだけでなく、善逸は吹き飛ばされて罅割れが広がりがら落ちていく。

そんな死にかけの中で善逸は走馬灯を見ていた。

見ていたのは師匠と獺岳と3人で一緒にご飯を食べてた時、優しい音に溢れていたと心の底から感じていた。だが、獺岳からの不満の音も良く聴こえていた。善逸にあった後悔。もしも師匠と出会わなければ獺岳は幸せだったのではないか？自分が生きていたから、狂ったのではないか？

そんな事が頭を過ぎっていく。

「刀の打ち方を知ってるか？」

「(じいちゃん?)」

「叩いて叩いて、叩き上げて不純物や余分な物を飛ばし、鋼の純度を高め強靱な刃を作るんだ。善逸、極めろ。泣いてもいい、逃げていい。ただ諦めるな。地獄のような鍛錬に耐えた日々。お前は必ず報われる。極限まで鍛え上げて誰よりも強靱な刃になれ」

その言葉は善逸にとって師匠から受け取った大事な言葉だった。大切な約束だった。それを思い出した善逸は体勢を立て直して構える。

「くそーまだ死なねえのか!？」

獺岳が苛立ちながら善逸を睨む。

善逸もそんな獺岳に顔を向ける。

「獺岳! 刀の打ち方を知ってるか!?! じいちゃんに教えて貰った言葉だ!」

「そんなのもう覚えてねえよ!」

獺岳は苛立ち、そして漸く殺せる事の喜びの両方を感じながら、刀を抜く。

「そうか、勿体ないな。大切な約束が無いのは・・・」

善逸の心の底からの哀れみの言葉に獺岳の顔が歪む。

「雷の呼吸 漆の型 火雷神」

霹靂一閃よりも更に速く、更に首を斬ることに特化した善逸だけの技が獺岳の首を斬る。

斬られた獺岳は何が何だか分からず、恨み言を言っていた。だが、善逸にはもう聞こえていなかった。疲れていたし、罅割れによつて死にかけて、色々と無茶の弊害が来ているのだ。

再び、走馬灯を見る。

そこは河辺だった。

向こう岸には師匠がいて、善逸は行こうとするが足元の彼岸花によつて進めなかった。大声で泣いて謝り、今までの後悔を話す善逸。師匠はそれを見て泣いていた。

「善逸、お前はわしの誇りじゃ」

善逸は確かにそう聴こえ、意識が戻ると自分は包帯がぐるぐる巻きの上に珠世と愈史郎によつて手当をされていた。

「気がついたのですか？」

珠世が目を覚ました善逸に声をかける。

さつきの明悟によつて負った傷が癒えてなく、腕が大火傷を負った状態だった。

因みに愈史郎はそんな珠世と合流した時に煩く喚いて、事の経緯を聞くと明悟を殺そうと誓った。

「俺は……獺岳は？」

「話すな、死ぬぞ。あの惨めな奴はもう灰になってる……だが、運が良かったな。1年もしていれば確実に1人では手も足も出ない状態になっていた」

愈史郎が淡々と珠世の助手をしながら、説明していた。

善逸は仇討ちを出来た事と同時に嫌いで憎む敵ではあつたが共に育つた人を殺したと云う事実にも言えなくなり、傷がマシになるまで黙祷した。



琵琶の音が鳴り響いてる中、蜜璃、小芭内、天元、しのぶ、義勇の5人は1人の鬼の血鬼術によつて苦戦していた。

「くそ、次から次へ地味に面倒くさい血鬼術だな！」

天元がキレながら叫ぶ。

自身の巨大な日輪刀が障子から出てくる鬼の首を斬り落とす。

「地味とは失礼な柱ですね」

琵琶を操ってる上弦の参となった鳴女がぶつくさと苦言を言う。

かれこれ、30分以上の間、5人は鳴女に翻弄されていた。鳴女自身の力は上弦の中では最弱であり、下手すると下弦よりも弱い。

柱も本来ならば苦戦なんてする筈は無いのだが違った。

「水の呼吸 拾壺の型 凧」

「富岡、まだまだ来るぞ!」

そう、鳴女の血鬼術により、鬼が次から次へとやって来て一向に終わらないのだ。5人で連携してるので1人くらいなら首を斬れそうと思えるがそう上手くはいかなかった。

「恋の呼吸 式の型 懊惱巡る恋」

鳴女の出した鬼を斬り捨てながら突っ込む蜜璃。

いざ、首を斬ろうと刀を振るうと鳴女の足元から金属の柱が現れて金属音を鳴らし、刀が防がれる。

「くそ、今度はどの鬼の血鬼術だ!?!」

天元は周りの鬼を睨む。

そう、ただ単純に鬼を出すだけなら既に何百回も斬り捨てているのだが、鳴女の出

た鬼の血鬼術がそれを防いでいる。1体1体はすぐに倒せる程に弱いが集団で来ている上に殆どの血鬼術が鳴女の首が危険な時に使われていて、首までのあと一步が遠かった。

「蟲の呼吸 蜂牙の舞 真靡き」

しのぶが無防備な上空からの突きと毒によつて殺そうとするが、今度は天地が逆さまになり、しのぶはどんどん上に飛んでいき、鳴女の血鬼術によつて操られてる床がぶつかる。

「いかなる脆弱な血鬼術でも積もれば強力な血鬼術になる」

鳴女は琵琶で新しい鬼を出し続けたり、別の場所にいた鬼を移動させて混乱させる。

「蛇の呼吸 壺の型 委蛇斬り」

「水の呼吸 参の型 流流舞い」

小芭内と義勇が鳴女の首を死角から斬ろうとする。だが、琵琶の音になり、鳴女と天元が入れ替わつてしまい、危うく天元の首が飛びそうになる直前に2人は刀を止める。

「危ねえ!」

「すまない、宇髓!」

3人はすぐに鳴女の方を向いて斬りに掛かるがまた障子から現れた鬼が邪魔をする。すぐに斬り捨てれる程に弱いが斬り捨ててる間に逃げられてまた堂々巡りを続けている

た。

「柱を5人も抑えられるのは運が良いでございませう。このまま、死んでもらいます」  
「ぎげんな、ババア！」

調子に乗ってきた鳴女に対して天元が挑発するが、次に聴こえて来たのは何か紐が縮れたような音で、5人だけでなく、戦った雑魚鬼達も音の発生源である鳴女を見る。

髪が逆立って、特徴的な1つ目の周りには血管が浮き上がっていた。

そしてベンベンベン、琵琶をこれでもかと鳴らしてあちこちに障子を出現させて、そこから鬼がなだれ込んで来る。

「凄いな宇髓は、挑発に成功したぞ」

「黙ってる富岡！」

義勇の悪意が全くない一言に天元だけでなく、他の3人も苛ついてくる。

「血鬼術 千年王国」

こうして5人はまた大量の鬼を相手に斬って斬って斬りまくっていた。



轆轤と杏寿郎は走りながら、迫ってくる鬼を倒し続けていた。

「しかし、無残はどこにいる!？」

「さあな！俺も1回しか来てねえからよくわかんねえ！それに空間を弄る琵琶の女がいてそいつのせいで感覚が狂う！」

「アギトの力とやらでわからんのか!？」

「ざつきから四方八方で気配がして誰がどの鬼なのか分からねえ！」

「何とも不便だな！」

「俺もそう思うよ」

2人で話し合いながら進む。

だが、2人は急に足を止める。

辺りを詮索し、同時に天井を見上げると天井を壊しながら、上弦の弌と両目に刻まれた猗窩座が落ちてきた。

「お前らか……」

「猗窩座……」

笑みを浮かべる猗窩座に杏寿郎が刀を構える。

「杏寿郎、もう一度聞く、鬼にはなってくれないのか？」

「俺は最後の最後まで人間でいたい」



猗窩座の申し入れを断る杏寿郎。

快活に喋っていて実に爽やかな感じだった。

「汽車に鉾山……てめえとの因縁もこれで終いにしてやる」

「裏切者の卑怯者が世迷言を……」

猗窩座は轆轤を睨む。

強烈な怒りと僅かな妬みを轆轤は感じた。

「鬼になってどれだけ食った？ 鬼は全てを無惨様に捧げないといけないのにお前ともう

1人のゴミは裏切り、のうのうと人間に戻った……お前達は卑怯者だ」

それは轆轤が誰よりも何よりも感じてる事だった。

だが、轆轤はそこから逃げようとはしない。

地獄だろうが破滅だろうが受ける覚悟を持っている。

「だ」「この男は卑怯者ではない」……煉獄？」

轆轤の言葉に被せて杏寿郎が前に出る。

「この男は決してその事から逃げていない、今もこうして償おうと共に戦い、引いていない。柱として俺はこの男を見過ごす事も許す事も出来ない。だが俺は人として尊敬している。この男は卑怯者ではない」

轆轤は頭を欠きながら前に出て、杏寿郎の前で屈んで構える。

「嬉しい事を言うじゃねえか、俺と接点なんてそんなに無いのに・・・」

「戦い方や表情を見れば分かるものだ」

そんな2人を見て猗窩座は構える。

「殺す！」

「やってみろ！」

そして2人と猗窩座は戦闘を始めた。

## 愛する人の為ならば

最初の印象か？

うむ、凄く失礼な男だ！

そして、どこか飄々としていて鬼を倒す事ができる腕が確りあるのに柱にならないから、責任感がないのだと思ったが列車で共に戦い、考えを改めた！

その後、一緒に定食屋に行った時に思い切つて柱にならなかつた理由を聞いてみたら、「柱になったら、何柱様とか敬語で絶対と言われるのが嫌だから、それに一々訂正していくのが凄く面倒くさい」と返つてきた。まさかと言うような理由に俺もそして一緒に来ていた不死川や竈門少年もずっこけてしまった。

よもやよもや、柱になりたくない理由にそれを上げるとは予想外だった。

不死川は「そんなアホな理由で」と呆れ果てておつた。

俺も同じだった！

帰る時にたまたま下級の隊士にあつた時に「光柱様」と挨拶をされた時は凄く顔が歪んですぐに止めるように言つていたから本心なんだろう。

・・・胡蝶の事を聴いた時の顔は今でも覚えてる。快活に明るく振る舞おうとしてい

だが、ボロボロだったのはすぐに分かった。だがお館様は容赦無く聞いていて驚いたぞ。多分、2人しか分からない世界があるのだろう。

鉦山を終えて、元に戻った……いや前よりも良くなったな。責任感が増えたというか、あれが本来の津上なのだろう。

え？話が長くなってるだど？

そこまで話していたかな？

よもやよもや、最近はどうも時間が短く感じてしまう。

そうだな、俺と津上の関係は[ ]仲間[ ]だ。

今でもそう思っている。

これは俺の[ ]仲間[ ]の物語だ。

あいつの名前は津上明悟。

またの名を[ ]仮面ライダー[ ]

—————

最初に仕掛けたのは猗窩座だ。

確實に殺す為にまず轆轤の頭を狙いに来る。

轆轤は素早くミラーージュアギトになり、それを受け止める。杏寿郎はそうして掴まつた猗窩座の首を斬ろうと刀を振るうが空いてる手で受け止められる。轆轤はそれを見て手のブレードを出現させてガラ空きの胴体を真つ二つにしようとするが猗窩座はそれを足で止める。

渾身の力で3人とも押し切ろうとするが膠着する。

轆轤はベルトを光らせて、猗窩座が逃げられない様に受け止めてる手を離さない。杏寿郎もそれに気付き、自分の刀を受け止めてる腕の手首を捕まえる。

だが、猗窩座は両腕を自ら引きちぎって光を多少受けただけで済ませてまた構える。

「破壊殺 乱式」

近距離で叩き潰そうと乱打戦に持ち込む猗窩座。

轆轤と杏寿郎もそれ等の攻撃を捌く。

「炎の呼吸 壱の型 不知火」

杏寿郎が猗窩座に突っ込み、袈裟がけを喰らわせようとするが避けられ、猗窩座の殺人拳とも呼べる拳が杏寿郎の頭に向かつていくが、轆轤が腕の刃を2人の間に入れ、拳や腕を真つ二つに斬りながら、刃を猗窩座の顔面に向かわせる。

斬られた拳は2つに分かれ、杏寿郎の頭とは違った方向に向かう。

猗窩座は向かってくる刃をバク転して避けて、今度は脚で轆轤の顎を破壊しようとする。

「炎の呼吸 伍の型 炎虎」

杏寿郎が轆轤の顎に向かつてくる脚を斬り落とす。

猗窩座は追撃されないように回転の勢いを使って離れる。片腕は拳から二の腕にかけて切り裂かれ、片脚も切り落とされたがすぐに元に戻る。

「相変わらず、強いな」

元に戻った部分を軽く解しながら笑顔で2人を見る猗窩座。2人は猗窩座の笑顔が分からなかった。猗窩座は突っ込み、殴り掛かる。だが杏寿郎は柄で攻撃を受け止めると轆轤がすかさずに刃で首を斬ろうとする。猗窩座さそれを避けるわけでなく口で白羽取り、止める。

「刃を口で止めるんじゃねえ！」

杏寿郎は隙を突こうと斬りに行くが蹴り飛ばされる。

ガラ空きの轆轤の体目掛けて猗窩座は拳を構える。

轆轤は猗窩座から刃を離させようとするが猗窩座の方が早い。

「破壊殺 乱式」

拳を轆轤の体に叩き込む猗窩座。

杏寿郎がいる方に轆轤も吹き飛ばされる。

2人は膝に手を付きながらも立ち上がり、構える。そんな2人を見て猗窩座は満面の笑みを向ける。

戦闘に高揚し、立ち向かう気力が全く衰えない2人に嬉しくなった。

愛しくなった出来れば永遠に戦いたい。

もつと自慢の剣術で自分の血鬼術を超える剣を味合わせて欲しい、もつとアギトの力を自分に叩き込んでほしい。猗窩座はそんな矛盾した思いをしながら2人に向かつて歩く。

手を左右に軽く振り、杏寿郎と轆轤は警戒しながら間を空けて挟み撃ちしやすいようにする。普通なら絶対によこの間には来ないし、そもそもそんな事をさせないよう鬼の身体能力を使って突っ込んで混乱させれば良いが、猗窩座はあろうことか2人の真ん中に堂々と来る。

少し空間を開けた2人が驚くほどに軽い足取りで来て、手をフラフラとさせて無駄な力を抜いている。

最初に動いたのは轆轤だ。

猗窩座のニヤついた顔面に目掛けて蹴りを入れようとするが腕で防がれる。そんな猗窩座の背後から杏寿郎の刀が首目掛けて来るが斬られる前に頭を下げて避ける。上

げてきた猗窩座の頭に轆轤は右拳を振るうが避けられて顔面に裏拳を入れられ、反対から向かつてきた杏寿郎の膝を蹴って止め、その場でバク転し、その回転を使つて両足で轆轤を蹴り飛ばし、杏寿郎の頭を潰そうと拳を付き出す。杏寿郎はその手を掴み、猗窩座を背負い投げしようとするが猗窩座は投げられる前に杏寿郎の曲がりかけの腰に手を当て無理やり伸ばし、逆に猗窩座を大外刈りで倒す。倒れた杏寿郎の腹に蹴りでも入れようとすがそうなる前に吹き飛ばされた轆轤が飛び蹴りを猗窩座に喰らわし、離れさせる。

杏寿郎もすぐに立ち上がり、2人で攻撃する。

轆轤は左足で下半身を杏寿郎は刀で首を斬ろうとするが猗窩座は右足で轆轤の蹴りを止めるとそのまま杏寿郎の肩を蹴り、攻撃の流れを止める。

少し体勢がグラつく杏寿郎の援護に轆轤は猗窩座にタツクルし、密着した状態で膝蹴りを腹に何回も喰らわすが無防備な背中に肘打ちをされて投げ転がされる。

「炎の呼吸 参の型 気炎万象」

弧を描くような斬撃で杏寿郎は猗窩座の首を狙うが猗窩座は両腕でそれを防ぐ。腕ごと斬ろうと力を込めるがとつもない筋肉の絞まりによつて少しも動かない。

猗窩座は杏寿郎の刀を側面から殴りへし折り、杏寿郎を蹴る。杏寿郎は30cmぐらいの小刀並みになった日輪刀を見て、構え直す。



猗窩座は杏寿郎に飛びかかるが立ち上がった轆轤が猗窩座の脚を掴み、地面に叩きつけ、そのまま何回も壁やら床やらに猗窩座をぶつけるが掴んでる手の甲を踵で蹴られ、離してしまう。

猗窩座は轆轤の顔面に飛び回し蹴りを放つが、杏寿郎がその前に猗窩座に飛び蹴りを喰らわせて、轆轤を守る。

蹴られた猗窩座はゴロゴロと転がり、笑いながら2人を見る。

「良いぞ、最高だ！きつとお前たちを倒せれば俺はまた更に強くなる！」

大声で話す猗窩座。

喜んでいるようで2人はその姿にどこか滑稽さを感じていた。

「強くなって、次はどうするんだ？」

「は？」

轆轤の言葉に猗窩座は訳が分からなかった。

「何を言ってる？」

「強くなって次はどうしたいんだ？誰かを守りたいとかそういうのは無いのか？」

「弱い者を守って何になる？奴らはゴミだ。死ぬべきだ」

猗窩座の身勝手な言い分に杏寿郎が反論しそうになるが轆轤がそれを止める。止められた杏寿郎は轆轤を見るが一回頷かれたので言うのを我慢した。

「お前の言う弱いってのは何だ？力が弱いか？立ち上がらない事か？」

「違う・・・弱い奴は卑怯だ。毒を使ったりして陥れようとすると、弱い奴はクズだ。人を苦しめるだけで約束を守れない。弱い奴は我慢が出来ない・・・だから俺は殺すんだ。皆、殺してやる」

猗窩座の矛盾だらけの言葉に轆轤と杏寿郎は確信した。

「お前、それさつきから自分が当てはまり続けてるの分かってるな？」

それは、猗窩座が自分でも気づかない程に死に向かっている事だった。

轆轤からの指摘に猗窩座は睨んだままで何も答えない。

「以前記憶を見た時から思ってた。お前は戦闘狂ってよりも死にたがりってな。記憶の中にあるあの死んだ日を味わう前に師範から殴られて止めてくれた事が忘れられないし、嬉しかったんだろ？自暴自棄で暴れる自分を止めてくれて・・・だから今もやってる」

「うるさい」

「強い奴と戦い続けなければいずれは殺されて終わるから、だから強い奴に拘る」

「黙れ」

「現に今もそうだがどんどん人としてが強くなってる。聞こえてんじゃねえのか？大切な人の声が・・・」



猗窩座は今まで以上の笑みを2人に向ける。

轆轤も杏寿郎も猗窩座の豹変に警戒する。

「何をやっただんだ？お前……」

「殺したんだ……あの女を殺せた……最高の気分だ……俺はこれでまだまだ強くなる！そう、この身の全てを俺は無惨様に捧げる！」

「お前「芦原、もう無理だ！これ以上やつても意味はない！彼はもう手遅れだ！……止めるぞ」……分かった」

構え直す2人に猗窩座が突っ込んでくる。今まで以上に速く、正確無比な攻撃をしてきて、完全に捌けない。轆轤も杏寿郎も肋が折れる。轆轤が刃で攻撃しようにも猗窩座は余裕の表情でそれをへし折る。

「破壊殺 終式 青銀乱残光！」

猗窩座の技に轆轤も杏寿郎もいくつかは捌けたが想像以上の拳を叩き込まれ、膝を付き倒れる。

あちこちの骨が無事ではすまないほど強烈な拳打によって動く事が出来ない。

「凄い、今まで以上に強くなった……お前達に感謝するよ。これで俺は最強に近づけた……殺して肉を食ってやる。お前達だけでない、他の鬼殺隊もだ。老若男女関係なしに食って食って強くなる。まずはお前から……じゃあな」

猗窩座は轆轤に向かつて拳を上げる。杏寿郎よりも轆轤のアギトの力の方が脅威だから先に轆轤を殺そうとする。

「破壊殺 碎式 万葉閃柳！」

渾身の力を込めた拳打が上からの轆轤に向つて来る。

だが、轆轤も諦めずに手に光を込めて殴りに掛かる。

拳と拳がぶつかり合い、衝撃と光が3人を包む。

轆轤と杏寿郎は暗い所にいた。

辺りは何も見えず、ただ暗く2人は当てもなく歩く。

そうしていると檻が見えてくる。

骨組みだけの檻の中には人がいた。

美しくどこか儂い印象を受ける女性 恋雪だった、彼女は檻を壊そうとしていた。

轆轤と杏寿郎は彼女の前に立ち、檻を壊すのを手伝おうとする。別に大層な意味はない。ただ人が檻に入っているのに気分が悪くならない人間はいない。

「ご婦人、今助けます！」

「貴方は？」

「俺の名前は煉獄杏寿郎です！」

「俺は芦原轆轤だ」

恋雪は2人の名前を聞き、檻を握つてる2人の手の上に自分の手を重ねる。長い事抵抗していたせいなのか血だらけで爪も剥がれていて肌もボロボロの悲惨な手だった。

「お願いします。この檻は私が自分でやりますので手出ししないで下さい」

「な!？」

「私は貴方達が猗窩座と呼ぶ者の妻です！こんな檻など壊してみせます」

恋雪はそう言うのと再び檻を壊そうと力を入れる。

どう見ても無理だと感じた。

だが、恋雪の気迫に2人は圧された。

「聞かせてくれ、あんたまだ愛してるのか？」

轆轤は恋雪に訊ねた。

猗窩座は殺したと言った。

殺されてるのになぜ、ここまで出ようと必死になるのか轆轤は知りたかった。

「当たり前です。私が心の底から好きになった人だから・・・」

恋雪はそう言うのと再び力を入れた。

するとどういふ事か、骨組みがミシリミシリと鳴り始め、大きな音と共に恋雪はボロボロになりながらも檻から出てきた。

「よもやよもや、お見事・・・天晴だ」

「すげえ・・・陳腐な言い方しか出来ねえが、すげえ」

檻から出てきた恋雪は、フラフラしながら座り込んだ。

そして2人を真剣な眼差しで見つめた。

「私だけでは助けられません。だから・・・貴方方には虫が良いかも知れませんが手伝つて下さい」

恋雪の言葉に頷く2人。

2人は恋雪を立たせようと手を出し、恋雪もそれに応じる。手を繋いだ3人を光が呑み込んだ。

轆轤と杏寿郎は現実に戻って来ると目にしたのは頭を抑えながら暴れる猗窩座だった。

「止めろ、来るな、来るなあ！」

暴れる猗窩座を見て、轆轤と杏寿郎は立ち上がる。

「煉獄、アイツを止めるぞ」

「ああ、あのご夫人の願いだ」

立ち上がり、杏寿郎は折れた刀を轆轤はボロボロの腕を上げて構える。

そんな2人に猗窩座も気づいたのか2人を睨む。

「貴様ら、まだやるのか？ 一体何でそこまでやる？」

「止めるのを手伝う約束をしたからな！」

「そう言う約束は守るんだよ！」

「何を世迷言を！」

飛びかかって来る猗窩座の拳を受け止める轆轤。杏寿郎が短くなつた刃で首を斬ろうとするがまた蹴られ止められるが轆轤が腹に膝蹴りを喰らわし、殴り飛ばす。

体勢を立て直しす猗窩座は2人の方に向かおうとする。

「止めて、狛治さん！」

鬱陶しい声が聴こえ、それを消し飛ばそうと聴こえた方向に裏拳をするが誰も居ない。

猗窩座はなぜ、自分がこんな行動をしてるのか分からなかった。

轆轤と杏寿郎はその隙を付いて、轆轤は蹴りを杏寿郎は致命傷にはならないが斬撃を喰らわせる。猗窩座は瞬時に反撃しようとするも、

「お願い、止めて！」



その声のした方に蹴りや裏拳を入れては空を切つて、隙を自ら作つていた。杏寿郎や轆轤もそこまで分かりやすい隙を逃すわけなく、斬撃と拳打を打ち込む。

そこから、状況が逆転した。

2人掛かりでも押されていたが猗窩座だったが、誰も居ない所に攻撃しては隙が生まれ、そこを突かれていた。

そして遂に杏寿郎の短くなつた刀が猗窩座の首を捉える。猗窩座はすぐに杏寿郎の頭を潰そうと右手で殴るが杏寿郎はそれを左手で受け止める。ならガラ空きの胴体を貫こうと猗窩座は左手で突きに来るが轆轤がそれを左手で止め、轆轤は自分の右手に光を込める。

「何なんだ!?!お前ら、何なんだ!?!」

何度倒しても立ち上がってくる2人に猗窩座が叫ぶ。

決着が着いたと思つたら、振り出しの連続だつた為に2人が何なのか分からなくなる。

「俺は炎柱 煉獄杏寿郎!」

「俺は芦原轆轤 仮面ライダーだ!」つ言えるのは、嫁さんが気張つてんのに何時までもグタグタしてんじゃねえ!!」

轆轤の渾身の拳がライダーパンチが猗窩座の顔面を捉えて吹き飛ばす。猗窩座は

顔を吹き飛ばされ、ゴロゴロと転がり倒れた。



視界が消し飛ばされて、猗窩座は走馬灯を見ていた。

病弱な父親の為に盗んで奪ってそれを薬にしたのに父親が自殺し自暴自棄になって暴れてたら、拳法家の師範に止められ、弟子にしてもらい、一人娘の病弱な恋雪と互いに想い合って幸せになる筈だったのに父親の墓参りに行ってる最中に対立していた剣術道場の人間が井戸に毒を入れ、2人を殺し、怒りに任せてそいつらを素手で惨殺し、心が壊れてた所を無惨に付け込まれ、鬼になった。

「(弱い奴は嫌いだ・・・卑怯で大切な者を全部奪っていく・・・弱い奴は辛抱が出来ない・・・罪人でも助けてくれ、懸命に教えてくれた拳で殺して、全部台無しにする・・・守るって約束したのにその拳を全部壊してしまう)」

「猗窩座、何をしている?」

不意に猗窩座の耳に無残の声が聴こえる。

「私の為に拳を捧げるんだろ?何を勝手に死んでいる?」

「(そうだ、俺はもつと強く・・・なつて何をするんだつけ?)」

「お前は私の手足だ。私の命を守る者だ」

「(・・・ああ、そうだ俺は・・・)」



現実で杏寿郎と轆轤はまだ完全に灰にならない猗窩座に警戒していた。すると猗窩座の首無しの体が動き始め、そこから首が再生されようとしていた。



「やつと再生を始めたか、ゴミが・・・この程度の事、何故できない？私の素晴らしき力をどうして人間は扱えない？無能共が」

無惨は姿を現し、冷酷かつ自分勝手に幼稚な言葉を言いながら、猗窩座の髪を掴み上

げて乱暴に扱う。

猗窩座は人形のように動けなかった。

糸が切れた人形のように猗窩座は倒れたままだった。

「さっさと戦「いい加減にして!」・・・何?」

猗窩座は自分の前に立った人を見た。

自分より病弱で優しくして大切にしてくれた恋人　恋雪が無惨に対して猗窩座を守るように立っていた。

「・・・恋雪・・・さん・・・」

「狛治さんにはこれ以上、指一本でも触れさせない。この人の拳をこれ以上私利私欲に使わせない!」

無惨相手に啖呵を切る恋雪。

そんな恋雪に対して無惨は腕を鞭に変えて恋雪を殺そうとする。猗窩座・・・いや狛治はその時、勝手に体が動いていた。

「猗窩座!!」

そして無惨の鞭を弾いて、そのまま無惨の顔面をぶん殴り飛ばした。

「猗窩座ア!!!」

無惨はそう叫びながら消えていった。

残っていたのは狛治と恋雪だった。

狛治は無事な恋雪の方を見ると一目散に走って抱き着いた。涙を流しながら、許しを乞うていた。

「ごめん、ごめん！守るって約束したのに……ごめん、ごめんなさい！ごめんなさい！」  
「守ってくれたじゃないですか……狛治さん、守ってくれたじゃないですか、たった今……  
約束守ってくれてありがとうございます……一緒に天国は無理ですけど、私は何処までも今度は一緒に居ますから……」

狛治を抱き締める恋雪。

2人の周りには大量の火が出できた。

地獄の火だった。

そして2人は苦痛に叫ぶのでも悲しみに暮れるのでもなく、今度こそ一緒になれる事を幸せに感じながら、燃えた。



現実では立ち上がり始めた首無し猊窩座の体に首が再生し始めていた。

杏寿郎と轆轤は互いにポロポロで今度こそ、相打ち覚悟で立ち向かおうと構える。

猗窩座の首が再生され顔も再生され、片目が出てくると、その目は涙を流していた。涙を流し続け、猗窩座は2人を視認したら笑みを浮かべ、そして膝を付く。

そして今度こそ、完全に灰化した。

杏寿郎と轆轤も緊張の糸が切れたのか座り込んでしまい、残った猗窩座の服を見ていた。

「終わったな」

「まだ終わりではないぞ。芦原……俺達は彼を止められたのか？」

「俺達は何もしてねえよ。全部、アイツの嫁さんがやったんだ」

杏寿郎の疑問に轆轤は間髪入れずに答える。

「ああ、素晴らしい人だった……羨ましい位に……」

「お前にもいい出逢いがあるさ」

轆轤の茶々に杏寿郎は笑う。

轆轤もそれに釣られて笑う。

立ち上がり2人であるが、轆轤は杏寿郎と違って徹底的に鍛えてないせいか、フラフラだった。

だが、そんな轆轤に杏寿郎は肩を貸した。

「良いのか？元鬼の俺にこんな事して」

「不味いだろいな．．．だが、共に戦ったお前はもう俺の大事な仲間だ！仲間を支えるのは当然だ！」

杏寿郎の言葉に轆轤は嬉しくなった。

元鬼で人を食いまくって血塗れなのにそれでもこう言ってくれる杏寿郎が強く逞しく、そして心の底から尊敬出来た。

「俺の首を斬るなら、お前が良いな．．．だが、まずは無惨だな．．．」  
轆轤はそんな事を考えながら、杏寿郎と一緒にまた戦いに戻っていく。

## 人知を超えた者達へ

最初に会って思ったのは何ともだらしなく、そして逃げてる男だと感じた。

お館様に対する無礼もさることながら、数々の問題行為は悲しむどころか怒りが出てきた。

すまない、今でも思い出すと怒りが出てきてしまう。

・・・カナエの件には心が痛んだ。そして、津上に対してこの上ない程に殺意も出たし、怒りも出た。責任能力がないと心から感じたからだ。後日のお館様との謁見の際に声色を聞いてると怒りよりも恨みよりも哀れみを感じていた。道化のように振る舞ってる津上が哀れに思えた。ただ、鉢山で戦い、無惨に対しての言葉だけでなく、カナエとの会話を外から聞いて間違ってたのは自分だったと改めた。2人は互いに信頼し、愛し合っていた。私のこの怒りもただのエゴだった。

まあ、津上に関しては時折、叩きたい程に怒りが出るがそんな風に分を出せる彼を羨ましいと思う事が・・・無いな、流星にあればなりたくないな。

これは、私の同僚の物語。



彼の名前は津上明悟。

またの名を~~〇〇~~仮面ライダー~~〇〇~~

――

無限城の奥で戦闘をしていた。

明悟に無限城を壊しながら、激闘を繰り広げ、遂に上弦の壺である黒死牟を倒した。

無一郎、実弥、玄弥、行冥、伊之助、カナヲの計7名で戦い、明悟は左腕を喪いながらも倒した。

「教えろ、お前はなぜ戦うのだ」

やられ、体が灰になってきてる黒死牟がフラフラの明悟に最後の疑問をぶつける。



事は10分前、明悟と黒死牟は戦闘を始めていた。

シャイニングを超えて更に光が強くなり、夜でもほぼシャイニングと同等以上の力が出せるようになったサンシャインフォームと言う明悟が今できる最大限のフルパワーで黒死牟に攻撃していたが、黒死牟も黒死牟で自分の血鬼術で作り上げた刀を大太刀化させて3つの刀が更に生えた3又で相殺していた。

カリバーを繋げ、サーキュロスモードにして黒死牟に向って投げるが、即弾かれる。そのまま、別方向に飛ばされるカリバーだが、明悟は手を翳して手元に戻す。

「月の呼吸 弐の型 珠華ノ弄月」

飛んでくる3つの斬撃を明悟はサーキュロスモードのカリバーで殴り、弾きながら突き進んでいく。

「月の呼吸 壱の型 闇月・宵の宮」

明悟の首を斬ろうと黒死牟の居合斬りが来るが明悟はそれを右手の手甲で受け止めて左手に持つてるサーキュロスモードのカリバーの刃に光を纏わせて回転させて、黒死牟の首目掛けて振る。

「月の呼吸 伍の型 月魄災禍」

刀を振らずに飛んでくる無数の斬撃によって明悟は、弾き飛ばされる。と云うよりも

そのままいると死ぬと云う直感に従い、自分で後ろに飛び、被害を軽減するがそれだけで終わらず、カリバーを投げて黒死牟の腕を斬り落とす。

ゴロゴロと転がりつつもカリバーを手元に戻して再び構える明悟と腕を再生させて睨む黒死牟。

明悟の体には無数の傷が出来ていたがベルトが光、明悟を包むと治った。だが、明悟は肩で息をしていた。

「流石は上弦の壱つて所か・・・手強いな」

「貴様は確かに鬼からすれば厄介な力を持つてるが弱いな」

「・・・否定はしない」

「鬼と同じような回復が出来るが体力の消耗が激しい。後、何回もやれば体力が尽きて死ぬだろう。だが、私は違う・・・何とも欠点だらけの力だな」

黒死牟の言葉は当たっていた。明悟もそれを感じていた。アギトの力は確かに進化し続けるがそれでも間に合わないと感じる程に戦いが苛烈であり、どう考えても回復を簡単に出来る程、進化するのはすぐには無理だと悟っていた。前回の回復・・・遊郭の時に片腕を回復させていたがあれは怒りによる暴走と興奮でアドレナリンがうまくついでいて痛みを余り感じなかった上にその後、すぐに終わってしまったので体力の減りを深刻には感じなかった。

「欠点こそ、進化の兆しだ」

「違う……屈辱の極みだ」

平行線の話をして互いに間合いを掴もうとにじりと近づく。斬撃を飛ばせるので2人とも下手に突っ込む必要が無いが得意な間合いは接近戦。下手に近づけば明悟は斬撃、黒死牟は光の餌食になる。

決定打を与えようと緊迫していた。

そんな中、唐突に天井が崩れ落ちる。

明悟も黒死牟も顔を上げて見ると、

「猪突猛進!」

何故か伊之助が落ちてきた。

「伊之助君?!」

明悟は伊之助に声を出す。黒死牟も突然出てきた珍獣に少し驚く。

「獣の呼吸 参の牙 喰い裂き」

黒死牟に向って落ちていき、そのまま首を斬ろうとするが黒死牟はその斬撃を避けて一太刀で伊之助を真っ二つにしようとする。伊之助は感覚でそれに気づき、避けようとするが間に合わなかった。だが明悟が間に入り、カリバーで黒死牟の刀を受け止めて、ベルトから光を放ち、黒死牟の体を焼く。

「獣の呼吸 玖の牙 伸・うねり裂き」

伊之助の片腕の斬撃が黒死牟に向かつていく。

紙一重で黒死牟は避けようとするが、6つある目の内の1つが斬られる。

違和感を感じ、黒死牟は伊之助の腕を見ると肩と肘の関節を外して無理やり伸ばして  
いた。

「ちつ、やっぱり上手く行かねえか、まだまだ修行が足りねえな」

バチンと音を立てて関節を元に戻すと2本の刀を構えた。

黒死牟は本来ならば喰らうはずは無かった。痣を発現させて透き通る世界と云う更に上の段階まで来ている黒死牟は筋肉の動きを見て相手の動きを予測出来る。それは鬼になつてる事で更に鍛えられてきた。しかし、鬼になった弊害でアギトの光に弱く、その光に当てられると感覚すらも狂う。更に云えばアギトに変身した事で透き通る世界のの効きが悪い。これも下手な鬼だと触れるだけで倒せるシャイニングよりも強力なサンシャインフォームになつてる故に鬼の黒死牟の血鬼術の効果が薄れてるからである。

「忌々しい獣風情が……だが痣も発現してないのにその強さは中々だな」

「なかなか見る目あるじゃねえか、伊達に6つも目ン玉が付いてるわけじゃねえな」

猪の被り物をしているが中では絶対にドヤ顔だと云うのが声でわかる。

「鬼になれば更に強くなれたらうに」

不意に黒死牟はそう呟いた。命乞いをして役に立てそうな奴は見つけたが、どちらかと云うと黒死牟は狗窩座のような反発心のある奴の方が好きなので呟いてしまった。

「お前馬鹿か？ 鬼になったら天ぼら食えねえじゃねえか、それに仲間と食い合うのもアホだ。折角一緒に食って楽しいのに何でそれを捨てるんだ？ そんなアホな事を俺は選ばねえ」

明悟も黒死牟も理由に呆然となる。

そして明悟は笑い、黒死牟は伊之助を睨む。

「伊之助君、やっぱり君っていい奴だね！」

「そんな愚かな理由で人を選ぶとは頭も獣並だな」

「鬼よりは全然いいぜ」

刀を振るう黒死牟。

明悟はその刀を受け止め、光で感覚を狂わせながら攻撃を伊之助に任せて戦う。



そんな中、この戦いを影から様子を伺っていたのが3人いた。

無一郎、玄弥、カナヲである。

3人とも明悟と黒死牟が轟音を鳴らしまくってる戦いの音を頼りに来てみたは良いが拮抗していたので下手に入ると不味かったので様子を見て隙きを探していたが伊之助の登場で突っ込み易くなっていた。

そして伊之助の型に嵌まらない攻撃と明悟の光で黒死牟が吹き飛ばされる。

「今だ！」

無一郎の合図でまず、カナヲと無一郎が突っ込み、玄弥は持つてる銃で黒死牟を打つ。

黒死牟はそれを弾くが、カナヲと無一郎が突っ込んで来ていた。

「花の呼吸 肆の型 紅花衣」

「霞の呼吸 肆の型 移流斬り」

黒死牟は迫ってくる2人を斬り捨てようと刀を構えるが、明悟が光を放ち、血鬼術を狂わせる。

意地と気合で何とか避けるが片腕をまた落とされる。

「おのれ……」

すぐに腕を治し、全員殺そうと刀を振るいかけるが、その前に明悟のサーキュロスモードしたカリバーが飛んでくる。

当たる寸前で弾くが今度は玄弥の銃弾が飛んできてそれも何とか弾くと今度は伊之

助、カナヲ、無一郎の3人が斬りかかつてる上に明悟が光を放っている。ギリギリ首を斬らせずに引いて生き残る。

「(面倒な：：他は雑兵なのにあの津上と名乗るアギトの光が私の体を尽く狂わせる。下手な鬼なら死んでる程の光・・・私でさえ、命の危険を感じてしまう)」

黒死牟は明悟を警戒しながらも劣勢を打破しようと刀を構える。

そんな黒死牟の頭上から鉄球と斧が降ってくる。

「岩の呼吸 伍の型 瓦輪刑部」

上の階から降りてくる行冥が鉄球やら斧を操って黒死牟の周りの4ヶ所に落とす。

「風の呼吸 伍の型 木枯らし風」

行冥の後ろから更に実弥まで降りてきながら、動きが止まっている黒死牟を斬ろうとする。

「月の呼吸 捌の型 月龍輪尾」

落ちてくる2人に対しての特大の斬撃できつきと殺そうとするが明悟が斬撃と2人の間に入り、カリバーに光を溜めて受け止めようとするもあまりにも威力が高く、明悟は2人も纏めて飛ばされる。

明悟と行冥の2人は飛ばされながらも鉄球とカリバーを投げる。

黒死牟は鉄球は上手く軌道を反らせたがカリバーに関しては明悟の意思によって動



く為、拮抗してしまふ。

「皆、頼む！」

明悟の言葉に全員が頷き、無防備に近い状況の黒死牟に伊之助、カナヲ、玄弥、無一郎は首を斬ろうと突っ込んで来て、明悟、実弥、行冥も突っ込んでくる。

「月の呼吸 伍の型 月魄災禍」

黒死牟の振らない無数の斬撃を全員が喰らう。

防御は取れていた上に明悟のカリバーの影響で思うように斬れず、全員致命傷に出来なかつた。

それでも皮は切れて、肉にまで到達しそうと言えるくらい大きかつた。

体勢の立て直しをしようと黒死牟は回復させるが明悟が関係なく突っ込んでくる。

黒死牟は明悟を斬り殺そうとするが明悟も黒死牟の刀を避けてやり返し、黒死牟もやり返す。

相手よりも速く斬り、相手にとって一歩でもやり難い場所に体を移動させて隙を伺う。

そこに行冥と実弥、無一郎、伊之助、カナヲ、玄弥まで加わる。行冥の剛力による戦いによつて黒死牟は更に押し込まれ、実弥の縦横無尽な斬撃によつてドンドン削がれて、無一郎の一瞬の隙を付く戦いから身を守る為に精神を疲労させ、伊之助やカナヲか

ら殺そうと刀を振るうも伊之助は肌の感覚でカナヲは目でそれを避け、玄弥の遠距離からの銃撃も鬱陶しい。

すぐに殺そうと呼吸を使おうにも明悟がずっと光を放つてるので思うように動けなかった。

「(負ける?・・・この私が?)」

頭でそう感じずにはいられないほどにかつてない苦戦。しかも徐々に斬撃が黒死牟の髪や服を斬っていたのが皮に行き、肉にまで行く。

「獣の呼吸 壱の牙 穿ち抜き」

そして遂に伊之助の全力の突きが黒死牟の体に刺さる。

「この・・・獣風情が!」

伊之助に刀を振ろうとするが、明悟、行冥、実弥の3人が詰め寄り、伊之助をどうにかできない。精々、日輪刀でも関係なく締め上げれる筋肉で刀を止めるぐらいしか出来ない。

「花の呼吸 参の型 泰山朴」

「風の呼吸 捌の型 初烈風斬り」

「霞の呼吸 壱の型 垂天遠霞」

カナヲ、実弥 無一郎の3人が黒死牟を倒そうと呼吸を合わせる。黒死牟は避けよう

としたが、行冥の鎖で体を巻き上げられた上に行冥と明悟の剛力が更に動きを止める。「いい加減にくたばれ！」

伊之助がそう叫び、全力で刀を締め付けていた肉ごと斬り裂き、3人の刀が黒死牟の首に迫る。

黒死牟の首に漸く刀が届いたかと思った。

「舐めるなあー！」

叫ぶと同時に何と全身から刀が生えてくる黒死牟。

最早、化け物そのものと化していた。

「素晴らしい・・・遂に私は刀そのものになったのか」

ただ、体を振り回すだけで月の呼吸と同等の力を出せる。その攻撃に全て吹き飛ばされる。

3人の斬撃だけでなく、行冥と明悟による拘束もこれまでの追い込みさえも。

だが、こんな良くある事でへこたれる者はいない。

明悟はアギトの紋章を浮かばせて、そこを潜り、黒死牟に向って飛び蹴りする。

黒死牟はそれを迎撃しようと刀と化した手を振るう。

蹴りと斬撃がぶつかり合う。

相手を倒そうと拮抗し、そしてぶつかる場所が力同士の衝突によりずれて明悟は左腕

を切り飛ばされる。

「(勝った!)」

勝利を確信する黒死牟。

だが、明悟にとつてこの攻撃は本命ではない。

「岩の呼吸 壺の型 蛇紋岩・双極」

行冥の放った鉄球が本命であり、それは勝利を確信していた黒死牟の顔面前まで迫っていた。

「(なっ!?いつの間になっ!?)」

黒死牟は非常に大きな誤解をしている。

明悟は確かに鬼には天敵とも言える能力が使えるがそれ以外はただの男であり、特別に強靱な体質でも無ければ剛力でもない。

けど、行冥は違う。

生身でありながら、明悟と互角に戦える鬼殺隊であり、柱の中でも最古参。明悟はそもそもアギトと云う反則に近い力で鬼を倒していたので腕ならば行冥の方が上である。

黒死牟は警戒する人間を間違えたのだ。

自分の力をしつこい位に狂わせ続けた事により、日輪刀の警戒が薄れたのだ。常に警戒しなればいけない筈の物を超えた存在が現れた事により、杜撰になり負けたのだ。

それが証拠に明悟と戦ってきた上弦で明悟に追い詰められた、苦戦させられた鬼は色々といったが、明悟の攻撃によって殺された上弦は実を云うと一人もいない。

行冥の鉄球により、黒死牟は顔を吹き飛ばされる。

首から鮮血が飛び、本来ならばこのまま灰化する筈なのにゴコゴコと断面の肉が浮かび上がってくる。

「首を再生させるぞ！」

「上等だ、なんべんでも斬つてやらあ！」

そして黒死牟は首を再生させる。

全員、すぐにもう一度倒そうとまた突っ込む。

命の危険を感じなければおかしい状況で黒死牟は快感を感じていた。

「素晴らしい。遂に私は首をも再生させた。これでもっと強くなれる・・・永遠に強くなり続ける事が出来る・・・緑壺、私はお前を超えるのだ！そして本当の日ノ本一の侍になるぞ！」

自分よりも優秀で特別だった弟の緑壺が生まれて以降、味わった事のない極上の快感が黒死牟を支配していた。向かってくる者を殺してまだまだ強くなると決意し、一番最初に突っ込んできてカリバーをシングルモードにしてる明悟と対面し、アギトの太陽のような輝きを放つ瞳に映ったのは、侍とは程遠い鬼だった。

「何だあれは？ 私なのか？ ……これが侍？ ……夢に見た侍だと言うのか？ ……ただの化け物ではないか？ ……違う、私がなりたかった侍はこれじゃない」

映った自分の姿に呆然としている黒死牟。

その隙を容赦なく突き、首を斬り落とす明悟。

斬られた体は倒れ、灰化していく。

黒死牟は虚ろな目で明悟を見ていた。

「お前はこうして戦うのだ？」

黒死牟はそう明悟に聞く。

最後の最後で知りたくなかった。

ここまでの化け物に向かって来続けて鬼と同等以上の力を持った同じ異形に聞きたかった。



明悟は黙って黒死牟を見ていた。

左腕から流れる血は止めたが再生はしなかった。

もうそれに使う体力も残っていないかった。

「教えろ、お前はなぜ戦うのだ？」

「大事な兄弟がいる。本当の兄弟じゃねえし、俺よりも腕は弱いし、不器用だし、人の嫌な事にずけずけと入ってくる馬鹿な兄弟がいる。けどあいつは俺よりも強い。どんな逆境の中にも例え最前に立てずに見守る事しか出来なくても決して諦めない。だから俺はアイツを死なせたくない。その為ならどんな戦いも行く」

「そんな理由で戦うのか・・・」

「難しい理由が無いと納得出来ないなら勝手に考えて、俺はこれ以上の理由がない」

「・・・羨ましい、兄弟愛だな」

「冗談じゃない。アイツの言動にどれだけ振り回されたか、勉強から逃げる為に俺を囮にするわ、ノコギリを壊しまくって一緒に叱られる羽目になるわ、寝相が悪くて寝てる時に絞め殺されそうになるわ、ろくでなしだよ。でもそんなだから、俺が付いていないとアイツはダメなんだよ。あんたには居なかったの？喧嘩を繰り返す程に仲の良かった奴は？」

明悟の容赦のない愚痴に行冥と実弥、無一郎はまたかとなり、耀哉の実体をあまり知らない玄弥とカナヲはこんな時でも言いまくる明悟の性格に引いていた。

明悟の言葉に黒死牟が頭に浮かんだのは、嫌いで嫌いでしょうがない弟の緑壺だっ

た。浮かんでくる顔は音の鳴らない笛を貰って笑顔を向けた緑壺の顔だった。

自分でもなぜ、緑壺が浮かんでくるのか理解出来なかった。

「喧嘩ってさ、誰だって嫌な気分になるよ。ギスギスするし、しんどいし、自己嫌悪に陥って情けなくなってくるし……けど本気で本音で言い合つての喧嘩ならもうしようがないじゃん。それすらも言わずにギスギスしてても辛いだけだよ。まあだから俺とアイツは良く下らない事でやるんだけどね」

「……そうか、私は兄弟喧嘩から逃げてただけか……」

黒死牟はそう呟いて今度こそ完全に灰になった。

明悟達は軽く手当をしてから、無惨を指摘した。





無限城の中心とも言える場所で無惨は球体を作り、回復していた。

明悟によってボコボコに破壊されまくった体も今では絶好調とも言える状況にまで上げる事が出来た。

球体の周りにいた隊士達は何時でも斬り殺せるように警戒を続けていたが、急に球体が弾き飛び、その中から現れた無惨によって警戒に当たっていた何十名もいた隊士は皆殺された。

「誰も彼もが役立たずのゴミだらけ、やはり私が一人でやるのが最も確実だな」  
体を変化させて無惨はそう言う。

そしてそのまま、人の気配を探して歩いていく。



炭治郎と零余子は無惨の所に向って炭治郎の鼻を頼りに進んでいた。

アギトの感知の力が鬼の中だと全くの役に立たない為である。

そんな中、琵琶の音が鳴り響く。

また変化する周りに警戒する炭治郎と零余子。

集中する2人の前に現れたのは無惨だった。

「(鬼舞辻無惨!)」

無惨を見た炭治郎はち切れんばかりの怒りが蠢くのを自分の中で確り感じた。

「異常者に裏切り者か・・・今宵、お前ら化け物を殺して終わりにしてやる」

無惨の口から出た暴論に炭治郎は怒りが落ちていくのを感じた。もう何を言っても無駄だと本気で思い、冷たい感情ととてつもない恨みだけがあった。

「炭治郎、行くよ」

「元下弦の裏切り者めが、今更人助けか?そんなのをやって何になる?それで罪が消える訳でもないのにこれだからお前達は無能なのだ。生き恥を晒して逃げてるゴミクズだ」

自分の事を柵に上げてよくここまで事が平気で言える。全て自分に返ってきてるのを理解していない。言葉は通じるが話が根本から通じていない。

零余子は別に許して欲しいとか思っていない。どのみち地獄に行くのは決まってる。今更、人助けをして正義の味方を気取るつもりもない。ただ、このまま死んだらもうと生きる無惨を想像するのも嫌な上に友達のお禰豆子を守る為に零余子は戦ってるのである。

だから、別に今更どうこう言われようが何も感じていない。庇われる資格すらも無い

と自虐しながら、

「お前が言うな！」

だが、炭治郎がそれについて無惨に怒鳴る。

「零余子さんも轆轤さんも自分の罪から逃げてない。俺は2人の今までを許せるほど寛容じゃないけど、それでも懸命に生きようとしてる2人はお前よりも遥かに気高い！悪鬼が人の生き方をコケにするな！」

炭治郎の言葉に無惨は何を言ってるのか理解出来なかつた。寧ろ、訳のわからない事を言ってる炭治郎が本気で化け物に見えてきつきと殺そうと決意するほど、人としての何かが壊滅していた。

「炭治郎、ありがとう・・・絶対にあんたを禰豆子の元に帰す！」

「自分でやるのでご心配なく！長男ですから！」

「なら、勝手に守る！」

刀と拳を構える2人。

無惨も手を触手にして2人に向ける。

「そうはいかない。化け物は早く殺すに限る」

「やってみなさいこの頭無惨な生き恥クソゴミの最低変態自意識過剰男！もうアンタなんか怖くない！絶対にアンタにもうこれ以上、奪わせはしない！」

「貴様、何様のつもりだ？」

「私は氷川零余子……仮面ライダーだ！」

突っ込む2人。

迎撃しようとする無惨。

1000年を超える戦いが終わりに近づいていた。

大正の時代。

現れた3人の仮面ライダー。

彼らが向かう先は幸せな結末か？

それとも絶望が支配する破滅か？

運命の結末まで後、3話！

## 鬼舞辻無慘VS戦士達

無惨の攻撃は黒死牟以上と言っても過言ではないほど速かった。

恐ろしく速く、何処からどう飛んでくるのかわからない触手。普通ならすぐにやられる可能性が高く突っ込めないが、炭治郎と零余子は関係なしに突っ込む。

勿論、考え無しではない。

零余子が光を無惨に当てる。

光は無惨にとつて激物でしかなく、少しの光でも黒死牟や禰豆子と違って顔を背ける程に痛がる。鬼の開祖として血が強すぎるのも理由ではあるが、一番の理由はそんな痛みに堪えうるほど精神が鍛えられてないと云う事だ。

「ヒノカミ神楽 円舞」

先程に比べて遅くなり、しかもこつちをまともに見てない状態で振り回してる触手など今までの経験から炭治郎はギリギリで避けて容赦なく、無惨を斬る。

刀鍛冶の里で手に入れた赫刀で斬ったのと、アギトの光によって再生が遅くなってるがそれでも戻る。

「死ね！」

右腕に大量の牙を生やして炭治郎を串刺しにしようとするが、零余子がクロスホーンを広げて炭治郎が貫かれる前に無惨の腕を蹴り飛ばす。

腕を蹴り飛ばされた無惨は零余子の顔面を貫こうと左腕に牙を生やして突く。

「ヒノカミ神楽 炎舞」

だが、炭治郎が腕を切り落とし、防ぐ。

2回も攻撃を止められた無惨の苛立ちは強くなる。

「このタンカス共があー！」

冷静になれない元来より残念な頭の無惨はどんどんと雑な攻撃が更に雑になっていく。零余子が光を出し続けているので遅くもなり、2人でギリギリ何とか出来ていた。

「よし！炭治郎、このまま皆が来るまで持ちこたえるよ！」

「はいー！」

無惨に対して刀と拳を構える2人。

「皆だど？その皆は上弦に殺されてるようだが？」

無惨は自分の頭に流れてきた全員が死んでる映像を話す。

だが、炭治郎も零余子も聞く耳を持たない。

「あんた真正正銘の馬鹿でしょ。あの殺しても死ななそうな人らが死ぬわけない！というか死んでも殺しに来るに決まってる！」

叫ぶ零余子に無慘は冷めた感情を持って見るが、零余子も生きてる根拠は無かった。ただ、無慘の言葉通りに受けるのが癩だったから言い返しただけである。

「さっさと殺そう」

無慘は自身の触手を振り回す。今までで最速で明らかに確実に2人を殺す為に振るい、零余子がどれだけ光を当てても遅くならない触手に2人とも防ごうと動いたり、心臓と頭を守ろうと手や足を使ってどうにかしようとするが、どうにもならず。

炭治郎は背中と胸に大きな切り傷を零余子は左二の腕と右太腿を貫かれる。

地面を転がる2人に触手が飛んでくる。

頭を貫かれそうになったその時、

「水の呼吸 拾壺の型 凧」

義勇が2人の前に現れて弾く。

突然の登場に驚く無慘。

「恋の呼吸 壺の型 初恋のわななき」

「蛇の呼吸 壺の型 移蛇斬り」

「音の呼吸 壺の型 轟」

「蟲の呼吸 蜂牙の舞 真靡き」

蜜璃、小芭内、天元、しのぶの4人が無慘の死角から斬りかかる。無慘は死んだと思っ

てた柱が生きてるのに混乱してなすがまま斬られるが斬られた側から瞬時に回復して何事も無かつたかのように平然と斬ってきた4人を見ていた。

「嘘!?!手応えはあつたのに!?!」

「違うこつちが気付かないほどの速さで回復してる!」

「爆薬も効かねえのか!?!」

「(なら、この毒なら・・・)」

それぞれ無惨の回復力に驚くも瞬時にまた対策する。

蜜璃は痣を発現させ、更に速度を上げる。

小芭内も口元が隠れてる為に傍から見ると分からないが痣を出して速度を上げる。

天元は今度は炸裂型の爆弾に変えて、少しでも無惨の断面を増やそうと刀を細かく扱う。

しのぶは鉄珍特製の鞘を使い、毒の種類を変えて1突ではなく連撃のやり方に変える。

義勇は痣を発現させて、更に上がった速度で斬りかかる。

「何をしている鳴女!?!」

そんな状況であるが、無惨は5人とやりあっていた鳴女に怒鳴り、なぜこうなったのかと鳴女の状況を見ると、愈史郎によって鳴女は操られており、近くには珠世もいた。



「珠世!!!」

実は鳴女の隙きを上手くついで愈史郎が鳴女を操り、5人を隠しながら移動させたのだ。

「愈史郎、頑張ってください!」

「はい、珠世様!」

珠世の言葉に愈史郎は更に気合を込める。

だが、無残が愈史郎を取り込もうと自分の細胞を愈史郎に侵食させ始める。

「愈史郎、気をしっかり!」

大好きな珠世の言葉で愈史郎は更に力を込めて気合を入れるが無惨の細胞はどんどん侵食してくる。不味いことに無惨の思考まで愈史郎に入ってくる。普通、ここまで来た場合、まともな考えを持つ者ならば嫌でも愈史郎を何とかしようとおの手この手で巧みに操ろうとするが、無惨の場合は、

「(死ぬ珠世。この醜女の年増のアバズレが!このカスが終わったら貴様の番だ!)」

珠世を罵倒し、蔑み、殺そうとしていた。

ここで甘言でも出して愈史郎の気を少しでも弛めていけば無惨の思い通りになっていたのだが、よりによって珠世大好きな愈史郎に思考を読まれた上での珠世の罵倒。

## 《プツン》

「珠世様が醜女だど!?!このゴミクズが!!!」

結果は言わず我もなで愈史郎の気合と決意と怒りが最大に増した。そして無惨の細胞の侵食を自力で止めた。

「貴様を此処から引きずり出してやる!」

鳴女を操り、無惨だけでなく他の面々も全員出そうとするがそれを阻止しようと無惨が鳴女を自身の血の力で遠隔的に殺す。

そのせいで無限城が崩落した。



零余子が無限城から強制的に出されて最初に見たのは深夜の町中で体から触手を大量に出して暴れる無慘とそれに挑む皆だった。

炭治郎、義勇、しのぶ、天元、蜜璃、小芭内の5人が無慘に挑んで斬りまくっていたが無慘には全く効いてなかった。

「朝まで後、1時間半だ！踏ん張るぞー！」

天元の言葉が響き渡り、全員気力が出るが無慘はそんなのお構いなしに触手を振り回していた。

「死ね、ゴミどもがア」

そしてその内の1本の触手が炭治郎に迫る。

妓夫太郎との激戦とさっきまでの無慘との戦いで疲労と無慘の元来の速さにより避ける事が出来ない。

零余子は炭治郎の前に立って触手から守った。

だが、飛び散ったのは火花ではなく零余子の鮮血が飛び散った。

「零余子さん！」

肩から脇腹にかけて大きくて深い傷を負う零余子。変身が解けて倒れてしまう。

無惨は自分が斬られまくろうが爆発塗れになろうがお構いなしに零余子の頭を潰そうと触手を放つ。

「炎の呼吸 伍の型 炎虎」

頭が潰される直前に杏寿郎がその触手を折れてる短い刀で斬り捨てる。

だが、無惨はもう一度触手を振るうが今度は轆轤に斬り捨てられる。

「おのれ！」

構える無惨だが、そんな無惨の顔面目掛けてカリバーと鉄球が飛んでいき、顔面を破壊する。

すぐに再生されるがそんな無惨を飛び出て後ろから真つ二つに斬る実弥。

無惨は実弥を殺そうとするがその前に玄弥が銃で無惨の胸を打ち、その隙きに実弥が油を天元が持つてる火薬を無惨に投げて爆発させて燃やす。

「雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃 神速」

傷から多少の回復をした善逸が外に出ると同時に無惨の腕を斬るもすぐに回復される。

「獣の呼吸 陸の牙 乱杭咬み！」

「花の呼吸 壺の型 花車」

「霞の呼吸 肆の型 移流斬り」

「蟲の呼吸 蝶の舞 戯れ」

「炎の呼吸 玖の型 煉獄」

「岩の呼吸 壺の型 蛇紋岩・双極」

「風の呼吸 捌の型 初烈風斬り」

「音の呼吸 壺の型 轟」

「恋の呼吸 壺の型 初恋のわななき」

「蛇の呼吸 弍の型 狭頭の毒牙」

「水の呼吸 壺の型 水面斬り」

「ヒノカミ神楽 円舞」

無限城を生き残った全員の斬撃が無惨に向かう。

杏寿郎は短くなった刀ではなく、明悟が投げたカリバーを借りてやっってるが無惨は回転し長い触手で全員を吹き飛ばす。

全員、町の建物の壁に激突し決して浅くはない負傷を負うがそれだけでは終わらない。

回転を終えて息が上がってる無惨に対して明悟と轆轤がダブルライダーキックを放

つ。

無惨に対して劇物でしかない光が迫ってきて無惨は咄嗟に自分の全触手で迎撃しようとし、触手とキックがぶつかり合う。

そして吹き飛ばされたのは明悟と轆轤だった。

ゴロゴロと転がり、変身すら解除された2人は同じように解除されて倒れてる零余子の元まで飛ばされる。

「(ハアハア・・・やつと死んだか・・・疲れ・・・私が疲れてるだど!?これは一体どう言うことだ!?まさか、さっき入れられたの珠世の毒が・・・己、あの逃げ恥を晒してる逆恨みの権化の逃げ続けてる臆病者めが殺してやる・・・だがその前にあの化け物どもだ・・・)」

全て自分に返ってきてる言葉しか言わない無惨だが、まだ人並みの最低限の判断能力はあったのか明悟達を殺そうと歩み寄るが疲れてて上手く進めてない。

「この無惨が疲れてるだと、吐き気もする・・・胸糞悪い・・・お前達はどれだけ私の幸せを奪おうとする?私は生きたいだけの善良で正しいただの命なのに人殺しに執着してるお前ら化け物共に奪われてたまるか・・・私は完全生物になる選ばれた者なのだぞ!?お前らみたいな異常者にこの素晴らしく美しく気高い事を閉ざされてたまるか!やれ、家族が死んだとか友が死んだとか師匠が死んだとかどいつもこいつも死んだら死んだ

奴が悪いのだ。病で死にかけてたら病で死にかけて奴が悪いのと同じように体が弱かったら体が弱い奴が悪いのと同じようにな……」

何処までも自分勝手に叫ぶ無慘。

吹き飛ばされた全員がもう怒り狂うを通り越して冷たくなっていく。轆轤も零余子もそうだ。

もう手遅れと感じてる。

実際にもう無慘は手遅れだ。

人の痛みが分からない。どんだけ人が説得しても納得しない。自分だけしか愛してない。人の愛を理解できないし、理解しようとしてもしてない。そして無慘は不死身だ。長く生きすぎてる故に命の儚さに何も思わない。人は長ければ長いほど悟りを開いていく。生に執着してないのではなく、どんな人生でも終わりがあると理解していくからだ。しかし無慘にはそれが出来てない。その一瞬の刹那の瞬間瞬間の必死で生きていく者すら化け物に見えていく。

人の繋がりを理解できない。

自分しか愛していない上に夢もない。夢があれば嫌でも人と？がらなくてはいけなくなる。どれだけ傷つき、傷つけてもその為の為に全力を出すから後悔もするし、苦しんでも繋がらないと成功できない。

だが無惨にはない。生きたい欲しくない。だから繋がれない。誰とも繋がれないし、その感覚も見て不気味に見えてる。

そして努力を知らない。最初から強いし、努力せずに力を手に入れた無惨にはそれがない。青い彼岸花を手に入れようと実験や研究を重ねてるのに本当の意味で努力を知らない。努力とは足掻きだ。今の現状を変えようと頭を悩まし失敗を恐れない事、そして前に進むとうとする事だ。

努力をした事がある者は努力してる者に自分を重ねる。なぜならその否定は自分の否定でしかないからだ。そしてそれは外で足を使つて情報を集めていようが薬で研究を重ねていようが違いはない。なのに無惨は外で情報を集めてる為に足を使つてる事を認めない。

無惨はそれで自分の努力すら否定してる事に気づいていない。自分を愛してるのに自分すら否定している。

だから、その矛盾からくるストレスで他人を蹴落とすし、それに対して何も罪悪感もない。無惨にとってそれはただの自己不満の吐き出しでしかないから。

決して成長出来ないし、変わる事もできない怪物だ。

「私は何も間違つてない。間違えない。全て正しいのだ」

「そんな人間いるわけねえだろ」



無惨の言葉を止めるように明悟は立ち上がる。片腕で何回も立ち上がれないが自分の力でキツチリ立ち上がる。零余子や轆轤も立ち上がる。

「貴様ら、何で立ち上がる？」

「お前を倒すためだ」

「化け物共が、鬼は人から出来た・・・お前達は結局人殺しに取り憑かれた化け物だ」

「そうかもな・・・でもお前も負けず劣らずの化け物だ。それに皆が皆、これを望んだと本気で思ってるのか!?皆、傷付いて苦しみながらも懸命に生きてんだ・・・これ以上、お前には奪わせない」

「そんなに殺しがしたいか!?!」

「違う！俺は本当に・・・皆を守りたい」

「お前を倒す」

「私の為なんかじゃない。友達のために！」

明悟はベルトを出現させる。轆轤や零余子も出現させて3人揃って構える。

「「変身！」」

変身する3人。

それぞれ、サンシャイン、ミラーージュ、グラントと自分が今できるフルパワーで向かい合い、明悟はカリバーをシングルモードにして構える。

「何処までも忌々しい奴らが・・・」

そんな変身した3人に負けずに他の吹き飛ばされた皆も立ち上がる。

握力すらも奪われるほどに疲れたなら服を破って刀と手を縛りつけて構える。

「守りたいか・・・津上、それは私達も同じだ」

「行冥さん・・・」

「もはや、この命、惜しくない！」

行冥の腕に岩の罅のような痣が生まれる。

それだけでなく、それを見ていた杏寿郎の首元にも炎のような痣が生まれ、落ちていた死んだ鬼殺隊の刀を拾う。

無惨にはなぜ皆が立ち上がるのか本当に理解出来なかった。

「貴様ら・・・」

忌々しかった、それほど無惨にとって彼らはしつこかった。

「無惨、これが人間なんだ」

「何だと？」

「どれだけ苦痛の中に居てもどれだけ後悔の渦に飲まれても立ち上がる事が出来る・・・」

俺はそんな人間が $\boxtimes$ 大好き $\boxtimes$ だ！」

「そうか・・・なら、もう良い。皆殺しにして今度は人間全て下僕にしてやる。気が済む

まで食つてやる。2度とこんな異常者が出来ないように徹底的にな」  
その言葉で遂に無惨に対して叫び、反論していた明悟も黙つた。

静かになつた。

最初に動いたのは零余子で光を無惨に当てて目を晦まし、そこにまず伊之助と無一郎、実弥が先陣を切る。すぐに来る前に迎撃していくが炭治郎、義勇、しのぶ、カナヲ、小芭内が無惨を囲み突つ込む。また先程と同じように回転して全員飛ばそうとするがなんと全員わざと受けて触手を捉える。本来ならばそんな事をした場合、絶対に死ぬ。無惨の血にやられるかそれとも無惨の持つてる力に真つ二つにやられるかであるが零余子だけじゃなく明悟や轆轤も光を当てて無惨を弱体化させてる上にそもそも無惨自体薬で変化が起こつており、今までよりも弱くなつてる。

抑えられた無惨だが、体から新たに触手を生やして受け止めてる全員を殺そうとするが、全ての触手を蜜璃と杏寿郎と善逸によつて斬られ、玄弥に両膝を撃たれて膝を着くと天元、行冥が突つ込み、特大の刀と斧で首を斬るが落とすどころか瞬時に回復され、行

冥は自分の武器の鎖で無惨をぐるぐる巻きにし、天元、明悟、轆轤の4人で鎖を引つ張る。

「玄弥！無惨を撃ち続けろ！」

行冥が玄弥にそう言うのと玄弥は反応する余裕もないのか、自分の武器の散弾銃に弾を込めて無惨を撃ち続ける。無惨は膝から触手を伸ばして地面を潜らせて玄弥を後ろから刺そうとするが実弥、無一郎、伊之助の3人に防がれる。

そしてがら空きの無惨目掛けて零余子がクロスホーンを開き、足に光を溜めて飛び蹴りを放つ。だが、無惨は顔面を巨大な口に変化させて零余子の突き出してる足に咬み付く。大量の牙が太ももからふくらはぎまで万遍なく食い込み、無惨の体にアギトの血が流れ込む。

無惨は猛毒であるアギトの血を飲んだ事で暴れる。

零余子を吐き出し、拘束していた全員を吹き飛ばす程に暴れる。

暫く暴れまくった無惨は~~変身~~した。

それはアギトの姿に似ていた。

だが、凶悪とも云える口に鋭い爪、更に云うと全身が黒かった。

「嘘だろ……」

明悟の口から驚愕とうんざりが混ざった言葉が出てくる。



全員の顔が歪む。

無惨の唯一の天敵であった太陽が効かなくなったからだ。大量に血を与えてしまった零余子は失血死寸前になりながらもこの作ってしまった状況に歯を噛み締め、口から血が滲んでいた。

「クソがあー!」

「だったら、細切れにしてやらあ!」

実弥と伊之助が斬り掛かるが無惨からはその姿が鈍く見えた。そして難なくと避けて2人を吹き飛ばす。

「・・・フッフ、もはや青い彼岸花も禰豆子もお前達もどうでも良いが・・・お前達は赦さん。この無惨の長年の夢を否定し続け、壁となり続けたお前達を殺して、その血をこの完全生物となった私の礎にさせて貰うぞ!」

普段の無惨ならこう言わない。  
すぐに逃げる。

そして永遠に人から逃げ続けるが、想像以上のアギトの力と進化により、無惨の歪んだ精神が徐々に変化していくのに無惨は気づいていない。

そう人を殺し続け、蔑み続けた無惨は遂に自分の精神まで殺していき、自分すらも見失ったのだ。

「はハ齒はハ齒はハ齒はハ齒はハ!!コレが完前セイぶつの素型か!?オモシロイぞ！」

言葉がドンドン狂って言ってるのにすら無慘は気づいて居なかった。

他の皆も立ち上がるがこんな事になり、流石の全員も心が折れてくるがそんな中でも杏寿郎と炭治郎は果敢に前に進む。それに惹きつけられるように他の皆も進み。零余子も足の傷を綴じて、明悟も切り飛ばされた片腕を生やす。

明悟も零余子も命を削っていく。

全員でまた果敢に攻めていくが無慘には全て避けられ、吹き飛ばされる。常人ならもう既に全員が死ぬ程に皆、ボロボロになっていく。

町中の為、隠が全力で人が来ないようにしているが野次馬が大量に出て来て隠せなくなってきた。

「どうだ!?貴様らの刀など所詮、私には当たる事さえも出来ない!」

余裕な無慘。だが余裕をこき過ぎたせいで隙きを伺っていた炭治郎の刀が遂に無慘の顔面間近に迫る。

「ヒノカミ神楽 炎舞」

ヒノカミ神楽を放つ炭治郎だが、無慘は難なくと腕でそれを防ぐ。

しかし、ここで無慘にとっても予想外な事が起こる。

腕で防いだのだが徐々に装甲に罅が入る。

骨に罅が入ったかのように無惨に痛みが襲ってきて、炭治郎を吹き飛ばし、腕を抑え、回復しようとするが出来なかつた。

「コレは?」

そう無惨は太陽の光すらも克服したがそれと引き換えに不死身すらも捨ててしまった。アギトに限りなく近づいた結果、鬼としての不死身もアギトの超回復すらも出来ない中途半端なアギトになつたのだ。

そしてそれは無惨に弱点が出来た事であり、全員に勝機が出来た。

「なぜ、回復しない!」

自分の変化に無惨さえも混乱する。

そしてまた皆が果敢に攻めていく。先程までのヤケクソとは違い、勝機をキチンと全員が感じて攻めていく。

無惨の体に徐々に傷が刻まれてくるが全員を吹き飛ばし続ける無惨。

「これで終わりだ!!」

背後に回つた轆轤が腕の刃で斬り殺そうとするが無惨はそれを避けて自分の腕で轆轤の胴体を貫き、吹き飛ばす。

「轆轤!」の!」



零余子が蹴りに行くが受け止められ、無惨の拳が零余子のベルトを破壊し、変身を解除された零余子を吹き飛ばす。変身しななければただの人間である零余子は建物の壁にめり込み気絶した。

行冥らを始めとする鬼殺隊の面々すらも吹き飛ばし、遂に無惨とカリバーを両腕に持つてる明悟だけになった。

「はあハア」

「はあはあ」

息切れしてポロポロな2人。

明悟は無惨に向かってカリバーを振るうが無惨は避けてカリバーを拳で吹き飛ばし、明悟を蹴り飛ばす。

「遂に私は勝った……私の勝ちだア!!!」

吹き飛ばされて倒れたままの明悟を殺そうと駆ける無惨。そして無惨の腕が明悟の頭目掛けて振りかぶられたその時、銃声が鳴り響き、無惨の腕を弾いた!

「銃弾だ?!」

無惨は咄嗟に玄弥を見るが玄弥は倒れたままで動いていなかった。そしてまた銃声が鳴り、今度は無惨の胴体に当たる。決して深くは無いが激痛が無惨を襲う。

「誰だあ?!」

無惨は銃弾が放たれた方を見た。

そこには散弾銃を構え、狙撃銃を背中に背負い、腰にM1901を2丁携えてる耀哉がいた。

「耀哉！」

「産屋敷!!」

明悟が耀哉の登場に驚き、無惨が叫ぶ。

耀哉は自分が構えてる散弾銃のオート5で無惨を撃つ。

頼付しているその顔には無惨の呪いの後など無かった。

撃った散弾が無惨に命中し後ずさり、明悟から少し離れる。

耀哉は持つていた爆薬を無惨に投げて吹き飛ばす。

「がアアア!!」

倒れて痛みに叫ぶ無惨。

耀哉は弾を装填しながら明悟の前に立ち、無惨にオート5を向ける。

「私の兄弟に手を出すな、化け物」

「耀哉・・・お前・・・」

「明悟、一緒に戦おう」

「・・・たくしようがねえな・・・やるか一緒に！」

「ああ!!」

カリバーを拾い、耀哉の前で銃線を遮らないように屈む明悟。

「貴様らあ！殺してやる！」

無惨が2人に向かって叫ぶ。

そんな無惨に2人は負ける気などしなかった。

勝機が特段に上がったわけではないし、絶対に勝てるなんて保証は何処にも無かったが気のしれた兄弟が側において安心でき、2人は笑った。

「やってみる、化け物!!」

こうして最後の攻防が幕を開けた。

## 仮面ライダー 死闘の代償

最初に動いたのは無惨だった。

走ってくる無惨の姿は獣同然でもう理性なんて感じさせなかった。叫びながら来て、拳を明悟に振るうが明悟はそれを受け止める。そして止まった無惨の顔面に耀哉が散弾銃を放つ。

アギトに変身したせいで致命傷にはなっていないが強烈な衝撃に後退する無惨。

明悟は、両手のカリバーで無惨の無防備な体を斬る。火花が飛び散り、着実に死に向かつていく無惨。

「アアアアアアアア!!」

もはや、人語すらも捨てて明悟を殴り飛ばす。

「明悟ー!」

耀哉が無惨を散弾銃で撃ちまくる。理性すらも失った無惨は銃では死なないのを理解したのか突っ込んでくるがその分、耀哉にとつては当てやすく当て続けるがそうすると弾が無くなる。無惨は耀哉に向かって再度突っ込むが背中の中の狙撃銃ウインチェスターM1892で撃つ。レバーアクションの独特の機構により、散弾銃よりは装填と撃

つ間隔が長いがそれでも無惨に当たるし、後退していく。

明悟はそんな耀哉を見ながら自分も戦いに戻ろうとするが立てなかった。それどころかドンドンと眠気が強くなっていくのを感じていた。無限城に入ってからとの激戦に加えて何回も体力を消費しながらやった超回復の2つの要因によって明悟の命はもう殆ど残っていないかった。本来ならば既に死んでる程の疲労の上に先程からの無惨にやられた攻撃で生きてるのも不思議な程だった。

そんな明悟を守ろうと耀哉は明悟の前に行つて無惨に弾丸を撃ちまくるが致命傷になつてないので徐々に耀哉に近づいていく。獣同然となつた無惨の拳を耀哉はギリギリで避けるが次に脇腹を殴られて肋骨を折られてしまう。そして凶悪な口で無惨が喉元目掛けて噛みつきに来るがそれを杏寿郎が無惨の顔面に刀を振るつてそれを止める。

「杏寿郎!」

「よもやよもや、お館様まで来るとは……先程までの体たらくぶりを見られていたとは……穴があつたら入りたい!」

何時もと同じように快活に話す杏寿郎。耀哉としては別にそんな事を微塵も感じていないがこれは杏寿郎のただの癖である。

顔面に刀がめり込んでもなお進んでくる無惨に杏寿郎は押されるが行冥と天元が後

ろから飛びかかり、杏寿郎から離す。

「いい加減、派手にくたばれ！」

「宇髓、絶対に離すな！」

豪腕2人の力によつて少し離れる無惨に杏寿郎は容赦なく斬つていくが火花が散るだけで全然効いてなかつた。杏寿郎を蹴り飛ばし、行冥と天元をどうにかしようともがくが元々、常人以上の筋肉に続いて呼吸でさらに力が強くなつた2人はそう簡単に振りほどけなかつたが全力で回転し、遠心力を持つて2人を吹き飛ばす。

無惨は精神的支柱の役割を担つている耀哉を殺そうと向かうが実弥と玄弥が前に入つて止める。

斬り掛かる2人の刀を受け止めて破壊して吹き飛ばすが今度は蜜璃に背中を斬られ、蜜璃の方を向くとしのぶが一瞬、無防備になつた無惨の顔面を貫こうと突つ込んでくるが無惨は寸前の所で受け止めて刀をへし折り、吹き飛ばそうと殴るがしのぶは頭を下げてその拳を避けて無惨の顔面に両足飛び蹴りを嘯まし、後退させる。

無惨は立て直そうとするが畳み掛けるように今度は蜜璃が無惨の体に両足飛び蹴りを嘯まして完全に吹き飛ばす。壁にめり込む程強く打ち付けられた無惨に伊之助、善逸、炭治郎の3人が追い打ちを掛けるが無惨は何とか止めて3人の肋骨を砕きながら吹き飛ばすが間髪入れずに無一郎が斬り掛かり、そして義勇と小芭内、カナヲも斬りかか

り、諸に斬撃を浴びた無惨は吹き飛びゴロゴロと転がる。

そんな無惨に耀哉は容赦なく銃弾を当てていくが火花が散るだけだった。

無惨は起き上がり、向かってくる全員に手から衝撃波を放って吹き飛ばす。

無惨は吹き飛んだ耀哉を殺そうと走り、手で頭を貫こうとするがそれを立ち上がった明悟が止める。

「アアギイトオ!!!」

ギリギリ何を言ってるのかわかる程度の言葉しか話せなくなった無惨に明悟は手光を込めて殴るが受け止められて殴り返される。耀哉は腰に差してた2丁のM1901を至近距離で撃って無惨に当てまくる。耀哉を殺そうと無惨が狙いを定めると明悟が腹に膝蹴りを喰らわして下がらせる。すかさずにマガジンを替えて弾をまだ撃つ耀哉。そしてカリバーで無惨を斬りまくる明悟。無惨はフラフラになりながら吹き飛ばされるがしつこく立ち上がる。

そんな無惨に対して行冥は鉄球をぶつけるが火花が飛び散るだけで死なないので鎖を巻きつけて引つ張る。行冥と天元を軸に、柱や炭治郎、善逸、伊之助、玄弥、カナヲ、耀哉の6名も鎖を引つ張る。

無惨は暴れまくり、何と足から衝撃波を放とうとするがボロボロな零余子が足に体に風穴が空いてる轆轤が体に抱き着き、止める。

「今だ明悟！」

「やれ！」

耀哉と行冥の2人の声に明悟が構える。

明悟と無惨の間に20のアギトの紋章が現れる。

それは明悟も含めたここにいる者達全員と明悟が最も愛した人カナエと明悟が明悟になる前、まだ哲哉だった自分が死に追い込んでしまった親友明悟の分も含めた数だった。

明悟はその紋章を全て潜り抜ける。

単純な跳躍と跳び蹴りはアギトの紋章を1つ1つ潜り抜ける度に変化していく。全て潜り抜けると明悟の蹴りは光そのものだった。

そして蹴りが無惨にぶつかる。

大量の火花を散らし、そのぶつかった時の衝撃波で無惨を抑えていた全員が吹き飛びそうになり、1番近くで無惨を抑えていた零余子と轆轤の2人は力尽きて吹き飛んでしまう。

「芦原！」

「零余子ちゃん！」

轆轤に杏寿郎が零余子に善逸が手を延ばして2人が飛んで行かないようにしようと



するが2人は飛んでいってしまふ。

「何故だ!?! 私は完全生物なのに! 生きたかったただけなのに何でこんな怪物と異常者に!!!」

理性すら失つてもまだ負けを認めない無惨に明悟は何も言わない。蹴りに更に力を込める。

「うおおおおお!!!」

蹴られてる無惨の頭に流れていたのは明悟が哲哉から明悟になった日の夜、無惨が踏みつけた津上明悟とかかれたお守りとそして因果岩に刻まれた自分の死の運命だった。

「お前か・・・お前があの時の!!」

無惨がそれに気づいたが時は既に遅かった。

明悟の放った最後の~~キック~~ライダーキック~~は~~無惨を抑えていた鎖を粉々に粉碎する程の力で無惨を吹き飛ばし、明悟はそのまま着地して立ち上がり飛ばされた無惨を見た。地面に頭からぶつかり、地面を抉り、何回もゴロゴロと回転して地面を抉り取りながら止まった。

そんな無惨を見て、もう全員が疲労で動けなかった。

だが、無惨は立ち上がる。

まだアギトの力で進化しようとしていた。

だが、明悟が放ったライダーキックに込められた光に対応出来ない。

光が首からそして腕から、鬼殺隊や耀哉が致命傷に出来なくてもあたえつづけた事による罅を起点に漏れ出て火花と共に噴出してくる。

それはアギトの力と無惨自身の血に遂に無惨の体が限界を迎えたと云う証拠だった。「なぜだあ!?!私はただ生きたかっただけなのに!?!」

最後の最後まで決して自らを反省しなかった無惨はそう叫びながら倒れ、アギトの力による暴走により爆発した。

「お前の生きるには無いだろ．．．~~命~~も~~人~~も」

明悟は爆発した無惨を見ながら、そう呟いた。

長きに渡る無惨の討伐という使命が漸く終わった。

「明悟、終わったね」

漸く悲願が達成された耀哉は後ろから近づき明悟の肩を叩いた。これから一緒に生きれる嬉しさから来るものだったが、明悟はそれを受けた瞬間、倒れた。

「明悟．．．明悟!?!」



吹き飛ばされた零余子は眠りそうだった。

無惨を殺す為に体力を消耗する超回復を使って命を削っていた上にベルトを破壊されての吹き飛ばしによる痛手でまだ致命傷は避けていたが最後に無惨を抑えた後の衝撃波による吹き飛ばしにより、無惨が暴れた時に出来た尖った瓦礫が腹に刺さり、それが致命傷になっていた。

失血が止まらない。

「(彌豆子は戻ったのかな?・・・彌豆子に会いたい・・・)」

零余子が頭で考えていたのは彌豆子の事だった。

鬼から人に戻った零余子にとって彌豆子はそんな事を気にしない大切な友人だった。大切だから零余子はアギトになり、仮面ライダーに成れた。彌豆子にとっての仮面ライダーが零余子の願いだった。

「零余子ちゃん!」

突然、聴こえてくる声に零余子は何とか顔を向けるとそこには彌豆子がいた。そして人間に戻っていた。

「彌豆子……良かった……人に戻ったんだ」

「良くないよ。何にも良くないよ……零余子ちゃん、死なないで！」

零余子の腹からの失血をどうかしようと思え始める彌豆子だが止まらない。

「彌豆子……」

「私、覚えてるよ零余子ちゃんと遊んだ日々を……」

だから死なないで、もう一度一緒に遊ぼう」

彌豆子の言葉に零余子の目から涙が溢れてくる。出来る事ならば生きてもう一度彌豆子と遊びたいし、本気で恋もしてみたい。だが零余子には理解できた。自分が絶対に生き残れないほどの傷を負ってるのに生きる資格が無い事を……

零余子は彌豆子を抱きしめる。

「彌豆子、もう良いよ……私ね……今、生きてて一番幸せだよ。出来る事ならもつと生きたいよ……死にたくない……でも私は彌豆子と違って人を食べた……絶対に生きてはいけないの……ごめんね哀しい想いさせちゃってごめんねごめんね」

「なら生きてよ……生きてよ！」

泣きながら話す零余子と泣きながら叫ぶ彌豆子。

徐々に零余子の抱きしめる力が弱くなってるのに彌豆子は気づいた。

そんな2人の元に炭治郎、善逸、伊之助がやってくる。

「彌豆子ちゃん、零余子ちゃん」

この何も言えなくなるほどの状況の中、善逸が2人に声を掛けると零余子は善逸に笑顔を向けた。

「善逸だあ……ねえ、私……善逸に言いたかった事があるの……出来れば手も握ってくれない？」

零余子の消えかけの声に善逸は素早く動いて手を握った。力が弱く、心臓の音が弱くなってきた死ぬ事を避けられない事に善逸は涙を流す。

「私……善逸に助けられた時、ずっと嬉しかった。あの時、守ってくれなかったら死んでたから、ありがとう守ってくれて……本当にありがとうございます！」

それは純粋な感謝の言葉だった。

今まで善逸はずっと眠りながら戦っていた事により覚えていない。感謝されても自分の生来の悲観思考により信じてなかったし、世辞だと思ってた。だが死にかけの零余子の言葉は感謝だけしかなく流石の善逸も真実だと実感した。そう零余子は善逸が鬼殺隊として助けた人の中で初めて善逸の心に感謝が届いた人だった。その事実には善逸は本気で泣き始めた。自分に感謝の言葉を言ってくれてそしてそんな人を死なせてしまう自分の無力さに涙が止まらなかった。

零余子は泣いてる彌豆子と善逸を最後の力を振り絞って抱きしめる。

「2人共、ありがとう・・・私を人間にしてくれてありがとう!!」

零余子の言葉に禰豆子と善逸は力一杯抱きしめた。

暖かくて優しい感覚だけが零余子を包み込み、笑顔にした。

「人って・・・暖か・・・いい・・・」

最後の言葉も上手く言えず、零余子は息絶えた。

禰豆子も善逸も叫びながら零余子を抱きしめ続けた。

後年の産屋敷家の歴史にはこう書かれてる。

民間協力者 氷川零余子

1918年 1月28日 午前11時30分 死亡。

遺灰は彼女の友である竈門禰豆子が引き取った。



轆轤は無惨が死んだのを見て漸く終わった事に安心し、近くの建物に背を預けながら座り込む。そして死ぬる事に嬉しさすら出ていた。体に穴が空き、寧ろ最後によく動いていたと感心するくらいだった。恐らくアギトの力の賜物だろう。

変身も解けて轆轤もまた永遠に眠りそうだったが、

「芦原、無事か!!?」

非常に煩い杏寿郎の声で眠れない。

やつてくる杏寿郎を睨む轆轤。

杏寿郎は轆轤の姿を見ると息を飲んだがそれだけだった。人の死を見続けている杏寿郎はもう助からないと確信めいた直感があった。

「芦原……もう無理そうだな……」

「ああ、無理だ……最後にわがまま言つて良いか?」

血を吐いてそれが固まり、非常に聞き取りにくい杏寿郎は一言一句聞き逃さないようにしていた。

「何だ?」

「俺の首を斬つてくれ」

「な!?!」

あまりの言葉に目を開く杏寿郎。それどころか少し後ろに下がる程にその言葉は狂

氣的に感じた。

「なぜ、斬るのだ？ お前は人だろ？」

「違う。化け物だ。それに人を殺した。血塗れのクズだ。例え、罪を償えたとしてもそれは俺の気休めだ。食った奴やその家族が求めているのは償いなんかじゃない。罰だ、死んで地獄に行くことだ。俺だけじゃない。零余子もそうだ。俺や零余子はもうじきに死ぬ。でも本当に怨みが強い奴が求めるのは無残な死体だ。女の零余子にそれはさせたくねえ。だから炎柱、頼む。俺の首だけで勘弁してくれ。どんだけ晒されても構わねえから、頼む！」

頭を下げる事も出来ない轆轤はそう言った。杏寿郎は反論しなかった鬼殺隊にそんな奴は一人もいないと言いたかったが言えなかった。それほど自分達の鬼殺隊と怨みの感情は切つても剥がせない程に強いから……そして轆轤の首を斬り落としたとしてもそれが無いとは言えない。無意味で終わる事を告げようとした時、杏寿郎は轆轤の目を見ると何も言えなくなった。

轆轤の眼力の強さに圧倒されたのだ。

悩んだ杏寿郎は轆轤に告げる。

「わかった……だが、どうして俺なんだ？」

「お前が人間で最初に俺達を信じたからだ……だから、斬られるならお前がいい」



「わかった……」

杏寿郎は刀を持って轆轤の横に来て手を伸ばした。

「煉獄？」

「さらばだ。轆轤」

轆轤はその言葉に笑い、自分も手を伸ばして杏寿郎の手を握った。建物に背中を預けていたが最後の気力を振り絞って杏寿郎が斬りやすいようにする。

「全く、よもや介錯を頼まれるとはな……夢に出て来そうだ」

「実際に化けて出て来たらどうする？」

「こんな事を頼み化けた罰だ。拳でその性根を叩き直してやる」

「怖いな、杏寿郎」

「俺も怖いさ」

杏寿郎はそう言って轆轤の首を斬り飛ばした。苦しまないように一発で斬り飛ばした。生首が飛び、ゴロゴロと転がっていくのを見ながら、杏寿郎はその嫌な感触を胸に刻んでいた。

後年の産屋敷家の歴史にはこう書かれてる。

芦原轆轤 元下弦の式。

炎柱 煉獄杏寿郎の手によつて1月28日 午前11時に斬殺。



倒れた明悟に耀哉が駆け寄る。

抱き起こそうとするが明悟は立ち上がれなかつた。

「明悟……明悟!!誰か……明悟を!しのぶ!!」

普段から想像もつかないほどの大声と慌て方でしのぶも反応が遅れたが明悟を診ようとするが明悟がそれを止める。他の柱も皆、2人を見る。

「止めてしのぶちゃん。もう分かつてるんだ」

明悟の言葉にしのぶは手を引いた。無理だと悟らされたからだ。だが耀哉は叫んだ。

「止めるな!しのぶ、明悟を助ける!……頼むよ、しのぶ……私の大事な兄弟なんだ……頼むよ!……やつてくれ!……やれ!!」

荒々しくなつてくる耀哉。そこには鬼殺隊のお館様ではなく産屋敷耀哉としての本

来の姿があった。

「良いんだ、耀哉。もう良いんだ」

「ふざけるな！」

「もう無理なんだ。それに思うんだ。俺も無惨と一緒になんだ。近い力を使う化け物なんだ。だから一緒に消える方が良いんだ」

「違う、君は人間だ！誰よりも人間だ！」

「違う・・・人間ってのは耀哉や皆の事だ。皆、俺みたいな化け物に成らずに無惨を追い詰めてた凄いよ本当に・・・耀哉・・・俺・・・お前に会えて嬉しかったよ・・・」

「私もだよ・・・呪いが無かつたらもつと一緒に・・・」

「旅とかしたかったな・・・何にも無かつた俺を助けてくれた・・・俺を人間として扱ってくれた・・・耀哉、俺・・・嬉しくてしようがないよ」

明悟の目からは心の底からの嬉し涙が溢れ出ていた。

「死ぬな・・・頼むから・・・私を置いて行かないでくれ・・・一人にしないでくれ・・・お願いだよ」

「俺は居るよ。これからも耀哉が忘れない限り居るから・・・約束してくれ・・・俺を忘れないでくれ・・・」

「うん・・・」

明悟は耀哉の手を振りほどき、地面を転がる。

「明悟！」

耀哉だけでなく、柱の皆も近づこうとするが明悟は叫ぶ。

「来るなあ！自分の足で立つ！」

誰の手も借りずに明悟は立ち上がり、フラフラになりながらも歩いて、皆の方を向く。「思うんだけど、俺のアギトの力を皆にあげたら、多分だけど痣の寿命を何とか出来ると思っただけど……いる？」

「……要らねえよ、アホ」「……」

明悟の提案に皆が突っ込む。

そんな皆の選択に明悟は笑う。

「だよね……皆……俺、先に行くけど……必死に生きてから来てよ……」

「お前に言われずとも生きるさ」

明悟の言葉に行冥が話す。

その顔は憑き物が落ちたかのように明悟は嬉しくなった。

「流石、行冥さん」

「必死に生きて、来世になるかも知れんがまた会おう。そこでお前のその飄々とした軽薄な性根を直してやる」

行冥の言葉にそれぞれが最後に言い始める。

「俺は酒を飲ませまくってうんざりする程惚気を聞かせてやらあ」

「天元君」

「やりたい事は無いかとお前は前に聞いた。俺も見つけるさ。そして冥土で自慢を永遠に言つてやる」

「小芭内君」

「私だつて必死に生きる。津上さんが聞いてて楽しくなるように！」

「蜜璃ちゃん」

「なら、俺は自分の生き方を最後まで貫くぞ！津上・・・お前のような」

快活な声を出しながら、杏寿郎がやってくる。

「杏寿郎君」

「僕はまだ何をやるか決めてないけど、見つけてみるよ。津上さんが羨ましがらるほどのやつを」

「無一郎君」

「さつさで行け。爺になった時に会いに行つてやら」

「実弥君」

「・・・・・・・・・・さらばだ、津上」

「義勇君」

「義兄さん、姉さんに遅れる事だけ言つといて下さい。ただ今度、会つたら姉さんを義兄さんの手から奪い返すので覚悟だけはしといて下さいね」

「しのぶちゃん……てか皆、容赦ないね」

思ひ思ひに話しまくる面々に明悟は苦笑する。

「……日頃の行いを省みろ」

皆の容赦が全く無い言い方に明悟は笑う。

嬉しくて笑つてゐる。

耀哉だけは納得出来ずに泣いていた。

「明悟さん！」

零余子を善逸が抱き抱えた状態で炭治郎達もやつてくる。

「炭治郎君……ありがとね。あの1月は本当に楽しかったよ。弟と妹が出来たみたいで……」

明悟の言葉に炭治郎達も涙をこぼし始める。

「……耀哉……お前、もう泣くなよ……」

「うるさい！……行くなよ……馬鹿野郎……」

「頑張れよ……お館様……」

明悟はそう耀哉に言うのと、皆に背中を向けて手を伸ばしてもう真上に来た太陽の光を全身で確り浴びていた。

「あく、最高の人生だった!!」

最後に明悟は笑顔でそう叫びながら、立ったまま死んだ。

明悟の最後に耀哉以外は沈黙で答えようとするが耀哉だけは違った。

「何が最高だよ……ふざけるな馬鹿野郎!……勝手に死ぬなアホ!……お前なんか大嫌いだ!……大嫌いだ……人をおちよくるわ!……子供に変な趣味を植え付けるわ!……自慢は長いわ!……妻を酒乱にさせるわ!……怠け癖が強いわ!……お前なんか最低のクズ野郎だ!……勝手に居なくなるわ!……何時もの器の小ささはどこに行った!?……いつもみたいに反論しろ!……反論して喧嘩してくれよ……お前なんか、お前なんか大嫌いだ!!!」

カンカンと照り続ける太陽の下で耀哉の罵倒だけがその場に響いていた。



明悟は花畑を歩いていった。

「幻想的で美しく、花の香りが強すぎて目が眩む程に圧倒された風景の中、明悟は歩いていった。」

そんな時、花畑にある女性がいた。

髪の毛に蝶の羽根飾りを2つ付けた美しい女性。明悟が生涯思い続け、恋焦がれたたった一人の妻 カナエだった。

彼女は明悟を見ると駆け出して、そして顔を思いつきり引つ叩いた。

「何やってるの……お爺さんになって来るって言ったじゃない……」

カナエは目に涙を浮かばせて声を絞り出す。

「ごめん……」

カナエとの約束を守れず、明悟は叩かれた所を抑えながら呟いた。

「ごめんじゃないよ……いつもそうじゃない……勝手な事して……私はそんな所がずっと大嫌いよ！」

カナエは顔を伏せて明悟の胸を叩く。

「大嫌い……大嫌いなんだから……」

「うん……うん……」

明悟は相槌を打ってカナエを抱き締める。彼女はそれでも胸を叩き続けるが次第に



弱くなってくる。

「嫌いよ……嘘つきなんて……絶対に離縁してやる……」

「うん」

「……忘れてやる……」

「うん」

「他の人と消えて、一生悔しい思いをさせてやる」

「うん」

「絶対に嫌われてやる」

「うん」

「だから……帰って生きてよ……一生恨んでも憎んでも良いから、生きてよ！」

涙声で顔がぐちゃぐちゃになり、美人な面影を感じない程に酷い顔になって罵倒し続け、明悟に嫌われて帰らそうとしてる彼女を明悟は抱きしめ続ける。

「カナエは……本当に優しいね……」

明悟も涙声になり、顔がぐちゃぐちゃになりながらもそう呟いた。

「止めて、あなたについていつもそうやって……濁らせるんだから……だから嫌いになれなくなつて……会いたくなつて……」

「うん……俺……会いたかったよ」

「私も・・・会いたかった・・・」

2人はこの花畑でそのまま今の嬉しさに泣いて噛み締めていた。

後の産屋敷家の歴史にはこう書かれてる。

191X年 1月28日 正午

光柱 津上明悟 永眠

年齢？不明

生年月日？不明

生まれた里？不明

家族？不明  
その過去？一切不明

## この愛しき過酷な世界で生きる優しい友へ

無惨を倒してから1年。

激動の日々は終わり、鬼殺隊の面々も新しい自分の人生を歩んでいたが代償は大きかった。

多くの鬼殺隊士が何をやって生きれば良いか迷い、中には生きる意味を見いだせず自殺した者もいたがそんなに苦しみながらも日々を懸命に生きていた。

行冥は先月、痣の代償により息を引き取った。最後に立ち会った女性は幸と言って声を出せないが2人は最後の時まで幸せだった。

天元はその後、3人の嫁達と旅行三昧であり、楽しく生きていた。時々、かつての間も連れて旅行に行ってる。

小芭内と蜜璃は結婚した。互いに長く生きれないのを知ってるので2人して毎日を懸命に生きてる。

無一郎はその後、柚人に戻った。それをやりつつ、最近はやとりとか色んな遊びを出来る限りやってる。

実弥は先日、結婚した玄弥に嬉しさのあまり号泣していた。そして早く結婚相手を見

つけろと煩くなつた玄弥を少し鬱陶しく嬉しさも一緒に感じてる。

しのぶは藤の花を摂取し続けた影響が体に出始めて来て何回も危機的状況になりつつも生きていたが治療と更に良い医学を身につける為に大事な家族に必ず帰ってくる  
と約束してドイツに渡つた。

義勇はふらりと旅を始めた。風の吹くまま気の向くまま、馬に乗つてあちこちを旅して  
る。そしてかつての仲間と手紙をやつてるが皆からお前つてそんな性格だつたのと  
驚かれてる。

杏寿郎は痣の影響による体力の減少によつて警官の試験を落ちてしまい、今は鬼殺隊  
の時の勘と経験と人脈そして偵察の鋭鳥を活かして探偵をしている。先日も事件を解  
決して新聞に載つた。

ひなき達は日々の勉強をしていたが気軽に遊べるようになり、楽しく生きていた。そ  
してあのおままごとは更に悪い意味で凄くなつてる。

炭治郎、禰豆子は実家に戻り行くあての無かつた善逸や伊之助と暮らしてる。先日、  
善逸が禰豆子に告白した。

カナヲとアオイ達はしのぶの後を引き継いで帰つてくるまで蝶屋敷で医者として修  
行中。カナヲが楽しく読んでいたあのおままごとの鑑賞の趣味も更に悪化し、今では自  
分も書き手に回る程だ。

玄弥は力持ちが幸いし大工になり先日結婚したが、結婚相手が何故かひなき達のあのおままごを気に入ってしまい、明悟がやってた役割を玄弥がするようになった。

珠世と愈史郎はその後、人に戻る研究をしながらも医者として生き続けている。

皆がこうして毎日を懸命に生きてる中、明悟の兄弟だった耀哉と言うと、

「さっさと帰れ酔いつぶれ！」

酒を飲みまくり、

「客を追い出すな！」

と言つて酒瓶を居酒屋の壁に当てるなど荒れていた。

あれからというものの耀哉は酒に溺れて自堕落な生活をするようになり、毎日酒を浴びるように飲んでいた。博打もやり、完全に以前の面影は無くなっていた。

それどころかあまねには家を追い出され、かつての柱達には絶縁はまだ迷惑をかけてないのでされていけないがこのままだと時間の問題である。既に何人かの隊士は産屋敷家とはまだ縁を結んでいたが、耀哉本人とは絶縁していた。

それほど酷くなった。

こうして夜の街をフラフラしながら歩き、誰かとぶつかる。

「おい、ちゃんと前見て歩け！」

柄の悪い男にぶつかり、突き飛ばされて泥塗れになり、立ち上がってまた歩いていった。

「けつ、ゴミクズが」

罵声を浴びる耀哉だが気にならなかった。歩いてふと路地を見るとそこには明悟が立っていた。

「違う違う違う違う……明悟は死んだんだ」

耀哉はそれを見て頭を振りまくる。そしてもう一度見るとそこには誰もいなかった。

「もう勘弁してくれ……」

耀哉はそう言いながら逃げる。

全力で逃げて、夜の街で一夜を終えて気が付くと路地裏で隠れるように蹲りながら酒を飲んでいた。

もう完全にダメ人間である。

「明悟、許してくれ……許してくれ……」

そう懺悔しながら、酒をまた飲む。

そうしていると奥から何か声が聴こえてくる。

「もう逃げられると思うな！」

酷い怒号だった。ゴロツキ共がそう叫んで家から年寄りと若い娘を引つ張ってくるのが見えた。彼女は耀哉の方を見ると助けを乞うて、手を伸ばしていたが耀哉はそれを無視してそのまま酒を飲んだ。

彼女と年寄りは打ちのめされた後、どこかに連れて行かれた。どこに行つたかは耀哉には分からないし、関係がないから、別に良いやと思いつながらまた酒を飲む。

落ちぶれてる所まで落ちていた。

するとインバネスコートを着込んで杖を持った男が耀哉の前に立つて酒瓶を取り上げた。

「何するんだー！」

耀哉は問答無用で立ち上がり、殴りかかるが軽く避けられる。

「私の酒だぞ！勝手に取るな！」

飛びかかつて奪おうとするが避けられて耀哉は転けて泥塗れになる。

「よもや、よもやお館様ともあろうお人がこんな朝から酒とは不健康です！」

耀哉はそこ言葉遣いで漸く相手を見るとそこには杏寿郎がいた。

「杏寿郎か……最近は元気そうだなによりだよ。新聞に載るほどの活躍。信頼されて幸せそうだね」

「お館様は不健康そうで、先月の悲鳴嶋さんの葬式にも来ずに酒を呑み続けて泥塗れに



なる程、落ちぶれてるとは……」

「ほつといってくれ……良いとんびだ」

耀哉は羽織ではなくインバネスコート……とんびを着るようになって風貌が変わった杏寿郎にそう言った。今の杏寿郎は動きやすそうに鬼殺隊の時と近いズボンを履いていたが、とんびを着て杖を携えてソフト帽を被っていた。

「津上の洋装を見て、洋装も悪くないと思ったので着てみたのです。今では探偵の私の良い目印です」

快活に話す杏寿郎。耀哉は明悟の名前が出てきて一瞬固まるが頭を振って、酒瓶を指さす。

「わかったから、それは私のだから返してくれ」

「指を差すとは……まあ、良いでしょう」

杏寿郎は耀哉に酒瓶を渡して奥に行き、先程人が連れ去られた扉まで行く。耀哉は酒を呑もうとするがもう酒はなかった。

「酒が無いから返したのか？」

「多少の酒瓶でも重いので持つてるだけでも健康には良いですよ」

杏寿郎は扉を叩くが返事が無かった。

「場所を間違えてしまったかな？……お館様、ここにご老人と若い女子は居りませんで

したか？」

「ああ、さつきゴロツキに連れて行かれたよ……」

ダメ元で聞いてみたらすんなり答えた耀哉を杏寿郎は見る。

「よもや、黙って見ていたのですか？」

「だって私には関係無い事だ……誰が死のうが生きようが……もうどうでもいい」

そこまで云うと杏寿郎は耀哉の前に行き、ぶん殴った。耀哉は一発で気絶したので杏寿郎は担いで耀哉を連れて行く。



耀哉が目を覚ましたのは家の中だった。

ここ半年は帰っていなかったが確かに自分の生まれ育った家だった。耀哉は起き上がる。と厨房へ行き、また酒を呑もうと酒瓶を探す。

「お父様、何をやってるのですか？」

後ろから声が聞こえたので振り向くとそこにはひなきがいた。

「やあ、ひなき……お酒はないかい？」

「お父様のおかげで我が家は完全に禁酒です……それよりも煉獄様から話があるそうで……」

ひなきがそう言うのと杏寿郎が耀哉の眼の前に来る。

「お館様、誠に申し訳ございませんがこれから暫くは私の調査にお付き合ひして貰いたいと思います」

「はあ!？」

耀哉は驚き、杏寿郎から話を聴くと先日大富豪の依頼で汚職と麻薬取引をしてる重役を調査して何とか裏を取って色々とやったのは良かったがその役人は裏でゴロツキと繋がってたらしく、このままだと目撃者の御老人とその娘が不味いとなり、急いで調査したまでは良かったが2人は元々生活苦で色んな路地裏の格安の部屋を日借りして暮らしていたので跡を追うのが遅れて最後にゴロツキに2人が連れ去られて行くのを耀哉が見たのでゴロツキから跡を追うのを手伝えと言う話だった。

「私は嫌だよ……関係無いじゃないか」

「お父様、いい加減にしてください!今まで困っていた人が居たら助けていたではありませんか!」

逃げようとする耀哉にひなきが怒鳴る。

「今のお父様を見たら、叔父様が嘆きます!」

明悟の事を言うひなきに耀哉は詰め寄り、ひなきの肩に手を置く。

「明悟の事は言うなー!!」

「いえ、言います。今のお父様は明悟叔父様とは到底比べ物にならない程に最低です！酒を吞んでずつと酔い潰れて、悲鳴鳴様の葬式にすら行かないし、叔父様の墓参りも行かない。こんなならあの時、爆発でお父様だけ死ねば良かった！・・・助けてくれ明悟叔父様が不憫でしょうがありません！」

「何だと?!」

泣き始めるひなきに耀哉は叩きそうになるが杏寿郎がその手を止める。ひなきは泣いて耀哉から一歩下がった。

「お父様なんか、大嫌い！」

ひなきは最後に耀哉を睨んで去っていった。

あまねやにちか、輝利哉、かなた、くいななんかひなきよりも容赦がなく会うのも嫌だった程だった。

こうして耀哉は杏寿郎の仕事を手伝う羽目になった。



錠烏すらも使つてゐる杏寿郎の調査は他の探偵よりも早い。すぐにゴロツキ共が屯してゐる賭博場を見つけたが問題が幾つもある。まず一つはその賭博場を經營してゐるのはその問題のゴロツキ共ではなく、別のゴロツキとか政府の役人と懇ろな関係になつてゐる極道だつた。

更にそこは一応政府の認可は下りてゐない事になつてゐるが色々と言ひから一般の役人、芸術家、果ては政治家まで争ひを起こさない事と薬物はやらないのが絶対条件の賭博場だつたし、錠烏は賭博場しか見つけられなかつたので肝心の老人と娘を連れて行つたのがどのゴロツキか鳥にも杏寿郎にも分からなかつた。ここで耀哉が役に立つ。

中は西洋風の賭博になつていたので2人は入るとバーカウンターに座つた。隣では新聞で見たことがある小説家が居たり、あちこちに有名な政治家とか役者など本当に様々な者がいた。

「ご注文は？」

「申し訳ないがこれから大事な用があるので酒は飲めん。ミルクを」

「生憎、ミルクは切らしておりまして・・・」

「ではコーヒーを」

「かしこまりました」

杏寿郎がバーテンダーとそんな会話を耀哉は聴きながら、酒を頼もうと棚の瓶を見て

いると自分にもコーヒーが来て杏寿郎を見る。

「これを機に断酒をした方が良いでしょう」

笑顔で話す杏寿郎に耀哉はコーヒーを飲む。苦くてあまり旨いとは感じなかったの  
で砂糖を入れる。

杏寿郎はそんな耀哉を見たあと、賭博場を見る。一般人ではなく、ゴロツキを見ると  
一人だけ妙に辺りを気にしてる怪しい男を見つけた。

杏寿郎は耀哉の肩を叩いて男を見てもらうと、男も耀哉と杏寿郎に気づいて耀哉を見  
たら逃げ出した。

慌てて逃げたので杏寿郎は杖を持って走って追いかけた。耀哉はそれを見た後、コー  
ヒーを飲み終わったので今度こそ酒を呑もうとするも、

「申し訳ございませんが慌ただしく動いた客のお連れ様にも酒を出すのは禁じられてい  
ますのでお引取りを」

とバーテンダーに言われて店を追い出された。

耀哉はそのまままたどこか別の居酒屋に行こうとしたが金が無かったのでそのまま  
歩く。

賭博場は街の路地裏の奥にあった為には治安の悪い所から出ようと歩いているときつ  
きの男を問い詰めてる杏寿郎を見つけて、逃げようとしたら杏寿郎が男を耀哉に向けて

投げて男に加えて耀哉も逃げられなくされた。

杏寿郎は急いで倒れてる2人に詰め寄り、男をもう一度締め上げる。

「もう一度聴く、なぜ逃げたんだ!？」

「俺がどこに行こうが勝手だろ!？」

「先日、路地裏で老人と娘を連れ去ったな!？」

「知らねえよ!!」

「ここに証人がいるんだぞ!」

杏寿郎は耀哉を引つ張つて耀哉の顔を男に見せると目をかすかに開いた。

「その反応は本当だな!？もう言い逃れは出来んぞ!・・・これで最後だ、老人と娘はどこにいる?」

締め上げていく杏寿郎。

男は観念した。

「じ、爺は今度大量に入ってくる麻薬の分量の確認の為に使った・・・もう生きてねえ! お、女は悪くなかったから外国に売り飛ばす事になった!明日の朝に出る船に乗ってる筈だ・・・」

白状した男の言葉に杏寿郎は怒りに染まりそうになるが抑えて杖で殴った。そして気絶させようと更に殴ろうとするが男は杏寿郎の腹を蹴ってそのまま逃げた。以前の

杏寿郎ならこうはならなかったが痣の副作用で1日ずつ体が衰えていた。

「この外道が・・・港か・・・お館様、行きますよ!」

「ちよつと待つてくれ。もうここからは本当に私は関係ないだろ!?!これ以上関わる義理は本当に無いし、理由も無いだろ!私をもう巻き込むな!」

耀哉がそこまで云うと杏寿郎は思いつき、耀哉の腹を殴った。腹を抑えて蹲る耀哉は杏寿郎を睨むが杏寿郎は血管を浮かばして耀哉を見ていた。

「痛いですか?でも貴方が助けなかった2人はそれ以上に酷い目に遭わされているんだ。本当の事を云うと連れてくる理由が無いのは本当だったがあまね様の頼みで叩き直すように言われて連れてきたのです」

「そうかい・・・だったらもうほつといてくれ!」

「津上なら立ち上がって助けに行きますよ・・・」

耀哉は立ち上がり杏寿郎の服の襟を掴む。

「私は明悟とは違うんだ!!!どんだけやつても明悟にはなれない!自分の事に巻き込んで明悟を死なせたクズには変わりない!明悟の事なんて忘れたいんだよ、全部忘れたい!・・・これ以上、私を苦しめるな!」

それは杏寿郎に言ってるようで明悟にも言ってるようだった。

杏寿郎は耀哉の手を払い除けた。



「分かりました。では金輪際、縁を切らして貰います。2度と俺の前に姿を見せるな」

杏寿郎はそう言って去って行った。

残された耀哉は立ち上がってトボトボを路地裏から出ていった。



ひなきは毎日、夕方になると明悟の墓に来る。

話すのは最近の楽しかった事、他の柱達の事、そして耀哉の事だった。他の子供達はひなきの様に毎日は来ない。1番慕っていた輝利哉は耀哉のあの墮落っぷりでこれからは自分が確りしないといけないと奮い立ち、毎日頑張っていて相応しい立派な男になるまで来ないと誓った。他の子達もそうだが、来ない1番の理由は耀哉に会いたくないからだ。明悟の1番の親友である耀哉は今は今全く来ないが本当に辛いと来ると思っていたのは今までの2人を見ていけば簡単に分かるもので、本当に明悟が大好きだから醜い家族の喧嘩を前でやりたくないのです他の皆は来ない。

ひなきが来てるのは、まだどこか心の底で耀哉が戻ると思っているからだ。

「叔父様・父・私、今日はお父様に酷い事を言ってしまったの・・・死ねば良かった」

て……叔父様が可哀想だつて……お父様が一番辛いのに……我慢が出来なくて……叔父様だったら、どうするの？」

墓に縋るように泣き始めるひなき。

その場には誰もいない。産屋敷家を助けた仮面ライダーアギト……津上明悟の姿はどこにも居なかった。

「叔父様……お願い助けて……」

助けを乞うひなきだが、もう明悟は死んでる。

仮面ライダーはもうやってこない。

ひなきはそう感じて立ち上がり、明悟にまた会いに来る約束をして墓地から出ると男が立っていた。

先程、杏寿郎がボコボコに殴っていた男だ。

彼は元鬼殺隊の隠であり、鬼殺隊の解散で産屋敷家から貰った大金で毎日賭博に明け暮れていた。

ひなきは男を見ると怖くなり、逃げようとする後ろからひなきに近づいてきた女がひなきを気絶させた。

「手際が良いな」

「あんたが下手なのよ。ま、元己の私には簡単だけどね」

「恐ろしい女……けど俺はまあもう鬼殺隊なんて関係ねえから別に何とも感じねえけどお前は良いのかよ？」

「別にそれにあの下弦の式と協力した時点で私にとっては産屋敷家も鬼と一緒よ」

彼女は下弦の式……芦原轆轤に家族を食われた人間の1人であり、鬼殺隊が轆轤と零余子と組んだ時に鬼殺隊を見限って捨てた人間の1人だった。轆轤の生首はその後、確かに晒されたが彼女からすれば言い逃れする為に尻尾を切ったようにしか見え、いつか産屋敷家も潰そうと企んでいた。

彼女の名前は尾崎真魚。

かつて那多蜘蛛山で明悟に助けられた隊士だった。

まさかその第一歩がこうなるとは思ってなかったがやってみると彼女の心にあったのは清々しさだけだった。



耀哉はボロボロになりながらも歩いて、始めて明悟の墓地に行こうとしていた。家には戻れず、かつての部下には失望され見捨てられ、金が無いから酒も飲めず、耀哉にはもう明悟の墓地ぐらいしか行く所が無かった。

耀哉はそうやって墓地に向かつていくとひなきを担いでる男と真魚の姿を見た。

「ひなき……ひなき!!」

流石にひなきの姿は遠目からでも分かり、耀哉はひなきを攫おうとしてる2人の元へ駆け出す。

2人は耀哉の姿を見ると気絶させたひなきを車の中に乗せて急いで車のエンジンをかけて走り出した。

何とかして車に追い付こうと走って手を伸ばすか車の速さには勝てず、車はそのまま去って行った。

「ひなき……!!」

耀哉は悔しきで叫ぶが男の顔や真魚の顔に見覚えがあり、すぐに行動に移した。



耀屋は明悟に与えた家に来た。

ここには明悟が死んだ時と変わってなかった。

耀哉はすぐに屋敷の中にある大筒を開ける。そこには明悟の服だけでなく、耀哉があげたコートや耀哉が最後に共に戦った時に使った武器もあった。

「明悟、私に力を貸してくれ」

耀哉はコートを着て、あの時使った散弾銃に弾を込めて明悟の家を出た。

明悟の帽子は持つていかずにその場に置いといた。

すると帽子に着いてた蝶の髪飾りのうちの1つが微かに誰にも知られずに動いた。



夜になり、杏寿郎は港にある船を見ながら肝心の目的の船を隠れながら探していた。既に鎧烏も飛ばしているが中々掴めずにいた。

すると1つの蒸気船の前に車が止まり、中から真魚と男が出てきて男がひなきを船に乗せて行く。

「(ひなき様!?)」

一体何が起こってるのか分からずに杏寿郎は暫く考えてると自分に近づく気配を感じて、杖を構える。

「何者だ?」

杏寿郎は物陰に杖を向けながら聴くと物陰から出てきたのは散弾銃を持った耀哉だった。

「なぜ、ここにいるの？」

「頼む杏寿郎。虫が良すぎなのはわかっているがひなきを助ける為に手伝ってくれ」

杏寿郎は耀哉を信用する気は無かった。だがひなきが実際に連れ去られていて、耀哉の言葉が嘘ではないのを知った。杏寿郎は耀哉にもう一度やり直す機会を与える事にしたが自分の仕事の邪魔をするなら許さないとでも言った。



作戦はこうだった。

杏寿郎が港の倉庫を燃やし、耀哉が隙を突いて侵入し、杏寿郎もその後が続いて囚わ  
れてる人を全員助ける作戦だった。穴は大量にあるがそれ以上の作戦を考える余裕は  
無かったし、耀哉はもつと長期的な作戦は出来たが素早い対応は少し考えないと出来な  
いので時間がなく、杏寿郎は元々突っ込んで後は即興で対応する人間なのでこれしか  
なかった。

それに火をつけて火災にさせると火消しと警察が来るので例え上手く行かなくても  
警察に少なくとも1日の時間稼ぎはさせられるし、上手く行けばその場でお縄を頂戴で  
きる。後、保護もやつてもらえる。

こうして作戦は始まった。

結果を云うと侵入までは凄く上手く行った。

夜だったので火事が人目につきやすかったのもあり、2人は何とか船の中に侵入出来たが、不味い事になった。

真魚に見つかり、刀を突きつけられたのだ。

「真魚」

一人一人隊士の名前と顔を覚えている耀哉は真魚の名前を言うが真魚は2人を睨んでいた。

「私の名前を気安く呼ぶな・・・」

「君は元隊士なのか？ならこの行為がどれだけ間違ってるか分かるだろ!？」

杏寿郎が真魚に叫ぶが聞き入れなかった。

「間違ってるから何？私は家族の仇を討てなかった上に鬼殺隊はあの鬼と協力した・・・間違ってるのはどっちよ・・・私はあんた達を許さない」

真魚の言葉に耀哉も杏寿郎も彼女の家族が轆轤か零余子に殺されたのだと分かった。そして彼女が自分達を恨む理由も分かった。

「風の呼吸 壺の型 塵旋風・削ぎ」

風の呼吸で突っ込んでくる彼女を杏寿郎は杖で受け止める。実はこの杖は刀鍛冶の

里特性の鉄杖であり、非常に有能な武器として活用できる優れ物であり杏寿郎も重宝している。

「お館様、彼女は私が抑えますので先に行つて下さい！」

「すまない！」

耀哉はそう言つて奥に進んだ。

杏寿郎は真魚をどうにかしようと杖を振るうが鬼殺隊の頃よりも更に強くなった真魚と痣の副作用で弱つてる杏寿郎では動きに違いがありすぎて簡単に避けられる。

杏寿郎は約1年ぶりに冷や汗をかいていた。



耀哉は船の中を進んでいくとひなきを攫つた男を見つけた。物陰に隠れながら見ると男は椅子に座つて麻葉を煙管で吸つていた。

男にも耀哉はさつきは気づかなかつたが見覚えがあつた。隠として働いていた男で名前は後藤だつた。

ただ違和感があつた。後藤は本来ならこんな所で不貞腐れてポロポロになるような男ではないと云うのを知つていたからだ。



耀哉は散弾銃でどうにかするのではなく、勇気を持つて後藤の元へ歩いていく。

後藤は耀哉に気づくとドスを取り出して耀哉に向けた。

「どっから入ってきやがった!」

「君は確か、後藤崇文だね?」

後藤・・・いや崇文は耀哉に言われると頷き、ドスを構えて続ける。

「私の記憶が正しければ君はこんな事はしない優しい人間だったと思う。一体なんでこんな事を?」

耀哉は昔と変わらない話し方で聞いた。

生来の優しい音色の声に崇文は安心したのか話し始めた。

「最初は上手く行くと思ってた。鬼が居なくなつて終わつたから、隠だつたおかげで運転やらなんやらで上手く行くと思つてたし、順調だった。良い会社にも入つたしな。けど他のやつは汚くてな。汚職の宝庫のような会社だった。薬に横領、しかも会社の内部で権力争い・・・鬼殺隊じゃ無かつたもんばつた。んで同期の奴に聴いてみたら、大学で薬と権力争いは学ぶだろ? ・・・頭が良くて仕事をやつても結局学校を出てねえからそこら辺が分からなくてな・・・酷かつた。泣き叫んで会社に来た人らもいて、俺はもう我慢の限界だったから警察に告発した。実際に会社は潰れたよ。けど感謝なんかされてない。被害者からすれば俺はゴミクズの一人だし当然だよ。ただ、その会社

の社長は1週間もしねえ内に金払って出てきてすぐにまた似たようなの作って、俺は会社を潰しただけのクズ野郎としてどこの会社にも入れなかった。警察とかに訴えてもれなかった。人が多くてもう入らねえとよ……で、政治家の運転手を募集してたから売り込んで仕事にしたんだがよ。その政治家は良かったんだが政治家の部下らには嫌われててな。学校を出てない者が先生に近づくなどよ。先生は何かしてくれただが、あいつらは有る事無い事勝手に言っつて遂にキレたよ。お前、両親がいないんだって? きつと互いに相手を不倫して消えてお前は邪魔になつたんだろうな。お前、俺の親は鬼に殺されたんだ! それをあいつらは何だ!? 何も知らねえくせに! 気づいたら殴つて、んでまた無職で薬塗れの賭博塗れ……一体何でこうなつたのかももう分からねえよ!

「崇文……君はやり直せ! 気安く俺の事を言うんじゃないやねえ!」

耀哉は何とか説得しようとするが崇文は耀哉の言葉を遮つた。

「どいつもこいつも……気安くやり直せるなんて言いやがって! やり直せねえよ! 落ちてる人間は落ちるだけだ! あんただってそうだ! 聞いてるぜ酒浸りで家を追い出され、柱からの信頼も無くなつて……何がやり直せるだよ……上から物言つてんじゃないやねえよ!」

「でも君は優しい人だつて蝶屋敷の子供達やひなき達から聞いてる」

「優しいからなんだつてんだ？ 金が入るのか？ 仕事になるのか？ 絶対に尊敬されるのか？ いいや、なんにもならない・・・そんなの何にもならない。何にも価値がない。優しさなんて虚しい物だ・・・他人が褒める所が無いから、なんかそれらしく見えるように言つたただの苦し紛れだ。演劇だつてそうだ。本だつてそうだ。この世の全てがそうだ。人は何かを殺してたり！ 何かを奪い取つてる奴の懺悔や成功、ただ奪われた人間の苦しみや、立ち上がりは褒めて絶賛し、心に残すがただ生きてる奴には何も関心がねえ！ この世の半分以上がそうで見飽きてるから！ 俺もそうだ、その一人だ。そんな奴らが生きていくには何かが必要なんだ。それを魅力つて云うんだ。ならそれが無い人間はどうなる？ 落ちるだけだ。俺やあんたみたいに落ちて落ちて死ぬだけだ！ なら、死ぬ前に良い思いをして何が悪い！」

崇文の言葉は無茶苦茶だつたが耀哉には良く分かつてた。自分も似たような人間だから、人から心優しい人つて良く言われるが仕事にも金にも金にもなつた事がない。鬼殺隊の当主として動いていたがそんなの誰にも出来た。明悟だけは耀哉のそういうのを理解していて容赦が無かつたから明悟とは全力で喧嘩出来た。明悟自身の性格のせいでもあるが、故に明悟が居なくなつて自分に一気に自信が無くなつた。自分は満足にひなき達の遊びにも付き合えなかつたし、柱の皆を後ろから見守るしか出来なかつたし、最後

の特攻だつて明悟に止めろと言われた。

だから、耀哉にはまるで崇文の姿が自分のように思えてしよがなかつた。

「私もそうだよ」

「何が？」

「私もおなじだよ！明悟が居なくなつても上手く出来ると思つたが違つた！何にも出来ない。まともに大工仕事も出来なければ、のり巻きを作ることも出来ない不器用で子供達の遊び相手にもならない！豆腐だつて匙がなければ取れないほどに不器用だ！当主として色々とやつたけどあんなの誰でも出来ることだ！自分に魅力がないだど！？運転が出来るだけマシだよ！私なんかあまりの下手さに追い出されたんだぞ！．．．でも同じだ。やけになつて何かに溺れるのは一緒だ．．．崇文、私達は似てる」

「だから、何だつてんだ？やり直せるつてか？それとも一緒にやり直そうつてか？俺は隠でただの使いっぱしり、あんたは当主だ。全然違う．．．あんたはやり直したら慕われる人間が多いかも知れねえが俺はもう一人なんだよ、一人になつた人間はどこまでも一人なんだ」

「違う！それは違う！君は無惨の決戦を見てなかつたのか！？無惨との戦いで死んだ光柱津上明悟を見なかつたのか！？」

「見てたよ、皆から慕われてたな。軽口を言い合つて俺なんかよりも全然素晴らしい人

だつてのはよく分かつたよ」

「違う！私の親友は君が想像してるよりも酷い。毎回人をおちよくるわ、子供に変な趣味を植え付けるわ、余計な一言を言つて人を怒らすわ、碌な人間じゃない！けど、知ってるか!?彼は記憶を失つてたんだ！何にも覚えてない！家族の事もどこからやってきたのかわからないんだ！私や君以上に何にもなかったんだ！そんな彼が皆からの信頼を得ていたんだ！崇文・・・最初から何かある人間じゃないよ・・・最初から素晴らしい人なんていない・・・皆、何も無い所から始まるんだ！・・・だから君ももう一度始められる。私もだ。彼がそうだったから、もう一度始められる！人間が永遠に一人だなんてそんなのありえない！」

後藤は耀哉の言葉を聞いて始めてドスを震わせた。

「何であんたそこまで言うんだ？関係ないだろ！」

「君は鬼殺隊に所属して、家族を鬼に食われた。私の一族のせいだ！私の一族の罪が君に向いてしまった！だから、これ以上罪を背負つてほしくない！頼む、ひなきや他の娘が捕まつてる場所を教えてください。でないと私は君に銃を向けるしかない。頼む・・・撃たせないでくれ」

耀哉の叫びに崇文は動けなくなる。

自分が当主として仕えてた人にここまで言わせただけじゃない。自分にとっては雲

の上の存在だった柱の一人がボロクソに言われるほどに酷く、自分以上に何も無い所から始まったのを初めて知った。

自分が惨めに感じてくるがそれだけではない。生きるやる気もまた出てきた。崇文は遂にドスを捨てた。

そんな崇文を耀哉は見ていると突然、拍手が聴こえてきたのでそつちの方を見るとボロボロの杏寿郎が歩いてきた。

「流石、お館様だ。見事に説得なさるとは……」

快活に話す杏寿郎だが、身なりはボロボロになっていて何があったのかが気になってしまう。

「炎柱様……尾崎は？」

「悔しいが逃してしまった。と言うよりも逃げたのか分からん。妙に良い顔はしておつたが……」

杏寿郎がそこまで云うと爆発音と地鳴りがした。あまりの衝撃に倒れる3人。

「今のは……!?!」

「おい、あれ!」

崇文が指を差すとそこから黒い煙が出ていた。更に焦げ臭い匂いもして、真魚が物陰から現れる。

「尾崎!？」

「あんたも裏切るんだ．．．ここで皆死ねばいい」

「待て！他の人はどうなるんだ!？」

「どうでもいい」

真魚はそう言つて煙の中へ消えていった。

追いかけたかったがそれよりもひなき達の方が耀哉と杏寿郎には優先だった。崇文の案内で更に奥に行く。

鋼鉄の扉の鍵を崇文が開けると中には耀哉が見捨てた女やひなき、それに他にも色々な歳の女が入っていた。

「ひなき!」

「お父様!？」

耀哉はひなきを見つけると抱きしめる。ひなきも突然の事に固まるが耀哉の震えていた体にしつかりと抱きついた。

「ごめん、ごめんねひなき。駄目な父親でごめんね．．．」

「ううん、助けに来てくれてありがとうごぎいます」

抱き締め続けてる耀哉とひなきだったが、杏寿郎が耀哉の肩を叩く。

「お館様、感動の再会は後で今は逃げましょう」

杏寿郎が指を差した先には炎が上がっていてこっちに迫っていた。

急いで全員で脱出しようとするが既に火の手はあちこちに周っていた上に煙によって視界も悪くなり、呼吸もしにくいなど最悪の状況だった。

「くそ！もうここまでなのか!？」

耀哉が内心、毒づくと突然、肩を叩かれた。

慌てて耀哉は振り向くが誰も後ろには居なかった。しかし、視線の先にはアギトが立っていた。

「耀哉、こっちだー！」

確かに耀哉の耳にはそう聴こえた。

その声は自分が絶対に忘れない声、明悟の声だった。

「皆、こっちだー！」

耀哉はひなきを抱えたまま明悟に向かって走る。

アギトに導かれるままに耀哉は道を走り続ける。

ひなきや他の皆にはアギトが見えず、まるで耀哉が道を分かっているかのように進んで見えた。

ひなきは耀哉の胸でそれを一番感じていたが、それと同時に明悟の気配も感じていた。



「助けに来てくれたのですね、明悟叔父様」

ひなきはそう思いながら、落ちないように耀哉にしがみついていた。船の中を突き進み、外に出る。まだ港と繋がっていたので急いで船を降りようとするが向かう途中で下から巨大な爆発がして道が崩れ、炎で前を塞がれる。

「海に飛び込め!!」

杏寿郎の叫びで全員が反対側の海に飛び込もうと走るが炎の魔の手が意思を持ったかのように速く迫ってくる。

あまりの速度に全員が素早く動けず、顔を手で隠して何とかしようとし、耀哉は炎からひなきを守ろうと背を向ける。

だが、彼らの元に炎が来ることは無かった。

耀哉は恐る恐る顔を炎の方に向けると光が炎を抑えていた。光はやがて人型に収束していきアギトになった。

「皆、今すぐ海に!」

杏寿郎の声に他の面々が海に飛び込んで行く中、耀哉はアギトを見続けた。

「明悟……」

アギトは耀哉には何も言わずに黙って耀哉の方を見ていた。杏寿郎が逃げる為、耀哉とひなきを引つ張って海に飛び込んだ。

最後に耀哉とひなきが見たのは炎に呑み込まれたアギトの姿だった。

「(耀哉・・・お前は俺みたいに守る人を失うなよ)」

耀哉は海の中で確かに明悟の声を聞いた。そこから感じるのはカナエを守れなかった明悟の後悔の声だった。

急いで水面に顔を出して耀哉は辺りを見るが明悟もいなければアギトも居なかった。

30分後、耀哉や他の皆は無事に警察に保護された。耀哉と杏寿郎、ひなきは風邪を引かぬように布に包まって温かい生姜湯を飲んでいた。

そんな3人の前に崇文が手錠を掛けられた状態で警察に連れて行かれていた。彼は3人を見たが何も言わなかった。ただ、その顔は晴れていた。

「彼女は無事なのかな?」

「尾崎ですか?・・・わかりません。遺体はまだ見つかってはいないようですが・・・」  
耀哉と杏寿郎はそう話してたのをひなきは黙って聴いていた。

「ひなき!!」

突然の声に3人が向くとあまね達が出た。

「お母様!!」

ひなきはあまね達を見ると駆け寄って抱きしめた。

あまね達もそれを感じて抱きしめていた。

耀哉と杏寿郎は漸く終わったこの数日の事件に心の底から安堵して生姜湯をまた飲んだ。



あれから、数ヶ月。

耀哉は家に帰る事が出来た。

色々と酷かったがここ最近は何も連日断てるようになって一歩ずつであるが前に進んでいた。

花束を持って彼は明悟が眠っている墓地に向かう。

漸く、自分が前に進むことが出来たからその報告だ。

墓地に入り、進んでいくと明悟の墓の前で奇妙な家族を見つけた。

父親はカトルマンハットを被ってコートを着ていた。母親は蝶の羽根模様のような着物を着ていた。

そこにも5歳ぐらいの男の子も一緒にいた。

耀哉には父親が明悟だと云うことも母親がカナエだと云うことも分かった。ではあ

の子供は誰なのか・・・耀哉は分かった。あの子は明悟とカナエの子供で童磨によつて生まれてくる事さえも叶わなかつた命だ。

幸せそうに話している3人を見て耀哉は涙が止まらなかつた。幸せそうにしていたから嬉しくなつた。

明悟は耀哉に気づくと振り向いて耀哉の方を見る。

「耀哉・・・幸せになー!」

明悟はそう云うと2人と一緒に消えた。

3匹の蝶が懸命に飛んでいた。

「明悟・・・ありがとう」

後年、産屋敷家である手紙が見つかった。

それは耀哉が晩年、親友だった明悟に対して宛てた感謝の手紙だった。  
題名が『我が親友 仮面ライダーへ』

これにて《鬼滅の刃》太陽の化身》完結！

## 超全集

この超全集は色々ネタ込でやります。

『明悟』はい、皆様！今作の主役で最後に作者によって殺された津上明悟です！今回は最後の設定集という事で俺が作者から聞きまくるぜ！

『作者』ヨロシコ！

『明悟』ゼンカイジャーじゃねえんだからやめろ！さてまず最初の質問だか、なぜに今作を書いたの？

『作者』理由としては別作品のヒロアカとドラゴンボールのクロスオーバーが辛くなってきた上に書いてて自分で面白くなくなつて、俺って世界観周りは楽しいから嬉々として書いてるし、プロットも楽しいんだけど台詞回しとか行動を書くのが下手すぎて辛いんだよね。で、一回本気で完結させるのが前提の作品をやりたくて1番好きな仮面ライダーアギトを選んだ。

『明悟』鬼滅とクロスさせた理由は？

『作者』元々は鬼滅にガオレンジャーのヤバイバとツエツエが転生してくるって話で人、鬼、オルグの三つ巴と人とオルグの共同戦線とかやってみようかな？って思ったんだけ

どあまりにもつまらなさ過ぎて・・・特にヤバイバヤツエツエを出しても鬼を殺せないから出す意味があんまりないと云う・・・

『明悟』 ああゝ

『作者』で、鬼は太陽に弱いからアギトの力だと殺せるってなって、始めた。アギトでやる前にヴェノムでやろうとして失敗してたから、また完結しないかな？と不安だったけど完結できて良かった！

『明悟』って事は最初はアギトから始まったわけではなく、鬼滅の鬼のルールを壊さないのを探したらアギトになったって事？

『作者』 そういう事。設定や世界観周りを作るのは本当に二次創作だろうが一次創作だろうが俺は一番好き！

『明悟』では次の質問で俺はなんで明悟って名前にな？

『作者』 津上は決めていたから次は名前で翔一って名前は大正時代にあったかも知れないけど個人的にはなんか合わないなってなって、《明るい》と《悟り》って津上翔一からイメージする物を選んでやった。

『明悟』なる程・・・仮面ライダー周りの設定は後で聴くとして、次に俺と同じようにライダーになった零余子と轆轤について質問。なんで仮面ライダーにしたの？

『作者』最初は仮面ライダー1人でやろうとしてたけど、書いてて強くなり過ぎる問題が

出てて、俺、チートが大嫌いなんだよ。お前、チート顔負けの対鬼能力だけど上弦を倒したのは因縁があった童磨だけでしかもそれもカナエと一緒に。個人成績ははつきり言つて原作の炭治郎よりも低いよ。だから、出して最初2人はダークヒーロー路線でやろうかな？つて書いてたけどどうやってこの2人が鬼の情報を集めるの？つてなつて共闘路線。アギトのギルスとアギトの戦いみたいにする違いによる戦闘をやりたかつたけど、共闘路線にして良かった。

『明悟』 轆轤と零余子で明かしてない設定とかあるか？

『作者』 零余子は彌豆子との関係が中心だから無いけど、轆轤は結構ある。

『明悟』 例えば？

『作者』 まず、轆轤の奥さんの名前は《須磨》で意図的に宇髓の奥さんと同じ名前にしたんだけど、これは轆轤の奥さんは元々宇髓の忍びの里からの抜け忍で宇髓の須磨の叔母つて裏設定でその後、忍びの里で《須磨》つて名前は忌み名として使われるようになったのを細かくやろうとしたら、

『明悟』 したら？

『作者』 設定だけで満足した上にそもそも宇髓の嫁さんらあまり出てこないし、明悟の方を書きたいつてなつて消えた。

『明悟』 おい!?



『作者』他にもあって玉壺がなんで轆轤の奥さんと母親を殺しに行ったかって云うと万博で前までは自分の壺が選ばれていたんだけど、轆轤の陶芸の方が選ばれて嫉妬に塗れて殺しに行ったという。

『明悟』玉壺、器小き!!

『作者』ただ、これに関しては何に因縁書いても玉壺はその事を普通に忘れてるし、轆轤は知らないしで意味が全くなかったので止めた。個人的には読みやすくなってる。轆轤編周りは自分でも駄目だこりやっと思って思う程に死に設定の宝庫でぶっちゃけると初期のキバ状態より酷いんだよなあ。

『明悟』次に活かせ!では次の質問でアンケート投票したデイケイド編は何でやったの?

『作者』仮面ライダーって単語を出したかったから

『明悟』え?終わり?

『作者』それ以外は無だね。まあカナエとの関係や童磨との因縁を終わらせれたのは良かった。

『明悟』アンケート凄かったもんな。まさかの一票差って・・・

『作者』ハーメルンのアンケートって色々見てきたけど一票差は見たこと無かったよ。同率だったどうやろうって悩んでたからマジで何とかなって良かった。

『明悟』前の質問に戻って申し訳ないけど、零余子に関しては何で裏設定とか無いの？  
『作者』零余子に関しては何の無惨との関係だけでそれ以外は何の因縁も無いから。別に考えが思いつかなかったとかじゃなくてマジで零余子の過去って何も無いの。だから、零余子が戦う理由は禰豆子だけ。もつと零余子と禰豆子を書きたかった。

『明悟』書かなかった理由は？

『作者』単純に時間が無かったし、今作はあくまでも俺がやる仮面ライダー。1年で終わらせたかったし、50話以上もやる気はなかった。

『明悟』入れても問題なかったと思うけど？

『作者』去年の3月18日に間に合わなくなるからな。やつぱり轆轤編は完全に失敗した！もつとコンパクトにそして早く終わらせる予定が長引きすぎた。あれで切る事になった原作キャラとの絡みの話も多い！

『明悟』それは後で原作キャラの話の時にするとして、ではそれに行く前に俺周りの最後の質問だけど、『運命』って話はなんであんなったの？

『作者』本来あれがこの作品のエピローグになる筈だったんだけど、轆轤編の失敗を踏まえてもう一度主人公の周りをちゃんとやりたいと思って書いた。本来はエピローグかそれとも永遠に発表しない筈の話があれ。

『明悟』なる程、あの血鬼術の因果岩は何で出したの？

『作者』元ネタはジョジョなんだけど、明悟を殺したくてしようがなくて、あれで明悟が死ぬってのはわかると思ったから、あれからの話は明悟にとつての《終活》なんだよね。だから《日常》を書いたんだし。

『明悟』なんで俺をそんなに殺そうとしたの？

『作者』本気で完結させたかったから。元々主人公が死ぬ物語って好きでも無かったんだけど1949年の映画☒ハムレット☒を観て初めてギリシヤ悲劇つてのを観て、悲劇つて云うから今の時代だと☒ヘレディタリー☒並のえげつない地獄話かと思いきや、終始美しくて圧倒されて主人公が最後に死ぬのは悲劇でも何でもないって思ってた。ドニ●●イ●●ン主演の☒SPL☒も登場人物の殆どが酷い目にあってるのに美しく鬼滅の世界観に合うって思ったし、鬼滅は原作だと炭治郎は生き残るからね。まああれも凄く美しくして最高に大好きなんだけど、どうせ書くなら自分が今まで避けていたのをやろうって思ってた。ただ☒ハムレット☒や☒SPL☒は後、1000倍は美しかったからまだ足りないな。

『明悟』だから藤の家の時に☒ハムレット☒を出したの!?

『作者』そう。あの時から漠然とだけど主人公の死は決まってたよ。

『明悟』次に行つて、原作キャラに関しての質問です。えー、まずは主人公なのに影が薄

くなくなった炭治郎を始めとする3人組に関して

『作者』あれは元々は明悟と3人組＋禰豆子でやろうとしたら、あまりにも伊之助が動かしづらくて、それに明悟を入れても何の面白さも上がらない事に気づいて、路線を変えたんだよ。

『明悟』というと？

『作者』元々は禰豆子を監視する役割と3人組を鍛えるキャラとして動かそうと考えてただけで、伊之助は動かさずらい、炭治郎は精神タフすぎるわ、善逸はあの戦闘方法だから何も言えないわで絡める意味が無くなり、カナエとの関係をやることにした。

『明悟』死んでる彼女にしたのは？

『作者』今だから云うけど、どうせ明悟は死ぬし生き残らせるのも良いけど、なんか個人的に綺麗に纏まらないなあってなったから死んでるカナエにした。

『明悟』もしもカナエじゃなかった場合は誰になったの？

『作者』エピソードで敵として出てきた真魚だね。あれも路線変更による弊害で出ただけのゲストキャラになっちゃったんだよね。

『明悟』今ので良かった・・・続いては柱達でこれ凄い批判が来てたよね。

『作者』うん、来てたね。でも明悟って何回もその後で書いてるけど人として結構最低なんだよね。

『明悟』 まあね。最初は義勇君で、なんかある？

『作者』 無いね。原作のノリがあんなんだから、書いてて楽しかった記憶しかないな。ただ何も喋らないし独特の感性だからひなき達のおままごとが好きの設定にしたのは楽しかった！

『明悟』 それに關してはたつぷりと俺からの苦情があるので、次にしのぶさんだね。

『作者』 おぼちゃんね。

『明悟』 それが批判の元だよ！

『作者』 ごめん。俺は最初にしのぶさんの年齢を見た時に想像以上に若くてびっくりした。義勇よりも年上に見えたから。

『明悟』 原作でも美人設定なのに!?

『作者』 だから、明悟の余計な一言には毎回制裁してるじゃん。それにあれはただのコントでしかないもん。ドリフの志村●んが加●茶にツツコミを入れてるようなもんだよ。まあギャグセンスが無いから微妙なんだけどね。

『明悟』 微妙通り越してゴミだよ。

『作者』 だから、ひなき達のおままごとに繋がるんだけどね。

『明悟』 あれはこれが原因か!?!・・・・・なんでしのぶさんがこんな扱いに？

『作者』 路線変更による弊害。カナエと急遽明悟が絡む事になって突貫工事だったから、

その弊害でしのぶさんをあまり明悟に絡ませなくなつてデイケイド編で明悟とカナエの2人が童磨を倒したのでそれに伴つて減つていった。完璧にししのぶさん関係は明悟のキャラ作りで大失敗しました。で、このままだと藤の花の毒で死ぬ可能性が高かつたから、ドイツに治療に行きました。

『明悟』下手くそ・・・次は三百億の男の杏寿郎君だね。無限列車で生きる事になつたけど、これは何で？

『作者』明悟がどうせ最後に死ぬから柱の死人を減らそうつてなつて生きてもらいました。原作と違う事をやつてこそ二次創作。原作通りが見たいなら原作を見れば良いしね。個人的には轆轤ともう少し絡ませたかった。やつぱり、1話だけでも良いから杏寿郎と轆轤回を書くべきだったと終わつてから後悔してる！

『明悟』なんで轆轤？

『作者』轆轤が2号ライダーだし、元鬼で杏寿郎は元鬼の場合はどうするんだろう？つて思つてたから。

『明悟』次は天元君だね。

『作者』これは義勇よりもない。個人的にはひなき達のおままごとに絡ませた時は楽しかつたし、面白かつたし遊郭編でも格好良く書けたと思う。強いて言うなら轆轤の時の《須磨》関係はやりたかつたかな？まあ轆轤のその設定が無くなると同時にやる気力も

消えたけどね。

『明悟』次は小芭内君と蜜璃ちゃん……なんで2人セット？

『作者』そりゃ、原作公認のカップルだからだよ！その周りで明悟を動かして、想像以上にプロットから面白くなって、あれ？明悟と恋愛ってイける？ってなったからカナエとのやつもやろうって決定的になった。つまり、メタ的に云うと小芭内と蜜璃は明悟とカナエの恋のキューピッドだ！だから、小芭内と蜜璃には幸せになって欲しかったから生き残らせてくつつかせた。自分ができる最大の感謝の意思としてね。

『明悟』次に実弥君だね。これは義勇君との暴走回が印象的だったね。

『作者』あれはハリケンジャーを観たから。しのぶにはまた大変な目に合わせてしまつたが、許しくれ。実弥と義勇を2人一緒にコメディに持つてくるにはこれしか思いつかなかった。

『明悟』悲惨な事で……玄弥君との関係も良くなったように……

『作者』あれだけ酷い目に合わせたから、こうならないと俺、ただの外道じゃん。だから良くなつて貰った。

『明悟』外道は今に始まつたことではないでしょ……次は無一郎君だけど、もうこれは諸に轆轤編の失敗を受けてるだろ!?

『作者』うん。ごめんなさい。本当に無一郎に関してはその後に対する何のフォローも

出来ないまま終わってしまった．．．何よりも明悟を含めた3人ライダーの誰にも絡ませられなかったのは痛かった！

『明悟』ライダータイムでも書いてフオローしろ！．．．次は行冥さんだね。

『作者』柱最強だったおかげで明悟のチート化を防げた。おまけに常に飄々としてるポジティブ的な明悟とは違ったおかげで書きやすかった。何よりも生真面目実直なのが良かった。

『明悟』黒死牟との対決の時に最後見事に決めたもんね。あれって俺が最後に首を落としたからうまく行ったの？

『作者』違う。行冥の鉄球の首飛ばしから回復して完全に異形になった時にアギトの目に写った自分の姿を観て戸惑ってる隙を突いただけ。行冥が決めて無かったら倒せてなかった。

『明悟』原作最強の柱は伊達じゃなかったか．．．

『作者』さっきも言ったようにチートが嫌いだから、行冥さんはほぼ範馬勇次郎化していった。明悟の強さの上限みたいな感じだね。だから、明悟が行冥さんよりも強くなくなるのはありえないし、その逆も然りだよ。

『明悟』童磨の時のバーニングは？

『作者』あれは対童磨専用フォームだ。



『明悟』では次は本当ならば産屋敷の面々だけど、それは最後に聞きたいので隠の後藤さんとは？最後のエピソードで悲惨な目にあってるけど？

『作者』 あれは、ユートピア化防止だ。

『明悟』 は!?

『作者』 元々、自分の思想的に全てが終わりました。皆が幸せになりましたってのは嫌いじゃないし、寧ろ好きなんだけど、違うって思って・・・☒ワンスアポンアタイムインザウエスト☒のジルみたいに辛い中でも懸命に生きていくのが良いと思つて、鬼殺隊の皆は最後は幸せになりましたちゃんちゃんではなく、終わりました落ちる人もいるがそれでも生きてる人もいますちゃんちゃんにしようとしたらあんなった。

『明悟』 オリキャラでやれよ。

『作者』 そんなオリキャラの説明の隙間は無かつたし、オリキャラはオリキャラで別の役割をやつたからあんなった。

『明悟』 では産屋敷家のあまねちゃんに・・・胃は大丈夫かな？

『作者』 大丈夫大丈夫。肝っ玉母ちゃんだから問題ないよ。元々炭治郎らと動こうとしていた時は明悟と耀哉とあまねの三角関係でドロドロなのがサブストーリーだったけど・・・

『明悟』 言わなくてもわかる。路線変更でこつちもなくなつたな？

『作者』 明悟が二股クソ野郎になるからね。

『明悟』 後、主な大暴れは酒乱・・・

『作者』 酒飲んで暴れるなんて定番じゃん。こういうキャラほど定番ネタが面白い！

『明悟』 面白ければ良いのか・・・お次は、ひなちゃん達だけ・・・おんどれ、なんて物を書かせてやらせるんだよ！

『作者』 ギャグをやりたくてその時たまたまクレヨンしんちゃんを見てたからやったのリアルおままごことをね！

『明悟』 あんなエゲツない物を・・・

『作者』 そう？面白かったけどね。

『明悟』 なんでしかも義勇君やカナヲちゃん、零余子の3人がファンなんだよ！エピローグで玄弥君の嫁さんもファンってあったけど・・・

『作者』 俺の趣味だ。それ以上の物はない。多分2年くらいしたら炭治郎も入る玄弥と一緒にやるかも知れない。

『明悟』・・・がんばれ・・・頑張ってくれ。

『作者』 大丈夫、死にやしない。心はどうなるかわからないけどまあタフだから大丈夫でしよう。

『明悟』 耀哉についてなんだが、そもそも何で明悟の親友ポジに？

『作者』明悟をアギトにした場合、トップは詳しい事情は兎も角、把握はしないと駄目だろうってなったし、把握だけなら禰豆子と被るし、柱合会議をそんな延々とやる気は無かった。

『明悟』え？それだけの理由!?

『作者』そうだよ。ただ、そこからああなつて行ったのは作者である自分も予想外。どんな書いていって勝手に動き始めたというかコイツならこうなるんじゃないかね？こうなつた方が面白くね？を追求していったら、エピソードのあれになった。

『明悟』あれなに？

『作者』エピソード。

『明悟』いやエピソードにしたって多分今までで一番長いぞ!?!しかも鬼なんてゼロだし。ぶつちやつけ鬼滅じゃなくていいじゃん!

『作者』それは否定しないけど、あのテンションが耀哉に合うと思つたら想像以上に合つてああなつたんだよ!

『明悟』無惨との最終決戦で散弾銃を撃つた理由は？

『作者』中の人ネタ。キアヌ・リ●ブスの吹き替えなんだぞ!?!ジョン・ウィックにして何が悪い!?!これをデイケイド編で思いついたから鉾山で隠も散弾銃を持たせたからね。もつとメインに持つてくれば良かったなと今は思う。

『明悟』この映画マニアが・・・

『作者』映画は好きだよ・・・というか地の文の戦闘シーンはアクション映画や特撮の動きをまんま文字に変えただけのオンパレードだよ。

『明悟』嘘だろ？

『作者』色んな人が轆轤と零余子のそば屋のシーンをうる星やつらのメガネとチビ？って聴いてくれて嬉しいですけど、地の文の方がどっちかって言うとパロディの宝庫。

『明悟』後で教えろ。次は鬼に行ってみよう！と言う事でまずは無限列車の下弦の3人だな。

『作者』仮面ライダーTHE FIRSTのコブラとバットが格好良くてね。やったの。

『明悟』なんでコブラとバット？

『作者』仮面ライダーの怪人の鉄板ネタだからね。

『明悟』下弦の壺の魘夢は？

『作者』何にも無いね。本当に殺しにきました返り討ちにしました。さようなら。

『明悟』酷い扱いだな。次は猗窩座だな。

『作者』原作で過去に大泣きして、杏寿郎は生き残ったから無限城は杏寿郎と猗窩座の再戦つてのを列車の時に決めてた。力のぶつかり合いによる過去のフラッシュバックは過去を知った敵を殺せる？ってやってみようと思ったのでやった。実際に後で無惨と

の設定を合わせるのに役に立ったから面白いかな面白くないかは兎も角やって良かったって思う。

『明悟』なるほどね。次は妓夫太郎と堕姫だな。

『作者』猗窩座がああなつて杏寿郎に猗窩座が取られる事になったので炭治郎のライバルとしてと言うか無限城で炭治郎と戦う相手が欲しかったから妓夫太郎にやつてもらった。妓夫太郎の好きなんだよねえ。

『明悟』途中で特撮の悪役っぽくなつたのは？

『作者』好きだつたのも理由だし、さつき言つたヤバイバとツエツエのパロディではないけど、そんなノリを再現しようとしてなつた。

『明悟』次は玉壺と半天狗だけど、言うことある？

『作者』全く無いね。せいぜい玉壺は轆轤に無残に殺されるようになっただけでそれ以外の変化はないな。

『明悟』次は童磨……

『作者』路線変更にもなう宿敵化です。ヤバイ敵として頑張ってもらいました。

『明悟』なんで俺アイツに狙われるようになったの？

『作者』三角関係をやろうとしてどこに持っていこうと悩み、結果として男（童磨）と女（カナエ）が男（明悟）を取り合う話になつた。

『明悟』わけがわからん。

『作者』うまく行かなかつたので義勇と実弥としのぶでその不満を発散させたんだよ。

『明悟』次は黒死牟の前に鳴女と獺岳に関してだけど、

『作者』設定的な変更はあんまりないかな？ただ鳴女の血鬼術の琵琶の奴に技名をつけてそれはちよつと遊んだけどね。

『明悟』それもネタなの？

『作者』うん。後でこの際、そこらへんのネタ爆弾も全部書くよ。

『明悟』では黒死牟についてなにかある？

『作者』黒死牟に関してはあまりに強すぎて鉦山で出せなかつたから、どうしよう？って悩んだ記憶がある。原作でも超重要キャラの一人だし、特に縁壺関係はあまりにも縁壺が強すぎて出せなく、その弊害も出てた。

『明悟』どんだけ弊害を出すんだよ！

『作者』最強を壊さず、ライダーを強く見せておまけに決め技までやるって難しくてね。

『明悟』おいたわしや兄上

『作者』ただ、原作を見るとあの兄弟が拗れた理由ってただのコミュニケーション不足な気がしてしようがないんだよね。

『明悟』強すぎと嫉妬しすぎだからね。

『作者』あれをある種の反面教師にして耀哉と明悟の関係を作った。のは良いんだけど肝心の2人が親友になったエピソードを明確に書かずにぼかしたままここまで来たのはやっぱり不味かった。どこまで過程を省けば良いのか分からずにやったから完全に失敗した。

『明悟』失敗だらけだなあおい。

『作者』俺って一度終わると全てが悪かったってなる変なネガティブ思考があるんでね。『明悟』全く、最後に無惨だけど

『作者』書いてて簡単だった。あのおっさんに関しては小物にしていけば行くほど面白くなる変なキャラだから楽しかった。

『明悟』最後にアギトというか人間というか太陽を克服させたのは？

『作者』俺なりの無惨に対する皮肉。結局、生きたいだけで生き恥をさらしてのうのうと生きて、他人を蹴落とすなんて外道な人間そのものだから。こいつを見てるとラディゲはまだ悪役として魅力があったんだと再確認できた。

『明悟』次は設定にいろいろ！

大前提の設定及び無惨の鬼化の経緯。

太古の昔に人間と天使の戦争によって劣勢だった人類に唯一味方についた火のエル

によつて巨大な力を持つ人間（巨人）が生まれ何とか盛り返すが神の介入により、全ての生命が一組を残して洗い流される事になり、巨人を作つた火のエルは殺される寸前で未来の日本（飛鳥時代）に逃げるも衰弱する。それから年月が立ち、エルは無惨に出合ひ、無惨の境遇に同情して力を与えるもまだ完全に回復はしてなかつたので青い彼岸花によるブースト込みでやるも、短気な無惨が医者を殺したせいでアギトの力のバランスが崩れ、鬼が生まれた。

### 仮面ライダーアギト

この世界における仮面ライダーで元々は無惨を生き残らせようと火のエルが無惨に力を与えたけど予想外の小物と身勝手さにエル本人も予測してなかつた鬼化したのがこの世界の鬼。だから、アギトと鬼は兄弟のような関係。

### グランドフォーム

基本形態。今作のアギトは無惨以外はこの姿になれる。

### ストームフォーム

素早い速度で動ける形態。本編での登場回数は実は凄く少ない



フレイムフォーム

力強く熱い炎の形態。仮面ライダーアギト原作とストームの立ち位置が逆転してて登場回数が多い。

トリニティフォーム

ストームとフレイムの両方の力が使える形態。登場回数は何と2回。原作再現完璧！

バーニングフォーム

フレイム以上の火力で相手を焼き付くす形態。力が恐ろしいくらいに強くなってるけど我を見失いやすい。

シャイニングフォーム

バーニング以上にアギトが進化した形態。全身の輝きは下手な鬼ならすぐに死ぬほど強烈。だけど日が上ってないと変身出来ない。

サンシャインフォーム

今作における明悟のアギトのオリジナル形態。シャイニングと全く同じスペックで変身方法も効果も同じで違うのは背中に銀色のアギトの紋章があるくらい。ただこの姿は夜でも変身可能なので始めて鬼にシャイニングの力を使える事ができる。

アクアフォーム

轆轤専用のアギトの形態でアクアアローを使って戦う。今作に登場する全アギトの中で唯一遠距離中心型の形態だ。

サクスムフォーム

轆轤専用のアギトの形態でサクスムアックスを使って戦う。その力で持てない物はこの世に存在しないぞ。

ミラージュアギト

轆轤のアギトが進化したシャイニングとほぼ同等の力を持つてる。また唯一の特徴で明悟のシャイニングやサンシャインとは違い、常時光を放ってるわけではない。

グランド（零余子）

零余子専用のグランドフォーム。見た目の変化はないが、放つ光は鬼を倒すのではなく、鬼の理性を取り戻させる変わった物。

無惨アギト

無惨が最後になった姿。全身が黒く、口が開き、爪や牙が鋭い。獣同然のアギト。無惨の血に合わせてアギトの力が更に進化した結果、装甲が硬いだけの人間と化している、不死身の体は失った上に進化の速度が尋常ではなく人間として進化し続けた為、無惨なら今まで逃げてた物に精神の奥底で無意識に恥と認識して逃げれなくなった。

『作者』では、これを見た上で質問ある？

『明悟』いや、無惨の残念さに笑うしか無いんだけど・・・

『作者』だよねえ、因みにアギトの設定そのものでやり直したい所もやり残した所もないなあ。

『明悟』次は原作でキーとなった青い彼岸花についての設定だ。

青い彼岸花

今作では太古の昔の戦争で出た火のエルスの力の残留が空気中に散って、集まり、1年に数日しか咲かない青い彼岸花になる。因みに無惨がこれを食べても健康な人間になるだけで完全生物にはならん。というかアギトの力が邪魔でなれない。

『明悟』無惨が食っても人間にしかならねえの!?

『作者』うん。

『明悟』人間になるために鬼が時間をかけて何かを探すってどんな感動物の話だよ。

『作者』残酷物なのね。

『明悟』では設定周りだと以上か？

『作者』そうなるね。後は明悟の私服についてかな？

『明悟』 よーし、俺のファッションセンスを見せてやらア。

津上明悟のファッションセンス！

上からいつてみよう。

カトルマンハット（茶色）に桜色の二羽の蝶の髪飾りがついてる。

ダスターコート（茶色）

鬼殺隊の隊服

黒足袋に草履。

『明悟』 おいこら、なんで和洋折衷的な服装が魅力の鬼滅の世界で完全洋物なんだよ。しかも中途半端に下は草履だし。

『作者』 服装に興味がないからな。柄も知らん。でそんなファッションセンスゼロな作者が埋もれないような服装を考えた結果がこれだ。後ろ姿だけでも誰か判断しやすいぞ。

『明悟』 これ、西部劇ファッションだろ？

『作者』 そう！セルジオ・レオ●ネの映画に出てくるような□荒野の用心棒□とか□ワンズアポニアタイムインザウエスト□とか□に出てきそうなの！良いだろ！？

『明悟』 いや、世界観に合わなさ過ぎて微妙だわ。

『作者』何を言ってる。だったら大正に仮面ライダーの時点で世界観もくそもねえよ。一応、時代的には間違っていないしね。

『明悟』よし、次はアホ作者が泣く泣く切ることになった話の大まかな概要を紹介するぞ！因みに何話と何話の間の話か書け。

『作者』主に轆轤編後の幕間編に来たのが3つあって。

1つ目は《しのぶと蜜璃がバイクに乗って鬼を倒す話》

2つ目は《明悟と轆轤のおにぎり騒動》

3つ目は《炭治郎と妓夫太郎が簪を巡って争う話》

『明悟』ちよつと待て、色々ツツコミが追いつかねえぞ。え？しのぶちゃんと蜜璃ちゃんもバイクに乗る話って何だよ!?

『作者』仮面ライダーなんだから、バイクを出そうとして手に入れるんだけど敵の鬼の最低差にブチギレたしのぶと蜜璃がマシントルネイダーに乗って鬼を倒すつてのを考えてただけ……

『明悟』ど？

『作者』バイクの歴史を調べてたら、1910年代まではわかったけどそれよりも更に細かいバイクの歴史を調べる時間が無かった上にしのぶと蜜璃がバイクに乗るって絵面だけしか思いついてなかったせいで肝心の鬼をどんなキャラにするのか悩み。切るこ

とにした。

『明悟』おにぎり騒動って何？

『作者』こち亀の話で大量の米が入った両さんがおむすびを売る話で色んなアイデアを出しまくる話なんだけど、これはそもそも何で米がそんなにあるのか？何で手伝うのかを考えきれず、切ることになった。

『明悟』最後のはもう何処からツツコめばいいのかわか．．．

『作者』最後のやつは炭治郎と妓夫太郎を完全なライバル関係にするために考えてたやつで2人とも妹命な性質あるからイケると思っただけど、

『明悟』いや、対決するのは兎も角どうやって妓夫太郎が逃げんだよ。

『作者』そこにぶち当たったので止めた。

『明悟』計画性のけの字もないアホが、次は章分けと主題歌についてか、

『作者』これは色々と仕込んだ記憶があるなあ。

『明悟』最初からの章の題名込みで言っていくと

《アギト編 believe yourself》

《もう1人のライダー編 deep breath》

《夢の列車編 夢で逢えたなら》

《恋愛編 Forever》

《吉原灼熱編 your song》

《アギト&amp;mp;デイケイド 大正ビギンズ Be the one》

《轆轤編 誰かが君を愛してる》

《幕間編 over the time》

《最期ノ審判 A B A Y O》

『作者』なんか質問ある？

『明悟』タイトルの名前は直球なのが多いから良いとして最期ノ審判はアマゾンズなんだが？なんでこれにした？

『作者』元々、なんか良いのなかな？って探しててアマゾンズの子告編がその時嵌つてたし、アマゾンズはまあシビアな世界観で死人が多いから、最後に仮面ライダー3人死ぬし、良いと思ってやった。

『明悟』主題歌はどうやって決めた？

『作者』最初の2つはアギトだから選んだ曲なんだけど3章の無限列車から歌詞と内容を合わせに行ったりした。

『明悟』主題歌は、一曲に絞って最終章の《A B A Y O》に関して詳しく

『作者』元々は別の曲を考えてたんだけど、A B A Y Oを聴いて完璧！って思ったんだよね。特に最後部分が耀哉に対する明悟の赤裸々な感情になってたから、これは合うって

感覚があった。ちょっと楽曲コードの関係で歌詞は載せれそうにないので聴いてみて下さい！

『明悟』それじゃ、最後に作者お気に入り回と理由を語って貰おうか！更に本人が込めたパロディネタ元も全てね。

『作者』お気に入りは1話、6話、7話、9話、10話、13話、15話、16話、18話、25話、26話、33話、35話、37話、38話、そして最終章は全てかな。

『明悟』多いな！

『作者』1話は最初で明悟を書くって話だからお気に入り。6話は柱会議で大勢出したからどうなるかと書いてて思ったけど天元が想像以上に使いやすくて良かった。7話は明悟と行冥の戦闘だからどっちかがチートになるのを防ぐ為に頭を捻りながら書いた。9話は轆轤の初変身回で、路線変更決定後の回だから色々力を入れた。10話はネタ回として最高に好き。13話はダブルライダー&amp;杏寿郎vs猗窩座で盛り持ったし、15話、16話はガチの明悟とカナエの恋愛に特化して印象に残ってる。今までと書いてる内容が違ったから、18話は零余子と禰豆子の2人が友人になるエピソードで零余子の変身する理由をベタだけど出来て良かった！25話、26話は明悟とカナエのエピソードに決着がついて一安心したって感じで好きだし、戦闘シーンも楽しかった。33話は義勇と実弥の大騒ぎでハリケンジャーパロで楽しかった。35話は



轆轤編の失敗を受けて本気で主人公を書く、もうどこも余らせてる所なんてないぞと云う感じで書いたから気合そのものが違う。37話、38話はコラボ回で明悟の暴走と乗り越え、そして黒いアギトというクライマックスで無惨がなつてしまふアギトの片鱗を見せたつて感じで重要回。そして最終章は1つ1つの流れに拘つて書いた。

『明悟』では最後にさっきから言いまくつてるパロディ元を教えてください。

『作者』仮面ライダーアギトを初め、仮面ライダーシリーズだとアマゾンズ、カブト、本人が登場したのでパロディと呼ぶべきか微妙だがデイケイドの4つが大体で仮面ライダー the firstとかを始め後は戦闘に少しずつ色々と加えたつて感じ、戦隊だとハリケンジャーとガオレンジャー、シンケンジャー、デカレンジャー、チエンジマンは入れた。主人公の服装は西部劇のワンスアポンアタイムインザウエストとかジャンゴとかから取つて、戦闘シーンだとザ・レイド、ドラゴン? マツハ、キャプテンアメリカシビルウォー、キャプテンアメリカウィンター・ソルジャー、るろうに剣心ら辺から良いアクションを拾い集めて特撮のアクションの間々に繋げた。轆轤編はランボースト・ブラッドテイストにしようとしてたし、全体の流れはハムレットとかSPLとかからだし、ギャグ回はクレヨンしんちゃんやうる星やつらで緩急つけたつて感じかな? ゴジラ2000とかも入つてる。

『明悟』ガオレンジャーとチエンジマンはどこにあるんだ?

『作者』 明悟の「人間が大好きだ」はガオレンジャーから取って明悟が死んだ時のモノローグはチェンジマンのブーバからやった。

『明悟』 カブトは？

『作者』 最初の猗窩座との戦いはカブトの最終決戦を元に作り上げた。今見ると大体の台詞回しが似てると思うよ。後、色んな人にやらせてたドロップキックはネタ元が多すぎてどれからパロったのかそれともプロレスから来たのかもはやよく分からん。ゴジラ2000はオルガを「千年王国」って言ってるこのフレーズが好きだったので鳴女の技になった。

『明悟』 ザ・レイドって何？てかドラゴン？マツハも何だよ？

『作者』 ザ・レイドはインドネシアのアクション映画で犯罪者マンションの中を生き抜くSWATの新人の話でドラゴン？マツハは香港と中国合作の作品で看守と囚人が極悪所長とそのボスに立ち向かう話で両方ともアクションが凄すぎるぞ！特にドラゴン？マツハは鬼滅の鬼の悲しい過去が好きなのは多分観ても嫌いにはならないと思うぞ。色んなキャラが辛い状況でも必死に生きててそれが最高に美しいから！SPLも多分イケると思う。これも悪役が凄いかっこいいし、登場人物全員が熱くて燃えるぞ！

『明悟』 熱く語るな・・・

『作者』 ワンスアポンアタイムインザウエストも良い！邦題がウエスタンだからそつち

の方がよく見かけると思うけど、これも時代に残された男達の悲哀が最高に美しいんだ！

『明悟』 そうなんだ・・・

『作者』 まあでも書いてて1年間、楽しかったよ。元々は終わる前提だった上に自分の趣味全部盛りなのに200以上のお気に入り登録があつて驚いたもん。100もいかなーって思つてたから。それに仮面ライダーアギト目当てか鬼滅目当てかで最初の方にアンケートした時にアギトの方が圧倒的に多かつたから仮面ライダーとしてやろうと頑張つたからね・・・皆様、本当にありがとうございます！

『明悟』 それでは最後に告知？

『作者』 どうぞ！





2021年、続編決定！

舞台は鬼滅の世界ではなく、星のカービイ!?

く太陽の化身く星のカービイ編！

4月に本格開始！

『明悟』 え？なにこれ？

『作者』 来月からまた頑張れ。

『明悟』 ふざけんな！俺は死んだんだから終わらせろよ！

『作者』 何を言ってる？俺の下僕だろうが、働け！

『明悟』俺一人じゃ無理だつて！

『作者』安心しろ、戦闘シーンは余りやるつもりは無いし、死んで終わらせるつもりもない。

『明悟』え？

『作者』書き終わって見なくなってきたの、明悟とカナエのイチャイチャをな！というわけで夫婦揃ってカービィの世界でほのぼのと生きる！

『カナエ』分かりました！

『明悟』急に出てきた!?

『カナエ』頑張りましょう！あなた！

『明悟』え？・・・あ、はい。

『作者』因みに子供を産ませる気はあるぞ。ただ、今年はなろうとかでも異世界舞台の戦隊。パロで思いつきり暴れるつもりだから、1ヶ月に一回の更新があればいいほうだ。このままゆつくり書くつもりだし。

『カナエ』それでは皆さん！4月に会えたら会いましょう！

『明悟』・・・超全集ってこんなんだっけ？

『作者』設定集以上に全て書いた物と言うなら正しいぞ。

それでは皆さん、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。

『明悟』 淀川さんか!?



## 番外編 I Fルート こころはタマゴ

もしも全てが違ったらどうなった？

例えばカナエは鉾山の後も生きて明悟も最終決戦の後、生きていたならどんな生活をしていただろうか？

○○○

明悟の妻、カナエの朝は早い。

朝早くに起きて、顔を洗い、着替えて家族の朝食の準備の為に井戸から水を汲んできて米を洗う。

洗い終わると釜戸で炊き上げ、その間にたくわんを切って梅干しも出し、干物を焼く。良い匂いが台所に満ちてると誰かが起きてくる音が聴こえてきた。足音がゆつくりと近づいて行き、台所の扉を開く。

「相変わらず早いね」

それは明悟だった。戦いが終わり、鬼殺の服ではなく寝間着用の浴衣を着ていたが寝起きだった為に着崩れていた。

「おはよう、もうまた着崩れてますよ」

「ああ、ごめん」

明悟はカナエに言われて気付いたのか気崩れていた服を正そうとするが少しもたつく。カナエは調理を止めて明悟の前に行き、服を正してあげる。すると明悟はカナエを突然抱きしめた。

「きゃ、ちよつとあなた!」

寝惚けてるのかそれともわざとやってるのか明悟は抱きしめたままカナエの近くで鼻を鳴らし始めた。カナエは流石に恥ずかしくなり明悟の両頬を引っ張る。

「い、痛い」

「ならやめて!」

「はい」

「全く、いつもそうなんだから」

「君だつて昨日の夜に俺に抱き着いて暖かいって」

明悟の指摘にカナエが顔を真っ赤にする。

恥ずかしくて表立って出来ないで寝てる時に明悟の寝顔を見てやるのがカナエの日課だったがそれが知られていたとなればもう色々と恥ずかしくて出来ない。

「起きてたの?」

「うん」

「くくく恥ずかしい」

「可愛らしくて良いと思うけどね」

「知りません！」

そのまま明悟から顔を背けるカナエ。明悟はそんなカナエの肩を揉み始める。

「ごめんごめん、いつまで頑張ってて辛そうに思えたからちよつとね」

「確かに辛くないとは言いませんが、大丈夫ですよ！だって貴方が近くに居るんですもの」

「カナエ・・・」

笑顔をも明悟に向けるカナエ。明悟も微笑み返す。感極まった2人はそのまま顔を近づけて・・・

「何やってんの？」

「だアアアア！」

突然来た声に驚き、そのままデコ同士をぶつけた。頭を抑えて座り込む2人は声を出した元を見る。

出したのは少年だった。

ただの少年ではない。明悟とカナエの息子、津上真司だ。5歳だ。

「・・・まだ眠いからごゆっくり」

「そんな事、どこで覚えたの!？」

非常にませた事を言つて去ろうとする真司にカナエが声を出す。真司はあくびをしながらか明を指差した。

「父ちゃんから」

「あなた!!」

「俺、教えてない!」

カナエは明悟の腕を極める。

明悟はそのまま離そうともがくが生身ならカナエの方が強いので離せなかった。

「母ちゃん、お腹すいた」

「待つてて、今作つてるから」

カナエは明悟を放すと台所で再び朝食を作り始める。腕を極められてた明悟は腕を抑えて蹲つてた。

「父ちゃん、生きてる?」

「生きてるけど痛い。さっきの言葉、誰に教えてもらったの?」

「父ちゃんの “手下の輝利哉兄ちゃん” から」

「あのガキ!!」

明悟は抑えながら余計な一言を教えた輝利哉に対して沸々と怒りが出てきた。

「ほら、邪魔だからさっさと顔を洗ってきて」

カナエは何時まで台所にいる明悟と真司の2人にそう言っただけ追いついた。結婚して子供が生まれてから妙に自分に対して当たりがキツくなつたと多少は思いながらも明悟は真司を連れて井戸に行く。

「ほら、顔を洗いなさい」

「ええ、オラの綺麗な顔が削ぎ落とされるからやだ」

「綺麗な顔をより綺麗にする為にやるんだ」

明悟はそう言っただけと先に洗うが何時までも洗わない真司に業を煮やして担ぎ、無理矢理洗って顔を拭く。

「もうちよつと丁寧にしてよね」

「なら自分で洗え！」

どこまでもマイペースな真司にマイペースな筈の明悟すら振り回される。家族の記憶が無い明悟には毎日が新しく良い体験であると思ってるが疲れるのが難点だった。

「父ちゃん」

「なんだよ・・・ギャヤヤヤヤ!!!」

明悟が真司の方を向くとそこには巨大なゴキブリがいた。そしてそのゴキブリが立

ち上がるがそれは巨大ゴキブリではなく真司がゴキブリの着ぐるみを着ていただけだった。

鬼との過酷な日々を過ごしていた明悟は久しぶりに悲鳴を上げてすっ転んだ。

「よ」

「よ、じゃない！なんて物を作ってたんだ!!」

「前に母ちゃんに見せたら、お尻叩かれた」

「ならやめろ！もうちよつと違うのを着ろ！やるんだつたらー！」

「例えば？」

「狼とか猫とか色々あるだろ」

「オラそんな在り来りな物に興味ないく」

「せめてゴキブリは止めなさい、心臓に悪いから」

「ほーい」

明悟がそう言うと言と真司は縁側に座って明悟が片付けるのを待った。

○○○

カナエは朝食を今の卓袱台の上に置いてまだ来ない2人を予防と窓を開けるとそこには大ミノムシがいた。

「でえええ!!?」

驚いたカナエは引いて倒れかけるもなんとかそのまま転ばずに済んだ。カナエはかの大ミノムシの正体が一発でわかった。真司である。

「真司!! またそんな事やって! ミノムシごっこは禁止したでしょ!」

「ただのミノムシごっこじゃないもん」

ミノムシがモゾモゾ蠢くとヒビ割れ、そして中から蛾の羽を付けた真司が出てきた。

「ミノムシから蛾になるごっこだもん!」

真司はそのまま綺麗に地面に脚と手をつけて怪我なく着地した。予想外の行動にカナエは驚きが一周回って手を叩く。

「おお、すごい! . . . って手をもう一度洗って来なさい!」

「ええ〜」

「ええ〜じゃない! 汚いでしょ!」

カナエに言われた真司は渋々ともう1度手を洗いに行った。明悟が廁から出て来て2人とも居間の卓袱台につく。真司は綺麗に洗ってきた手をカナエに見せてた。カナエは真司のそういう所に愛おしさを感じて笑い、明悟も心から穏やかな気分に溢れていた。

「「いただきます」」

3人はそんな幸せ気分になりながら朝食を食べた。

〇〇〇

朝食が終わると3人は食器を片付ける。家事はだいたい平日の時は明悟は仕事に行くのでカナエになる。カナエも真司が生まれるまでは仕事をしていたが辞めた。明悟は子育てでやりたい事が潰されたのではと心配したがカナエに違うと言われ、大事に子供を育てたいとカナエに怒られた。曰く私をナメるな（意識）と言うことだ。

明悟が休日の時は明悟もカナエを休ませようと色々と頑張る。朝食は今日はカナエだが晩飯は明悟の担当である。そして今日の食器洗いも明悟だ。

カナエもその間に色々とやって真司が昼寝をする。

そんなこんなで3時間ぐらいが経って漸く一息付ける2人。

2人でゆつくりと茶菓子を食べてるとぐっすり寝ていた真司が起きて3人でほのぼのする。

「ごめんくださいーい」



玄関から声が聞こえてきた。

明悟とカナエには久しぶりの声で真司にはあまり聞き覚えの無い声だった。

「オラが行く〜」

興味が出たのか真司が率先と玄関に行つて扉を開けると前に居たのはしのぶだった。

鬼との激戦が終わり、藤の毒で死にかけていたしのぶだったがドイツで治療も兼ねた医療留学を終えて無事に完全回復した。代償で以前ほど体力は無くなったがそれでもあまり問題は無かった。

「久しぶりね真司」

笑顔を真司に向けるしのぶだが真司は扉に体を隠しながら見た。

「あんた誰？」

しのぶは去年どころか結構会つてはるはずなのに忘れてる真司に脱力してしまうがまだ笑顔を向ける。

「お母さんの妹のしのぶ！この前も会つたでしょ」

「おお、オラの叔母さんで婚期がそろそろ永遠に來ないつて言われてるしのぶおばさん！お久しぶりです」

しのぶは挑発してくる真司の前にかがみ込み、真司の両頬を引っ張る。

「婚期と年齢で人をおちよくるのは危ないですよ〜」

笑顔のまま言ってるのが更に不気味だった。

そんな一悶着があったがしのぶはそのまま卓袱台について茶を飲む。

「それで今日はどうしたの？」

「どうしたの？ じゃなくて・・・忘れたの？」

「今日、なんかあつたつけ？」

「皆で餅つきをする約束じゃない？」

「年末までまだ半年もあるのに？」

「しのぶ、気が早いわね」

何処までもマイペースにボケ続ける津上一家。

しのぶは勝手に餅つきの約束をされてるのに遂に声を荒げる。

「違います!! 押入れの整理の約束!・・・この前、姉さんが押入れが酷いって行つてたから片付けに来たの! 姉さん達だけだと大変だと思つて!」

そう言われると納得したのか明悟とカナエの2人は相槌をするがしのぶはいつもの2人に対して早速疲れていた。

疲れながらもしのぶはその問題の押入れを見に行くと腰を抜かしてしまった。

「な、何よこれ!!」

その押入れは中身のあまりの量に襖がギシギシと音を出して壊れる寸前だった。

「開けたら雪崩が起きるんだよなあ」

「危なくてあまり出来なくて」

「中身はなんなのよ！」

しのぶの言葉にカナエは明悟を見て、明悟は気まずそうに目を逸らし、カナエも目を俯ける。

「本類が8割」

「すみません」

明悟は本を良く読む。買っては貯めてを繰り返すタイプであまり捨てない。下手な本屋よりも本が充実してるのにまだ本を集めるタイプだ。

そこまでならカナエが捨てれば良いのだがカナエもカナエで読む方なので2人して読みまくり一向に捨てられないのだ。

「ちよつと、本当に大事な本だけにしてよ」

「すみません」

こうして津上家の押入れ大片付け大作戦が始まった。

まず、しのぶは手っ取り早く押し入れの襖を開けると本当に大量の本が雪崩れを起こした。

「うわあ、凄い」

「ボサツとしてないで片付ける！」

しのぶに言われて片付けを始める3人で真司も手伝うと言って手伝う物の・・・

「父ちゃん、これは？」

「あ、それは！ドイツから取り寄せた植物学の本！止めて！それ高かったんだから！」

「姉さん、これ捨てるわよ」

「止めてそれ私が人生で4番目に完走した小説なんだから！」

「父ちゃん、これいる？」

「いるよ！ドフトエフスキーだぞ!?ロシアの時に頑張って取り寄せたんだよ!?高いし面白いだから！」

「姉さん、これ・・・」

「せっかく、イギリスから取り寄せた本になにするの!？」

「これじゃ終わんないよ!!」

全く捨てようとしないう夫婦にしのぶと真司が怒るが2人は片付けるどころか本を読み始める始末だった。

呆れたしのぶは帰ろうかと思ったが、このまま散らかしていると気分が悪いので片付け始める。

すると真司がとある本をしのぶに見せてきた。

「ねえこれも捨てる?」

「どれどれ・・・あっ!?それは!」

それはかつてしのぶが死ぬほど疲れる羽目になった超おままごとの小説版だった。あれから何年か経ち、明悟とカナエも子作りや他の事に専念しなければいけなくなつたので過去の超おままごとの台本を今度は小説にしたのだ。

因みにいくつかの話は界限でもネタになつてる。人間蔑視の究極系の形として悪い意味で、

「真司、それは確実に燃やしますので」

「ほーい」

「止めてそれひなちゃん達が頑張つて書いてくれたやつだよ!?燃やさないで」

「お願いしのぶ!止めてあげて!」

「姉さんはあの苦しみを知らないでしょ!」

自分を親しくしてくれてるひなき達の本なので捨てたくない明悟とカナエは交渉するもののはずはそんな2人を睨みながら叫ぶ。

「でも私、あれ結構やつてるよ」

「うそ?!」

「かなたちちゃんの回限定だけどね」

そうカナエも超おままごとに関しては何回も既にやってるのだ。カナエが生きて実  
は耀哉に頼まれた最初の事がひなき達のこの趣味を何とかする方法だったが、ひなき達  
からすると更に獲物がやってきただけであるので洗礼を受けた。

それが久しぶりの単独作『大江戸夫婦』というかなた脚本の回だった。

内容は掻い摘んで云うと・・・

まず新婚の夫婦がいて仲睦まじいと近所で噂になるが実は夫の方は子供の事から好  
きな幼馴染がいて、その子と浮気をずっとしていた。

妻はそんな夫の浮気を知りながらも知らないふりをしようとしたが聴て我慢が出来  
ないようになって遂に自分も他の男と交わるがそれは近所で疎まれてる孤児の自分よ  
りと一回り年下の男の子だった。

男の子を襲うような形で浮気した妻でそれをわざと家でやり、匂いと音を夫に突きつ  
けるようにしたが夫は何一つ顔色を変えずに不貞を続ける。

妻は更に男の子を交わり続けると男の子が変わってくるどんどん快樂を求め、どんど  
ん周りよりも早く大人になっていくため、粗暴になっていく。

そして遂に男の子は男になり、夫から妻を奪おうと計画を立てる。

それは夜中に忍び込んで夫を殺し、妻を誘拐する事だった。決行する時に男は夫を殺  
そうとするがそれを止められる。止めたのは妻だった。

男は妻に愛してるといったが妻は愛してないと言った。妻は夫にただ嫉妬して欲しいかっただけなのだ。相手は誰でも良いしどうでも良い。ただ自分は子供にすら負けるのかとより悔しさが出るように選んだのが男と云うだけだった。

打ち拉がれる男に対して今度は夫も起きて男を殺そうとする男は妻の浮気ややった理由を叫ぶが夫には何一つ響かなかつた。何故ならそれは夫の理想だった。

夫がずっと浮気をして愛して幼馴染ともくつつかずにいるのは妻と幼馴染の2人が嫉妬に塗れる程に自分を愛してくれてるかと感じる為だったのだ。

だから妻が誰と浮気しても構わない。何故ならそれは自分への愛情表現だと本気で信じてるから、夫の正気を疑うようなやり方に男は心の底から恐怖を感じた。

男は妻に助けを求めるが彼女は何もしない。何故なら男に対しては夫に嫉妬させる為の手駒以外何も価値を感じてないから。

男は妻を罵り殺してやると言った。

そんな男に夫は俺の妻に手を出すなど大声で叫んだ。それこそ近所に響くように叫んだ。そして夫は男を殺した。

後日、奉行所が詳しく事情を聴いたが夫婦はこう言った。妻を強姦しようとした悪漢を夫が身を呈して守った。こうしてこの夫婦によって人生を狂わされた少年の物語は夫婦の絆を証明する為の美談の悪役となった。

妻はまた後日、家で男と交わる。

今度こそ夫の全てを手に入れる為に・・・

これがカナエが最初にやったひなき達の超おままごとだ。かなたの『一見幸せに見えるが実は地獄』と言う彼女の作家性が色濃く出ている。

因みにカナエは妻役で明悟は夫役、そして輝利哉が男役でやって明悟はカナエにこんな趣味を受け付けてしまった元凶として捨てられるのではとビクビクしたがこの今でいうとメリーバッドエンドな結末が新鮮だったのかカナエはかなた脚本限定で参加するようになった。

明悟は捨てられなかった事を嬉しく思ったが、なんだか悲しい気持ちで溢れた。

因みにカナエのお気に入りにはヤンデレな女が男を監禁して永遠に管理し続け最後は男もそれを受け入れるかなた脚本の最高傑作『円満』である。

理由は実生活で使えそうだったからだが、明悟はカナエだったら良いやと受け止めた。

完全にもう末期である。

話を戻して・・・

「そんな、一体いつの間に！」

「しのぶが任務をしてる時にね！話す絶対止めさせると思ったし」



「当たり前よ！ ああ、私の中の姉さんが壊れる！」

頭を抑えるしのぶ。その後、しのぶはもう片付けるのを止めて雑談と言うか以下にこの超おままごと関係のを燃やす為に明悟とカナエを言い負かそうとしていた。

既に時間が経って夜になっていた。

「やれやれ、大人は大変ですな」

真司は月を見ながら、まだやってる大人達を見て笑った。

後日、家に輝利哉達とカナヲが炭治郎と子供達を連れて来たのでカナエはノリノリでそれをやった。

明悟と炭治郎は疲れ果てたがカナエとカナヲ、そして子供達は笑っていて明悟と炭治郎は心を強く持とうと誓いあった。

「おしまい・・・んじゃ」